

倉石土地区画整理事業地内
埋蔵文化財発掘調査報告書 I

牛頸塚原遺跡群

本文編

大野城市文化財調査報告書

第44集

1995

大野城市教育委員会

倉石土地区画整理事業地内
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ

つかはら
牛頸塚原遺跡群

本文編

大野城市文化財調査報告書

第44集

1995

大野城市教育委員会

巻頭カラー



S K08出土土器

序

本市南部の牛頸・上大利地区には、須恵器を焼いた窯がたくさんあり、牛頸窯跡群として全国的に有名です。その一方で、福岡市に隣接している本市では、人口の増加が続いており、窯跡などの遺跡がある場所が次々と住宅地へと変貌している状況です。そこで、牛頸地区では乱開発を避けるために、平成2年から倉石土地区画整理事業をおこなってまいりました。本市教育委員会ではこの事業に伴って数多くの埋蔵文化財を調査いたしました。本書は、その調査報告書です。

本書では主に古墳群と、古代の集落の調査結果を報告しています。とくに古墳群は、牛頸地区で須恵器の生産が始まる前に造られたもので、その時代の貴重な資料となりました。また、そのほかにも、縄文時代の竪穴住居跡が見つかるなど、新しい発見もありました。区画整理事業は現在も続いており、遺跡のあった場所には新しい街が生まれつつあります。そのため遺跡の姿を見ることはできませんが、本報告書によって牛頸地区、ひいては北部九州の歴史の一端が明らかになれば幸いです。

最後になりましたが、調査費の負担をはじめとして終始多大なご協力を賜りました倉石土地区画整理組合、地元牛頸地区の皆さん、種々のご協力をいただいた工事関係者の皆さん、指導・助言をいただいた関係者各位に対しまして心より感謝申し上げます。

平成7年12月25日

大野城市教育委員会

教育長 堀 内 貞 夫

例 言

1. 本書は、大野城市倉石土地区画整理組合（理事長 田中 繁）より委託を受けて福岡県大野城市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査の記録である。
2. 遺物写真は、岡紀久夫の撮影による。
3. 遺物実測は、岸野和子、永淵知子、岩本真裕美、舟山良一、石木秀啓、徳本洋一、大谷女子大学考古学研究室が、製図は岸野と河鍋洋子が、拓本は井手美智子と牟田昌子が担当した。
4. 遺物法量表は岸野が担当した。
5. 出土遺物については、小破片であったり風化の著しいものは図示しなかった。
6. 本書の執筆は、「Ⅲ. 調査の結果」の一部を石木、舟山が担当した他は徳本が行った。
7. 本書に掲載した地形図には建設省国土地理院発行の2.5万分の1『福岡南部』・『不入道』を使用した。

本文目次

I. はじめに	1
II. 位置と環境	2
III. 調査の結果	7
1. 調査概要	7
2. 縄文時代の遺構と遺物	8
(1) 竪穴住居跡	8
(2) 土坑	9
3. 弥生時代の遺構と遺物	19
(1) 土坑	19
4. 古墳時代以降の遺構と遺物	20
(1) 竪穴住居跡	20
(2) 掘立柱建物跡	75
(3) 廃棄土坑	79
(4) 古墳	148
(5) 小石室	233
(6) 焼土坑	245
(7) 土坑	250
(8) 溝	253
(9) その他の遺構	261
(10) その他の遺物	261
IV. まとめ	267
V. 大野城市塚原古墳群出土の赤色顔料について	281

表目次

表1. 牛頸周辺遺跡地名表	4
---------------------	---

図 版 目 次

- 図版 1 (1) A区全景（西から）
(2) B区全景（西から）
- 図版 2 (1) C区全景（西から）
(2) D区全景①（航空写真）
- 図版 3 (1) D区全景②（航空写真）
(2) E区北半部全景①（航空写真）
- 図版 4 (1) E区北半部全景②（航空写真）
(2) F区西半部全景①（航空写真）
- 図版 5 (1) F区西半部全景②（航空写真）
(2) F区東半部全景①（航空写真）
- 図版 6 (1) F区東半部全景②（航空写真）
(2) G区北半部全景（西から）
- 図版 7 (1) H区全景（南から）
(2) G区南半部全景①（東から）
- 図版 8 (1) G区南半部全景②（南から）
(2) G区中央部全景①（航空写真）
- 図版 9 (1) G区中央部全景（南から）
(2) I区北半部全景（西から）
- 図版10 (1) I区南半部全景（西から）
(2) K区全景（北から）
- 図版11 (1) L区全景（北から）
(2) M区全景（南から）
- 図版12 (1) 1号・2号・3号住居跡
(2) 2号住居跡
- 図版13 (1) 3号住居跡
(2) 5号住居跡
- 図版14 (1) 7号住居跡
(2) 8号・9号・10号・11号住居跡
- 図版15 (1) 12号住居跡
(2) 13号住居跡

- 図版16 (1) 14号住居跡
(2) 15号住居跡
- 図版17 (1) 16号住居跡
(2) 17号住居跡
- 図版18 (1) 18号住居跡
(2) 19号住居跡と S K 10
- 図版19 (1) 20号住居跡
(2) 21号住居跡
- 図版20 (1) 22号住居跡
(2) 23号住居跡
- 図版21 (1) 24号・25号住居跡
(2) 26号住居跡
- 図版22 (1) 27号住居跡
(2) 28号住居跡
- 図版23 (1) 29号住居跡
(2) 30号住居跡
- 図版24 (1) 31号住居跡
(2) 32号・33号住居跡
- 図版25 (1) 37号住居跡
(2) 1号掘立柱建物
- 図版26 (1) 2号掘立柱建物
(2) 3号掘立柱建物
- 図版27 (1) 4号掘立柱建物
(2) 5号・6号掘立柱建物
- 図版28 (1) S K 01
(2) S K 03
- 図版29 (1) S K 04
(2) S K 05
- 図版30 (1) S K 06
(2) S K 07
- 図版31 (1) S K 08
(2) S K 11

- 図版32 (1) S K 12
(2) S K 14
- 図版33 (1) S K 15
(2) S K 16
- 図版34 (1) 1号墳腰石状況
(2) 1号墳周溝出土遺物
- 図版35 (1) 2号墳
(2) 2号墳石室
- 図版36 (1) 3号墳敷石除去後
(2) 3号墳石室
- 図版37 (1) 3号墳周溝出土遺物
(2) 4号墳と6号小石室
- 図版38 (1) 4号墳石室
(2) 5号・4号・3号墳(手前から)
- 図版39 (1) 5号墳石室①
(2) 5号墳石室②(玄門から奥壁を望む)
- 図版40 (1) 6号墳石室
(2) 7号墳石室
- 図版41 (1) 9号墳と溝03
(2) 9号墳石室
- 図版42 (1) 10号墳(J区全景)
(2) 10号墳石室
- 図版43 (1) 11号墳
(2) 11号墳石室内遺物出土状況
- 図版44 (1) 12号墳
(2) 12号墳石室
- 図版45 (1) 13号墳と2号土坑
(2) 13号墳周溝内出土遺物
- 図版46 (1) 14号墳
(2) 14号墳周溝内出土遺物
- 図版47 (1) 15号墳
(2) 15号墳周溝内出土遺物

- 図版48 (1) 16号墳西半部
(2) 16号墳石室石抜穴
- 図版49 (1) 16号墳周溝内出土遺物①
(2) 16号墳周溝内出土遺物②
- 図版50 (1) 17号墳
(2) 18号・17号・19号・14号・13号墳（手前から）
- 図版51 (1) 18号墳石室
(2) 18号墳周溝内出土遺物
- 図版52 (1) 19号・14号・17号・15号墳（手前から）
(2) 19号墳石室
- 図版53 (1) 19号墳周溝内出土遺物①
(2) 19号墳周溝内出土遺物②
- 図版54 (1) 20号・18号・19号・17号・14号・13号墳（手前から）
(2) 20号墳石室
- 図版55 (1) 21号墳
(2) 21号墳石室
- 図版56 (1) 22号・23号墳
(2) 22号墳周溝内出土遺物
- 図版57 (1) 23号墳
(2) 23号墳石室
- 図版58 (1) 24号・25号墳、溝06、26号墳（手前から）
(2) 24号墳
- 図版59 (1) 26号墳と溝06
(2) 26号墳周溝内出土遺物
- 図版60 (1) 23号・28号・24号墳（上から）
(2) 29号・23号・22号墳（右から）
- 図版61 (1) 30号墳①
(2) 30号墳②
- 図版62 (1) 1号小石室
(2) 2号小石室
- 図版63 (1) 3号小石室
(2) 4号小石室

- 図版64 (1) 5号小石室
(2) 6号小石室
- 図版65 (1) 7号小石室
(2) 7号小石室蓋石除去後
- 図版66 (1) 8号小石室
(2) 9号小石室
- 図版67 (1) 10号小石室
(2) 1号焼土坑
- 図版68 (1) 2号焼土坑
(2) 3号焼土坑
- 図版69 (1) 4号焼土坑
(2) 5号焼土坑
- 図版70 (1) 6号焼土坑
(2) 7号焼土坑
- 図版71 (1) 9号焼土坑
(2) 10号焼土坑
- 図版72 (1) 11号焼土坑
(2) 12号焼土坑
- 図版73 (1) 5号土坑
(2) 溝06
- 図版74 5号・7号・8号住居跡出土土器
- 図版75 12号・13号・15号・16号住居跡出土土器
- 図版76 16号・18号・19号・21号・22号・23号住居跡出土土器
- 図版77 23号・28号住居跡出土土器
- 図版78 28号・30号・31号・32号・33号・35号・36号住居跡出土土器
- 図版79 S K 01・S K 03・S K 06・S K 07出土土器
- 図版80 S K 07出土土器
- 図版81 S K 07・S K 08出土土器
- 図版82 S K 08出土土器
- 図版83 S K 08出土土器
- 図版84 S K 09・S K 10出土土器
- 図版85 S K 10・S K 11・S K 12出土土器
- 図版86 S K 12出土土器

- 図版87 S K12出土土器
- 図版88 S K12出土土器
- 図版89 S K12出土土器
- 図版90 S K12出土土器
- 図版91 S K12出土土器
- 図版92 S K12出土土器
- 図版93 S K12出土土器
- 図版94 S K12出土土器
- 図版95 S K12出土土器
- 図版96 S K12出土土器
- 図版97 S K12・S K13・S K14・S K15出土土器、1号墳出土土器
- 図版98 1号・3号墳出土土器
- 図版99 3号・4号・5号・7号・9号・10号墳出土土器
- 図版100 10号・12号墳出土土器
- 図版101 12号・13号墳出土土器
- 図版102 13号・14号・15号墳出土土器
- 図版103 15号・16号・17号・18号墳出土土器
- 図版104 18号・19号・20号墳出土土器
- 図版105 20号・21号・22号墳出土土器
- 図版106 23号・24号・25号墳出土土器
- 図版107 25号・26号・28号・29号墳出土土器、1号・2号土坑出土土器
- 図版108 3号・5号土坑出土土器
- 図版109 5号・14号土坑出土土器、溝01・溝04・溝06出土土器
- 図版110 溝06・その他出土土器、16号住居跡・1号墳出土装身具
- 図版111 3号・10号墳出土装身具
- 図版112 7号・12号・16号・19号・20号墳出土装身具
- 図版113 23号墳出土装身具、19号・23号住居跡・S K07・S K08・S K10・11号墳出土土製品、16号住居跡・S K05・S K12出土石製品
- 図版114 1号墳出土土製品、28号墳・溝01・溝出土石製品、3号墳出土銅製品
- 図版115 住居跡出土鉄器、S K03・S K05・S K07出土鉄器
- 図版116 S K08・S K09・S K10出土鉄器、溝06出土鉄器
- 図版117 S K12出土鉄器、1号墳出土鉄器
- 図版118 2号・4号墳出土鉄器
- 図版119 3号・5号・6号・8号・10号墳出土鉄器

- 図版120 3号・5号墳出土鉄器
- 図版121 7号・11号墳出土鉄器
- 図版122 12号・16号墳出土鉄器
- 図版123 18号・19号墳出土鉄器
- 図版124 20号・23号・24号墳出土鉄器、3号小石室出土鉄器
- 図版125 21号墳出土鉄器、各遺構出土石鏃
- 図版126 各遺構出土石鏃
- 図版127 各遺構出土石器
- 図版128 18号・21号住居跡出土瓦
- 図版129 21号・30号住居跡出土瓦、ヘラ書き須恵器
- 図版130 ヘラ書き須恵器
- 図版131 重ね焼き・焼き歪み例
- 図版132 日ノ浦遺跡出土獣脚・土馬

挿 図 目 次

第1図	牛頸周辺遺跡分布図 (1/25,000)	折り込み
第2図	位置図 (1/10,000)	折り込み
第3図	塚原遺跡群遺構配置図 (1/800)	折り込み
第4図	3号住居跡実測図 (1/60)	8
第5図	3号住居跡出土土器実測図 (1/3)	9
第6図	27号住居跡実測図 (1/60)	10
第7図	4号・6号土坑実測図 (1/40)	11
第8図	5号土坑実測図 (1/30)	12
第9図	5号土坑出土土器実測図① (1/3)	13
第10図	5号土坑出土土器実測図② (1/3)	14
第11図	5号土坑出土土器実測図③ (1/3)	15
第12図	7号・8号・9号・11号土坑実測図 (1/40)	16
第13図	7号土坑出土土器実測図 (1/3)	16
第14図	12号・13号・15号土坑実測図 (1/40)	17
第15図	16号・17号土坑実測図 (1/40)	18
第16図	13号土坑出土土器実測図 (1/3)	19
第17図	10号土坑実測図 (1/30)	19
第18図	10号土坑出土土器実測図 (1/3)	19
第19図	1号住居跡実測図 (1/60)	20
第20図	2号住居跡実測図 (1/60)	21
第21図	2号住居跡出土土器実測図 (1/3)	22
第22図	5号住居跡実測図 (1/60)	23
第23図	5号住居跡出土土器実測図① (1/3)	24
第24図	5号住居跡出土土器実測図② (1/3)	25
第25図	5号住居跡出土土器実測図③ (1/3)	26
第26図	7号住居跡実測図 (1/60)	27
第27図	7号住居跡出土土器実測図 (1/3)	28
第28図	8号住居跡実測図 (1/60)	29
第29図	8号住居跡出土土器実測図 (1/3)	29
第30図	9号住居跡実測図 (1/60)	30

第31図	10号住居跡実測図 (1/60)	31
第32図	11号住居跡実測図 (1/60)	32
第33図	11号住居跡出土土器実測図 (1/3)	33
第34図	12号住居跡実測図 (1/60)	34
第35図	12号住居跡出土土器実測図 (1/3)	35
第36図	13号住居跡実測図 (1/60)	36
第37図	13号住居跡出土土器実測図 (1/3)	37
第38図	14号住居跡実測図 (1/60)	37
第39図	14号住居跡出土土器実測図 (1/3)	38
第40図	15号住居跡実測図 (1/60)	39
第41図	15号住居跡出土土器実測図 (1/3)	39
第42図	16号住居跡実測図 (1/60)	41
第43図	16号住居跡出土装身具実測図 (1/1)	41
第44図	16号住居跡出土土器実測図① (1/3)	42
第45図	16号住居跡出土土器実測図② (1/3)	43
第46図	16号住居跡出土土器実測図③ (1/3)	44
第47図	16号住居跡出土石製品実測図 (1/2)	45
第48図	17号住居跡実測図 (1/60)	46
第49図	18号住居跡実測図 (1/60)	47
第50図	18号住居跡出土土器実測図 (1/3)	48
第51図	19号住居跡実測図 (1/60)	49
第52図	19号住居跡出土土器実測図 (1/3)	50
第53図	19号住居跡出土土製品実測図 (1/2)	51
第54図	20号住居跡実測図 (1/60)	51
第55図	21号住居跡実測図 (1/60)	52
第56図	21号住居跡竈実測図 (1/30)	53
第57図	21号住居跡出土土器実測図 (1/3)	53
第58図	22号住居跡実測図 (1/60)	54
第59図	22号住居跡出土土器実測図 (1/3)	55
第60図	23号住居跡実測図 (1/60)	56
第61図	23号住居跡出土土器実測図 (1/3)	57
第62図	23号住居跡出土土製品実測図 (1/1)	58
第63図	24号住居跡実測図 (1/60)	58

第64図	25号住居跡実測図 (1/60)	59
第65図	25号住居跡出土土器実測図 (1/3)	59
第66図	26号住居跡実測図 (1/60)	60
第67図	28号住居跡実測図 (1/60)	61
第68図	28号住居跡出土土器実測図① (1/3)	62
第69図	28号住居跡出土土器実測図② (1/3)	63
第70図	28号住居跡出土土器実測図③ (1/3)	64
第71図	29号住居跡実測図 (1/60)	65
第72図	30号住居跡実測図 (1/60)	67
第73図	30号住居跡出土土器実測図 (1/3)	68
第74図	31号住居跡実測図 (1/60)	68
第75図	31号住居跡竈断面図 (1/20)	69
第76図	31号住居跡出土土器実測図 (1/3)	69
第77図	32・33号住居跡実測図 (1/60)	70
第78図	32・33号住居跡出土土器実測図 (1/3)	71
第79図	34号住居跡実測図 (1/60)	72
第80図	34、35号・36号住居跡出土土器実測図 (1/3)	72
第81図	35号・36号住居跡実測図 (1/60)	73
第82図	35号・36号住居跡出土装身具実測図 (1/1)	74
第83図	住居跡出土鉄器実測図 (1/2)	74
第84図	住居跡出土瓦実測図 (1/4)	折り込み
第85図	37号住居跡実測図 (1/60)	75
第86図	1号掘立柱建物実測図 (1/60)	76
第87図	2号掘立柱建物実測図 (1/60)	77
第88図	3号掘立柱建物実測図 (1/60)	78
第89図	4号掘立柱建物実測図 (1/60)	79
第90図	5号掘立柱建物実測図 (1/60)	80
第91図	6号掘立柱建物実測図 (1/60)	81
第92図	7号掘立柱建物実測図 (1/60)	82
第93図	S K 01実測図 (1/30)	83
第94図	S K 01出土土器実測図 (1/3)	84
第95図	S K 03実測図 (1/30)	85
第96図	S K 03出土鉄器実測図 (1/2)	86

第97図	S K 03出土土器実測図① (1 / 3)	86
第98図	S K 03出土土器実測図② (1 / 3)	87
第99図	S K 03出土土器実測図③ (1 / 3)	88
第100図	S K 04実測図 (1 / 30)	89
第101図	S K 04出土土器実測図 (1 / 3)	90
第102図	S K 05実測図 (1 / 30)	91
第103図	S K 05出土鉄器実測図 (1 / 2)	91
第104図	S K 05出土土器実測図 (1 / 3)	92
第105図	S K 05出土石製品実測図 (1 / 2)	92
第106図	S K 06実測図 (1 / 30)	93
第107図	S K 06出土土器実測図 (1 / 3)	94
第108図	S K 07実測図 (1 / 30)	95
第109図	S K 07出土鉄器実測図 (1 / 2)	96
第110図	S K 07出土土器実測図① (1 / 3)	97
第111図	S K 07出土土器実測図② (1 / 3)	98
第112図	S K 07出土土器実測図③ (1 / 3)	99
第113図	S K 07出土土器実測図④ (1 / 3)	100
第114図	S K 07出土土製品実測図 (1 / 2)	100
第115図	S K 08実測図 (1 / 30)	折り込み
第116図	S K 08出土鉄器実測図 (1 / 2)	102
第117図	S K 08出土土器実測図① (1 / 3)	103
第118図	S K 08出土土器実測図② (1 / 3)	104
第119図	S K 08出土土器実測図③ (1 / 3)	105
第120図	S K 08出土土器実測図④ (1 / 3)	106
第121図	S K 08出土土器実測図⑤ (1 / 3)	107
第122図	S K 08出土土製品実測図 (1 / 2)	108
第123図	S K 09実測図 (1 / 30)	109
第124図	S K 09出土鉄器実測図 (1 / 2)	110
第125図	S K 09出土土器実測図 (1 / 3)	111
第126図	S K 10実測図 (1 / 30)	折り込み
第127図	S K 10出土鉄器実測図 (1 / 2)	113
第128図	S K 10出土土器実測図① (1 / 3)	114
第129図	S K 10出土土器実測図② (1 / 3)	115

第130図	S K 10出土土器実測図③ (1 / 3)	116
第131図	S K 10出土土器実測図④ (1 / 3)	117
第132図	S K 10出土土器実測図⑤ (1 / 3)	118
第133図	S K 10出土土器実測図⑥ (1 / 3)	119
第134図	S K 10出土土製品 (1 / 2)	119
第135図	S K 11実測図 (1 / 30)	120
第136図	S K 11出土土器実測図 (1 / 3)	121
第137図	S K 12実測図 (1 / 30)	折り込み
第138図	S K 12出土鉄器実測図 (1 / 2)	123
第139図	S K 12出土土器実測図① (1 / 3)	124
第140図	S K 12出土土器実測図② (1 / 3)	125
第141図	S K 12出土土器実測図③ (1 / 3)	126
第142図	S K 12出土土器実測図④ (1 / 3)	127
第143図	S K 12出土土器実測図⑤ (1 / 3)	128
第144図	S K 12出土土器実測図⑥ (1 / 3)	129
第145図	S K 12出土土器実測図⑦ (1 / 3)	130
第146図	S K 12出土土器実測図⑧ (1 / 3)	131
第147図	S K 12出土土器実測図⑨ (1 / 3)	132
第148図	S K 12出土土器実測図⑩ (1 / 3)	133
第149図	S K 12出土土器実測図⑪ (1 / 3)	134
第150図	S K 12出土土器実測図⑫ (1 / 3)	135
第151図	S K 12出土土器実測図⑬ (1 / 3)	136
第152図	S K 12出土土器実測図⑭ (1 / 3)	137
第153図	S K 12出土土器実測図⑮ (1 / 3)	138
第154図	S K 12出土土器実測図⑯ (1 / 3)	139
第155図	S K 12出土土器実測図⑰ (1 / 3)	140
第156図	S K 12出土土器実測図⑱ (1 / 3)	141
第157図	S K 12出土石製品実測図 (1 / 2)	141
第158図	S K 13実測図 (1 / 30)	折り込み
第159図	S K 13出土土器実測図 (1 / 3)	143
第160図	S K 14実測図 (1 / 30)	144
第161図	S K 14出土土器実測図 (1 / 3)	145
第162図	S K 15実測図 (1 / 30)	145

第163図	S K15出土土器実測図① (1/3)	146
第164図	S K15出土土器実測図② (1/6)	147
第165図	S K16実測図 (1/30)	148
第166図	模式図	148
第167図	1号～5号墳墳丘断面図 (1/60)	折り込み
第168図	1号墳出土装身具実測図 (1/1)	149
第169図	1号墳出土鉄器実測図 (1/2)	150
第170図	1号墳出土土器実測図 (1/3)	151
第171図	2号墳石室実測図 (1/60)	152
第172図	2号墳石室内遺物出土状況 (1/30)	153
第173図	2号墳出土鉄器実測図 (1/2)	154
第174図	3号墳石室実測図 (1/60)	156
第175図	3号墳石室内遺物出土状況 (1/30)	157
第176図	3号墳周溝内遺物出土状況 (1/20)	157
第177図	3号墳出土装身具実測図 (1/1)	158
第178図	3号墳出土青銅器実測図 (1/1)	159
第179図	3号墳出土鉄器実測図① (1/5)	160
第180図	3号墳出土鉄器実測図② (1/2)	161
第181図	3号墳出土土器実測図 (1/3)	162
第182図	4号墳石室実測図 (1/60)	163
第183図	4号墳石室内遺物出土状況 (1/30)	164
第184図	4号墳周溝内遺物出土状況 (1/20)	165
第185図	4号墳出土鉄器実測図 (1/2)	165
第186図	4号墳出土土器実測図 (1/3)	166
第187図	5号墳石室実測図 (1/60)	167
第188図	5号墳石室内遺物出土状況 (1/30)	168
第189図	5号墳周溝内遺物出土状況 (1/20)	168
第190図	5号墳出土鉄器実測図① (1/5)	169
第191図	5号墳出土鉄器実測図② (1/2)	170
第192図	5号墳出土鉄器実測図③ (1/2)	170
第193図	5号墳出土土器実測図 (1/3)	171
第194図	6号墳石室実測図 (1/60)	172
第195図	6号墳出土鉄器実測図 (1/2)	173

第196図	7号墳石室実測図(1/60)	174
第197図	7号墳出土装身具実測図(1/1)	175
第198図	7号墳出土鉄器実測図(1/2)	175
第199図	7号墳出土土器実測図①(1/3)	176
第200図	7号墳出土土器実測図②(1/3)	177
第201図	7号墳出土土器実測図③(1/3)	178
第202図	8号墳出土鉄器実測図(1/2)	180
第203図	8号墳出土土器実測図(1/3)	180
第204図	9号墳石室実測図(1/60)	181
第205図	9号墳出土土器実測図(1/3)	181
第206図	10号墳石室実測図(1/60)	182
第207図	10号墳石室内遺物出土状況(1/30)	183
第208図	10号墳出土装身具実測図(1/1)	184
第209図	10号墳出土鉄器実測図(1/5)	185
第210図	10号墳出土土器実測図(1/3)	186
第211図	11号墳石室実測図(1/60)	187
第212図	11号墳石室内遺物出土状況(1/30)	188
第213図	11号墳出土土製品実測図(1/1)	188
第214図	11号墳出土鉄器実測図①(1/2)	189
第215図	11号墳出土鉄器実測図②(1/2)	190
第216図	12号墳石室実測図(1/60)	190
第217図	12号墳石室内遺物出土状況(1/30)	191
第218図	12号墳出土装身具実測図(1/1)	191
第219図	12号墳出土鉄器実測図(1/2)	192
第220図	12号墳出土土器実測図①(1/3)	194
第221図	12号墳出土土器実測図②(1/3)	195
第222図	13号墳出土土器実測図(1/3)	196
第223図	14号墳出土土器実測図(1/3)	196
第224図	15号墳出土土器実測図(1/3)	198
第225図	16号墳出土装身具実測図(1/1)	200
第226図	16号墳出土鉄器実測図(1/2)	200
第227図	16号墳出土土器実測図①(1/3)	201
第228図	16号墳出土土器実測図②(1/3)	202

第229图	17号墳出土土器実測図 (1 / 3)	204
第230图	18号墳石室実測図 (1 / 60)	205
第231图	18号墳出土鉄器実測図 (1 / 2)	206
第232图	18号墳出土土器実測図 (1 / 3)	206
第233图	19号墳石室実測図 (1 / 60)	207
第234图	19号墳出土装身具実測図 (1 / 1)	208
第235图	19号墳出土鉄器実測図 (1 / 2)	209
第236图	19号墳出土土器実測図① (1 / 3)	210
第237图	19号墳出土土器実測図② (1 / 3)	211
第238图	19号墳出土土器実測図③ (1 / 3)	212
第239图	20号墳石室実測図	213
第240图	20号墳出土装身具実測図 (1 / 1)	214
第241图	20号墳出土鉄器実測図① (1 / 2)	215
第242图	20号墳出土鉄器実測図② (1 / 2)	216
第243图	20号墳出土土器実測図 (1 / 3)	217
第244图	21号墳石室実測図 (1 / 60)	218
第245图	21号墳出土鉄器実測図 (1 / 2)	219
第246图	21号墳出土土器実測図 (1 / 3)	220
第247图	22号墳周溝断面図 (1 / 40)	221
第248图	22号墳出土土器実測図 (1 / 3)	221
第249图	23号墳石室実測図 (1 / 60)	222
第250图	23号墳周溝断面図 (1 / 40)	223
第251图	23号墳出土装身具実測図 (1 / 1)	223
第252图	23号墳出土鉄器実測図 (1 / 2)	223
第253图	23号墳出土土器実測図① (1 / 3)	224
第254图	23号墳出土土器実測図② (1 / 3)	225
第255图	24号墳周溝断面図 (1 / 40)	225
第256图	24号墳出土鉄器実測図 (1 / 2)	225
第257图	24号墳出土土器実測図 (1 / 3)	226
第258图	25号墳出土土器実測図 (1 / 3)	227
第259图	26号墳出土土器実測図 (1 / 3)	228
第260图	27号墳出土土器実測図 (1 / 3)	229
第261图	28号墳出土土器実測図 (1 / 3)	229

第262图	29号墳出土土器実測図 (1/3)	230
第263图	30号墳石室実測図 (1/60)	232
第264图	1号小石室実測図 (1/30)	234
第265图	2号小石室実測図 (1/30)	235
第266图	3号小石室実測図 (1/30)	236
第267图	3号小石室遺物出土状況 (1/20)	236
第268图	3号小石室出土鉄器実測図 (1/2)	237
第269图	4号小石室実測図 (1/30)	238
第270图	5号小石室実測図 (1/30)	239
第271图	6号小石室実測図 (1/30)	240
第272图	7号小石室実測図 (1/30)	241
第273图	8号小石室実測図 (1/30)	242
第274图	9号小石室実測図 (1/30)	243
第275图	10号小石室実測図 (1/30)	244
第276图	1号～6号焼土坑実測図 (1/30)	246
第277图	7号～12号焼土坑実測図 (1/30)	247
第278图	13号焼土坑実測図 (1/30)	248
第279图	1号土坑実測図 (1/40)	249
第280图	1号土坑出土土器実測図 (1/3)	250
第281图	2号土坑実測図 (1/40)	250
第282图	2号土坑出土土器実測図 (1/3)	251
第283图	3号土坑実測図 (1/40)	251
第284图	3号土坑出土土器実測図 (1/3)	251
第285图	14号土坑実測図 (1/30)	252
第286图	14号土坑出土土器実測図 (1/3)	252
第287图	溝01出土土器実測図 (1/3)	253
第288图	溝01出土石製品実測図 (1/2)	254
第289图	溝02・溝03・溝04出土土器実測図 (1/3)	254
第290图	溝02出土石製品実測図 (1/2)	255
第291图	溝05出土土器実測図 (1/6)	256
第292图	溝06断面図 (1/40)	258
第293图	溝06出土土器実測図① (1/3)	259
第294图	溝06出土土器実測図② (1/3)	260

第295図	集石遺構実測図（1／40）	261
第296図	その他の鉄器実測図（1／2）	262
第297図	その他の土器実測図①（1／3）	263
第298図	その他の土器実測図②（1／3）	264
第299図	その他の土製品・石製品実測図（1／2）	264
第300図	石鏃実測図（2／3）	265
第301図	日ノ浦遺跡群出土遺物実測図（1／3）	266
第302図	集落変遷図①（1／800）	279
第303図	集落変遷図②（1／800）	280
第304図	5号墳周溝内土遺甕（1／6）	282
付 図	塚原遺跡群遺構配置図（1／400）	

I. はじめに

1. 報告に際して

本書は、大野城市倉石土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書の第1集である。

大野城市倉石土地区画整理事業は、総面積19.7haに及ぶ事業で、平成2年12月7日に組合が設立され、平成3年2月27日に起工式がとり行われた。現在、事業は順調に進んでおり、かつては水田であったところに道路が敷設され、住宅が次々と建ち並び、新しい街が生まれつつある。

この区画整理事業に先立つ平成元年度に事業範囲内の試掘調査を行い、その際遺構が確認された部分については、平成3年度から平成5年度まで発掘調査を行った。その経過を箇条書きにまとめると、以下の通りである。

○平成元年度の調査

試掘調査

平成2年2月

○平成3年度の調査

塚原遺跡

平成3年4月～平成4年2月

○平成4年度の調査

屏風田遺跡

平成4年7月～8月

塚原遺跡

平成4年8月～平成5年1月

○平成5年度の調査

屏風田遺跡

平成5年5月～8月

調査に際しては、事業主体者である大野城市倉石土地区画整理組合、工事施工者の皆様、大野城市区画整理課、地元牛頸区の皆様から多大なご協力を頂いた。また、関係各位からは多くの指導・助言を頂いた。ここに厚く感謝の意を表したい。

平成元年度以降、平成7年度にいたるまでの本市の調査体制は以下の通りである。

教	育	長	久	野	英	彦			
			堀	内	貞	夫			
教	育	部	長	末	増	治			
			池	田	嘉	門			
			香	野	信	儀			
社	会	教	育	課	長	岡	部	弥之助	
						關	隆	昭	
						赤	星	健	彦

社会教育課長補佐・係長

青 木 克 正

白 水 岩 人

中 村 茂

高 橋 裕 司

庶務担当主事・主査

浦 山 敏 弘

吉 田 悟

調 査 担 当 技 師

舟 山 良 一

向 直 也

徳 本 洋 一

石 木 秀 啓

同 嘱 託

岸 野 和 子

下 村 精 一

II. 位置と環境

塚原遺跡群は、大野城市大字牛頸から畑ヶ坂一丁目にかけて存在する。牛頸川西岸の河岸段丘状の平地に形成された遺跡群であり、標高はほぼ42m～45mを測る。また、この位置は九州では最大規模を有する牛頸窯跡群のほぼ中央部に相当し、直線距離にして博多湾から約12km、大宰府政庁跡から約4.5kmを測る。

牛頸窯跡群は、大野城市大字牛頸、上大利を中心に北は春日市、東は太宰府市の一部を含む東西4km、南北4.6kmの範囲を持つ須恵器窯跡群である。これまでに200基以上の発掘調査が行われ、その操業期間は6世紀中頃から9世紀初頭にかけてであったと考えられている。牛頸地区においては、上述の様に、窯跡群の発掘調査が先行したが、近年の大規模開発に伴う発掘件数の増加から、他の遺跡の実体も明らかになってきた。

まず集落について言えば、その主なものは6世紀中頃以降に営まれたものである。惣利遺跡^{<遺1>}、惣利北遺跡^{<遺2>}（第1図・9）、日ノ浦遺跡^{<遺3>}（第1図・51、第2図）などがこれに相当する。いずれも、須恵器生産に関係のあった遺跡と考えられている。特に、日ノ浦遺跡では、9世紀初頭以下がる須恵器を大量に廃棄した土坑が検出され、牛頸窯跡群の操業期間についての新知見をもたらした。一方、須恵器生産開始前の集落としては、円入遺跡^{<遺4>}（第1図・44、第2図）と惣利東遺跡^{<遺5>}（第1図・9）をあげることができる。前者は5世紀半ばから6世紀初頭にかけて営まれた集落であり、後者では弥生時代前期から中期初頭にかけての貯蔵穴や竪穴住居跡などが発見された。また、日ノ浦遺跡では縄文時代晩期の遺物・遺構が検出された。今回報告する塚原

遺跡群においても縄文時代晩期の竪穴住居跡と土坑が見つかっており、牛頸地区には6世紀中頃以降に破壊された縄文時代の集落が存在していたことが確実となった。さらに、日ノ浦Ⅱ遺跡（第1図・51、第2図）に続いて10世紀以降に属する遺構が検出されており、この時代の集落が存在した可能性が高くなってきた。

古墳については、現在のところ当地で最古のものは向谷1号墳（第1図・10）であり、4世紀末から5世紀初頭にかけての築造と考えられている。この古墳に続くものとしては、平田北1・2号墳（第1図・46）、向谷2・3号墳（第1図・10）、今回報告する塚原古墳群（第1図・54）がある。つぎに後期の群集墳として代表的なものには、中通古墳群（第1図・35、第2図）がある。この古墳群は、横穴式石室を持つ円墳19基から成り、牛頸地区では最大規模のものである。この他には、後田古墳群（第1図・64、第2図）が、横穴式石室を持つ円墳11基から成る古墳群である。両古墳群ともに、最大規模を持つ古墳1基が、他のものから離れて築造されている点が特徴的である。中通古墳群と後田古墳群とを除けば、当地の群集墳は総数10基以下のものばかりである。主なものを列挙すれば、小田浦古墳群（第1図・66）、大堤（白水池）古墳群（第1図・59）、西浦古墳群（第1図・6）などである。さらには、独立丘陵上に1基だけ存在した胴ノ元古墳（第1図・56）、丘陵の南斜面に石室の一部だけが残っていた月ノ浦古墳、石がほとんど抜かれた後の石室の残骸が発見された日ノ浦古墳なども、牛頸地区の古墳としてあげることができる。

〈註1〉『春日地区遺跡群Ⅱ』春日市教育委員会 1983

〈註2〉『春日地区遺跡群Ⅳ』春日市教育委員会 1986

〈註3〉『牛頸日ノ浦遺跡群』大野城市教育委員会 1994

〈註4〉註2に同じ

〈註5〉註1に同じ

〈註6〉註3に同じ

〈註7〉『春日地区遺跡群Ⅴ』春日市教育委員会 1987

〈註8〉『春日市史 上』春日市 1995

〈註9〉註7に同じ

〈註10〉『牛頸後田・小田浦古墳群』大野城市教育委員会 1992

〈註11〉註10に同じ

〈註12〉『牛頸胴ノ元古墳』大野城市教育委員会 1993

表1 牛頸周辺遺跡地名表

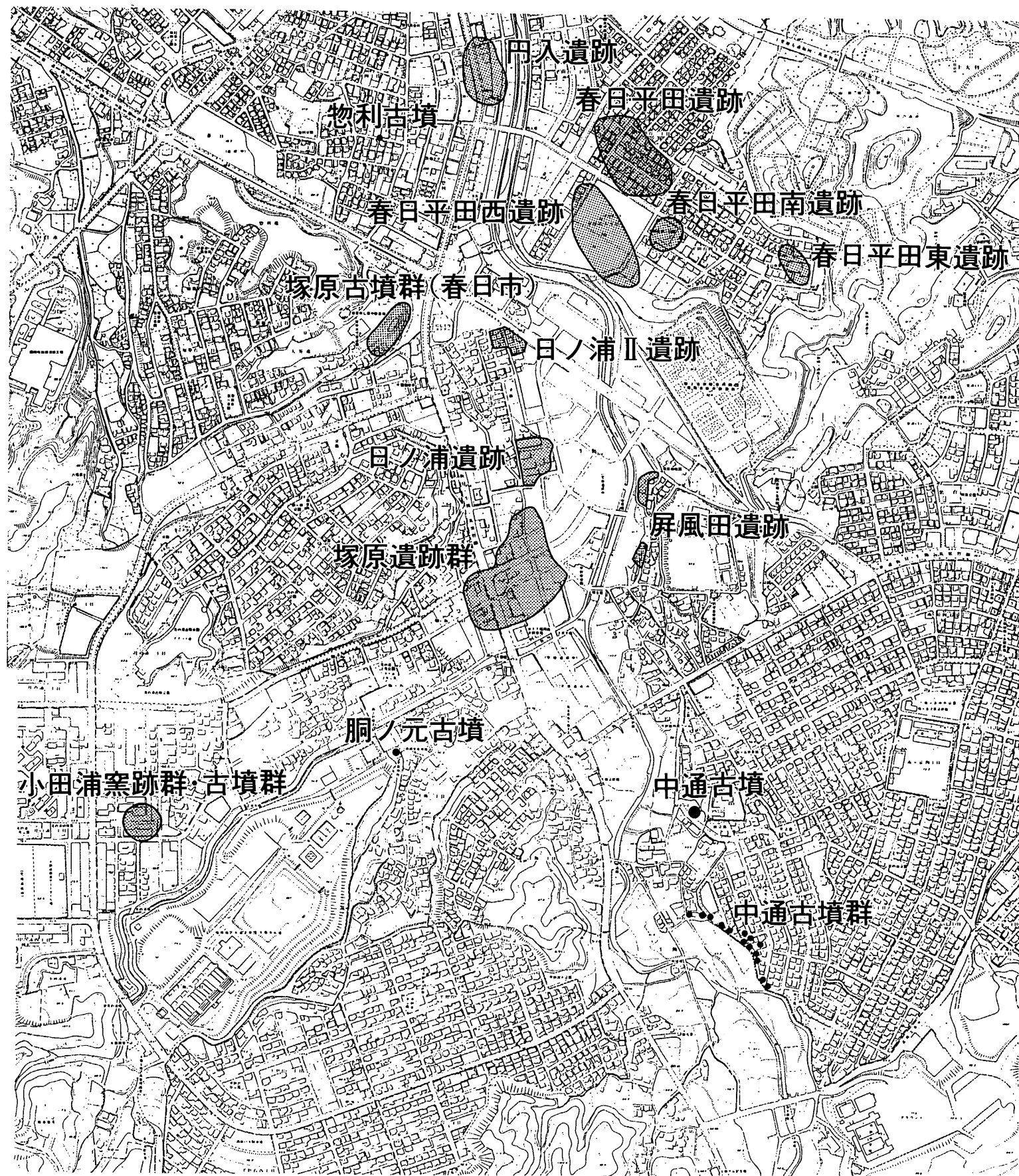
1	天神山古墳群	春日市大字上白水	前方後円墳、円墳	
2	天神山水城	" "	土塁	(国指定史跡)
3	大土居水城跡	" "	土塁	(国指定史跡)
4	ウトグチ窯跡群	" "	窯跡2基以上	1987春日市教委調査(2基)
5	観音山古墳群	那珂川町大字中原他	前方後円墳・円墳260基以上	1972県教委、那珂川町教委調査
6	西浦古墳群	春日市大字上白水	円墳4基	1981春日市教委調査
7	大牟田池窯跡	" 大字春日	窯跡1基以上	
8	惣利窯跡群	" "	窯跡15基以上	1977～80春日市教委調査(9基)
9	惣利遺跡群	" "	古墳～歴史時代住居跡	1979・80春日市教委調査 縄文～中世
10	向谷遺跡群	春日市大字春日	甕棺・方墳、弥生～歴史時代住居跡	1979～82春日市教委調査
11	春日平田窯跡群	" "	窯跡21基	1982～85春日市教委調査(21基)
12	九州大学 筑紫キャンパス内遺跡	春日市・大野城市	集落、溝等、縄文～奈良	1978～九州大学調査
13	池田・池ノ上遺跡	大野城市大字上大利	土坑2基、土塁	1990大野城市教委調査
14	梅頭窯跡	" "	窯跡1基	消滅
15	上園遺跡	" "	住居跡、井戸、弥生～歴史時代	1985～大野城市教委調査
16	出口窯跡	" "	窯跡1基	
17	唐土遺跡	" 下大利	奈良時代の土器溜め	1989大野城市教委調査
18	谷川遺跡	" "	弥生～古墳時代の溝	1994大野城市教委調査
19	吉松古墳	太宰府市大字吉松	円墳1基	
20	水城	太宰府市・大野城市	土塁	(国指定特別史跡)
21	神ノ前窯跡群	太宰府市大字吉松	窯跡2基	1978太宰府市教委調査(2基)
22	篠振窯跡	" "	窯跡2基	1974・85太宰府市教委調査(2基)
23	尊田窯跡	" "	窯跡	
24	長浦窯跡	" 大字向佐野	窯跡1基	1972福岡県教委調査(1基)
25	向佐野窯跡群	" "	窯跡3基	同上(3基)

26	宮ノ本 窯 跡 群	太宰府市大字向佐野	窯跡 8 基	1979・84太宰府市教委調査(8基)
27	谷 蟹 窯 跡	大野城市大字上大利	窯跡 1 基	消滅
28	上 大 利 水 城	" "	土塁	(国指定特別史跡)
29	野 添 窯 跡 群	" "	窯跡10基以上	1969福岡県教委調査(2基) 1986 大野城市教委調査(3基)
30	大 浦 窯 跡 群	" 大字牛頸	窯跡 5 基	1968福岡県教委調査(2基)
31	平 田 窯 跡 群	" "	窯跡 9 基	1972立正大学調査(4基) 1979～81 大野城市教委調査(4基)
32	東 浦 窯 跡 群	" "	窯跡 3 基	1968国士館大学調査(3基)
33	上 平 田 窯 跡 群	" "	窯跡 4 基	1972福岡県教委調査(4基)
34	中 通 窯 跡 群	" "	窯跡12基以上	1979・80県教委・大野城市教委調 査(6基)
35	中 通 古 墳 群	" "	円墳19基	1972・73福岡チブサン会調査(13 基) 1975県教委調査(1基) 1979・80県教委・大野城市教委調 査(5基)
36	原 窯 跡 群	" "	窯跡 3 基	土取りで灰原の一部を残すのみ
37	ハセムシ 窯 跡	" "	窯跡30基以上	1987・88大谷女子大学・大野城市 教委調査(15基)
38	井 手 窯 跡 群	" "	窯跡39基以上	1982～86県教委調査(31基) 1988 大野城市教委調査(3基)
39	道ノ下 窯 跡 群	" "	窯跡10基以上	1982～86県教委調査(10基)
40	足 洗 川 窯 跡 群	" "	窯跡 5 基以上	1982～86県教委調査(4基)
41	笹 原 窯 跡 群	" "	窯跡 4 基以上	同上(4基)
42	長者ヶ原 窯 跡 群	" "	窯跡16基	同上(16基)
43	野 口 窯 跡 群	太宰府市大字大佐野	窯跡 2 基以上	
44	円 入 遺 跡	春日市大字春日	古墳時代住居跡	1981春日市教委調査
45	惣 利 古 墳	" "	円墳 1 基	消滅(横穴式石室・須恵器出土)
46	春日平田 遺 跡 群	" "	弥生～歴史時代住居跡、古墳	
47	華 無 尾 窯 跡 群	大野城市大字牛頸	窯跡 2 基	消滅
48	華 無 尾 遺 跡	" "	散布地	旧石器～縄文(ナイフ形石器石鏃 等出土)
49	屏 風 田 遺 跡	" 大字上大利	土坑、溝	1988～93大野城市教委調査
50	塚 原 古 墳 群	春日市大字春日	円墳 4 基	前方後円墳 1 基・円墳 2 基か？

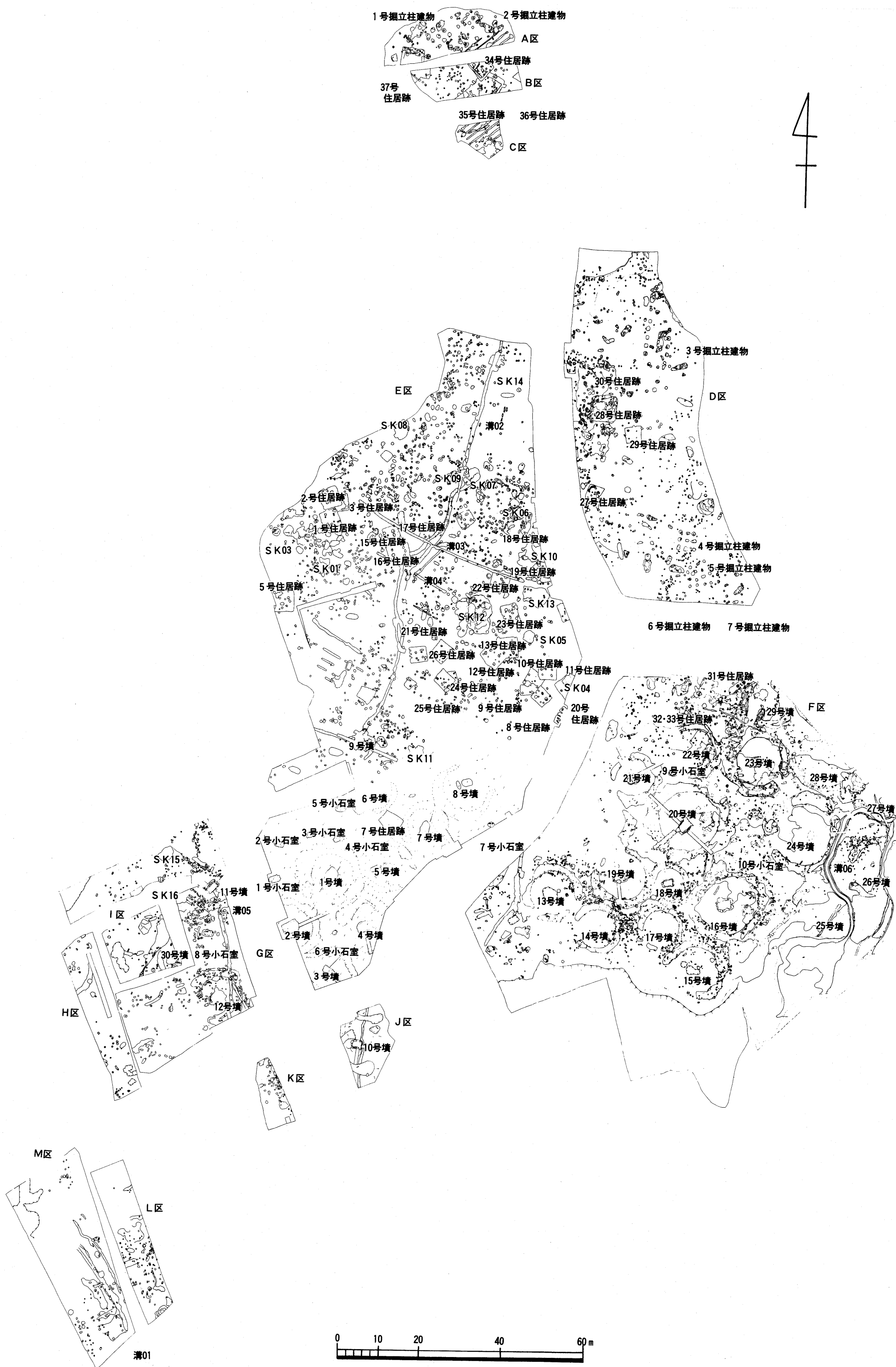
51	日ノ浦遺跡	大野城市大字牛頸	縄文～奈良時代住居跡	1987～90大野城市教委調査
52	畑ヶ坂窯跡群	" "	窯跡3基	1基消滅
53	畑ヶ坂古墳	" "	円墳1基	
54	塚原遺跡群	" "	円墳24基以上 古墳時代・奈良時代住居跡	1987～93大野城市教委調査
55	胴ノ元古墳	" "	円墳1基	1991大野城市教委調査
56	胴ノ元窯跡群	" "	窯跡2基	
57	城ノ山窯跡	" "	窯跡1基以上	窯本体が空洞で露出している
58	楠木遺跡	春日市大字下白水	甕棺墓	弥生（中期）
59	大堤古墳群	" 大字上白水	円墳3基	（満水時水没）
60	白水池遺跡	" "	散布地	縄文
61	浦ノ原窯跡群	" 大字下白水	窯跡10基以上	1978春日市教委調査（8基）
62	浦ノ原遺跡	" "	散布地	土師器・須恵器
63	後田窯跡群	大野城市大字牛頸	窯跡16基以上	1986大野城市教委調査（16基）
64	後田古墳群	" "	円墳11基	1982・86大野城市教委調査
65	小田浦窯跡群	" "	窯跡13基以上	1976立正大学調査（4基）1982～86大野城市教委調査（9基）
66	小田浦古墳群	" "	円墳3基	1976立正大学調査（1基）1987大野城市教委調査（2基）
67	月ノ浦窯跡群	" "	窯跡2基	1982大野城市教委調査（1基）
68	月ノ浦古墳	" "	円墳1基	消滅（横穴式石室）
69	大谷窯跡群	" "	窯跡12基以上	1971国土館大学調査（4基）
70	石坂窯跡群	" "	窯跡20基以上	1983・89・90大野城市教委調査（7基）
71	足洗川遺跡	" "	散布地	旧石器（石刃出土）
72	出口遺跡	" 下大利	弥生～奈良の集落跡	1989大野城市教委調査『出口遺跡』



第1図 牛頸周辺遺跡分布図 (1/25,000)



第2図 位置図 (1/10,000)



第3図 塚原遺跡群遺構配置図（焼土坑、土坑を除く）(1/800)

III. 調査の結果

1. 調査概要

「I. はじめに」の項でも列挙したように、塚原遺跡群は倉石土地区画整理事業に伴って、平成元年度から平成4年度にかけて発掘調査を行ったものであるが、区画整理事業の性格上、調査は各年度ごとの事業の進展にあわせて進められたため、調査地点の選定と調査面積には規則性がない。しかも、道路や水路の確保等の制約から、遺跡の全ての部分について調査を行うことができたわけではない。

したがって、遺跡全体の最終的な地区割りと遺構配置は、第3図および付図のようになった。A区～M区に細分した調査区ごとに遺構と出土遺物の報告を行う方法もあるが、今回は全体を大きな一つの遺跡群としてとらえ、調査区をこえた報告を行うこととした。

さて、塚原遺跡群の位置する牛頸川の西岸には、複雑で急峻な地形が連続している部分と、比較的広範囲に河岸段丘が展開する部分とがある。塚原遺跡群もこのような段丘上にひろがり、総調査面積は約21,000㎡を測る。標高はほぼ42mから45mの間におさまるが、全体的には南へ行くほど低くなっている。また、南端の一部は牛頸川の氾濫原であったことも確認することができた。

調査地はすべて、かつて水田あるいは畑として耕作が行われていた場所であり、その結果としての削平を受けていないところはない。特に古墳群が、それも南に下るほど大きく削平されており、石室の掘り方すら検出できない例もいくつかあった。

発掘調査の結果、数多くの遺構が検出された。時期的には、殆どの遺構が古墳時代以降のものであるが、縄文・弥生時代に属するものもあった。今回報告する遺構を時代に関係なく列挙すると下記の通りである。

竪穴住居跡	35（4号と6号は欠番）
掘立柱建物	7
廃棄土坑（SK）	15（SK02は欠番）
古墳	30
小石室	10
焼土坑	13
土坑	17
溝	6
集石遺構	1

全体的な遺構の分布としては、調査地を南北に大別して北側に竪穴住居跡・掘立柱建物・廃棄土坑が、南側に古墳・小石室・焼土坑が集中している。溝と土坑にはこのような傾向は見当たらない。

なお、巻末に掲載した土馬および獣脚は、昨年度「牛頸日ノ浦遺跡群」を発行した後に発見されたものである。いずれも日ノ浦遺跡の表土剥ぎの際に見つかったものであり、塚原遺跡群からの出土遺物ではない。

2. 縄文時代の遺跡と遺物

(1) 竪穴住居跡

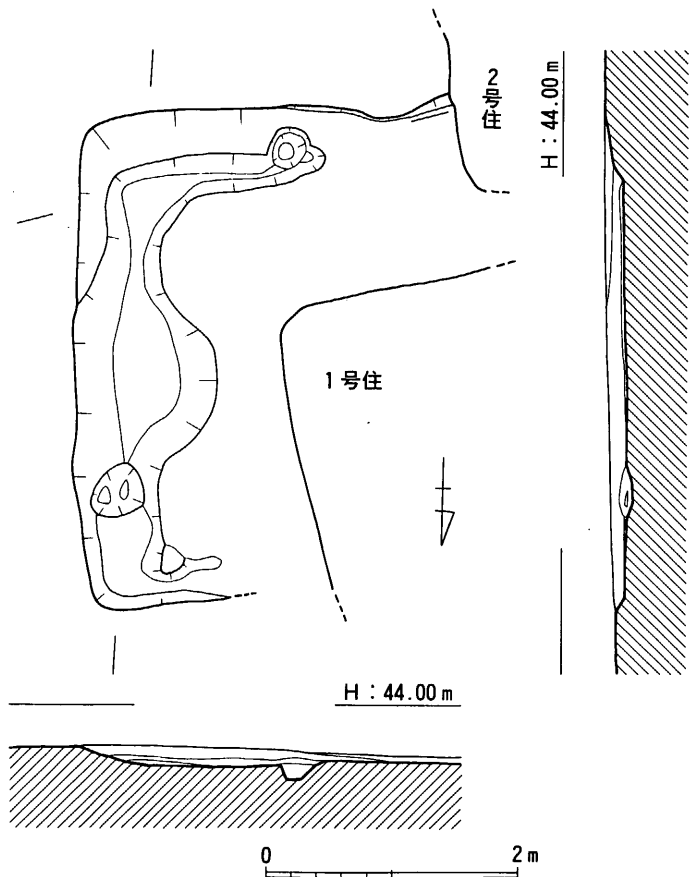
3号住居跡（第4図、図版12・13）

1号住居跡、2号住居跡同様に、調査区北西コーナー付近に位置する。1号住居跡、2号住居跡によって西側の部分を破壊されているため、本来の形状はわからないが、正方形に近い方形を呈したと思われる。壁は、東側壁のみが完全に検出され、3.7mを測る。北側壁と南側壁は部分的にしか検出できず、前者が1m、後者が2.9mであった。西側壁はまったく検出できなかった。壁高は、残存部分で6cm～10cmを測った。床面はほぼ平坦で、北東コーナーから南側壁にかけて周溝がもうけられている。周溝の最大幅は1.12m、最大深さは0.16mである。周溝の他には、床面からは炉、ピット等は検出できなかった。

遺物は、床面より縄文土器が出土した。

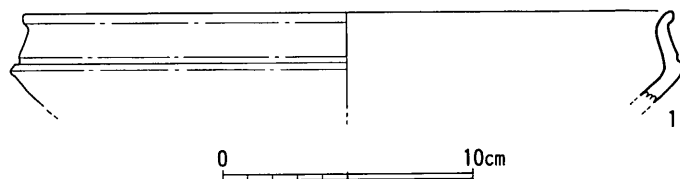
出土遺物（第5図）

縄文土器 胎土中に雲母片を



第4図 3号住居跡実測図 (1/60)

含む、精製磨研土器である。口縁部が強く屈曲し、頸部と肩部の境に1条の沈線をめぐらせている。内面は磨滅のため調整不明である。



第5図 3号住居跡出土土器実測図(1/3)

27号住居跡(第6図、図版22)

調査区の西端近くに位置する。南東コーナー部をピットによって切られているが、本来はゆがんだ台形とも言うべき平面プランを呈したものと考えられる。壁長は、北側壁と西側壁がともに3.6mであり、南東コーナーを復元してみると、東側壁は3.5m、南側壁は2.9mを測ったと考えられる。壁高は6cm~10cmである。床面は平坦で、合わせて7個のピットが確認されたが、柱穴を確定することはできなかった。本住居跡では、北西コーナー付近で周溝が確認された。周溝の最大幅は0.5m、最大深さは0.32mを測る。南東コーナーの部分で小土坑と切り合い関係にある。新旧関係は、本住居跡の方が古い。

遺物は、床面近くから縄文時代晩期の浅鉢と思われる土器片が1点出土した。しかし、きわめて小さな破片のため、図示することができなかった。

(2) 土坑

4号土坑(第7図)

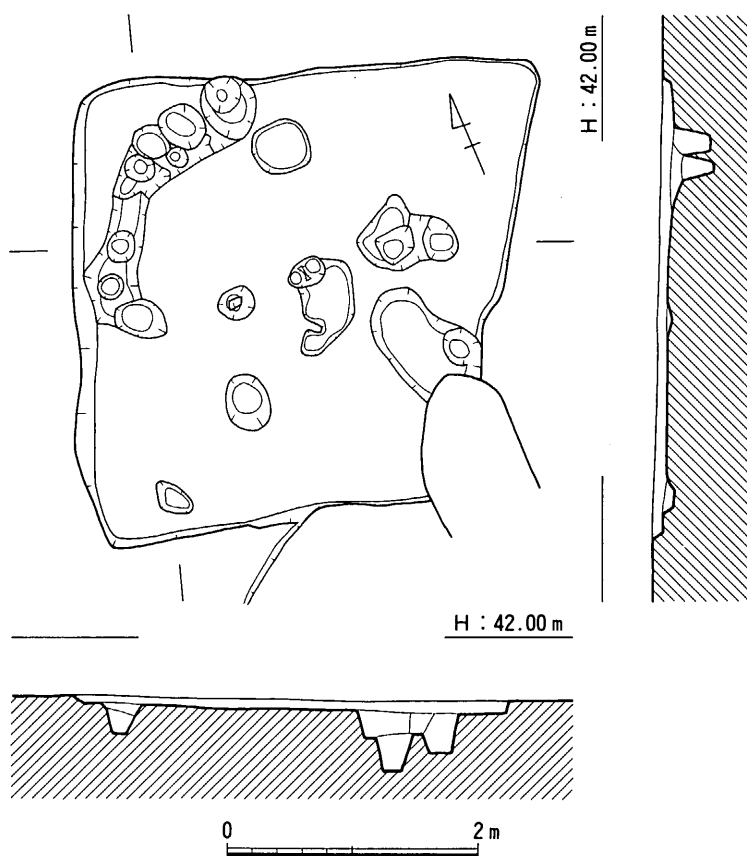
22号墳墳丘下で検出されたもので、およそ長方形を呈し、床は比較的平坦である。長軸長1.3m、短軸長1.0m、深さ約10cmである。黒曜石片1片が出土している。なお、この4号土坑と、後から報告する6号土坑については、ともに土器は出土しなかったものの、検出状況、立地等から縄文時代に属すると考えた。

5号土坑(第8図、図版73)

22号墳墳丘で検出されたものである。22号墳は既に盛土がすべて削平され、主体部も見つからなかった古墳であるが、当遺構出土遺物が縄文土器であることから、古墳築造に伴ってかなり破壊された遺構と判断された。不整形を呈するが、本来は隅丸方形であった可能性もある。現状では南北方向で3.1m、東西方向で2.4m以上の大きさで、床面はそれほど平坦ではなく、深さは0.4m程度である。

出土遺物(第9~11図、図版108・109)

鉢(1・2・5) 1・2はいずれも小破片である。1の外面には条痕が残り、内面はナデている。2は口縁部がゆるやかに外反するもので、内面は研磨、外面は口縁部が研磨、くびれ部に刺突文、その下は6条の沈線がめぐる。沈線で区画された5段のうち、2段にわたり縄文が施され、その他はすり消す。縄文帯には結節点を示すかのような三ヶ月状くり込みがある。文



第6図 27号住居跡実測図 (1/60)

深鉢 (8~12) 口縁部がゆるやかに外反するもの (8~10) と、やや内湾気味になるもの (11・12) がある。前者は内外面とも条痕があり、後者は内面はナデており、調整方法も違う。後者の場合、外面は11が条痕が見られ、12はナデを加えて条痕を消しているようだ。

6号土坑 (第7図)

32号住居跡の北2mの地点で検出されたもので、西半分は比較的方形に近く、床面も平坦であるが、東半分は不整で、床面は東へ行くにつれて段状に下がる。2種類の土坑とも考えられる状態であるが、1基として扱った。

7号土坑 (第12図)

S K 3の東約5m、1号住居跡の東南に接して検出されたものである。不整形であるが、長方形の短辺部が丸くなった形とも言える。長軸方向で3.2m、短軸方向で0.85m、深さは15~20cmを測る。中央部に浅いピット、西短辺部に内側に向かって舌状の高まりがある。また、西側にこぶし大の石が散乱していた。縄文土器片58点、黒曜石の石鏃2点、剝片3片が出土した。

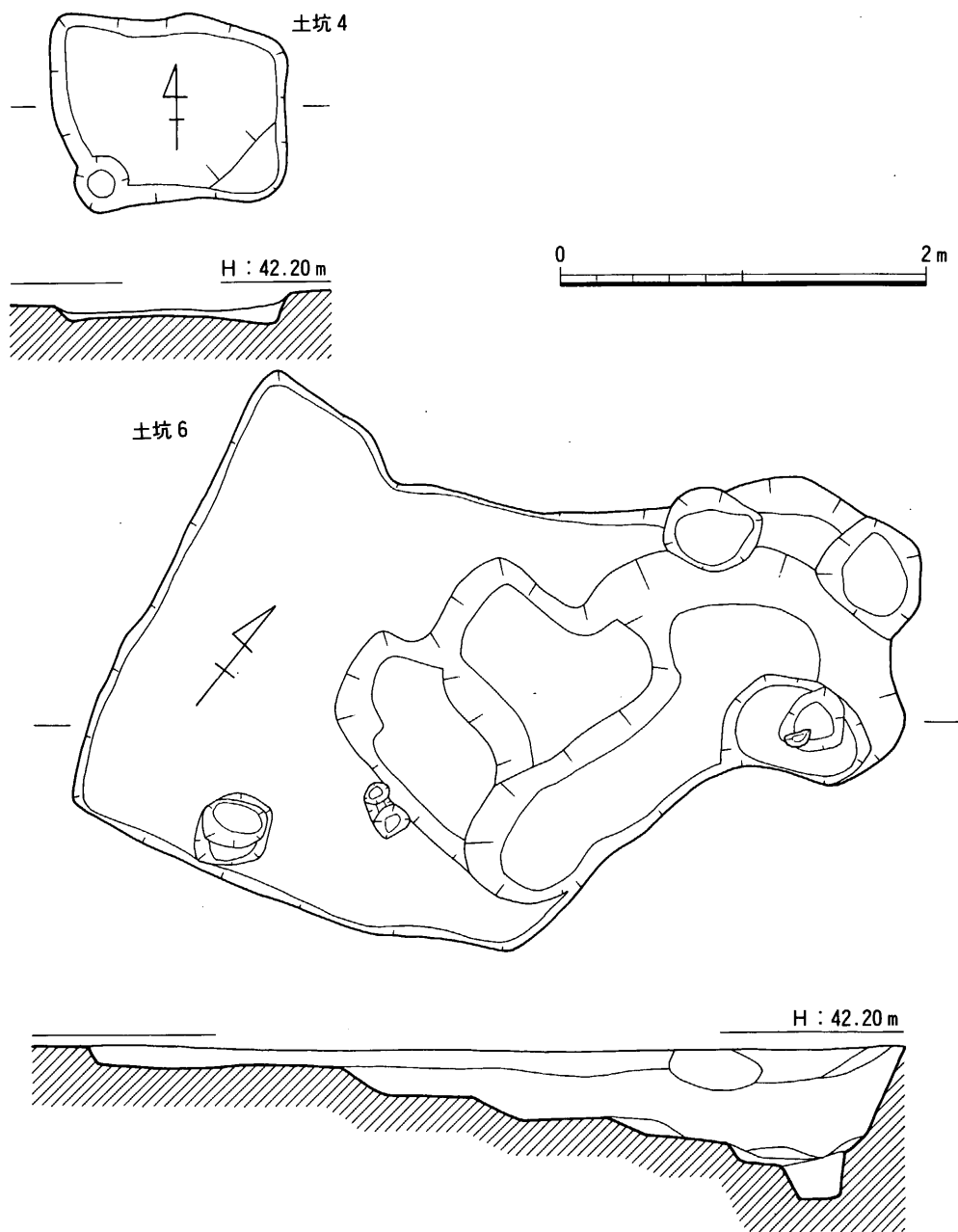
様帯の下は研磨である。

5は大形のもので、外面は器面の荒れで調整不明であるが、内面はナデと思われる。

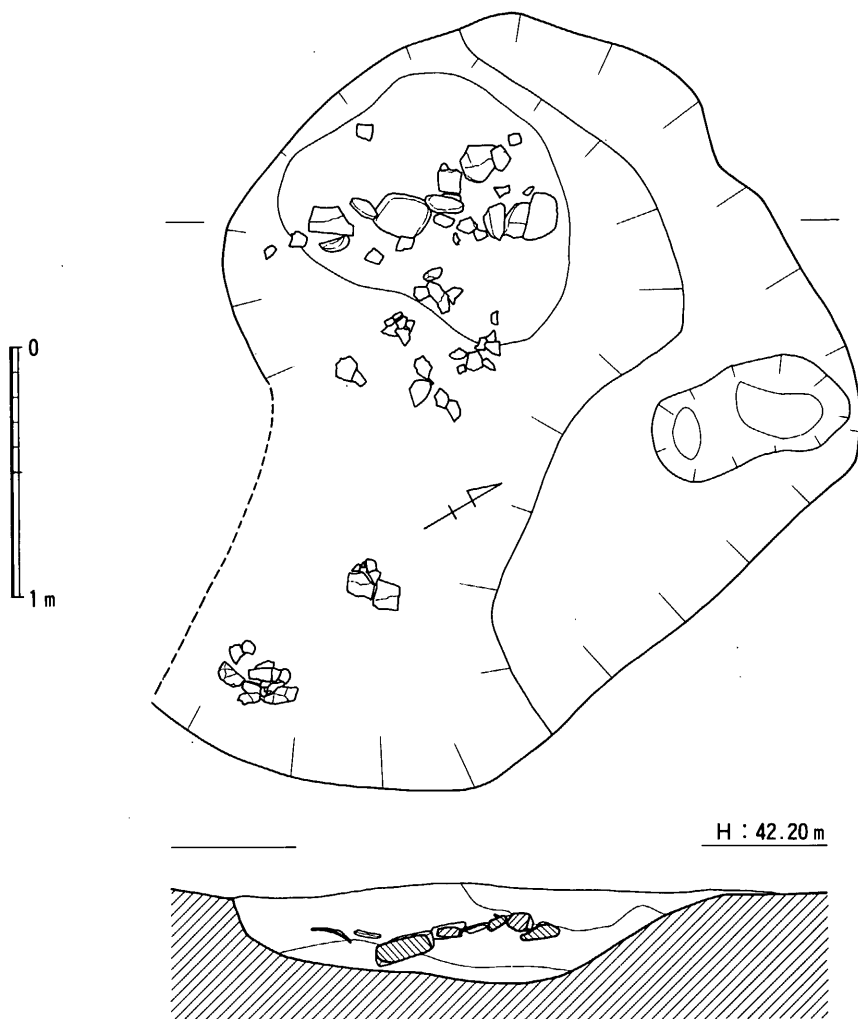
浅鉢 (3) 内側に屈曲する波状口縁を持つもので、内外面研磨で仕上げる。

脚付浅鉢 (4) 全体の2分の1程度残るものである。外面調整は不明であるが、内面はナデを行う。

底部 (6・7) 深鉢の底部と思われるもので7は円板状を呈し、上に積み上げていったものと思われる。両者ともやや上げ底気味である。



第7図 4号・6号土坑実測図 (1/40)



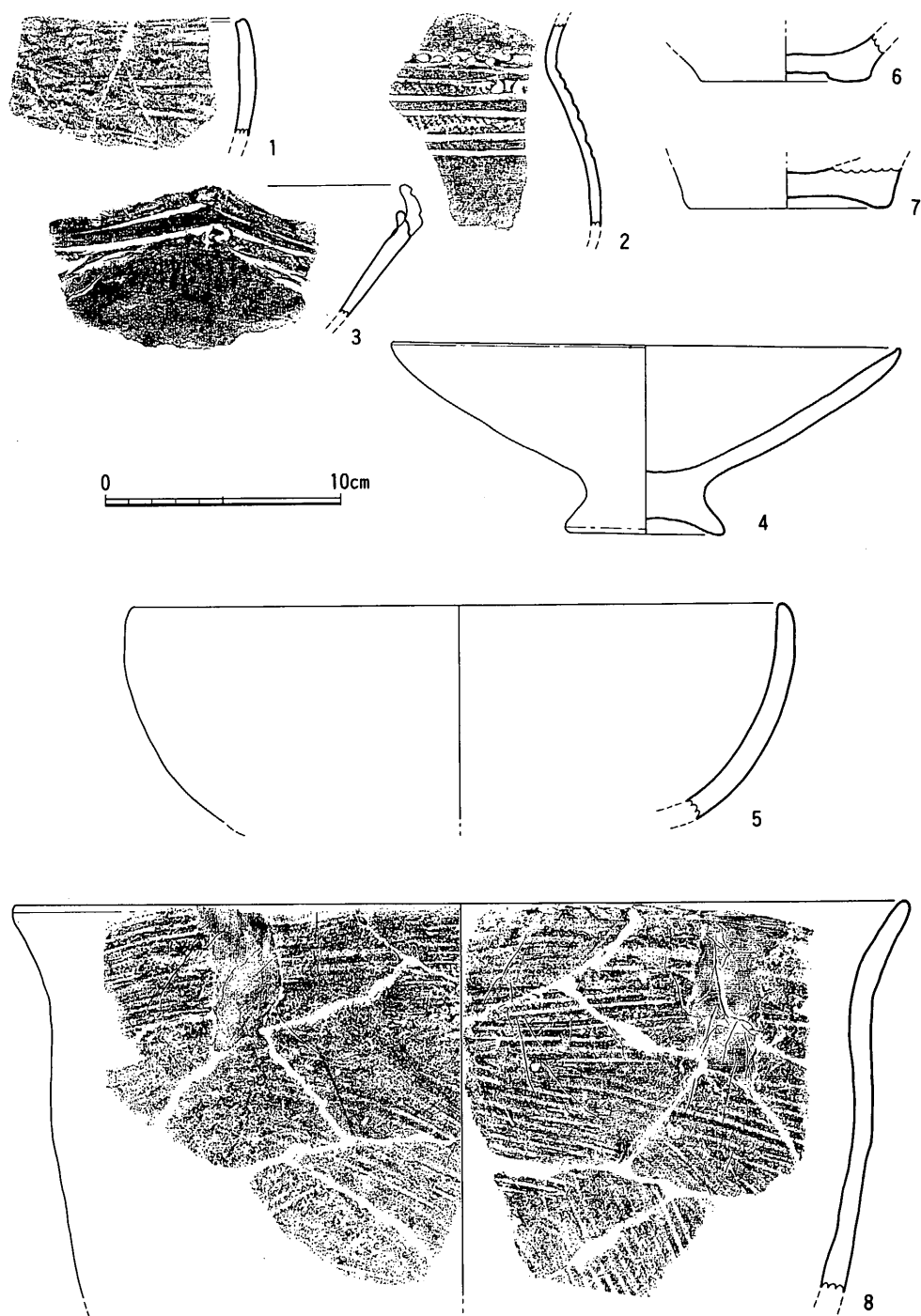
第8図 5号土坑実測図 (1/30)

出土遺物 (第13図)

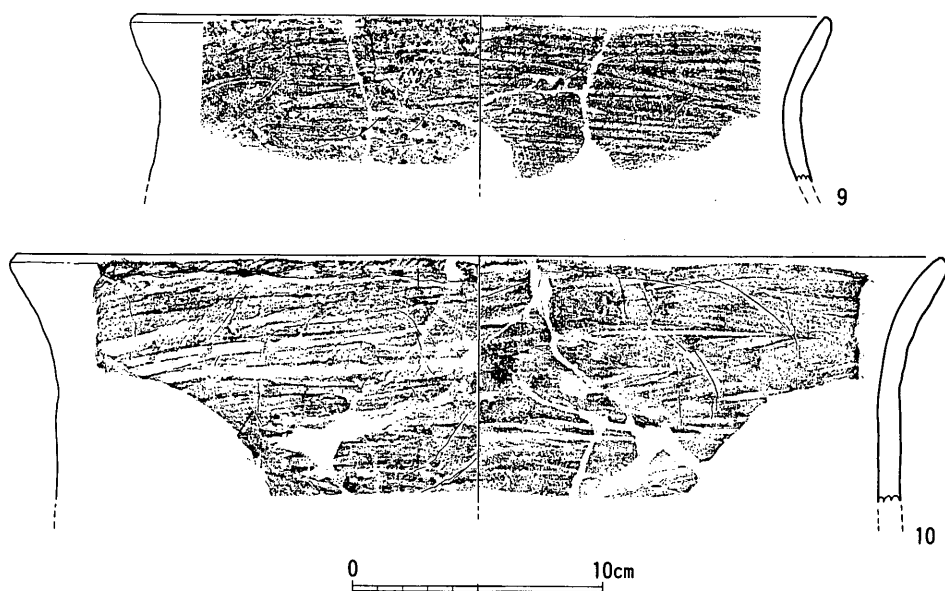
深鉢 (1・2) ともに口縁部の破片であるが、1はほぼ垂直に立ち上がり、2はゆるやかに外反する。1は、内外面とも条痕を施しており、胎土中にはわずかに雲母片を含む。2は内外面ともにナデを加えて条痕を消しているようである。胎土中にわずかに雲母片を含む。

8号土坑 (第12図)

SK 4の東南6mに位置し、やや弧状を描く長楕円形を呈する。最大長2.65m、中央付近で幅0.7m、深さ約20cmを測る。北側から階段状に下がり、途中にピットがある。縄文土器と思われる土器片1片と剥片2片が出土している。



第9图 5号土坑出土土器实测图① (1/3)



第10図 5号土坑出土土器実測図② (1/3)

9号土坑 (第12図)

S K 5の北東12mに位置し、楕円形を呈する。1 m×0.7m、深さ約20cmを測る。縄文土器片、黒曜石製石鏃片1、剥片が出土している。

11号土坑 (第12図)

S K 5の南約10mに位置し、ゆがんだ台形状を呈する。南北中軸長1.6m、東西中軸長約1.1 m、深さ7 cmを測る。ピットが5個検出されたが伴うものかは明確ではない。縄文土器と思われる土器片と剥片が出土した。

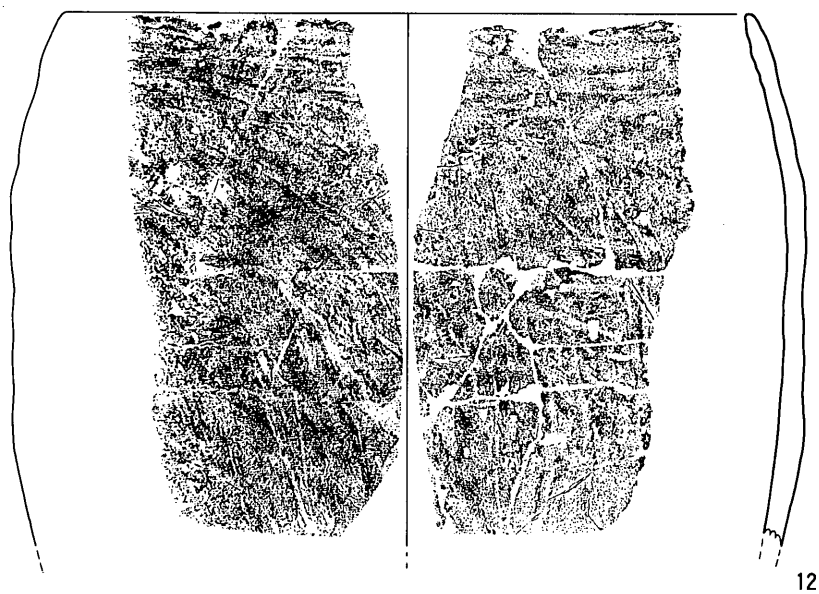
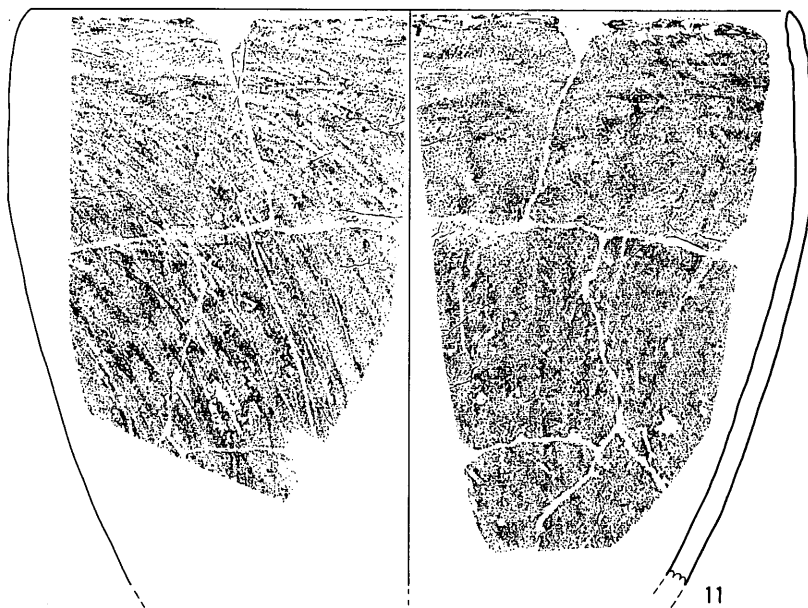
12号土坑、12'号土坑 (第14図)

7号土坑の東10mに位置し、12号土坑は不整形、12'号土坑はいびつな楕円形を呈する。12'号土坑が12号土坑を切ると思われるが、検出時には断定できず、遺物も同時に取り上げたため、一括して記述する。12号土坑は東西長約3.4m、南北長約2.8m、深さ5～15cmを測る。12'号土坑は長軸長1.35m、短軸長約0.9m、深さ約50cmを測る。床面から一辺15cmほどの石が1個検出された。縄文土器片と黒曜石の剥片が出土した。

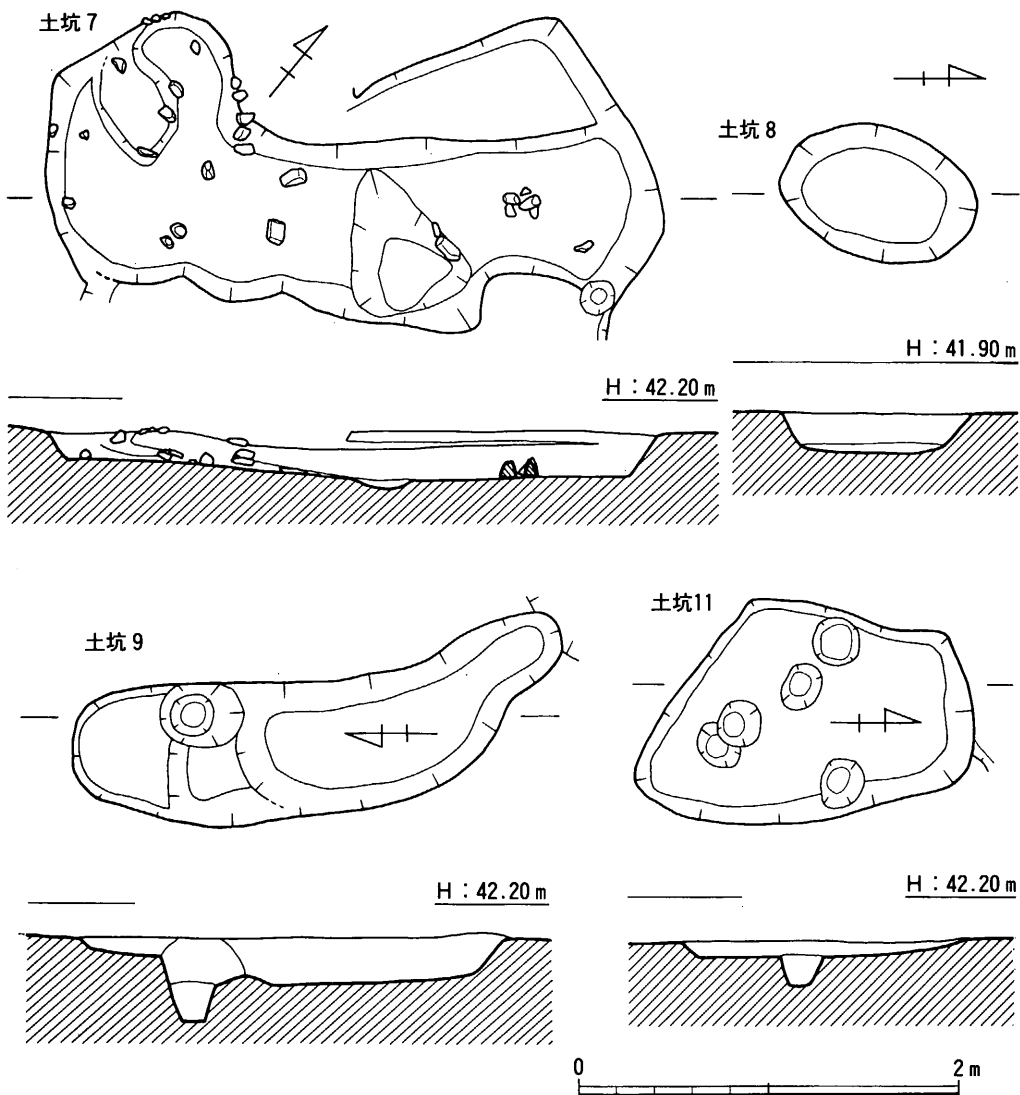
13号土坑 (第14図)

調査区の東端、26号墳墳丘下で検出されたもので、不整形円形を呈する。二段掘り状になり、床面には2個のピットがある。長軸長1.35m、短軸長0.95m、深さ30cmを測る。縄文土器片多数と剥片少量が出土した。

出土遺物 (第16図)



第11图 5号土坑出土土器实测图③ (1/3)



第12図 7号・8号・9号・11号土坑実測図 (1/40)

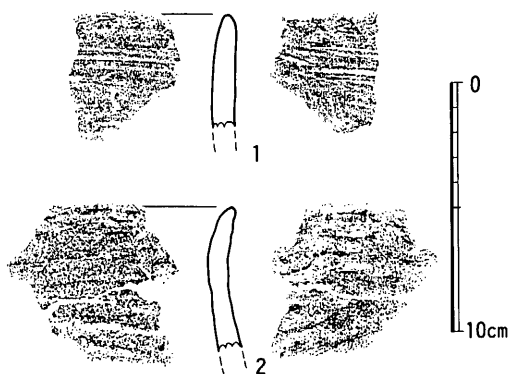
深鉢 (1) 1は上半部がほぼ直立、下半部が丸味を持つもので、内面は研磨、外面は条痕のあとナデを加えている。淡い褐色を呈し、しっかりした作りのものである。

15号土坑 (第14図)

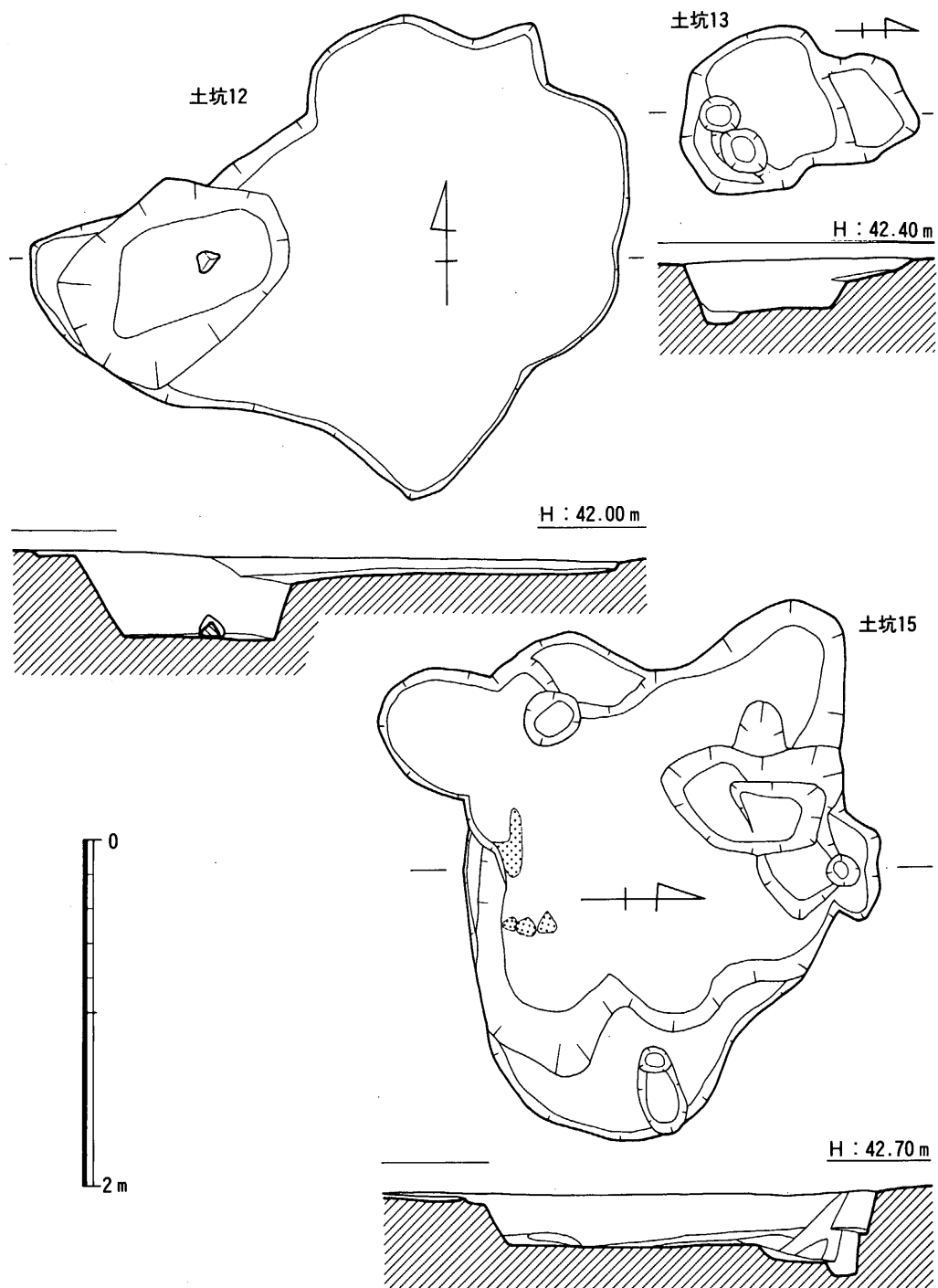
16号墳墳丘下で検出され、不整形を呈する。中軸上で東西長2.8m、南北長2.4m、深さ約30cmを測る。北端部は階段状に下がり、最深部で約50cmを測る。縄文土器と思われる土器片少量と、黒曜石・サヌカイトの剥片が出土した。

16号土坑 (第15図)

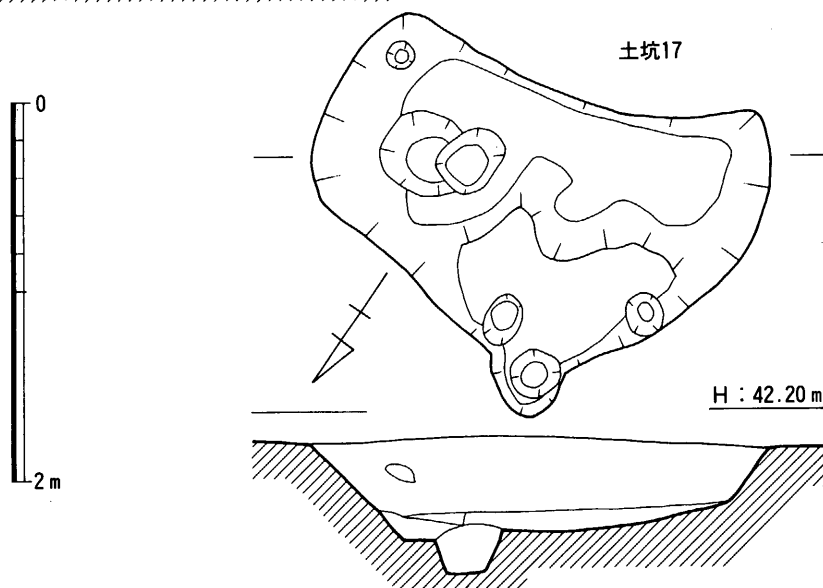
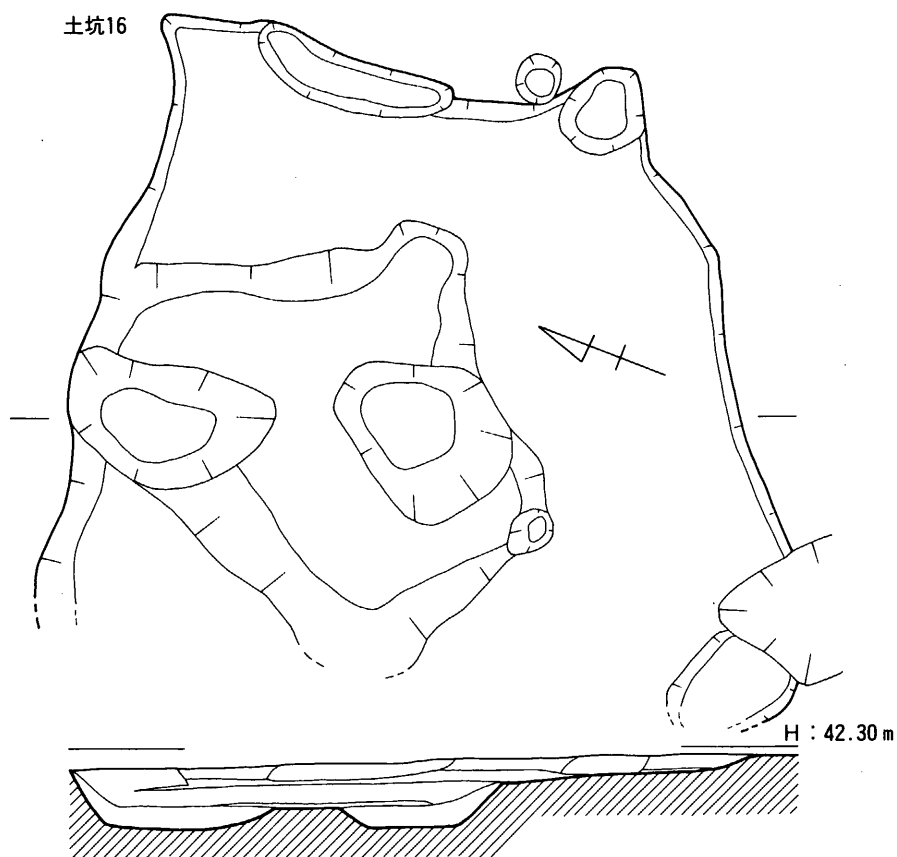
20号墳墳丘下で検出された。1つの遺構というよりも、いくつかの小さな遺構の集合と考え



第13図 7号土坑出土土器実測図 (1/3)



第14図 12号・13号・15号土坑実測図 (1/40)



第15図 16号・17号土坑実測図 (1/40)

でも良さそうである。南北長約4 m、東西長3 m以上、最深部で約35cmを測る。縄文土器と思われる土器片少量とサヌカイトの剥片が出土している。

17号土坑（第15図）

23号墳丘下で検出され、不整形を呈する。二段掘り状を呈し東西長2.2 m、南北長最長部で2 m、深さ約50cmを測る。縄文土器と思われる土器片が少量出土している。

3. 弥生時代の遺構と遺物

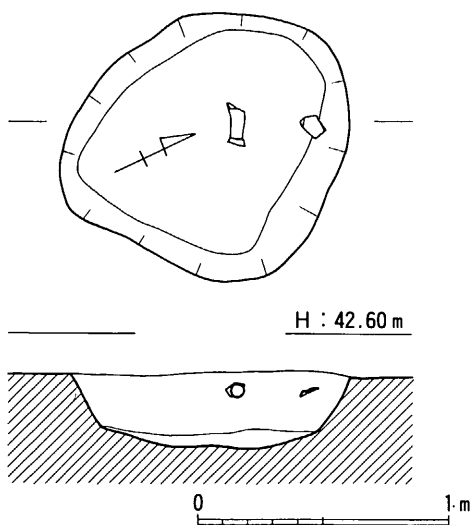
(1) 土坑

10号土坑（第17図）

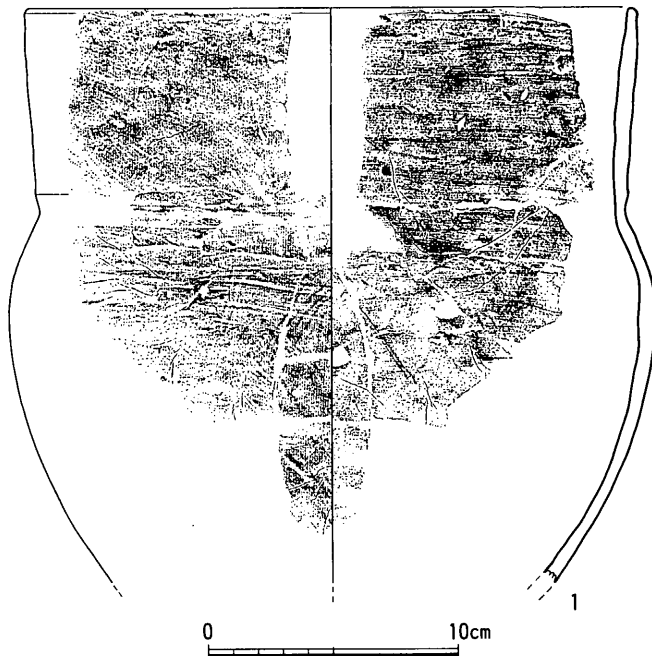
16号墳と24号墳の間で焼土坑12の西南すぐの地点に位置する。不整円形を呈し、1.2m×1.0m、深さ約0.3mの大きさである。床面はやや丸味を持つ。床面から20cmほど浮いた状態で弥生土器の高杯脚部と甕の破片が出土した。

出土遺物（第18図）

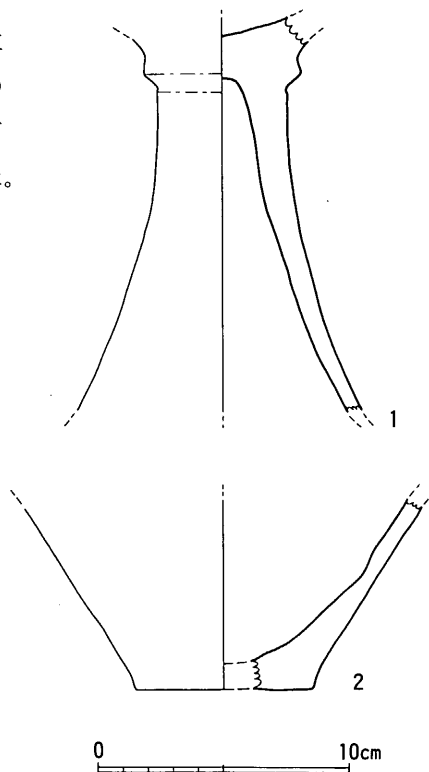
弥生土器



第17図 10号土坑実測図 (1/30)



第16図 13号土坑出土土器実測図 (1/3)



第18図 10号土坑出土土器実測図 (1/3)

高杯（１） 脚部のみであるが、杯部直下に凸帯を持つものである。器面が荒れていて調整不詳であるが、外面は縦方向のハケ目、内面にはシボリ痕とナデのあとが観察できる。径2～3mmの白色粒を多く含む胎土である。

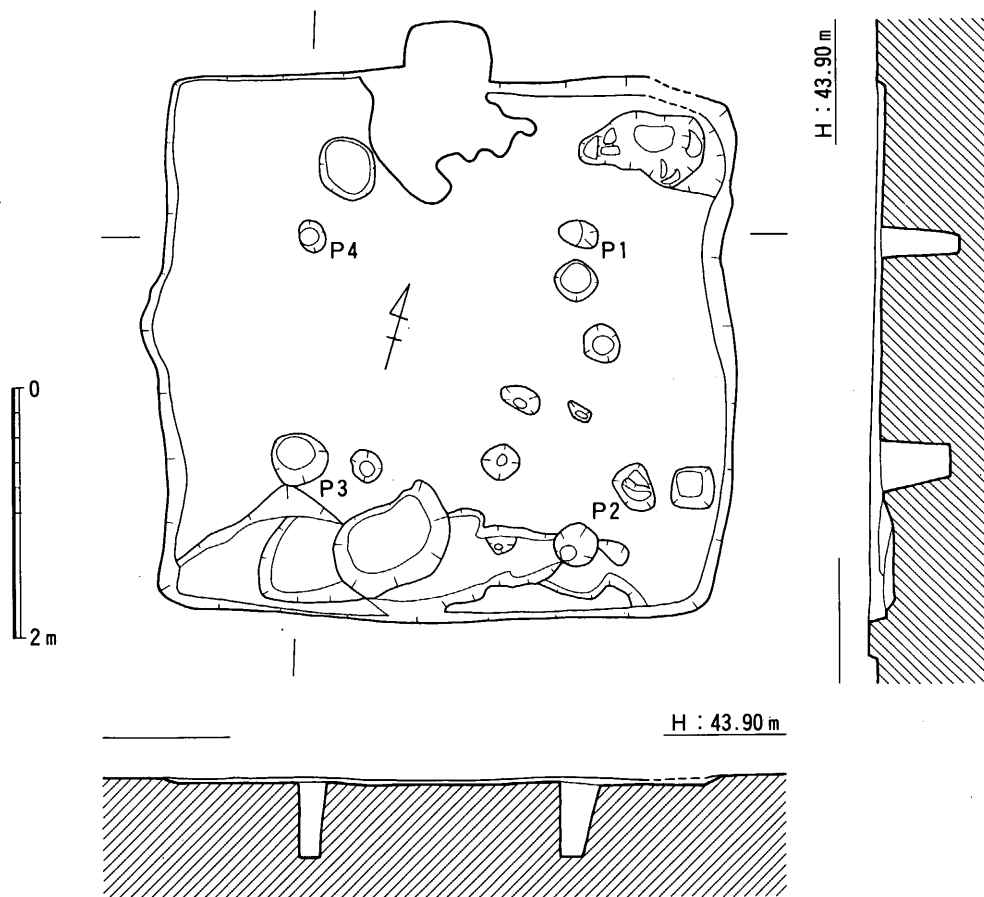
甕（２） 底部小破片である。外面はナデによるものか平滑である。

4. 古墳時代以降の遺構と遺物

(1) 竪穴式住居跡

1号住居跡（第19図、図版12）

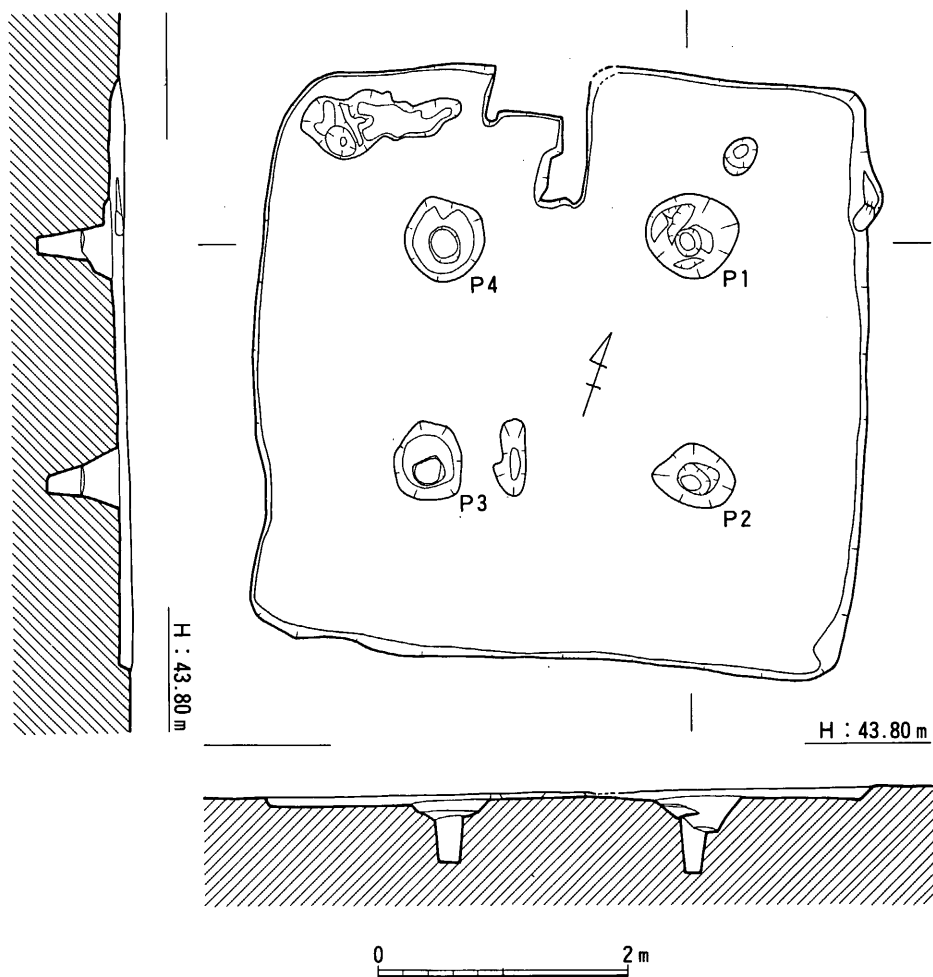
調査区の北西コーナー付近に位置する。形状はほぼ正方形を呈し、南側壁沿いに周溝がもうけられている。この周溝は、最大幅1.03m、最大深さ0.2mを測る。壁長は、北側壁が4.4m東側壁4.0m、南側壁4.4m、西側壁4.1mである。壁高は6cm～15cmほどである。床面は平坦である。



第19図 1号住居跡実測図（1/60）

り、4個の柱穴が確認された。柱穴の深さは0.55m～0.62mを測る。柱穴の他に、床面で9個のピットが検出された。北側壁のはぼ中央部に焼土の散布が認められたため、竈の痕跡と考えて精査したが、袖等の施設は検出できなかった。2号住居跡、3号住居跡と切り合い関係にある。新旧関係は、2号住居跡より古く、3号住居跡よりも新しい。

遺物は、埋土中から、須恵器杯蓋・杯身・短頸壺・甕、土師器蓋・甕・高台付皿、黒色土器、石鏃、石匙などが出土した。その総量は、整理箱（縦約60cm×横約40cm×深さ約15cm）の $\frac{1}{3}$ 程度であるが、いずれも小片であり、図示に耐えるものはなかった。なお、出土遺物の中に、鉄滓が3点と、窯の壁または天井と思われる焼けた塊状のものが出土した。



第20図 2号住居跡実測図 (1/60)

2号住居跡（第20図、図版12）

1号住居跡と同様に、調査区北西コーナー付近に位置する。形状はほぼ正方形を呈し、壁長は北側壁が4.4m、東側壁4.6m、南側壁4.6m、西側壁4.3mである。壁高は8cm～12cmを測る。床面は平坦で、4個の柱穴が確認された。柱穴はいずれも二段掘りされており、深さは0.56m～0.6mを測る。床面からは柱穴の他に2個のピットが検出された。また、北西コーナー付近では不整形なくぼみが確認された。北側壁中央やや西寄りの部分に竈が付設されていたが、右袖部を検出したにとどまった。1号住居跡、3号住居跡と切り合い関係にある。新旧関係は、いずれの住居跡よりも新しい。

遺物は、埋土中から、須恵器杯蓋・杯身・甕・口頸部、土師器甕、鉄鏃などが出土した。総量は整理箱十程度であるが、図示できるものは少なかった。

出土遺物

鉄器（第83図、図版115）

鏃（1） 篋被部から茎部にかけての破片と思われる。残存長11.1cm。

須恵器（第21図）

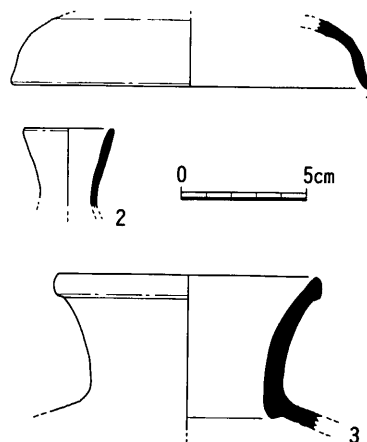
杯蓋（1） 小片を図上復元した。天井部外面に回転ヘラケズリを施す。体部外面には灰をかぶっている。その他の部分には回転ナデを施す。

口頸部（2・3） 2は瓶子の口頸部と思われる。内外面とともに回転ナデを施し、部分的にシボリ痕が見られる。3は全体の約4分の1の破片を図上復元した。頸部外面から口唇部にかけて灰をかぶっている。頸部内面には回転ナデを施す。わずかに残っている体部の外面には格子目叩き、内面には同心円状当て具痕が残る。

5号住居跡（第22図、図版13）

調査区北西端に位置し、西側部分は調査区域外にある。そのため、本来の形状は不明であるが、調査区内のプランから、やや不整な長方形であったと考えられる。壁長は、北側壁が4.4m、東側壁が6.1mであり、南側壁は4.4mのみが検出され、西側壁は不明である。壁高は、0.12m～0.18mを測る。床面は平坦で、8個のピットが確認されたが、柱穴を確定するには至らなかった。竈は検出されなかったが、住居跡内の北西部から、多量の粘土が床面より浮いた状態で見つかった。

遺物は、埋土中から須恵器杯蓋・杯身・高杯・甕・鉢・鉢・平瓶・蓋・壺・甕、土師器甕、鉄器などが出土した。その総量は整理箱で約1箱である。



第21図 2号住居跡出土土器実測図

(1/3)

出土遺物

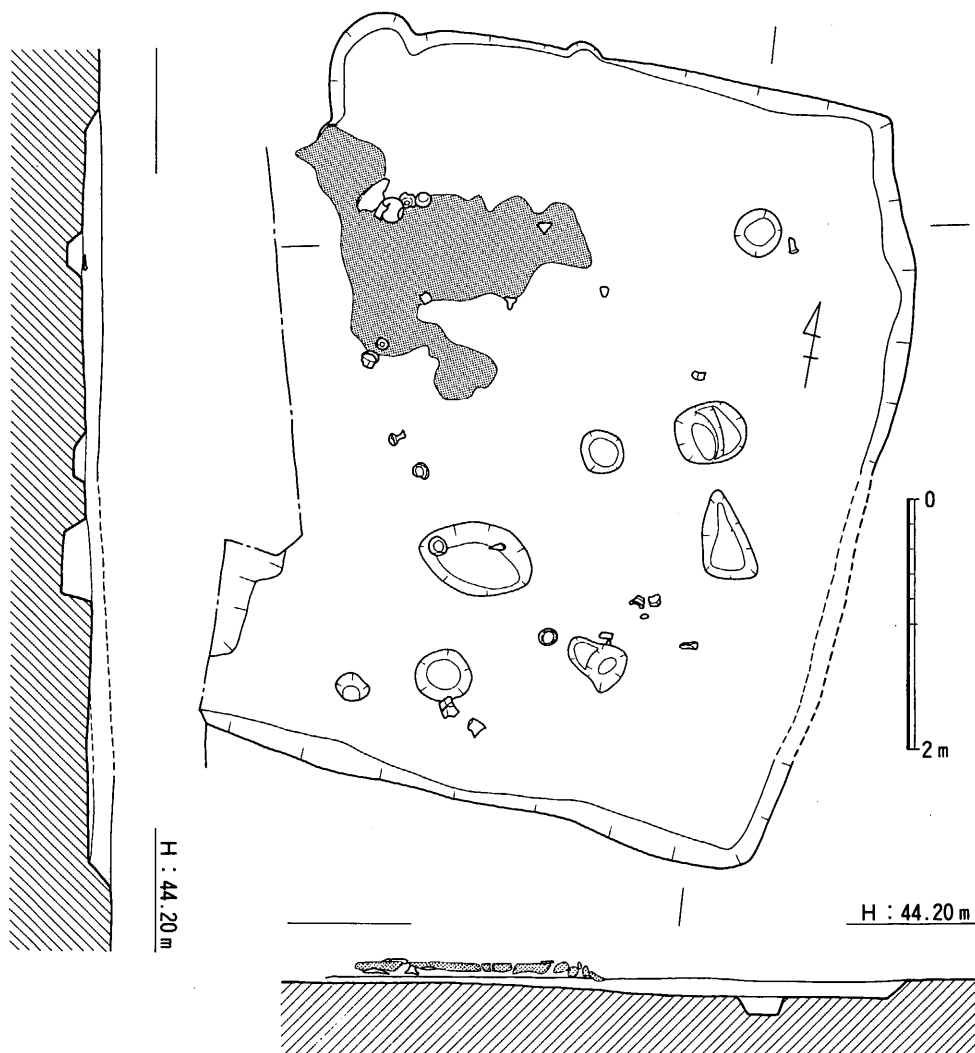
鉄器（第83図、図版115）

刀子（2・3） 2は刃部だけの破片で、残存長は4.6cm。3は刃部から基部にかけての破片で、残存長は8.5cmである。把をおさえる縁金具が残る。

不明鉄器（4） 釘かとも思われるが、用途不明である。全長2.6cm。

須恵器（第23～25図、図版74）

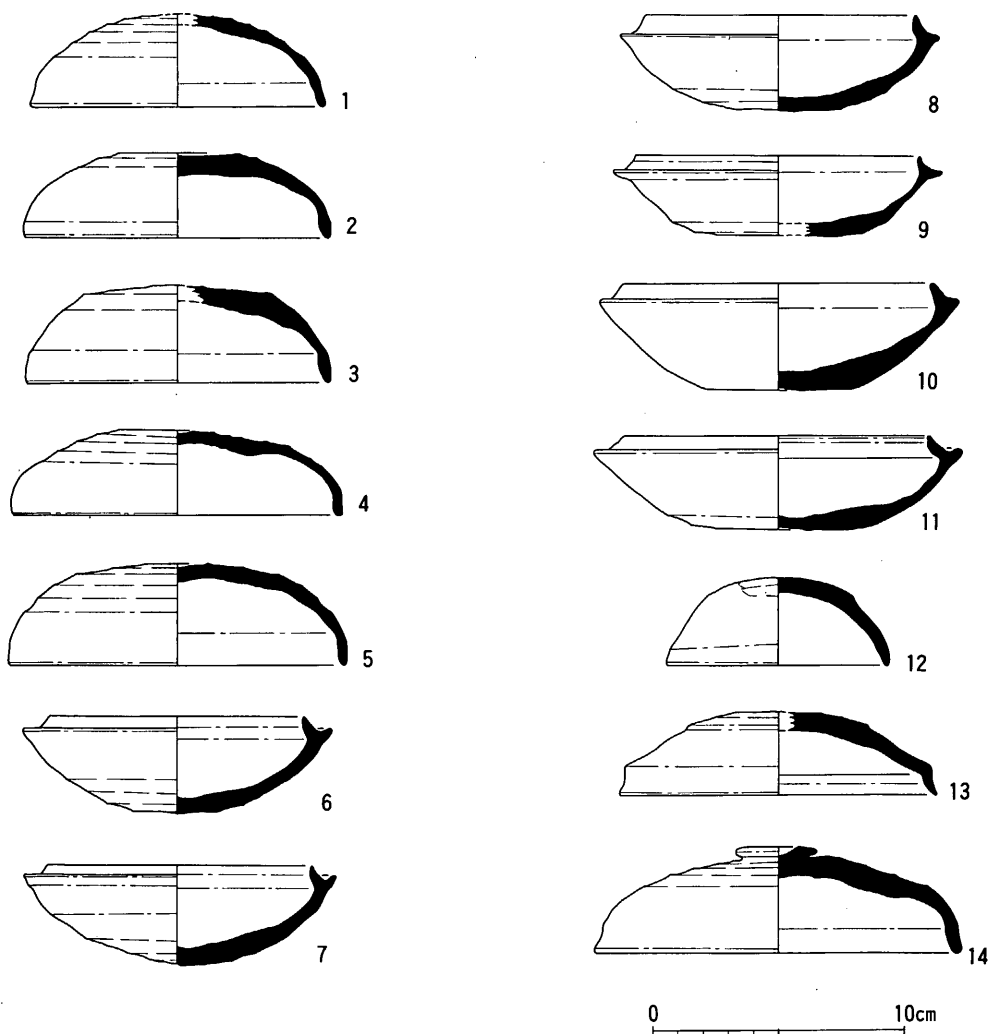
杯蓋（1～5） すべて天井部外面に回転ヘラケズリを施し、その他の部分を回転ナデとナデ



第22図 5号住居跡実測図（1/60）

で仕上げる。1は、内外面ともに灰をかぶっており、体部外面に他の須恵器が融着している。2は、天井部外面と体部外面とにヘラ記号がある。胎土中に白い石英粒が多量に含まれる。3は、外面の、天井部から体部にかけての部分にヘラ記号がある。4は、天井部外面にヘラ記号があり、体部外面に灰をかぶっている。5は、天井部外面にヘラ記号がある。

杯身（6～11） 6～9は、底部外面に回転ヘラケズリを施し、その他の部分を回転ナデとナデで仕上げる。6は底部外面にヘラ記号があり、体部外面に灰をかぶっている。7・8・9の3点は、外面のほぼ全体に灰をかぶっている。8のみ天井部外面にヘラ記号がある。10は焼成不良のため磨滅しており、外面の調整は不明である。内面には回転ナデとナデの痕跡がわずか

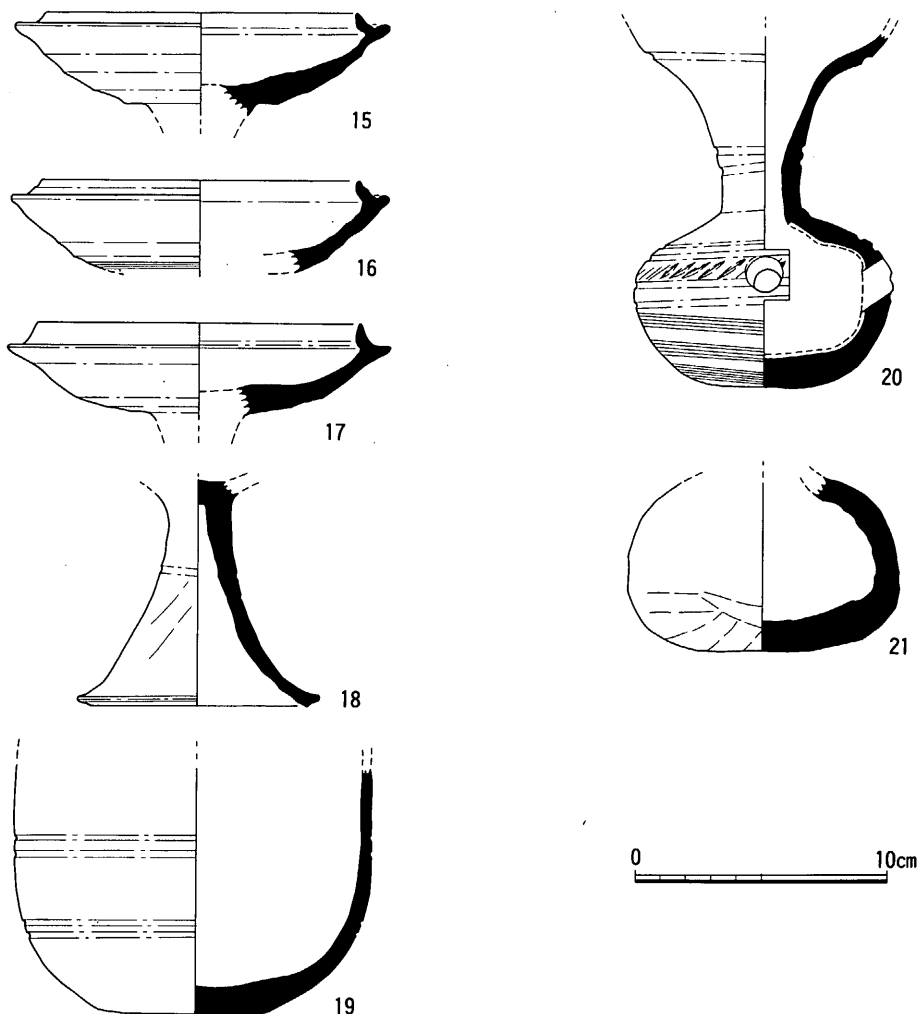


第23図 5号住居跡出土土器実測図① (1/3)

に認められる。11の底部外面は、ヘラ切り後粗いナデを施す。他の部分は回転ナデとナデで仕上
 げている。外面の底部から体部にかけてヘラ記号があり、ほぼ全面に灰をかぶっている。

蓋 (12~14) 12は天井部外面に手持ちヘラケズリを施し、他の部分を回転ナデとナデで仕上
 げる。体部外面にヘラ記号がある。13は天井部外面の回転ヘラケズリが不十分なため、粘土が
 段をなしている部分がある。他の部分には回転ナデとナデを施す。天井部と体部の境が明瞭で
 口縁部は外に引き出されるように外反する。天井部外面にヘラ記号があり、内面には重ね焼き
 の痕跡が残る。14は高杯の蓋と考えられるものである。天井部外面を回転ヘラケズリ、その他
 の部分を回転ナデとナデで仕上げる。体部外面にわずかに灰をかぶっている。

高杯 (15~18) 15~18は杯部のみ残る有蓋高杯である。16・17は杯部の底部外面に回転ヘラ



第24図 5号住居跡出土土器実測図② (1/3)

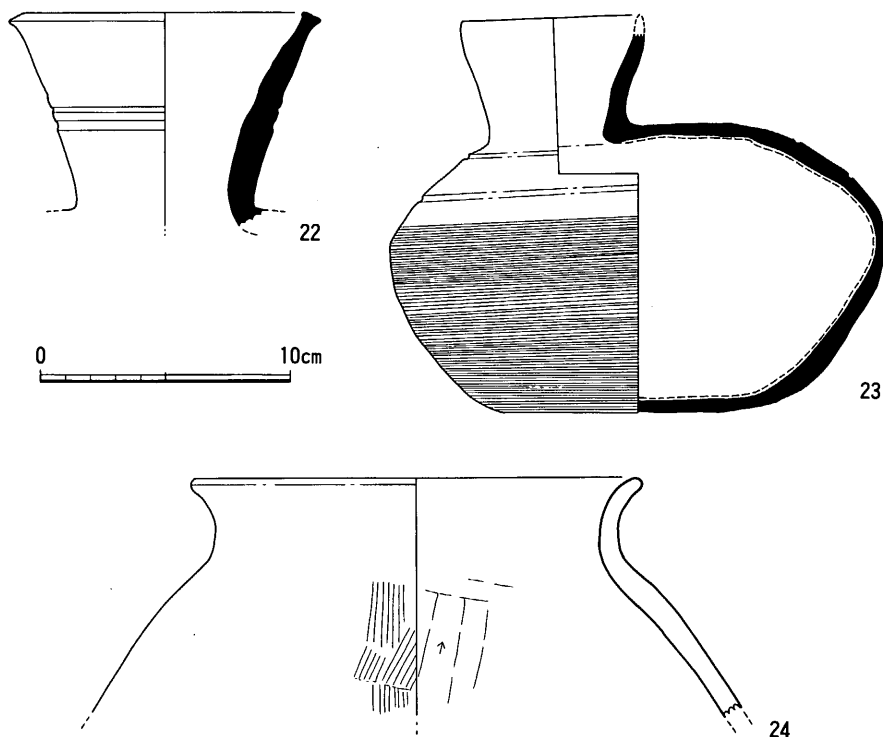
ケズリを施しており、16ではさらにカキ目を加える。17の底部外面は灰をかぶっている。18は脚部のみである。中位に沈線を持ち、全体を回転ナデで仕上げる。外面下位にヘラ記号がある。内外面ともに灰をかぶっており、一部自然釉化している。

鉢 (19) 残存高9.8cmで口縁部を欠く。体部外面の2箇所、2条ずつの沈線を持つ。焼成不良のため内外面とも磨滅が著しく、調整は不明である。

甗 (20) 残存高14.1cmで口縁部を欠く。胴部は扁球気味で、底部はほぼ平底である。胴部の中央よりやや上位に穿孔し、さらに上位に2条、円孔の中心よりも下位に2条の沈線を施し、その間に刺突文をめぐらせる。胴部下位から底部にかけてはカキ目、底部外面にはヘラ記号がある。口頸部はラッパ状に開くものと思われる。口縁部下端に1条、頸部に2条の沈線を施す。頸部にはシボリ痕が残る。

壺 (21) 残存高7.0cm、胴部最大径10.8cmを測り、頸部以上を欠く。胴部内外面に回転ナデ、底部外面に手持ちヘラケズリを施す。底部内面はナデ。胴部外面の中位より上には、粗いカキ目を回転ヘラケズリで消した痕跡が部分的に見られる。

口頸部 (22) 口頸部のみ約4分の3の破片であるが、形状から壺類のものであると考え、ここに置いた。頸部中位に2条の沈線をめぐらせ、口唇部の平坦面は外傾する。内外面ともに回



第25図 5号住居跡出土土器実測図③ (1/3)

転ナデで仕上げる。

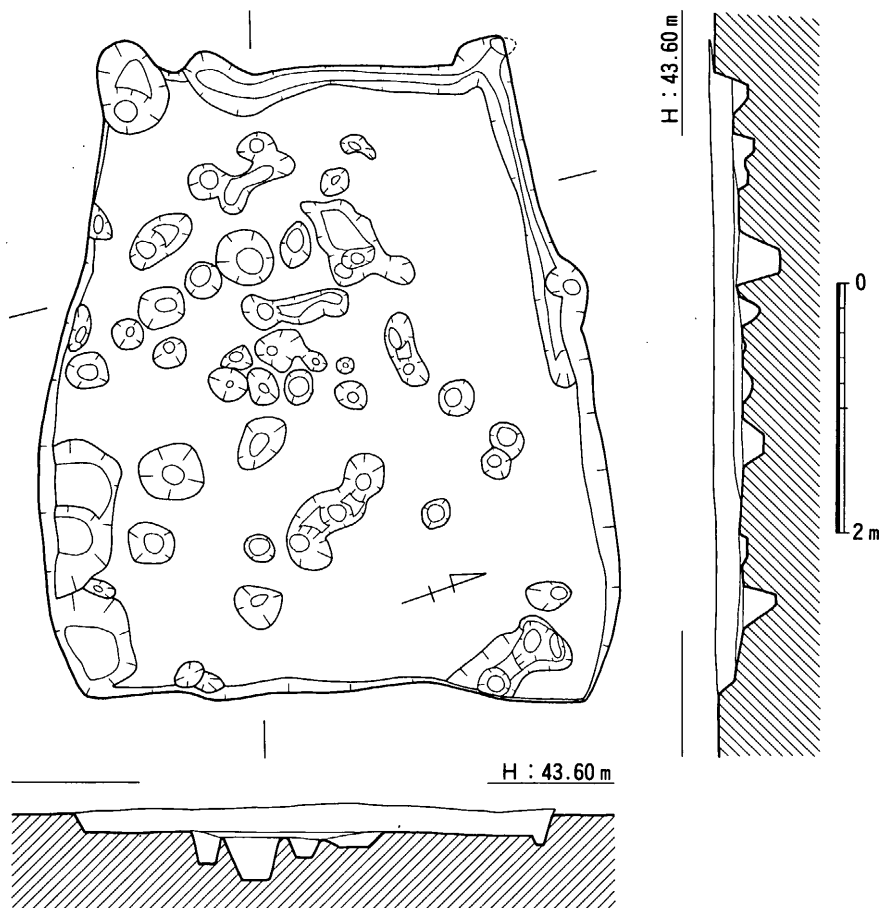
平瓶 (23) 口径7.2cm、器高15.9cmを測る。口頸部の向きは、胴部主軸よりわずかに外側に傾く。胴部中位から底部にかけてカキ目を施し、胴部上位には2条の沈線をめぐらす。口縁部から胴部中位にかけて灰をかぶっており、胴部中位の3ヶ所に、他の須恵器が融着している。

土師器 (第25図)

甕 (24) 復元口径18.0cm、残存高9.6cmを測る小破片である。短く外反する口頸部の内外面をヨコナデし、胴部外面にハケ目、胴部内面にはヘラケズリを加える。

7号住居跡 (第26図、図版14)

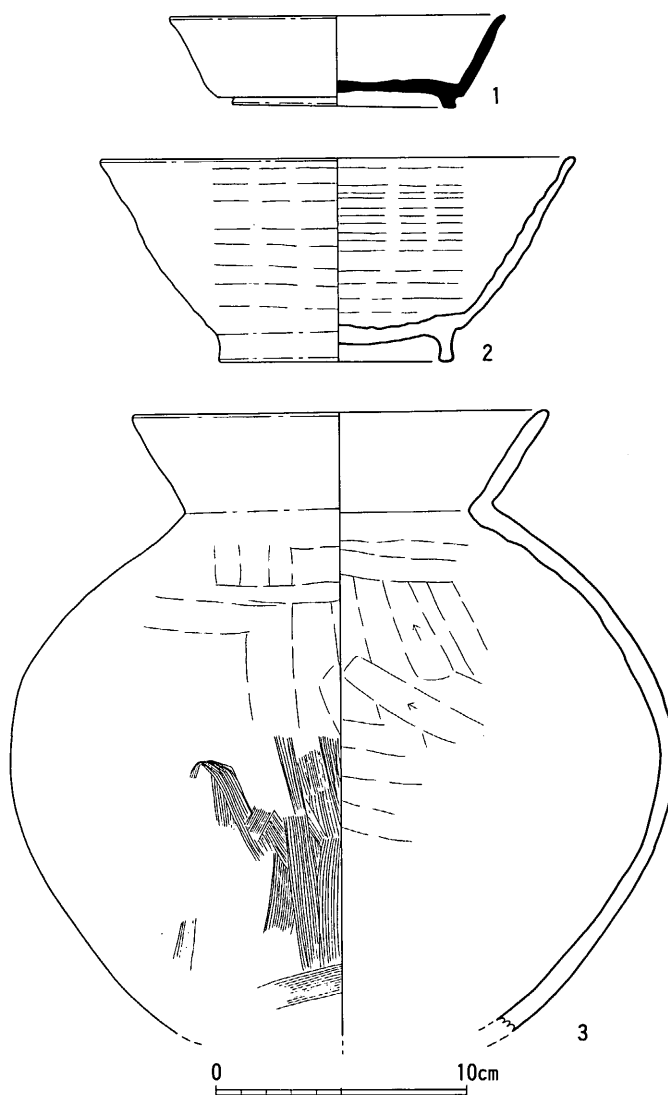
竪穴住居跡が群在する部分から離れて、古墳群の中に位置する。平面プランは、東西方向に長い台形を呈する。壁長は、北側壁が5.3m、東側壁3.9m、南側壁5.2m、西側壁3.2mで、壁高は0.14m～0.18mを測る。床面には無数と言えるほどの凹凸があり、ピットも多数確認され、



第26図 7号住居跡実測図 (1/60)

一見して居住には適さない印象を与える。多数のピットがあったにもかかわらず、柱穴を確定することはできなかった。周溝は、北側壁中央部から北西コーナーを経由し、西側壁沿いまでに設けられている。最大幅は0.37m、最大深さは0.27mである。この周溝の両端部と北西コーナー部には大量の灰や炭化物が埋まっていたが、壁や床には直接火を受けた痕跡は見られなかった。また、竈については、その痕跡すら検出できなかった。7号墳の周溝と切り合い関係にあり、新旧関係は本住居跡の方が新しい。

遺物は、埋土中および床面上より須恵器杯蓋・杯身・壺、土師器碗・高杯・甕などが出土し



第27図 7号住居跡出土土器実測図 (1/3)

た。総量は整理箱で1箱弱であるが、小破片がほとんどで図示できるものは少なかった。

出土遺物

鉄器（第83図、図版115）

鏃（5） 茎部の破片で、残存長は6.9 cmを測る。

須恵器（第27図、図版74）

杯身（1） 高台が、体部と底部の境より内側に付くものである。底部外面はヘラ切り後粗いナデを施し、他の部分を回転ナデとナデで仕上げる。高台は貼り付け後、回転ナデを施す。体部外面の一部に灰をかぶっている。

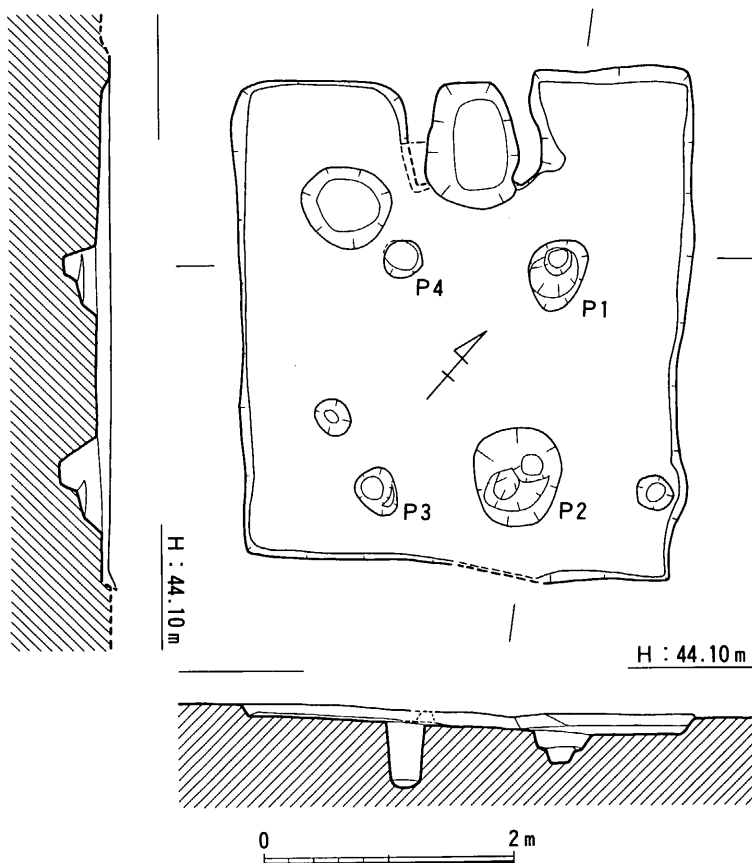
土師器（第27図）

碗（2） 体部は直接的に上外方に開き、体部と底部の境に高台を貼り付けている。底部外面を回転ヘラケズリする他は、内外面ともに丁寧なヘラミガキを施す。

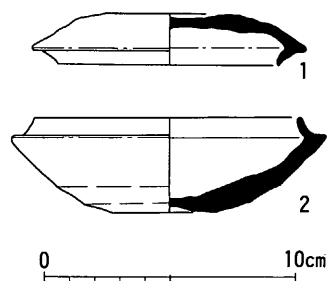
甕（3） 球形に近い胴部に、直接的に開く口頸部を持つ。口頸部の調整は、内外面ともにヨコナデ。胴部外面の上位は、粗いハケ目をナデ消すような調整を施し、中位以下は粗いハケ目に細かいハケ目を加えている。胴部内面はヘラケズリ。胴部外面の中位にはヘラ記号があり、下半部には全体的に煤が付着している。

8号住居跡（第28図、図版14）

調査区の南東部に位置する。形状はほぼ正方形を呈し、壁長は北東側壁が4.1 m、南東側壁



第28図 8号住居跡実測図（1/60）



第29図 8号住居跡出土土器実測図（1/3）

3.4m、南西側壁3.7m、北西側壁3.6mを測る。壁高は7～15cmである。床面は平坦で、4個の柱穴が確認された。柱穴の深さは0.26m～0.53mである。また、床面では柱穴の他に3個のピットが確認された。北西側壁の中央部に竈が付設されていたが、右側袖のみを検出したにとどまった。9号住居跡、10号住居跡と切り合っており、新旧関係は、いずれよりも本住居跡の方が新しい。

遺物が埋土中より須恵器杯蓋・杯身・甕・甗、土師器碗・高杯・甕などが出土した。総量は整理箱にして1箱弱であるが、ほとんどが小破片であった。

出土遺物

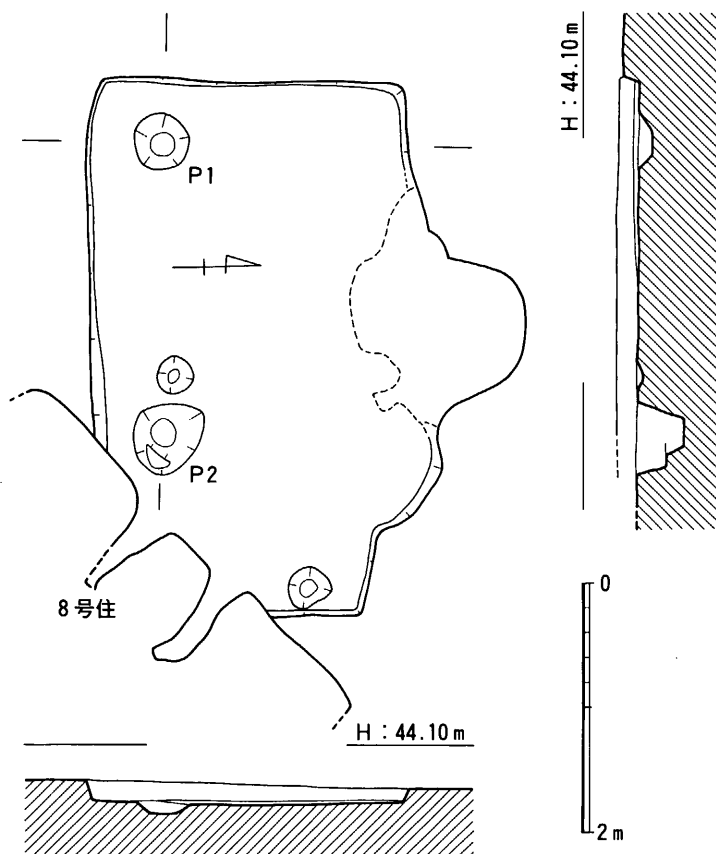
須恵器（第29図、図版74）

杯蓋（1） かえりを有し、つまみのない杯蓋である。平坦な天井部は、外面にヘラ切り後粗いナデを施す。その他の部分は回転ナデとナデで仕上げる。外面は、天井部から体部にかけて灰をかぶっている。

杯身（2） 焼成不良のため内外面とも淡橙色を呈している。底部外面はヘラ切り後粗いナデ、体部外面下位に回転ヘラケズリを施す。他の部分は回転ナデとナデで仕上げる。

9号住居跡（第30図、図版14）

調査区の南東部に位置する。南東コーナーを8号住居跡に切られているが、本来は長方形のプランを持ったものと思われる。壁長は、北側壁4.2m、西側壁2.4mである。南東コーナーを復元して考えると、東側壁が2.1m、南側壁が4.2mを測ったと考えられる。壁



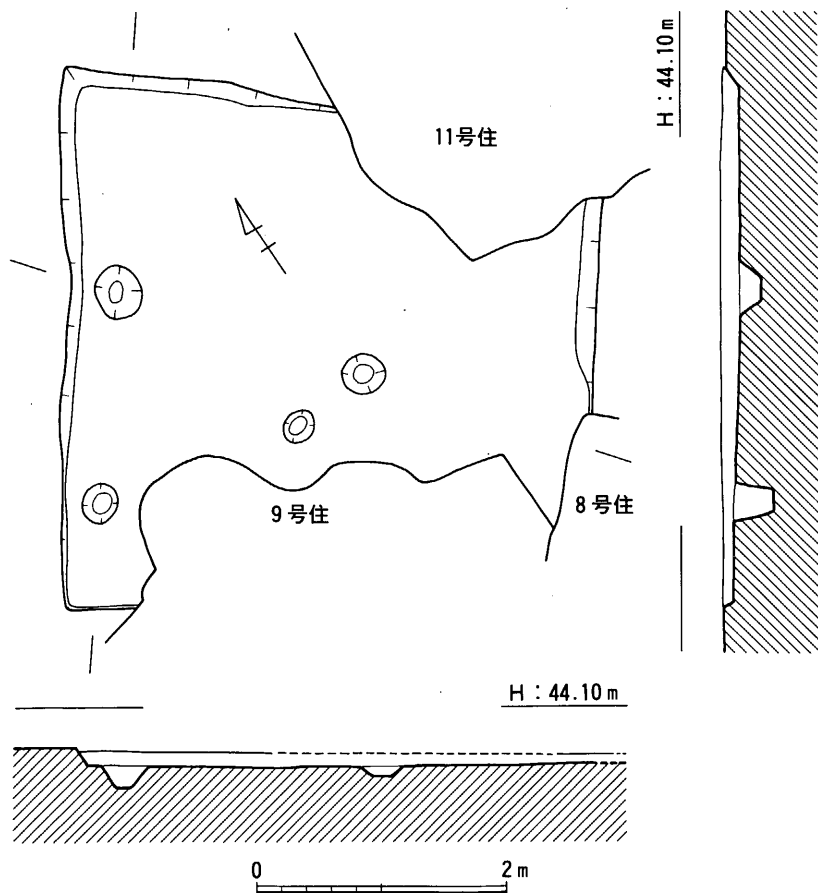
第30図 9号住居跡実測図 (1/60)

高は、0.11m～0.16mである。床面は平坦で、4個のピットが確認された。これらのうち、P1、P2としたものが柱穴であったと考えられる。それらの深さは0.12m～0.38mである。北側壁の中央やや西寄りの部分に焼土の散布が認められたため、これを精査したものの、袖等の竈の施設は検出できなかった。前述の通り、8号住居跡と切り合っている。新旧関係は、本住居跡の方が古い。

遺物は、埋土中から須恵器杯蓋・杯身・皿・甕、土師器甕、石鏃が出土したが、いずれも小破片のため図示できるものはなかった。遺物総量は、ポリ袋（45cm×30cm）で約1袋分であった。

10号住居跡（第31図、図版14）

調査区の南東部に位置する。8号住居跡、9号住居跡、11号住居跡との切り合いによる破壊が大きく、完全に検出することができたのは北西側壁のみであった。その壁長は4.33m、壁高



第31図 10号住居跡実測図（1/60）

は0.15mである。他の3辺も、残存部分から考えると、この北西側壁と大差のない規模であったと思われる。床面は平坦で、4個のピットを確認したが、柱穴を確定するには至らなかった。竈は検出されなかった。前述の通り、8号住居跡、9号住居跡、11号住居跡と切り合っているが、新旧関係としては、いずれよりも本住居跡の方が古い。

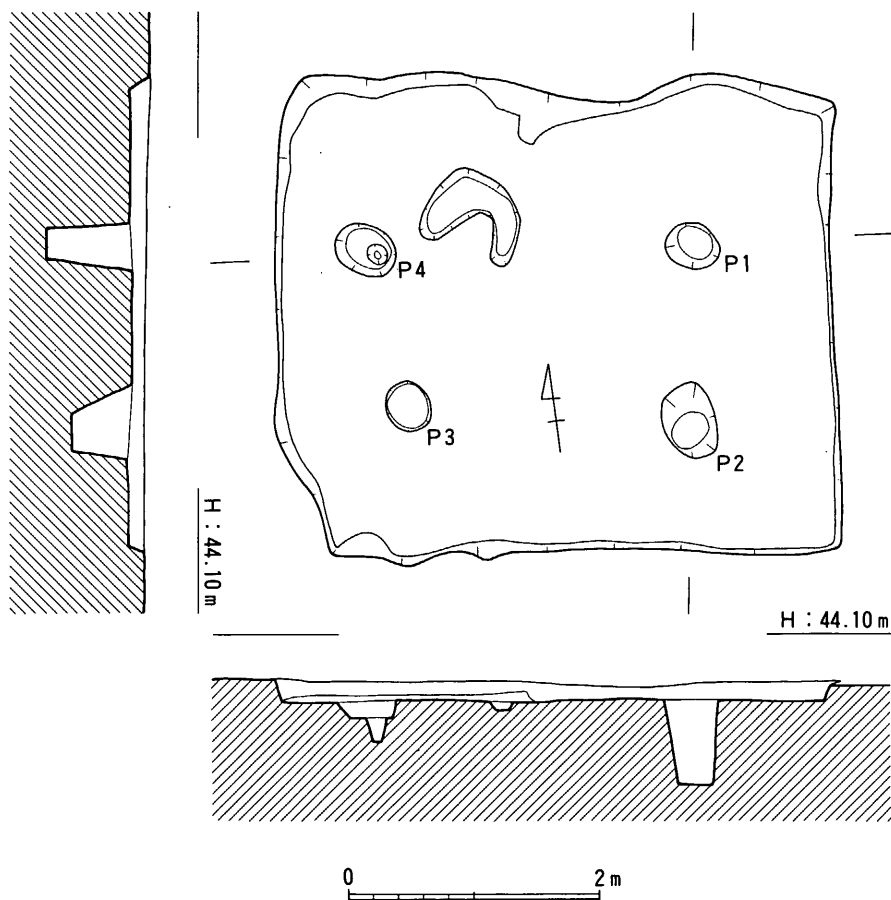
遺物は、埋土中より須恵器甕、土師器甕、縄文土器、黒曜石の剥片などが出土したが、その総量はポリ袋（38cm×26cm）1袋に過ぎず、図示できるものはなかった。

11号住居跡（第32図、図版14）

調査区の南東部に位置する。形状は、東西に長い長方形を呈し、西側壁がやや外側にふくらんでいる。壁長は、北側壁は4.25m、東側壁3.55m、南側壁4.0m、西側壁3.8mで、壁高は0.12m～0.18mを測る。床面は平坦であり、4本の柱穴が確認された。それらのうち、P4としたものは二段掘りされている。深さは0.33m～0.64mである。竈は検出されなかった。10号住居跡と切り合っており、新旧関係は、本住居跡の方が新しい。

遺物は、埋土中より須恵器杯蓋・杯身・高杯・鉢・甕、土師器甕などが出土した。その総量は、整理箱すほどである。

出土遺物



第32図 11号住居跡実測図（1/60）

須恵器（第33図）

杯蓋（1） 復元口径で11.75cmを測る。中央部を欠くが、天井部外面には回転ヘラケズリを施していたものと思われる。他の部分には回転ナデを施す。

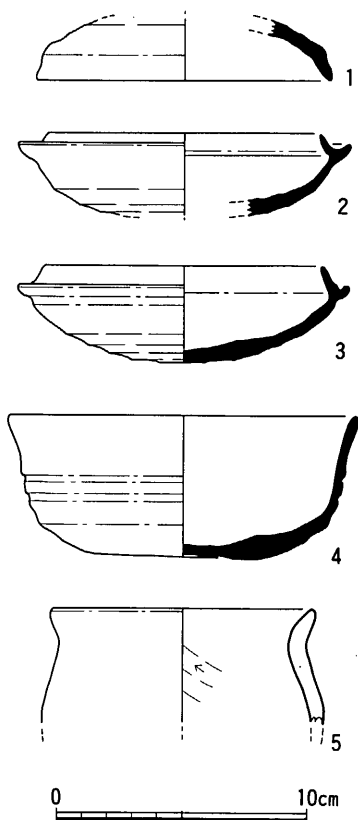
杯身（2・3） 2は、やはり中央部を欠くが、底部外面を回転ヘラケズリするものと思われる。他の部分は回転ナデ。外面に灰をかぶっている。3は、底部外面に回転ヘラケズリを施し、その他の部分を回転ナデとナデで仕上げる。やや焼成不良で、底部外面にヘラ記号がある。

鉢（4） 体部に2条の沈線を有する。底部外面には、ヘラ切り後ヘラ状の工具でナデた様な痕跡が見られる。他の部分は、回転ナデとナデで仕上げる。体部内面のみに灰をかぶっている。

土師器（第33図）

壺（5） 復元口径10.6cmの小型の甕である。外面は磨滅のため調整不明である。内面は、口頸部にヨコナデ、胴部にはヘラケズリを施す。

12号住居跡（第34図、図版15）



第33図 11号住居跡出土土器実測
図（1/3）

調査区中央部からやや南東寄りに位置する。形状は、北東側壁の一部が13号住居跡と切り合っているため検出できなかったが、本来ややゆがんだ長方形を呈したものと考えられる。また、南西側壁の中央部が外側にふくらんでいる。壁長は、南東側壁3.8m、南西側壁5.4m、北西側壁4.0mを測り、北東側壁は推定復元で5.1mと考えられる。壁高は、8cm～22cmを測る。床面は平坦で、やや不揃いながらも4本の柱穴が確認された。深さは0.35m～0.4mである。竈は検出されなかった。13号住居跡と切り合っているが、掘り下げの段階では両者の新旧関係を明らかにすることができなかった。

遺物は、埋土中より須恵器杯蓋・杯身・高杯・鉢・壺・甕・土師器甕などが出土した。その総量は、整理箱で1箱ほどである。ただし、その中には13号住居跡との切り合い部から出土したものがあるため、図示したものは明らかに本住居跡に伴うものに限った。

出土遺物

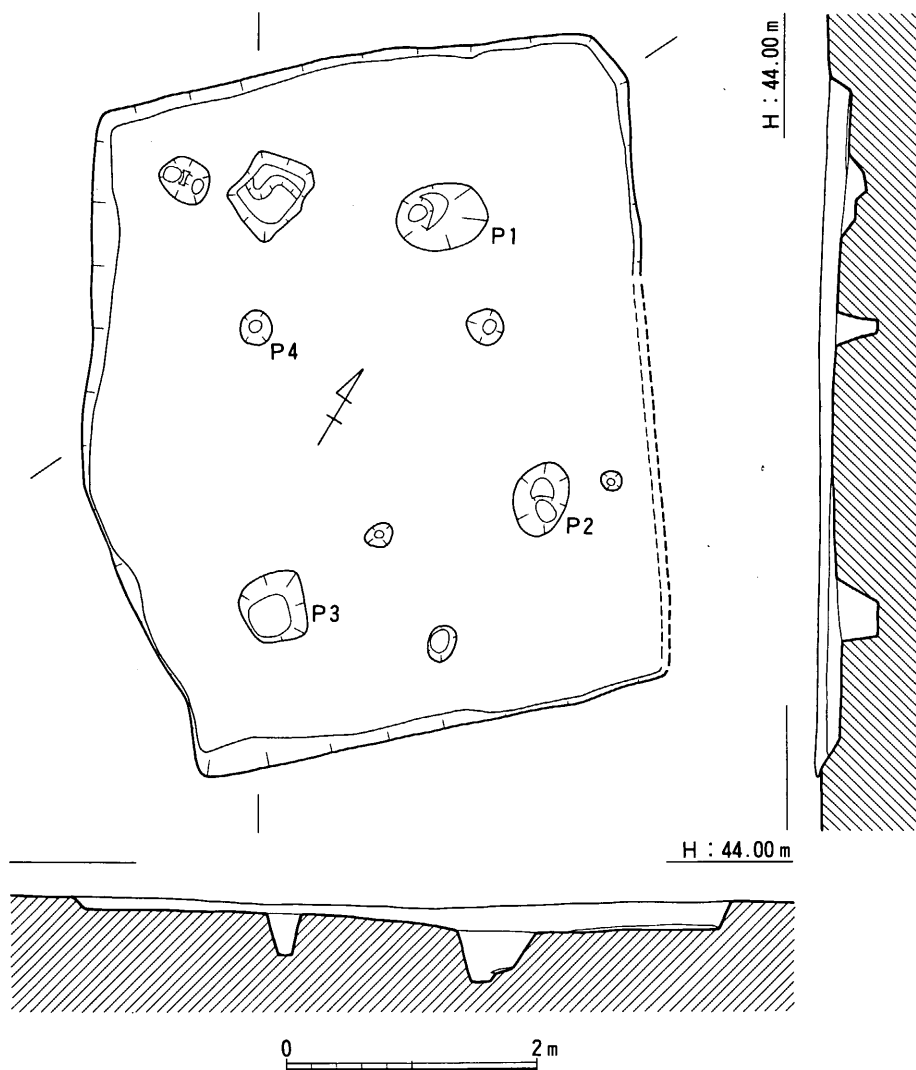
須恵器（第35図、図版75）

杯蓋（1） 中央部を欠くが、天井部外面には回転ヘラケズリを施したものと考えられる。その他の部分を回転ナデとナデで仕上げる。

杯身（2～4） 2は口径が10.6cm。底部外面に回転ヘラケズリを施し、その他の部分を回転ナデとナデで仕上げる。3・4の口径はそれぞれ11.8cmと11.9cmである。3は、底部外面に杯蓋と思われる須恵器が融着している。調整は2と同様である。外面は全面に灰をかぶっている。4の底部外面はヘラ切り後粗いナデを施す。体部の下半部を回転ヘラケズリし、他の部分を回転ナデとナデで仕上げる。

高杯（5） 脚部のみ残る。内外面ともに回転ナデを施し、1条の浅い沈線を有する。

鉢（6） 内湾する体部を有する。底部から体部中位にかけての外面には回転ヘラケズリを施



第34図 12号住居跡実測図（1/60）

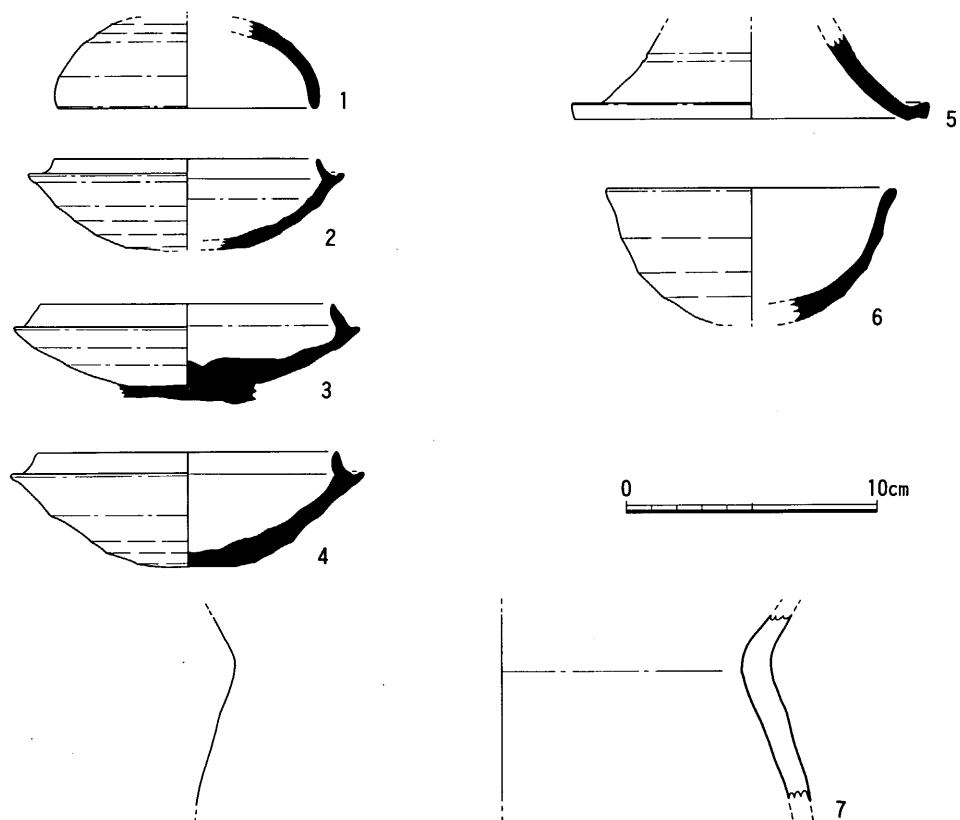
す。他の部分を回転ナデとナデで仕上げる。

土師器 (第35図)

甕 (7) 口縁部をわずかに欠く。調整は、頸部内外面がヨコナデ、胴部外面がハケ目、胴部内面はヘラケズリである。

13号住居跡 (第36図、図版15)

調査区の中央部からやや南東寄りに位置する。南西コーナー部が、12号住居跡との切り合いのため検出できなかったが、本来はほぼ正方形に近い形状を呈したものと考えられる。壁長は、北側壁4.8m、東側壁4.9mを測る。南側壁と西側壁は、推定復元でそれぞれ4.7mと4.8mと考えられる。壁高は、0.12m～0.25mである。床面は平坦で、4本の柱穴が確認された。深さは0.37m～0.59mである。4本の柱穴のうち、P3およびP4としたものは、不整形なプランを有する。また、床面では柱穴の他に4個のピットが検出された。竈は、南側壁のほぼ中央部と思われる場所で検出され、これを精査したところ、右袖部のみ残存していることがわかった。12号住居跡と切り合っているが、掘り下げの段階では両者の新旧関係を明らかにすることができ



第35図 12号住居跡出土土器実測図 (1/3)

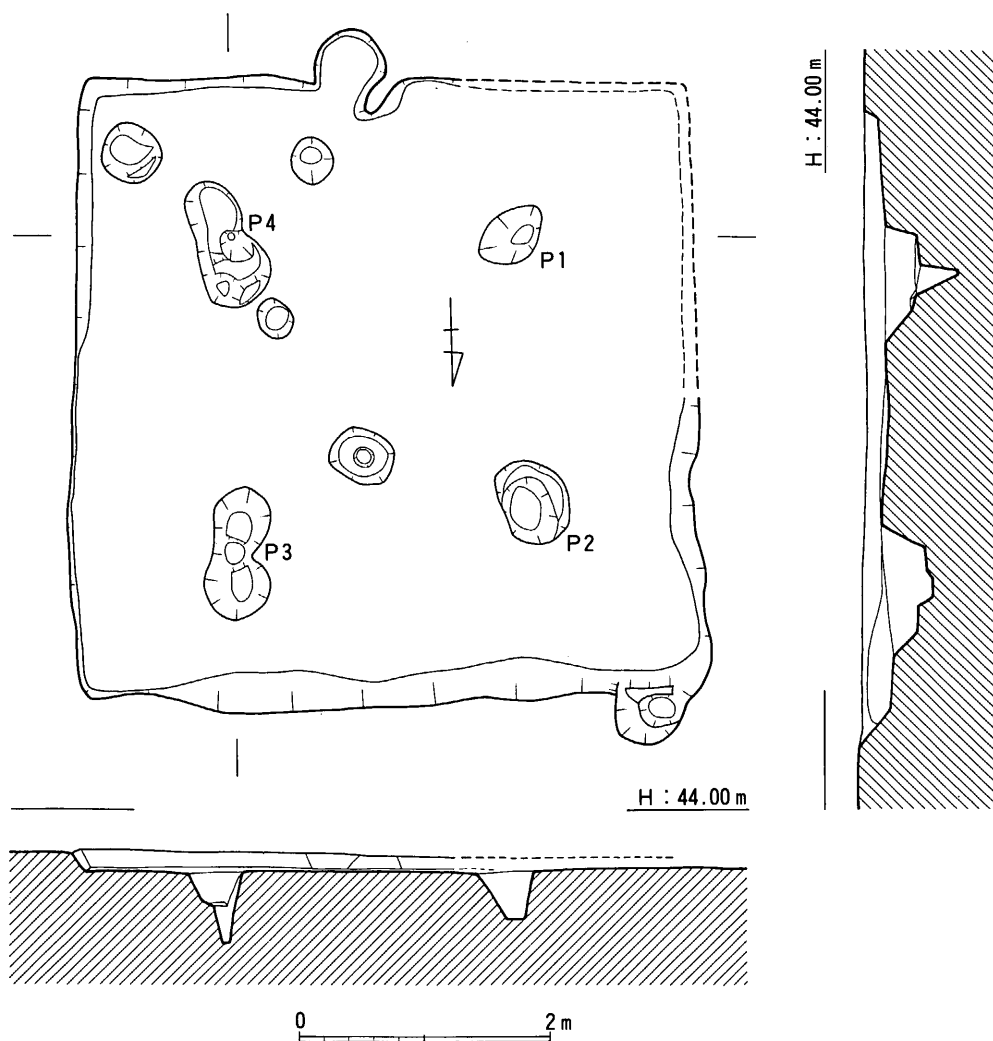
なかった。

遺物は、埋土中および床面より須恵器杯蓋・杯身・高杯・鉢・壺・甕、土師器甕、瓦、黒曜石とサヌカイトの剥片、緑泥片岩製の石器の未製品などが出土した。その総量は、整理箱で1箱ほどである。なお、図示した遺物は、12号住居跡の場合と同様に、明らかに本住居跡に伴うものに限った。

出土遺跡

鉄器（第83図、図版115）

刀子（6） 刃部から茎部にかけての破片である。関は、やや不明瞭であるが、背側と刃側の

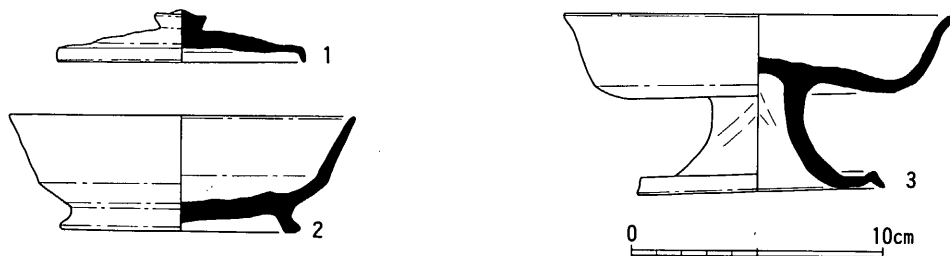


第36図 13号住居跡実測図 (1/60)

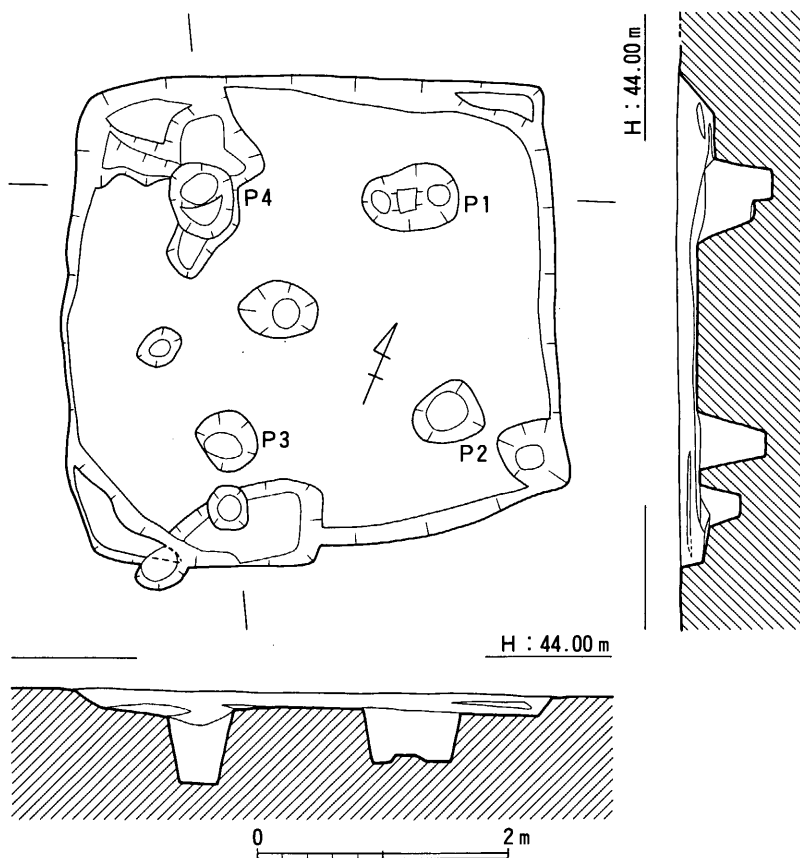
両側に付くと考えられる。残存長8.7cmを測る。

須恵器（第37図、図版75）

杯蓋（1） 口径9.8cm、器高2.1cmを測り、つまみを有する。天井部外面をヘラ切り後、丁寧な回転ナデを施す。その他の部分は回転ナデとナデで仕上げる。つまみは貼り付けである。内面には明瞭な重ね焼きの痕跡が見られる。



第37図 13号住居跡出土土器実測図（1/3）



第38図 14号住居跡実測図（1/60）

杯身（２） 高台が外に踏ん張り、体部に屈折点を持つ、底部外面に回転ヘラケズリを施し、他の部分に回転ナデとナデを施す。底部外面にヘラ記号がある。

高杯（３） 短脚の無蓋高杯である。杯部の底部外面は、ヘラ切り後粗くナデる。他の部分は回転ナデとナデで仕上げる。杯部内面を除いて全面に灰をかぶっている。

14号住居跡（第38図、図版16）

調査区の中央からやや北東寄りに位置する。西側壁が、他の壁と比べてやや長い、ほぼ正方形を呈する。壁長は、北側壁3.6m、東側壁3.2m、南側壁3.8m、西側壁3.6mである。壁高は、0.15m～0.3mを測る。北西、北東、南西の各コーナーにはテラスがあり、南東コーナー部ではピットが検出された。床面は平坦で、4本の柱穴が確認された。深さは0.13m～0.59mである。4本の柱穴の他に、前述の南東コーナーにあるものも含めて、3個のピットが床面で確認された。また、北西と南西のコーナー付近では、深さ10cm弱のくぼみが検出された。竈は検出されなかった。南西コーナー付近で小ピットと切り合い関係にあり、新旧関係は本住居の方が古い。

遺物は、埋土中および床面から須恵器杯蓋、杯身・鉢・甕・脚、土師器鉢・甕・皿などが出土した。その総量は整理箱1箱ほどであるが、図示できるものは少なかった。

出土遺物

須恵器（第39図）

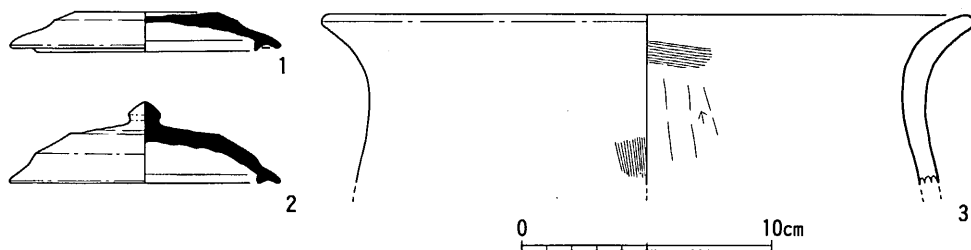
杯蓋（１・２） とともに口径が11cm弱の杯蓋であるが、２にはつまみが付く。調整は、１は天井部外面をヘラ切り後粗くナデ、体部との境に回転ヘラケズリを施し、他を回転ナデ、ナデで仕上げる。２は天井部外面を回転ヘラケズリし、他に回転ナデとナデを施す。１の外面は灰をかぶっており、２の天井部外面にはヘラ記号がある。

土師器（第39図）

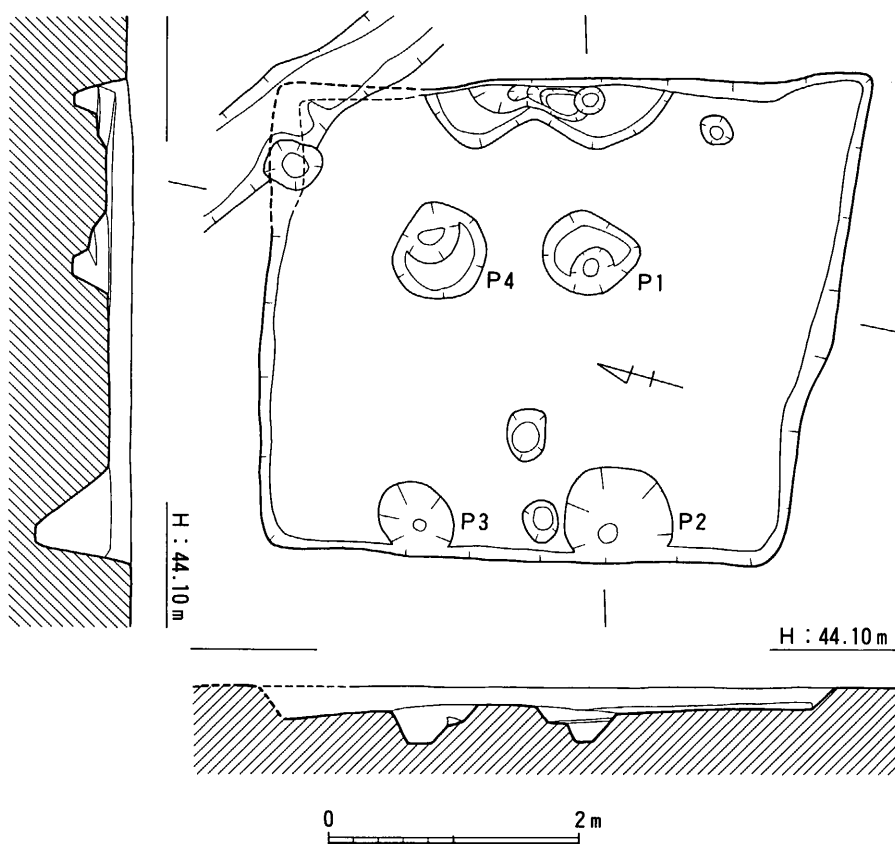
甕（３） きわめて焼成の良好な土師器であり、調整は、口縁部と頸部外面はヨコナデ、頸部内面と胴部外面がハケ目、胴部内面がヘラケズリである。

15号住居跡（第40図、図版16）

調査区のはほぼ中央に位置する。北東コーナーを溝によって切られているが、本来はややゆが

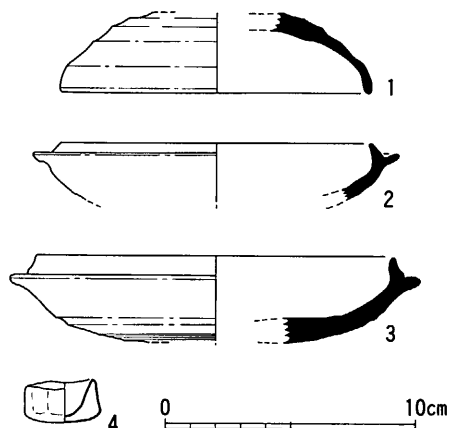


第39図 14号住居跡出土土器実測図（1/3）



第40図 15号住居跡実測図 (1/60)

んだ長方形を呈したものと考えられる。壁長は、南側壁と西側壁がともに4.0mを測り、北側壁と東側壁は、推定復元でそれぞれ3.6mと4.7mであったと考えられる。壁高は、0.18m～0.25mである。床面は平坦であるが、北へ向かって傾斜している状況が観察された。床面では4本の柱穴が確認された。深さは0.3m～0.58mである。4本の柱穴の他に、3個のピットが床面で確認された。東側壁のほぼ中央部と思われる部分で竈の痕跡が検出されたため、これを精査したが、袖等の施設は確認できなかった。北東コーナー部で溝と切り合い関係にあり、新旧関係は最初にも述べた通り、本住居跡の方が古い。



第41図 15号住居跡出土土器実測図 (1/3)

遺物は、埋土中から須恵器杯蓋・杯身・高杯・甕、土師器杯・高杯・鉢・甕・手捏ね土器、黒曜石の剝片などが出土した。総量は整理箱の半ほどであった。

出土遺物

鉄器（第83図、図版115）

刀子（7） 刃部から茎部にかけての破片である。関はやや不明瞭であるが、背側と刃側の両側に付くと考えられる。残存長は5.5cmを測る。

須恵器（第41図、図版75）

杯蓋（1） 復元口径12.3cmを測る。天井部外面に回転ヘラケズリを施し、他を回転ナデで仕上げる。外面に灰をかぶっている。

杯身（2） 復元口径12.4cmを測る小破片である。天井部外面には回転ヘラケズリを施すものと思われる。他の部分は回転ナデを施す。

高杯（3） 有蓋高杯の杯部のみの残存と思われる。底部外面をカキ目調整し、他の部分には回転ナデとナデを施す。

土師器（第41図、図版75）

手捏ね土器（4） 口径2.6cm、器高1.65cmを測る。ほぼ完形に近いものである。焼成は良好である。

16号住居跡（第42図、図版17）

調査区のほぼ中央に位置する。南西コーナーを溝によって切られているが、本来の形はやや東西に長い長方形であったと考えられる。壁長は、北側壁が5.3m、東側壁が4.8mを測り、南側壁と西側壁は残存長がそれぞれ2.6m、3.0mである。壁高は、0.12m～0.25mである。床面は平坦であり、北西と南東のコーナー部でテラスが確認された。床面には4本の柱穴が確認され、その深さは0.52m～0.55mを測った。北側壁のほぼ中央部で焼土の散布が検出されたため、この部分を精査したが、袖等の竈の施設を確認することはできなかった。前述の通り、南西コーナー部を溝03に切られている他に、東側壁から南側壁にかけても溝に切られている。但し、この部分の溝は浅かったため、住居跡の床面は検出することができた。

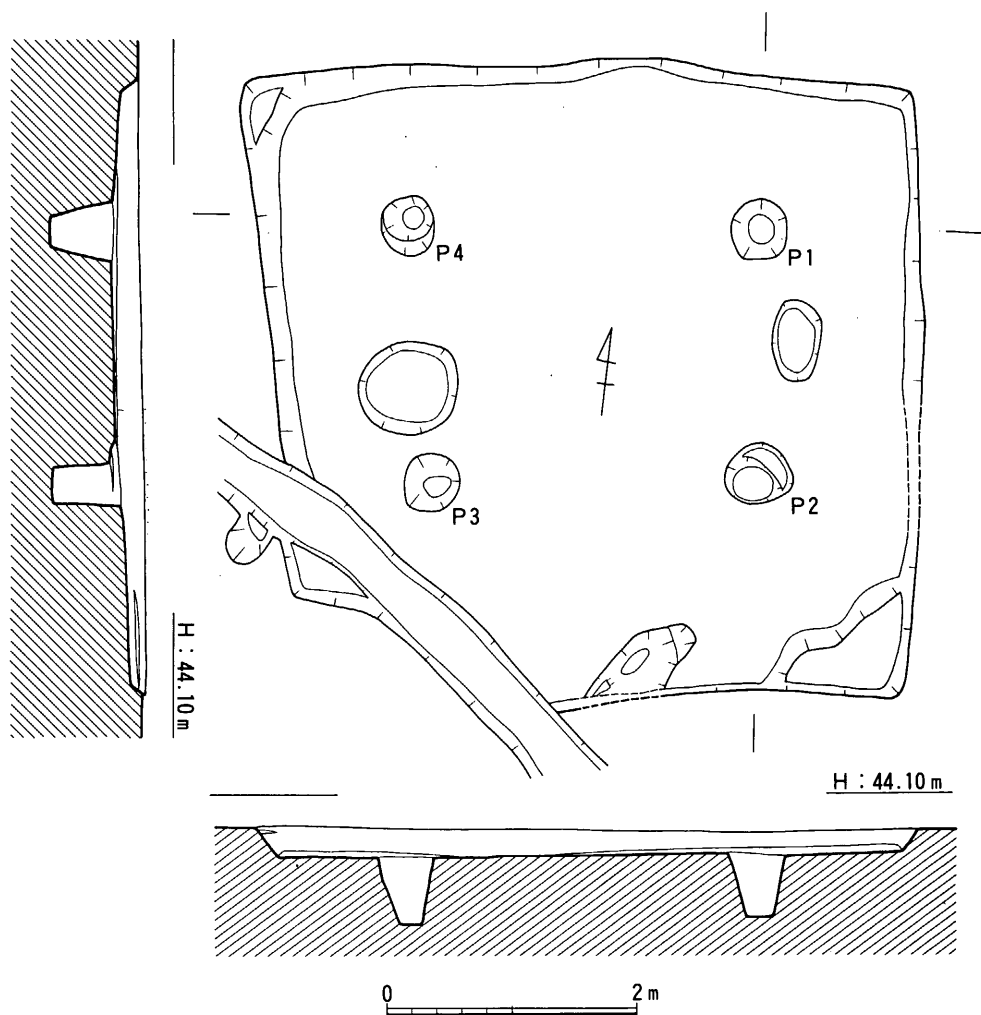
遺物は、埋土中および床面上から須恵器杯蓋・杯身・高杯・皿・鉢・平瓶・壺・甕、土師器甕・甕、砥石、白玉、石鏃、黒曜石の剝片などが出土した。その総量は整理箱4箱ほどで、今回報告する竪穴住居跡の中では最も多量である。

出土遺物

装身具（第43図、図版110）

白玉（1） 滑石製で、直径1cm、孔径2mm～3mmを測る。厚さは3mm～5mmと一定していない。穿孔方向は、実測図上で上から下である。一部を欠損している。

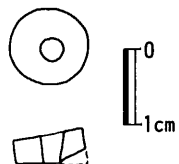
須恵器（第44～46図、図版75・76）



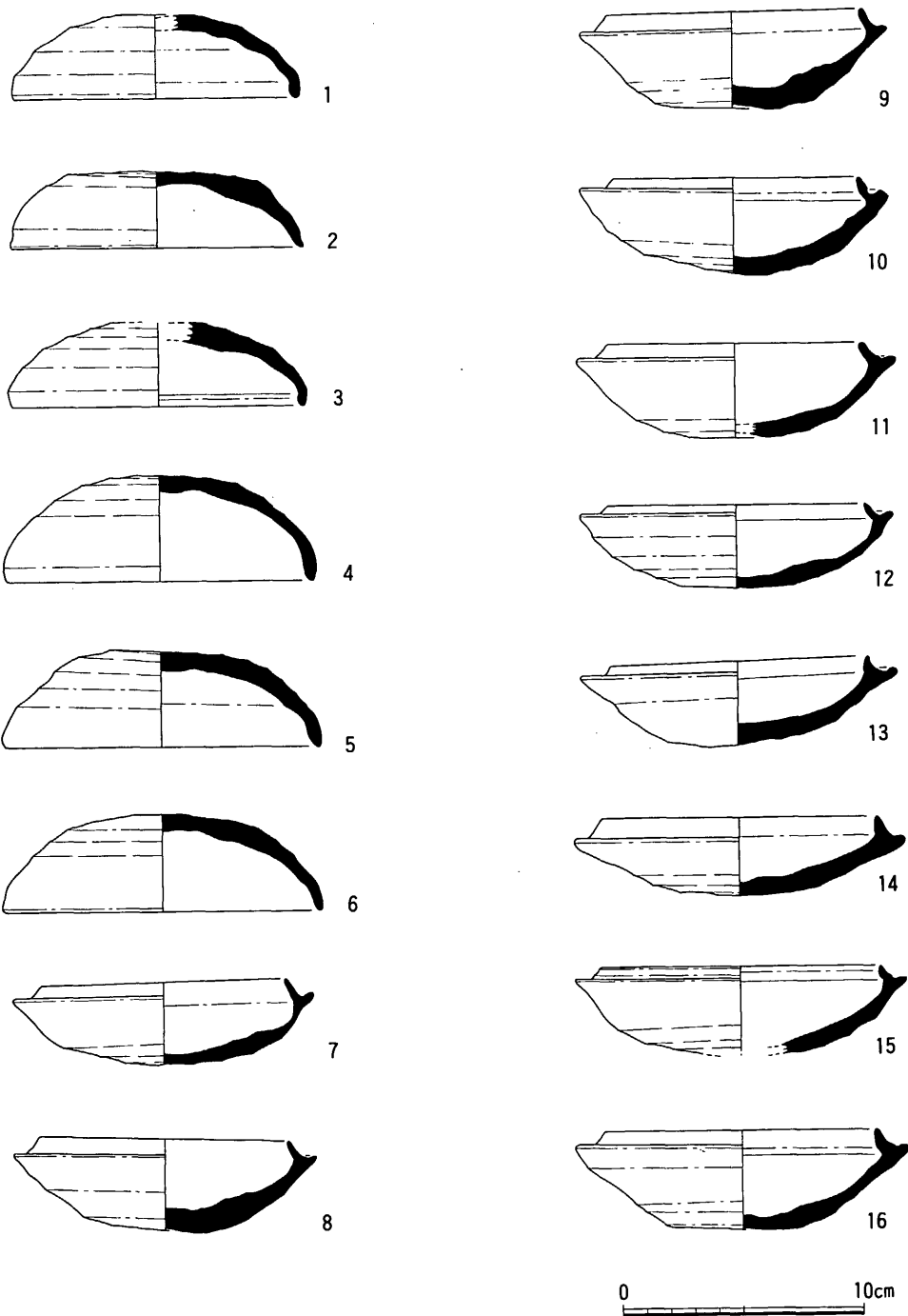
第42図 16号住居跡実測図 (1/60)

杯蓋 (1～6) 口径は12.0cm～13.4cmを測る。6については磨滅のため不明であるが、他は天井部外面に回転ヘラケズリを施し、ヘラ記号を有する。他の部分を回転ナデとナデで仕上げることは、1～6すべてに共通している。2のみ内面に灰をかぶっている。

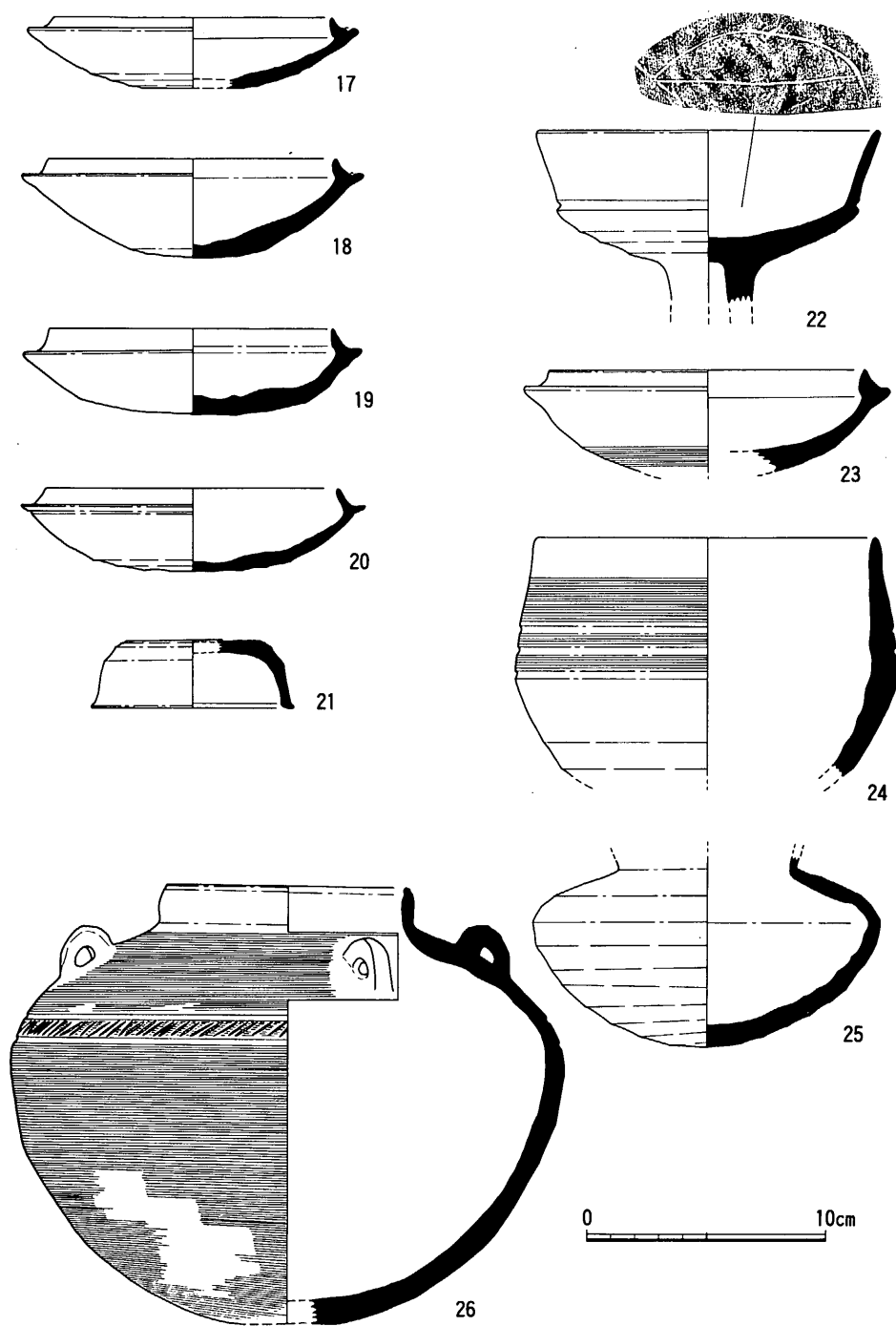
杯身 (7～20) 7～13は口径11cm以下、13～20は口径が11cmをこえる。焼成不良で器表が磨滅しているもの (18)、器表に自然釉がかぶり観察が不可能なもの (8・9・19) があるが、これら以外では、16を除いて天井部外面に回転ヘラケズリを施す。16の天井部外面は、ヘラ切り後粗くナデている。その他の部分を回転ナデとナデで仕上げるのは共通している。7・10・11・13・20は外面の一部に、16が受部の



第43図 16号住居跡出土装身具実測図 (1/1)



第44図 16号住居跡出土土器実測図① (1/3)



第45図 16号住居跡出土土器実測図② (1/3)

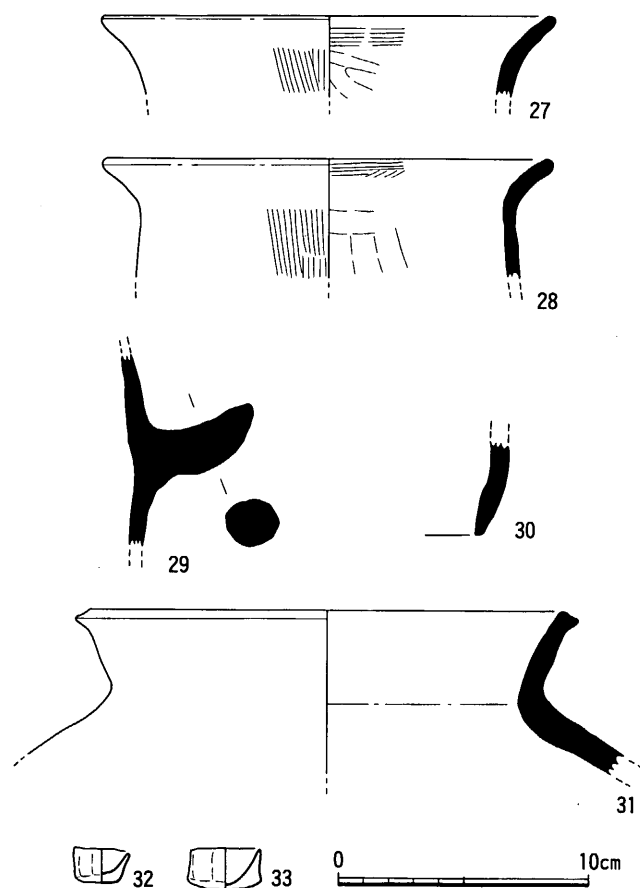
内面に灰をかぶっている。14と15はやや焼成不良である。

蓋 (21) 壺類の蓋と思われる。天井部外面に回転ヘラケズリを施し、他の部分を回転ナデとナデで仕上げる。口唇部を平坦に作っている。

高杯 (22・23) 22は無蓋、23は有蓋の高杯で、ともに脚部を欠く。22は底部外面を回転ヘラケズリし、他は回転ナデとナデを施す。底部と体部の境に1条の沈線がめぐり、ヘラ記号が底部内面に付けられている。やや焼成不良で淡茶灰色を呈する。23は、底部外面をカキ目調整し、他を回転ナデとナデで仕上げる。外面は全面に灰をかぶっている。受部には、重ね焼きした蓋の痕跡が残っている。

鉢 (24) 焼成不良で、底部を欠いている。体部外面中位に3条の沈線をめぐらせ、その部分から口縁部の下までカキ目調整を施す。体部外面下位は回転ヘラケズリと回転ナデを行う。口縁部から体部内面中位にかけては回転ナデ、体部内面下位は横方向のヘラケズリを施す。

壺 (25、26) 25は口頸部を欠いている。胴部は扁球形で肩が張り、丸底である。胴部上位に



は、内外面ともに回転ナデを施す。胴部外面の中位から下位にかけては回転ヘラケズリで調整する。胴部内面の中位から下位にかけては、調整の観察ができないくらいに灰をかぶっている。26は耳付きの短頸壺である。1ヶ所欠けているが、おそらく三耳壺であったと思われる。口頸部内外面を回転ナデし、胴部外面頸部から肩までの部分にはカキ目を施す。その後に耳を貼り付け、接合部をナデる。肩部に2条の沈線を施し、その間を刺突文で充填する。胴部外面中位から下位は格子目叩きの上にカキ目を加えるが、部分的にカキ目が飛んでいるところがある。胴部内面上半部は回転ナデ、下半部には同心円状当て具痕が残っている。口径10.2cm、器高

第46図 16号住居跡出土土器実測図③ (1/3)

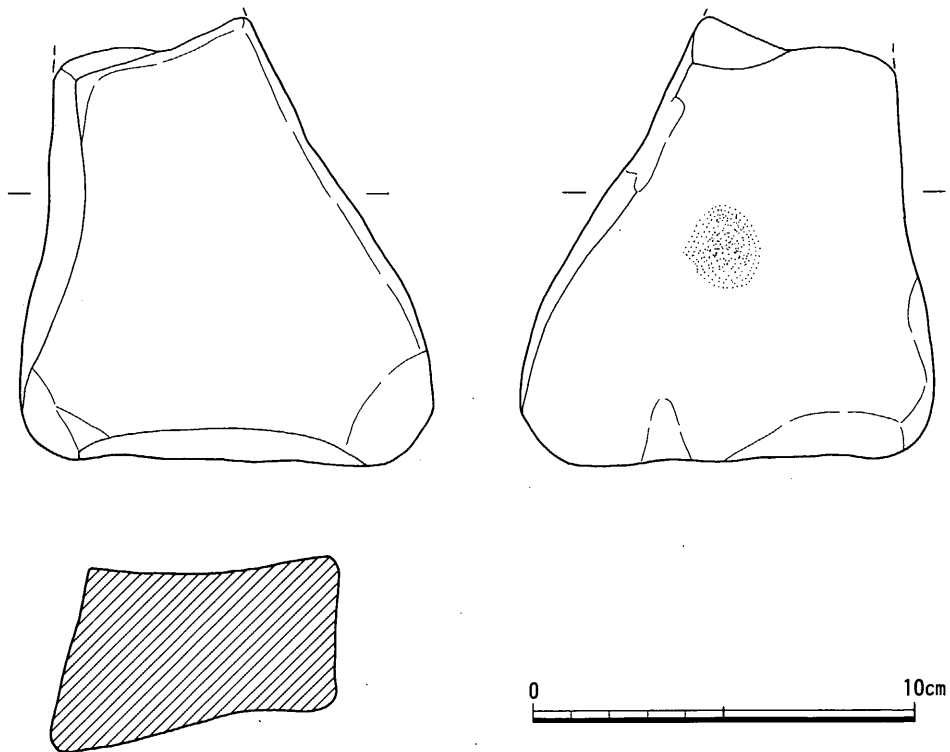
18.4cm、胴部最大径23.1cmを測る。

甗? (27~30) 小型の甗の、同一個体の破片であると思われるものであるが、接合しないため別々に載せた。(焼成良好な須恵器であるが、調整技法がいずれも土師器風である。) 27、28は口縁部付近の破片である。27では口縁部外面をヨコナデし、内面をハケ目調整する。体部外面はハケ目、内面は横または斜め方向のヘラケズリである。28は体部がやや多く残る。口縁部外面は縦方向のハケ目の上にヨコナデを加え、内面は横または斜め方向のハケ目である。体部外面はハケ目、内面にはヘラケズリを施す。29は把手部分の破片である。外面は、把手を貼り付けた後ハケ目で調整し、内面には縦方向のヘラケズリを施す。30は底部である。外面はハケ目、内面はヘラケズリ、端部はヨコナデする。

甗 (31) 口縁部から肩部にかけての破片である。口頸部内外面を回転ナデし、胴部外面には格子目叩き、内面には同心円状当て具痕が残る。

土師器 (第46図、図版76)

手捏ね土器 (32、33) 32は口径2.2cm、器高1.5cm、33は口径2.8cm、器高1.7cmを測る。いずれも焼成良好で、ほぼ完形である。



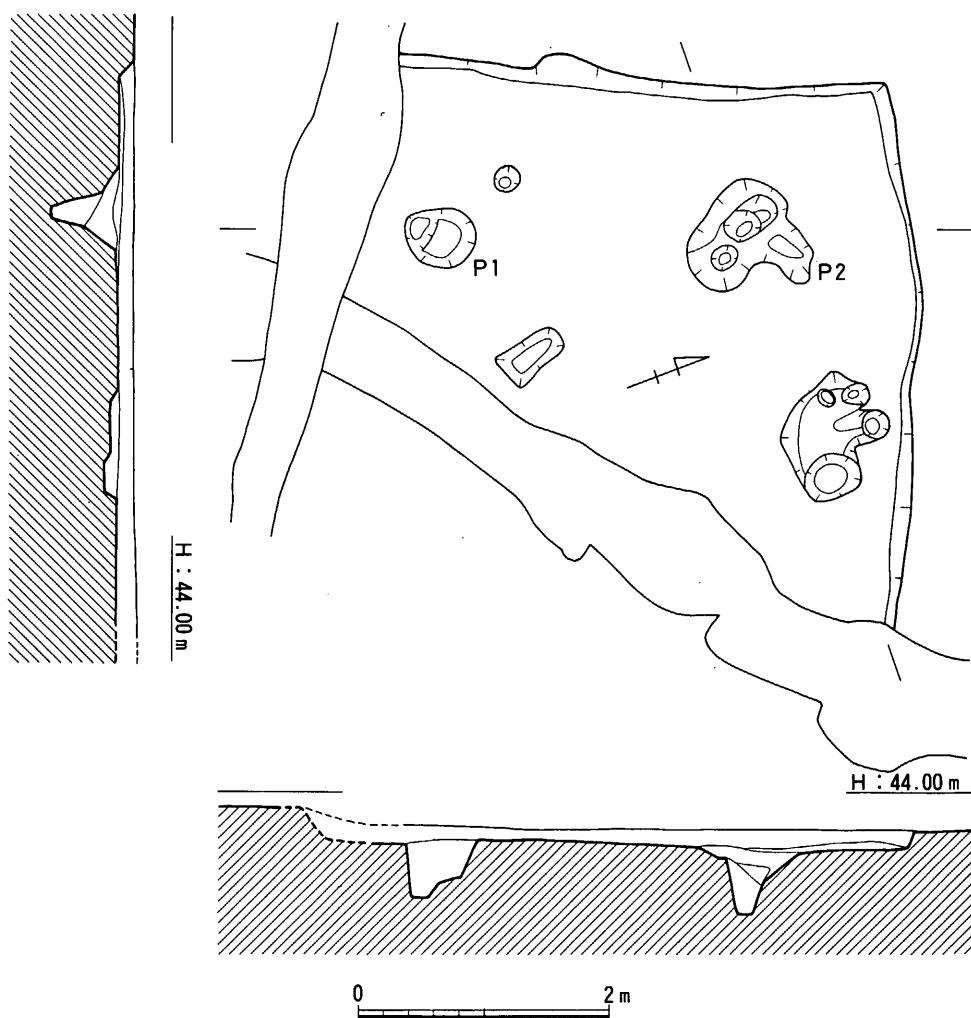
第47図 16号住居跡出土石製品実測図 (1/2)

石製品（第47図、図版113）

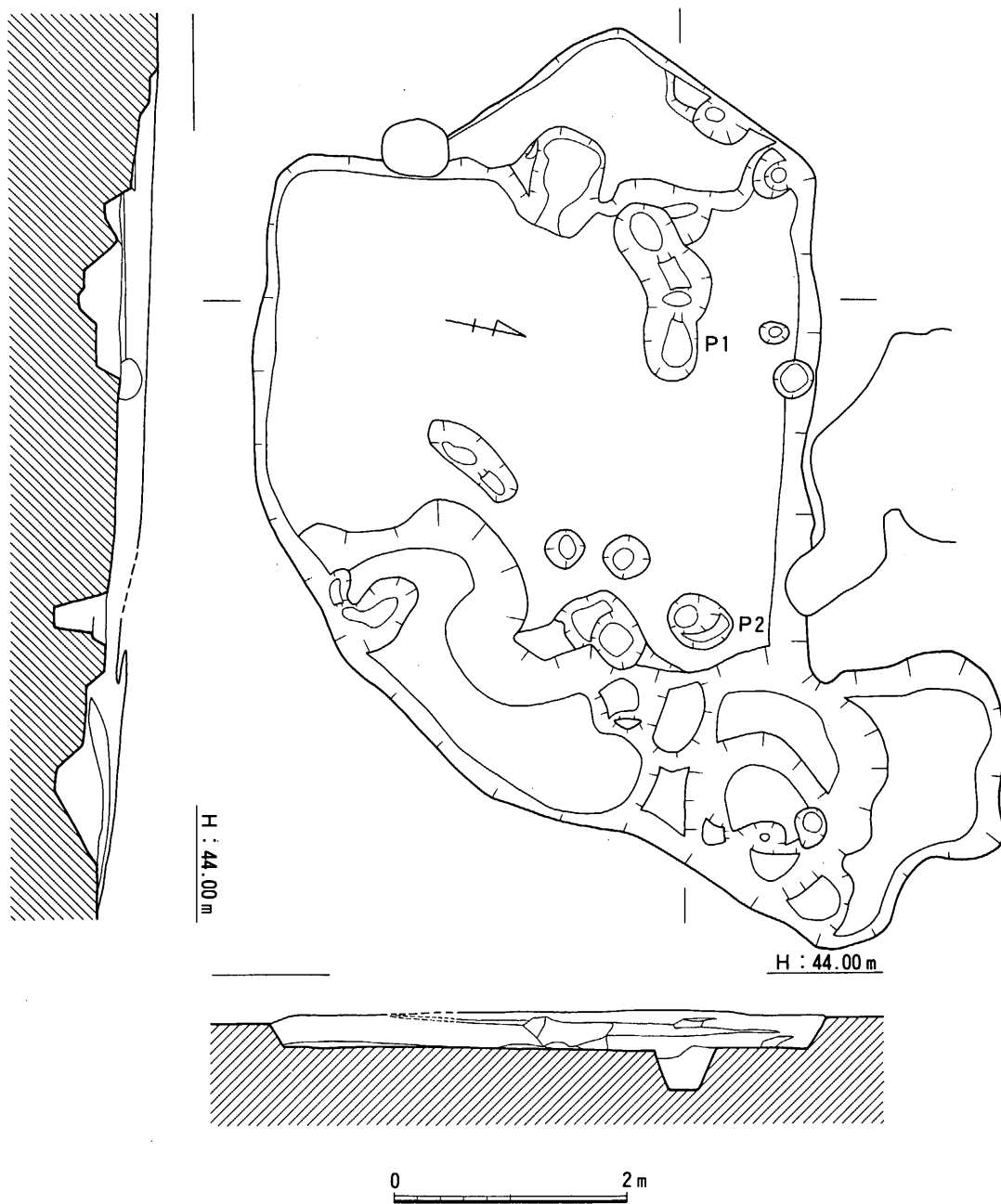
砥石 台形上を呈し、11.7cm×11.0cm、厚さは5.9cmの大きさである。最も狭い部分は欠損部である。広い面の裏表と側面の内の1面を使用している。片面の中央付近に径2cmの範囲で凹み石に見られるような凹みがある。

17号住居跡（第48図、図版17）

調査区のほぼ中央に位置する。南側の部分を検出することが出来なかったため、本来のプランは不明であるが、不整形な方形を呈したものと思われる。北側壁が4.3m、西側壁が3.9m残存しており、それぞれ高さ0.15mと0.13mを測る。床面は平坦であり、2本の柱穴を確認する



第48図 17号住居跡実測図（1/60）



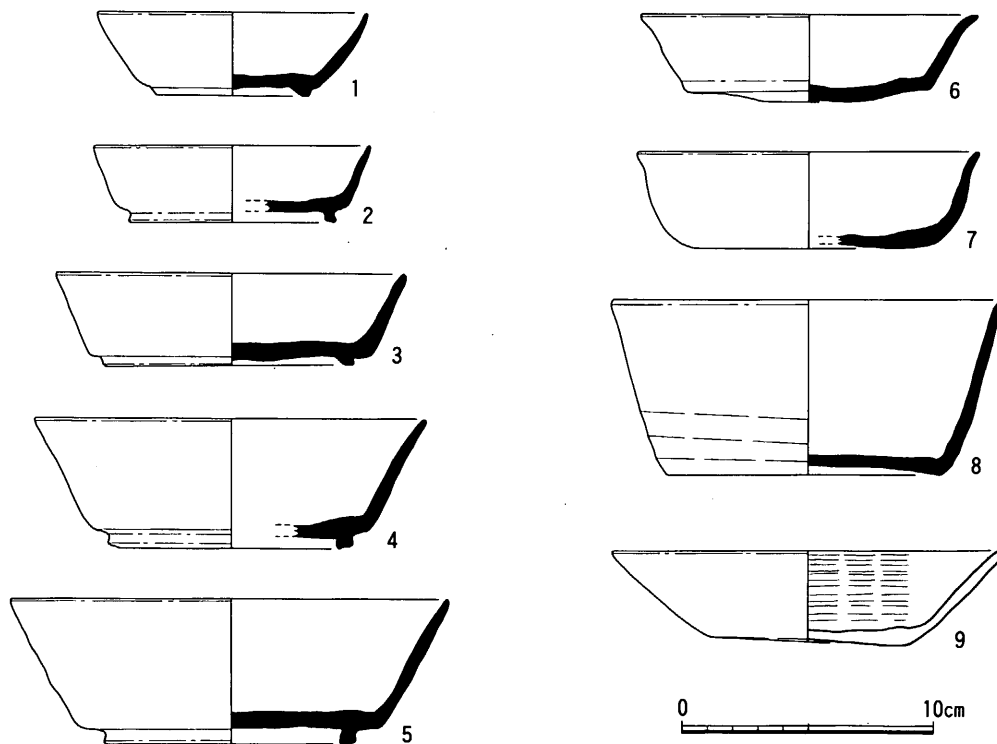
第49図 18号住居跡実測図 (1/60)

ことができた。それらの深さは0.45mと0.51mである。また、柱穴の他に3個のピットを確認した。周溝と竈は検出することができなかった。南側の部分で溝03ともう1条の溝切り合い関係にあり、いずれの溝よりも本住居跡の方が古い。

遺物は、埋土中から須恵器杯蓋・杯身・高杯・甕、土師器甕、石鏃などが出土したが、図示できるものはなかった。遺物総量は、ポリ袋（38cm×26cm）で1袋である。

18号住居跡（第49図、図版18）

調査区の東端部付近に位置する。正方形に近い西側の部分と、不整形な東側の部分とを合わせたようなプランを呈する。但し、この東側の部分については、他の遺構を竪穴住居跡と一緒に掘った可能性がある。規模は、長軸方向で8.3m、短軸方向で5.4mである。床面は、西側部分ではほぼ平坦であるが、東側部分では凹凸が激しい。従って、壁高は西側部分で0.2m～0.3m、東側部分で0.15m～0.5mを測る。柱穴は、2本確認することができた。深さは0.35mと0.45mである。西側壁のほぼ中央部で竈の痕跡を検出したため、これを精査したところ、左右の袖を確認することができた。竈の規模は、袖の心の間で0.75m、袖の端部から奥壁までが0.61mである。また、西壁の竈のある部分が、最大1.5m幅の三角形に張り出しており、深さ0.15m前後を測る。他に、周溝、テラス等は検出できなかった。北側壁と西側壁でピットと切



第50図 18号住居跡出土土器実測図（1/3）

り合い関係にあり、いずれについても本住居跡の方が古い。

遺物は、埋土中から、須恵器杯蓋・杯身・高杯・皿・鉢・甕、土師器杯・高杯・壺、黒色土器片、瓦、鉄刀子、黒曜石の剥片、鉄滓などが出土した。その総量は、整理箱で2箱ほどである。

出土遺物

鉄器（第83図、図版115）

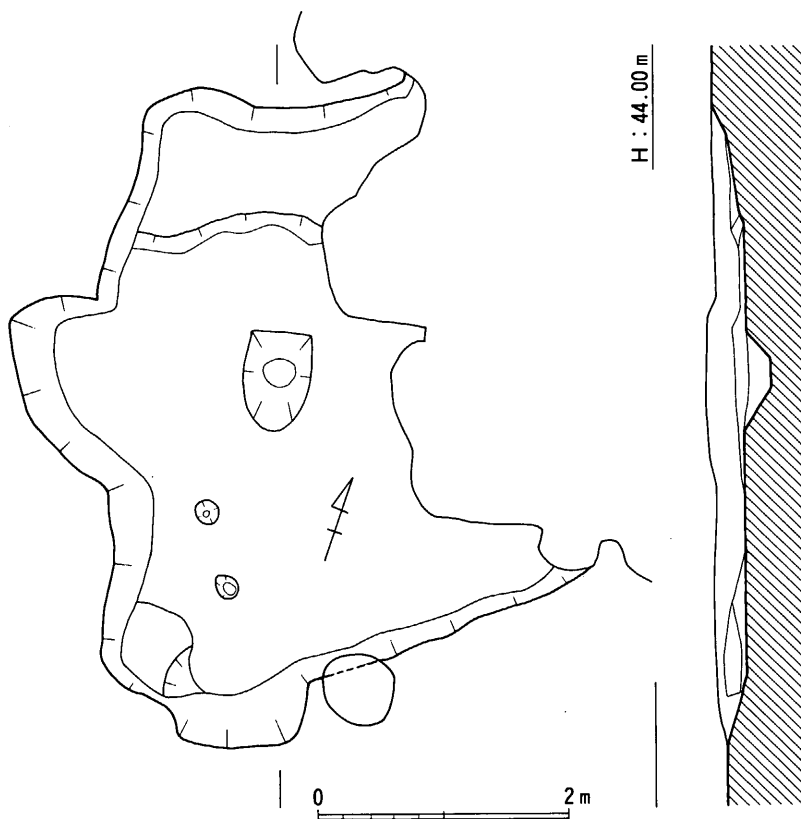
刀子（8） 刃部から茎部にかけての破片である。関は背側と刃側の両側に付く。残存長は5.0cmを測る。土圧のためか刃部が大きく曲がっている。

須恵器（第50図、図版76）

杯身（1～7） 高台の付くもの（1～5）と、付かないもの（6・7）とがある。付くものは、口径10.6cm～17.3cmと幅広い。調整技法としては、底部外面をヘラ切り後粗いナデ、高台を貼り付けた後回転ナデ、その他の部分を回転ナデとナデで仕上げる。4と5は焼成不良である。高台の付かないものは、6が口径13.3cm、7が13.6cmとほぼ等しい。調整は、底部外面をヘラ切り後粗い

ナデ、その他の部分を回転ナデとナデで仕上げる。6は焼成不良である。

鉢（8） 口径15.6cm、器高7.0cmを測る。上げ底気味の底部と、直線的に伸びる体部をもつ。底部外面から体部外面下位にかけて回転ヘラケズリを施し、その他の部分を回転ナデとナデで仕上げる。



土師器（第50図）

第51図 19号住居跡実測図（1/60）

杯(9) 焼成があまり良くないため、体部外面の調整がよくわからないが、部分的にヘラミガキの痕跡が残っている。体部と底部の内面はヘラミガキ、底部外面は回転ヘラケズリを施す。

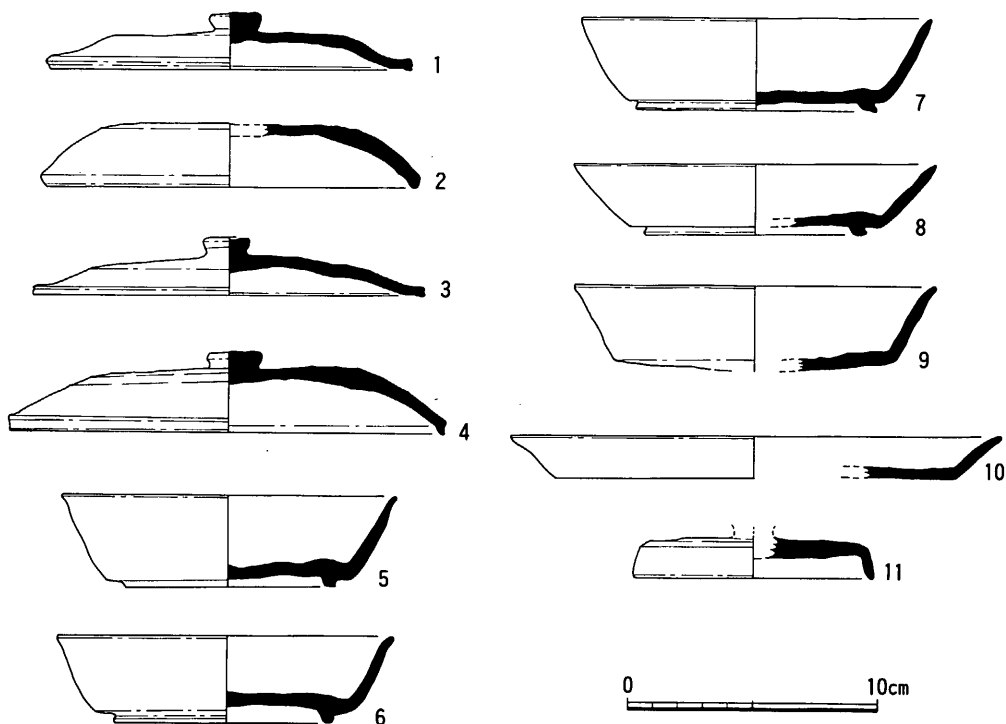
瓦(第84図、図版128)

1は、広端面のみ部分的に残る平瓦片である。凸面には平行叩きの痕跡が残る。凹面は斜方向にナデつけられており、一部にはその後やはり斜方向のヘラケズリを加える。凹面側広端縁をヘラケズリにより面取りしている。胎土中には若干の砂粒を含む。須恵質。

19号住居跡(第51図、図版18)

調査区の東端部付近、18号住居跡よりも南に位置する。後述のように柱穴、竈ともに確認されず、平面プランも他の竪穴住居跡に比して不整形であるため、竪穴住居跡とするには疑問も残るが、規模や床面の状況からそう考えた。東側をSK10に切られており、残存部は長軸方向で4.8m、短軸方向で2.4mを測る。壁高は北西側壁で0.11m、南東側壁で0.15mである。床面はほぼ平坦であったが、柱穴を確定することはできなかった。北東側の壁沿いに焼土の散布が見られたためその部分を精査したが、竈の施設を確認することはできなかった。前述のように、SK10と切り合っており、新旧関係は本住居跡の方が古い。

遺物は、埋土中から須恵器杯蓋・杯身・皿・高杯・鉢・甕・壺・甑、土師器杯・皿・高



第52図 19号住居跡出土土器実測図(1/3)

杯・甕、黒色土器片、土錘、瓦、黒曜石の剥片、鉄器片、鉄滓などが出土した。総量は整理箱3箱ほどであるが、小片が多く、図示できるものは比較的少なかった。

出土遺物

鉄器（第83図、図版115）

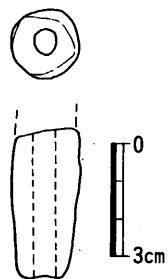
鎌（9） 茎部と思われる。残存長3.9cm。

須恵器（第52図、図版76）

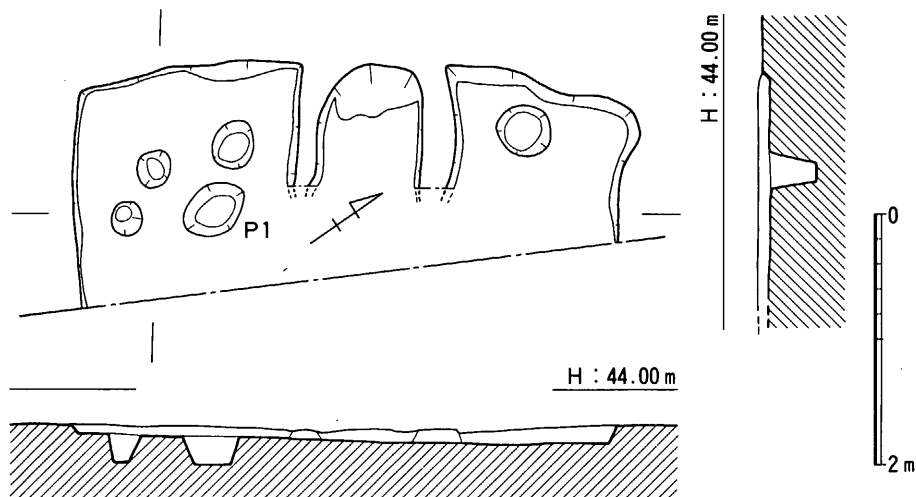
杯蓋（1～4） 2は天井部中央を欠いているが、形態的にはつまみの付くものと思われる。調整は、天井部外面を回転ヘラケズリするものが1・4、ヘラ切り後粗くナデるものが3。2は、ヘラ切り後粗くナデた後、天井部と体部の境にのみ回転ヘラケズリを施す。その他の部分は回転ナデとナデ、つまりは貼り付けた後回転ナデで整える。4点とも重ね焼きの痕跡が明らかである。

杯身（5～9） 高台の付くもの（5～8）と付かないもの（9）とがある。高台の付くものについては、5・6が口径13.3cm、7・8が14cm以上である。調整は、すべて底部外面をヘラ切り後粗くナデ、他の部分は回転ナデとナデで仕上げる。高台は貼り付けた後、回転ナデで整える。6の外面には窯の床あるいは壁の一部が融着しており、7の外面には重ね焼きの痕跡が明らかである。9は、底部外面をヘラ切り後粗くナデ、他の部分に回転ナデとナデを施す。外面には火罨が見られる。

皿（10） 体部が浅く、口縁はやや外反する。底部外面は、ヘラ切り後粗いナデを施す。他は回転ナデとナデで仕上げる。内外面ともに火罨がある。



第53図 19号住居
跡出土土製品実測
図 (1/2)



第54図 20号住居跡実測図 (1/60)

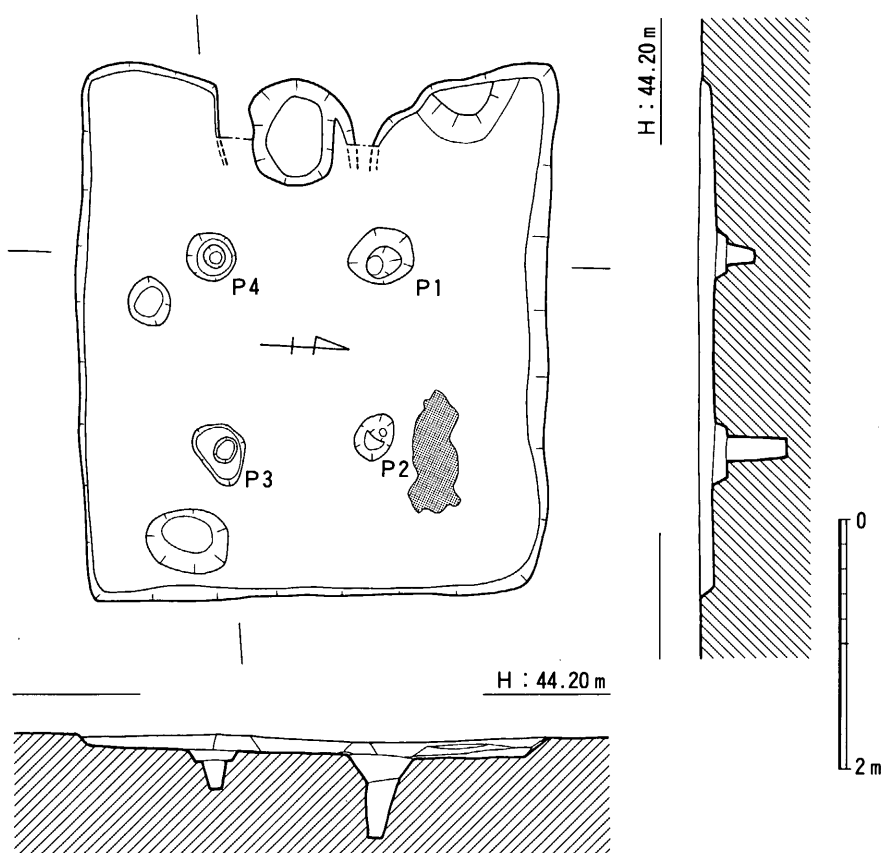
蓋(11) つまみを欠いている。天井部外面に回転ヘラケズリを施し、特に体部との境をシャープに仕上げている。他は回転ナデとナデである。

土製品 (第53図、図版113)

土錘 途中で折れているが、紡錘型を呈するものであろう。現存長3.7cm、最大径1.8cmを測る。淡褐色を呈する。

20号住居跡 (第54図、図版19)

調査区の南東の端部に位置し、大半の部分は調査区外にあるため調査をすることができなかった。本来は正方形に近いプランを有していたものと思われ、壁長は西側壁で4.4mを測る。北側壁と南側壁は、それぞれ1.1mと1.7mしか残存していない。壁高は7cm～15cmを測る。床面は平坦であるが、調査することのできた面積が狭かったため、柱穴を確定するには至らなかった。しかし、第52図でP1とした、深さ約0.2mのピットにはその可能性があるものと思われる。また、床面では他に4個のピットが確認された。西壁のほぼ中央部に焼土の散布が見ら



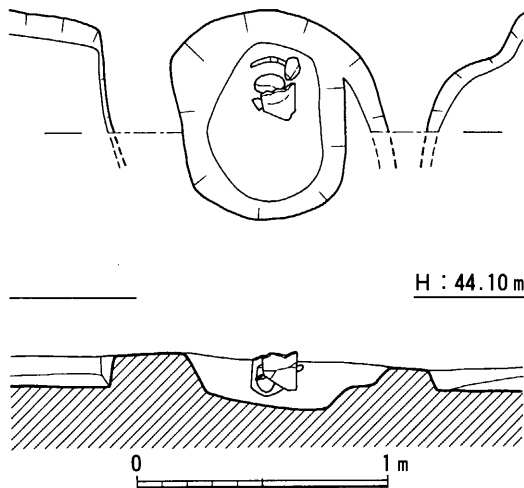
第55図 21号住居跡実測図 (1/60)

れたため、これを精査したところ竈の両袖の一部を検出することが出来た。両袖部の心心間の距離は1.05mである。

遺物は、埋土中から須恵器杯蓋・杯身・高杯・甕、土師器碗・甕、黒曜石の剥片などが出土した。総量はポリ袋（45cm×30cm）1袋ほどであるが、いずれも小片のため図示することはできなかった。

21号住居跡（第55・56図、図版19）

調査区のはぼ中央に位置する。東西方向に長いプランを呈し、壁長は北側壁4.15m、東側壁3.45m、南側壁4.15m、西側壁3.7mを測る。壁高は8cm～15cmである。床面は平坦で、4本の柱穴を確認することができた。柱穴の深さは0.2m～0.67mである。柱穴の他に、床面で2個のピットが確認された。また、西側壁の北寄りの部分にテラスがある。さらに、床面から浮いた状態で粘土の散布が見られた。西側壁のはぼ中央で竈の痕跡を検出し、これを精査したところ、両袖の一部を確認することができた。袖の心心間の距離は、1.05mを測る。また、竈内部からは瓦と石が出土したが、ともに火を受けた痕跡もなく、竈の廃絶に伴う何らかの祭祀行為によるものである可能性がある。



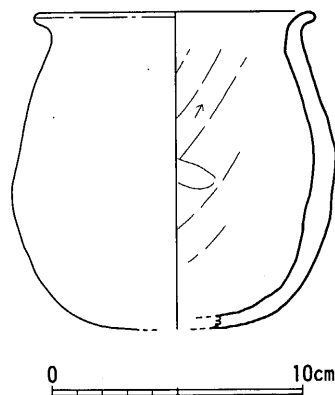
第56図 21号住居跡竈実測図（1/30）

遺物は、埋土中から須恵器杯蓋・杯身・壺・甕、土師器甕、前述の石、瓦などが出土した。その総量は整理箱で1箱強であるが、小片が多く、図示できるものは少なかった。

出土遺物

土師器（第57図、図版76）

甕 竈部分の埋土中から出土した破片を接合したものである。口縁部が短く強く外反し、底部は平底と思われる。調整は、口縁部内外面はヨコナデ、胴部から底部の内面はヘラケズリ、外面は磨滅のためやや不明瞭であるが、ハケ目を施している。器表面に薄い黒斑は見られるが、焼成後に火を受けた痕跡はない。

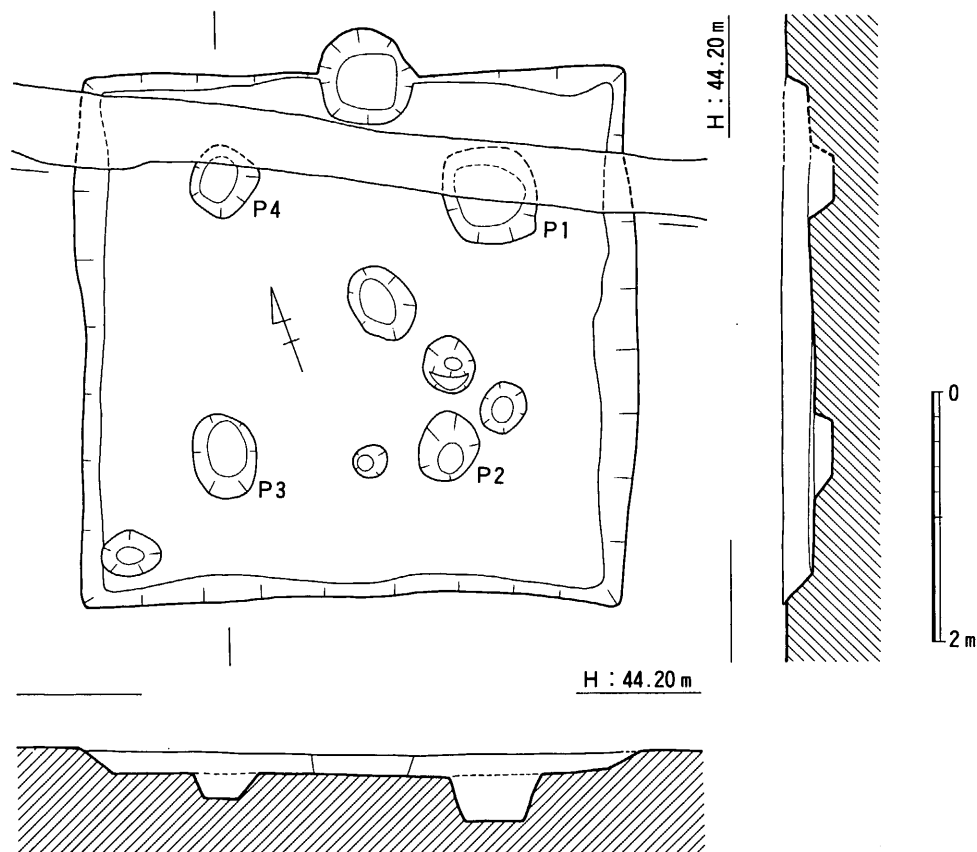


第57図 21号住居跡出土土器実測図（1/3）

瓦（第84図、図版128・129）

2は側面のみ部分的に残る平瓦片である。凸面には平行

叩きと格子目叩きの痕跡が残る。凹面には模骨痕と布目が残るが、一部にはそれらの上に同心円状当て具痕が認められる。また、側縁から幅1.5cmほどには、縦方向のヘラケズリを施す。側面は凸凹両面ともに面取りされている。胎土中に若干の砂粒を含み、須恵質。3も側面のみが部分的に残る平瓦片である。凸面には平行叩きの痕跡が残る。凹面には模骨痕と布目が残るが、一部にはそれらの上に同心円状当て具痕が認められる。側縁から1.8cmほどの幅に、縦方向のヘラケズリを施す。側面は凸凹両面ともに面取りされている。胎土中に若干の砂粒を含む。須恵質。このように2と3は胎土、焼成、各部の調整技法などいずれもきわめて類似しており、同一個体かと考えられるが、接合しない。4は熨斗瓦である。全長37.2cmを測る。両端面ともヘラで切り離されている。凸面には格子目叩きが残るが、一方の端面側の端縁から幅6.3cmほどの部分は、その上から縦方向のヘラケズリを施す。凹面には模骨痕と布目が残る。この端面側は、端縁を面取りし、さらにそこから幅2.2cmほどの部分に横方向のヘラケズリを施す。もう一方の端面側も端縁を面取りし、幅3.5cmほどの部分に斜方向のヘラケズリを施す。残存している側面も、凸凹両面に面取りしている。胎土中には若干の砂粒が含まれる。須恵質。



第58図 22号住居跡実測図 (1/60)

22号住居跡（第58図、図版20）

調査区の中央からやや東寄りに位置する。平面プランはほぼ正方形で、壁長は北側壁が4.4m、東側壁4.3m、南側壁4.2m、西側壁4.2mを測る。壁高は0.13m～0.25mである。床面は平坦で、4本の柱穴を確認することができた。柱穴の深さは0.13m～0.37mである。これらの柱穴の他に、床面に5個のピットが確認された。北側壁のほぼ中央部で焼土の散布が認められたものの、溝に切られていることもあり、竈の施設を確認するには至らなかった。切り合い関係はこの部分に見られるのみであり、新旧関係としては本住居跡の方が古い。

遺物は、埋土中から須恵器杯蓋・杯身・高杯・甕、土師器甕・甑・土師質の脚、黒色土器片、縄文土器片、鉄器片、黒曜石の剥片などが出土した。総量は整理箱1箱強である。

出土遺物

鉄器（第83図、図版115）

鏃（10） 茎部と思われる。残存長3.9cm。

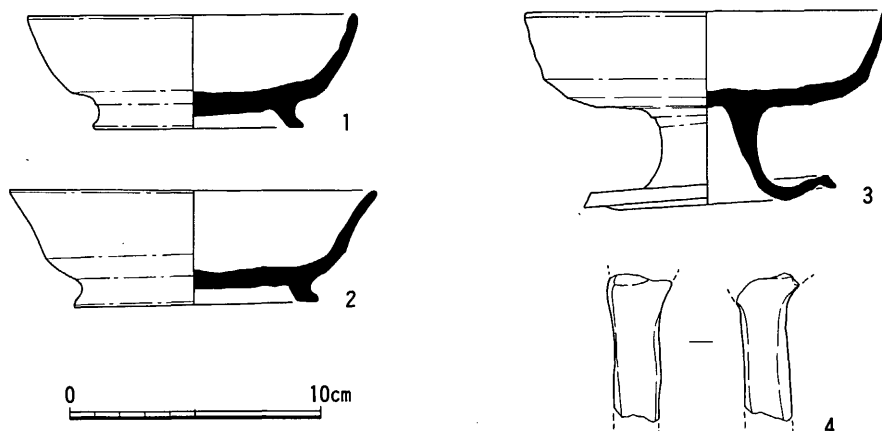
須恵器（第59図、図版76）

杯身（1・2） とともに高台が外に踏んばり、体部に屈折点を持つものである。1の体部は緩く内湾し、2は体部中位から口縁部にかけて外反する。調整はともに、底部外面をヘラ切り後粗くナデ、高台を貼り付けた後回転ナデ、他の部分を回転ナデとナデで仕上げる。2の底部内面には灰をかぶっている。

高杯（3） 短脚の無蓋高杯である。杯部の底部外面には回転ヘラケズリを施し、その他の部分は回転ナデとナデである。脚部は内外面とも回転ナデで仕上げる。脚部に焼きひずみがある。

土師器（第59図）

脚（4） 土師質のものなのでここに載せた。脚付土器の脚部のみと思われるが、本来の器形は不明である。焼成は良好で縦方向のナデで器面を調整している。残存長5.9cmを測る。



第59図 22号住居跡出土土器実測図（1/3）

23号住居跡（第60図、図版20）

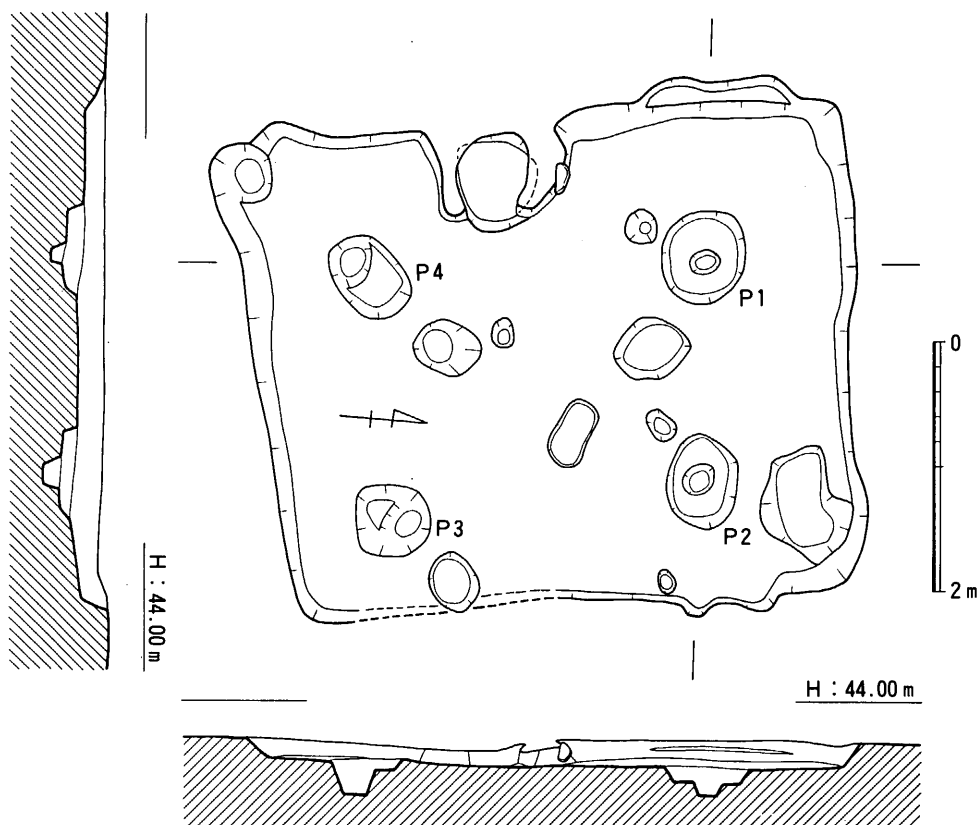
調査区の中央からやや南東に寄った場所に位置する。平面プランは、南北方向に長い長方形を呈し、壁長は、北側壁が3.8m、東側壁が4.3m、南側壁4.0m、西側壁5.0mである。壁高は、0.15m～0.2mを測る。床面はほぼ平坦で、4本の柱穴を確認することができた。柱穴の深さは、0.25m～0.28mである。また、これらの柱穴の他に、床面で9個のピットを確認することができた。西側壁のほぼ中央部で竈の痕跡が検出されたため、これを精査したところ、左右の袖を確認することができた。両袖の心心間の距離は、最大で0.75mを測る。他の遺構との切り合い関係はないが、東側壁の一部を試掘トレンチによって破壊されている。

遺物は、埋土中から須恵器杯蓋・杯身・高杯・鉢・甕、土師器甕、土鈴、黑色土器片、鉄器片などが出土した。その総量は、整理箱1個弱であった。

出土遺物

鉄器（第83図、図版115）

鉋（11） 刃部の小破片で、残存長は2.2cmである。断面形は「く」字形を呈する。



第60図 23号住居跡実測図（1/60）

不明鉄器（12・13） 12は残存長が6.1cm、13は全長3.0cm、残存幅1.7cmを測る。

須恵器（第61図、図版76・77）

杯蓋（1） かえりを有し、つまみの付かないものである。焼成がやや悪く、器表面の観察が困難であるが、天井部外面については、粘土が段をなすようにあまっていることから、回転ヘラケズリを施していないと思われる。体部内外面については回転ナデ、天井部内面にはナデの痕跡が部分的に認められる。

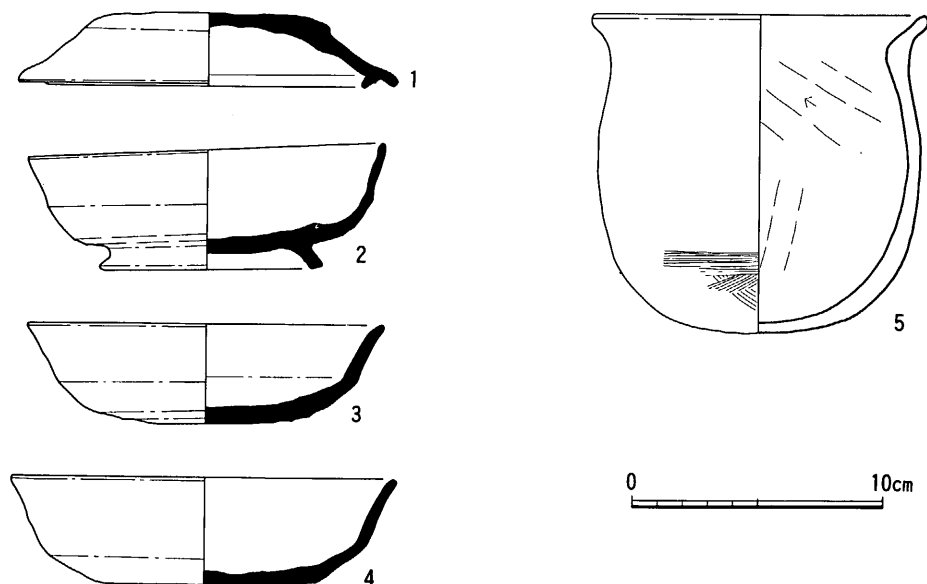
杯身（2～4） 2は外に踏んばる高台が付き、体部の屈折が弱い。底部外面に回転ヘラケズリを施し、高台は貼り付け後回転ナデ、他の部分を回転ナデとナデで整える。3・4は体部の屈折が強い。ともに底部外面をヘラ切り後粗くナデ、他を回転ナデとナデで仕上げる。

土師器（第61図）

甕（5） 口径13.4cm、器高12.7cmを測る。胴部外面の、口縁部直下から下位にかけての部分の調整が磨滅のため不明である。他は、口縁部内外面にヨコナデ、胴部および底部の内面にヘラケズリ、底部外面にハケ目を施す。

土製品（第62図、図版113）

土鈴 おおむね球形を呈するが、手捏ねで作っているため凹凸が多い。上半部の半球形に下半部の半球形をかぶせるようにして接合している。底部にある溝の一方は下半部の半球形で収まらず上半部の半球形に及んでいる。欠損しているため内部の玉はない。また、鈕は基部を残して欠損している。高さ、幅とも約3.5cmである。淡赤褐色または淡褐色を呈する。



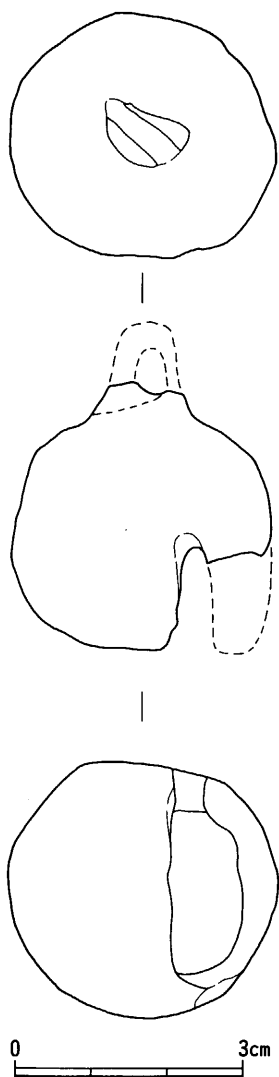
第61図 23号住居跡出土土器実測図（1/3）

24号住居跡（第63図、図版21）

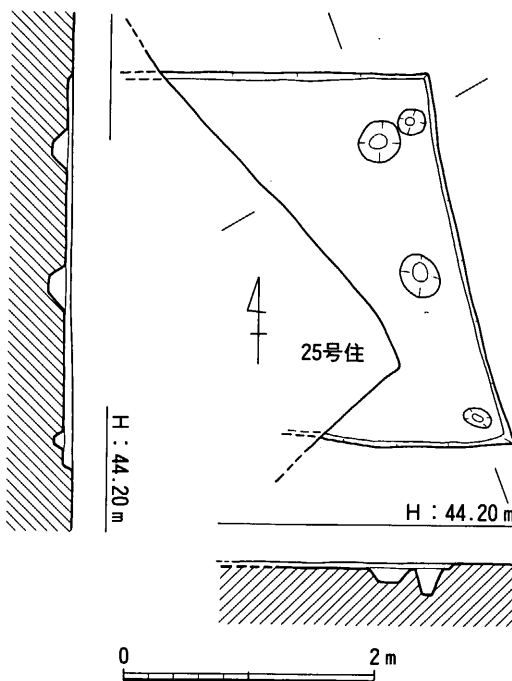
調査区中央からやや南に寄った場所に位置する。西側の大半を25号住居跡によって切られているため詳細は不明であるが、本来は菱形あるいは平行四辺形のような平面プランを呈したものと考えられる。壁長は、東側壁が3.0mを測り、北側壁と南側壁は、残存長でそれぞれ2.1mと1.5mである。壁高は、5cm～8cmである。床面は、検出できた限りにおいては平坦であり、4個のピットが確認されたが、柱穴として確定できるものはなかった。北側壁沿いに焼土の散布

布が認められたため、これを精査したものの、袖等の竈の施設を確認することはできなかった。前述のように25号住居跡と切り合っており、新旧関係としては本住居跡の方が古い。

遺物は、埋土中から須恵器片、土師器片、鉄滓が出土した。総量はポリ袋（24.5cm×15cm）で半袋にも満たない。また、前述のように小片ばかりで図示できるものはなかった。



第62図 23号住居跡出土土製品
実測図（1/1）



第63図 24号住居跡実測図（1/60）

25号住居跡（第64図、

図版21）

調査区の中央からやや南に寄った場所に位置する。南のコーナーを小土坑とピットによって切られているが、本来は南北方向に長い長方形の平面プランを有していたものと考えられる。壁長は、北東側壁が4.1m、北西側壁が3.6mである。南コーナーを復元すると、南東側壁が3.6m、南西側壁は3.85mであったと考えられる。壁高は5cm～7cmである。

床面はほぼ平坦であり、9個のピットが確認されたが、柱穴として確

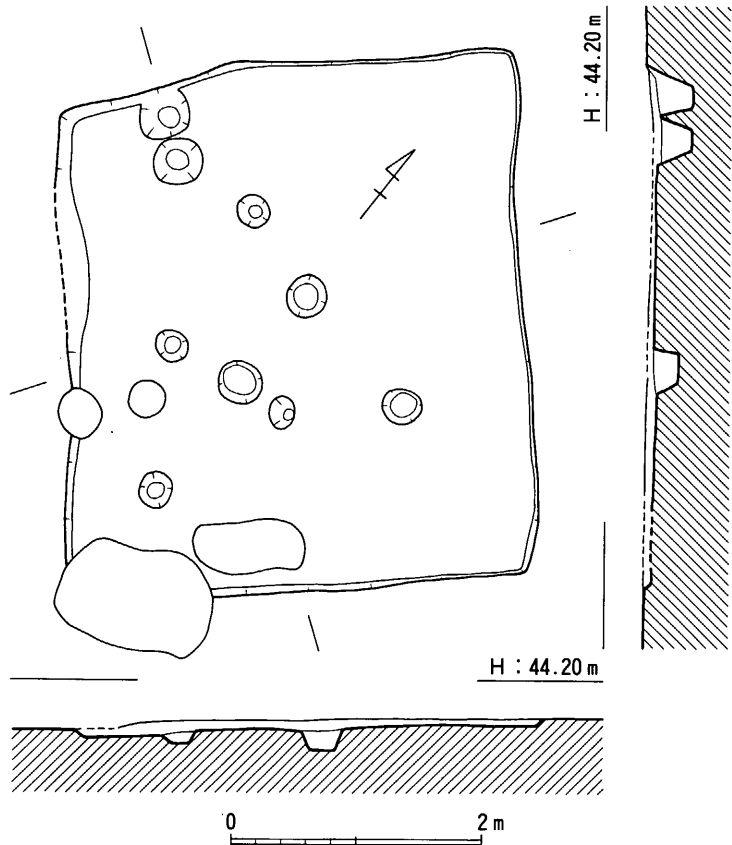
定できるものはなかった。北西側壁沿いに焼土の散布が認められたため、これを精査したが、竈の施設を確認することはできなかった。24号住居跡、および小土坑1基・ピット3基と切り合っており、新旧関係としては前者よりも新しく、後者よりも古い。

遺物は、埋土中から須恵器杯蓋・杯身・高杯・皿・甕、土師器杯・甕、黒色土器片、鉄器片、鉄滓、黒曜石の剝片などが出土した。その総量はポリ袋（45cm×30cm）で1袋弱である。

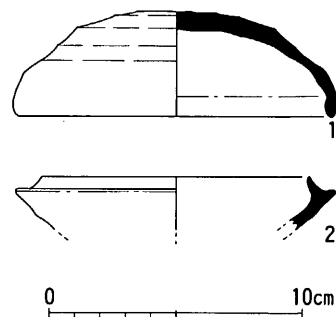
出土遺物

須恵器（第65図）

杯蓋（1） 天井部外面に回転ヘラケズリを施し、他の部分を回転ナデとナデで仕上げる。



第64図 25号住居跡実測図（1/60）



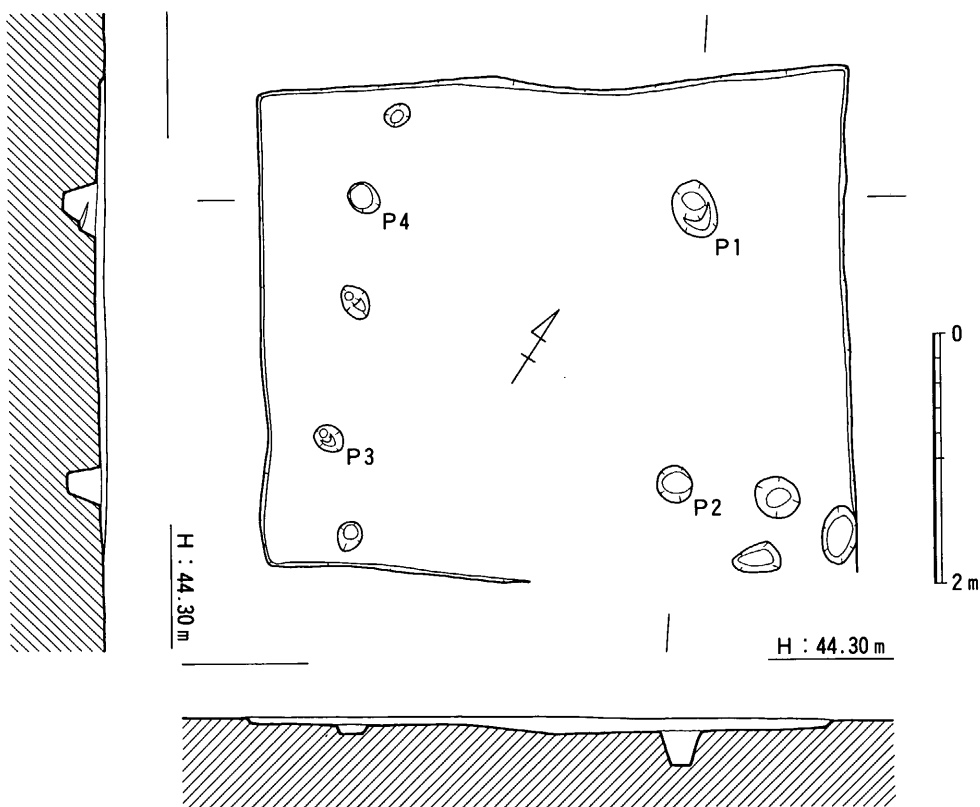
第65図 25号住居跡出土土器実測図（1/3）

杯身（２） ごく小片を図上復元した。内外面とも回転ナデを施している。外面には灰をかぶっており、受部には重ね焼きの痕跡が明らかである。

26号住居跡（第66図、図版21）

調査区のはほぼ中央に位置する。南東側壁のはほぼ半分が検出できなかったものの、本来の平面プランは東西方向に長い長方形を呈したものと考えられる。壁長は、北西側壁4.7m、南西側壁3.75mで、北東側壁と南東側壁は、それぞれ残存長で4.0mと2.1mを測る。壁高は、最大で5cmである。床面には、わずかに傾斜が認められ、合わせて10個のピットが確認された。それらのうち第64図でP1～P4としたものを柱穴であると考えた。それらの深さは8cm～28cmである。北西側壁のはほぼ中央に焼土の散布が認められたため、これを精査したが、竈の施設を確認することはできなかった。

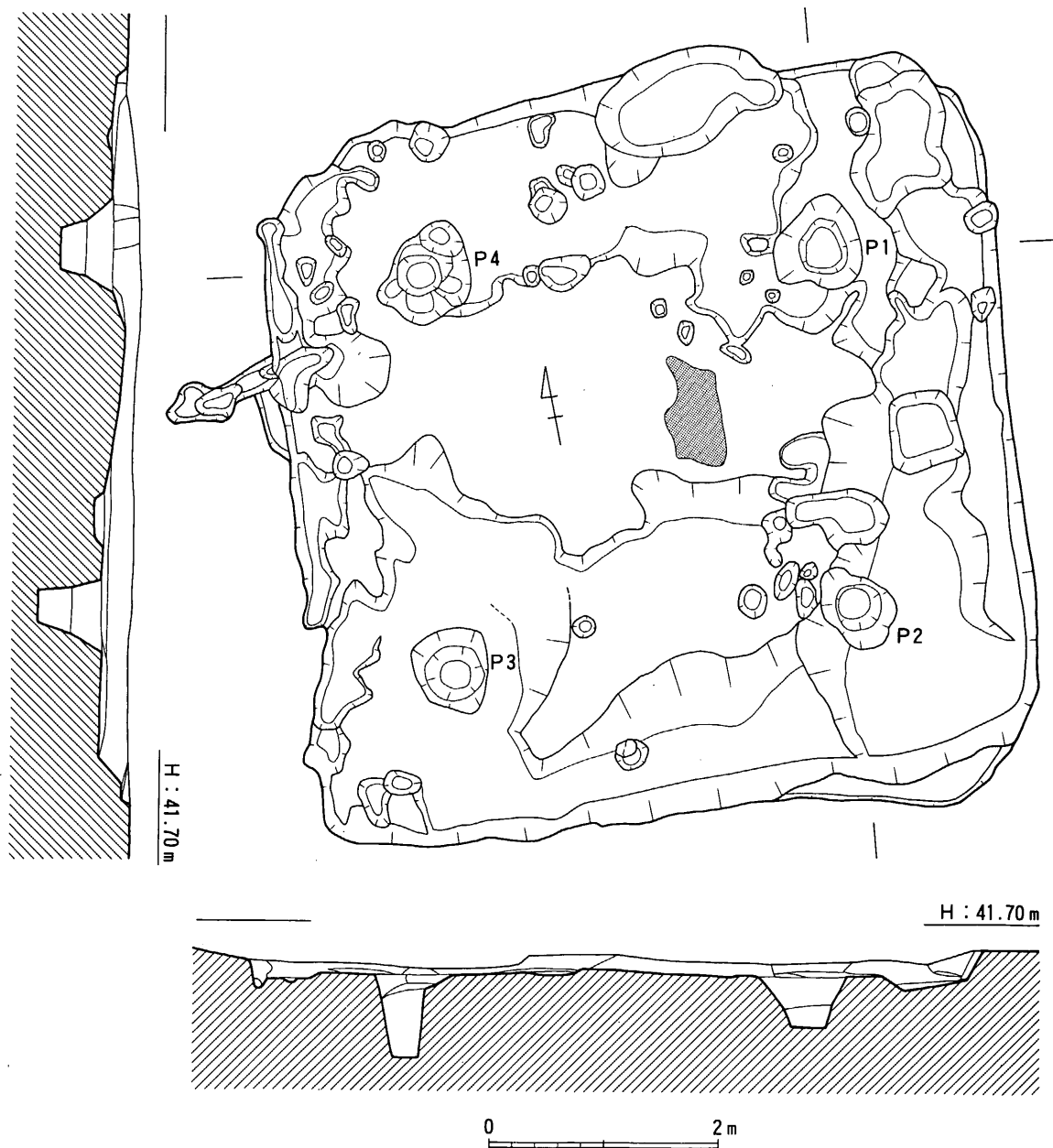
遺物は、埋土中から須恵器杯蓋・杯身、土師器甕、瓦片、縄文土器片、磨製石器の破片などが出土した。その総量はポリ袋（45cm×30cm）1袋弱であるが、いずれも小片で図示できるものはなかった。



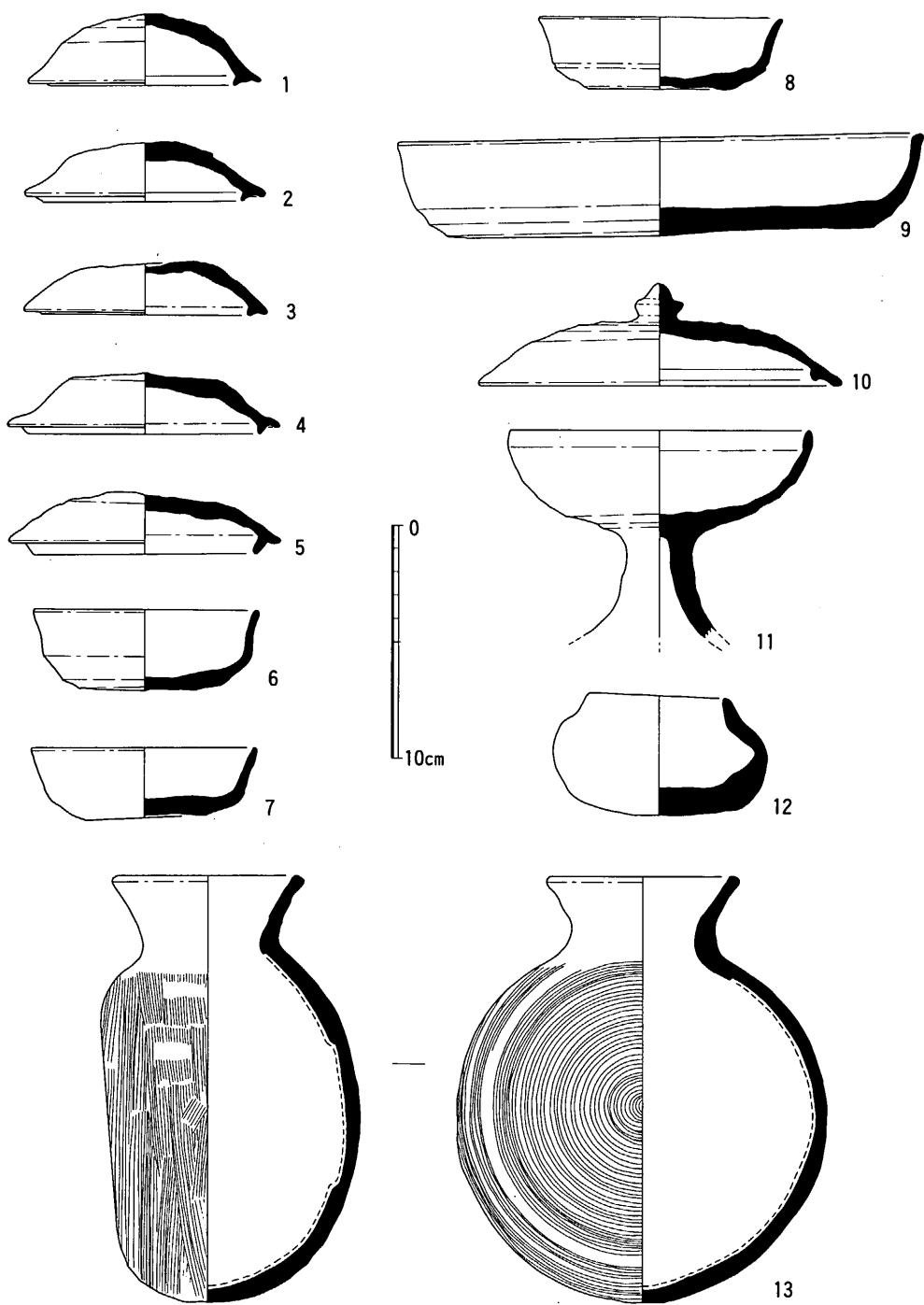
第66図 26号住居跡実測図（1/60）

28号住居跡（第67図、図版22）

調査区の中央からやや西に寄った場所に位置する。隅丸で、方形に近い平面プランを有する
壁長は、北側壁6.0m、東側壁5.9m、南側壁6.0m、西側壁5.3mである。床面には細かな凹凸



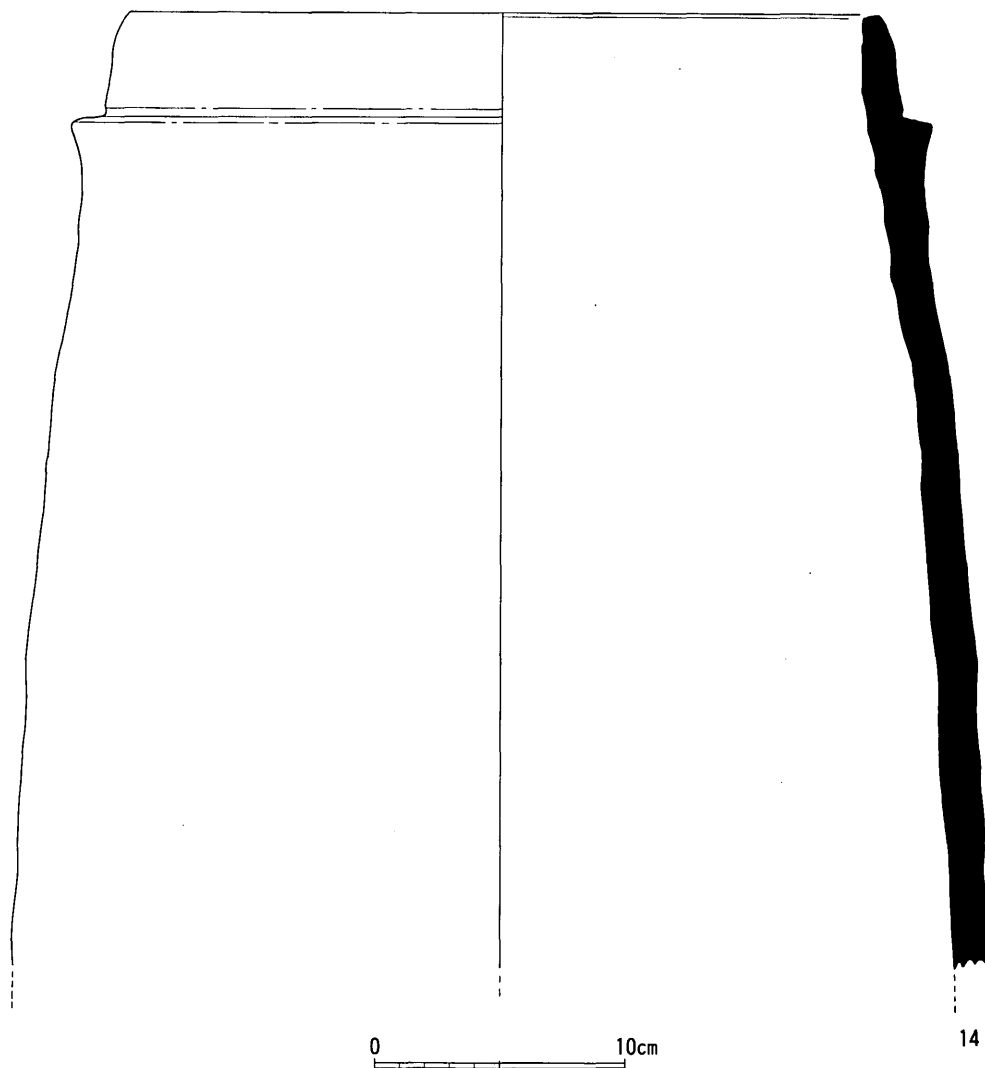
第67図 28号住居跡実測図（1/60）



第68図 28号住居跡出土土器実測図① (1/3)

が非常に多く、ピットであるのか単なるくぼみであるのか判断に苦しむ部分が何ヶ所もあった。床面がこのような状態であるため、壁高は場所によってその差が大きい、大体0.1m～0.3mの間におさまる。しかし、柱穴は4本を確定することができた。それらの深さは、0.45m～0.7mである。北壁の中央からやや東寄りの部分で焼土の散布を認めたため、これを精査したが、竈の施設を確認することはできなかった。

遺物は、埋土中、床面上、および柱穴内埋土中から、須恵器杯蓋・杯身・高杯・皿・提瓶・甕、土師器杯・碗、円筒状土製品、陶棺ではないかと思われる破片、縄文土器片、弥生土器片、石鏃、黒曜石およびサヌカイトの剝片などが出土した。その総量は、整理箱で3箱ほどであっ



第69図 28号住居跡出土土器実測図② (1/3)

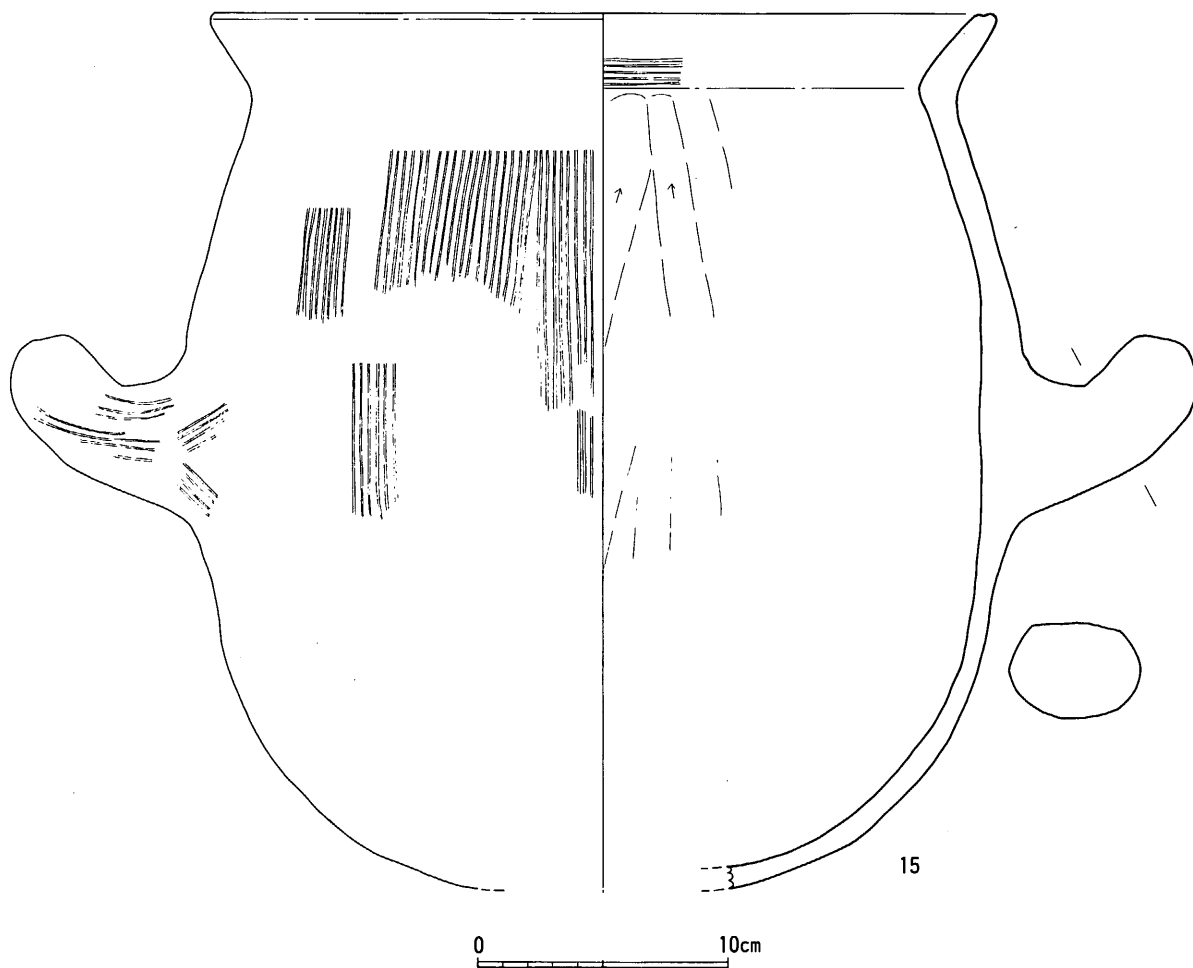
た。

出土遺物

須恵器（第68・69図、図版77・78）

杯蓋（1～5） かえりを持ち、つまみの付かないものである。口径は、1が7.8cm、2・3が9cm未満、4・5が9cmをこえる。調整はすべて、天井部外面にへら切り後粗いナデを施し、他の部分を回転ナデとナデで仕上げる。1・2・4は天井部外面にへら記号があり、4・5は外面に灰をかぶっている。3は焼成不良である。

杯身（6～8） いずれも底部外面にへら切り後粗いナデを施し、他の部分を回転ナデとナデで仕上げる。6のみ、底部と体部の境に幅の狭い回転へらケズリを施している。また、6は底部外面にへら記号があり、体部外面には灰をかぶっている。



第70図 28号住居跡出土土器実測図③（1/3）

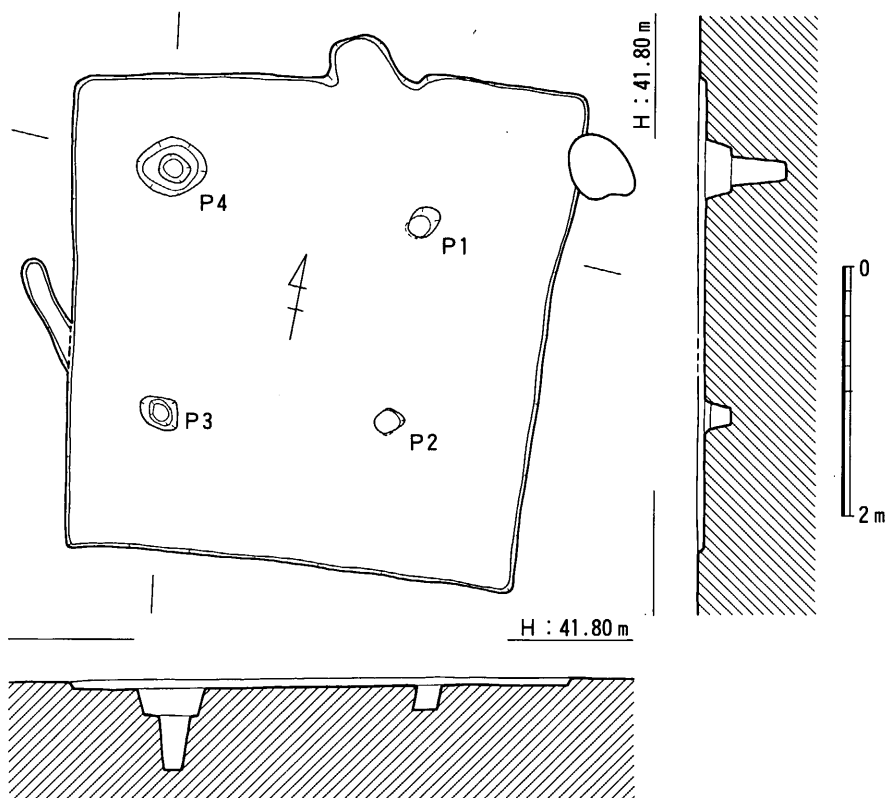
皿（9） 口径22.4cmの大型の皿である。底部外面はヘラ切り後粗いナデ、底部と体部の境に幅の狭い回転ヘラケズリを施し、他の部分は回転ナデとナデで仕上げる。底部外面にヘラ記号がある。

蓋（10） 天井部外面を回転ヘラケズリしており、つまみは貼り付けた後回転ナデを施す。他の部分は回転ナデとナデで仕上げる。かえりは短い。

高杯（11） 脚端部を欠くが、短脚の無蓋高杯と思われる。杯部の底部外面には回転ヘラケズリを施し、他の部分を回転ナデとナデで仕上げる。脚部は内外面とも回転ナデを施す。脚部内面にヘラ記号があるが、端部欠損のため全体を知ることができない。

短頸壺（12） 口径5.8cm、器高5.2cmの小型の短頸壺である。口頸部は内傾する。焼成不良のため器壁が磨滅しており、特に外面は調整の痕跡が残っていない。内面には部分的に回転ナデの痕跡が見られる。

提瓶（13） 把手が付かない提瓶である。口径は8.2cm、器高18.2cm、胴部最大径15.7cmを測る。口頸部は内外面ともに回転ナデし、胴部外面はすべてカキ目調整を施す。口頸部内外面お



第71図 29号住居跡実測図 (1/60)

よび胴部外面の一部に灰をかぶっている。焼成は良好である。

円筒状土製品 (14) 焼成不良であるが須恵質であり、玉縁は付くが瓦とはつくり、調整ともに異なるためここに載せた。上端部のみが残る破片であるが、本来は円筒形であったものと考え第67図のような図上復元を行った。すると、口径30cm、器高38.2cm以上となる。内外面とも磨滅しており調整がはっきりしないが、外面にはヘラケズリ、内面にはナデの痕跡が部分的にかすかに認められる。

土師器 (第70図)

把手付甕 (15) 底部の中央部を欠くが、短く外反する口頸部を持つ甕である。調整は、口頸部内外面が横方向のハケ目、胴部外面中位までが縦方向のハケ目である。把手は貼り付けで、その後ハケ目調整を施す。胴部下位から底部の外面には、ハケ目の後ヘラ状の工具でナデるような調整を行う。内面は、胴部、底部ともにヘラケズリで整える。

29号住居跡 (第71図、図版23)

調査区のはぼ中央に位置する。ゆがんではいるが、正方形に近い平面プランを有する。壁長は、北側壁4.0m、東側壁4.0m、南側壁3.5m、西側壁3.7mである。壁高は、5cm～7cmである。床面はほぼ平坦であり、4本の柱穴を確認することができた。これらの柱穴の他には、床面ではピットは確認されなかった。柱穴の深さは、0.18m～0.65mである。北側壁の中央やや東寄りの部分で焼土の散布が認められたため、これを精査したが、竈の痕跡を検出したのみにとどまった。北東コーナー付近でピットと切り合い関係にあり、新旧関係は本住居跡の方が古い。また、西側壁のはぼ中央で溝状遺構とも切り合い関係にあるが、新旧関係は不明であった。

遺物は出土しなかった。

30号住居跡 (第72図、図版23)

調査区の中央から北西に寄った場所に位置する。平面プランは、正方形がくずれたような不整形を呈する。特に、北コーナー部の平面プランが整っていない。壁長は、北東側壁が4.7m、南東側壁3.6m、南西側壁4.8m、北西側壁4.5mである。壁高は0.15m～0.2mを測る。床面はおおむね平坦であるが、段のつく部分が2ヶ所認められる。そのうち、北コーナー部の掘り込みは、床面から7cm前後の深さを測る。柱穴は4本確認され、深さは0.16m～0.28mである。北西側壁のはぼ中央に焼土の散布が認められたため精査したところ、竈の両袖のごく一部を検出することができた。

遺物は、埋土中から須恵器杯蓋・杯身・高杯・鉢・甕、土師器甕、手捏ね土器、縄文土器、弥生土器、瓦、石鏃、サヌカイトの石核などが出土した。その総量は整理箱で $\frac{1}{2}$ 弱である。

出土遺物

須恵器 (第73図、図版78)

杯蓋 (1) 天井部外面はヘラ切り後ごく粗くナデる。他の部分を回転ナデとナデで仕上げる。

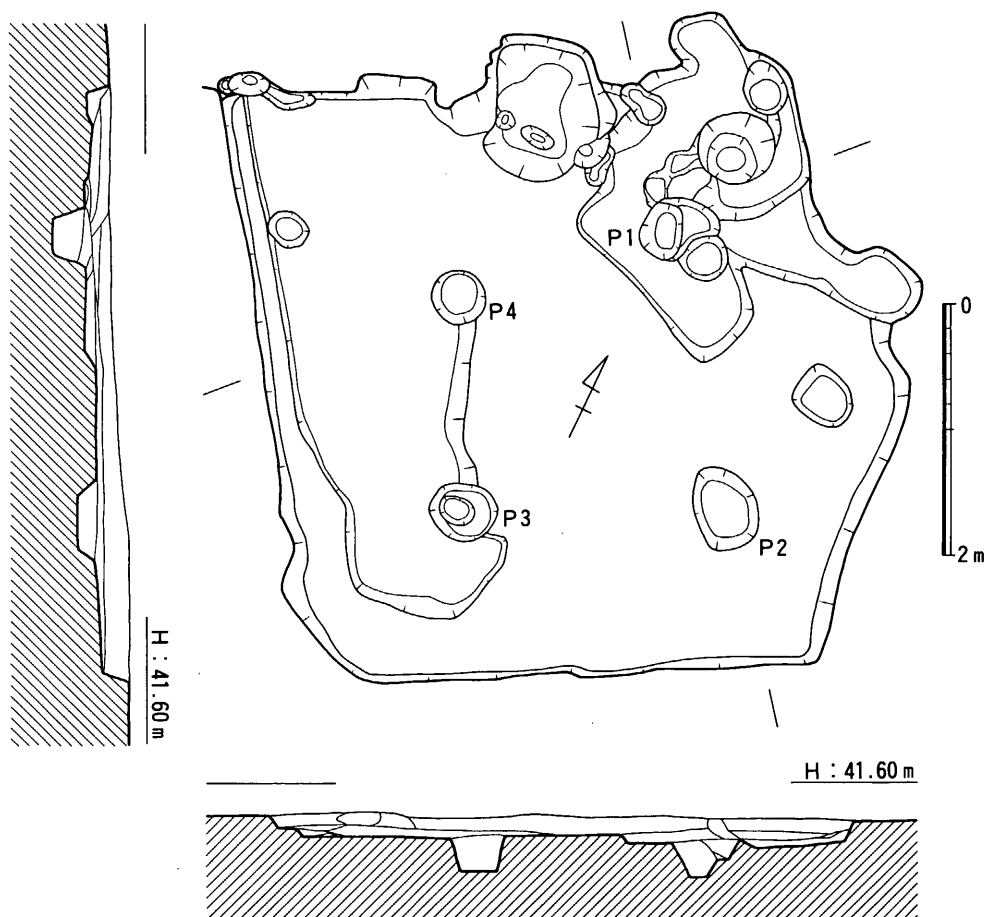
高杯（2） 口径9.3cm、器高8.5cmの小型のものである。杯部の体部下位に1条の沈線をめぐらせる。調整は、杯部の底部外面を回転ヘラケズリし、体部外面を回転ナデする。杯部内面は灰かぶりのため調整不明である。脚部内外面は回転ナデで仕上げる。脚部外面にも灰をかぶっている。

土師器（第73図）

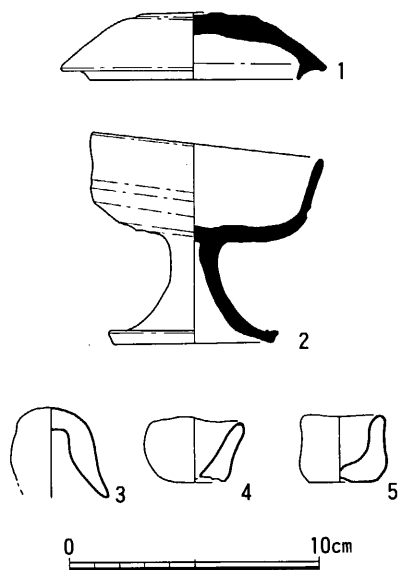
手捏ね土器（3～5） 土師質のものでここに載せた。いずれも竈の埋土中より出土したものである。焼成は良好で橙色を呈し、内外面ともナデ調整を施す。

瓦（第84図、図版129）

5は平瓦であるが、端面、側面いずれも残っていない。凸面には斜方向の平行叩きと格子目叩きの痕跡が残る。凹面は全面にヘラケズリによる調整を施す。胎土中には若干の砂粒が含ま



第72図 30号住居跡実測図（1/60）



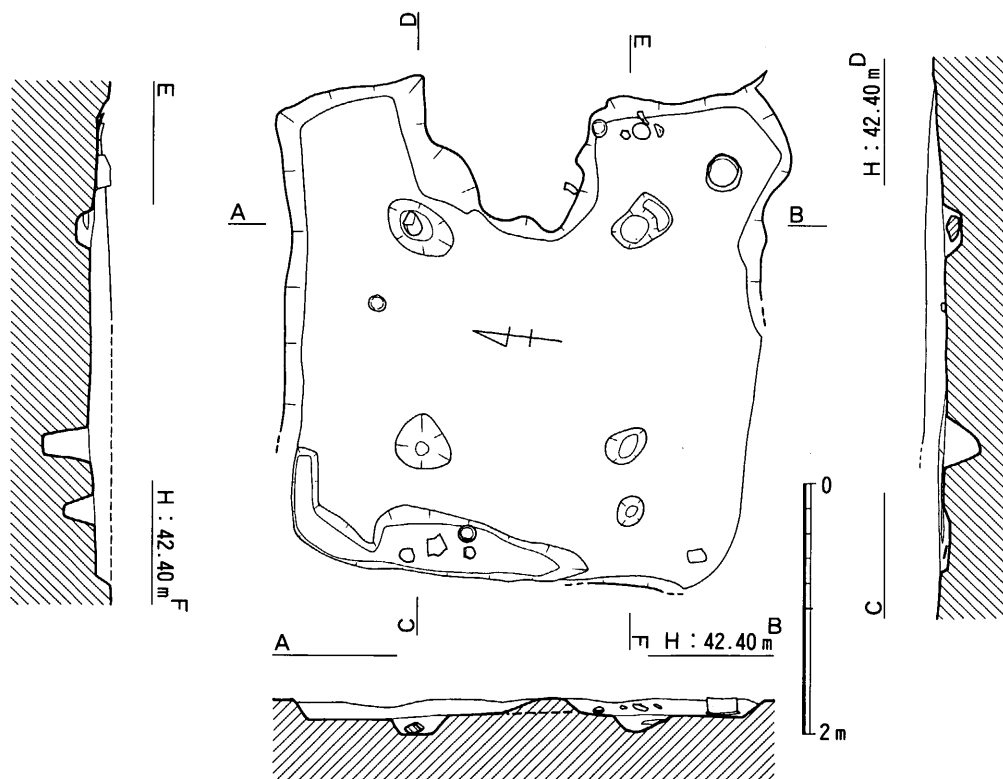
第73図 30号住居跡出土土器実測図
(1/3)

れる。須恵質ではあるが、1～4の瓦に比して焼成がやや不良である。

31号住居跡 (第74・75図、図版24)

調査区北西隅で検出されたものである。おおむね隅丸方形を呈し、北西コーナー部付近に周溝を持つ。東壁長3.8m、西壁長3.3m、北壁長3.3m、南壁長3.9mを測る。壁高は12～17cmである。周溝の深さは3～9cmと浅い。床面はほぼ平坦で比較的固い。ピットは5個検出されたが、柱穴は対角線上に位置する4個と思われる。その深さは13～40cmほどである。北東の柱穴には塊石が置いてあった。東壁中央に竈が付けられている(第75図)。両袖を持つが、排煙施設は特に設けられていない。

遺物は竈の右側から土師器甕が倒立した状態で、他に須恵器蓋杯が出土した。中央北壁寄りでは須恵



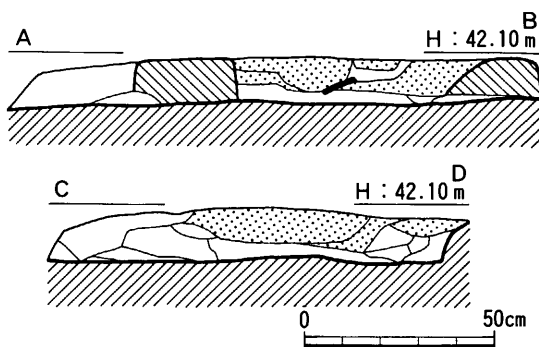
第74図 31号住居跡実測図 (1/60)

器杯身、そして北部の周溝内から須恵器蓋杯と甕片が出土した。

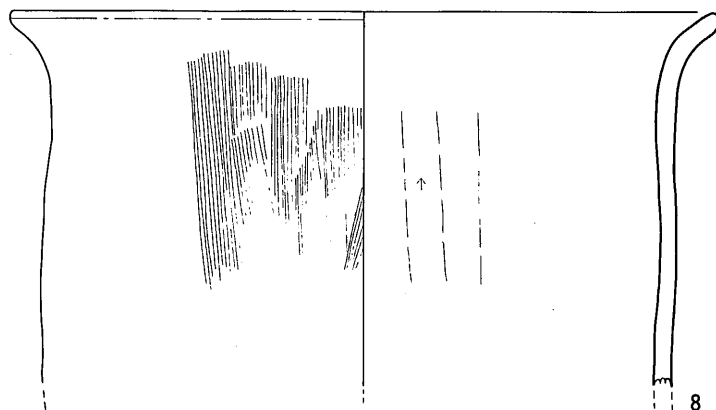
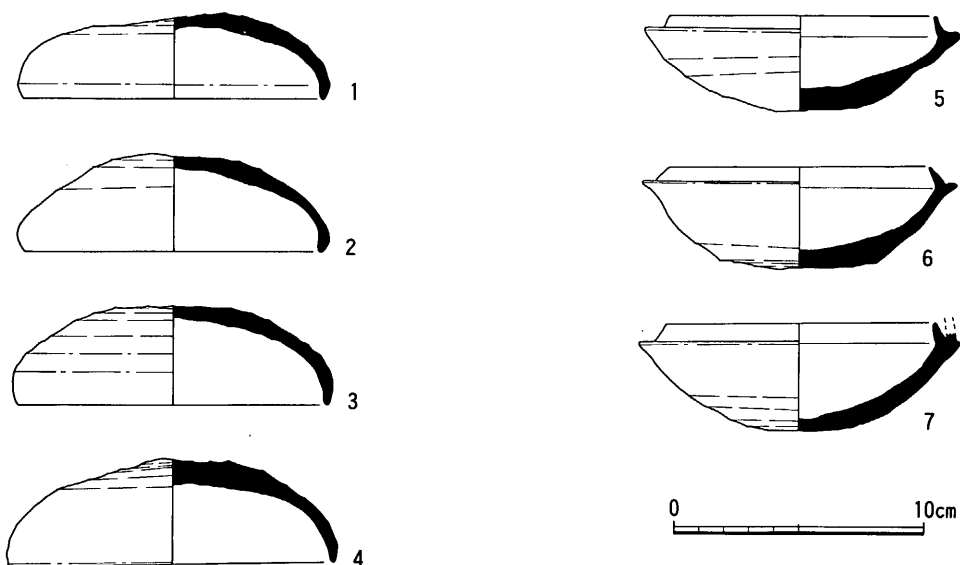
出土遺物

須恵器（第76図、図版78）

杯蓋（1～4） 全体に丸味を持つもので、天井部外面を回転ヘラケズリ、内面中心部付近をナデ、その他を回転ナデする。すべてに外面にヘラ記号を持つ。特に、1・3・4は同一の記号



第75図 31号住居跡竈断面図（1/20）



第76図 31号住居跡出土土器実測図（1/3）

である。3の外面には重ね焼きした杯身片が融着している。

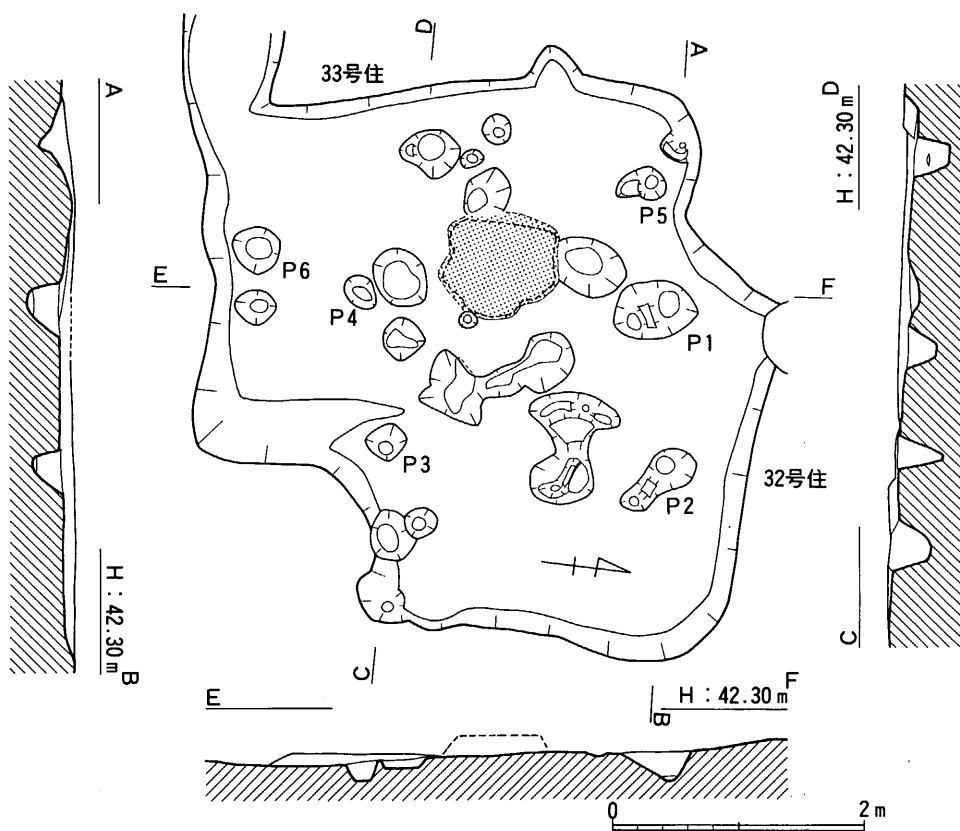
杯身（5～7） 低い立ち上がりを持つもので、7は自然釉のため不明だが、5・6とも底部外面は回転ヘラケズリする。7にははずれず蓋の一部が融着している。6の外面にはヘラ記号が見られるが、杯蓋とは違う。

土師器（第76図）

甕（8） ゆるやかに外反する口縁部とあまり張らない胴部からなるもので、口縁部内外面をヨコナデ、胴部外面をハケ目、内面をヘラケズリするものである。

32号住居跡（第77図、図版24）

31号住居跡の南西3mに位置する。33号住居跡と切り合うが、埋土では判別できなかった。中央付近の焼土を竈の跡とし、P1～P4を支柱穴と考えるとおよそ方形に近い形状が推定できる。残存部で東西長約3.1m、南北長約2.85mを測る。壁高は6～7cmほどである。床面は若干西側へ下がり気味である。柱穴は前述のとおりと考えるが、ピットが多い。支柱穴の間に深い



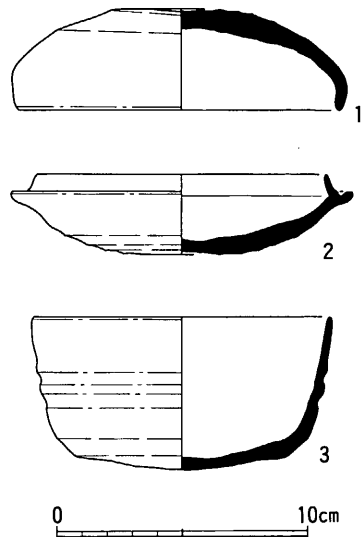
第77図 32・33号住居跡実測図（1/60）

ピットがあるが、何らかの役割を持ったものなのかもしれない。竈は中央付近の焼土塊の部分と考えるが、断ち割りしても明確な状態ではなかった。

遺物は焼土塊の東辺部分で須恵器杯蓋の完形品が伏せた状態で、他に須恵器、土師器片が出土したが、どちらに属するか決定できないので、33号住居跡の項で一括して述べる。

33号住居跡（第77図、図版24）

32号住居に切られているものである。長方形を呈する形状から竪穴住居跡としたが、竈はなく、また主柱穴も確定できないので、住居跡と断定して良いのか疑問もある。長軸（南北）方向約3.9m、短軸（東西）方向約3.0m、壁高6～10cmの規模である。床面はゆるやかながら西側が下がる。主柱穴は確定できないが、長軸方向のP5、P6の二本柱などが考えられる。



第78図 32・33号住居跡出土土器
実測図（1/3）

遺物はピットなどから土師器、須恵器が出土した。遺物について一括して記述する。

出土遺物

須恵器（第78図、図版78）

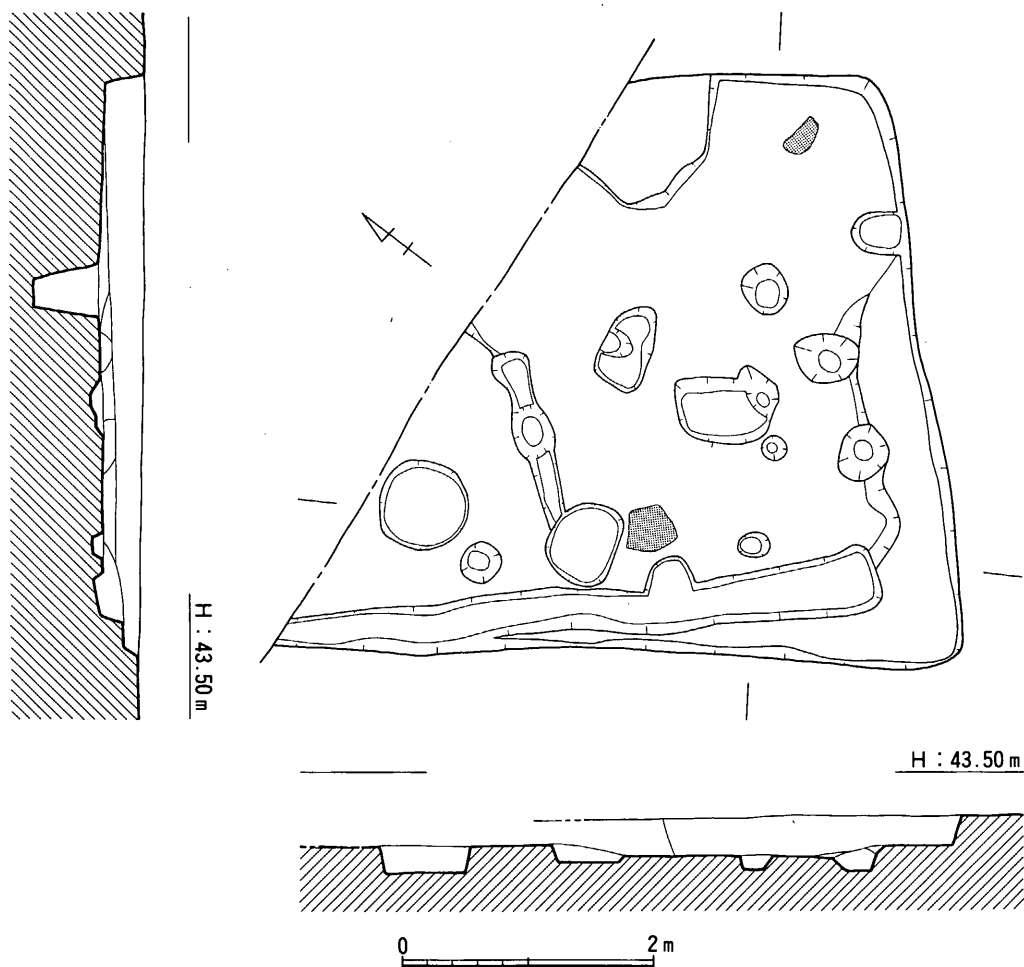
杯蓋（1） 全体に丸味を持つもので、天井部外面を回転ヘラケズリする。内面に自然釉となるべきものが液状となって大量に流れ込んで固まった状態が観察される。内外面の色調に違いのあることから身とセットで焼成されたことは明らかであるが、上記のことから蓋が下になるように置かれ、すき間から流れ込んだことが推測できる。

杯身（2） 還元化されずにぶい赤褐色をした小破片である。立ち上がりの基部内面は明瞭な稜となる。底部外面は回転ヘラケズリする。

碗（3） 杯身同様に還元化されないものであるが焼きは良い。4分の1ほどの破片である。体部に2条の沈線を持ち、底部外面はヘラケズリ後ていねいなナデを行っていると思われる。

34号住居跡（第79図）

調査区のほぼ中央で検出されたもので、35・36号住居跡を切る。北壁が発掘区外に出るため全容は不明だが、長方形を呈するものと思われる。西辺に添って小溝があるが、壁面に接する部分と離れる部分があり、住居内周溝とするには疑問がある。規模は、南壁長が約4.6m、東壁長2.0m以上、西壁長5.5m以上、壁高は東壁側約30cm、西壁側約15cmである。床面はそれほど固くない。また、東側を除く3辺周辺は中央部より若干高い。床面にピットは多く検出されたが、深くしっかりしたものはP1～P3である。しかし、あまり良い位置にあるとは思えない。



第79図 34号住居跡実測図 (1/60)

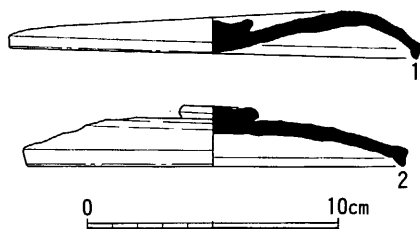
東辺に焼土の集中している部分があり、竈が作られていたものと判断できた。縦横に断ち割りする方法で調査を進めたが、大変残りの良くないものであった。また、2ヶ所で粘質土塊が検出された。

遺物は須恵器杯蓋・杯身・甕、土師器杯・碗・蓋・高杯・甕、把手等、瓦、鉄器、そして石鏃、剥片が出土している。

出土遺物

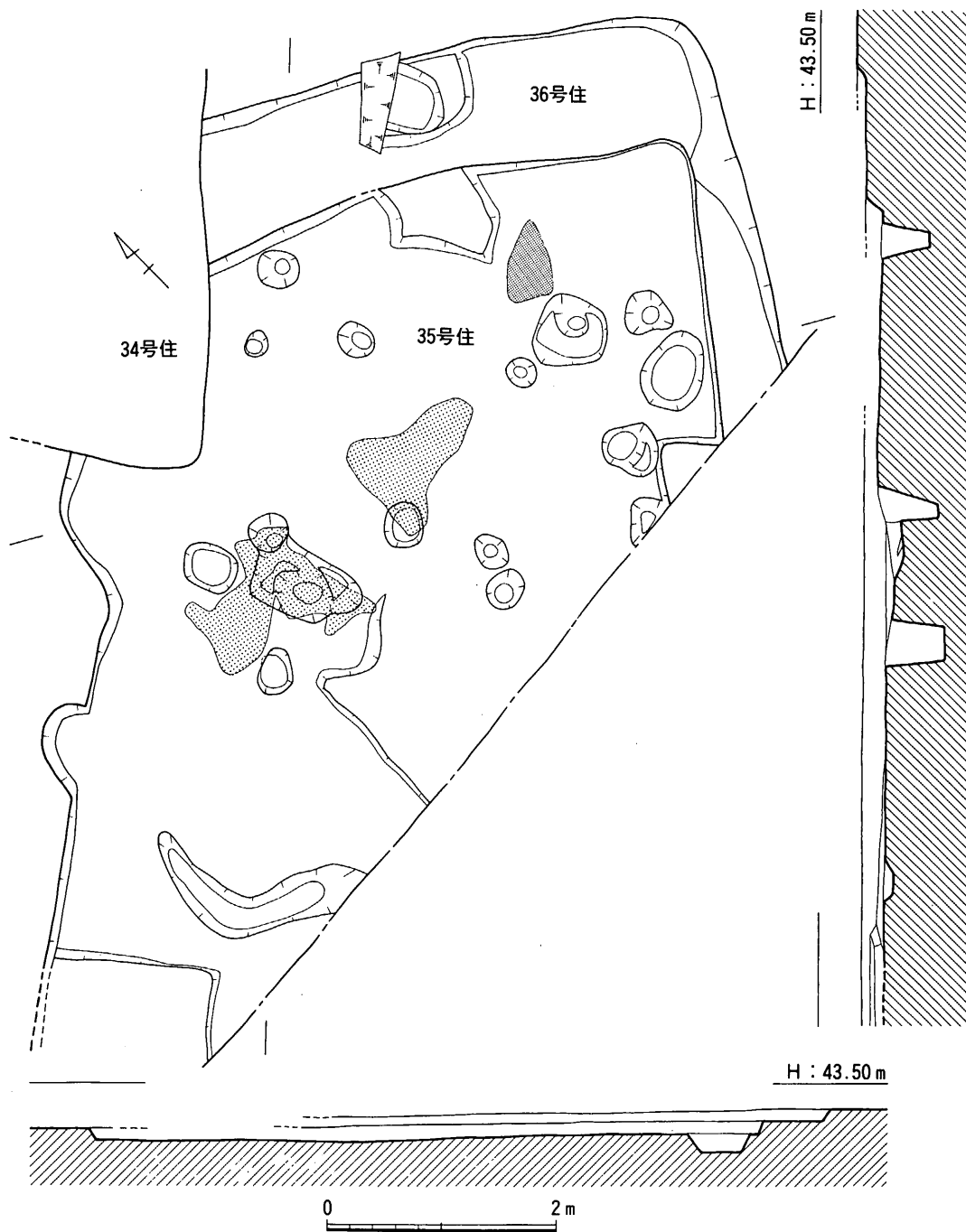
須恵器 (第80図)

杯蓋 (1) 焼きひずみがあるが、完形に近い。つまみが大きく、天井部を回転ヘラケズリす



第80図 34、35号・36号住居跡出土土器
実測図 (1/3)

る。



第81図 35号・36号住居跡実測図 (1/60)

35・36号住居跡（第81図）

検出時に判別できずにいっしょに掘り上げてしまった住居跡である。また、34号住居跡に切られていることと、西壁側が必ずしも明らかでないことなどから、規模等についても推測の部分が多い。まず北壁部分は35号住居跡のものと考えたい。また、わずかに残る西壁部分も35号住居跡のものの可能性が考えられる。推定通りだと35号住居跡は6.1m×5.5m、壁高約10cm、36号住居跡は南北長が約6mほどと考えられる。両住居跡ともに東壁中央付近と考えられる場所に焼土塊があって、竈があったと思われるが、残りは良くない。柱穴の位置は定かではない。他の住居とやや違っている点は35号住居跡中央付近に2ヶ所、両住居跡の南北壁からコブ状に出た落ち込み部分2ヶ所に焼土が観察できたことである。

出土遺物は整理箱で1箱分である。須恵器杯蓋・杯身・高杯・甕・壺、甕、土師器蓋・甕、棒状土製品、鉄器、鉄滓、白玉、瓦、石鏃、剥片が出土している。

出土遺物

装身具（第82図）

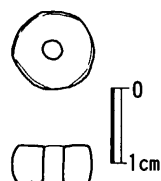
白玉 厚さが5mmとやや厚いが、白玉としてよいだろう。滑石製である。両端面は平坦で、側面はやや丸味を持つ。

須恵器（第80図、図版78）

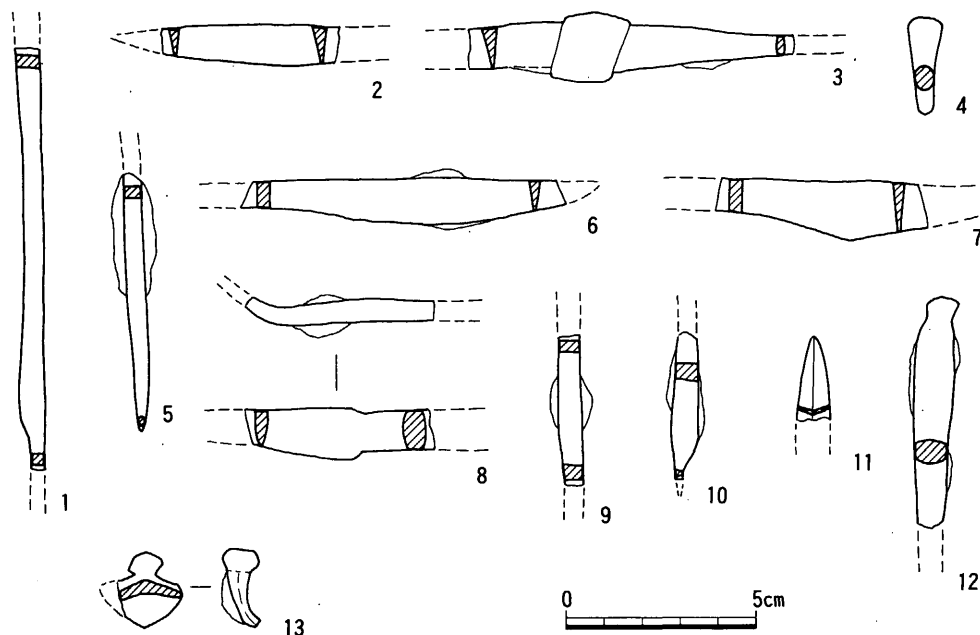
杯蓋（2） 口縁端部断面は三角形を呈し、つまみは扁平で大きい。天井部外面は回転ヘラケズリをする。

37号住居跡（第85図、図版25）

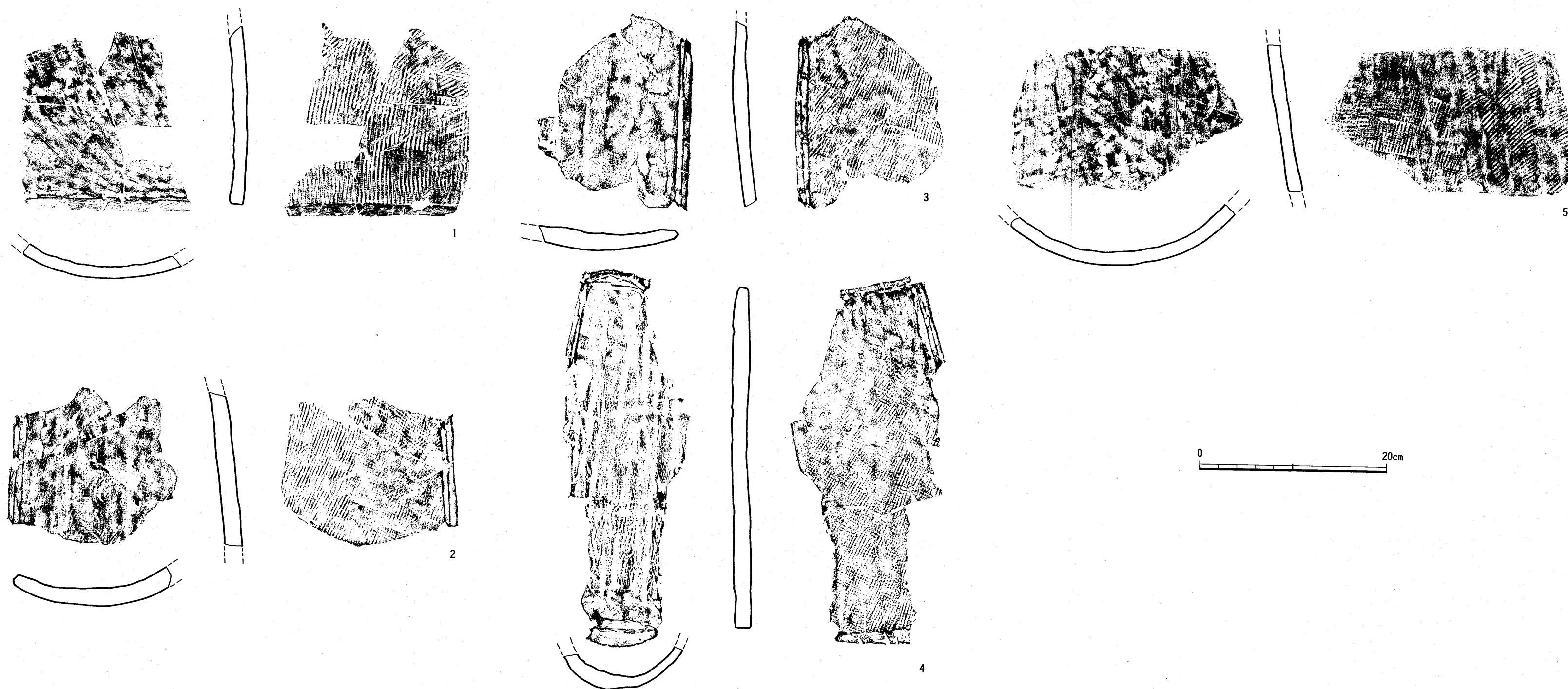
調査区の南端で検出され、南側は区域外に伸びる。本来は正方形に近い形であったと思われる



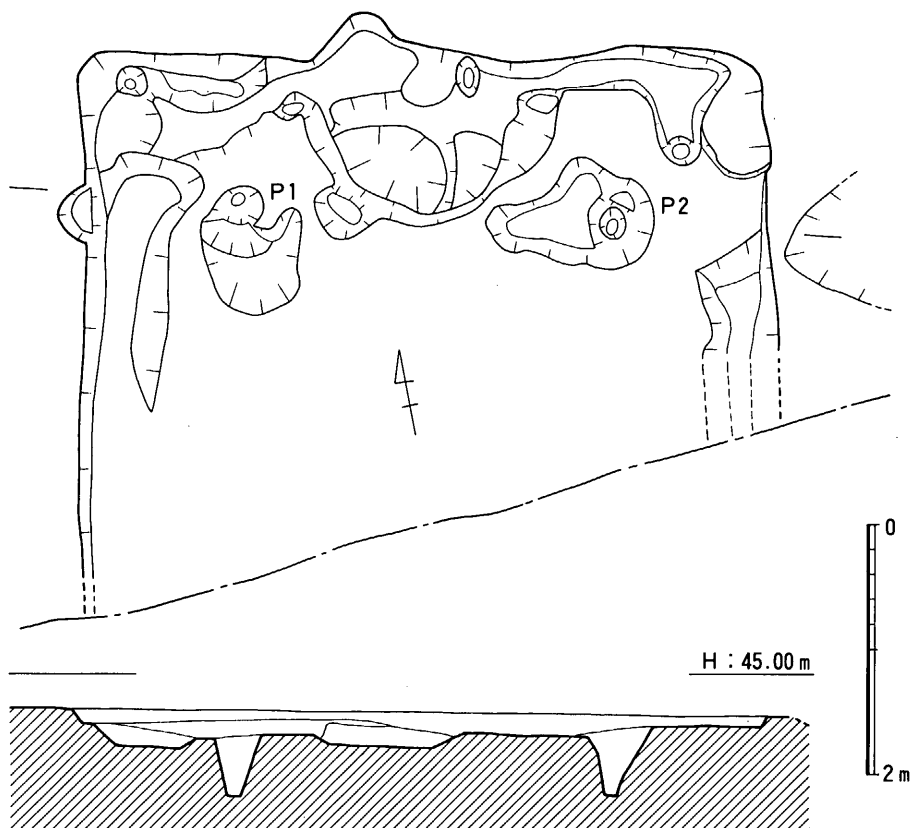
第82図 35号・36号住居跡出土装身具実測図（1/1）



第83図 住居跡出土鉄器実測図（1/2）



第84図 住居跡出土瓦実測図 (1/4)



第85図 37号住居跡実測図 (1/60)

る。壁長は北側壁で5.3mを測る。壁高は7cm～10cmである。床面はおおむね平坦である。柱穴は2本確認され、深さは0.47mと0.53mである。柱穴の他に、壁に沿って周溝が検出された。北側壁のほぼ中央部で焼土の散布を認め、これを精査したが、竈の施設を確認することはできなかった。

遺物は、埋土中から須恵器片、土師器片、縄文土器片、サヌカイト製の石鏃などが出土した。総量はポリ袋(38cm×26cm)1袋弱であるが、いずれも小片で図示できなかった。

(2) 掘立柱建物

掘立柱建物は、全部で7棟を検出することができた。いずれについても遺物は須恵器、土師器の小片が少量出土したのみであり、図示することはできなかった。

1号掘立柱建物 (第86図、図版25)

調査区のはほぼ北端部に位置する。2間×2間の総柱建物である。桁行の長さは3.9mで、柱間距離は1.9mと2.0mである。梁行の長さは3.8mで、柱間距離は2.0mと1.8mである。主軸の方位はN-46°-Eである。柱穴掘方はおおむね円形に近いが、楕円形、不整形を呈するものもある。深さは0.35m～0.55mを測る。

2号掘立柱建物 (第87図、図版26)

1号掘立柱建物の東側に位置する。2間×2間の総柱建物であるが、柱穴の心心を結ぶと必ずしも一直線にならず、また、北側の隅の柱穴の位置が南西方向にズレている。桁行の長さは

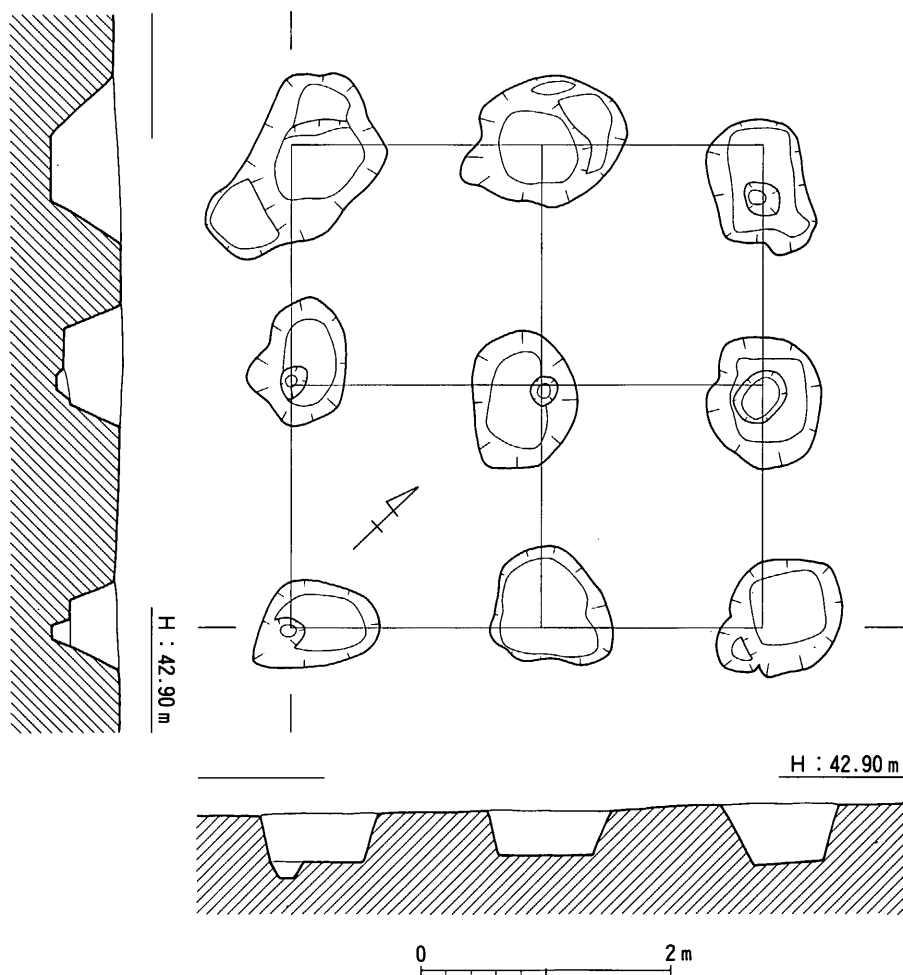
3.3m、梁行の長さは2.9mを測る。主軸の方向はN-45°-Eである。柱穴掘方は、円形の他に楕円形、不整形がある。深さは0.25m～0.8mである。

3号掘立柱建物（第88図、図版26）

調査区のやや北寄りに位置する、3間×1間の建物である。桁行の長さは6.0mで、柱間距離は2.0mである。梁行の長さは5.1mである。主軸の方位はN-7°-Eである。柱穴掘り方はおおむね隅丸方形で深さは0.3m～0.5mを測る。

4号掘立柱建物（第89図、図版27）

調査区の南部に位置する。2間×2間の総柱建物であるが、北東隅の柱穴が不規則な位置にあるため、平面プランが正方形にはならない。桁行、梁行ともに長さ3.7mを測る。主軸はN-7°-Eである。柱穴掘方は円形、隅丸方形、不整形を呈し、深さは0.4m～0.7mを測る。



第86図 1号掘立柱建物実測図 (1/60)

5号掘立柱建物（第90図、図版27）

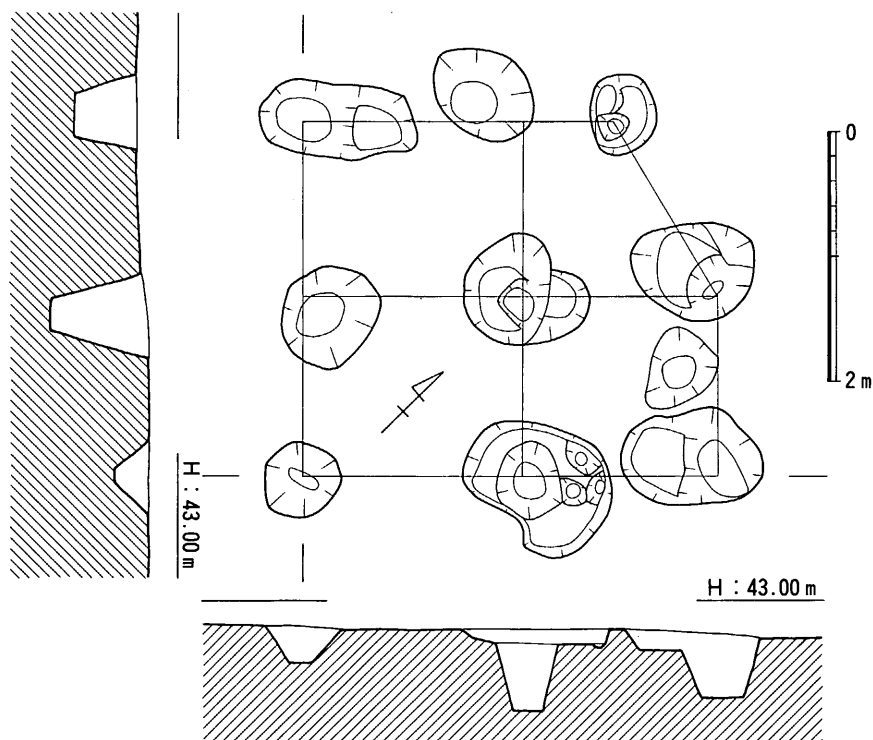
調査区の南端付近に位置し、6号掘立柱建物と重複関係にある。東側の柱穴が1個検出できなかったが、2間×2間の建物と思われる。桁行の長さは3.6mで、柱間距離はともに1.8mである。梁行の長さは3.4mで、柱間距離はともに1.7mである。主軸の方位はN-62°-Eである。柱穴掘方はおおむね円形に近いが、隅丸方形、楕円形が1個ずつある。深さは0.3m～0.5mを測る。

6号掘立柱建物（第91図、図版27）

調査区の南端付近に位置し、5号掘立柱建物と重複関係にある。4間×2間の建物で、桁行の長さは7.0m、梁行の長さは3.5mである。柱間距離は、桁行方向では1.5m、1.7m、1.8m、2.0mとまとまらないが、梁行方向では1.75mである。主軸の方位はN-80°-Eである。柱穴掘方は円形、楕円形を呈し、深さは0.3m～0.5mを測る。

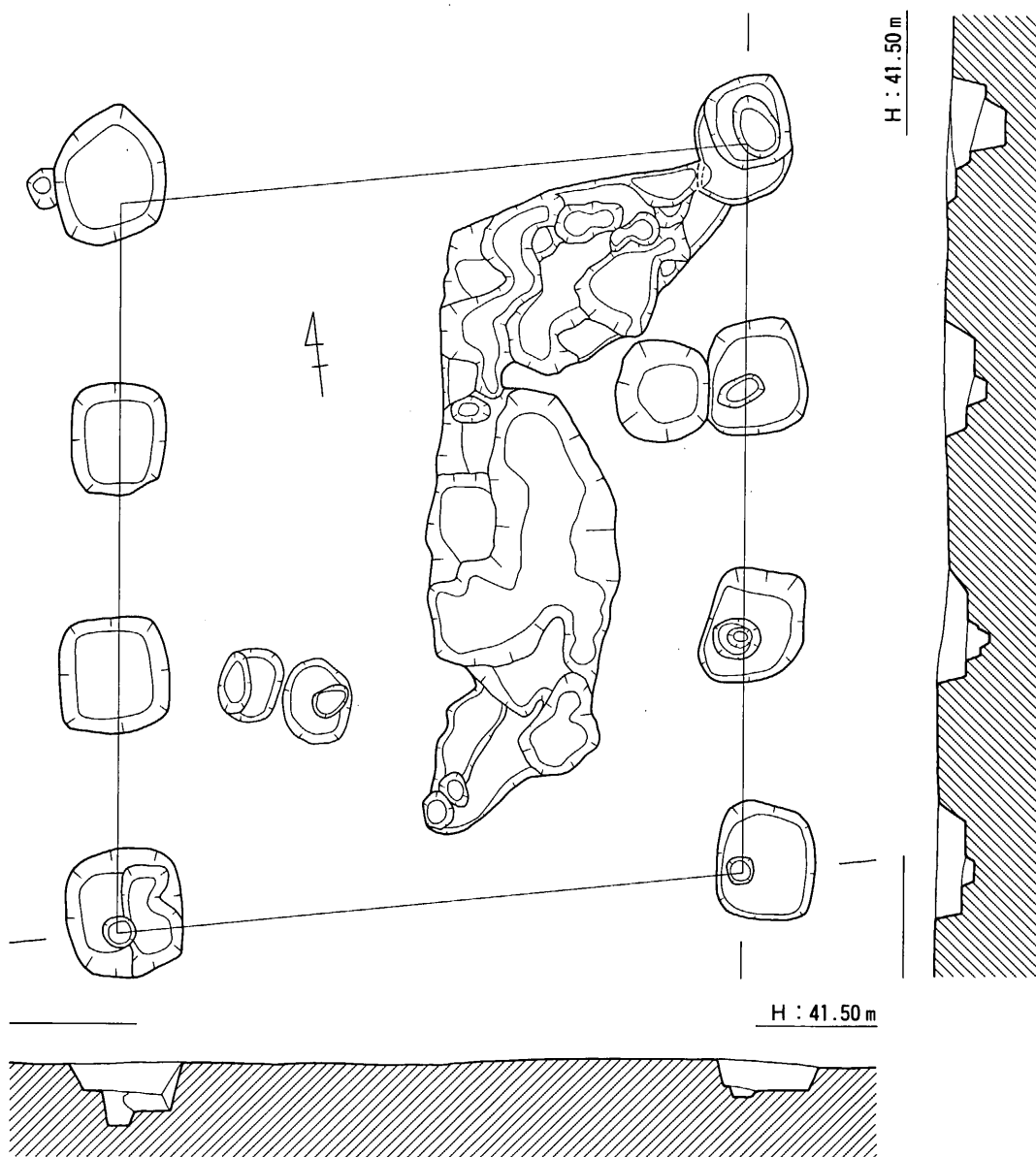
7号掘立柱建物（第92図）

調査区の南端部付近、5・6号掘立柱建物のすぐ東側にある。4間×2間の建物で、桁行の長さは8.6mで、梁行の長さは4.0mである。柱間距離は、桁行方向が1.8mと2.5m、梁行方向が2.0mである。主軸の方向はN-4°-Wである。柱穴掘方はおおよそ円形で、深さは0.15m



第87図 2号掘立柱建物実測図 (1/60)

～0.35mを測る。



0 2 m

第88図 3号掘立柱建物実測図 (1/60)

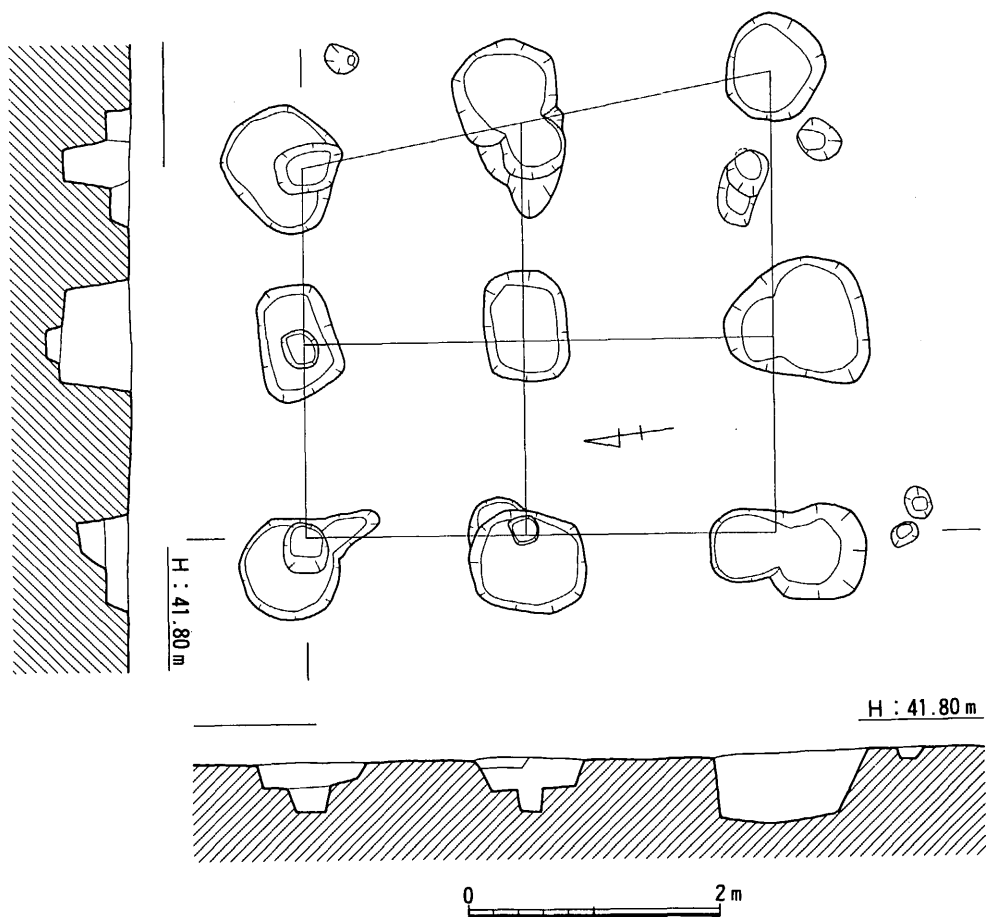
(3) 廃棄土坑 (SK)

古墳時代以降に属する土坑のうち、埋土中から多量の須恵器・土師器が、廃棄されたと考えられる状態で出土したものを、廃棄土坑（略称はSK）とした。

SK01（第93図、図版28）

調査区の北西コーナー付近に位置する。1号住居跡との距離は、最も近いところで約4.2mを測る。平面プランは不整形を呈し、上端の最大値をとると、3.45m×2.45mとなる。床には段がある。深さは、上の段までが7cm、下の段の最も下がったところで28cmである。壁は、南側では緩やかに立ち上がり、北側では途中で傾斜が変わる。また、北側壁には2段のテラスがある。

遺物は、埋土中から浮いた状態で出土した。内容は、須恵器杯蓋・杯身・皿・鉢・壺、土師器杯・碗・甕、鉄滓などである。その総量は、整理箱で1箱ほどである。なお、一部の遺物は



第99図 4号掘立柱建物実測図 (1/60)

遺構面よりも上に盛り上がるような状態で検出された。

出土遺物

須恵器（第94図、図版79）

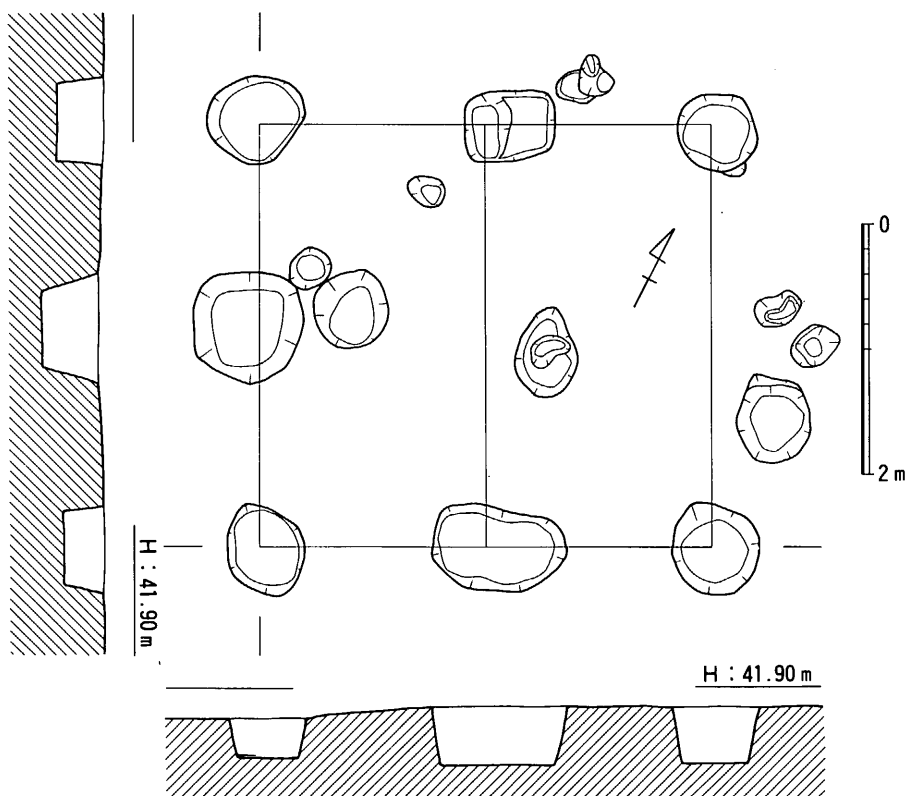
杯蓋（1） 天井部外面をヘラ切り後粗くナデる。つまみは貼り付けである。天井部と体部の境は明瞭である。

杯身（2～5） 高台を持つものと持たないものがある。2・3は体部が直線状に開く。ともに底部外面はヘラ切り後粗くナデる。他は回転ナデとナデを施す。2は高台を貼り付けた後の調整が粗い。高台の付かないもののうち、5は体部に屈折がある。底部外面は4・5ともにヘラ切り後粗いナデを施す。

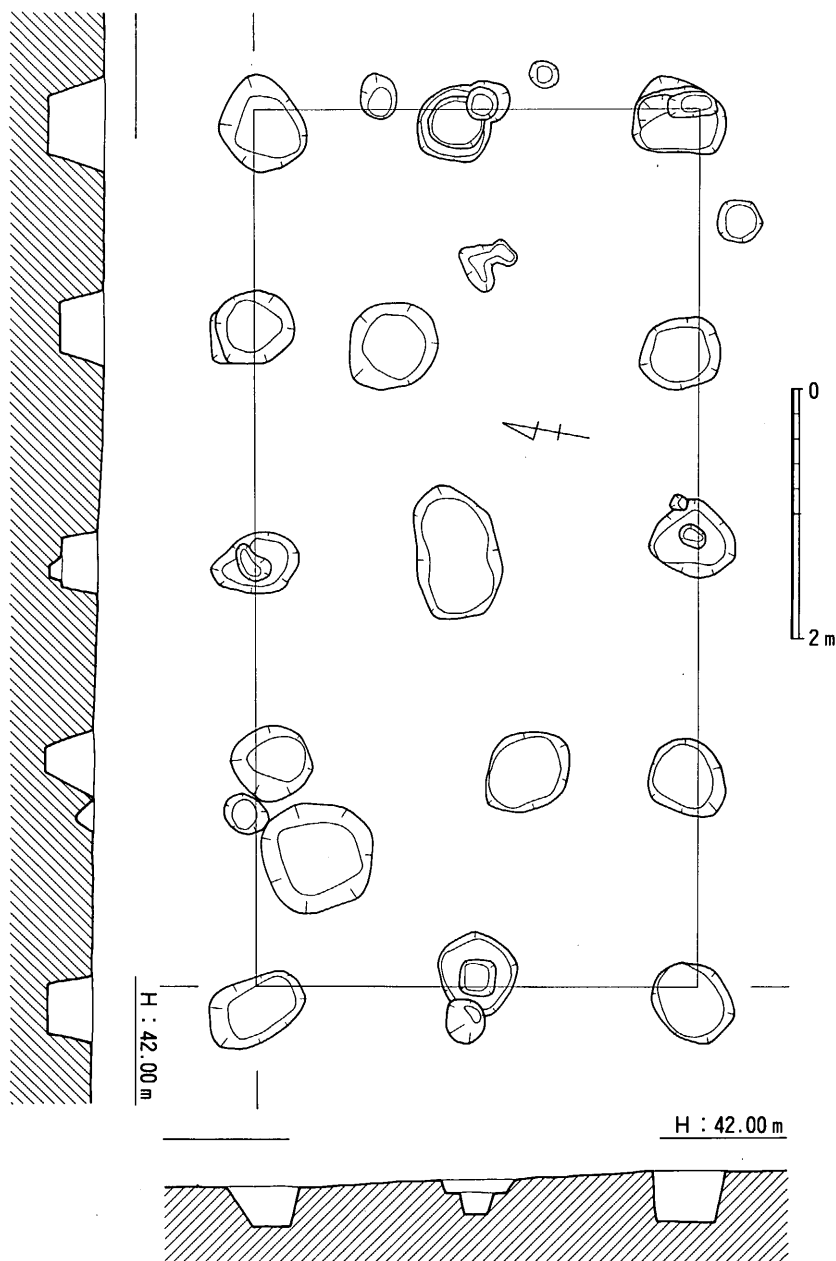
皿（6・7） 6の底部外面には回転ヘラケズリを施すが、6・7ともに焼成不良で器表が磨滅しているため、それ以外の調整は不明である。

土師器（第94図）

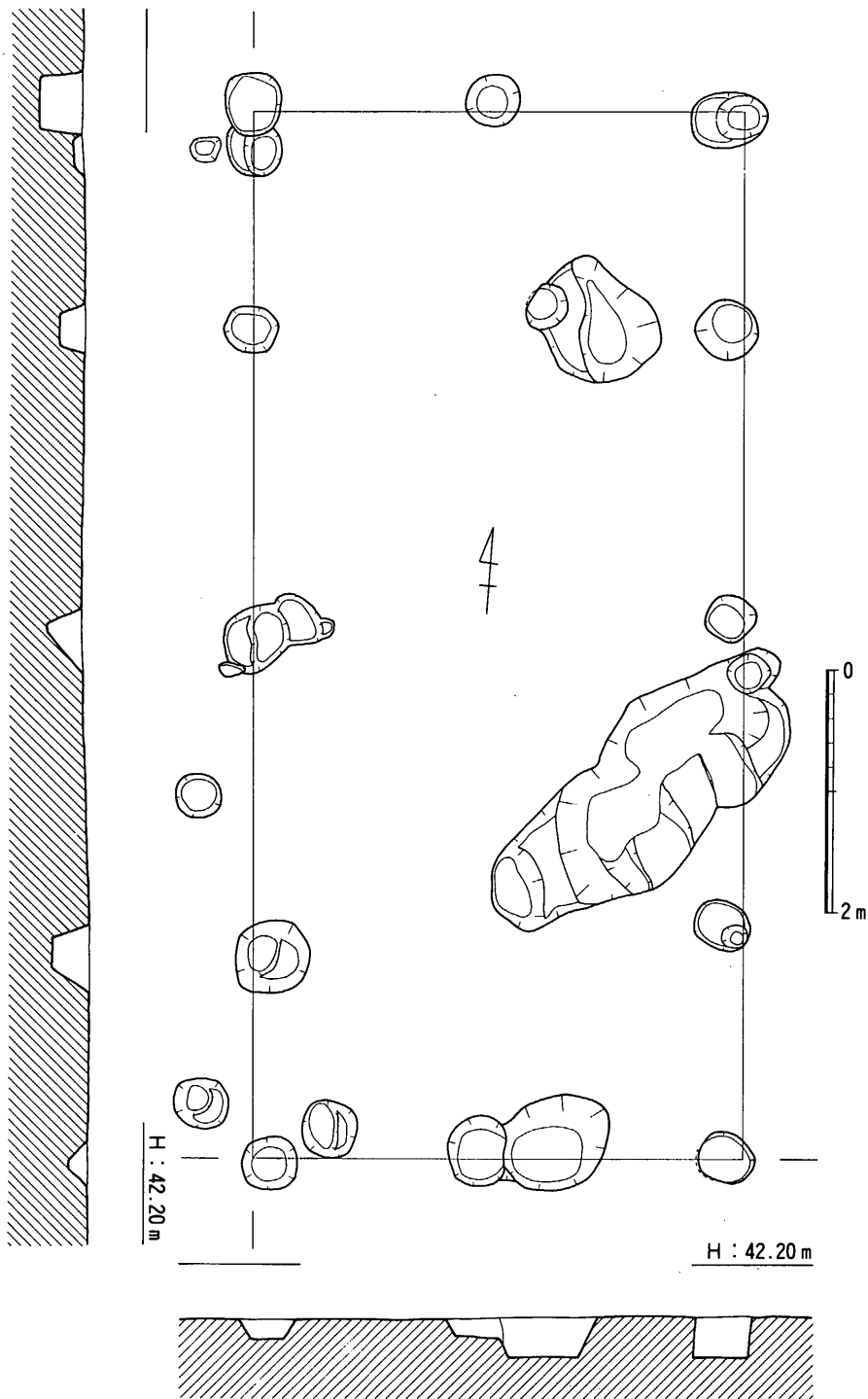
杯（8） 内湾気味に立ち上がる体部を持つ。底部外面に回転ヘラケズリ、体部外面に回転ナデを施す。内面は、底部、体部ともヘラミガキで仕上げる。



第90図 5号掘立柱建物実測図 (1/60)



第91図 6号掘立柱建物実測図 (1/60)



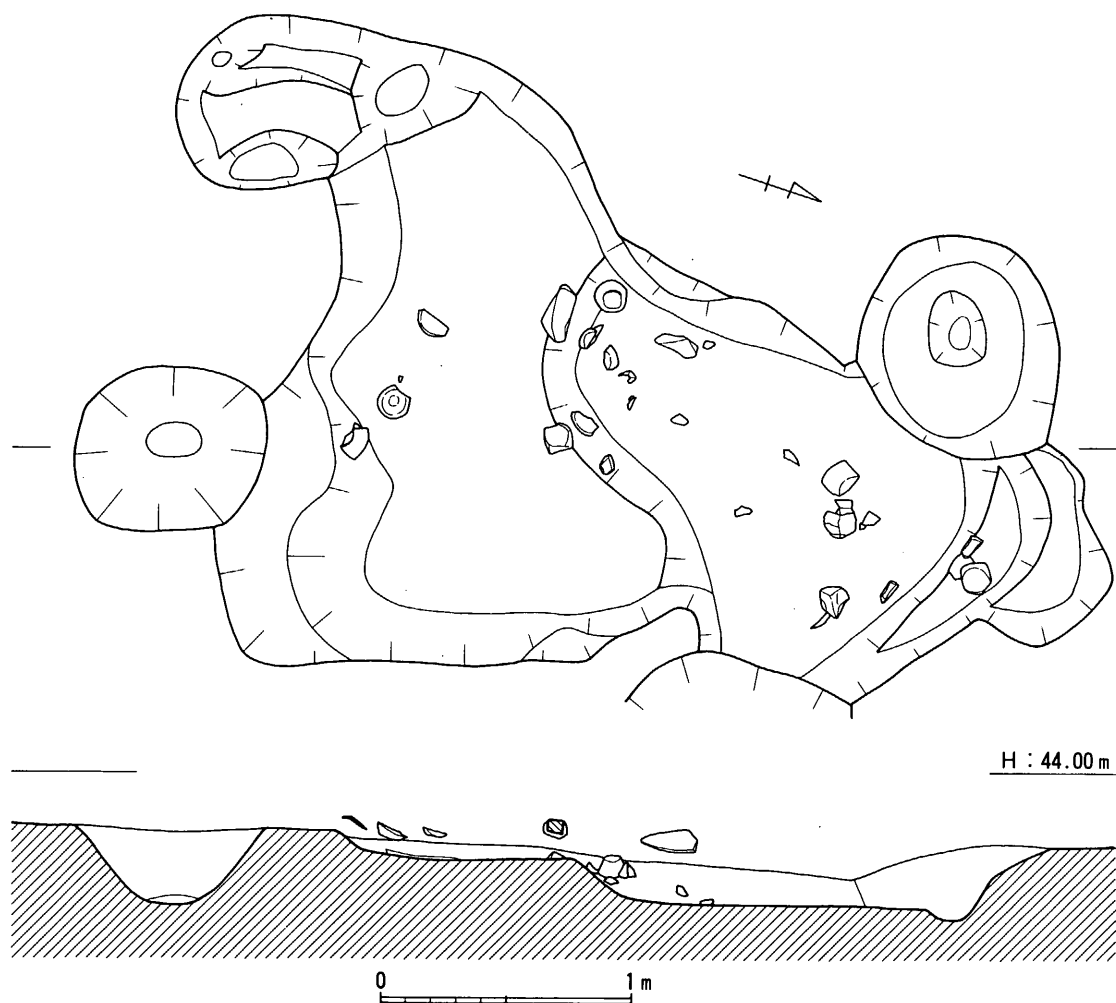
第92図 7号掘立柱建物実測図 (1/60)

椀(9) やはり内湾気味に立ち上がる体部を持つ。高台を貼り付けた後の回転ナデ調整が粗い。底部外面を除いた各部には、部分的にヘラミガキの痕跡が見られる。

壺(10) 小型の短頸壺である。内外面とも磨滅しており調整は不明である。

S K 03 (第95図、図版28)

調査区の北西コーナーに位置する。S K 01との距離は約9 m、1号住居跡との距離は約7 mである。平面プランはゆがんだ円形を呈する。上端の長軸方向で2.67m、短軸方向で2.3mを測る。床はほぼ平坦で、ピットが1個確認された。深さは0.5m弱である。壁の立ち上がりは、北側壁で約60°を測るが、南側では比較的緩やかである。また、南側壁には3段のテラスがある。



第93図 S K 01実測図 (1/30)

遺物は、埋土中から浮いた状態で出土した。須恵器杯蓋・杯身・皿・高杯・鉢・壺・甕、土師器甕、縄文土器、石鏃、黒曜石の剝片、鉄器などである。その総量は、整理箱で2箱弱である。

出土遺物

鉄器（第96図、図版115）

鏃（1） 茎部の破片であろう。残存長6.9cm。

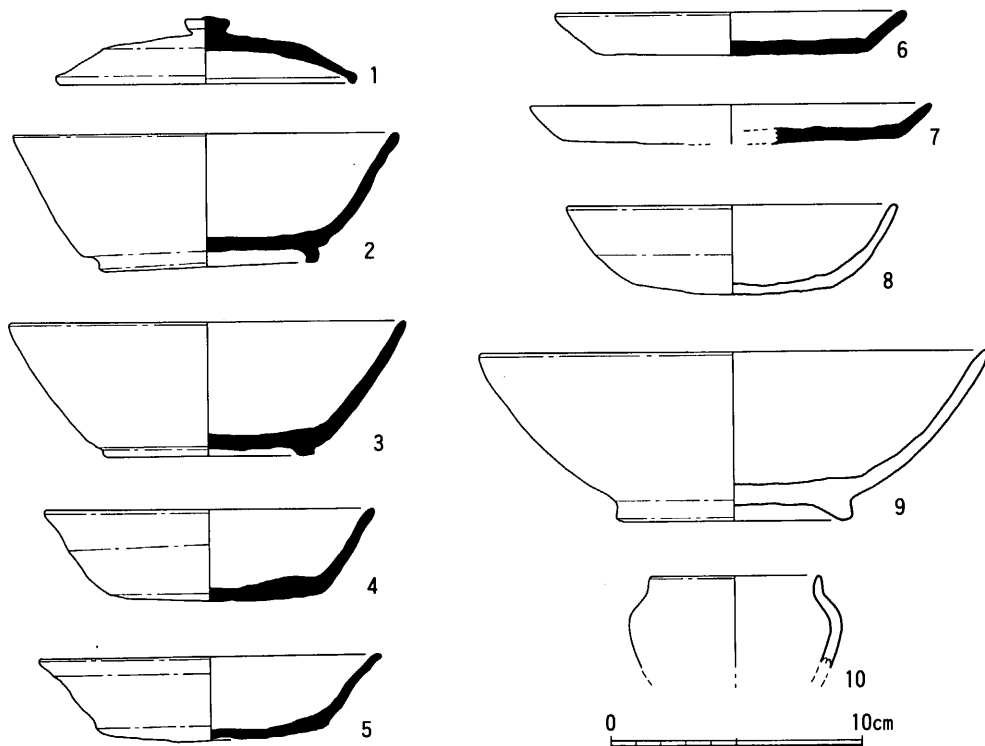
刀子（2） 刃部の破片であろう。残存長7.3cm。

須恵器（第97・98図、図版79）

杯蓋（1） 平坦な天井部は、ヘラ切り後粗くナデる。つまみを貼り付けた後の回転ナデ調整も粗い。口縁部外面には重ね焼きの痕跡が明瞭である。

杯身（2～5） 2～4は低い高台が付く。いずれも、底部外面をヘラ切り後粗くナデ、他の部分に回転ナデとナデを施す。高台貼り付け後の調整は、2は丁寧であるが、3・4は粗い。3の高台の豊付には、ヘラ状の工具で刻みを入れている部分がある。5のみ高台が付かないが磨滅が激しいため調整は不明である。

鉢（6・7） 6は口径16.9cm、器高7.5cmを測る。体部は直線的に外に開き、口縁部がわずか



第94図 SK01出土土器実測図（1/3）

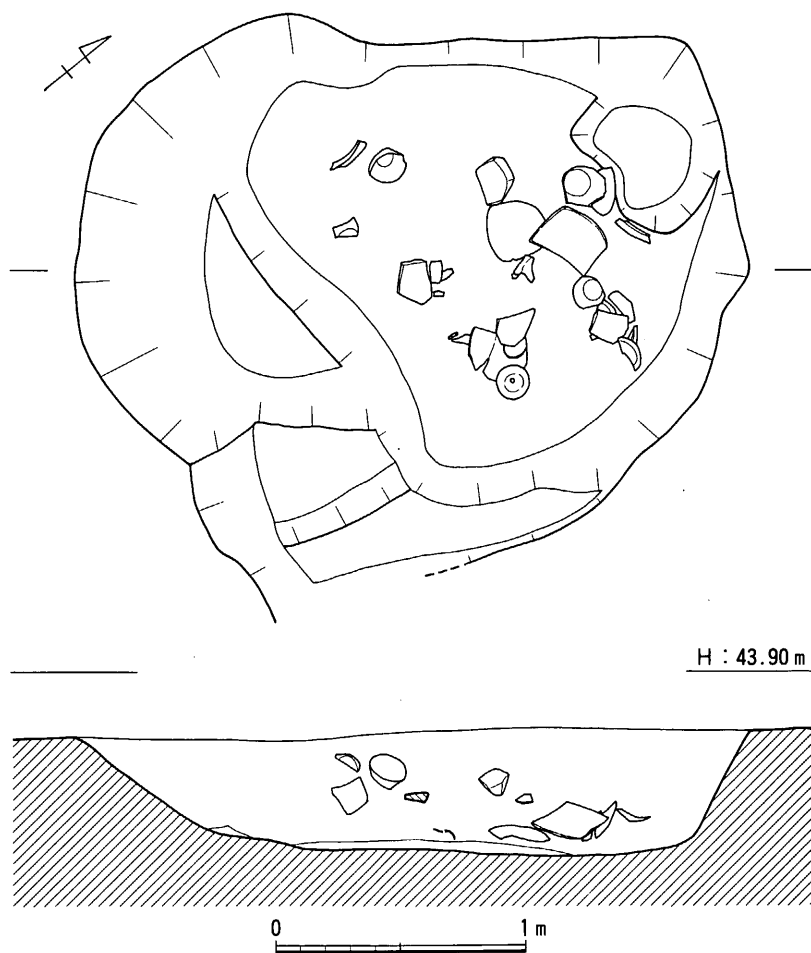
に内傾する。磨減が激しいため調整は殆ど不明だが、底部外面にヘラ切り後粗いナデ、体部内面に回転ナデの痕跡が見られる。7は焼成不良のため明褐色を呈しており、須恵器か土師器か迷うものであるが、胎土と調整から須恵器と考えた。口径26.0cm、器高12.7cm、高台径12.4cm、高台高1.1cmを測る。底部外面にはヘラ切り後粗いナデを施し、高台は貼り付け後回転ナデする。体部は直接的に開き、口縁部を水平に引き出す。体部内外面の調整は回転ナデ、底部内面はナデで仕上げる。

甕（8） 胴部下半以下を欠く。短い口頸部の内外面を回転ナデする。胴部外面は格子目叩き、内面は同心円状当て具痕をナデ消しているが、胴部内面下位と上位では異なる当て具が使用されている。そのため、下位の当て具痕は一般的なものであるが、上位では同心円状の中心が特に目立つ結果となっている。

土師器（第99図、図版79）

蓋（9） 天井部外面には回転ナデを施し、つまみ貼り付け後の調整も丁寧である。体部内外面には、部分的にヘラミガキの痕跡が見られる。

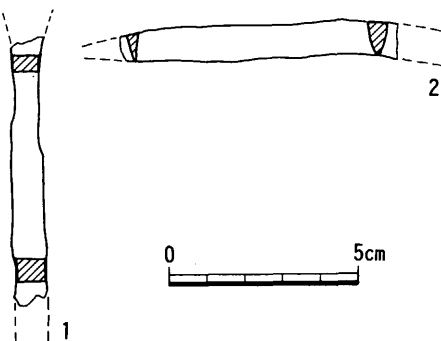
鉢（10） 形態的には7ときわめてよく似ているが、調整技法から明らかに土師器である。体部はごくわずかに内湾気味に伸び、口縁部直下で急激に外反し、端部は上方に引き出され、断面三角形を呈する。



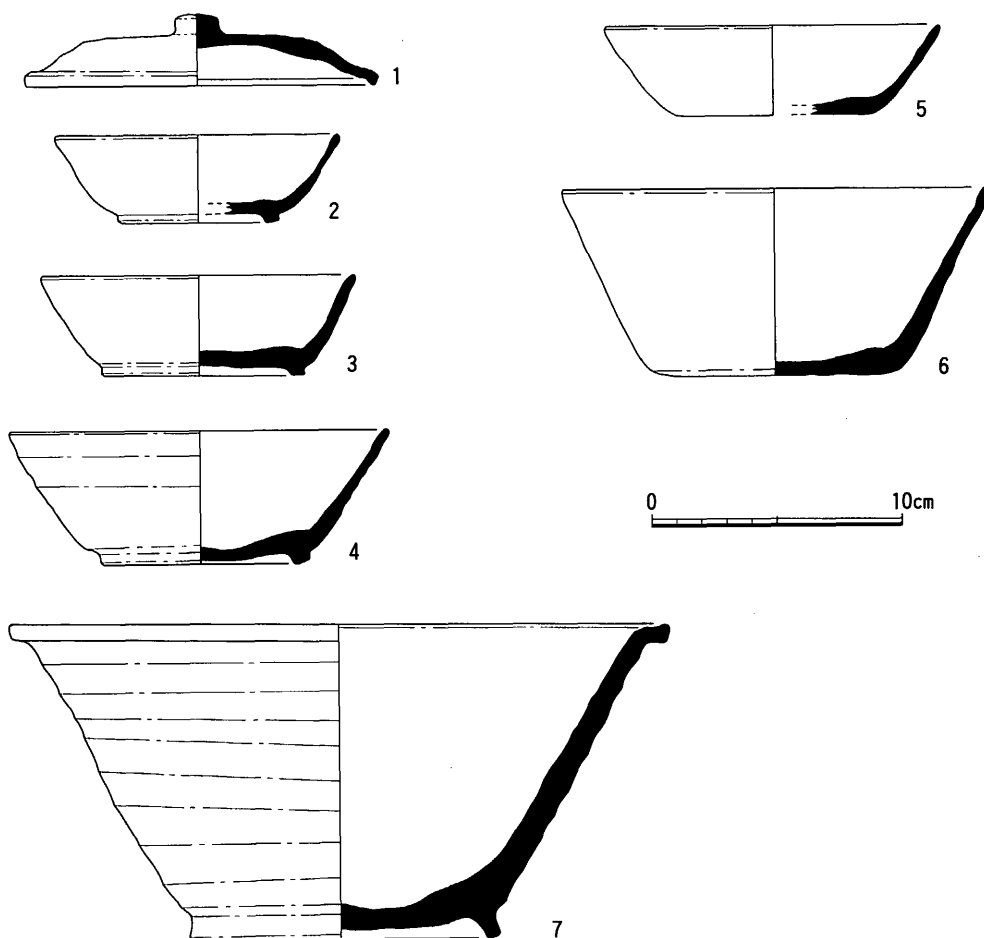
第95図 S K03実測図 (1/30)

各部の調整は、底部外面はヘラ切り後丁寧にナデ、高台貼り付け後は回転ナデを行う。体部外面は回転ヘラケズリの後ヘラミガキ、外に開いている部分は内外面とも回転ナデである。体部内面には回転ナデの後ヘラミガミを施し、底部内面はナデで仕上げる。なお、本体に接合しない口縁部の破片があり、それには内側から外側に向けての穿孔がある。

壺 (11) 口頸部内外面をヨコナデし、胴部外面には縦方向のハケ目、内面にはヘラケズリを施す。胎土中に微小な雲母片が含まれる。



第96図 S K 03出土鉄器実測図 (1/2)



第97図 S K 03出土土器実測図① (1/3)

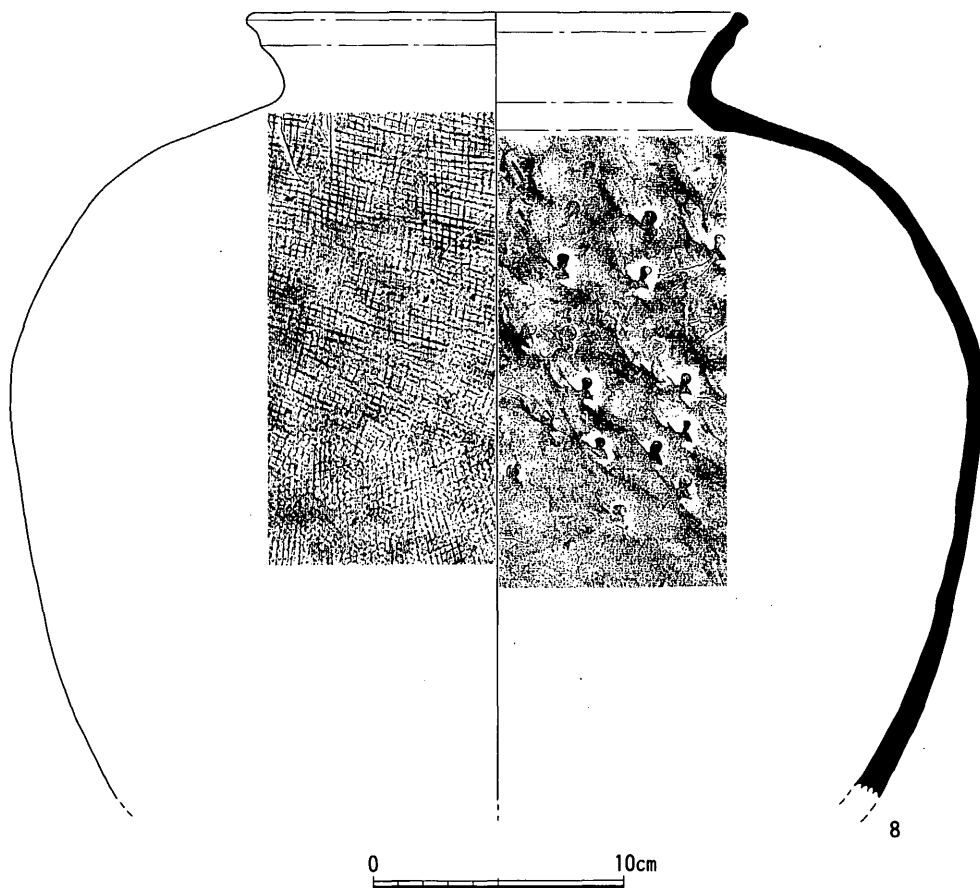
S K04（第100図、図版29）

調査区の南東に位置し、また本遺構の南東部分は調査区域外に伸びている。そのため、本来の平面プランは不明であるが、調査区域内で確認された部分をもとにすると、隅丸方形に近い不整形を呈したとも考えられる。確認された部分については、上端の最大値が3.6m×2.35mを測る。また、深さの最大値は0.6mである。最も深い部分を床と考えると、北側は3段のテラスを形成しながら緩やかに立ち上がる。南側にもテラスが1段あり、30°～40°の傾斜である。

遺物は、埋土中から浮いた状態で出土した。内容は、須恵器杯蓋・杯身・高杯・鉢・甕、土師器皿・甕などである。その総量は、整理箱で2箱弱である。

出土遺物

須恵器（第101図）



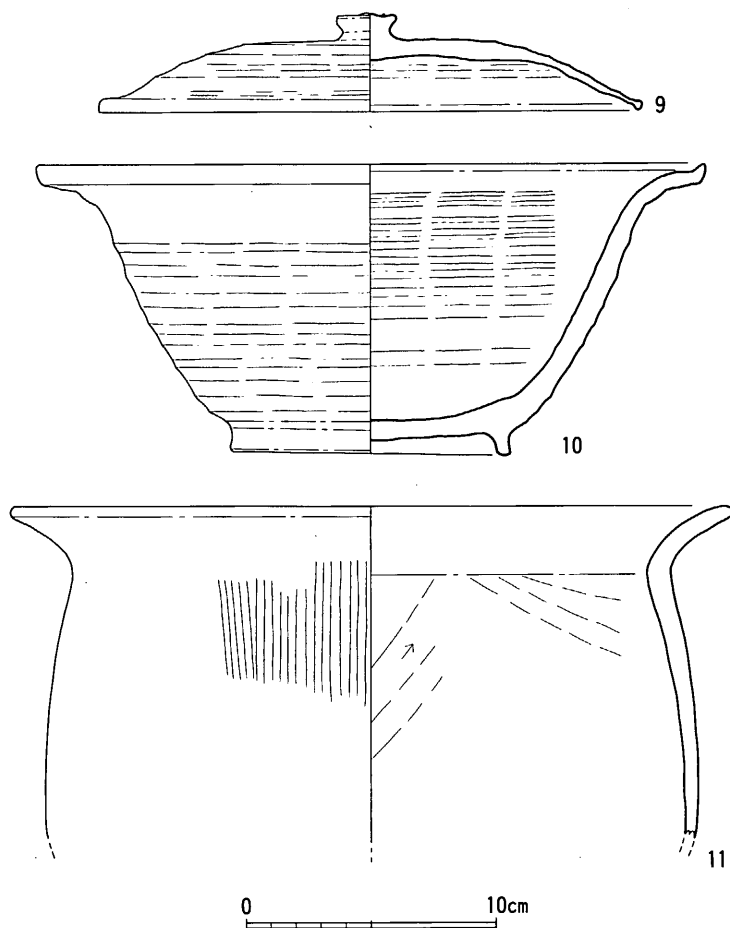
第98図 S K03出土土器実測図②（1/3）

杯蓋（1・2） 1はつまみが付かない。2は天井部中央が欠けているため、つまみの有無は不明である。1の天井部外面はヘラ切り後粗くナデ、2は回転ヘラケズリを施す。他の部分は回転ナデとナデで仕上げる。

杯身（3～8） 3、5は底部と体部の境に、4はその部分よりやや内側に高台が付く。4は底部外面に回転ヘラケズリを施す。6は底部がやや丸味を持ち、7・8は平坦である。いずれも底部外面はヘラ切り後粗くナデる。7は外面に灰をかぶっている。

S K 05（第102図、図版29）

調査区の南東、13号住居跡のすぐ東に位置する。両者の距離は、最も近い部分で約1.5mである。平面プランは円形に近く、上端径で3.15m×3.1mを測る。深さは0.5m強である。床は平坦ではなく、緩やかな凹面を呈する。また、壁も緩い曲面をもって立ち上がる。南側壁にテラスが2段ある。



第99図 S K 03出土土器実測図③（1/3）

遺物は埋土中から浮いた状態で出土した。その内容は、鉄刀子、須恵器杯蓋・杯身・托・高杯・すり鉢・壺・甕、土師器碗・高杯・甕・甕、砥石片、黒曜石の剥片などである。総量は整理箱2箱ほどであるが、細片が多く図示できるものは少なかった。

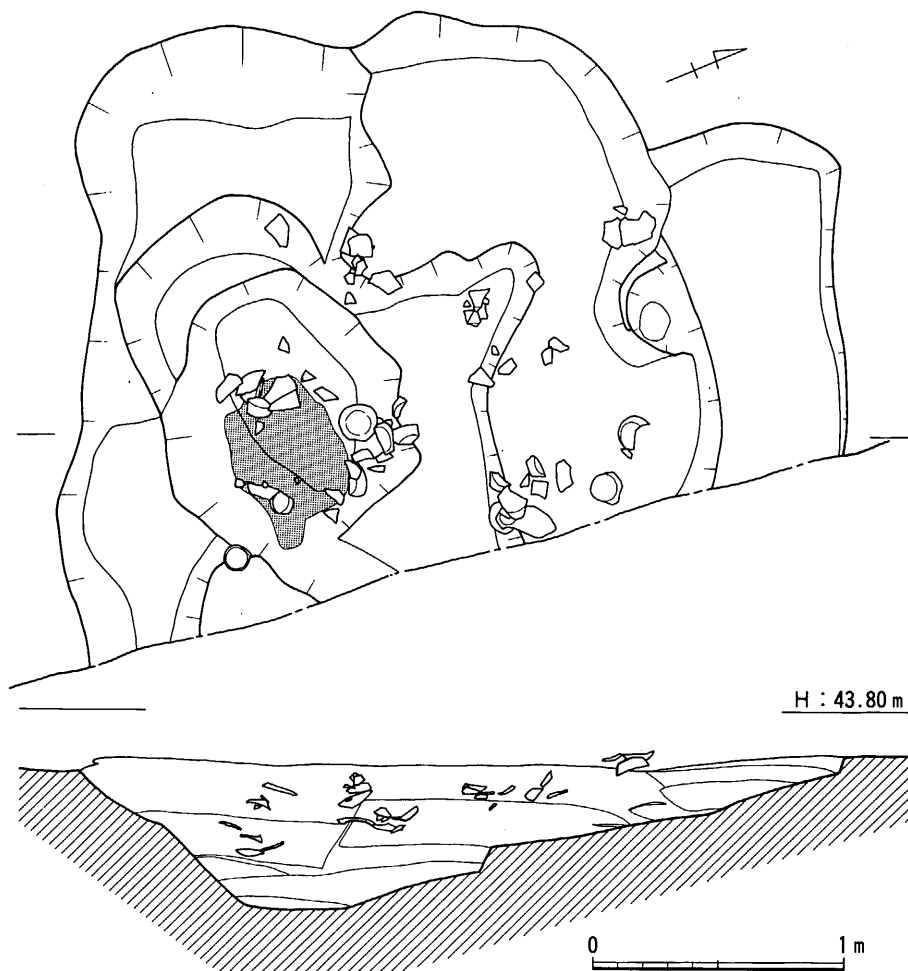
出土遺物

鉄器（第103図、図版115）

刀子 茎部を一部欠いている。刃部は錆が著しい、関は背部では明瞭であるが、刃部ではわかりにくい。残存長10.1cmを測る。

須恵器（第104図）

杯蓋（1・2） いずれも天井部外面に回転ヘラケズリを施し、その他の部分を回転ナデとナデで仕上げる。つまみは貼り付けた後、回転ナデで調整する。



第100図 SK04実測図 (1/30)

杯身（3） 底部外面はヘラ切り後粗くナデ、他の部分を回転ナデとナデで仕上げる。高台は貼り付け後、回転ナデで調整する。外面は、体部、底部、高台、疊付まで灰をかぶっている。

托（4） 皿状土器の上面に、短い高台状の杯受突起を付する。杯受突起の先端は平坦である。皿状土器は、口縁端部付近でやや上方に屈曲し、端部は丸く仕上げる。底部には低い高台が付く。調整は、底部外面に回転ヘラケズリ、他の部分に回転ナデを施す。

土師器（第104図）

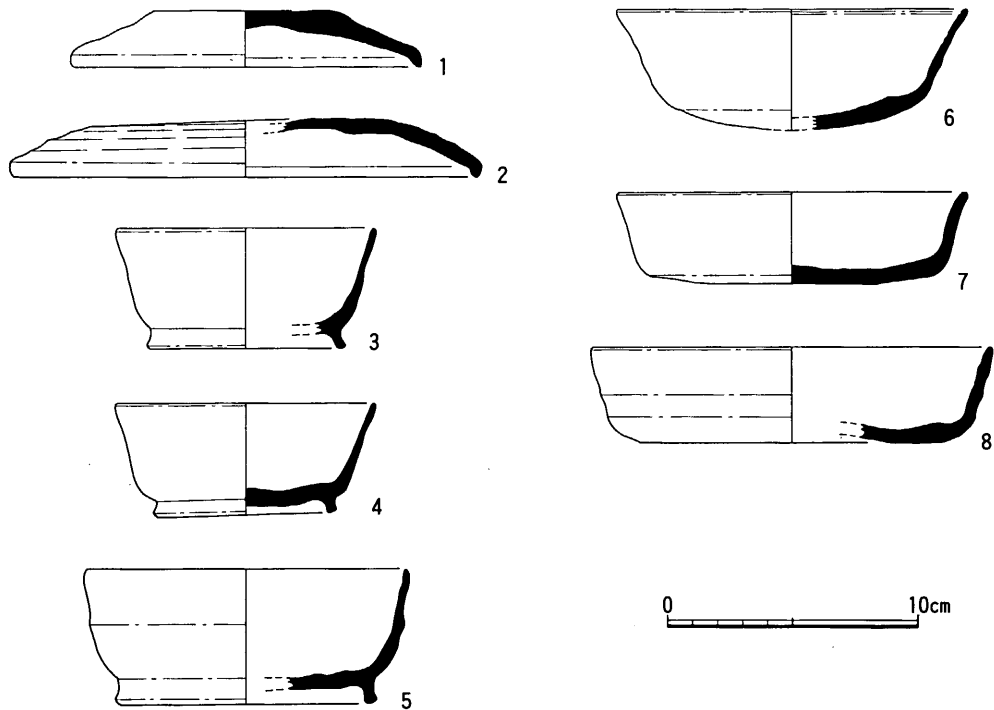
甕（5） 内外面ともに磨滅が著しく、調整が殆ど不明であるが、頸部外面にヨコナデ、胴部内面にヘラケズリの痕跡がわずかに見られる。胴部外面に黒斑がある。

砥石（第105図、図版113）

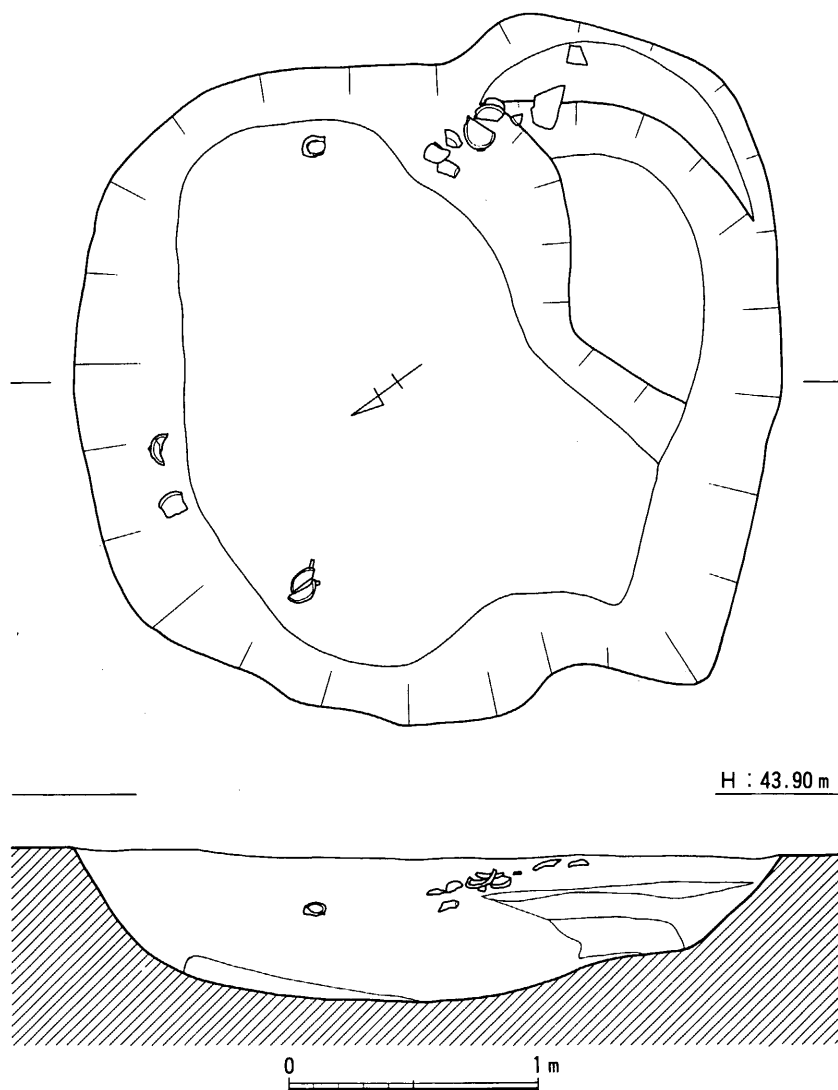
長方形を呈し、現存長4.8cm、幅3.3cm、厚さ2cmの大きさである。3面使用している。

S K 06（第106図、図版30）

調整区の東端部付近、13号住居跡の北側に位置する。両者の距離は3mほどである。平面プランは隅丸方形に近い形を呈する。上端の対角線間で2.5m×2.5mを測る。床には緩い段があり、深さは最大で0.4mである。壁は、傾斜角40°～45°で立ち上がる。また、壁と床にはあわせて5個のピットが確認された。



第101図 S K 04出土土器実測図（1/3）



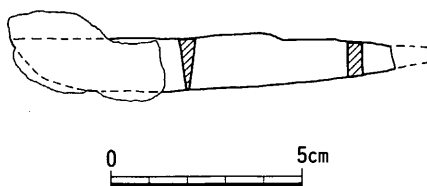
第102図 S K05実測図 (1/30)

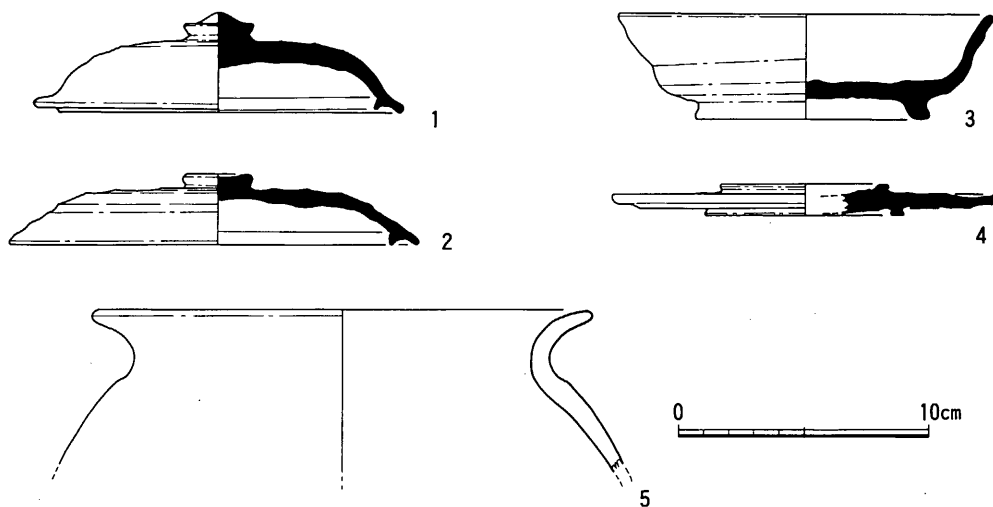
遺物は、埋土中から浮いた状態で出土した。内容は、須恵器杯蓋・杯身・高杯・皿・鉢・壺・甕、土師器杯・碗・皿・高杯・甕、黒色土器片、黒曜石の剝片などである。その総量は、整理箱2箱強である。

出土遺物

須恵器 (第107図、図版79)

杯蓋 (1・2) いずれも低く小さいつまみが付く。 第103図 S K05出土鉄器実測図 (1/2)

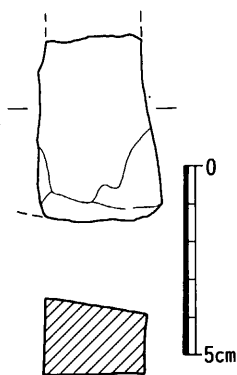




第104図 S K05出土土器実測図 (1/3)

天井部外面はヘラ切り後粗いナデを施す。1は内面、2は外面に重ね焼きの痕跡が明らかである。

杯身 (3～7) 3～6に低い高台が付くが、器高の低い3～5においては、底部と体部の境よりも内側に付いている。3～7のいずれも、底部外面の調整はヘラ切り後ナデであり、5と6には板状圧痕が見られる。3は焼けひずみが激しく、底部外面に重ね焼きの痕跡が残る。7は内外面とも火罨があり、体部外面に重ね焼きの痕跡が見られる。



第105図 S K05出土土器製品実測図 (1/2)

皿 (8・9) いずれも外反気味に開く短い体部を有する。底部外面はヘラ切り後粗くナデる。7には板状圧痕が見られる。6は口縁部内外面に、7は底部内面に重ね焼きの痕跡が見られる。

鉢 (10) 底部を欠いている。平坦な口縁部を内傾する。調整は、胴部外面下位に回転ヘラケズリを施し、その他の胴部外面は粗い回転ナデ。口縁部内外面と胴部内面には丁寧な回転ナデを行う。

土師器 (第107図、図版79)

杯 (11) 底部外面に回転ヘラケズリ、その他の部分にはヘラミガキを施す。

手捏ね土器 (12) 口径2.8cm、器高1.6cmを測る。器表面がやや荒れている。

甕 (13) 口頸部外面をヨコナデ、内面は横方向のハケ目の後でヨコナデする。胴部外面は縦方向のハケ目、内面はヘラケズリで調整する。

SK07 (第108図、図版30)

調査区の北東部に位置する。14号住居跡の北であり、両者の距離は約5.5mである。楕円の一端をつぶしたような平面プランを呈し、上端の長軸、短軸は4.25m×2.25mを測る。床には段があり、深さは最大で0.73mである。壁の傾斜は40°～45°であり、南側壁は緩い曲面をもって立ち上がる。溝03と切り合い関係にあるが、発掘調査の段階では両者の新旧関係を明らかにすることができなかった。

遺物は、埋土中から浮いた状態で出土した。そのうち特に遺物が集中する部分は、遺物どうしが密着しており、その間には埋土が存在しないような状態であった。その内容は、鉄刀子・鉄製紡錘車、須恵器杯蓋・杯身・皿・蓋・鉢・壺・平瓶・横瓶・甕、土師器杯・皿・高杯・甕、縄文土器、黒曜石の剥片、土製紡錘車などである。総量は整理箱で13箱ほどである。

出土遺物

鉄器 (第109図、図版115)

鎌 (1) 片刃箭式に属する。

残存長は5.0cmである。

刀子 (2・3) 2は茎部の一部を欠く。残存長は12.9cm。

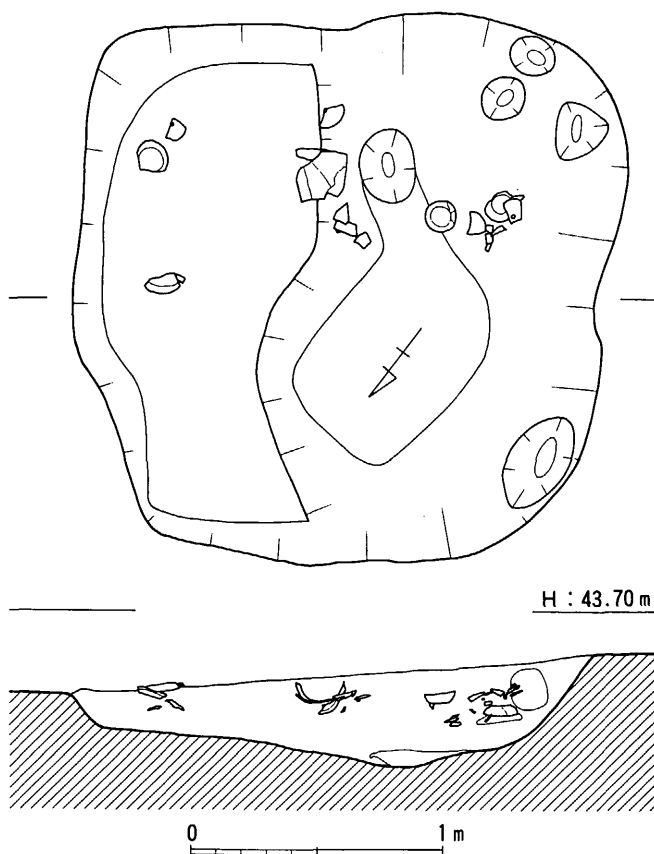
3は刃部から茎部にかけての破片で、関は両側に付く。残存長3.8cm。

鎌 (4) 曲刃鎌の刃部の破片と思われる。残存長は4.9cmを測る。

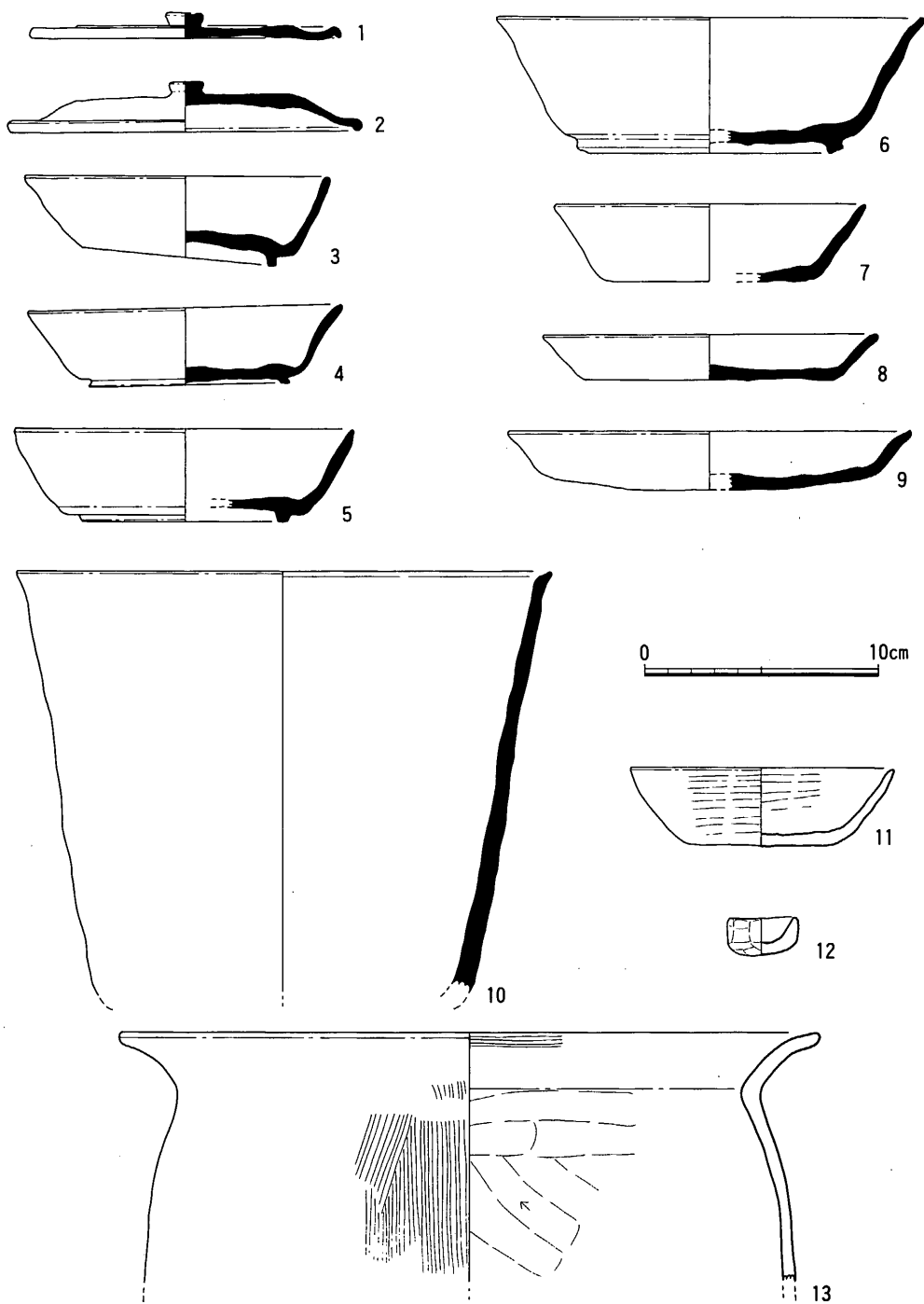
須恵器 (第110～112図、図版79・80)

杯蓋 (1～7) 2の端部はやや下に引き出されているが、他ではおおむね丸く収めている。6のみ天井部外面に回転ヘラケズリを施すが、他はヘラ切り後粗いナデである。1・3・5・6には重ね焼きの痕跡が明瞭に認められる。

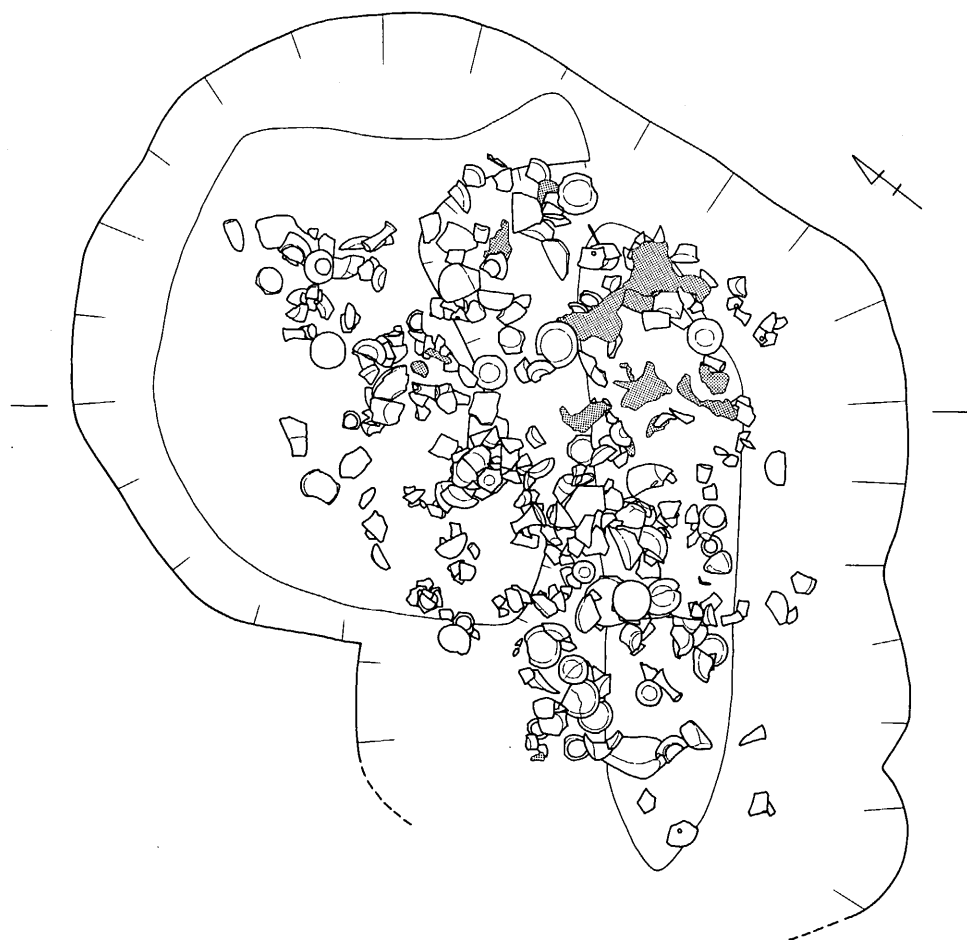
杯身 (8～22) 8～19は高



第106図 SK06実測図 (1/30)



第107図 S K06出土土器実測図 (1/3)

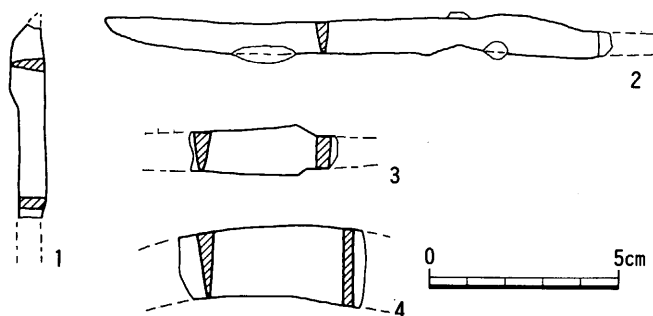


H : 43.80 m



0 1 m

第108図 S K07実測図 (1/30)



第109図 S K 07出土鉄器実測図 (1/2)

台が付き、口径10.0cm～19.4 cmと法量分化が進んでいる。高台は低く、底部と体部の境よりも内側に付けられ、貼り付け後の調整は雑である。底部外面をヘラ切り後粗くナデ、他の部分を回転ナデとナデで仕上げる技法は共通している。

9・11・12・14は体部外面に

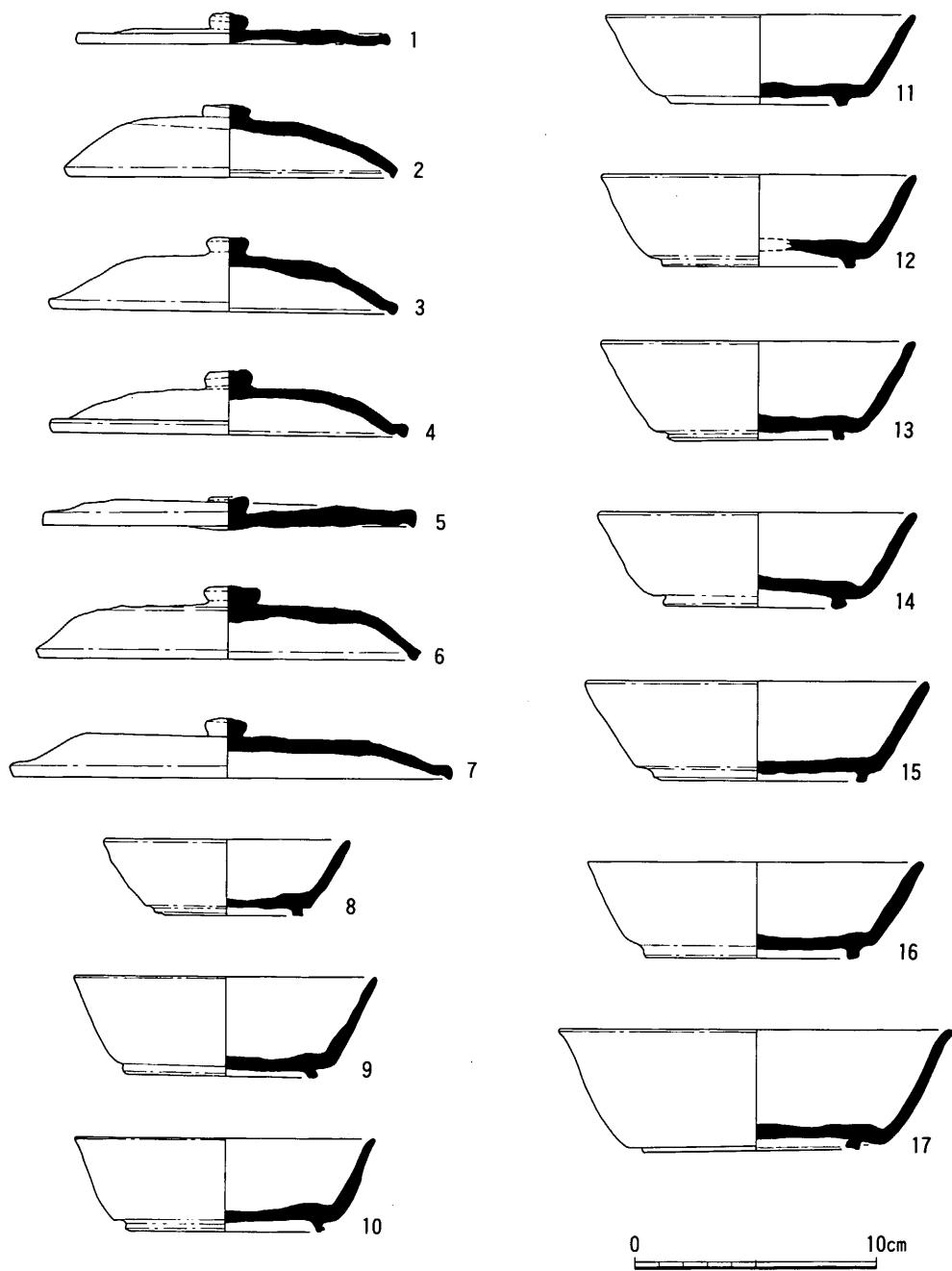
灰をかぶっており、15は焼成不良である。20～22は高台が付かず、体部は直線的に開く。いずれも底部外面をヘラ切り後粗くナデ、他の部分を回転ナデとナデで仕上げる。20は内外面に火襷があり、21は口縁部外面に重ね焼きの痕跡が見られる。

皿 (23～33) 26～33は、底部が平坦で、体部が外に開くものである。ただし、27は焼きひずみのため底部が平坦でなくなっている。24・25は小型の皿、23はミニチュアと考えられる。23は内外面に自然釉がかかり、底部外面に他の須恵器片が融着している。24の底部外面はヘラ切り後ごく粗くナデ、25はヘラ切り後やや丁寧にナデる。しかし、いずれも余分な粘土が外にはみ出している。26～33については、33のみ底部外面に回転ヘラケズリを施し、他のものはヘラ切り後粗くナデる。その他の部分は、回転ナデとナデで仕上げる。28は内外面、33は外面に火襷がある。32はやや焼成不良である。

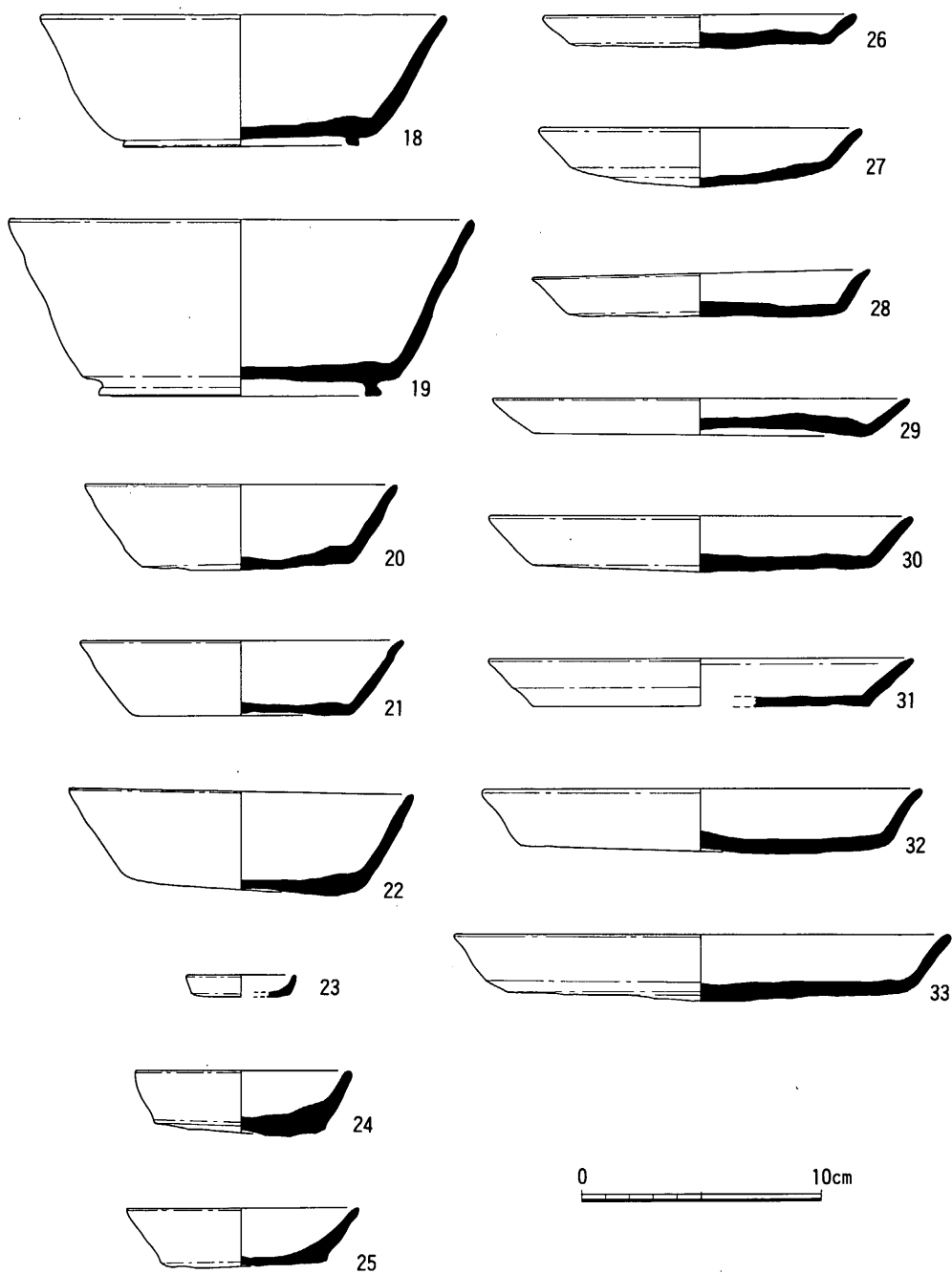
蓋 (34・35) 34は端部を垂直に引き下ろす小型の蓋である。天井部外面に回転ヘラケズリを施し、つまみは貼り付け後回転ナデで調整する。外面から口縁端部まで灰をかぶっている。35は天井部の大部分を欠いている。体部は垂直に下方に伸び、口縁端部を斜めに作る。天井部外面には回転ヘラケズリを施す。外面は灰かぶり、口縁端部に火襷がある。

鉢 (36・37) 36はいわゆるコップ型の鉢である。体部は直線的に伸び、口縁部は薄く仕上げる。底部外面から体部外面下位にかけて回転ヘラケズリを施し、他の部分を回転ナデとナデで仕上げる。37は底部中央を欠く。体部はわずかに内湾気味にのび、口縁端部は内傾する。底部外面から体部外面下位にかけて回転ヘラケズリを施し、他の部分は回転ナデとナデで仕上げる。底部内面と平面な口唇部に灰をかぶり、外面には全面に火襷がある。また、口縁部外面には重ね焼きの痕跡が明らかに見られる。

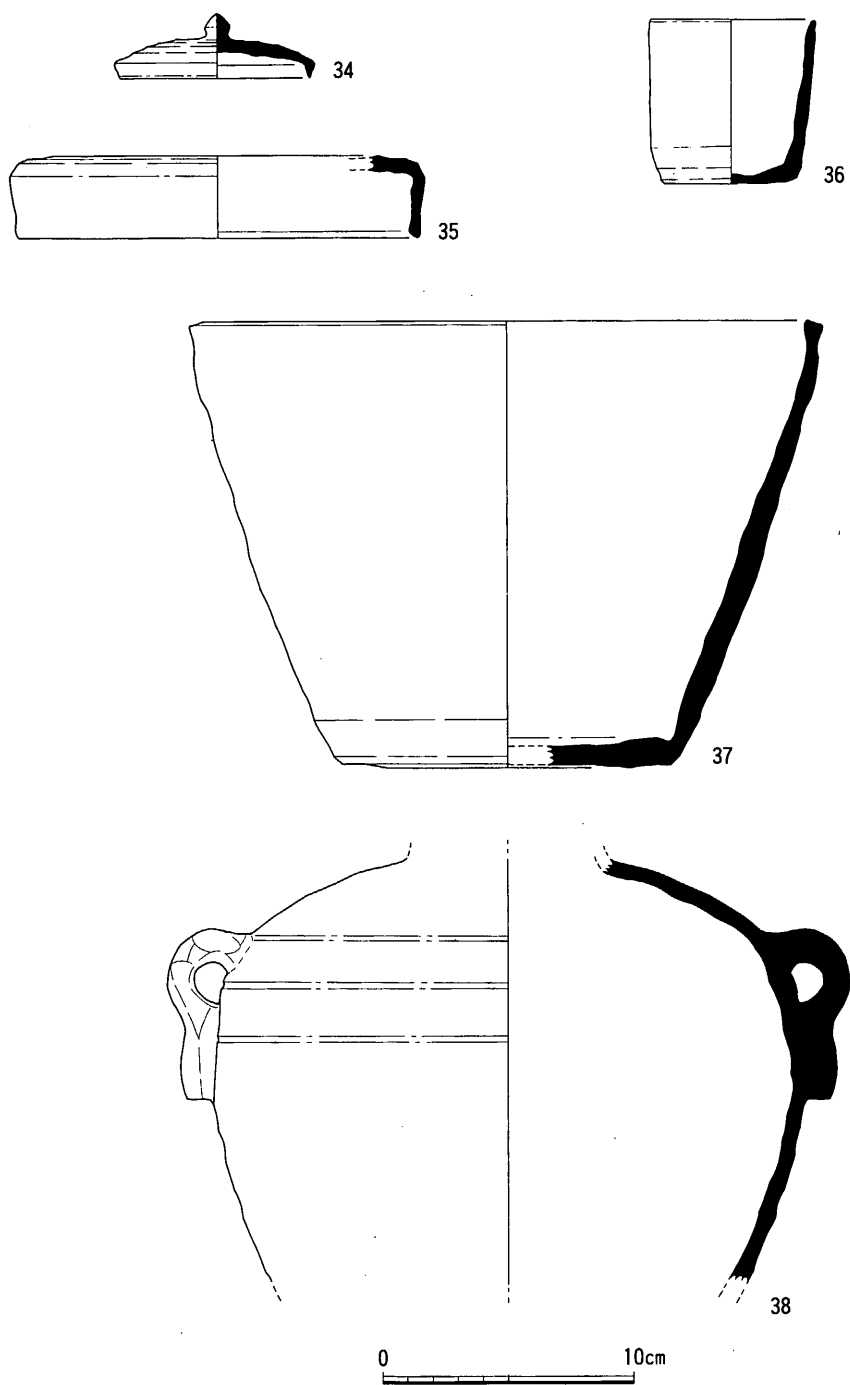
壺 (38) 頸部の付け根から胴部中位にかけての破片で、片方の耳を欠いているが、双耳壺と思われる。ゆるやかな肩部に3条の沈線をめぐらせ、その上から数字の3の字様の耳を貼り付け、ナデ調整を施す。胴部の調整は内外面とも回転ナデである。外面は灰をかぶっており、ごく一部が自然釉化している。



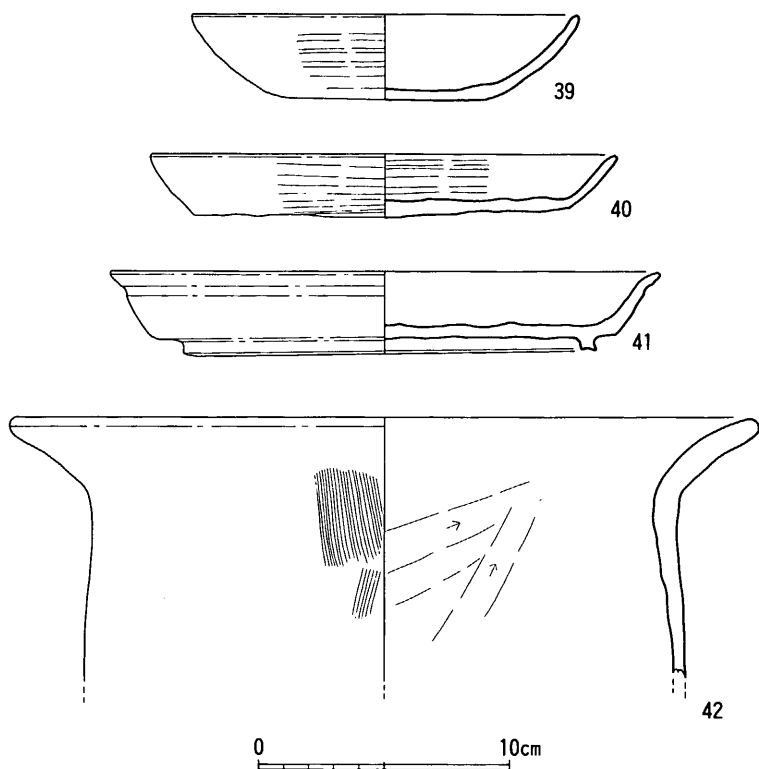
第110図 SK07出土土器実測図① (1/3)



第111図 SK07出土土器実測図② (1/3)



第112図 S K07出土土器実測図③ (1/3)



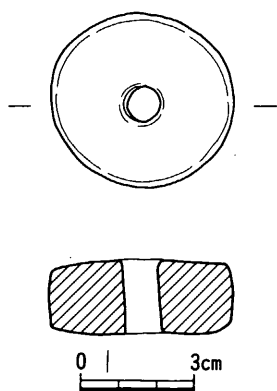
第113図 S K07出土土器実測図④ (1/3)

土師器 (第113図、図版80)

杯 (39) 体部は内湾しつつ外に開く。底部外面に回転ヘラケズリ、体部外面にはヘラミガキを施す。口縁部から体部と底部の内面は回転ナデで仕上げる。

皿 (40・41) 40は器表が磨滅している部分がある。底部外面に回転ヘラケズリを施し、体部内外面をヘラミガキする。底部内面は回転ナデで仕上げる。41は高台が付く。底部外面を回転ヘラケズリし、その他の部分にはヘラミガキの痕跡が見られる。

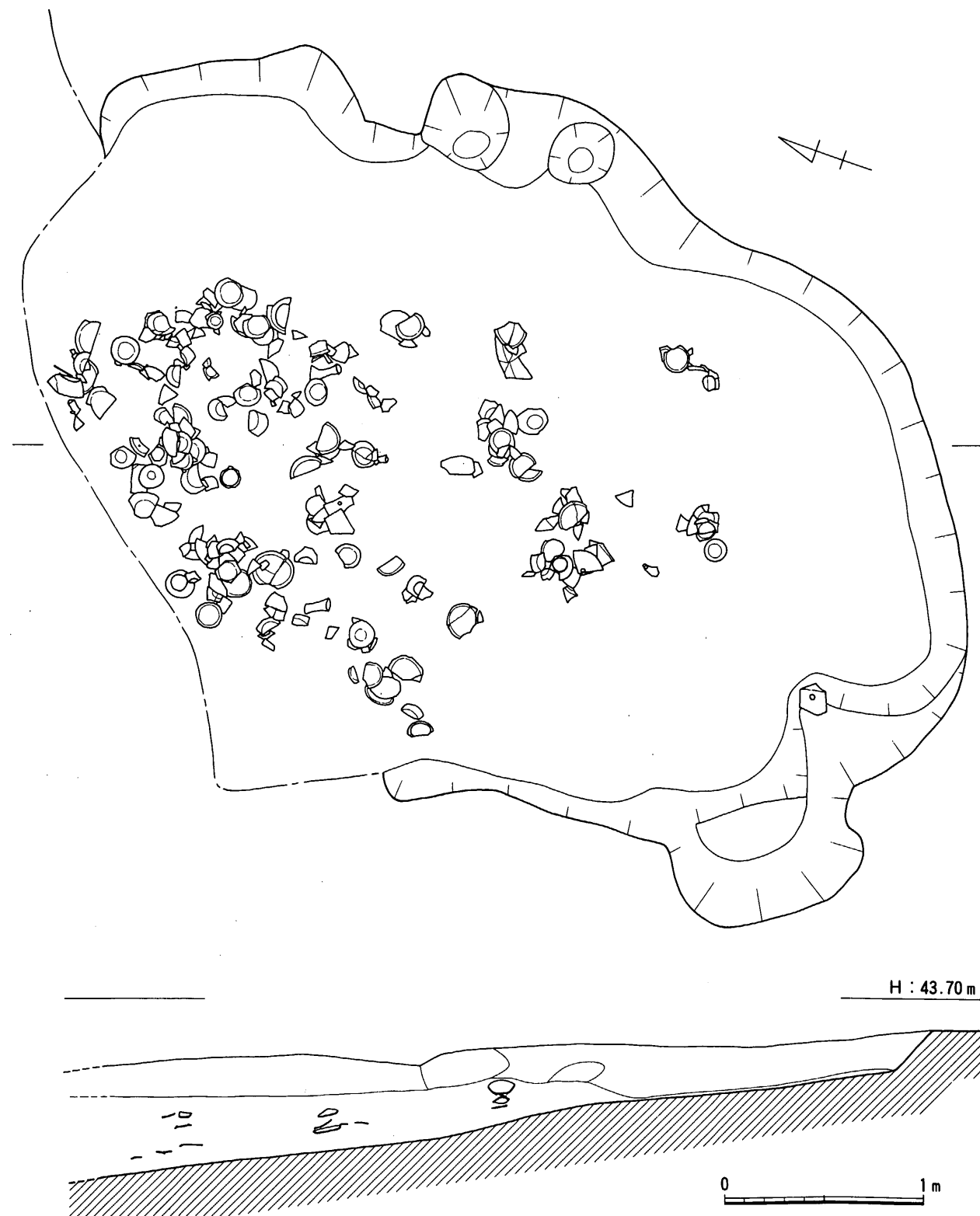
甕 (42) 頸部から口縁部にかけて肥厚する。各部の調整は、口頸部内外面がヨコナデ、胴部外面は縦方向のハケ目、内面はヘラケズリである。胎土中に雲母片を含む。



第114図 S K07出土土製
品実測図 (1/2)

紡錘車 (第114図、図版113)

土製品で径4.8cm×4.6cm、厚さ1.9cm、孔径0.9cm～1cm、重さ48gである。褐色を呈する。



第115図 S K08実測図 (1/30)

S K08 (第115図、図版31)

調査区の北端部に位置し、本遺構の北側の部分は調査区域外に伸びている。平面プランは、楕円をゆがめたような不整形を呈する。上端の最大値で5.45m×3.3mを測る。床は、北に行くほど深くなっており、最も深い部分では0.55mとなる。調査区域外の部分においては、さらに深くなっているものと考えられる。検出した範囲では、壁は約45°の角度で直線的に立ち上がる。

遺物は、埋土中から浮いた状態で出土した。内容は、鉄刀子、鉄製紡錘車、鉄器片、須恵器杯蓋・杯身・皿・蓋・高杯・鉢・瓶子・壺・平瓶・横瓶・甕、土師器杯・皿・蓋・甕・三足器、黒色土器、土製紡錘車、黒曜石の剥片などである。その総量は、整理箱16箱である。特に遺物が集中する部分については、S K07と同様に密着した遺物の間に埋土が存在しない状態であった。

出土遺物

鉄器 (第116図、図版116)

鋸 (1～5) いずれも茎部の破片と思われる。残存長は番号順に、12.0cm、6.5cm、6.0cm、5.4cm、3.5cmである。

刀子 (6～9) 6・7は刃部から茎部にかけて、8・9は刃部の破片である。6は両側に、7は刃側に関が付く。残存長は番号順に、8.2cm、3.0cm、4.3cm、3.2cmである。

柱状工具 (10) 銹による破損が著しく、途中で剥離しているが、本来は図のような形状を呈していたものと考えられる。用途については不明であるが、いわゆるポンチのような、けがき工具の一種ではないかとも思われる。

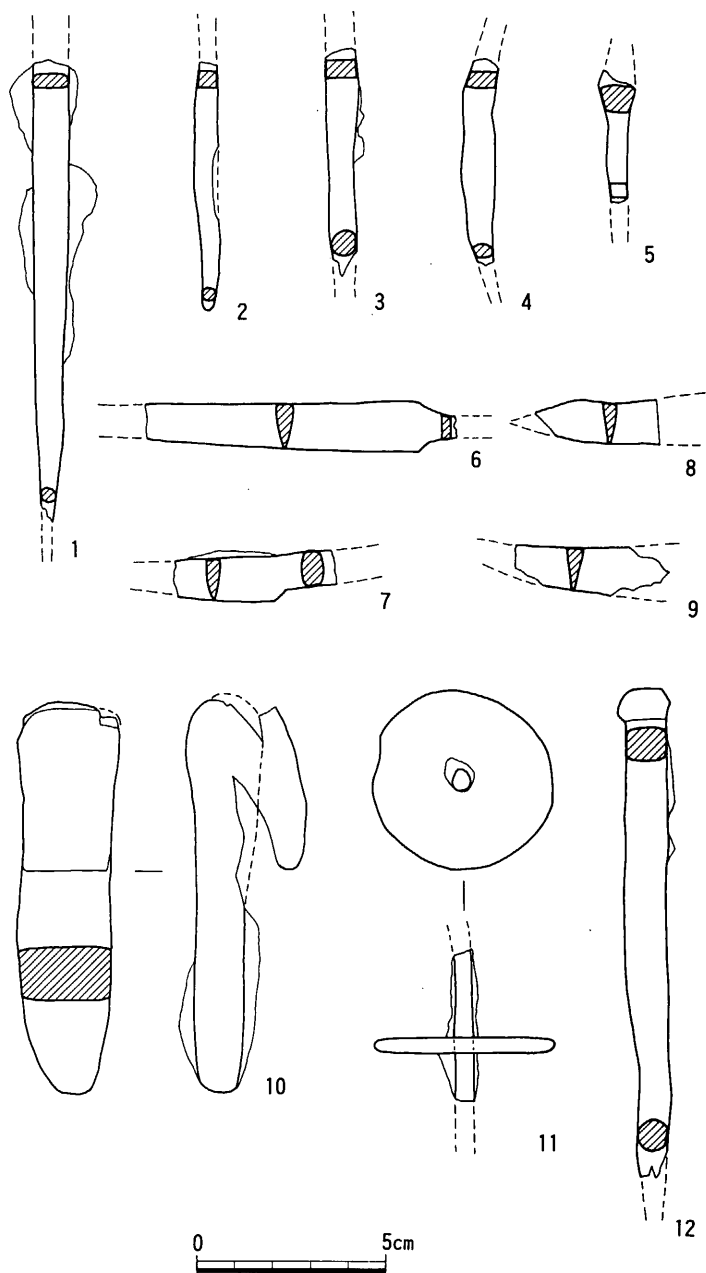
糸巻棒と紡錘車 (11) 糸巻棒は断面円形で、紡錘車の中心を貫通する。残存長は4.0cmを測る。紡錘車は直径4.7cm、厚さ0.4cmである。

釘 (12) 大型の釘と考えた。残存長は12.9cmを測る。

須恵器 (第117～120図、図版81～83)

杯蓋 (1～7) 4はやや天井が高くつまみも大きめであるが、それ以外のものは天井が低くつまみも小さい、7のみ天井部外面を回転ヘラケズリするが、それ以外のものはヘラ切り後粗くナデている。7点すべてに重ね焼きの痕跡が見られる。

杯身 (8～41) 高台の付くもの (8～32) と付かないもの (33～41) とがある。高台の付くものは、口径が10.8cm～20.4cmと幅広いが、約半数は12cm～14cmの間におさまる。高台は、底部と端部の境よりも内側に貼り付けられるものが多い。底部外面の調整は、32のみ回転ヘラケズリを施し、他はすべてヘラ切り後粗くナデる。32は体部下半にも回転ヘラケズリを施している。23は底部外面にヘラ記号、8・27は板状圧痕、25はその両方がある。24と32はやや焼成不良である。高台の付かないもののうち、37と40は体部が内湾しつつ開くが、他のものはほぼ直

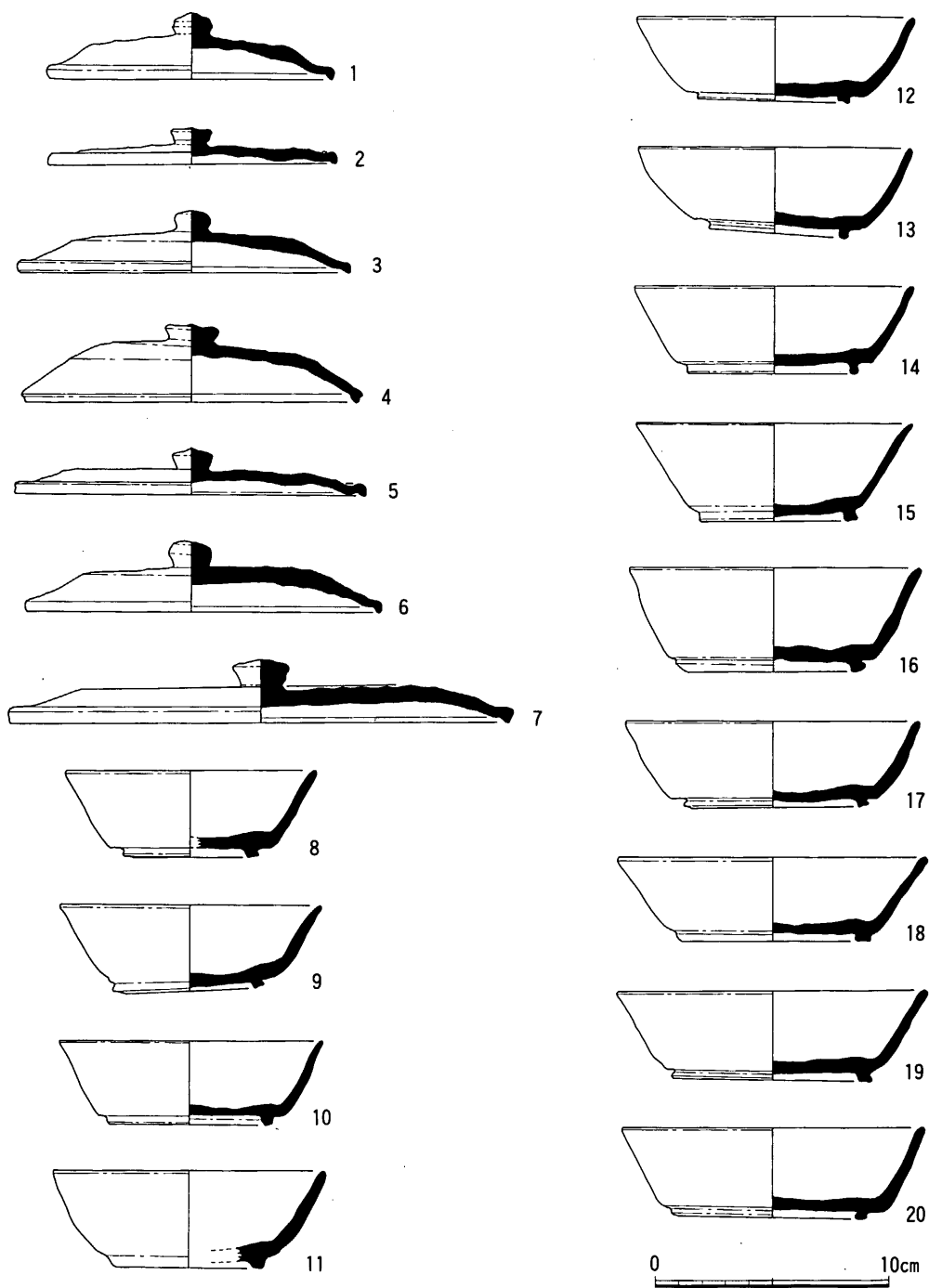


第116図 SK 08出土鉄器実測図 (1/2)

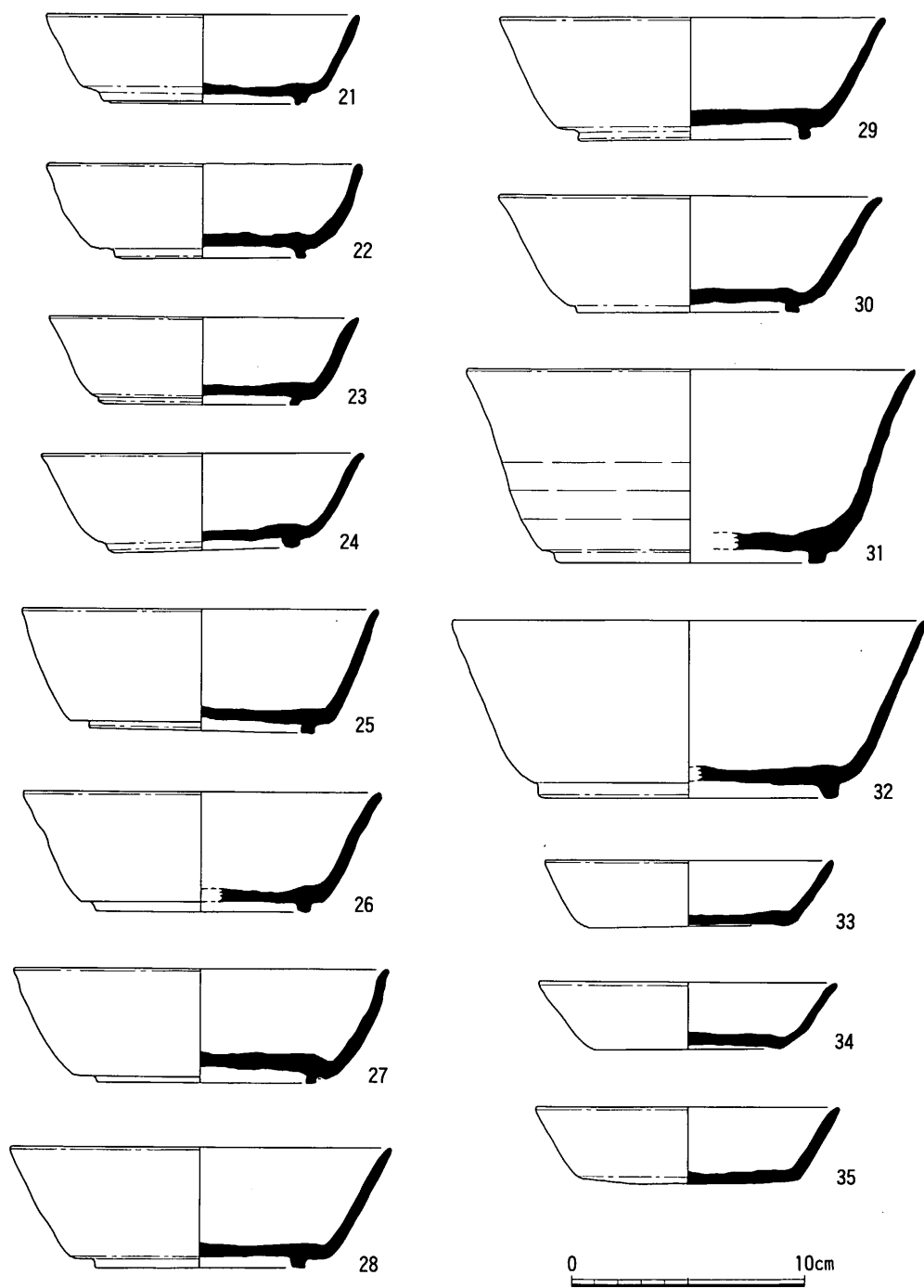
線状に開く。37と40が底部外面から体部下位にかけて回転ヘラケズリを施している他は、底部外面の調整はヘラ切り後粗いナデである。他の部分を回転ナデとナデで仕上げるのはすべてに共通している。34は内面に火襻があり、外面は灰をかぶっている。37は内外面に火襻、38とともに重ね焼きの痕跡が明らかである。

皿 (42～53) 42が小型のもの、53は大型で高台が付く。42以外は、短い体部がほぼ直線状に開く。底部外面の調整は、すべてヘラ切り後粗いナデである。42は内外面とも一部に灰をかぶっている。51は火襻、49は板状圧痕、46はその両方がある。51・52は焼きひずんでいる。

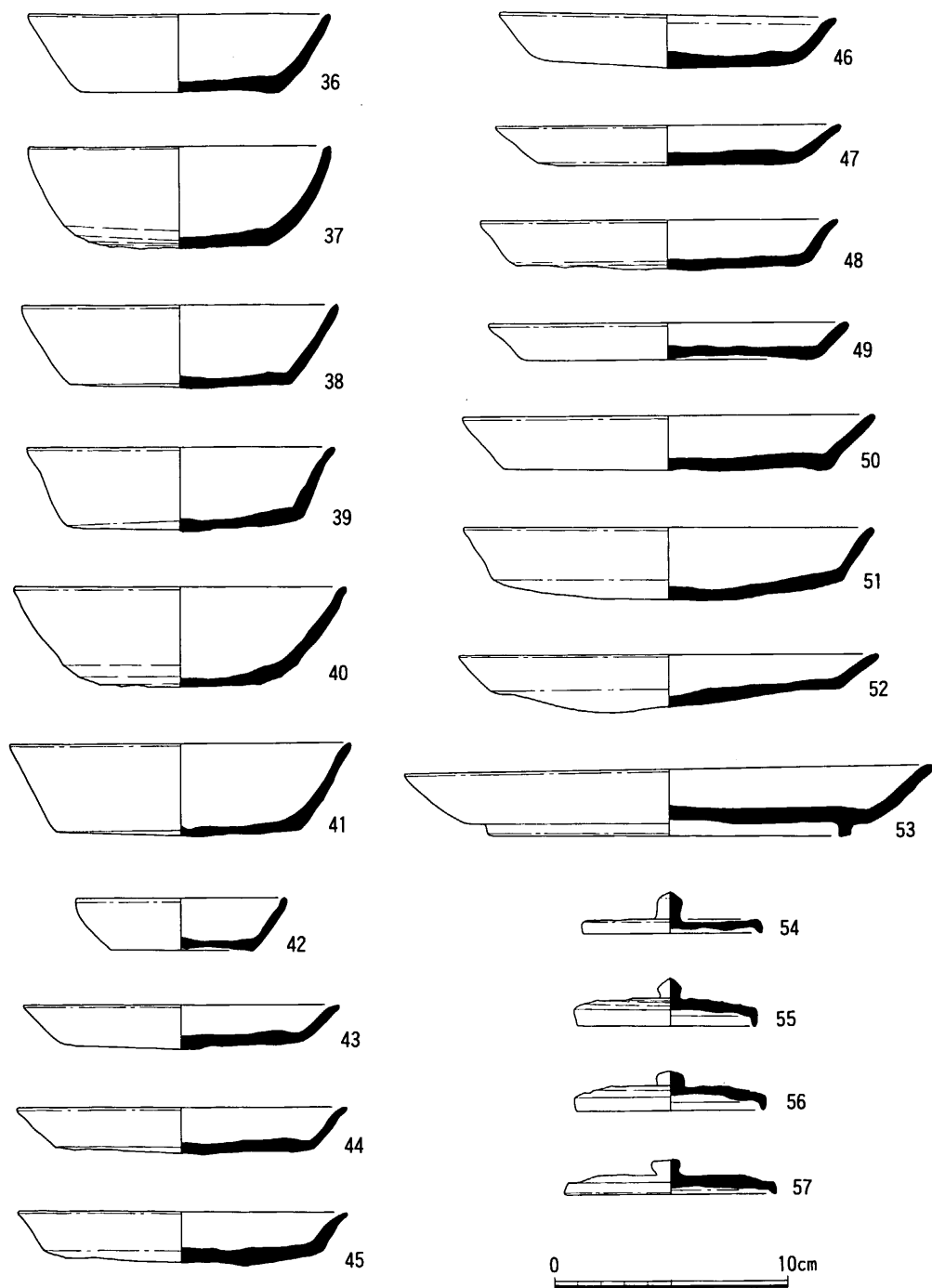
蓋 (54～58) 54～57は口径が9 cm以下で小さなつまみを貼り付ける。55・56は口縁端部を強く下に引き出す。55・56は天井部外面を回転ヘラケズリし、57はヘラ切り後回転ナデを施す。54は灰かぶりのため調整不明である。58は体部以下を欠くため口径がわからない。



第117図 S K 08出土土器実測図① (1/3)



第118図 S K08出土土器実測図② (1/3)



第119図 S K 08出土土器実測図③ (1/3)

天井部外面には回転ヘラケズリを施し、宝珠型つまみを貼り付けた後、回転ナデで調整する。
外面には灰をかぶっている。

鉢 (59) いわゆるコップ型の鉢である。体部が直線状に伸び、そのまま口縁部に至る。底部外面に回転ヘラケズリを施し、その他を回転ナデとナデで仕上げる。

瓶子 (60) 頸部以上を欠くが、瓶子と思われる。頸部の付け根から肩部にかけて回転ナデし、それ以下の胴部はナデ調整する。底部外面はヘラ切り後粗くナデる。

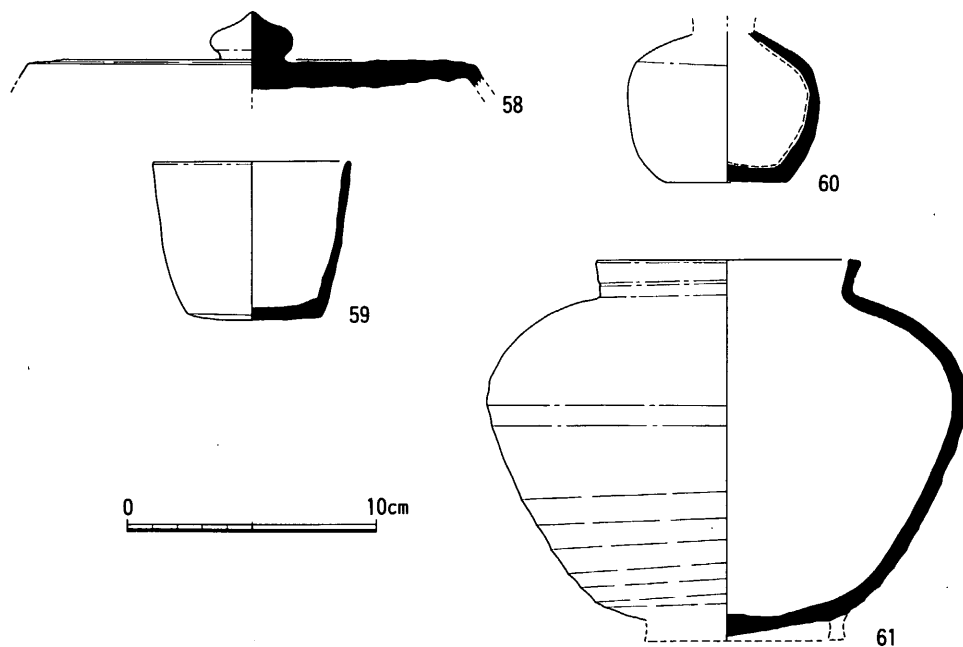
高台付短頸壺 (61) 痕跡しか残っていないが、高台が付いていたことは間違いない。頸部は直立せずやや外傾する。底部外面から胴部外面中位にかけて回転ヘラケズリを施し、胴部外面上位から口縁部、胴部内面にかけてを回転ナデ、底部内面をナデで仕上げる。胴部外面下位には重ね焼きの痕跡があり、それ以外の部分は内外面とも灰をかぶっている。

土師器 (第121図、図版83)

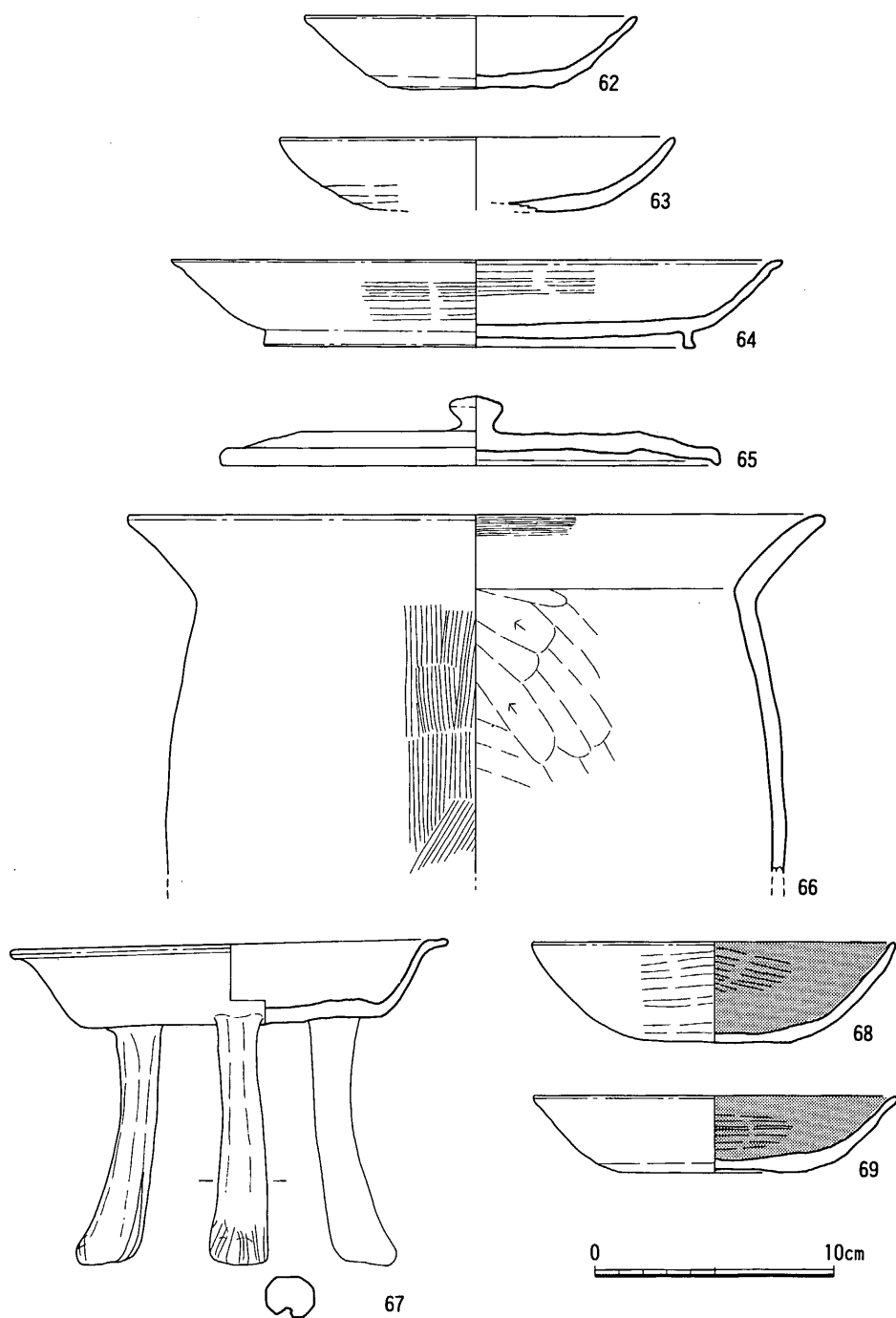
杯 (62・63) 口径は、62が13.8cm、63が16.5cm、器高はいずれも3.1cmを測る。62は底部外面を回転ヘラケズリし、体部内外面にはヘラミガキの痕跡が残る。底部内面の調整は磨滅のため不明である。63は全体の磨滅が著しいが、底部外面には回転ヘラケズリを施したようである。

皿 (64) 底部外面に回転ヘラケズリを施し、高台は貼り付け後回転ナデする。体部内外面と底部内面にはヘラミガキで仕上げる。

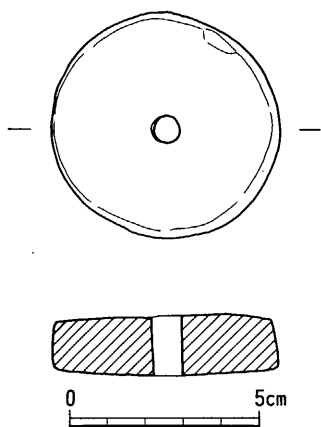
蓋 (65) つまみは貼り付け後回転ナデで整える。口縁端部の折り曲げはあまり顕著ではない。



第120図 S K 08出土土器実測図④ (1/3)



第121図 SK08出土土器実測図⑤ (1/3)



第122図 SK08出土土製品
実測図 (1/2)

天井部外面に回転ヘラケズリ、体部内外面にヘラミガキを施し、天井部内面はナデで仕上げる。

甕 (66) 口頸部が肥厚する。調整は、口縁部と頸部外面がヨコナデ、頸部内面は横方向のハケ目、胴部外面は縦方向のハケ目、胴部内面はヘラケズリである。

三足器 (67) 口縁部が強く外反する皿型の土師器の底部に3本の脚を付ける。但し、そのうちの1本を欠く。皿部の調整は、底部外面を回転ヘラケズリし、他の部分を回転ナデとナデで仕上げる。脚部は、ヘラで面取りし8面を作り出し、後部には切り込みを入れる。先端部には10本前後の細線を入れ、獣の爪を表現していると思われる。全体に丁寧な作りであるが、脚部と皿底部の接合部の調整はあまり

丁寧ではない。

黒色土器 (第121図、図版83)

杯 (68・69) いずれも内面のみ燻すが、口縁部外面まで黒化している。調整は、底部外面を回転ヘラケズリ、他の部分はヘラミガキである。

紡錘車 (第122図、図版113)

土製品で6.1cm×5.8cm、厚さ1.6cm、孔径0.6cm×0.7cm、重さ71gである。一面は暗茶褐色を呈し平滑であるのに対し、もう一面は淡茶褐色を呈し、やや荒れている。

SK09 (第123図)

調査区の北東部に位置する。SK07とは溝を挟むような状態で隣接している。また、本遺構より約8m南には、14号住居跡がある。平面プランは、南西部が突出した楕円形のように見える。上端の長軸、短軸で4.0m×2.1mを測る。床にはピットと多数の段があり、複雑な様相を呈する。そのため深さが一定しないが、おおよそ0.3mほどを測る。壁の傾斜角は約55°である。溝02と切り合い関係にあるが、調査時には新旧関係を明らかにできなかった。

遺物は埋土中から浮いた状態で出土した。その内容は、鉄器片、須恵器杯蓋・杯身・皿・蓋・高杯・鉢・瓶子・壺・甕、土師器杯・高杯・甕、黒色土器片、瓦片などである。総量は、整理箱3箱弱であり、一部のものは遺構面よりも盛り上がるような状態で検出された。

出土遺物

鉄器 (第124図、図版116)

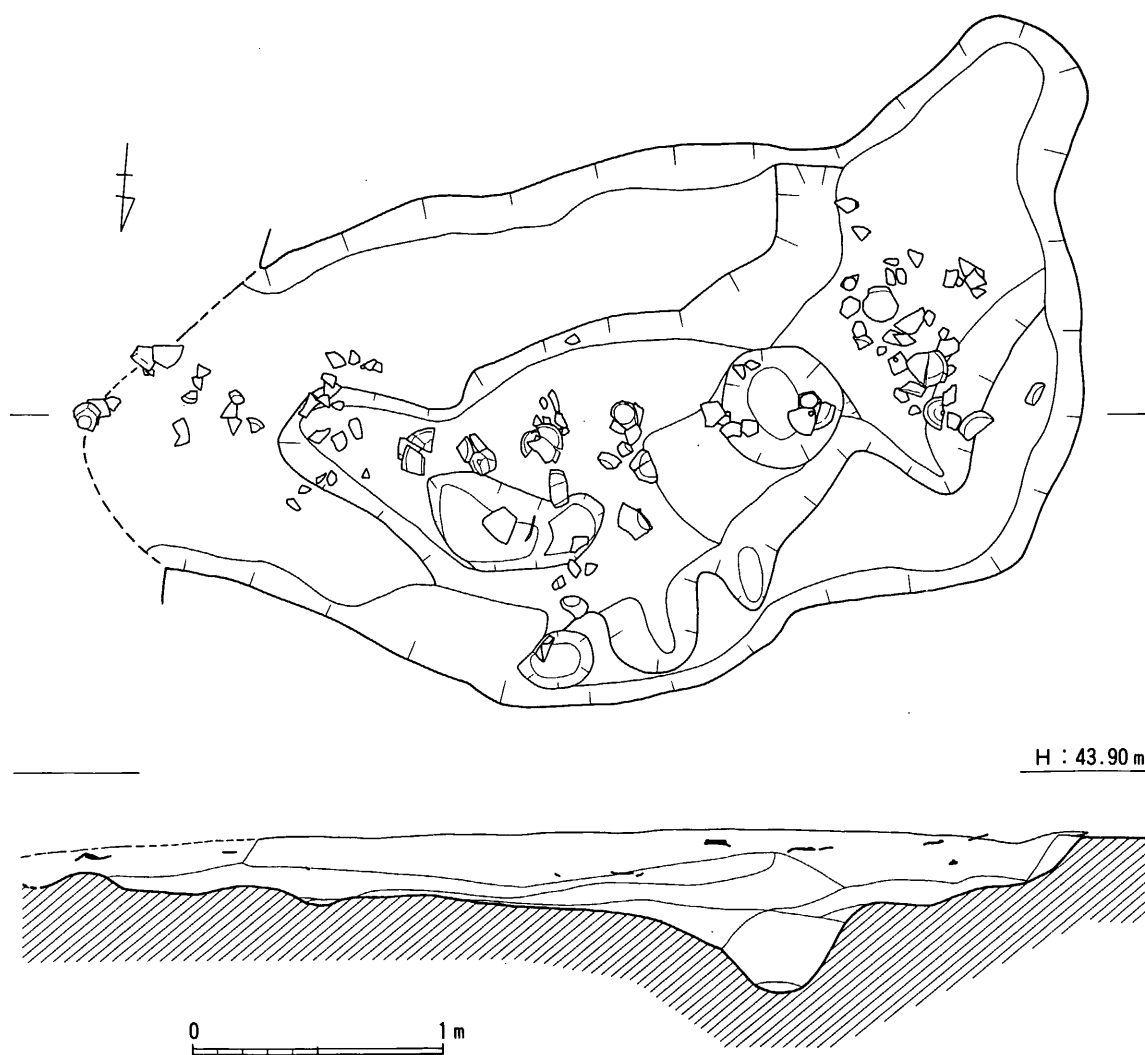
不明鉄器 大型の釘とも考えられるが、断定できない。残存長は11.9cmである。

須恵器 (第125図、図版84)

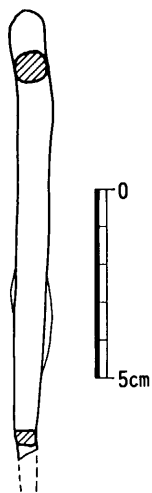
杯蓋 (1・2) 1の天井部外面は、ヘラ切り後粗くナデる。つまみは貼り付け。他の部分は

回転ナデとナデで仕上げる。2の天井部外面は、ヘラ切り後やや丁寧にナデる。他の部分は回転ナデとナデである。

杯身（3～7） 高台の付くもの（3～5）とつかないもの（6・7）とがある。3・4は底部と体部の境よりも内側に高台が付くが、特に4ではそれが顕著である。5は底部と体部の境に高台が付く。いずれも底部外面はヘラ切り後ナデ、他を回転ナデとナデで仕上げる。3は重ね焼きの痕跡があり、5の体部外面には灰をかぶっている。6・7についても底部外面はヘラ切り後ナデ、他は回転ナデとナデである。7の口縁部には重ね焼きの痕跡がある。



第123図 S K09実測図 (1/30)



第124図 SK09
出土鉄器実測図
(1/2)

皿(8) 底部外面はヘラ切り後粗くナデ、他の部分を回転ナデとナデで仕上げる。

土師器(第125図)

甕(9) 口縁部から頸部外面にかけてヨコナデ、頸部内面を横方向のハケ目、胴部外面を縦方向のハケ目、胴部内面はヘラケズリを施す。

SK10(第126図、図版18)

調査区の東端部に位置し、東側の部分は調査区域外にある。検出した範囲内では、不整形の平面プランを呈する。また、上端の長軸と短軸は、 $5.3\text{m} \times 4.2\text{m}$ を測る。床は大きく2段に分かれ、細かいテラスや小ピットがあるために、複雑な様相を呈する。したがって、深さも一様ではないが、おおよそ0.6m以下である。壁は $40^\circ \sim 50^\circ$ の角度で直線的に立ち上がる。19号住居跡と切り合い関係にある。新旧関係としては、本遺構の方が新しい。

遺物は埋土中から浮いた状態で出土した。その内容は、鉄器片、須恵器杯蓋・杯身・皿・蓋・高杯・鉢・瓶子・甕、土師器杯・皿・甕、瓦片などである。総量は、整理箱で7箱ほどである。

出土遺物

鉄器(第127図、図版116)

鏃(1~3) 1は斧箭式に属するもので、残存長10.7cmを測る。2・3は基部の破片で、残存長は6.1cmと4.5cmである。

須恵器(第128~132図、図版84・85)

杯蓋(1~8) いずれも口縁部が退化した形状を示す。1・2・6は天井部が高い。1を除いて天井部外面には回転ヘラケズリを施す。また、すべてに重ね焼きの痕跡が見られる。8はやや焼成不良である。

杯身(9~24) 高台の付くもの(9~22)と付かないもの(23・24)とがある。高台の付くものは、口径10cm~18.3cmを測るが、最も多いのは12cm前後のものである。高台は、底部と体部の境よりも内側に付くものが多い。調整技法は、底部外面をヘラ切り後粗くナデ、その他の部分を回転ナデとナデで仕上げる。19は、他のものとは形態、技法ともに異なる。口縁端部を強く外反させ平坦面を作り出しており、高台も高い。体部外面下部に回転ヘラケズリを施し、体部外面上部と内面を回転ナデ、底部内面をナデで仕上げる。金属器の写しであると考えられる。高台の付かないものは、体部が直線に伸びる。調整は、底部外面をヘラ切り後粗いナデ、他の部分は回転ナデとナデで仕上げる。24は内外面ともに火轆がある。

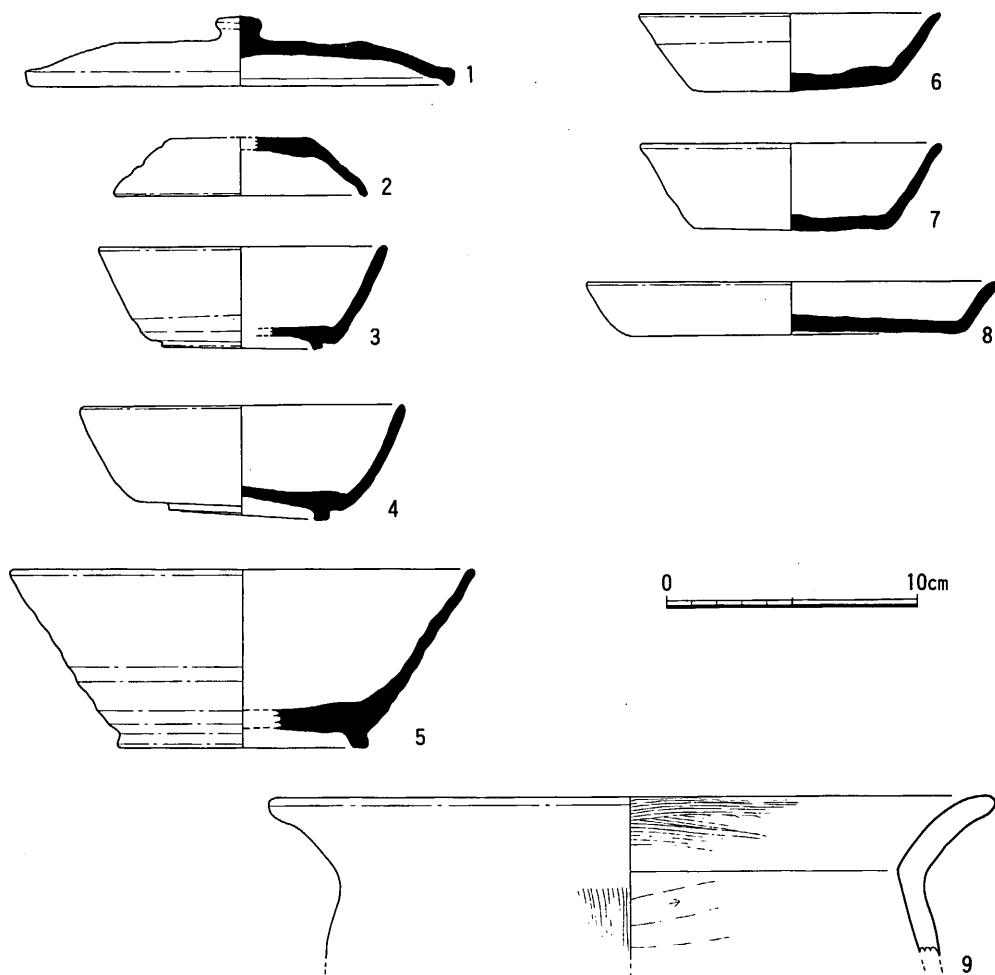
皿(25~30) いずれも体部が外に開き、口縁部がやや外反するものである。26・29は底部外

面に回転ヘラケズリを施すが、他のものはヘラ切り後粗くナデる。25・26・28・29は重ね焼きの痕跡が明らかである。

蓋 (31・32) 両方ともつまみを欠く、31の天井部外面は、体部との境の部分のみに回転ヘラケズリを施し、それ以外はヘラ切り後ナデる。他の部分は回転ナデとナデで仕上げる。32は天井部外面に回転ヘラケズリを施し、板状圧痕も残る。他の部分は回転ナデとナデである。口縁部に重ね焼きの痕跡がある。

高杯 (33) 器高10.2cmの短脚の高杯である。杯部の口縁部はほぼ直角に折り曲げて、端部を角張らせる。杯部の底部外面には回転ヘラケズリを施し、脚部にはシボリ痕が残る。

鉄鉢 (34) 口縁端部は平坦面が内傾するが、あまりシャープなつくりではない。底部から体部中位にかけての外面に回転ヘラケズリを施す。内外面ともに火襷がある。



第125図 S K 09出土土器実測図 (1/3)

鉢 (35・36) いずれも口縁内部もやや肥厚させるが、シャープではない。底部から体部下半にかけての外面に回転ヘラケズリを施し、他の部分を回転ナデとナデで仕上げる。35は、底部内面をヘラ状の工具でナデている部分がある。36はやや焼成不良である。

瓶子 (37) 頸部以上を欠く。底部外面をヘラ切り後ナデ、胴部内外面は回転ナデで仕上げる。胴部外面は灰をかぶっており、底部外面には火襴がある。

双耳壺 (38) 片方の耳を欠くが、双子壺と思われる。肩部に沈線をめぐらせ、その後に数字の3の字様の粘土紐を貼り付ける。他に胴部に2条の沈線がめぐる。調整は内外面とも回転ナデ、外面には灰をかぶっている。

壺 (39) 口縁端部を平坦に作る。胴部上端部に直接頸部を乗せ上げるような形で、両者を接合している。内外面とも回転ナデ調整を施す。

把手付短頸壺 (40・41) 40は頸部が直立せず外に開く。口頸部内外面から胴部外面は回転ナデを施す。把手は舌状で、貼り付けた後ナデる。胴部内面の調整はナデである。41は、直立する口頸部が付くことが間違いないため、ここに載せた。把手は半截円環状で、貼り付けた後ナデ調整を施す。把手の付く部位に1条の沈線をめぐらせ、それ以下に格子目叩き、それ以上に回転ナデを施す。胴部内面は、外面に格子目叩きのある部分は同心円状当て具痕が残ри、他は回転ナデで調整する。40・41とも焼成は不良である。

土師器 (第133図)

鉢 (42) 外面は磨滅のため調整がわからない。内面は、頸部に横方向のハケ目の痕跡が見られ、体部はヘラケズリする。胎土中に雲母片が含まれる。

紡錘車 (第134図、図版113)

土製品で、5.4cm×5.4cm、厚さ1.1cm、孔径8mm、重さ47gである。淡褐色を呈し、比較的平滑である。

SK11 (第135図、図版31)

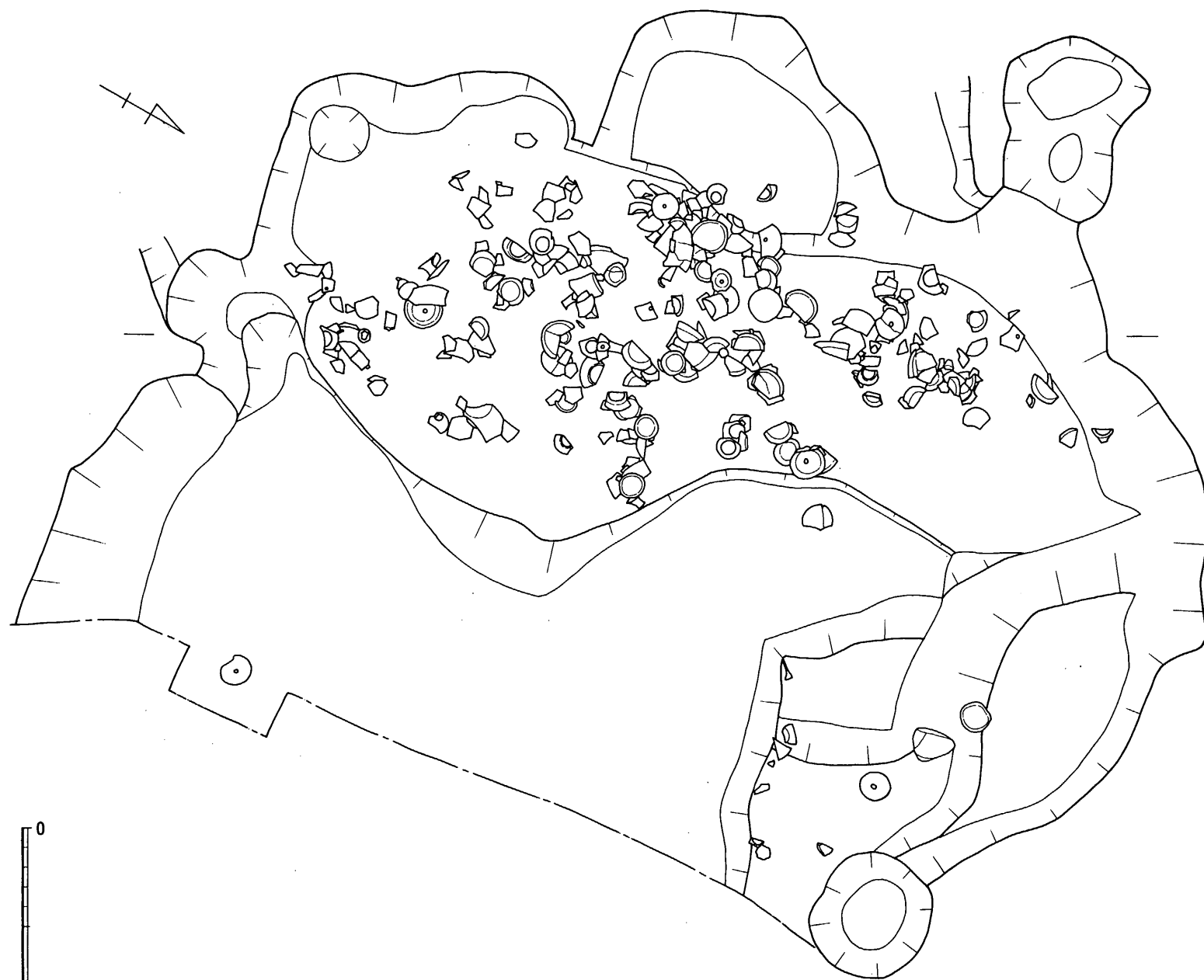
調査区の南部、7号住居跡と25号住居跡の中間に位置する。双方からの距離は、約15.5mである。南側の部分が検出できなかったが、検出できた範囲では、上端最大値は4.1m×3.6mである。深さはおおよそ0.2m前後である。床は平坦ではなく、緩やかな凹凸が認められる。壁は、西側の立ち上がりの角度は約50°であるが、東側では緩やかに立ち上がる。

遺物は埋土中から浮いた状態で出土したが、特に遺構の東側に集中していた。その内容は、須恵器杯蓋・杯身・皿・高杯・壺・甕、土師器杯・碗・鉢・甕、黒色土器片などである。総量は整理箱で2箱弱であり、一部の遺物は遺構面よりも盛り上がった状態で検出された。

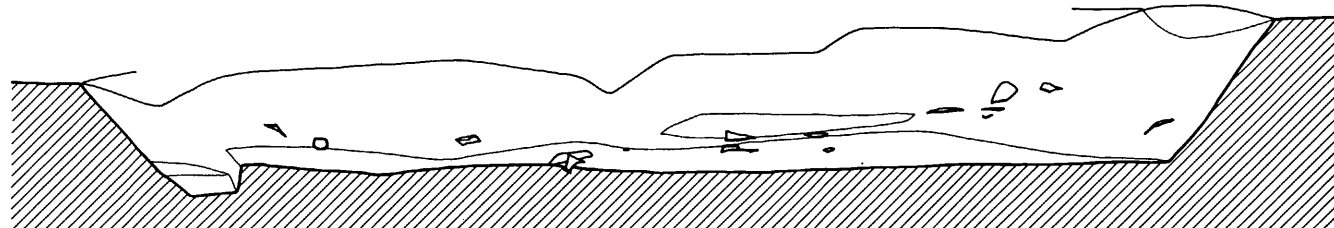
出土遺物

須恵器 (第136図)

杯蓋 (1) 天井は平坦で高い。天井部外面をヘラ切り後粗くナデ、他の部分を回転ナデとナ



H : 43.60 m



第126図 S K10実測図 (1/30)

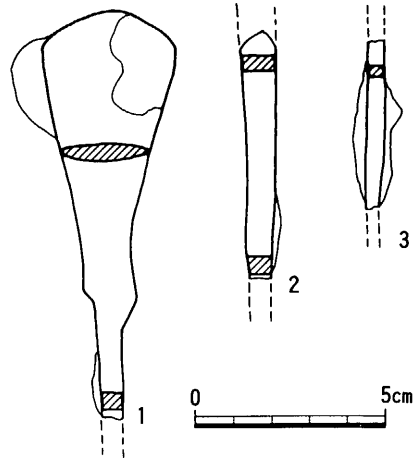
デで仕上げる。焼成不良で橙色を呈する。

杯身（2） 高台が付かないものである。体部は直線的に延び、そのまま口縁部に至る。底部外面はヘラ切り後粗くナデ、他の部分は回転ナデとナデで仕上げる。焼成不良である。

皿（3） 短い体部が直線的に開く。底部外面はヘラ切り後ナデ、他の部分は回転ナデとナデで仕上げる。

土師器（第136図、図版85）

杯（4・5） いずれも底部外面はヘラ切り後ナデ、他の部分を回転ナデとナデで仕上げる。4は胎土中に雲母片を含む。



第127図 S K 10出土鉄器実測図
(1/2)

S K 12（第137図、図版32）

調査区の中央やや東寄りに、12号、13号、21号～26号住居跡などに取り囲まれるように位置する。凸凹の多い不整形な平面プランを呈するが、どちらかといえば南北方向に長い。規模は、南北方向で9 m～10 m、東西方向で7.5 m～9 mほどを測る。周囲の竪穴住居跡を2基～3基合わせたくらいの面積を有する、特に大型の遺構であり、廃棄土坑の中では群を抜いて大きい。従って後述するように、出土した遺物の量も最も多かった。床面にはテラス、ピットが多く、複雑な様相を呈する。深さも、最も浅いところで約0.1 m、最も深いところで1 m強と、部分による差が大きい。ただし、遺物が集中している部分は、比較的深くなっている。壁の立ち上がりは、やはり部分的な傾斜角度の差はあるものの、おおむね直線的である。

遺物は主に埋土中から、鉄器、須恵器杯蓋・杯身・皿・蓋・高杯・鉄鉢・すり鉢・鉢・瓶子・短頸壺・長頸壺・双耳壺・甕、土師器杯・皿・蓋・高杯・鉢・短頸壺・甕・羽釜・手捏ね土器、獣脚、黒色土器、瓦片、石鏃、磨製石斧、滑石製品、黒曜石のチップなどが出土した。総量は、整理箱で17箱ほどである。

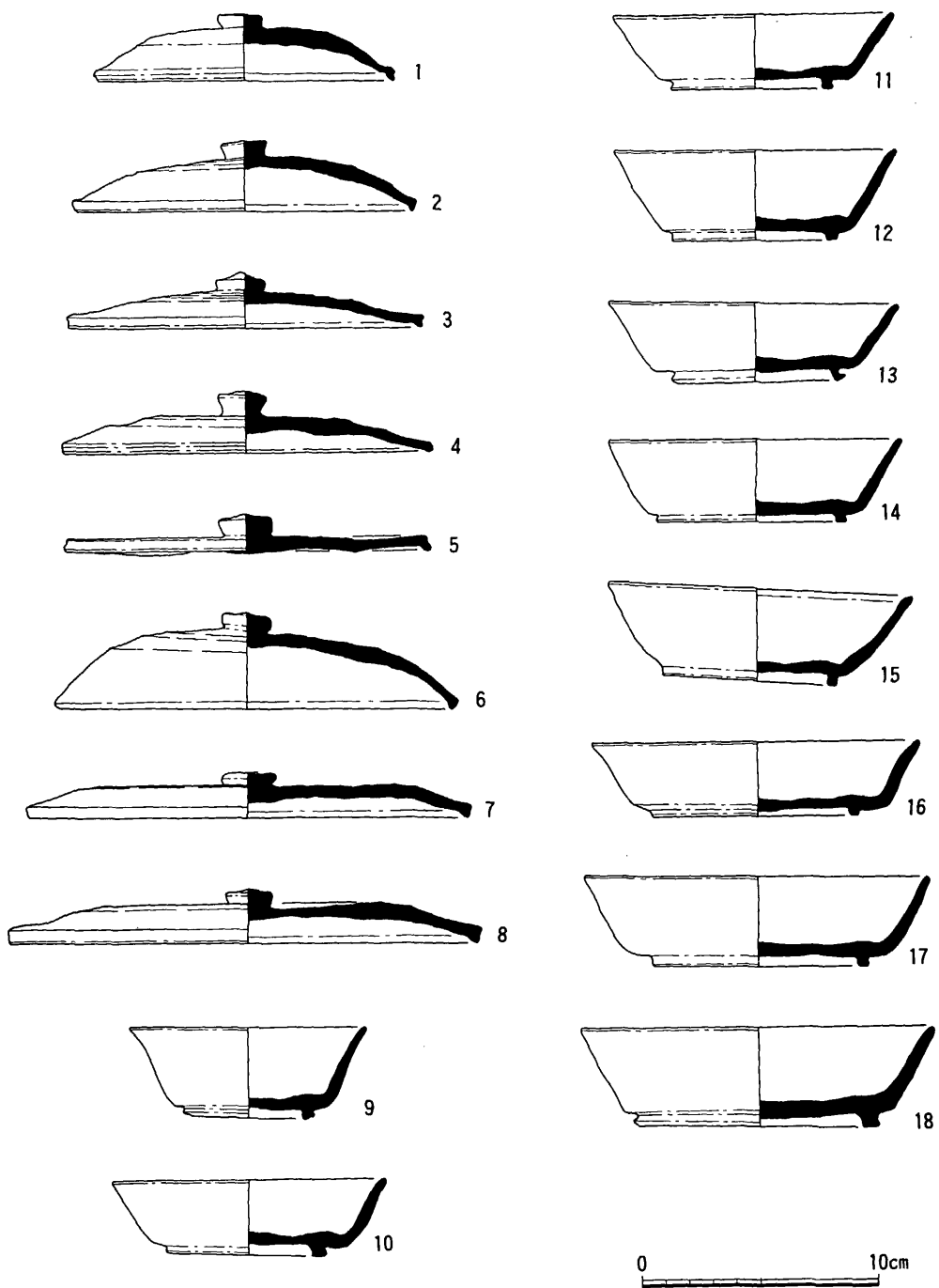
出土遺物

鉄器（第138図、図版117）

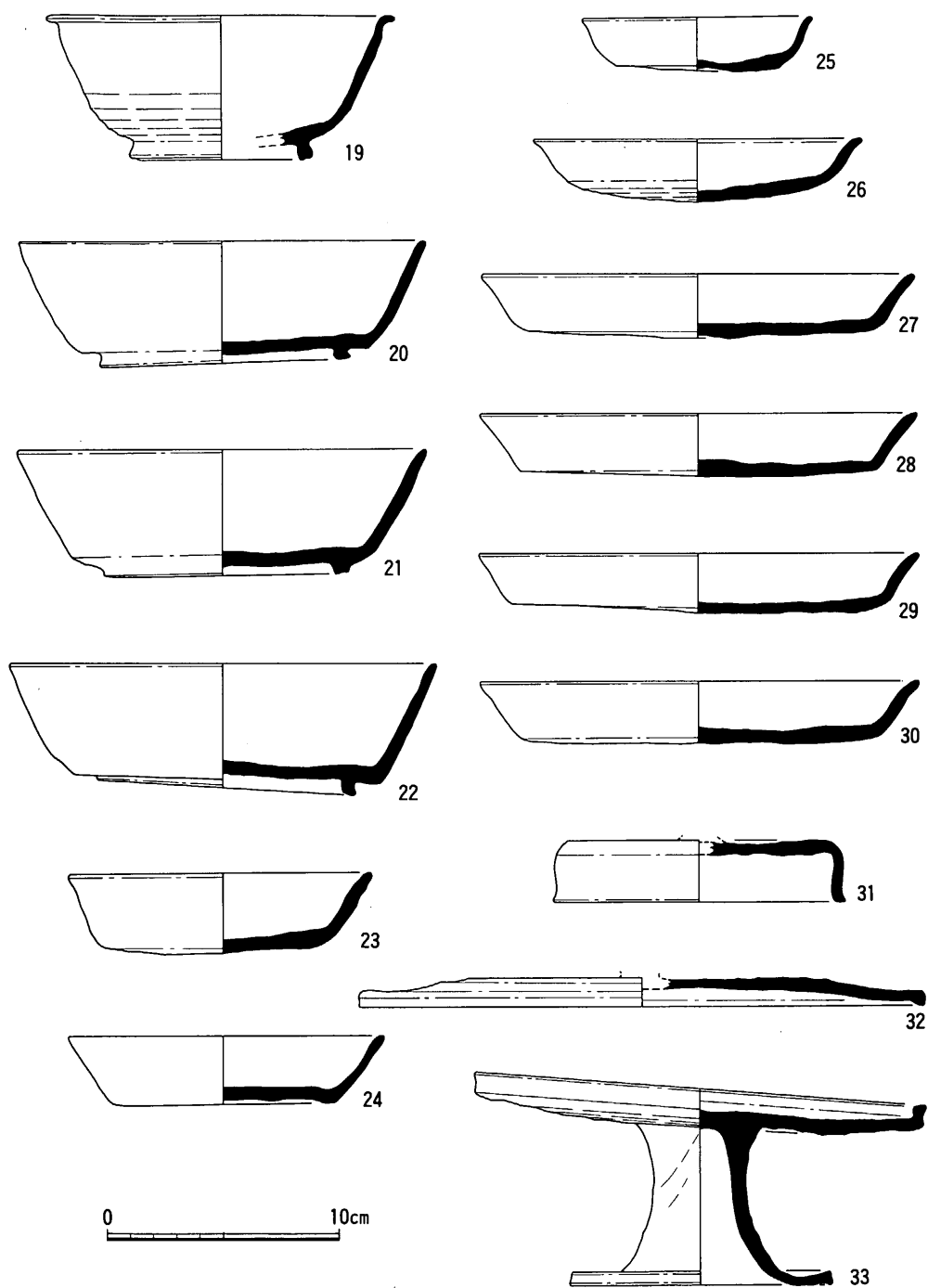
鏃（1～6） 1は片刃箭式に属するもので、残存長9.5 cmを測る。2～6の残存長は、番号順に、11.4 cm、6.6 cm、5.1 cm、3.4 cm、2.2 cmである。

刀子（7～10） 7と8は同一個体の可能性があるが、接合しない。残存長は、番号順に、6.5 cm、6.9 cm、3.5 cm、3.7 cmである。

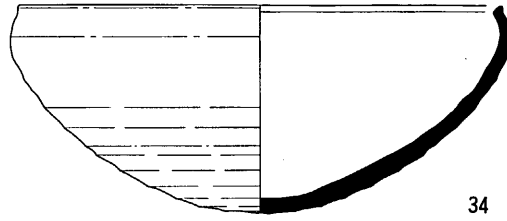
鋸かすがい（11・12） 11は残存高10.6 cm、最大幅5.9 cmを測る。12は残存高3.8 cmである。



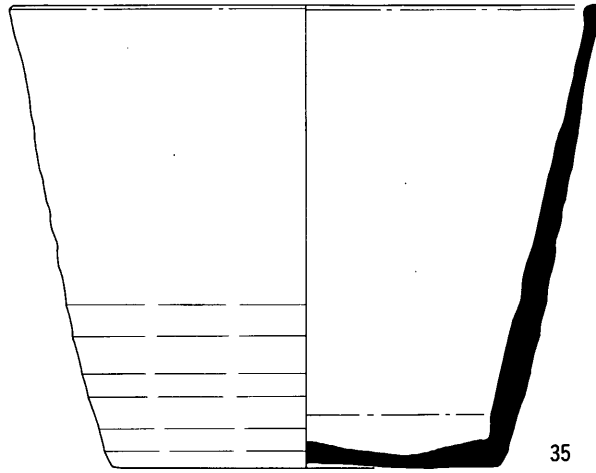
第128図 S K10出土土器実測図① (1/3)



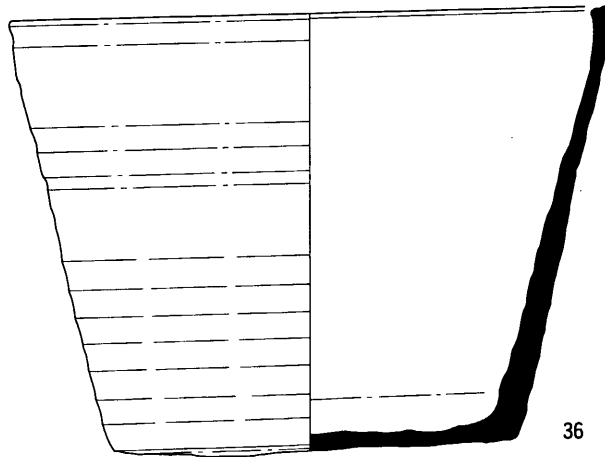
第129図 SK10出土土器実測図② (1/3)



34



35



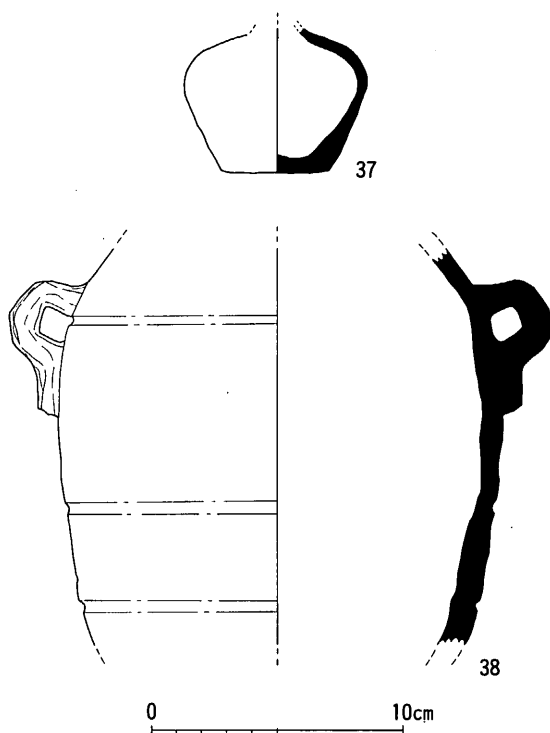
36



第130図 SK10出土土器実測図③ (1/3)

須恵器（第139～152図、図版85～95）

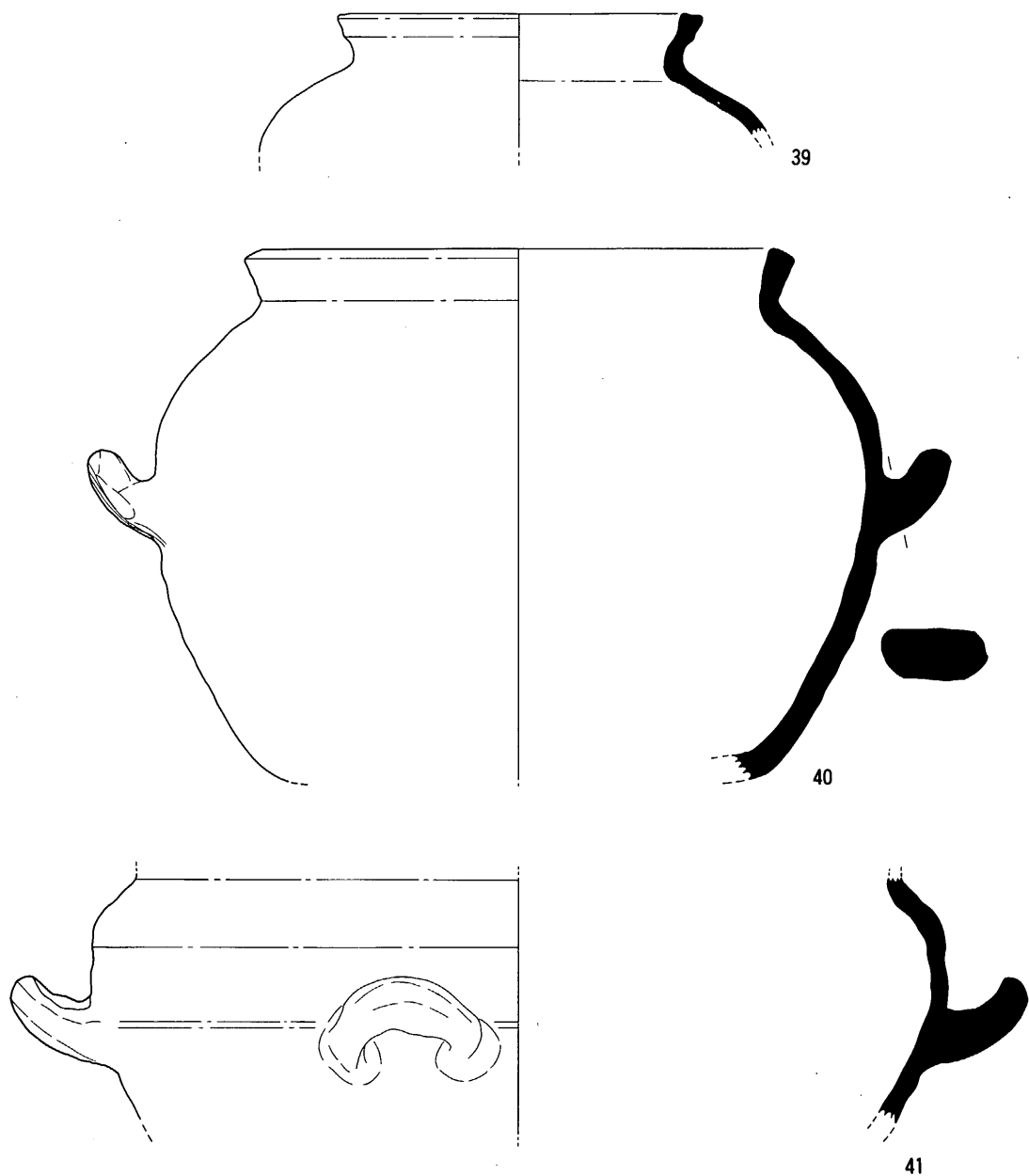
杯蓋（1～36） かえりがありつまみが付かないもの（1～5）、かえりがありつまみの付くもの（6～14）、かえりがなくつまみも付かないもの（15）、かえりがなくつまみが付くもの（16～36）がある。かえりがあるものは、磨滅のため器表面が観察できないもの（2・4・12・14）を除いて、つまみの有無にかかわらずすべて天井部外面に回転ヘラケズリを施す。つまみは貼り付けた後、回転ナデで調整する。6と10は重ね焼きの痕跡が明らかである。かえりがないものについては、15のみつまみが付かない。15は天井部に回転ヘラケズリを施し、口縁端部を下方に引き出す。やや焼成不良であるが、重ね焼きの痕跡が明らかである。16～36



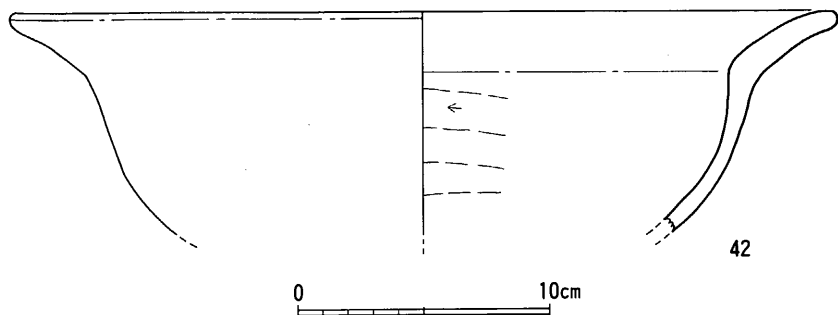
第131図 S K 10出土土器実測図④（1/3）

は、かえりがなく、つまみが付くものである。つまみはすべて貼り付けで、天井部外面に回転ヘラケズリを施すものは、16・19・20・21・22・23・24・27・28・29・30・31・33・34・35・36である。その他のものの天井部外面は、ヘラ切り後粗くナデる。口縁端部は、23・25のように下方に引き出すものもあるが、殆どは丸くおさめている。重ね焼きの痕跡が明らかなものは、16・17・18・20・21・22・24・27・28・29・30・31・33・35であるが、これらの中でも20・27・30の3点には、重ね焼きした他の須恵器が融着している。

杯身（37～102） 高台の付くもの（37～83）と、付かないもの（84～102）とがある。高台の付くものは、口径が8.8cm～21.6cmを測る。底部外面はすべてヘラ切り後粗くナデる。他の部分は回転ナデとナデで仕上げる。40・41・43・47・49・51は体部外面に灰をかぶっており、41・46・53・71には重ね焼きの痕跡が明らかである。59・68は底部外面にヘラ記号があり、61の底部には焼成後の穿孔がある。高台の付かないものは、口径7.7cm～14.4cmを測るが、殆どのものは12cm～13cmの間におさまる。87のみ底部外面に回転ヘラケズリを施すが、他はすべてヘラ切り後粗くナデる。他の部分を回転ナデとナデで仕上げることは共通している。91は焼きひずみのため底部が丸味を持っているが、本来は平底である。92・102には重ね焼きの痕跡が残り、99には焼き台の痕跡が残る。101の底部内面には「大」のヘラ書きがあるが、字自体は稚拙で



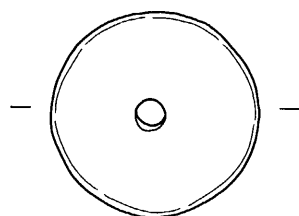
第132図 S K 10出土土器実測図⑤ (1/3)



第133図 S K 10出土土器実測図⑥ (1/3)

ある。

皿 (103～123) 高台の付くもの (121～123) と、付かないもの (103～120) とがある。高台の付かないものは、口径が9.4 cm～27.0 cmと幅広いが、18 cm～20 cmくらいが多い。底部外面に回転ヘラケズリを施すものは、104・108・110・114・117・118・123である。その他のものは、ヘラ切り後粗くナデる。底部外面以外は回転ナデとナデで仕上げるが、121は体部の最も下位に回転ヘラケズリを施す。104の底部内面には、「大」のヘラ書きがあるがこちらは手慣れた字体である。107・108・110・114・115・119には火襷があり、中でも119は重ね焼きの痕跡が明らかである。121～123の高台は貼り付けである。



第134図 S K 10出土土製
品実測図 (1/2)

蓋 (124) 復元口径で26.3 cmを測る。天井部外面に回転ヘラケズリを施し、他の部分を回転ナデとナデで仕上げる。つまみは貼り付け後、回転ナデで調整する。内外面ともに火襷があり、内面には重ね焼きの痕跡が明らかである。

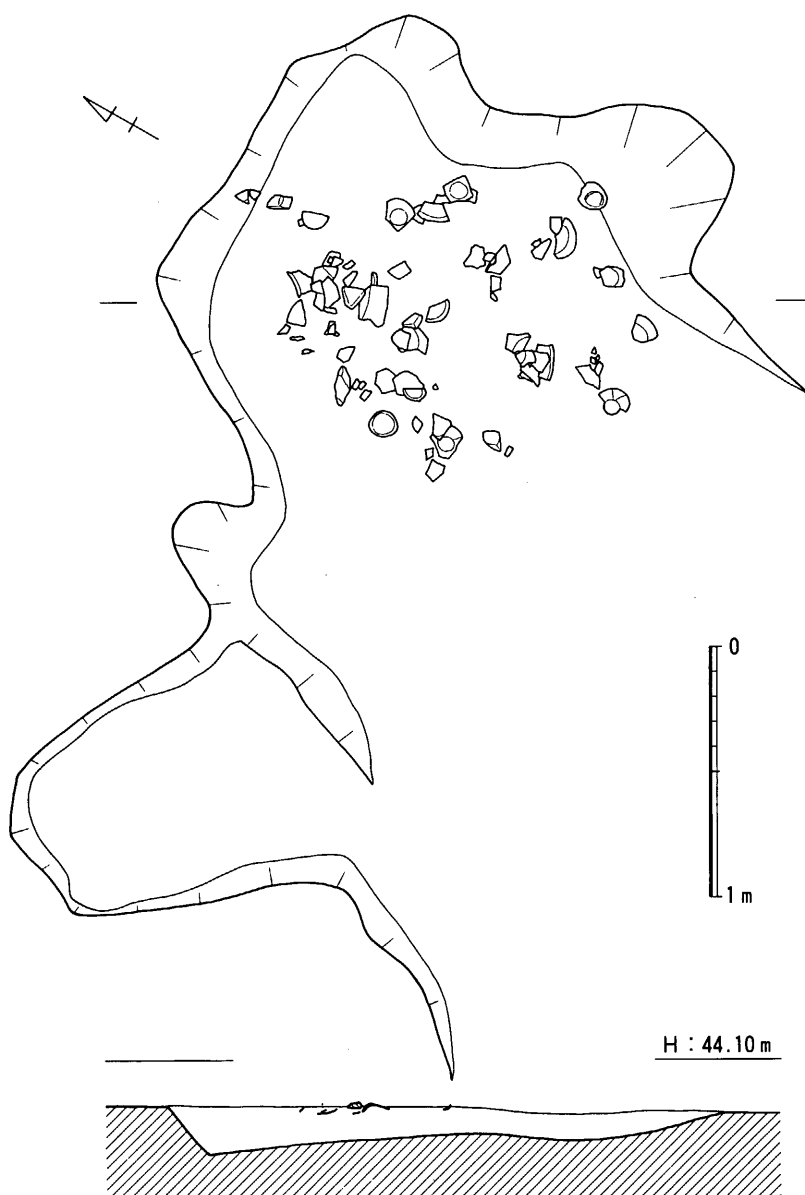
高杯 (125～132) 125～127は、短脚で杯部が深いもの、128～131は短脚で杯部が浅いもの、132は長脚で杯部が浅いものである。杯部の底部外面には、いずれも回転ヘラケズリを施す。他の部分は回転ナデとナデで仕上げる。128と130の杯底部内面には重ね焼きの痕跡が明らかである。127と129は焼きひずみ大きい。

鉄鉢 (133, 134) 133は体部の屈曲部より上位を欠く。いずれも尖底で体部外面下位に回転ヘラケズリを施す。133は内外面ともに灰をかぶっており、一部が自然釉化している。

すり鉢 (135) 底部には刺突、穿孔などは行っていない。体部内外面を回転ナデ、他の部分をナデで仕上げる。底部内面の数ヶ所に亀裂が入っている。

鉢 (136～144) 136はいわゆるコップ型鉢である。底部外面には回転ヘラケズリを施し、他の部分を回転ナデとナデで仕上げる。137は体部外面に灰をかぶっている。138・139は底部およ

び体部下位外面に回転ヘラケズリを施す。139は底部の一部が剥離している。140はきわめて焼成不良である。141は底部を欠くが、体部下位外面には回転ヘラケズリを施している。142・143は大型の鉢であるが、口縁端部のつくりはあまりシャープではない。ともに底部から体部下位外面に回転ヘラケズリを施す。144は全体の形が明らかではないが、体部の傾斜などから



第135図 SK11実測図 (1/30)

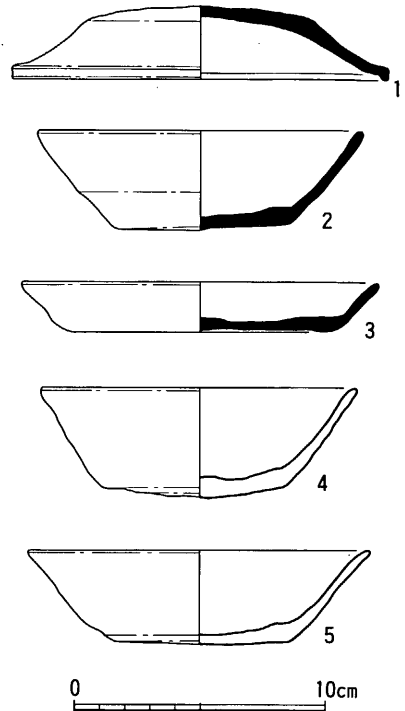
把手付鉢と考えた。把手は二等辺三角形の先端を上方に折り曲げたような形で、下から上に穿孔されている。焼成が悪く外面の調整は不明であるが、内面には回転ナデを施す。

瓶子（145～151） 145・147・149は口頸部の大半を欠いている。145は胴部外面に灰をかぶっており、底部外面に火轆がある。146は肩部を外に引き出すように作る。底部外面はヘラ切り後粗くナデる。147は胴部外面下位に手持ちヘラケズリ、上位に回転ヘラケズリを施す。148は胴部下位に回転ヘラケズリを施し、さらにその上から回転ナデを行う。高台は貼り付けである。149は胴部外面に部分的に回転ヘラケズリを施しているが、全体に灰をかぶっているためその範囲は不明である。150・151はともに底部外面から胴部下位外面にかけて回転ヘラケズリを施し、他の部分を回転ナデで仕上げる。150は胴部外面の一部に灰をかぶっている。

壺（152～157） 152は頸部がきわめて短い、胴部外面下位に回転ヘラケズリを施す。高台は貼り付けである。

153は底部を欠く。焼成不良のため器表面の磨滅が著しく、調整は不明である。153の底部外面はヘラ切り後粗くナデる。底部外面以外は全体的に灰をかぶっており、外面では一部自然釉化している。154は、底部外面から胴部下位外面にかけて回転ヘラケズリを施す。胴部外面には重ね焼きの痕跡が明らかである。156・157はほぼ同じ形状を呈するが、156は焼成不良で内外面とも磨滅しており調整が不明である。157は底部外面から胴部外面の中位に至るまで回転ヘラケズリを施す。高台は、貼り付け後回転ナデを施す。

長頸壺（158～162） 158の口縁部は段を持ち、端部は平坦に仕上げる。頸部中位に1条の沈線を持つ。底部外面から肩部のやや下の部分まで回転ヘラケズリ、他の部分には回転ナデを施す。159は口縁端部を強く外反させて平坦部を作り出す。頸部中位には1条の沈線を持つ。底部外面から肩部の下まで回転ヘラケズリ、他を回転ナデで仕上げる。高台は貼り付け後、回転ナデで調整する。160の口縁端部も強く外反する。頸部に沈線はないが、他の部分の調整技法は159と同様である。161は二重口縁風の段を持ち、口縁端部は平坦に仕上げる。頸部の付け根と肩部との間に、断面三角形の突帯がめぐり、さらに肩部にも同様の突帯がめぐり、底部外面はヘラ切り後粗くナデるだけであるが、胴部外面は肩部直下まで回転ヘラケズリを施す。高台は貼り



第136図 S K11出土土器実測図
(1/3)

付け後回転ナデ調整を施す。肩部以上の胴部外面と口頸部内外面に灰をかぶっており、頸部内面にはヘラ記号とも考えられる線刻が入っている。162は口縁部を強く外反させ、さらにその端部を上方に折り返している。頸部に沈線はない。頸部の付け根と肩部の間に断面四角形の突帯を2重にめぐらせており、さらに肩部にも突帯を貼り付けるが、その後の調整が161に比してやや雑である。底部外面から胴部下位外面にかけて回転ヘラケズリを施す。高台は貼り付けた後、回転ナデ調整を施す。外面は全体的に灰をかぶっている。胴部上位の突帯と肩部の間には外から内への穿孔があるが、その部分の胎土が栓状になって残っていた。また、胴部下位内面には竹串様の鋭利な工具で内から外へ穿孔しかけたような痕跡がある。この両者は実際は同一直線上にはないが、便宜上実測図ではそのように表現した。

双耳壺 (163・164) 163の耳は、いずれも紐状の胎土を貼り付けたもので、その後の調整はきわめて雑である。底部外面はヘラ切り後粗くナデ、胴部外面は耳の下まで回転ヘラケズリを施す。他の部分は回転ナデで仕上げる。164は胴部下半を欠く。耳はいずれも貼り付けた後ナデ調整を施す。胴部外面の耳より下方の残存部には回転ヘラケズリを施す。他の部分は回転ナデで仕上げる。

甕 (165) 小型の甕である。口縁部は短く外反し、端部を斜め上方に引き出す。胴部下半を欠くが、残存部については外面を平行叩きの後回転ナデ調整を施し、内面には同心円状当て具痕が残る。やや焼成不良である。

土師器 (第153～156図、図版95～97)

杯 (166～169) 166のみ高台が付く。調整は、底部外面が回転ヘラケズリ、体部内外面はヘラミガキである。底部外面の中央部と、高台の畳付の一部に黒斑がある。167～169はいずれも器表面が磨滅しており。調整がわかりにくい。167・168は底部外面に回転ヘラケズリを施した痕跡が認められる。169は底部外面の回転ヘラケズリは明らかであるが、他の部分は不明である。

皿 (170～173) 170・171は口径18cmのもので高台が付かない。170は底部外面に回転ヘラケズリを施し、他の部分を回転ナデで仕上げる。171は底部外面をヘラ切り後粗くナデ、他を回転ナデで仕上げる。172・173は、口径28cm以上を測り、ともに高台は貼り付けである。172は小片であるが、体部内外面、底部内面ともヘラミガキを施す、173は、底部外面に回転ヘラケズリを施し、体部内外面、底部内面はヘラミガキする。

蓋 (174) 口径26.6cmを測る大型の蓋である。つまみは貼り付け、天井部外面に回転ヘラケズリを施し、他を回転ナデとナデで仕上げる。天井部内面に黒斑がある。

高杯 (175) 杯部の口縁端部を平坦に作る。杯部の底部外面には回転ヘラケズリを施し、内面はヘラミガキで仕上げる。脚部には回転ナデを施す。

鉢 (176～179) 176・177は、体部が内湾気味に伸び口縁部が短く外反するものである。とも

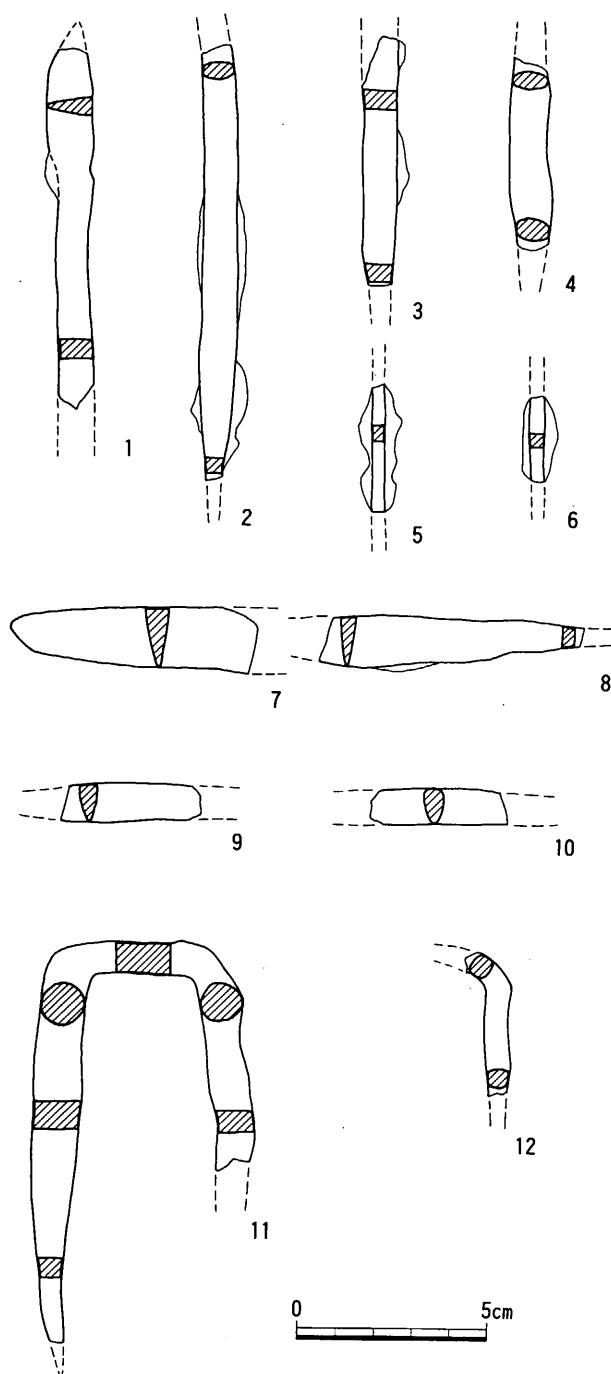


に器表面が磨滅しているが、176の底部外面には回転ヘラケズリ、口縁部と体部内面には回転ナデ、177の底部と体部外面には回転ヘラケズリ、体部内面には回転ナデの痕跡が認められる。178と179は体部が外上方に開き、口縁部が強く外反するものである。178は底部外面に回転ヘラケズリを施し、高台は貼り付けである。体部は内外面ともヘラミガキで仕上げる。179は底部を欠くが、体部外面下半に回転ヘラケズリを施し、他をヘラミガキで仕上げる。

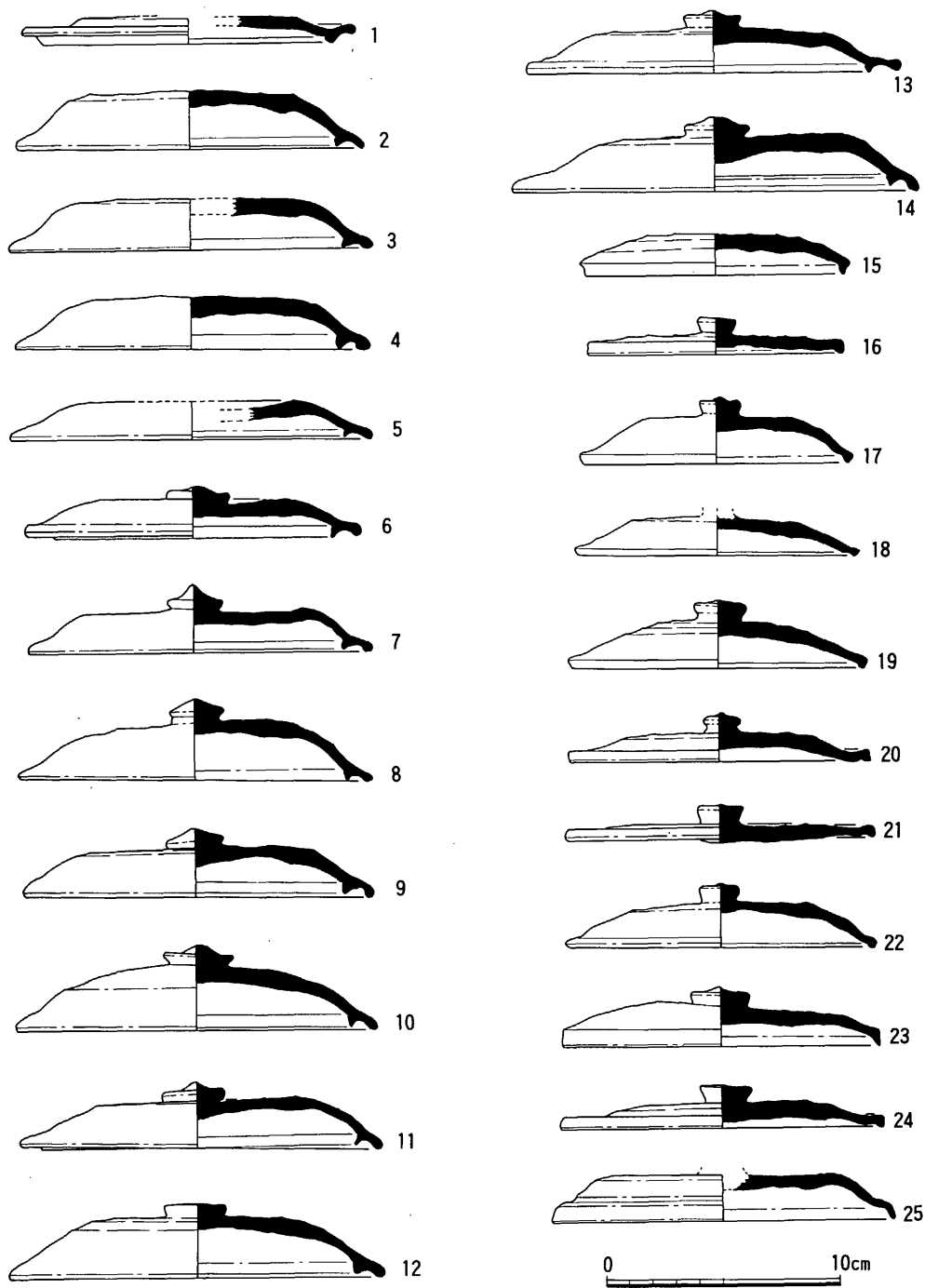
壺 (180) 底部を欠くが、小型の短頸壺と思われる。体部外面下半の残存部には回転ヘラケズリを施し、他は回転ナデとナデで仕上げる。

甕 (181~185) 181以外は、口縁部が強く外反するものである。いずれも器表面が磨滅しており、調整がわかりにくい。観察することができた限りでは口縁部内外面にヨコナデ、胴部外面にハケ目調整、胴部内面にはヘラケズリを施す。

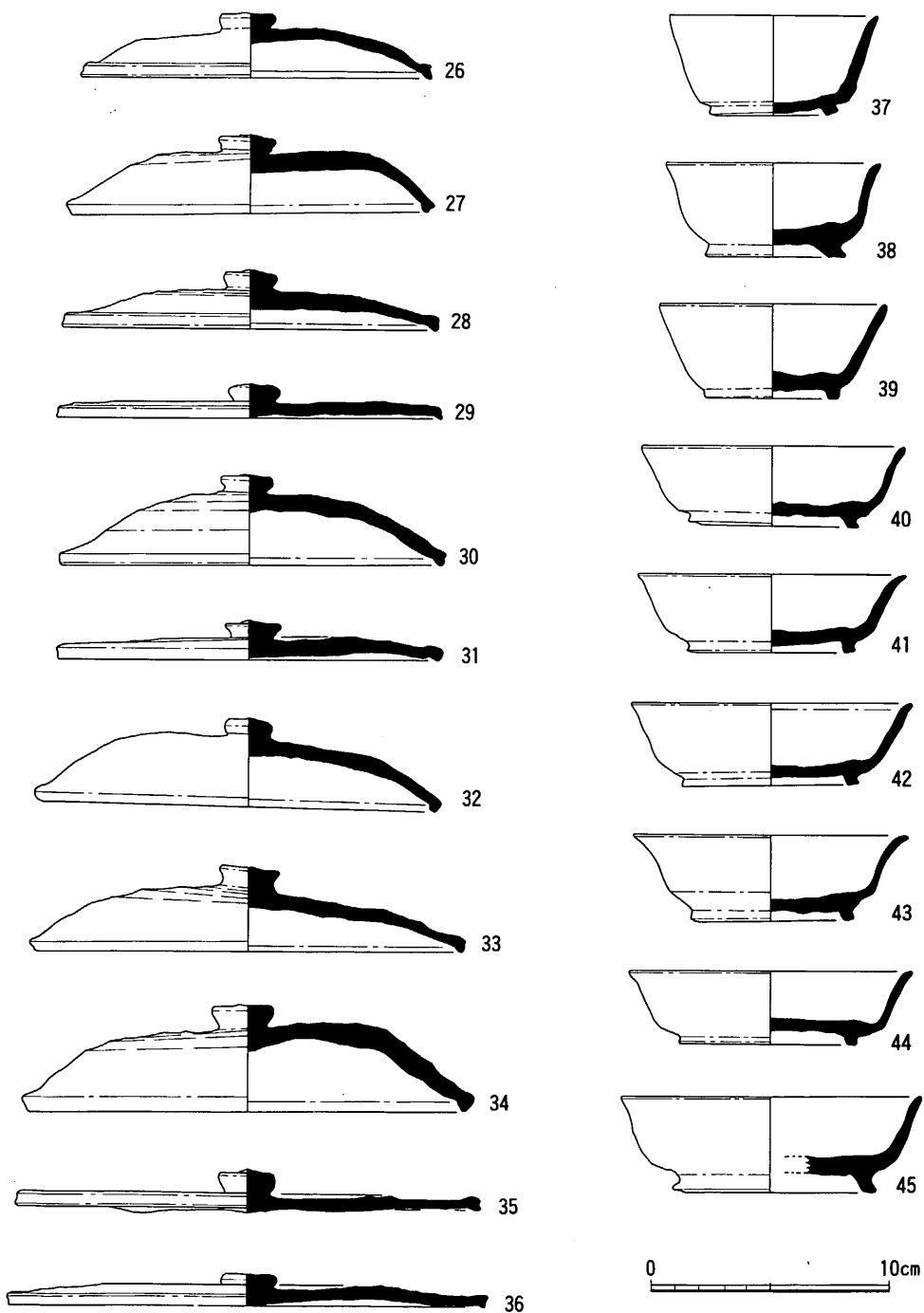
把手付甕 (186) 平底で、口縁部は短く外反する。調整は、口縁部外面はヨコナデ、内面はハケ目、胴部と底部の外面はハケ目、内面はヘラケズリである。把手は貼り付けた後ハケ目調整を施す。



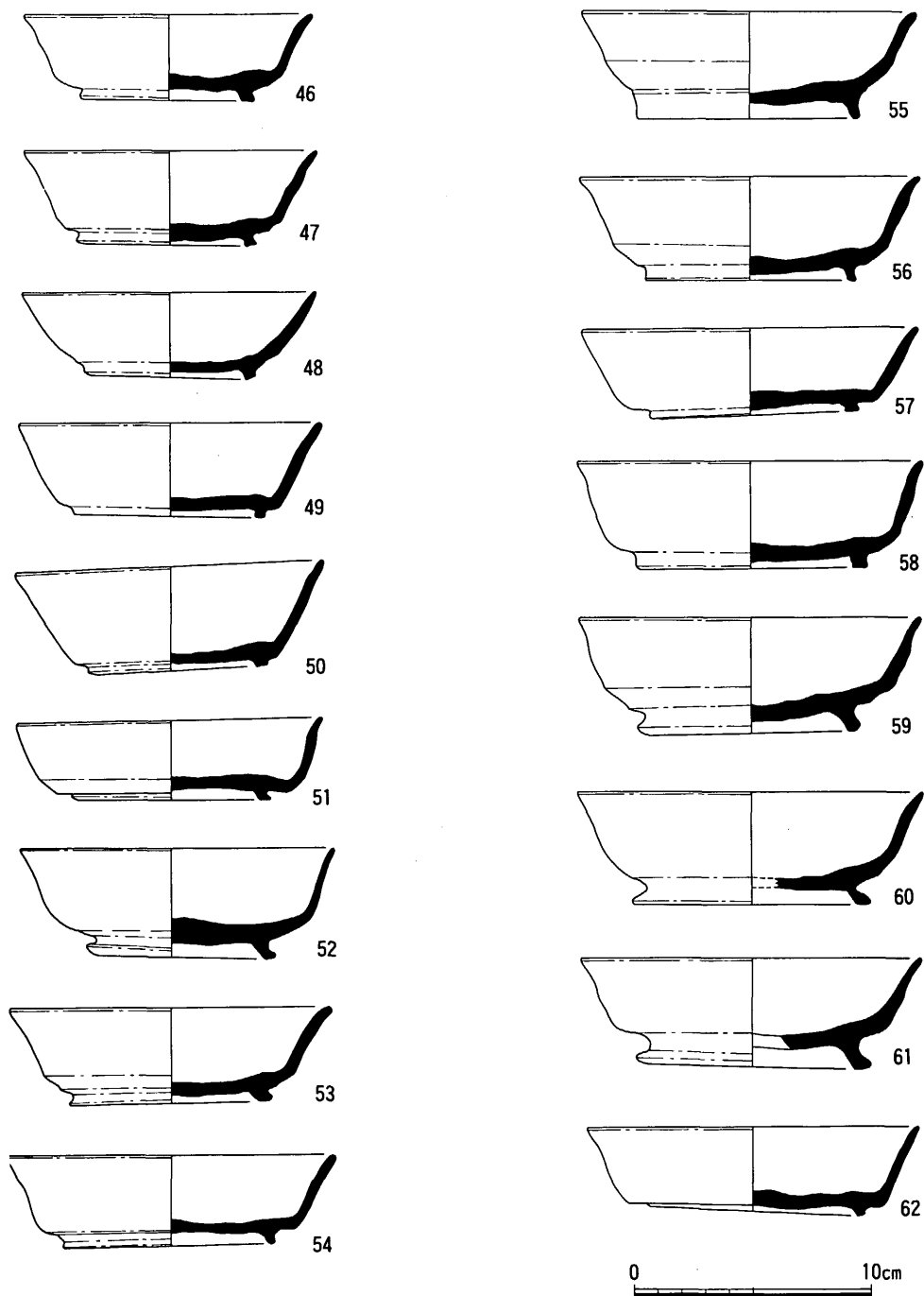
第138図 SK12出土鉄器実測図 (1/2)



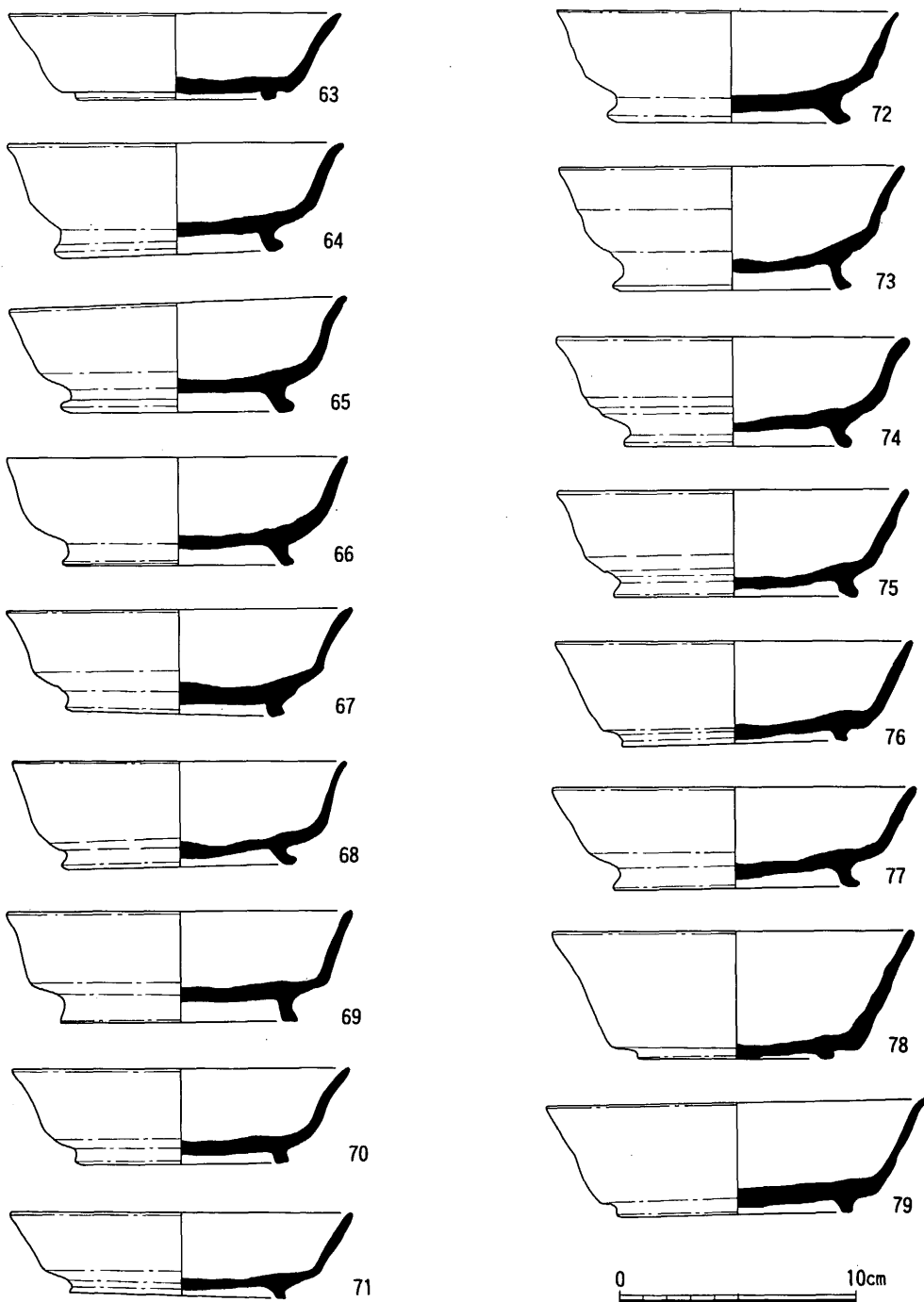
第139図 S K12出土土器実測図① (1/3)



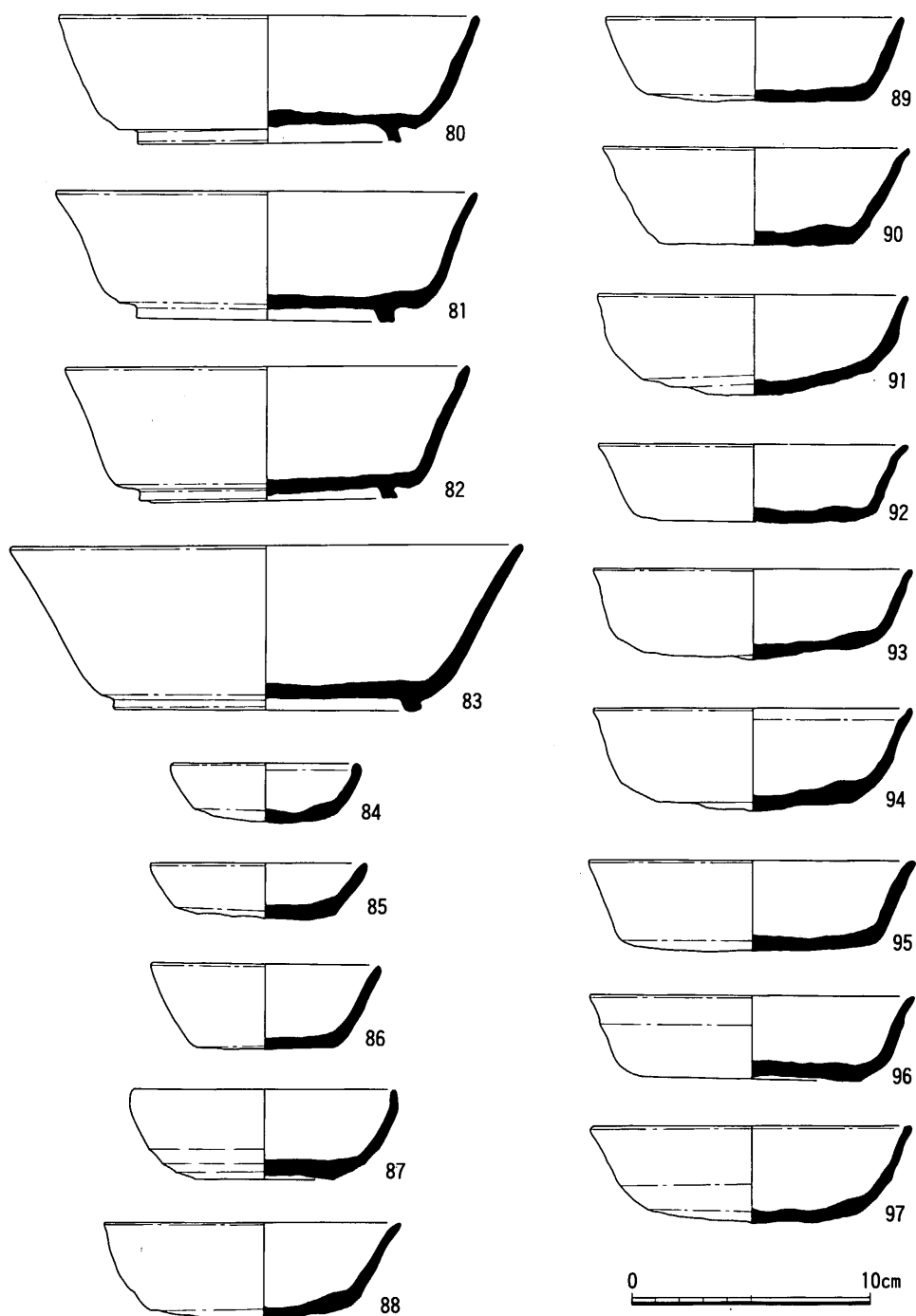
第140図 SK12出土土器実測図② (1/3)



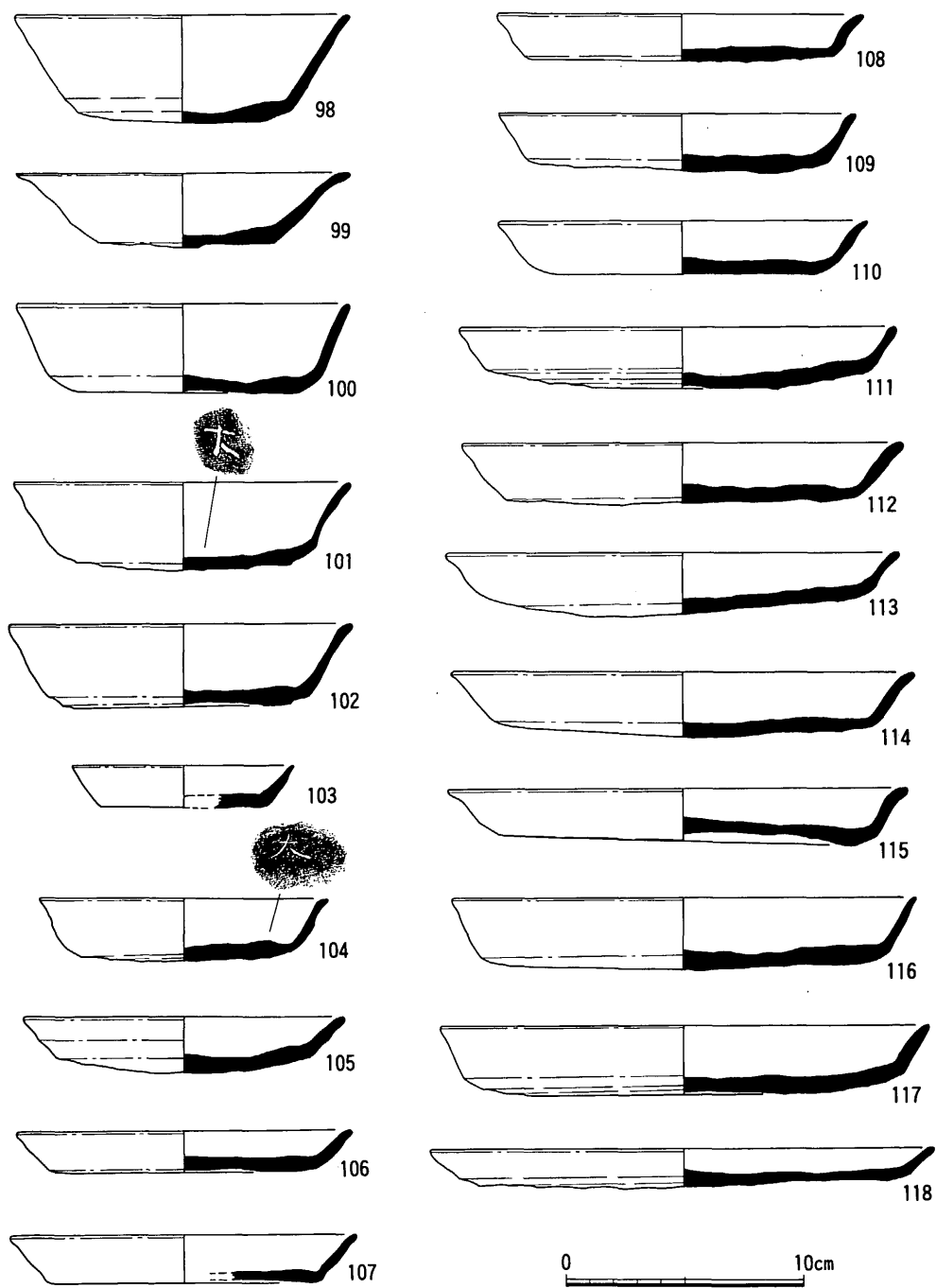
第141図 SK12出土土器実測図③ (1/3)



第142図 S K 12出土土器実測図④ (1/3)



第143図 SK12出土土器実測図⑤ (1/3)



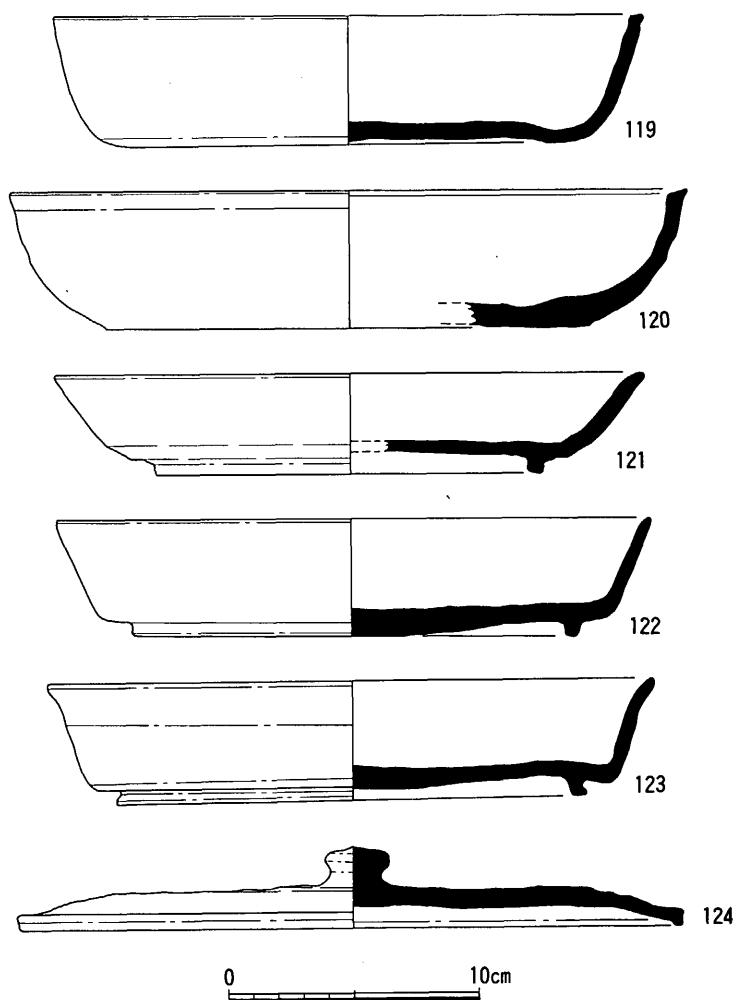
第144図 SK12出土土器実測図⑥ (1/3)

羽釜 (187) 土師質のものであるのでここに載せた。体部下位を欠くが、受部より下の体部外面には回転ヘラケズリ、受部と口縁部外面には回転ナデを施す。内面の調整は磨滅のため不明である。

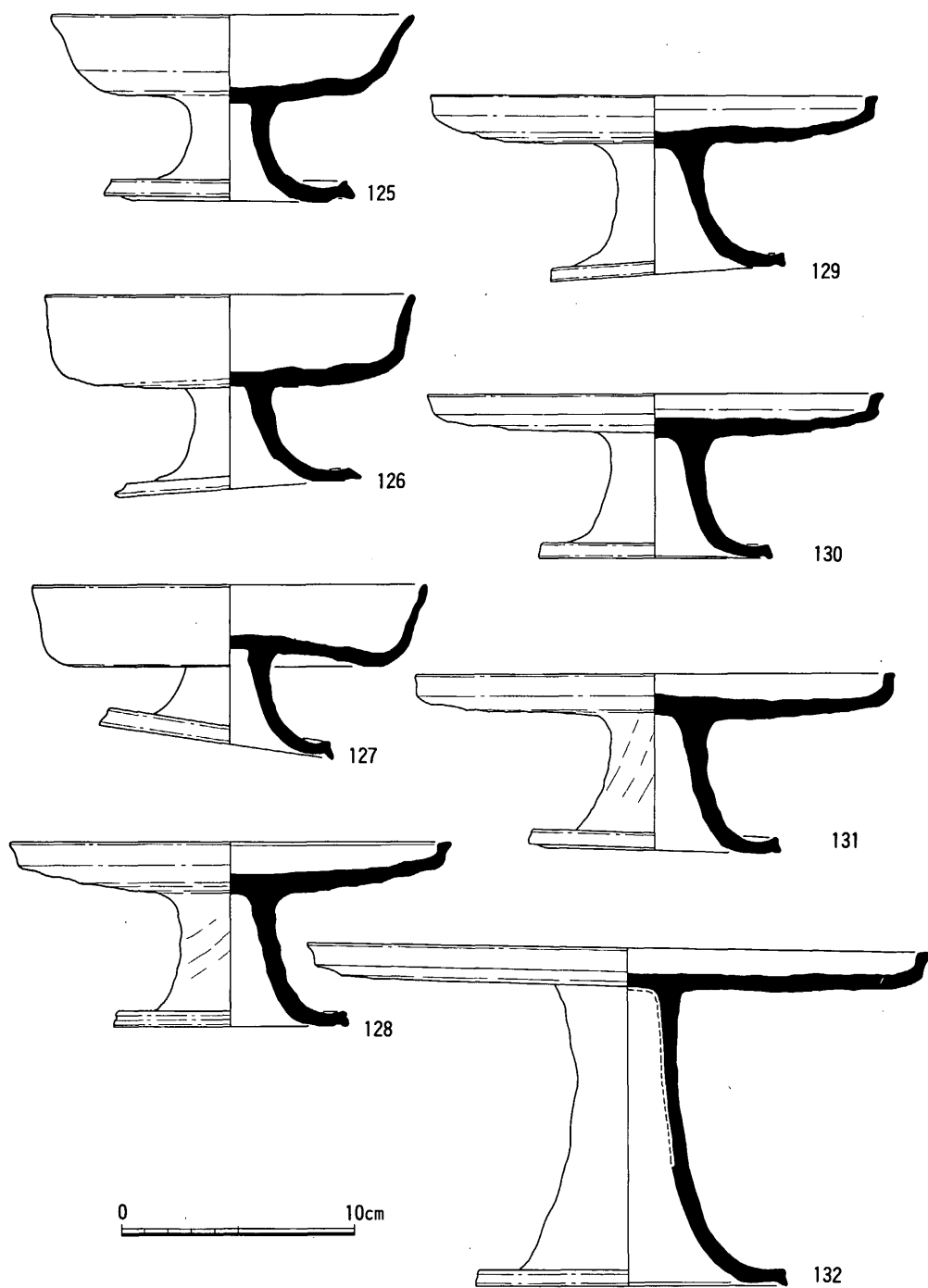
手捏ね土器 (188) 外面に指頭痕が残るが、その上から丁寧にナデている。焼成は良好。

ミニチュア土器 (189) 短頸壺のミニチュアと思われる。内外面とも磨滅のため調整は不明である。

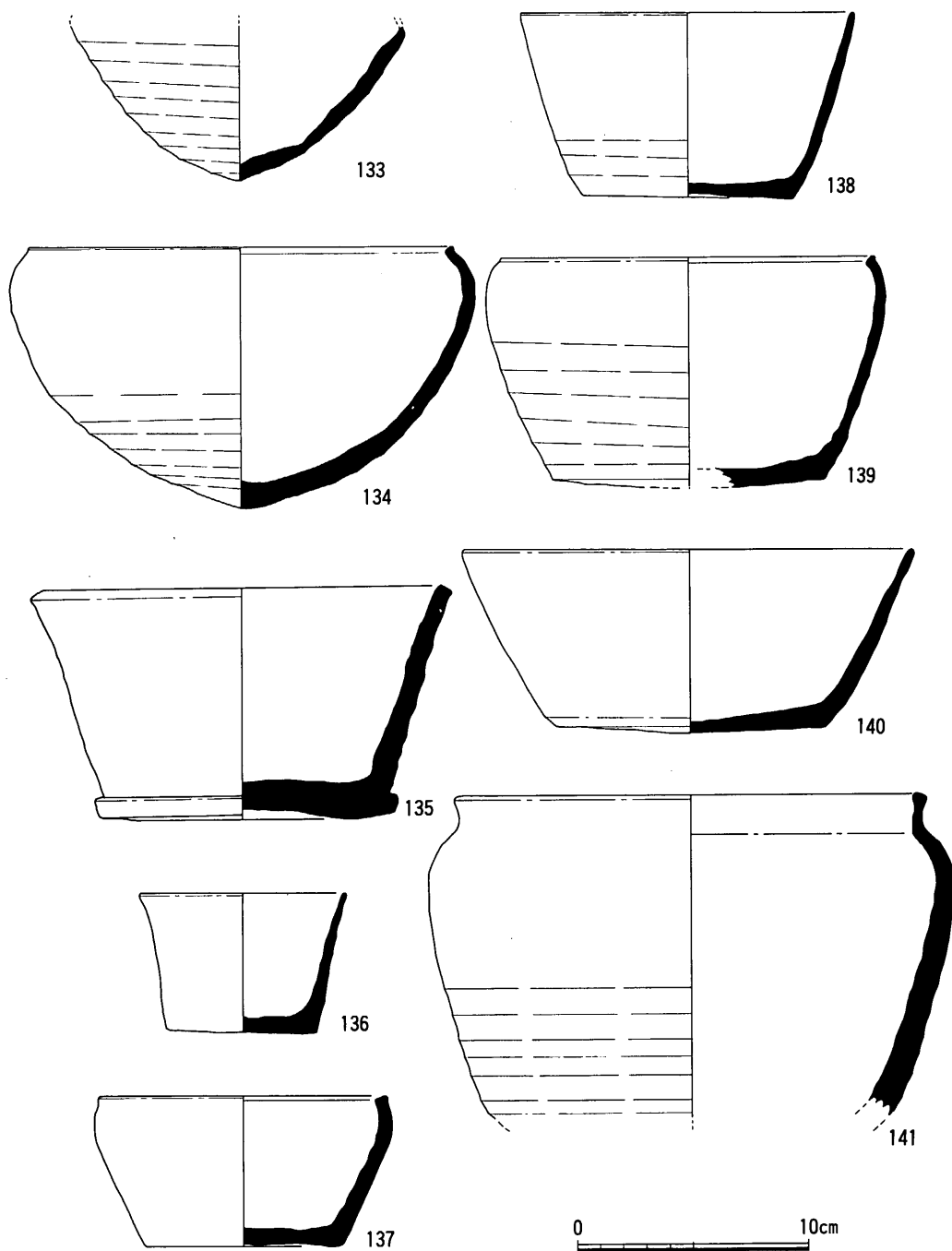
獣脚 (190・191) 高さ、幅、細部の形状などから、おそらく対をなすものと考えられる。上端面の観察から、丸味を持った器形の底部に貼り付けられていたものと思われるが、その場合、本来は同様のものがもう1点存在した可能性もある。



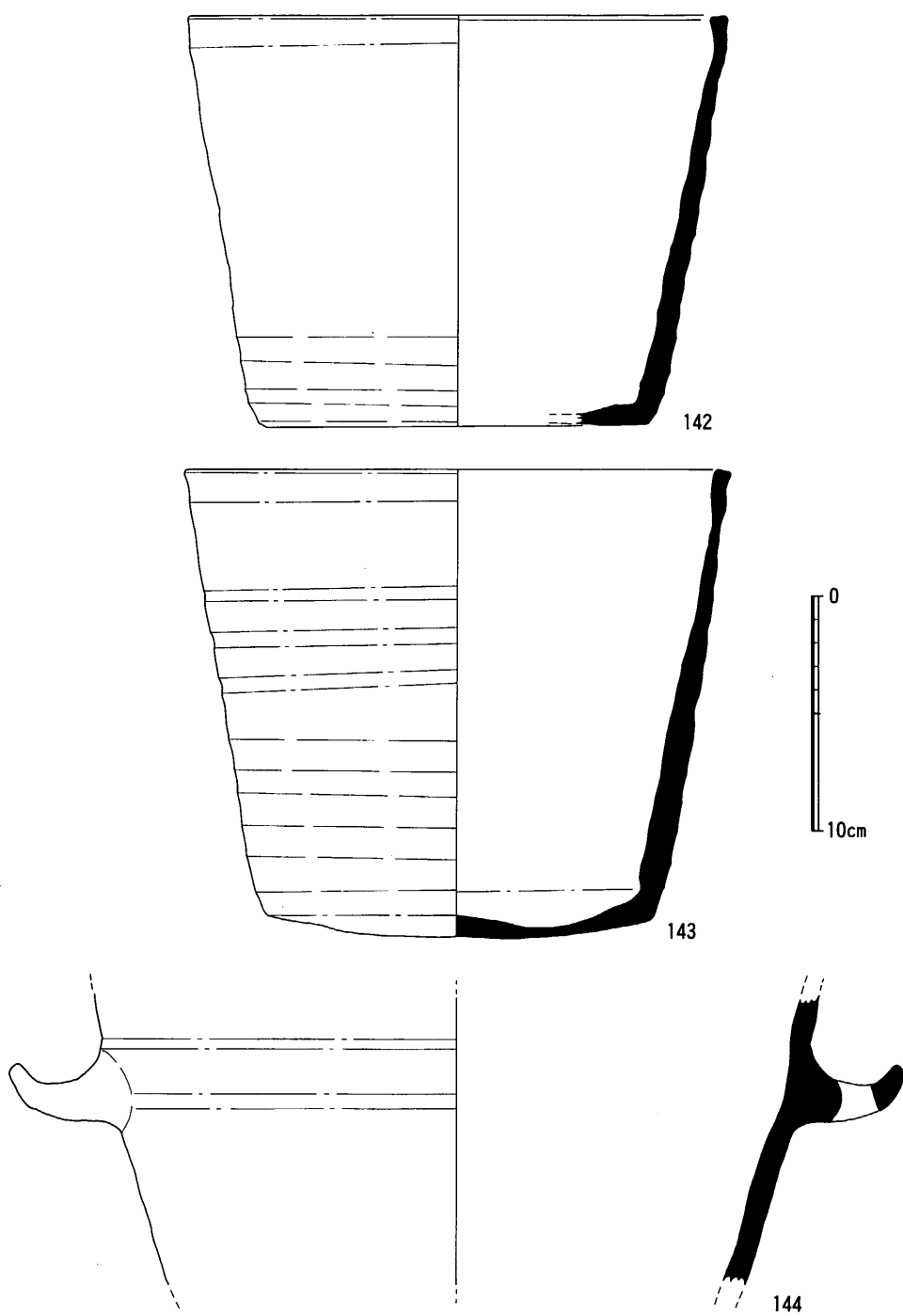
第145図 S K12出土土器実測図⑦ (1/3)



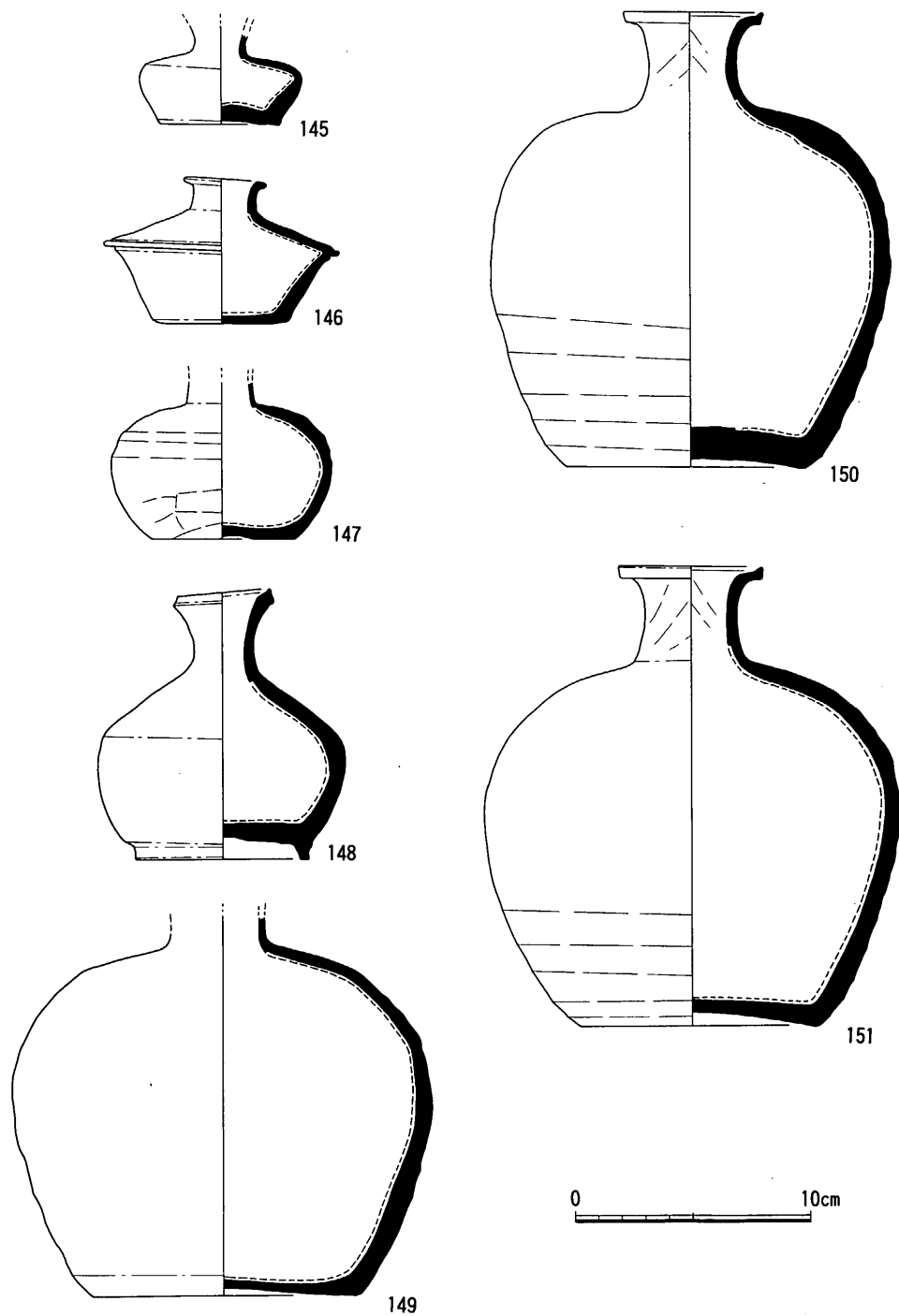
第146図 SK12出土土器実測図⑧ (1/3)



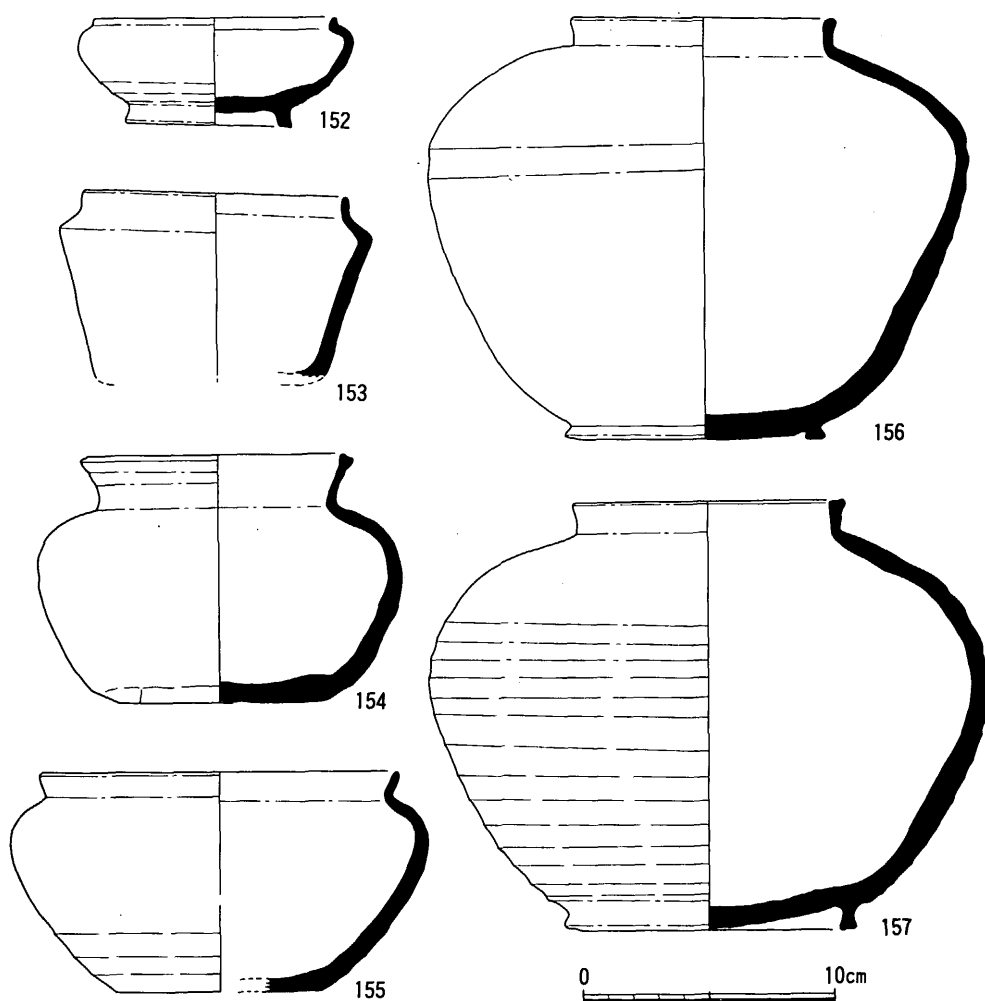
第147図 SK12出土土器実測図⑨ (1/3)



第148図 S K 12出土土器実測図⑩ (1/3)



第149図 S K12出土土器実測図① (1/3)

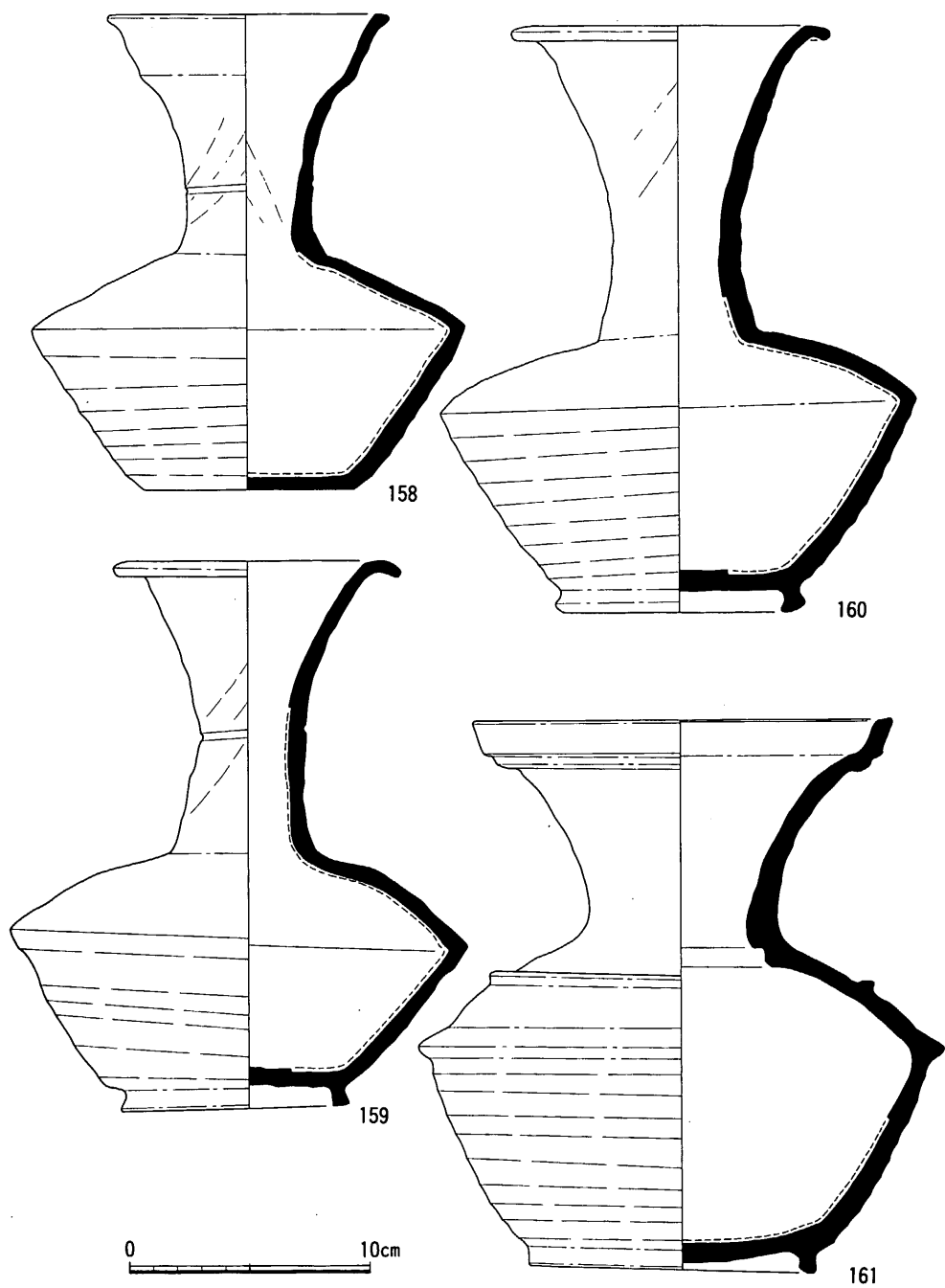


第150図 SK12出土土器実測図⑫ (1/3)

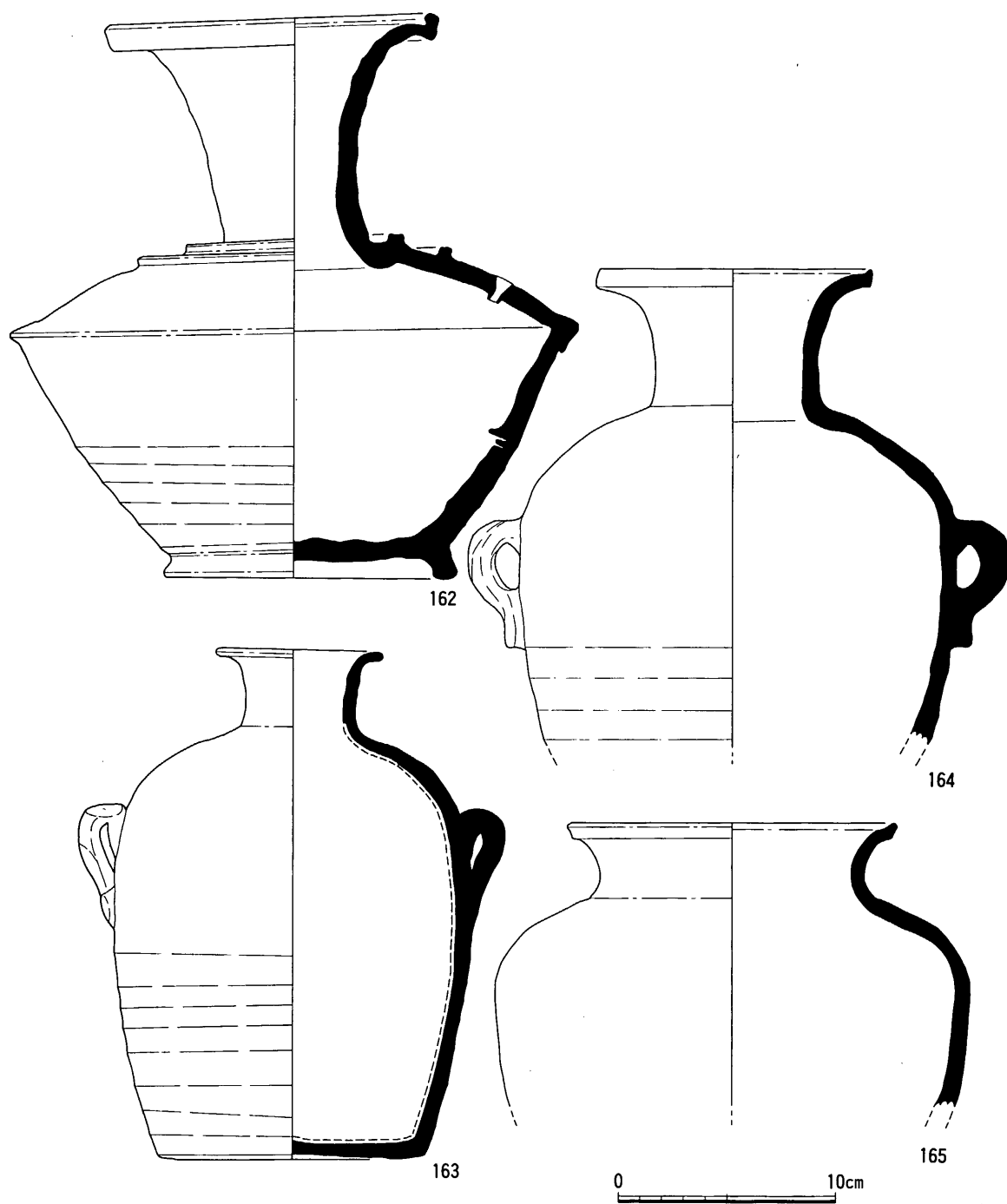
黒色土器 (192) 内面のみ焼すものである。底部外面には回転ヘラケズリを施す。内面には、部分的にヘラミガキの痕跡が残る。

勾玉 (第157図、図版113)

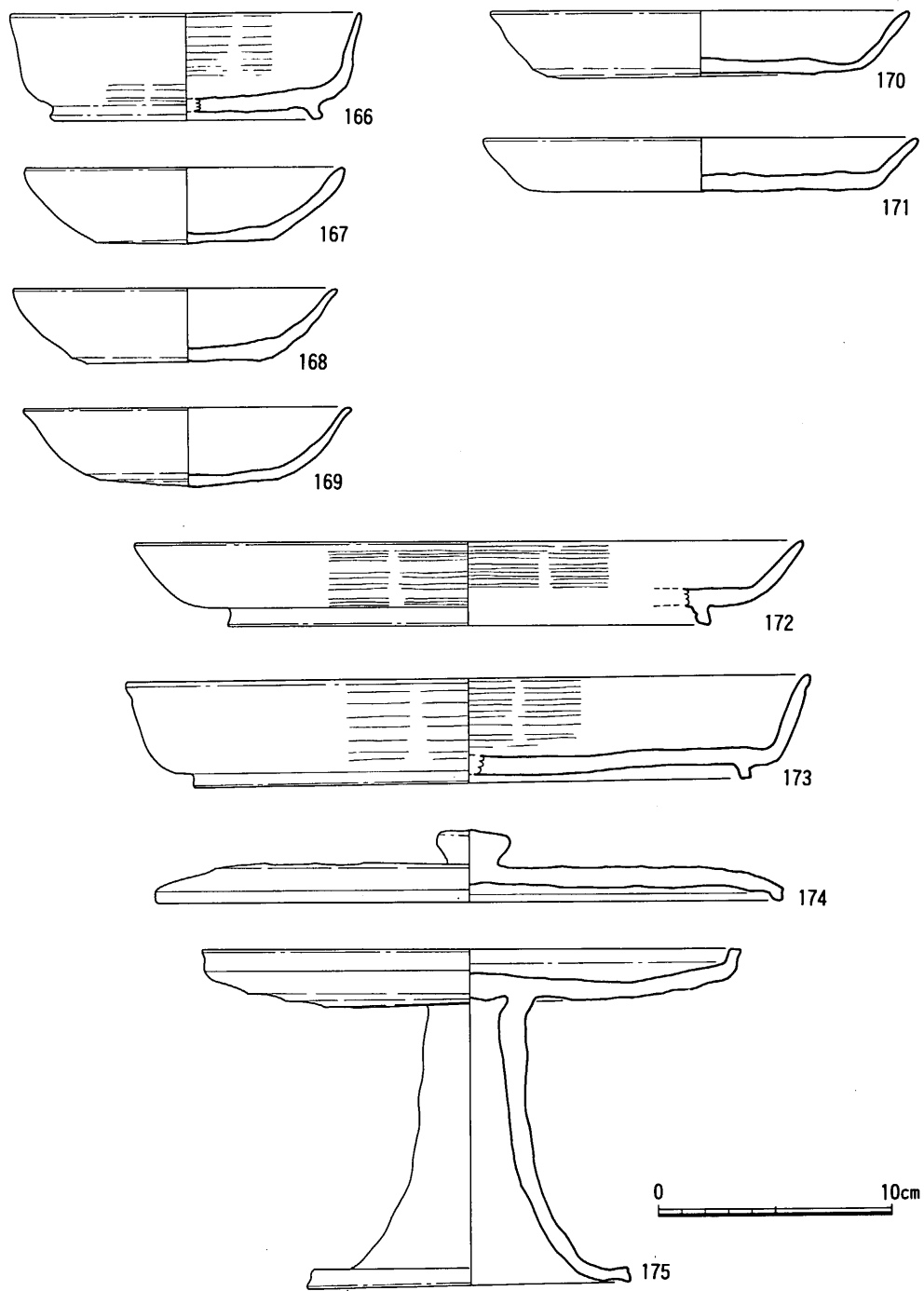
滑石製で、長さ10.0cm、幅3.2cm、厚さ1.3cm、孔径4～5mm、重さ85gである。研磨して仕上っているため、擦痕が多く残る。孔は両側から穿孔している。



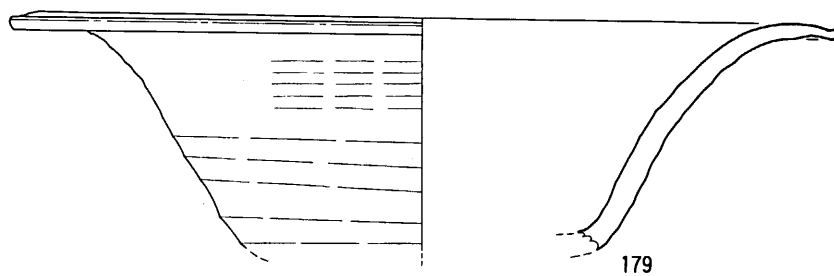
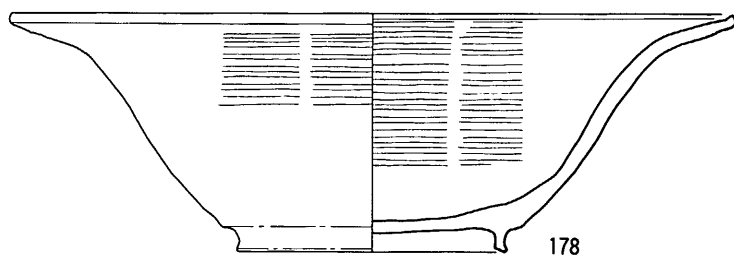
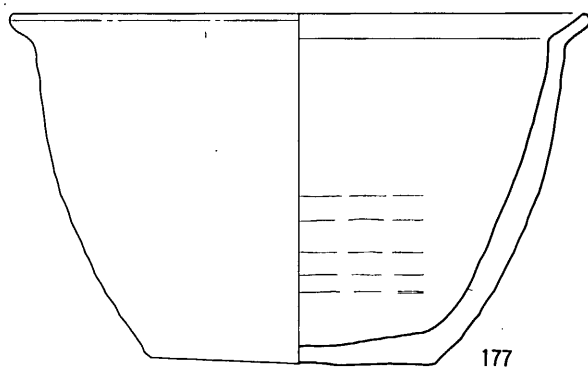
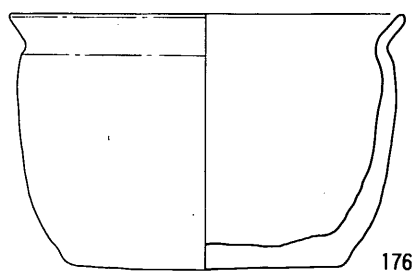
第151図 SK12出土土器実測図⑬ (1/3)



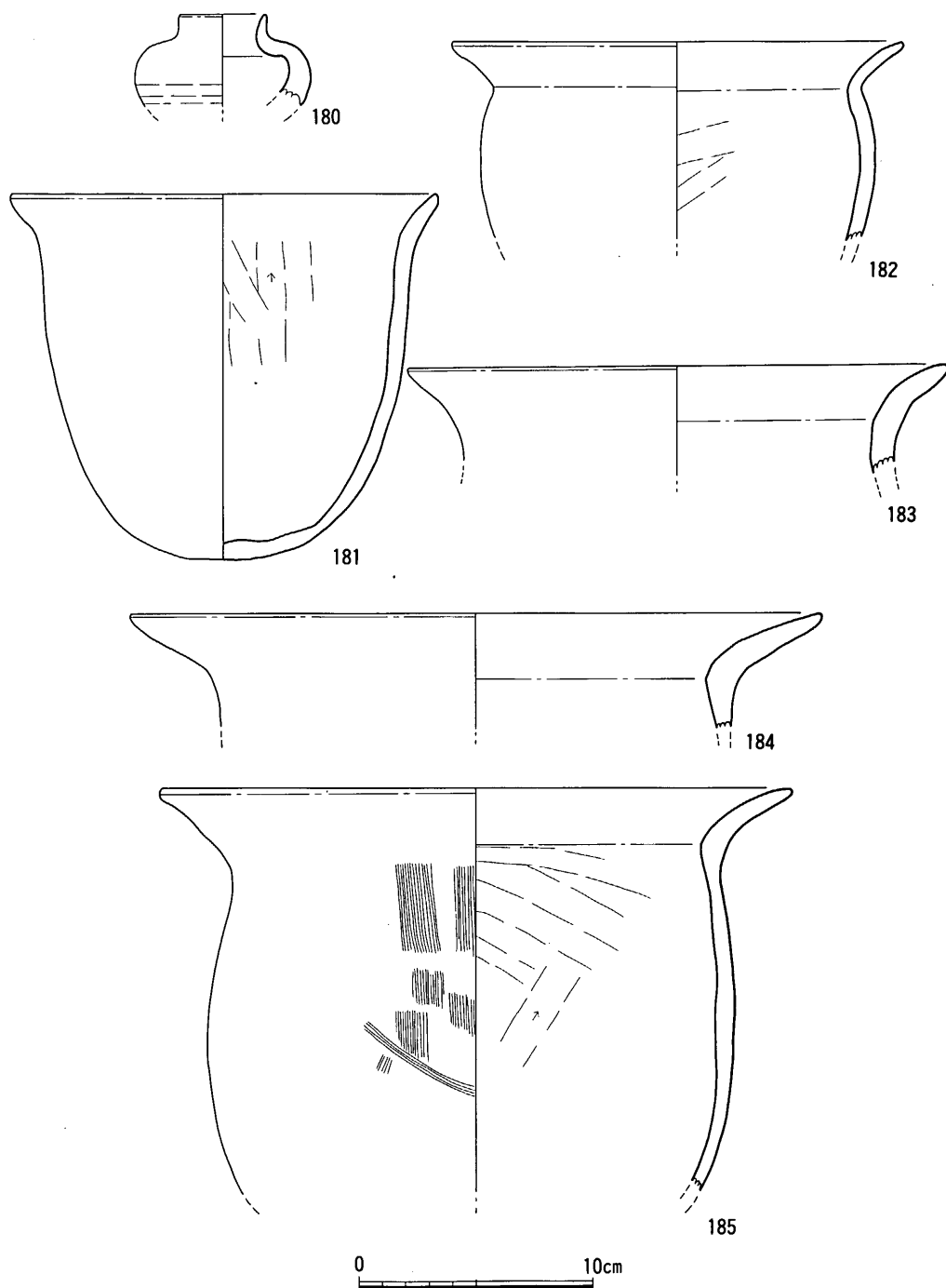
第152図 SK12出土土器実測図⑭ (1/3)



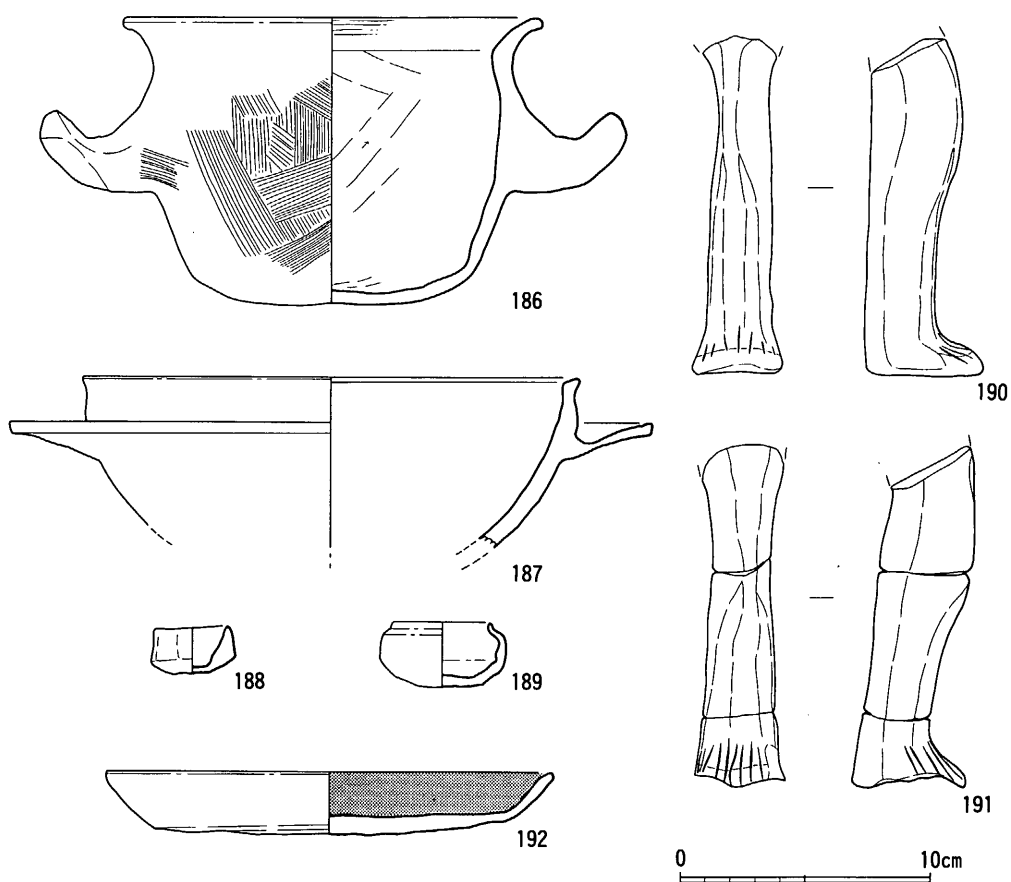
第153图 S K12出土土器实测图⑮ (1/3)



第154図 SK12出土土器実測図⑯ (1/3)



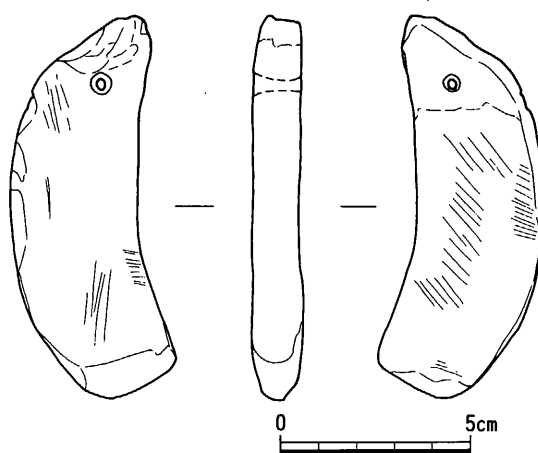
第155図 S K12出土土器実測図⑰ (1/3)



第156図 SK12出土土器実測図⑩ (1/3)

SK13 (第158図)

調査区の東端部に位置する。本遺構の西側には22号・23号住居跡があり、最も近い部分での距離は、約3.5mと約2mを測る。不整形で東西方向に長い平面プランを呈する。規模は、上端の最大値をとると、おおよそ6.5m×5.0mとなる。床面には部分的に緩い凹凸があり、また7個のピットがある。それらのうちの1個は細長いものである。深さは最大で0.5m強を測る。壁の立ち上がりは



第157図 SK12出土石製品実測図 (1/2)

急であり、垂直に近い部分もある。

遺物は、埋土中から浮いた状態で出土した。その内容は、須恵器杯蓋・杯身・蓋・鉢・甕、土師器杯・甕・縄文土器、鉄滓などであり、総量は整理箱で約2箱である。ただし、小破片が多く、図示できるものは少かった。また、これらの他に、やはり床面からは浮いた状態で粘土の散布が認められた。

出土遺物

須恵器（第159図、図版97）

杯蓋（1） かえりを有し、つまみの付かないものである。天井部外面をヘラ切り後粗くナデ、他の部分は回転ナデとナデで仕上げる。かえりは断面三角形を呈する。天井部外面にヘラ記号がある。

杯身（2） 底部外面に回転ヘラケズリを施し、高台は外に踏ん張る。底部外面以外の部分の調整は回転ナデとナデである。胎土中に径1mm～3mmほどの白色の石英粒を大量に含む。

鉢（3・4） 3は体部が内湾する。底部外面はヘラ切り後粗くナデ、ヘラ記号がある。底部と体部の境には回転ヘラケズリを施す。他の部分は回転ナデとナデで仕上げる。胎土中に径1mm～3mmほどの白色の石英粒を含む。4の体部は直線的に外方に開く。底部外面から底部と体部の境にかけて回転ヘラケズリを施し、他は回転ナデとナデで仕上げる。胎土中に径1mm～4mmの白色の石英粒を大量に含む。

土師器（第159図）

甕（5） 口頸部から胴部下半にかけての破片である。各部の調整は、口頸部内外面は回転ナデ、胴部内面はヘラケズリ、胴部外面はハケ目がごく一部に痕跡的に残るほかは、磨滅のため不明である。

SK14（第160図、図版32）

調査区の北端部に位置する。不整形な平面プランを呈し、上端の長軸と短軸は、4.4m×3.0mを測る。床には段が多く、複雑である。また、他にピットが1個ある。深さは最大で0.55mを測る。他の廃棄土坑に比べて壁の立ち上がりが急で、垂直に近く立ち上がる部分もある。

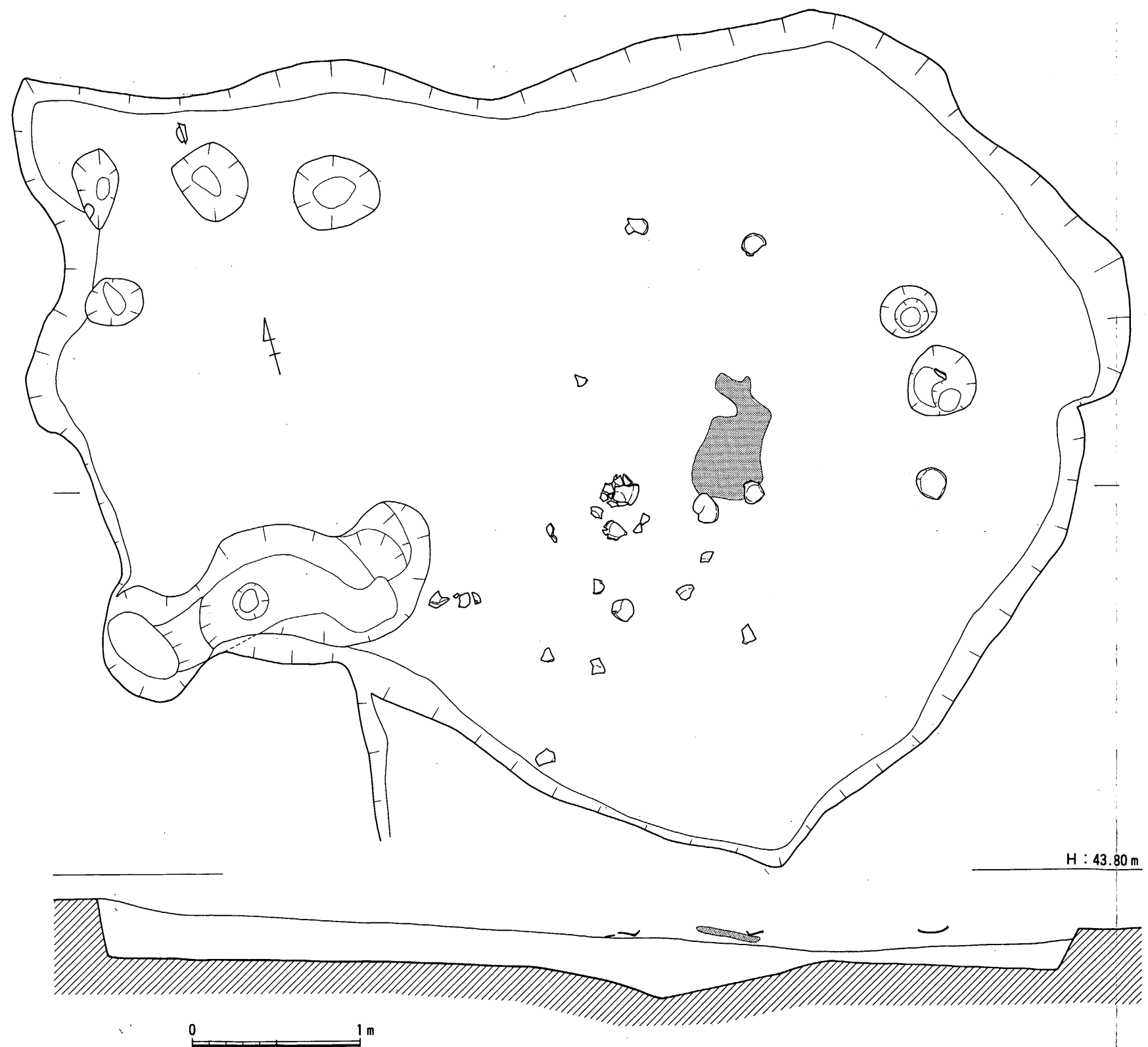
中央部を二分するように溝に切られているが、浅い溝であったため、本遺構への影響は少なかった。

遺物は、埋土中から浮いた状態で出土した。その内容は、須恵器杯蓋・杯身・皿・蓋・高杯・壺・甕、土師器杯・皿・蓋・甕、縄文土器片、黒色土器片、黒曜石剥片などであり、総量は整理箱で約2箱である。

出土遺物

須恵器（第161図、図版97）

杯身（1～3） 1の高台は貼り付けで、内側で接地する。底部外面にヘラ切り後粗いナデを



第158図 SK13実測図 (1/30)

施し、他の部分を回転ナデとナデで仕上げる。体部外面に灰をかぶっている。2・3ともに底部外面をへら切り後粗くナデる。2は他の部分を回転ナデのみで仕上げる。3は回転ナデとナデである。

蓋（4） 天井部外面には回転ヘラケズリを施す。つまみは貼り付けた後、回転ナデで調整する。

皿（5） 底部外面をへら切り後ナデ、他の部分を回転ナデとナデで仕上げる。底部外面には重ね焼きの痕跡がある。

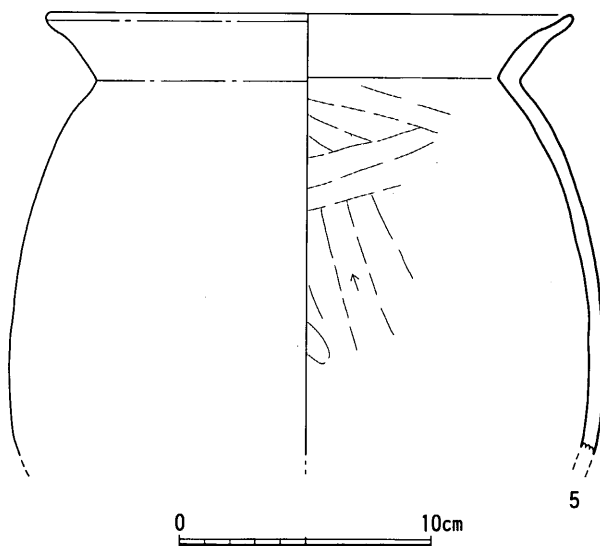
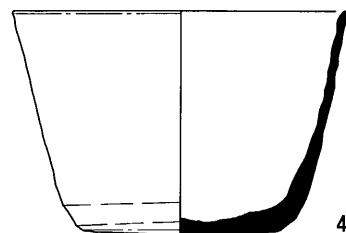
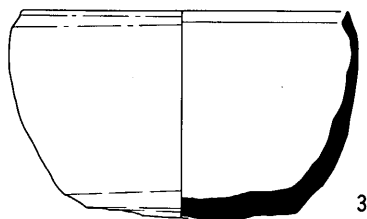
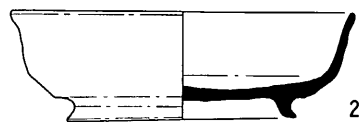
土師器（第161図、図版97）

杯（6） 器表面が磨滅しているため調整がよくわからないが、底部外面には回転ヘラケズリを施しているようである。

S K 15（第162図、図版33）

調査区のやや東寄りに位置する。楕円形に近い平面プランを呈する。上端の長軸と短軸は、4.1m×2.8mを測る。床は平坦ではなく、わずかな凹凸が認められる。また、ピット2個が確認された。壁は、40°～50°の角度をもって立ち上がるが、壁面にもわずかな凹凸が認められる。深さは0.2m弱である。

遺物は、埋土中から浮いた状態で出土した。その内容は、須恵器杯蓋・杯身・皿・高杯・壺・甕、土師器杯・甕、鉄器、瓦片などであるが、特に須恵器の甕の破片が



第159図 S K 13出土土器実測図（1/3）

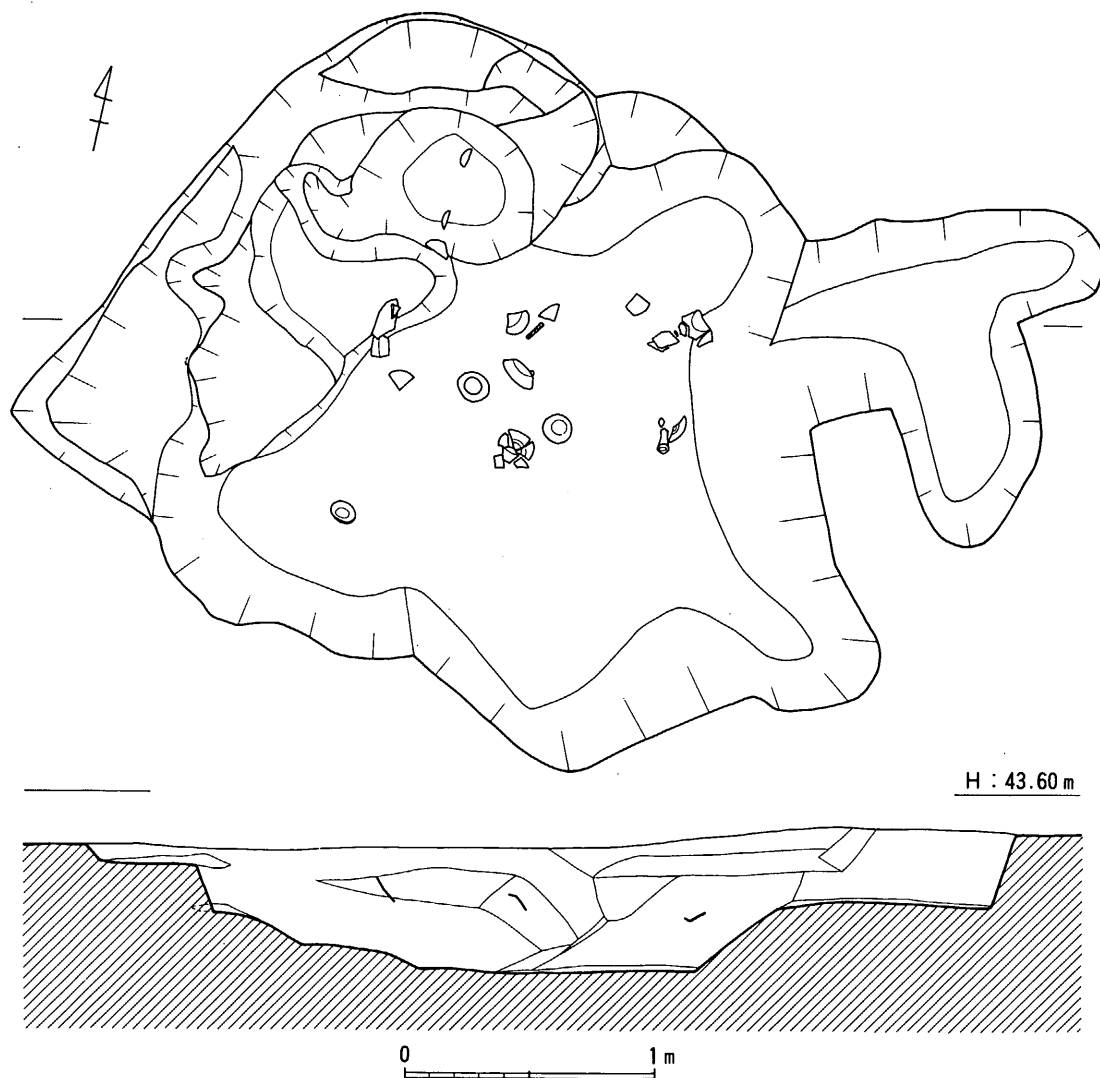
多かった。その総量は、整理箱で2箱ほどである。

出土遺物

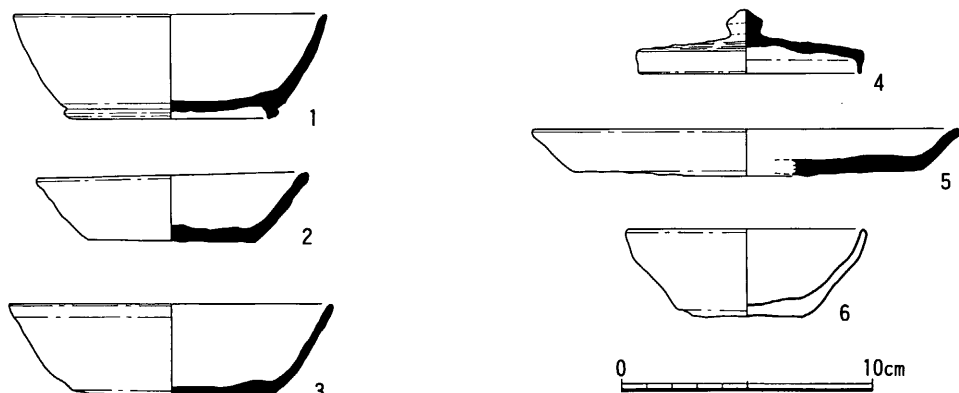
須恵器（第163・164図、図版97）

杯蓋（1） 天井部外面に回転ヘラケズリを施し、他の部分を回転ナデとナデで仕上げる。天井部外面にはヘラ記号がある。

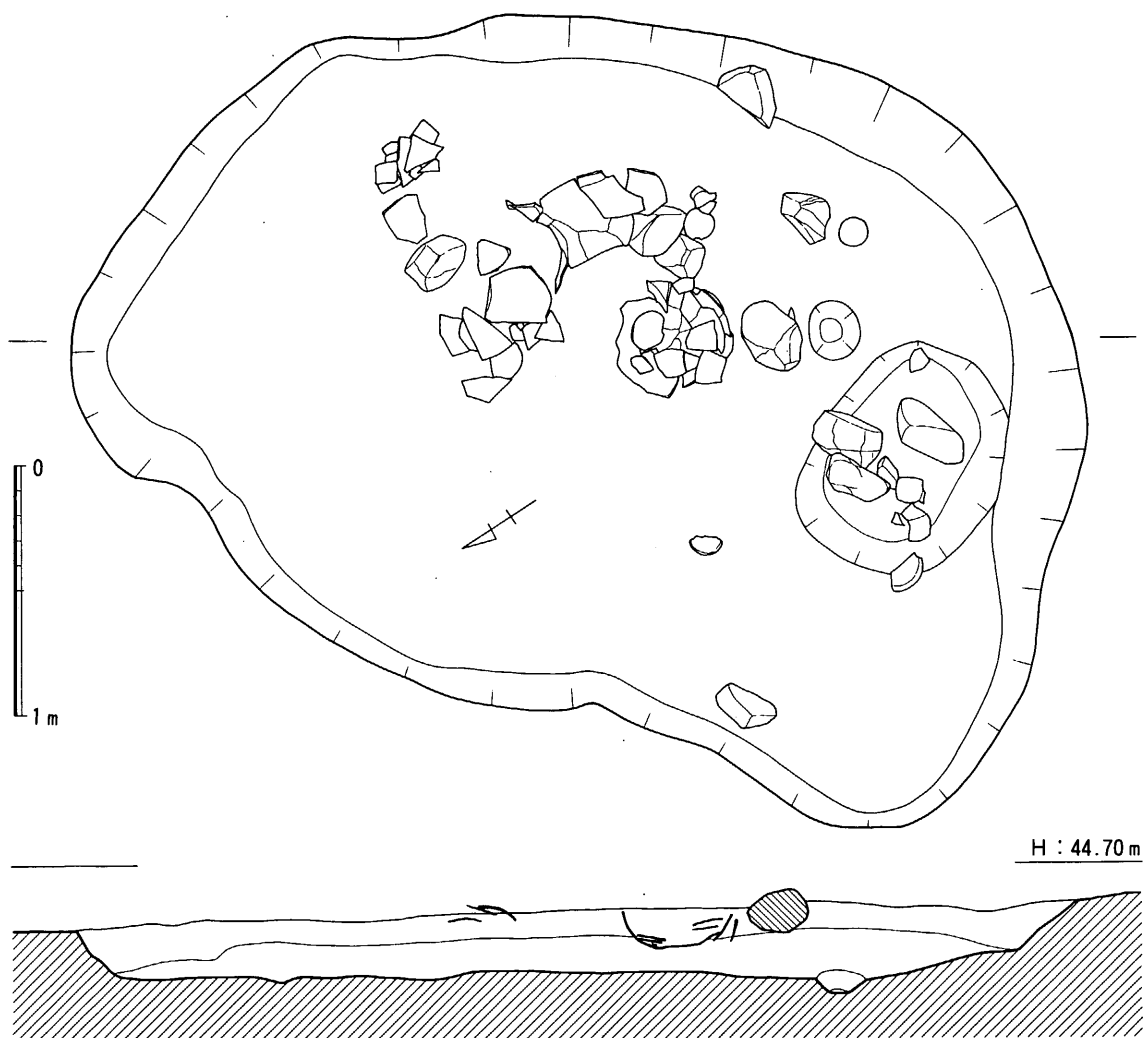
杯身（2） 底部外面に回転ヘラケズリを施し、他の部分を回転ナデとナデで仕上げる。外面には灰をかぶっており、受部には重ね焼きの痕跡がある。



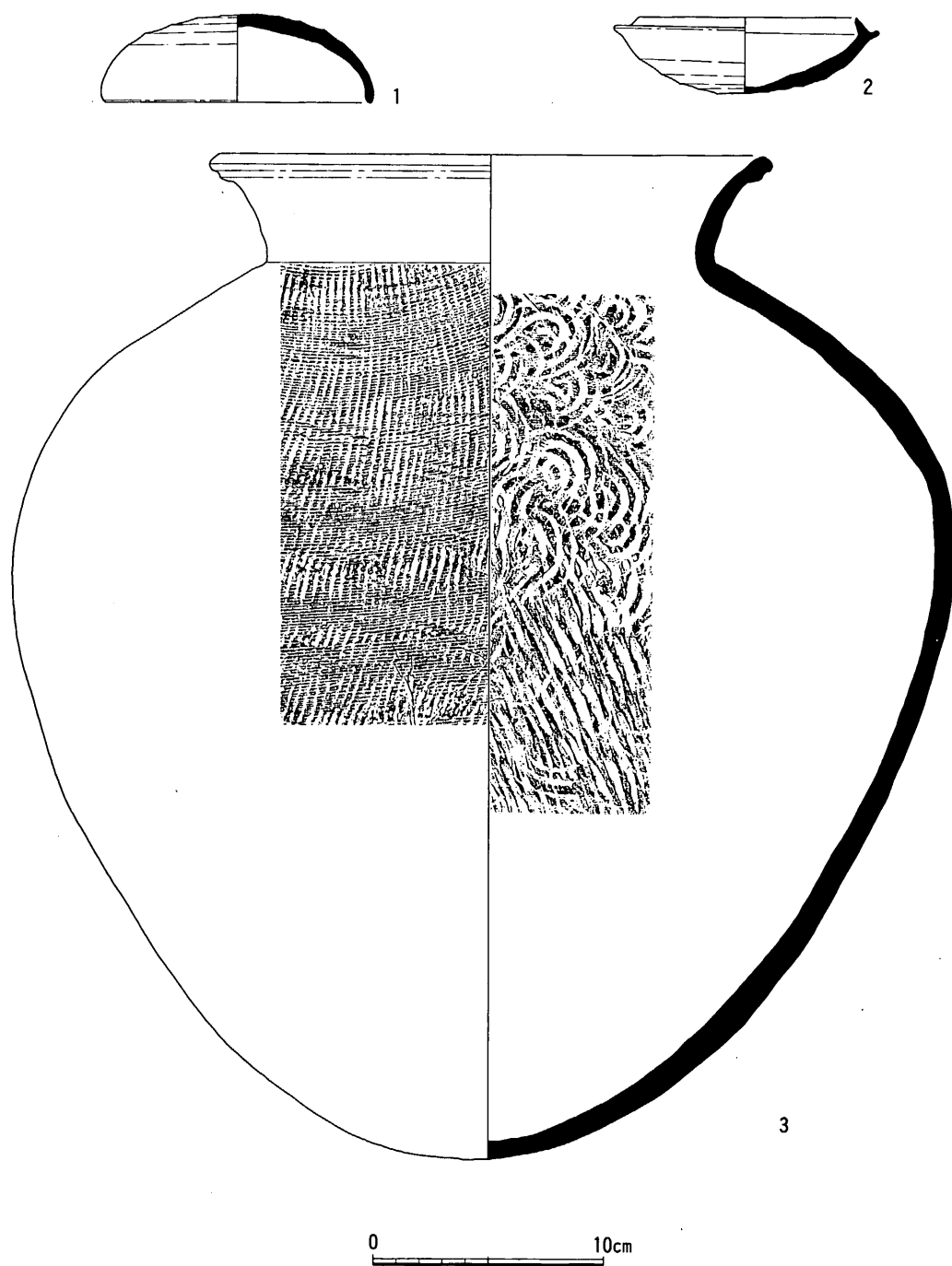
第160図 S K14実測図 (1/30)



第161図 SK14出土土器実測図 (1/3)



第162図 SK15実測図 (1/30)

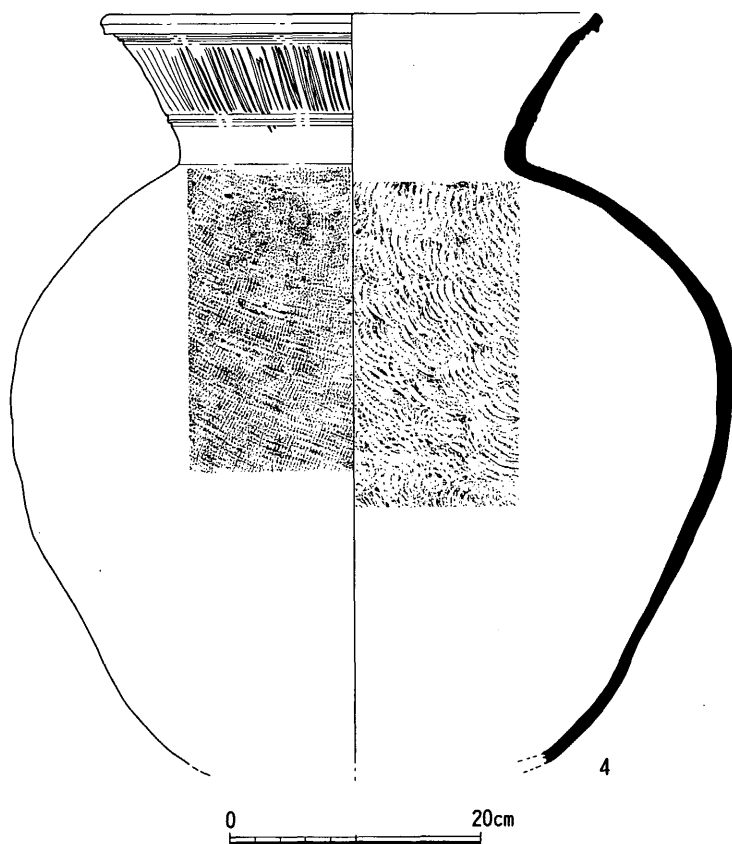


第163図 SK15出土土器実測図① (1/3)

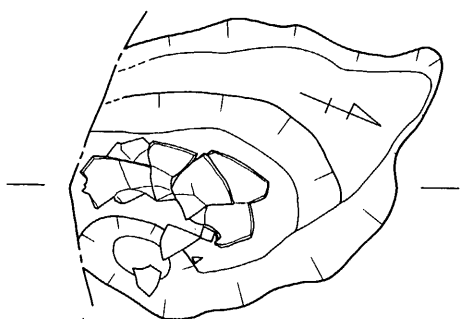
甕 (3・4) 3は尖底気味の底部を持つ。各部の調整は、口縁部と頸部内面が回転ナデ、頸部外面がカキ目、胴部外面は平行叩きの上からカキ目を加え、胴部内面には同心円状当て具痕が残る。胴部のカキ目は、頸部のものに比して幅が広い。また、頸部外面にヘラ記号があり、底部外面には火轆がある。4は底部を欠く。頸部外面の上下に2条ずつの沈線をめぐらせ、その間を斜方向の線刻で充填する。他の部分の調整は、口縁部と頸部内面が回転ナデ、胴部外面には平行叩きを施し、胴部内面には同心円状当て具痕が残る。肩部以上の胴部外面と口頸部内外面は灰をかぶっている。

SK16 (第165図、図版33)

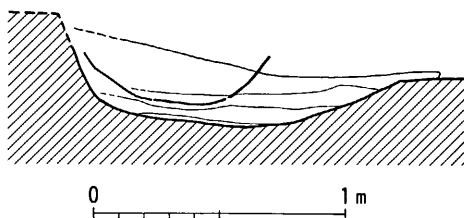
調査区の南端に位置する。SK15との距離は約3mである。南側の部分が調査区域外にあるため、本来の平面プランは不明であるが、楕円形に近い不整形であったとも考えられる。検出した範囲に限れば、上端の長軸は1.6m以上、短軸は1.1mを測る。深さは約25cmである。床にはわずかな凹凸が認められ、ピット1個が確認された。壁は、立ち上がりの傾斜が約15°と緩



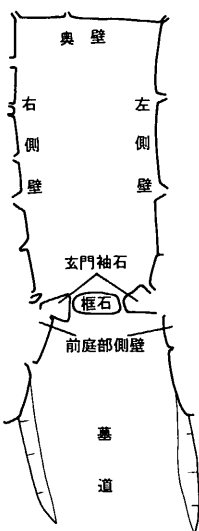
第164図 SK15出土土器実測図② (1/6)



H : 45.10 m



第165図 S K16実測図 (1/30)



第166図 模式図

1号墳 (図版34)

1) 立地と現況

2・4・5号墳と接するようにして位置する。かなり削平を受けていて、石室も最下段に使用されたと思われる石が散乱した状態で検出されただけである。

2) 墳丘 (第167図)

石室周辺に若干の盛土が観察できるだけで、高さは不明である。しかし、石室を中心としてマウンド状の高まりが認められるので、ある程度地山整形をした後に盛土を行ったことが推測できる。北東-南東のトレンチ断面観察では周溝の幅約2.4m、深さは約0.4mで、周溝外径約16~17m、内径約12m程度となる。周溝は南西側の一部が陸橋状に途切れる。

3) 石室

最下段と思われる石が内側に倒されたような状態で検出された。比較的角張った石が多いが、一辺1mを越えるものは少ない。南側にやや長めの石が2個あるが、袖石の可能性のある石である。そうとすれば南西側に開口する横穴式石室ということになる。掘り方などから推定でき

かで、テラスが1段ある。

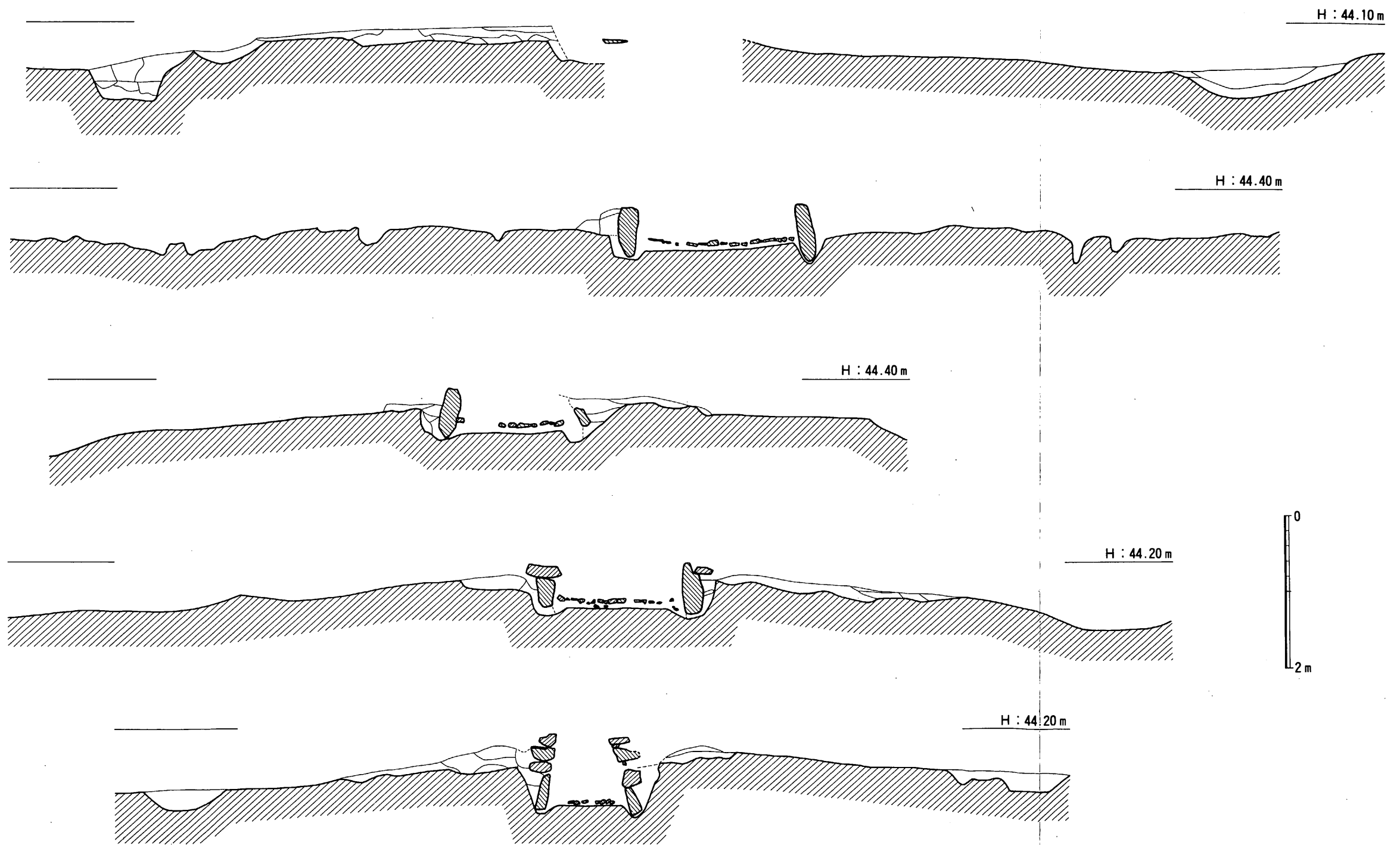
遺物は、埋土中から浮いた状態で須恵器の甕の胴部破片が数点出土した。本遺構については前述のように掘り下げることのできる範囲が限られていたため、区域外の部分を掘り下げれば遺物の数量、器種はともに増えたものと考えられる。また、出土した甕も、胴部のみ約3分の1を復元できた程度であるので、図示できなかった。

(4) 古墳

古墳は合わせて30基検出されたが、すべて削平を受けており遺存状態は悪かった。このため石室構造が不明なものが多くあった。石室構造がわかったものでは、5号墳のみが縦穴系横口式石室を持ち、他は横穴式石室である。また、11号墳のみ周溝を検出することが

できなかったため墳形が不明だが、他の古墳はすべて円墳であった。

なお、石室の各部名称については、第166図の通りとした。



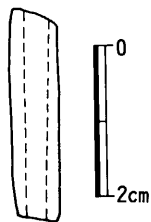
第167図 塚原1・2・3・4・5号墳墳丘断面図 (1/60)

る主軸はN-54°-Eほどの向きになる。開口方向は周溝の途切れた部分と合う。掘り方の規定は隅丸方形状で4.2m×3.0mほどである。

4) 出土遺物

ほとんどが周溝からの出土である。下記以外に縄文土器、剥片、石鏃11などが出土している。図示した土器はすべて周溝からの出土である。1と13は底面からの出土である。

装身具	管玉	1
鉄器	鏃	9以上
	刀子	3
須恵器	杯蓋	5以上
	杯身	9以上
	皿	1以上
	甕	1
	壺	1
	長頸壺	1
	甕	破片で15
	土師器 碗	1以上
土師器	壺	1
	高杯	1
	甕	破片で409
	黒色土器 碗	1



第168図 1号墳出土装身具実測図(1/1)

管玉 (第168図、図版110)

ややにぶい緑色をしたもので、長さ2.9cm、径6.5mmを測る。碧玉製と思われる。片側からの穿孔である。

鉄器 (第169図、図版117)

1～12は石室埋土中から、13～18は周溝埋土中から出土したものである。

鏃 (1～11、13～16) 1は柳葉式に属する。残存長9.2cm、鏃身部幅1.2cmを測り、箆被部には樹皮巻が残る。2は鏃箭式、3～5は圭頭式に属するものと考えられる。6も圭頭式と思われるものの、あまりにも小片のため詳細がわからない。7～9は箆被部から基部の破片である。7は両者の境が不明瞭で、樹皮巻が残る。8には木質が残る。

刀子 (12・17・18) 12・18の関は刃部に対して斜行する。12は基部に木質が残る。17は刃部から基部にかけての部分と思われるが、銹が著しく詳細はわからない。

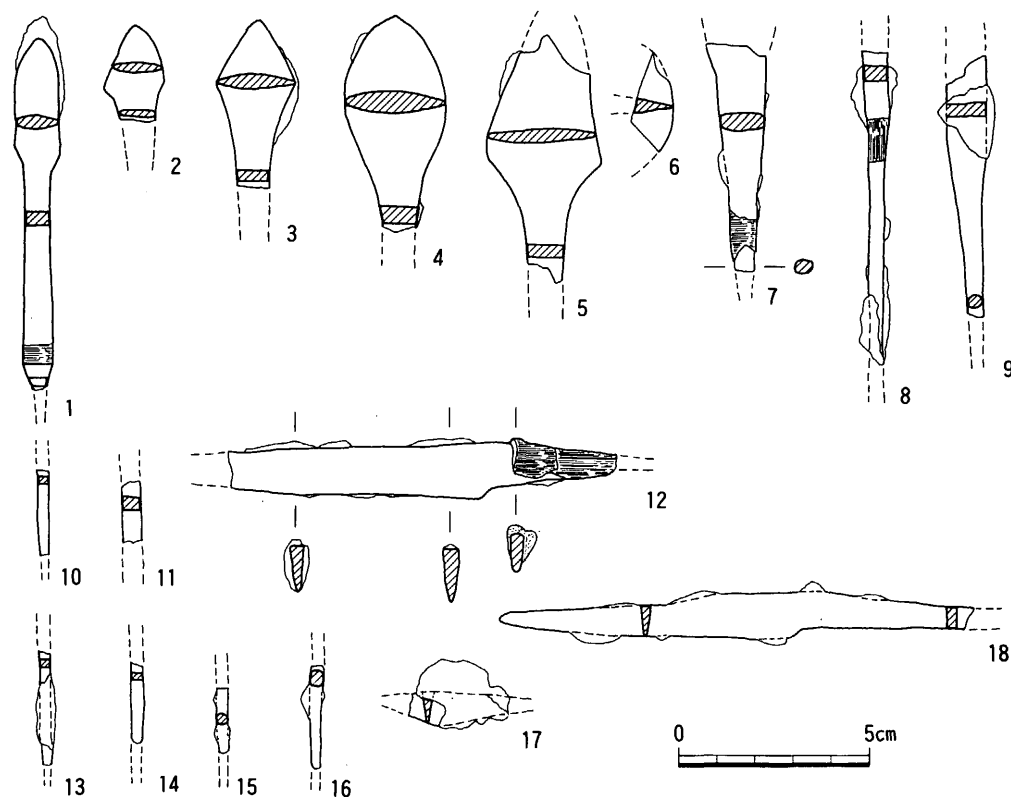
須恵器（第170図、図版97・98）

杯蓋（1～5） 体部と天井部の境が明瞭なものである。ただし、1～2、4～5は段をなし、3は沈線という違いがある。口縁端部内面は段をなす。天井部外面は幅広くていねいな回転ヘラケズリを行っており、その他は回転ナデである。ロクロは3が反時計回り、その他は時計回りである。ヘラ記号はない。

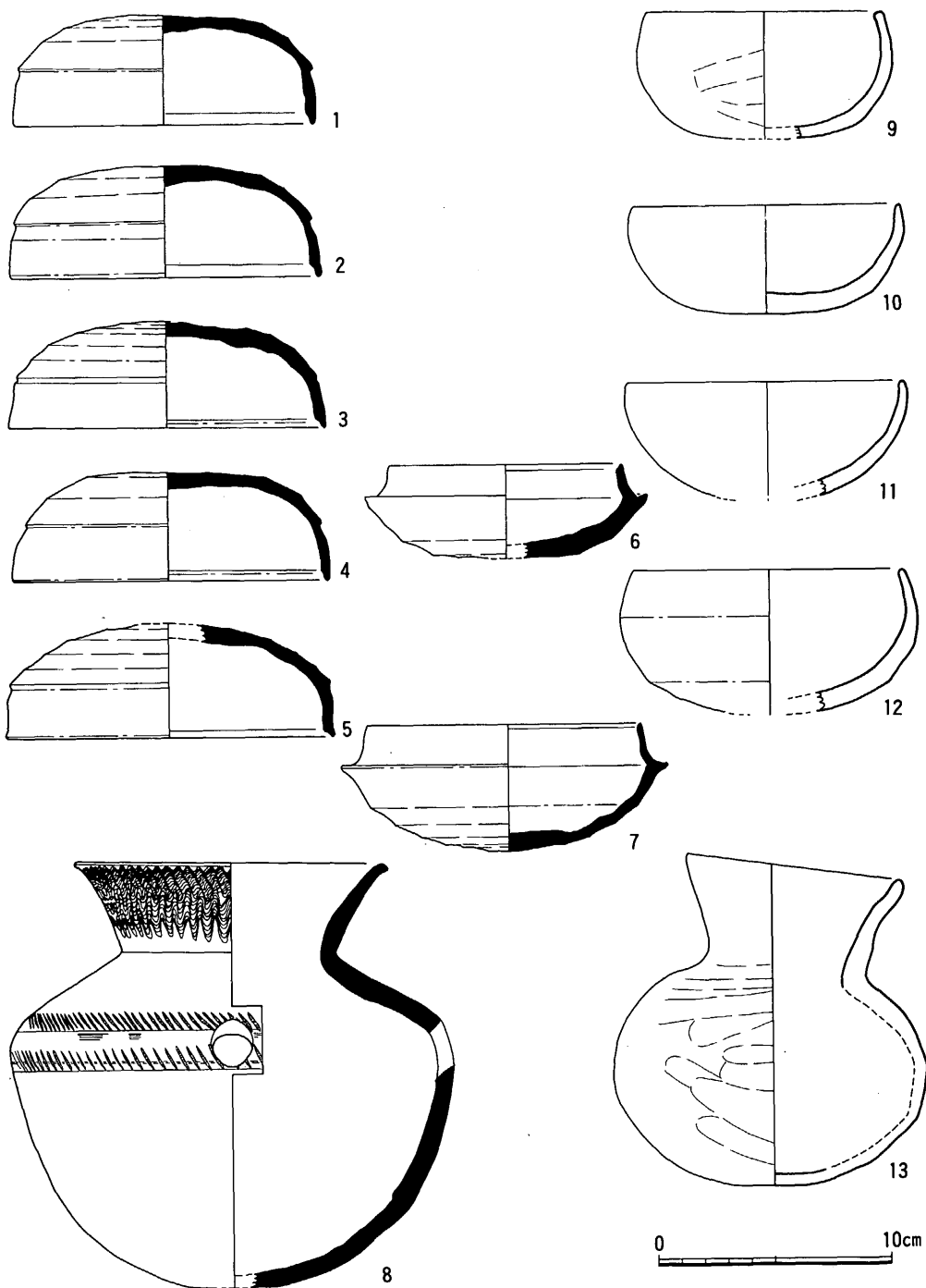
杯身（6・7） どちらも4分の1程度の破片である。立ち上がりはやや内傾気味だが、比較的高い。口縁端部は内傾する平坦面を作り出すが、段状をなす。底部外面は幅広く回転ヘラケズリを行い。その他は内面中心付近をナデ、その他は回転ナデを行う。

甗（8） 広口壺に一孔を穿った形態である。頸部には2段に櫛描波状文を施し、肩部には2～3条の沈線を施し、その上下に2段にわたって刺突文をめぐらす。胴部下半から底部にかけては平滑にしている。また、底部内面には同心円状当て具痕がある。その他は回転ナデである。頸部内外面と胴部上半にかけてと、内面底部付近に緑灰色の自然釉がかかる。また、底部外面にヘラ記号がある。

土師器（第170図、図版98）



第169図 1号墳出土鉄器実測図（1/2）



第170图 1号填出土土器实测图 (1/3)

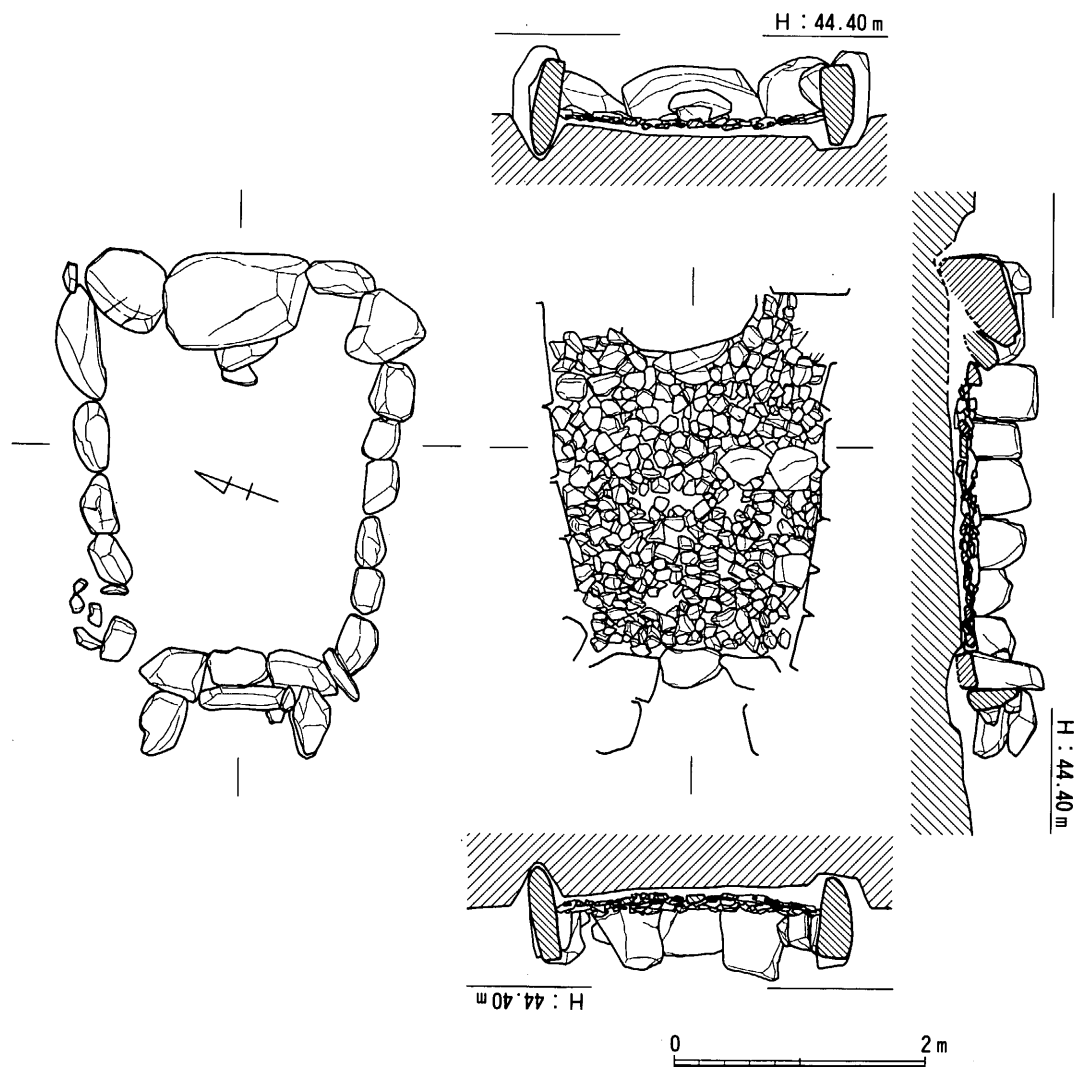
椀（9～12） 比較的小さい破片からの復元である。大きさや体部の湾曲度に違いがある。磨滅のため調整がわかりにくい、9の外面にはヘラケズリの痕が見られる。その他はナデが多いようである。

壺（13） 甗としても良いと思う形態の壺である。胴部下半及び頸部内面はケズリで調整し、その他はナデを行う。全体的にシャープさに欠ける形態をしている。

2号墳

1) 立地と現況

1号墳の南西に位置する。西半分は発掘区外になり、石室を除いては半分しか調査できなかった。



第171図 2号墳石室実測図 (1/60)

った古墳である。墳丘はかなり削平を受け、石室は最下段の石が残るだけである。周溝は調査区内については途切れない。

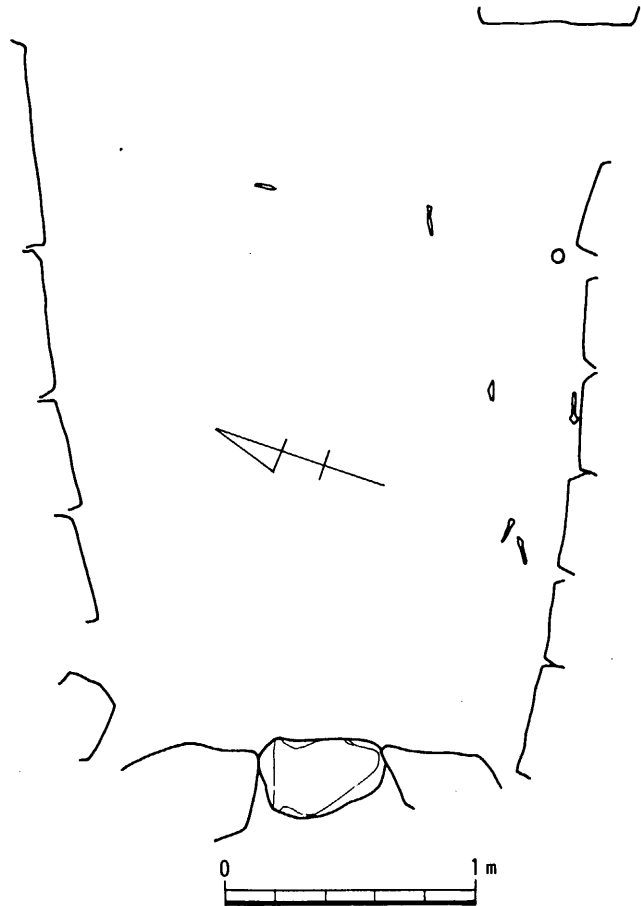
2) 墳丘 (第167図)

盛土が約40cmの厚さで残るが本来の高さは不明である。盛土は石材の裏込めと考えられる短い層と、墳丘全体を形成すると考えられる長い層が見られる。いずれも細かい砂の混入した土質である。周溝は幅が一定ではないが、約1.8~2.0mの部分が多い。深さは深い所でも約30cmである。古墳の大きさは外径で約13.6~14.4m、内径で約10.6~11.8mである。

3) 石室 (第171・172図、図版35)

主軸をN-70°-Eにとり、略南西方向に開口する単室の横穴式石室である。石室の残りは悪く、腰石より上部の石は残っていない。また奥壁も内側に倒れ込んだ状態であった。このため正確な規模は明らかでないが、主軸長約2.9m、奥壁幅2.23m、玄門中位幅2.03m、玄門側幅1.6m程度となろう。プランは逆台形を呈しており、玄室規模は本古墳群の石室の中では最大の部類に入る。

奥壁は既に倒れた状態であったが、3石で構成されている。長さ約120cm程の大きな石を中央に据え、その両側に長さ60cmの石をそれぞれ立てている。側壁はいずれも奥壁側に最も大きな石を立て、これから玄門まで小振りな石を用いている。玄門は両側に高さ70cm程の柱状のを立て袖石としており、袖石間には框石を挟み込んでいる。閉塞石は、袖石に高さ40cm、長さ70cm程の石を立てかけている。前庭部側壁は短くハの字に開き、幅50cm程の石材を右側は一段、左側は2段積み上げている。床面には全面に敷石が施されているが、大きさは一辺8cmから40



第172図 2号墳石室内遺物出土状況 (1/30)

cmと非常に不揃いである。

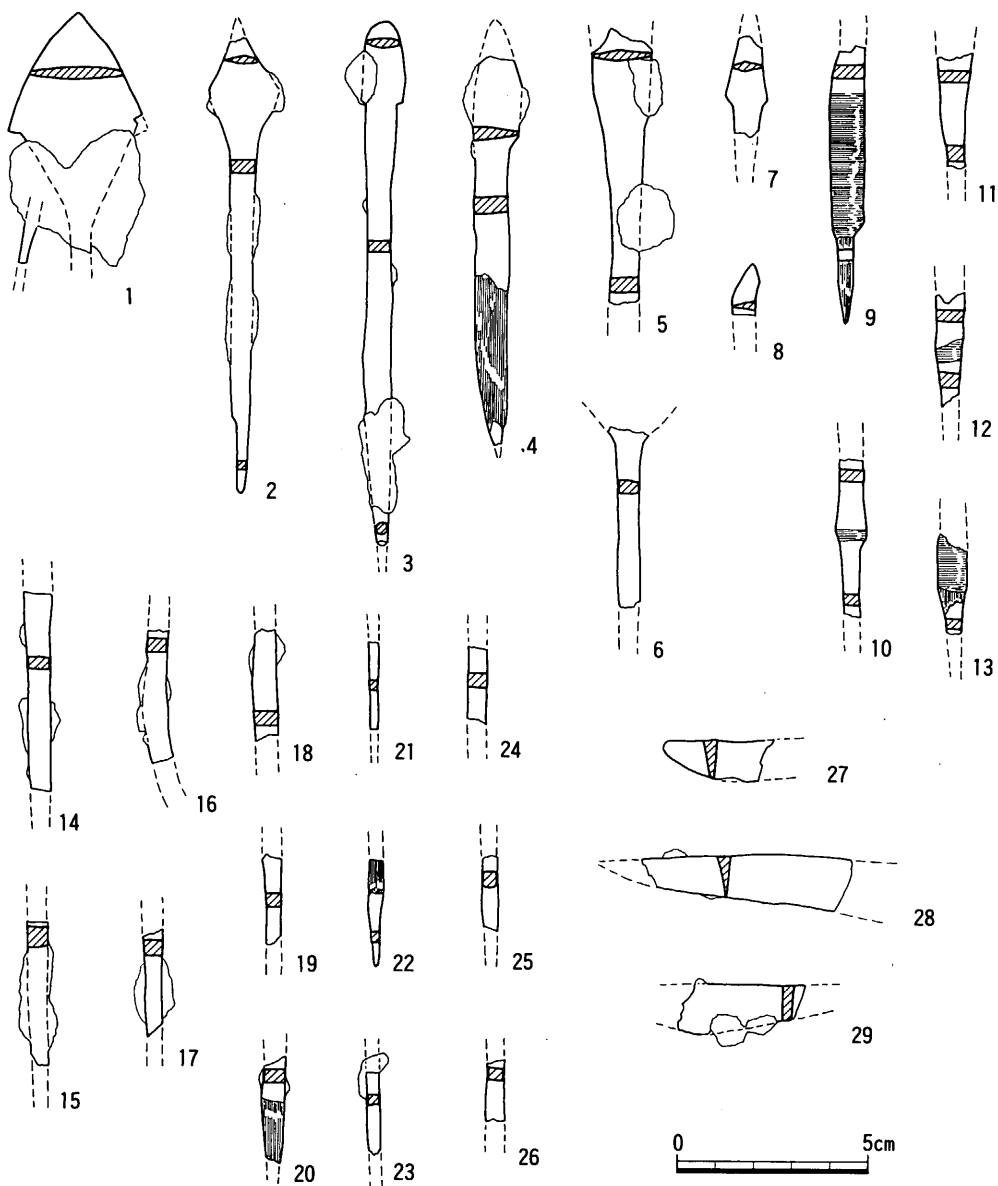
4) 出土遺物

比較的少なく、原位置を保つものはないようだ。下記以外に縄文土器、剥片、白磁が出土している。

鉄器

鏃

13以上



第173図 2号墳出土鉄器実測図 (1/2)

	刀子	3 以上
須恵器	杯蓋	1
	甕	破片 1
土師器	高杯	1
	甕	破片 19
	把手	1

土器はいずれも小破片で図示できなかった。

鉄器（第173図、図版118）

鏃（1～26） 1・2は圭頭式、3は鑿箭式、4は片刃箭式に属するものと思われる。1は鏃が著しく、他の鏃の茎が鏃着している。残存長6.3cm。2は完形に近い。残存長12.1cm。3は残存長13.9cm。4の茎部には木質が残る。残存長10.3cmである。5～8はいずれも小片のため詳細がわからないが、5は柳葉式、6は圭頭式、7は鑿箭式、8は片刃箭式に属するのではないと思われる。残存長は、番号順に、7.4cm、4.8cm、2.5cm、1.4cmである。9～26については、樹皮巻と木質が残るものは9・11・13、樹皮巻のみ残るものは10・12、木質のみ残るものは20・22である。16は土圧のためか曲がっている。

刀子（27～29） 27、28は刃部、29は刃部から茎部にかけての破片である。残存長は、番号順に、2.9cm、5.5cm、3.3cmである。

3号墳

1) 立地と現況

2号墳の南、4号墳の南西に位置する。発掘区の南西隅で検出されたもので、全体の3分の1ほどは発掘区外に出る。墳丘はかなり削平され、石室は床面と最下段の石が残るだけである。

2) 墳丘（第167図、図版37）

ほとんどが削平されたと思われる。盛土は石室周囲に約10cmの厚さで残っているだけである。従って、本来の高さは不明である。周溝は1～2.3mであるが、1.5mほどの部分が多い。深さは30～50cmである。全体は不明であるが、石室から東北方向へ伸ばしたトレンチ断面観察から考えて、外周で約13mほどの大きさとなる。

3) 石室（第174・175図、図版36）

主軸をN-137°-Eにとり、北西方向に開口する単室の横穴式石室である。石室の残りは悪く、腰石しか残っていない。袖石は既に失われているが、検出時に玄門部で長さ90cmの柱上の石材が玄室側に倒れ込んだ状態で見つかっている。開口部には抜き跡が残っており、これより玄室の規模を復元すると、主軸長2.22m、奥壁幅1.29m、玄室中位幅1.33m、玄門側幅1.38mと奥壁から玄門まではほぼ同じ幅の長方形プランをとる。

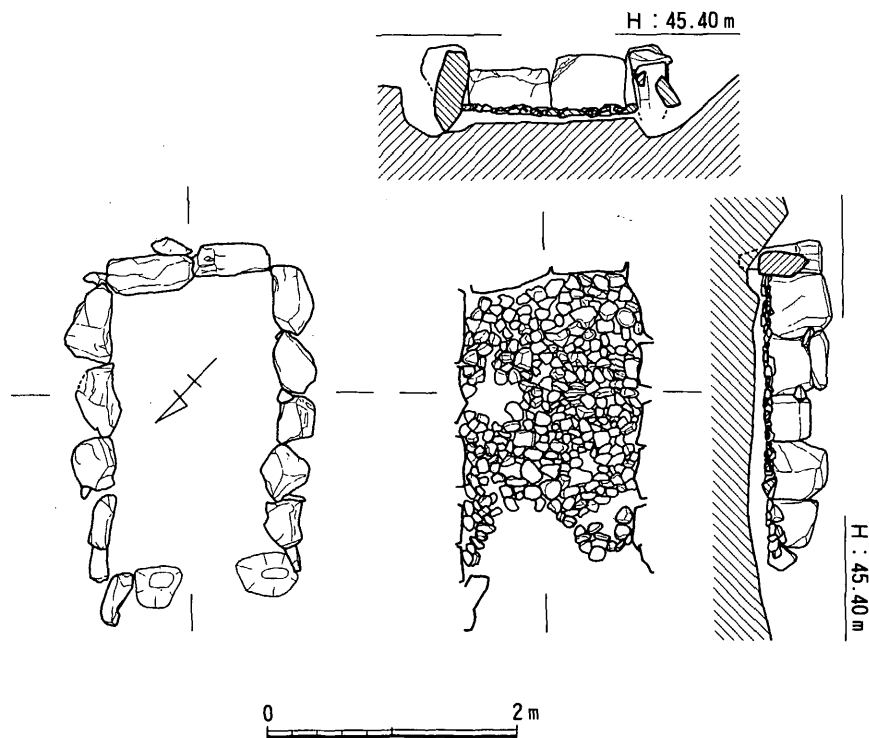
奥壁は2石で構成され、長さ約60cm程の石材を左右に立てている。この時左右の腰石上面の

レベルは10cm程の差があり、高いほうの腰石のレベルは側壁の腰石のレベルとほぼ同じである。側壁は両側とも5枚の石を用いているが、左側壁が長さ40～50cm程の石材を立てているのに対し、右側壁は玄門側の石材が小振りになっている。石室の全面には、短い前庭部が付くものと思われ、右側には長さ40cmの細長い石材が据えられていた。左側は石材を既に失い、不明である。床面には全面に敷石が施されていたと思われるが、玄門側の一部は攪乱により失われている。

4) 出土遺物

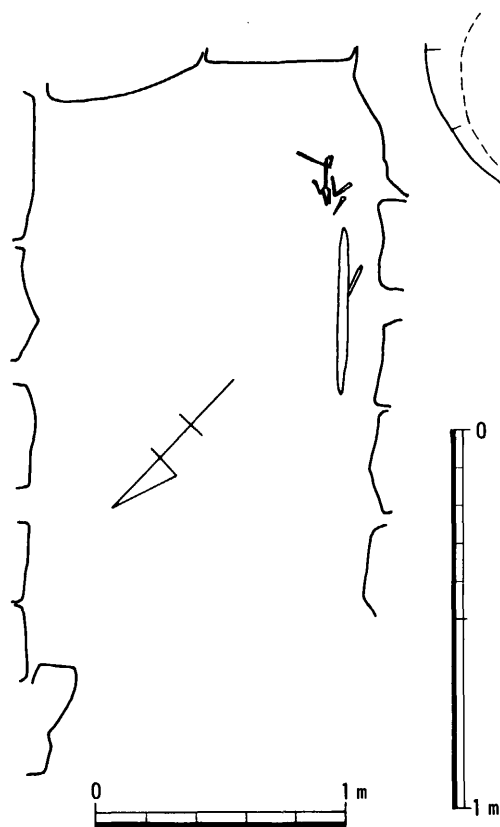
石室内から装身具類や鉄器が出土した。また、周溝から須恵器甕1個と土師器碗4個がまとめて出土した。列举すれば以下のとおりであるが、他に縄文土器や剝片、磨製石斧が出土している。図示した土器は8が石室と周溝出土であるが、その他はすべて周溝からの出土で、特に2・3～6は1かたまりで見つかったものである。

装身具	ガラス玉	425個
	管玉	10個
	銅釧	1
	銅鈴	1

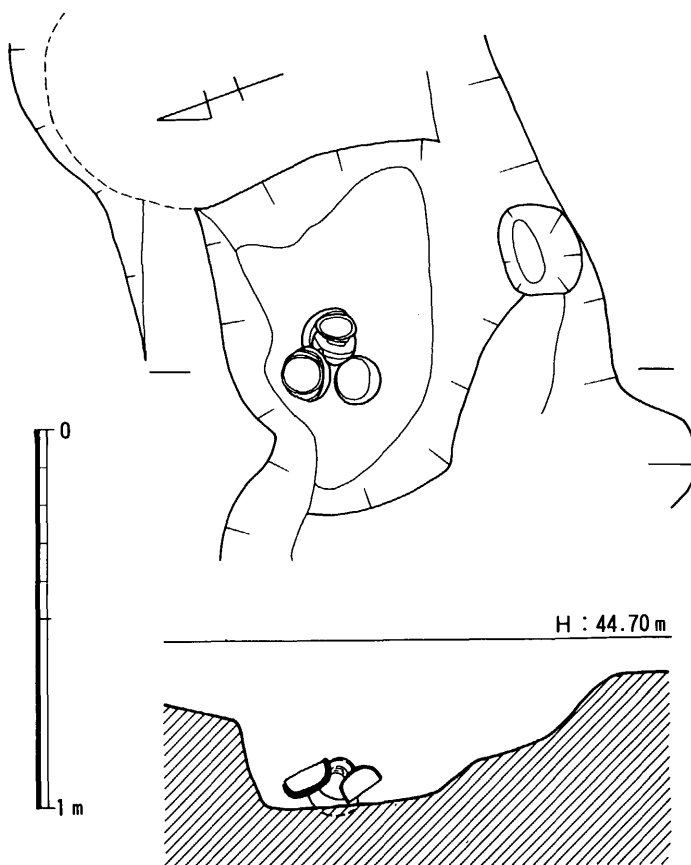


第174図 3号墳石室実測図 (1/60)

鉄器	刀	1
	鍬	10以上
	刀子	1
須恵器	杯蓋	1
	杯身	1以上
	甗	1
	甗	破片 5
土師器	杯	1
	碗	4以上
	壺	1
	小皿	1以上
	甗	破片63



第175図 3号墳石室内遺物出土
状況 (1/30)



第176図 3号墳周溝内遺物出土状況 (1/20)

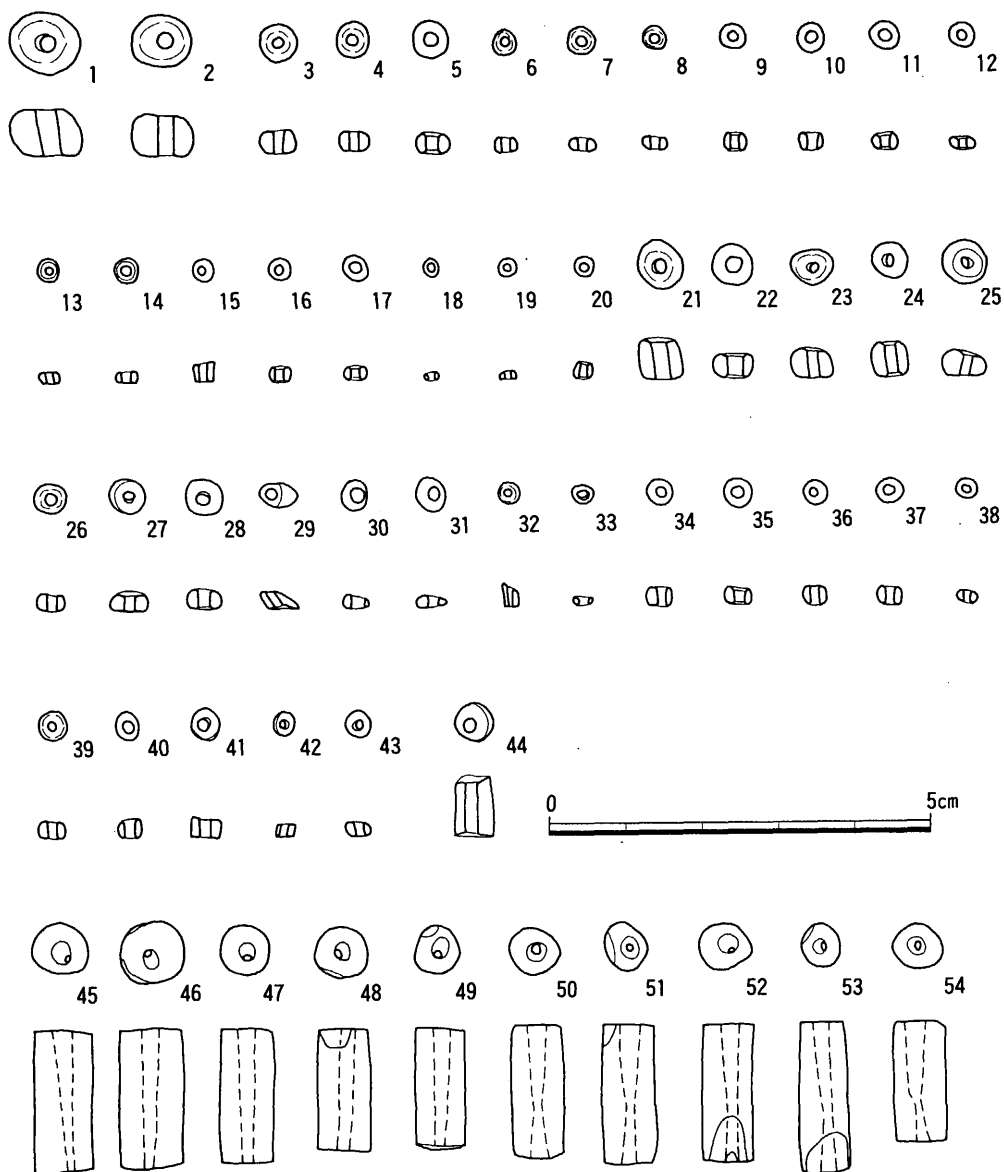
黒色土器 甕(?) 1以上

装身具

小玉・丸玉 (第177図、図版111)

玉類については、『図解考古学辞典』の中で小林行雄氏が次のように記述している。

「まるだま 丸玉 ほぼ球形を呈し、中央に貫通孔をあけた飾玉。(中略) 丸玉などの小型のものを小玉というが、その区別は相対的で一定の基準はない。」



第177図 3号墳出土装身具実測図 (1/1)

「こだま 小玉 径5～6mm以下の小粒の玉をいう。(後略)」

これに従って、6.1mm以上の玉を丸玉、6mm以下の玉を小玉として別項目を立てても良いが、小林氏のその区別は相対的で一定の基準はないという記述に従って、一括して述べる。

丸玉類は合計424個出土した。色、形、大きさの違いによって分けられるが、色から見ると青色系統のもの(1～20)が196個、緑色系統のもの(21～39)が215個、黄緑系統のもの(40)が2個、暗赤褐色系統のもの(41～43)が11個である。また、径が6mmを越えるものは6個しかなく、他はすべて小さい、いわゆる小玉である。径2～3mmのものも多い。形態的には全体的に丸味のあるものと両端部に平坦面を作りだすものがある。制作方法を推測させるものに29がある。形態から、管状にしたものを切断して、再加熱したもののようなのだが、切断がきちんとできなかったためひずんでいると観察できるものである。

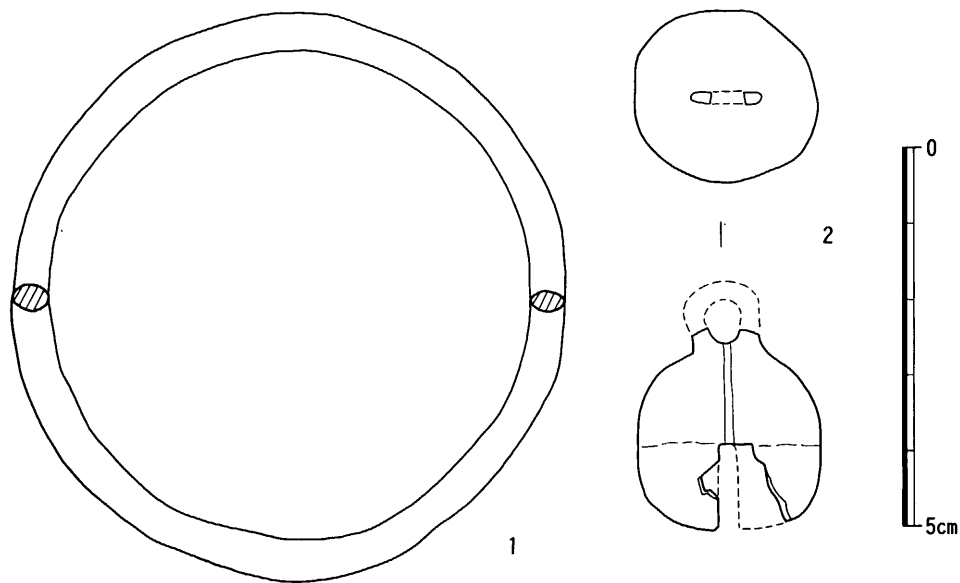
管玉(第177図、図版111)

ガラス製(44)と碧玉製(45～54)がある。44は青色を呈し、径5.5mm、長さ8cmである。孔は断面六角形を呈し、径およそ1.5mmである。

碧玉製のうち45と49は濃緑色を呈するが、その他はうす緑である。長さは1.6～2.0cm、径6～8mmの大きさである。45～49は片側からの穿孔、50～54は両面穿孔である。

銅釧(第178図、図版114)

外径7.3cm×7.5cmのほぼ円形を呈する。環の断面形は楕円形で0.5cm×0.3cmの太さである。白緑色でかなりもろくなっている。



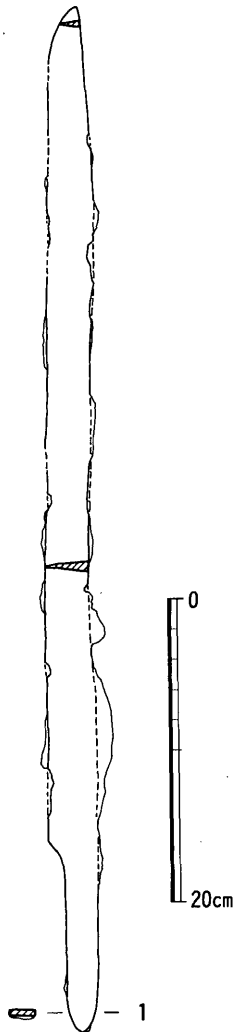
第178図 3号墳出土青銅器実測図(1/1)

銅鈴（第178図、図版114）

鈕と胴部の一部を欠く。現存高2.6cm、最大幅2.4cmを測る。厚さは約0.8mmである。胴部は上半分の半球形と下半分の半球形を作りそれを接合したかと思われる沈線が一回りする。しかし、上半分には下半分の孔と同方向に走るもりあがった線がある。孔は幅が2～3mmと思われるが、鑄造後切ってはみ出た部分を磨いたように観察される。

鉄器（第179・180図、図版119・120）

すべて石室内より出土したものである。



第179図 3号墳出土鉄器
実測図①（1/5）

刀（1） 無反りの直刀で、完形品である。関は刃部に対して斜行し、茎先は丸味を持つ。目釘孔等は確認できなかった。全長67.6cm、刃幅2.5cm～2.9cm、背厚0.7cm、茎幅2.2cm、茎厚0.4cm～0.5cmを測る。

鏃（2～35） 2は鏃箭式、3は全容が不明だが圭頭式、4～8は片刃箭式に属するものと考えられる。2の茎には木質が残る。9～34は篋被部あるいは茎部、またはその両者の破片である。9と31は両者の境を明瞭に区別することができる。31の茎部には樹皮巻が残る。

刀子（36） 背部に関を持つ。茎部には木質の痕跡が認められる。

須恵器（第181図、図版98）

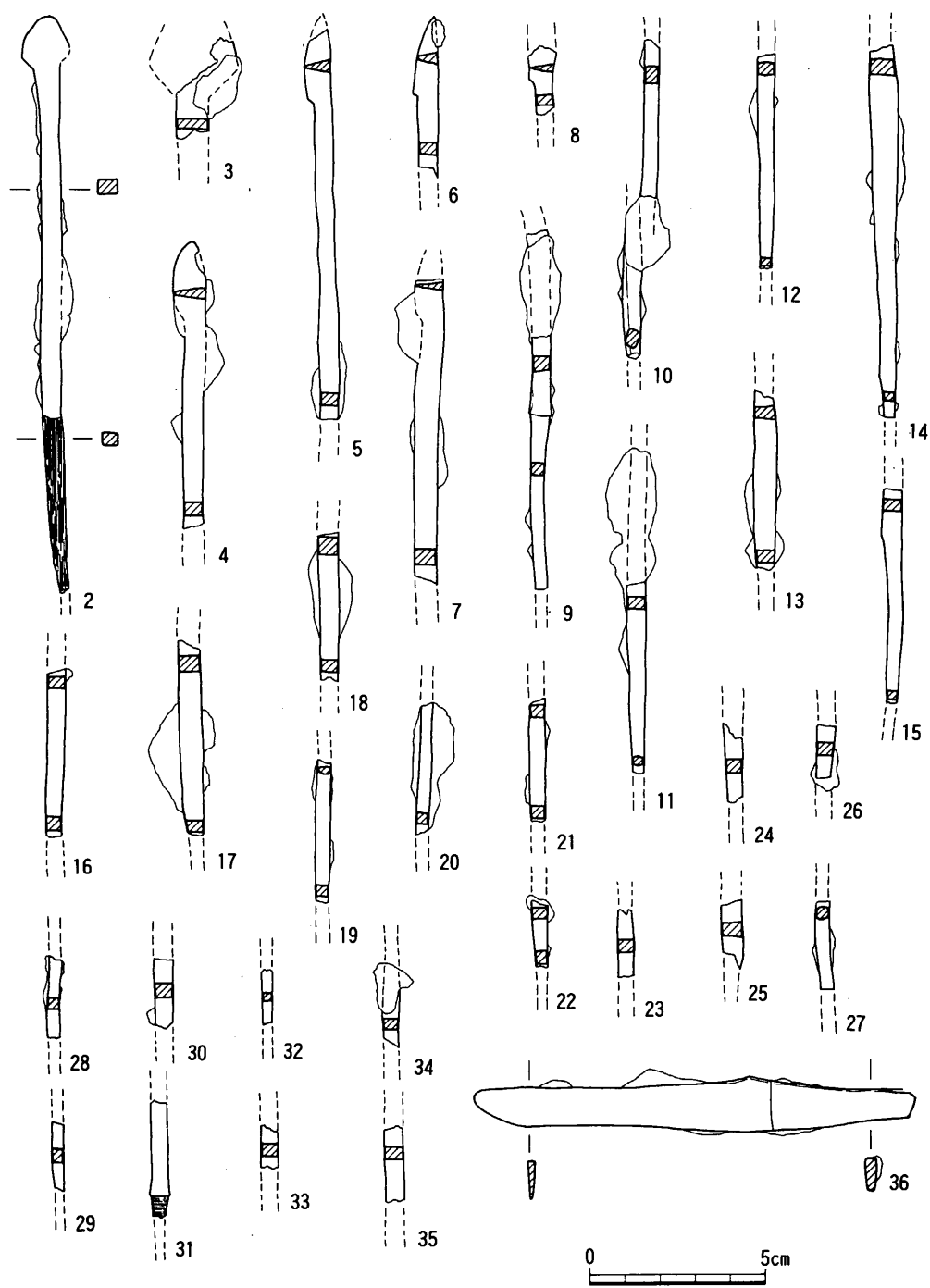
杯身（1） 立ち上がりやや内傾するもののかかなり高いものである。口縁端部内面には浅い段がある。底部外面は幅広く回転ヘラケズリを行い、その他は回転ナデである。焼成は良い。

甕（2） はほぼ完形で、全体にシャープな作りの甕である。口頸部には櫛描波状文が、肩部には2条の沈線の間に刺突文を施している。底部外面は平滑にしているが、内面は棒状のもので押しつけた痕がある。

土師器（第181図、図版98・99）

椀（3～6） 丸底で内湾する形態の椀である。3・5・6は外面上部はハケ目のあとナデを行う。また、3・5の底部外面はヘラケズリを行う。その他はナデである。3・5・6の底部外面にはヘラ記号がある。

壺（7） 広口壺としても良いかもしれない。全体にシャープさを欠く作りである。底部外面はケズリ、その他はナデで仕上



第180图 3号墳出土鉄器実測図② (1/2)

げる。底部外面に大きな黒斑がある。

甕(8) 小破片である。湾曲する口縁部とわずかに内傾気味の平坦面を作り出す口縁端部からなる。ヨコナデで仕上げる。

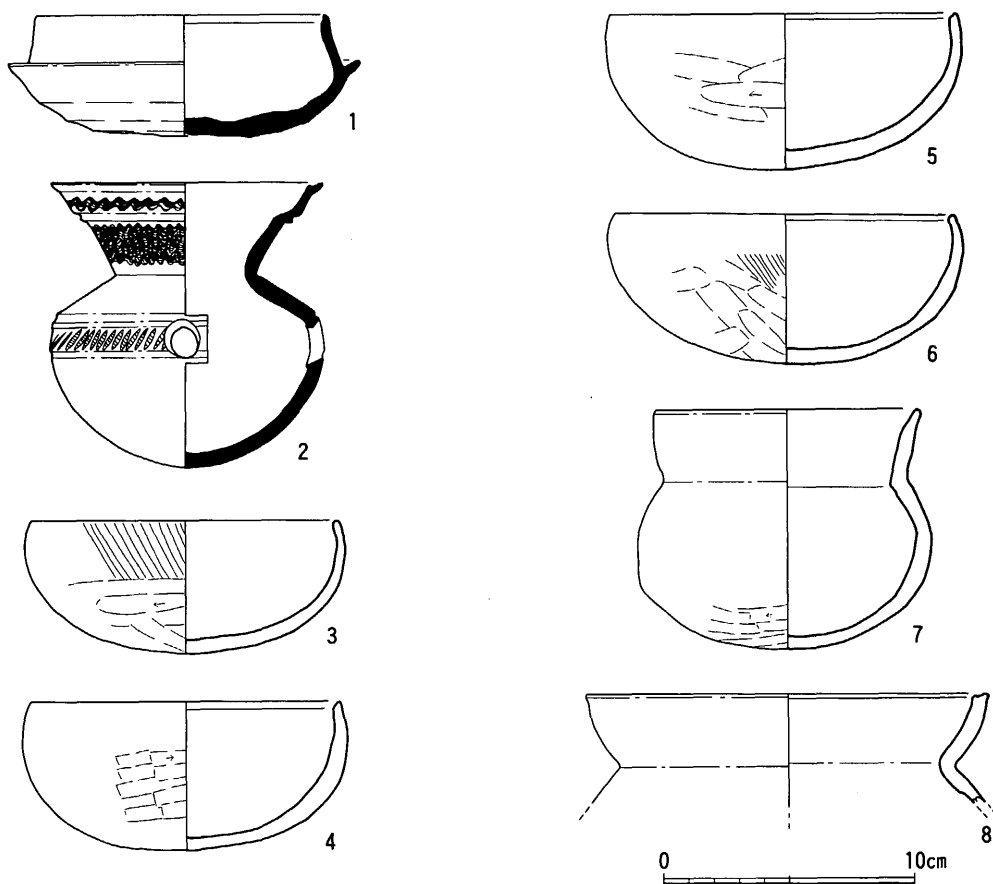
4号墳

1) 立地と現況

1号墳の南東に接するようにして位置する。墳丘はほとんど削平され、石室も床面と最下段の石を残すだけである。

2) 墳丘(第167・184図)

前述のように、ほとんど削平され、本来の高さはわからない。周溝は南西側が陸橋状に途切れる。周溝の規模は幅が1.7~2.6mであるが、北西部では土坑状に広がり、幅約4mになる。深さは約30cmである。推定される古墳の大きさは外径で約14mである。

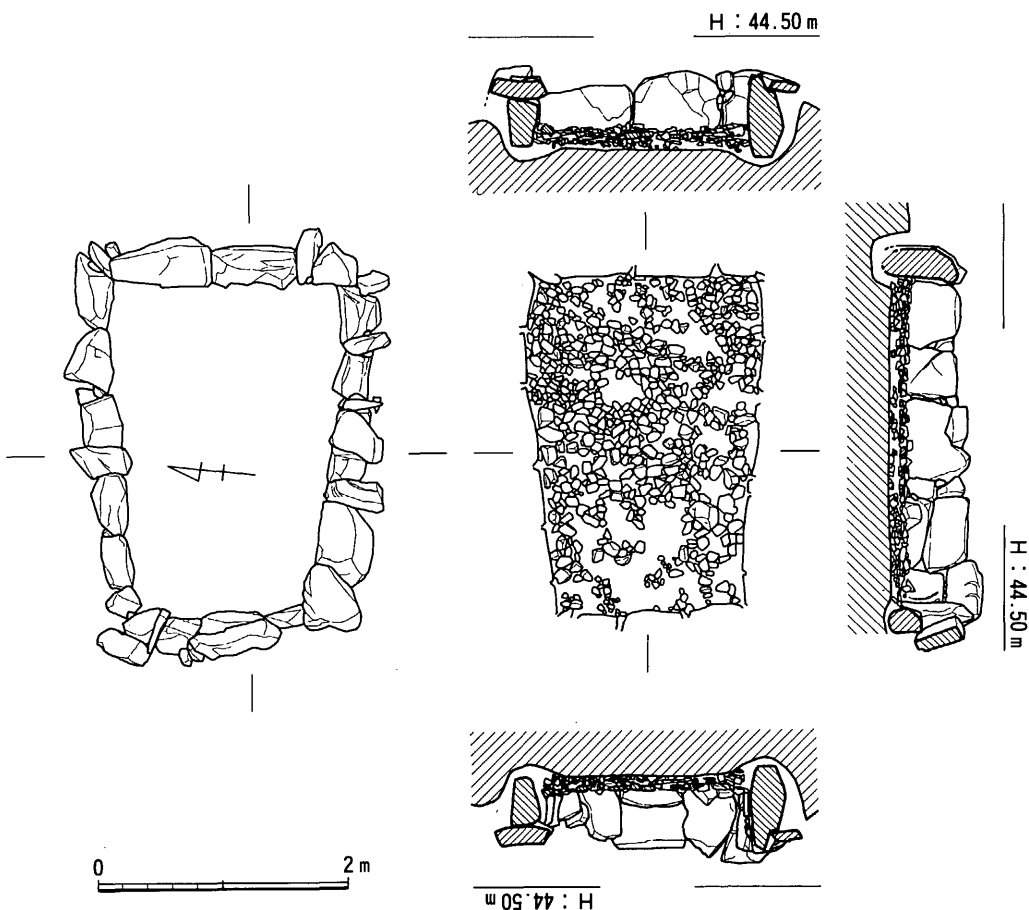


第181図 3号墳出土土器実測図(1/3)

3) 石室 (第182・183図、図版38)

主軸をN-83°-Eにとり、西側に開口する単室の横穴式石室である。石室の残りは悪く、腰石と一部2段目の石が残る程度である。玄室は主軸長2.65m、奥壁幅1.78m、玄室中位幅1.66m、玄門側幅1.29mの逆台形プランを呈する。

奥壁は3枚で構成され、右側と真ん中に長さ70~80cmの石材を置き、左側に長さ40cm程の石材を置いている。この時奥壁と両側壁の関係は、右側壁は奥壁を挟むように据えるのに対し、左側壁は奥壁の全面に接するように据えている。この状況を見ると、中央と右側の大きな石材を据えたのち、左側の小さな石材で玄室幅の足りない部分を補ったような印象を受ける。左側壁は5枚で構成される。奥壁側の腰石が1枚であるのに対し、玄門側は腰石が低く2段目の石積みで左側壁の全体のレベルを揃えている。右側壁は6石で構成され、石の大きさや高さは左側壁に対してやや小さくなっている。玄門部は高さ50~60cmの柱状の石材を立てて袖石として



第182図 4号墳石室実測図 (1/60)

おり、袖石間には長さ50cm、高さ約30cm程の四角柱上の石材を置いて框石としている。閉塞石は長さ70cm、高さ40cm、厚さ10cm程の平石を立てかけている。前庭部側壁はなく、長さ0.85m、幅2.1mの短い墓道がつく。

4) 出土遺物

周溝から完形に近い土師器壺が出土した。また、下記に列挙した遺物以外に縄文土器、石鏃4、剥片が出土している。図示した土器は1・2が周溝から、3が石室掘り方から出土したものである。

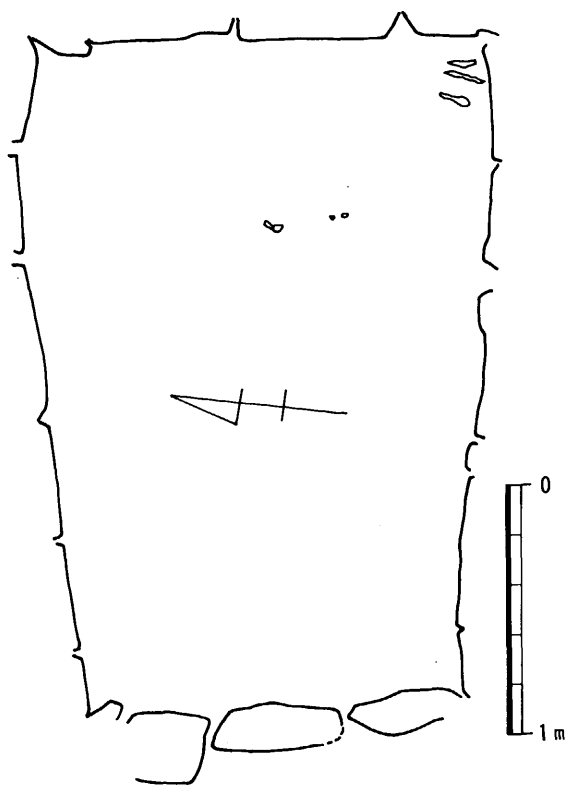
鉄器	鏃	4 以上
	刀子	2
須恵器	杯蓋	1
	杯身	1
	皿	1
	不明	1
	甕	3 個以上
土師器	壺	2 個以上
	甕	4 個以上

鉄器 (第185図、図版118)

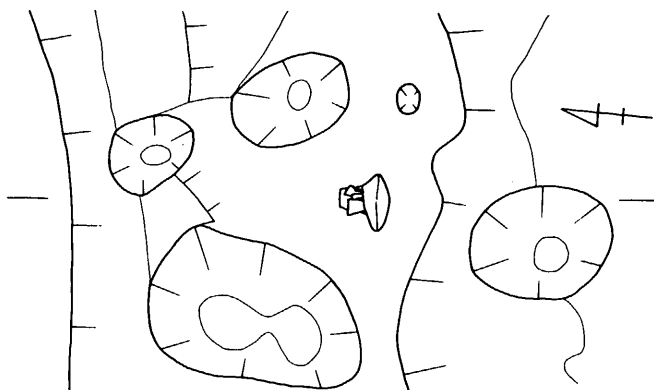
すべて石室内から出土したものである。

鏃 (1～5) 1～3は圭頭式に属するものである。1は断面円形の篋被部から急激にすぼまって基部に至る。基部には木質が残る。残存長11.7cm、鏃身部幅3.2cmを測る。2は残存長10.8cm、鏃身部幅3.9cmを測り、基部には木質が残る。3は鋒が丸味を帯びるものと考えられる。残存長9.6cmを測り、鏃身部幅は3.7cm程度であったと考えられる。4も圭頭式に属する可能性があるが、小片のため不詳である。

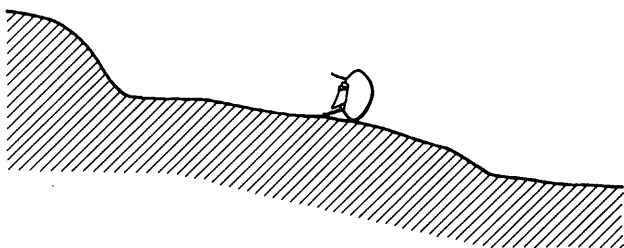
刀子 (6・7) 6は把をおさえる縁金具と、基部には木質が残る。



第183図 4号墳石室内遺物出土状況 (1/30)



H : 47.90 m



第184図 4号墳周溝内遺物出土状況 (1/20)

7の関は刃部に対して斜行する。やはり茎部に木質が残る。

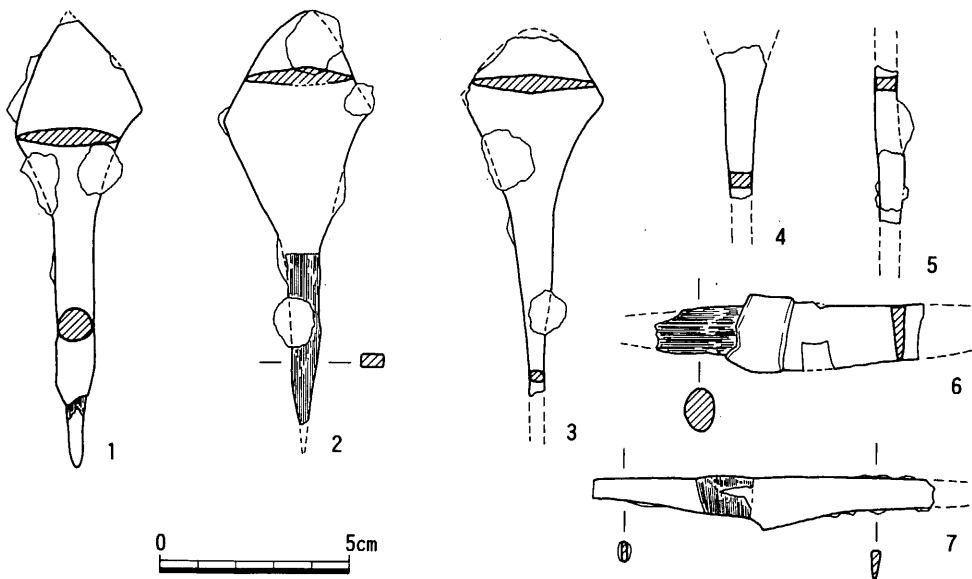
須恵器 (第186図)

底部 (1) 球形の底部の破片である。外面には1条の沈線、格子目叩きがあり、内面には指押さえ、ナデ、ヨコナデが見られる。器種は不明である。

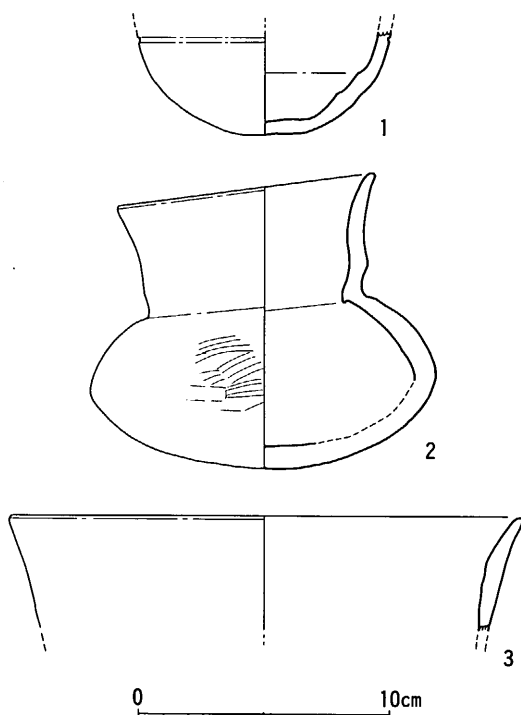
土師器 (第186図、図版99)

壺 (2) 扁球形の胴部と太い口頸部からなるものである。口頸部内外面はヨコナデ、胴部外面上半部はハケ目、下半上部はヘラケズリ、底部周辺はていねいなナデによるものが平滑にしている。

甗? (3) 口縁部小破片で、内外面をヨコナデで仕上げる。



第185図 4号墳出土鉄器実測図 (1/2)



第186図 4号墳出土土器実測図 (1/3)

3) 石室 (第187図、図版39)

主軸をN-86°-Eにとり、西側に開口する竪穴系横口式石室である。石室は天井石が失われているものの非常に残りがよく、側壁はいずれも腰石より3段目まで残っている。玄室は主軸長2.19m、奥壁幅1.15m、玄室中位幅1.10m、玄門側幅0.90mと奥壁側がやや広く狭長なプランを呈するが、右側壁がやや弧を描くようにふくらんでおり、このため玄室プラン自体はややゆがんで見える。また玄室の内面には全面に赤色顔料が塗布されていた。

奥壁は2枚の石材を立てて腰石とし、その上部は平石の小口面を石室内部に向けて、3枚を一段として積んでいる。右側壁は6枚の石材を立てて腰石とし、上部は腰石よりやや小振りの石材を互積みに積み上げ、やや内傾させて持ち送っている。左側壁の腰石は右側壁より大型のものを4枚用いているが、両側壁の腰石上面は約10cmの高低差が生じており、これを右側壁2段目にやや厚みのある石材を用いることによって解消している。玄門は左袖石は高さ約70cm、右袖石は高さ約60cmの柱状の石材を立てている。袖石間には框石を置いており、ここを境として前庭部側が玄室床面より18cm高くなっている。框石上には薄手の石材を挟んで、高さ50cmの平石を閉塞石として袖石に立てかけている。この閉塞石の外側には長さ40cm、幅20cm、厚さ10cmの平石があるが、前庭部床面からは約40cm程浮いた状態であった。この石は原位置を保つも

5号墳

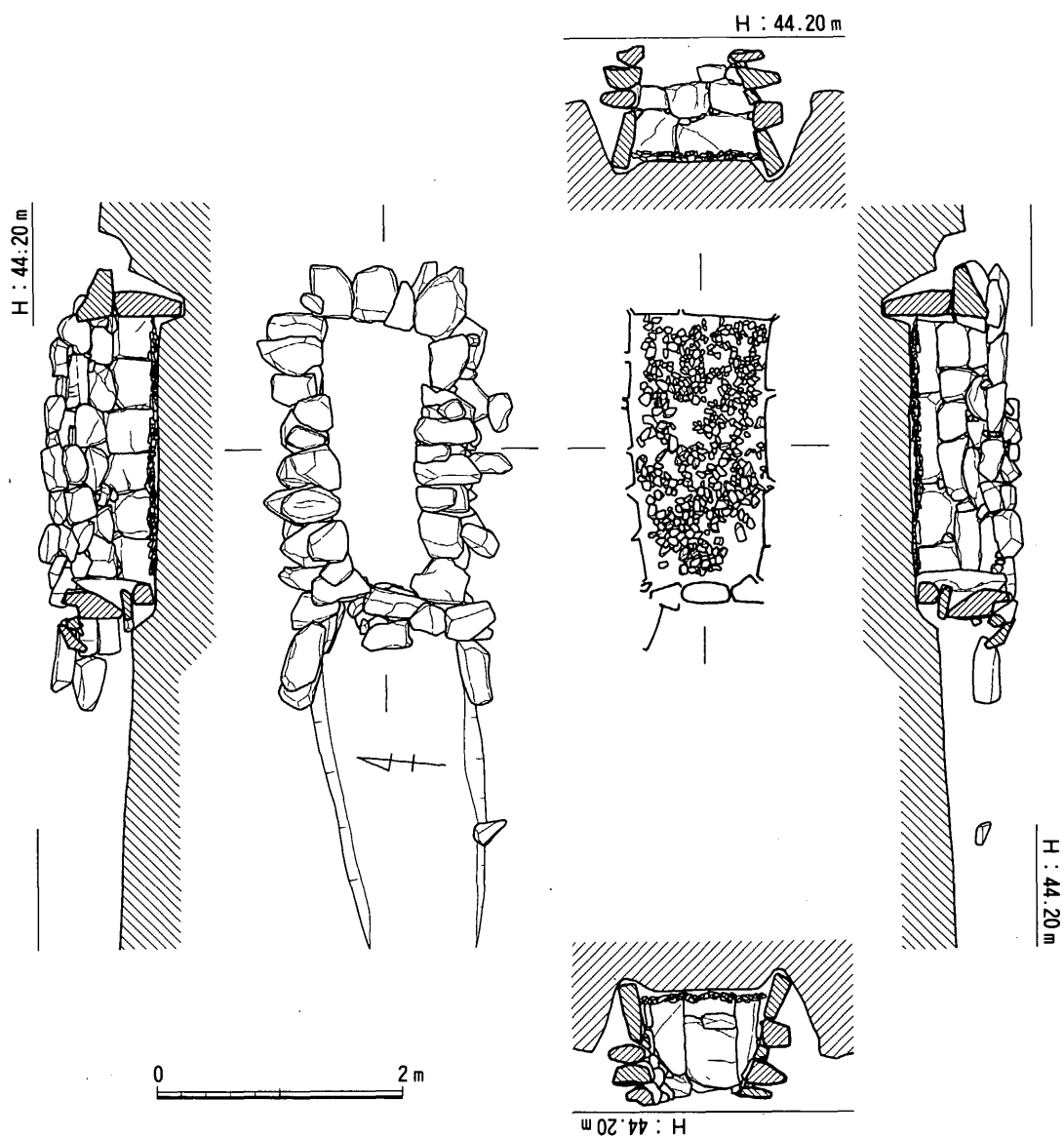
1) 立地と現況

1号墳の東に接して位置する。墳丘盛土は30cmほどしか残っていないが、石室がやや深く掘り込まれて造られているため、石室は本古墳群で最も残りが良い。周溝は2ヶ所で途切れる。

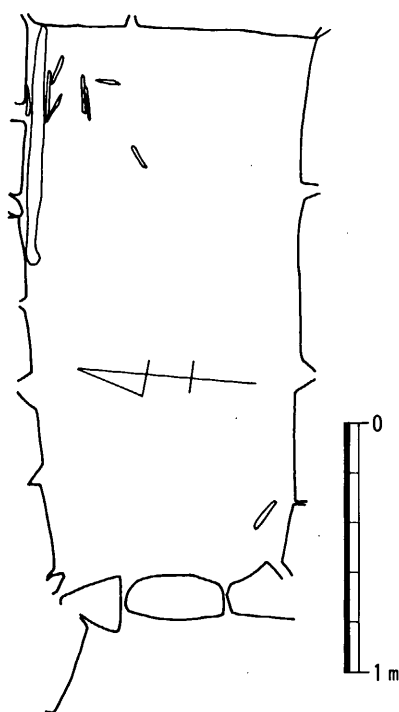
2) 墳丘 (第167・189図)

盛土は厚さ30cmほどしか残っていないため、本来の高さは不明である。盛土は石材の裏側は固めるためブロック状の、その後は墳丘を盛り上げるための細長い層が認められる。周溝は西側と南東側で合わせて2ヶ所途切れる。西側の途切れる部分は墓道の向きに合う。周溝は幅1~2m、深さ20~30cmである。墳丘規模は外径で約12~13mである。

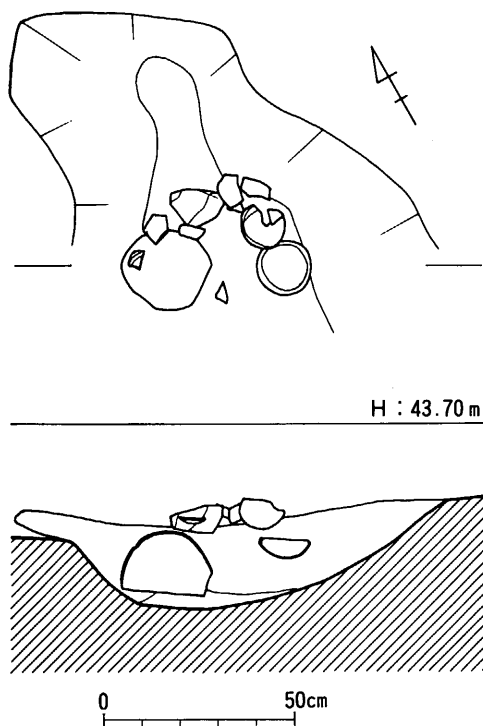
のと思われる。この石を含めて墓道を半裁し土層の堆積状況を観察した結果、閉塞石外側の土層は分層できず一気に埋められたものと思われた。したがってこの石は葬送後玄門を塞いだ後、墓道および前庭部を前庭部側壁が見える程度に埋め、その後閉塞石上に置いたものと考えられる。



第187図 5号墳石室実測図 (1/60)



第188図 5号墳石室内遺物出土状況
(1/30)



第189図 5号墳周溝内遺物出土状況
(1/20)

前庭部側壁は短くハの字に開く。左側は長さ50cm、幅20cmの石材を貼石状に据えており、右側は玄門側に長さ30cm程の石材を重箱積みに2段積み上げ、その外側に長さ50cm程の石材を据えている。

墓道は幅0.85～1.35m、長さ2.0mで、石室側に向かってゆるく下っており、石室の中軸線よりやや南側にずれている。

4) 出土遺物

石室内から鉄刀と鉄鏃が、周溝内から土器が出土している。鉄刀は石室左側壁に添って、切先が奥壁に接する形で出土した。鏃はその周囲と右袖石近くで発見された。また、西南側の周溝からは少し浮いた状態であるが、土師器の碗3個（第193図、5～7）、壺1（8）、甕1個（11）が出土した。碗のうち1個（7）は甕の内に入った状態であったが、甕の内側には赤色顔料が付着し、碗にも部分的に付着していた。石室内面は赤彩が認められ、その関係が注目された。即ち、両者の顔料が同一ならば、石室構築後、甕に入れた顔料を碗ですくって塗り付け、終了後土器類を一括して置いた状況を推測できる。その他、墓道からも土器が出土している。列挙すれば以下のとおりである。また、他に石鏃14、剝片11が出土している。図示した土器の出土位置は、前述の分を除いて、1・3・9が周溝、2・10が墳丘、4が墓道埋土である。

鉄器	刀	1
	鏃	9 以上
	刀子	2
須恵器	杯蓋	5 個以上
	杯身	5 個以上
	甕	破片13
土師器	碗	3 個以上
	壺	2 個以上
	甕	1 個以上

鉄器（第190～192図、図版119・120）

すべて石室内から出土したものである。

刀（1） 復元長97.0cm、刃幅2.8cm～3.4cm、背厚0.6cm～0.8cm、茎幅1.5cm～2.0cm、茎厚0.3cm～0.6cmを測る。刃は一度外反りし、さらに内反りする。関はわずかに弧を描きながら茎へと続く。関から約9cmの部分に、少なくとも5点の鉄鏃が銹着している。

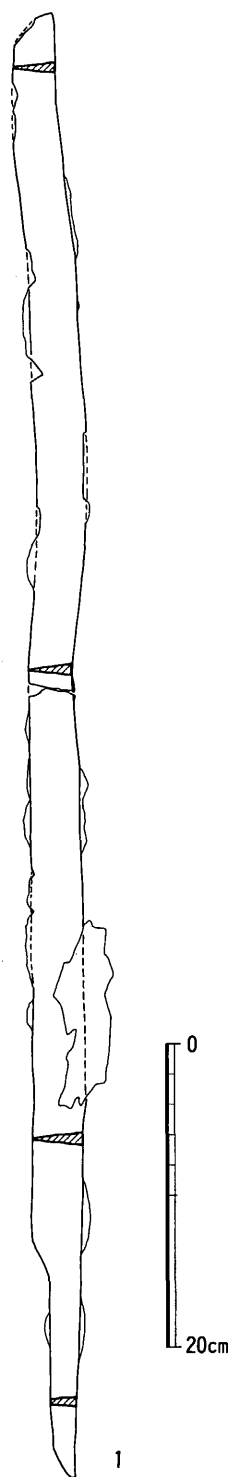
鏃（2～21） 2～10は、片刃箭式に属するものである。5・7は関が両側にあり、8もその可能性がある。10は鏃身部と筥被部の境が明瞭でない。10～21は筥被部または茎部、もしくは両者の破片である。12・13は土圧のため大きく曲がっている。17は樹皮巻と木質、18・19・20は木質、21は樹皮巻が残る。

刀子（22・23） 22は完形品である。全長13.4cm、刃幅1.1cm～1.5cm、背厚0.3cmを測り、茎には木質が残る。23は刃部のみ残り、残存長4.2cmを測る。木質が残るが、鞘木であろうと思われる。

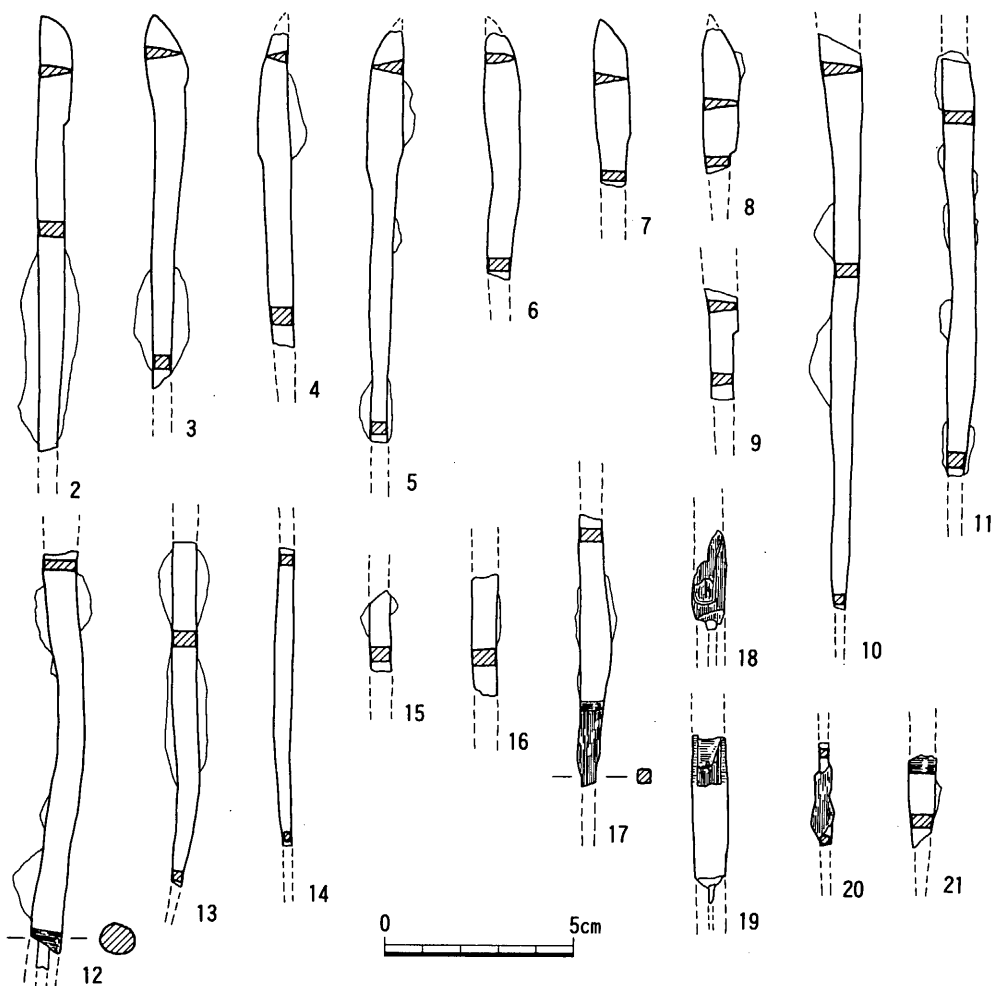
須恵器（第193図）

杯蓋（1） 6分の1程度の破片である。天井部と体部の境に沈線を持つ。天井部のヘラケズリは広くていねいである。その他は回転ナデである。

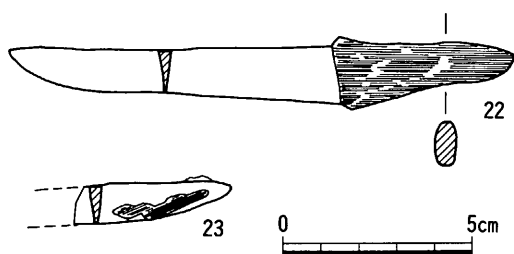
杯身（2・3） かなり内傾した立ち上がりを持つ。口縁端部は2が丸く終わり、3は浅い段を持つ。底部外面は回転ヘラケズリを行い、その他は回転ナデである。3の内面には同心円状当て具の痕跡がある。



第190図 5号墳出土鉄器実測図①（1/5）



第191図 5号墳出土鉄器実測図② (1/2)



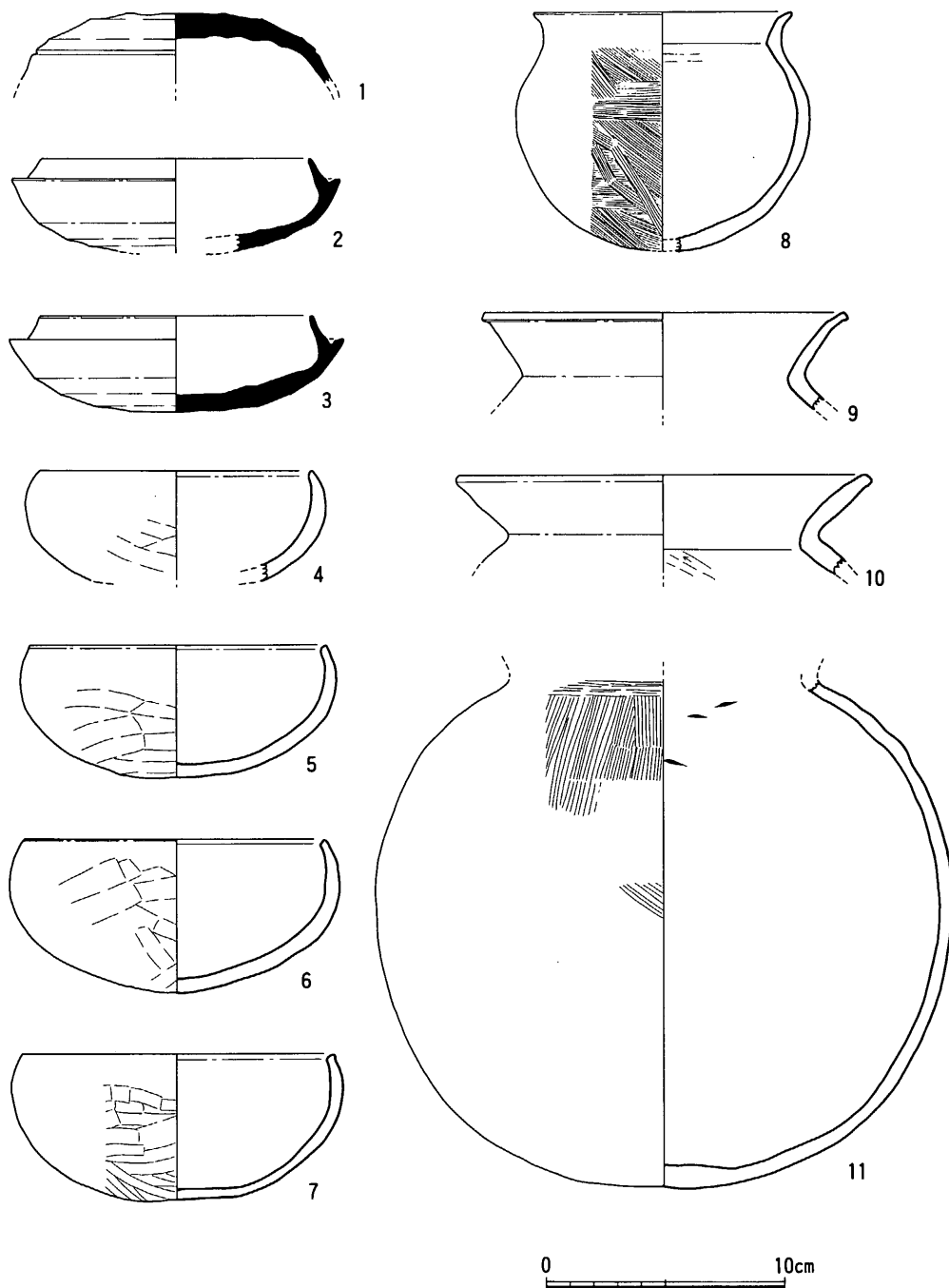
第192図 5号墳出土鉄器実測図③ (1/2)

同じようなヘラ記号がある。

壺(8) 短かく外反する口縁部を持つもので口縁部外面をナデ、胴部外面をハケ目、胴部内面をヘラケズリしている。

土師器(第193図、図版99)

椀(4~7) 4は小破片、6は3分の2ほど、5・7は完形である。底部外面をヘラケズリし、その他はナデで仕上げる。7の内面と外面の一部に赤色顔料らしきものが付着している。また、小破片の4を除いて、他の3ヶの底部外面には



第193図 5号墳出土土器実測図 (1/3)

甕（9～11） いずれも小破片である。9は口縁端部を外側へ折り曲げる。また、口縁部内面と胴部外面をハケ目調整している。10は内外面ともヨコナデである。11は内面に赤色顔料が付着しているもので、その容器として使用したものではないかと考えられるものである。胴部外面はハケ目、内面はナデている。

6号墳

1) 立地と現況

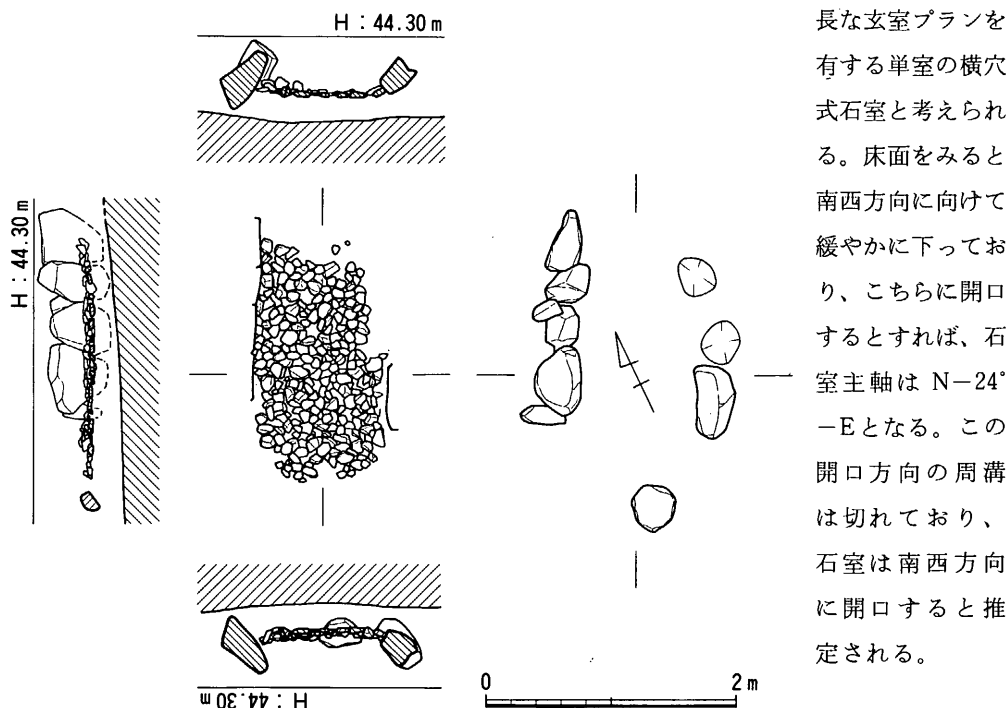
7号墳の北西、9号墳の南に位置する。墳丘はほとんど削平され、石室も側壁の最下段の一部と床面が残るにすぎない。

2) 墳丘

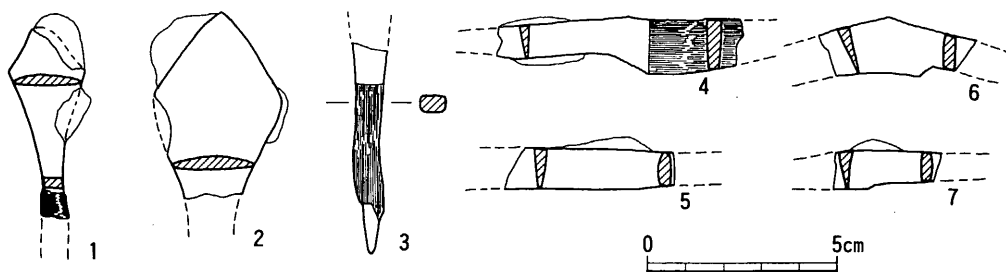
盛土部分はすべて削平され、周溝も半周部分が検出されただけである。従って、古墳本来の高さは不明である。周溝は検出された部分内でも、南西側の一部が陸橋状に途切れる。幅は0.7～1.7m、深さは20～30cm程度である。推定される古墳の形は楕円形で大きさは外径で10m～12mほどと思われる。

3) 石室（第194図、図版40）

周壁の全んどを失っており、側壁の一部が残存するがこれらも内傾し原位置をとどめていない。残された敷石から規模を推定すると、主軸長約1.8m前後、玄室幅約1.0m前後となり、狭



第194図 6号墳石室実測図 (1/60)



第195図 6号墳出土鉄器実測図 (1/2)

4) 出土遺物

原位置を保つものはない。土器片は小破片で図示できなかった。また、下記以外に縄文土器片、剝片が出土している。

鉄器	鏃	2以上
	刀子	4
須恵器	杯蓋	破片 6
	杯身	同上 5
	皿	同上 1
	甕	同上 17
土師器	椀	破片 1
	甕	同上 1

鉄器 (第195図、図版119)

すべて石室内から出土したものである。

鏃 (1～3) 1・2はともに圭頭式に属する。1は残存長5.0cm、鏃身部幅2.0cmを測り、樹皮巻が残る。2は残存長5.0cm、鏃身部幅3.3cmを測る。3は茎部で木質が残る。

刀子 (4～7) いずれも刃部から基部にかけての破片である。残存長は、番号順に6.3cm、4.5cm、4.2cm、2.7cmである。4の基部には木質が残る。6は全体的に刃側に屈曲している。

7号墳

1) 立地と現況

6号墳の東南、8号墳の西南に位置する。墳丘は削平されており、石室も床面と最下段の石が半分ほど残るだけである。さらに後世の溝が残された墳丘を横切るように掘られている。

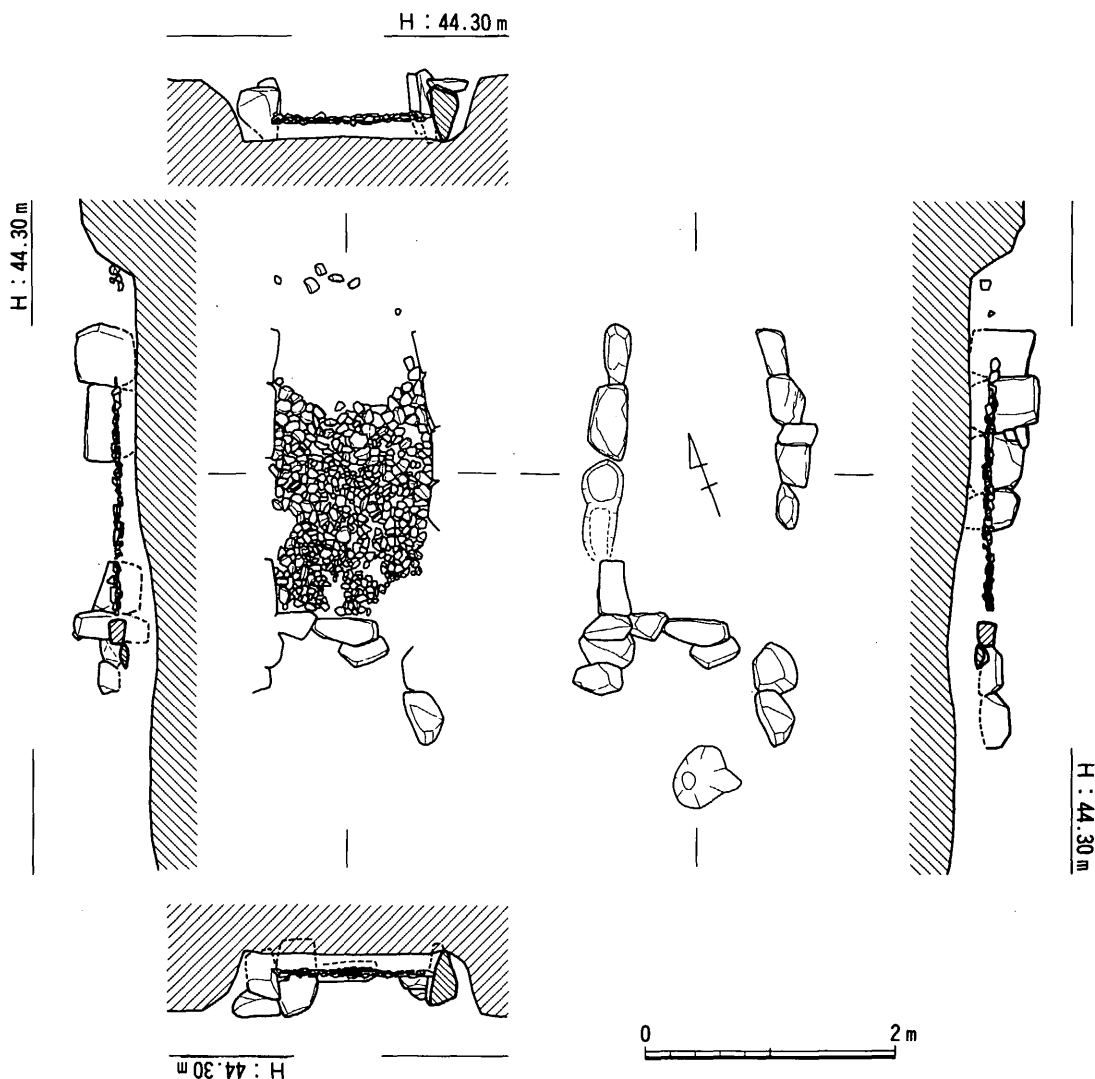
2) 墳丘

削平されて盛土は残っていない。周溝は南東部が明確ではないが、幅0.7m～2.1m、深さ30cm～50cmである。墳丘規模としては外径11m～12mと推定できる。

3) 石室 (第196図、図版40)

主軸をN-21°-Eにとり、略南西方向に開口する横穴式石室である。石室の残りは悪く、腰石の一部しか残っていないが、敷石の範囲および掘り方から復元すると主軸長2.6m、奥壁幅0.96m、玄室中位幅1.3m、玄門側幅0.90m前後と玄室の中程がややふくらむプランをとっており、これは左側壁のほうが強い。

奥壁は残っていない。側壁は右側壁が幅60cm程の石を用いるのに対し、左側壁はそれよりやや小型の石材を用いている。玄門部は右袖石と框石のみ現存しており、袖石は高さ40cm程である。前壁部側壁は短くハの字に開くが、右側は長さ40cm、幅20cmの石材の長辺を主軸と直交する側に向けており、これとは逆の据え方をする左側とは約40cmの差がある。墓道は幅1.82m



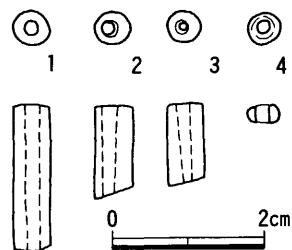
第196図 7号墳石室実測図 (1/60)

～1.35m、長さ0.67mであり、石室中軸線よりやや西へ曲がっている。墓道の真ん中には、径約45cm、深さ約40cm程のピットが見られる。敷石は元々全面にあったと思われるが、奥壁側は攪乱により失われている。本石室の敷石には玄室中位より奥壁側は一边10cm前後の石を敷き詰め、玄門側では5cm前後の小さな石を敷いている状況が見られ、玄室内の場所によって使う石材の大きさを選択しているようである。

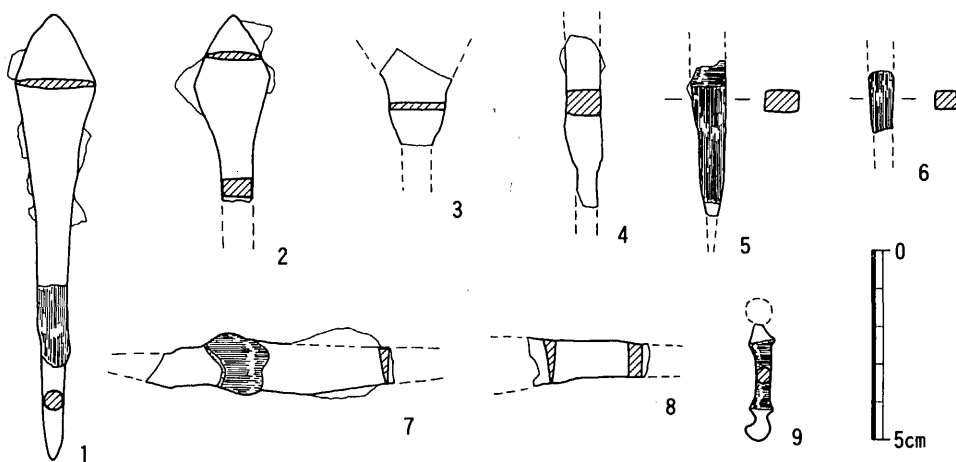
4) 出土遺物

出土遺物は須恵器、土師器、弥生土器、縄文土器、瓦、石鏃、剥片、鉄器であるが、原位置を保つものはないと思われる。また、石室検出面からの出土土器に時期の新しいものが多いが、古墳との直接的な関係はないものと思われる。

装身具	管玉	4
	ガラス玉	2
鉄器	鏃	3以上
	刀子	2
	弓付属金具	1
須恵器	杯蓋	7以上
	杯身	12以上
	高杯	1
	皿	1以上
	鉢	1以上
	壺	1以上
	甕	4以上

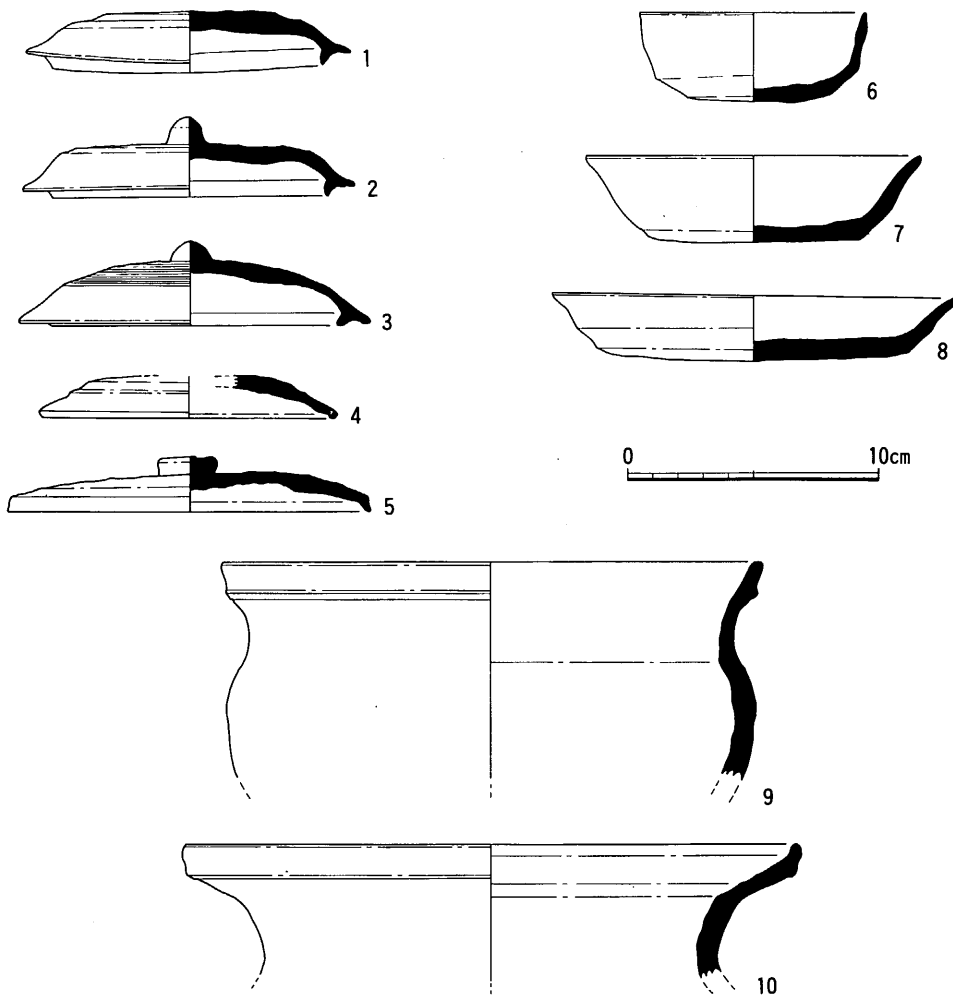


第197図 7号墳出土装身具
実測図 (1/1)

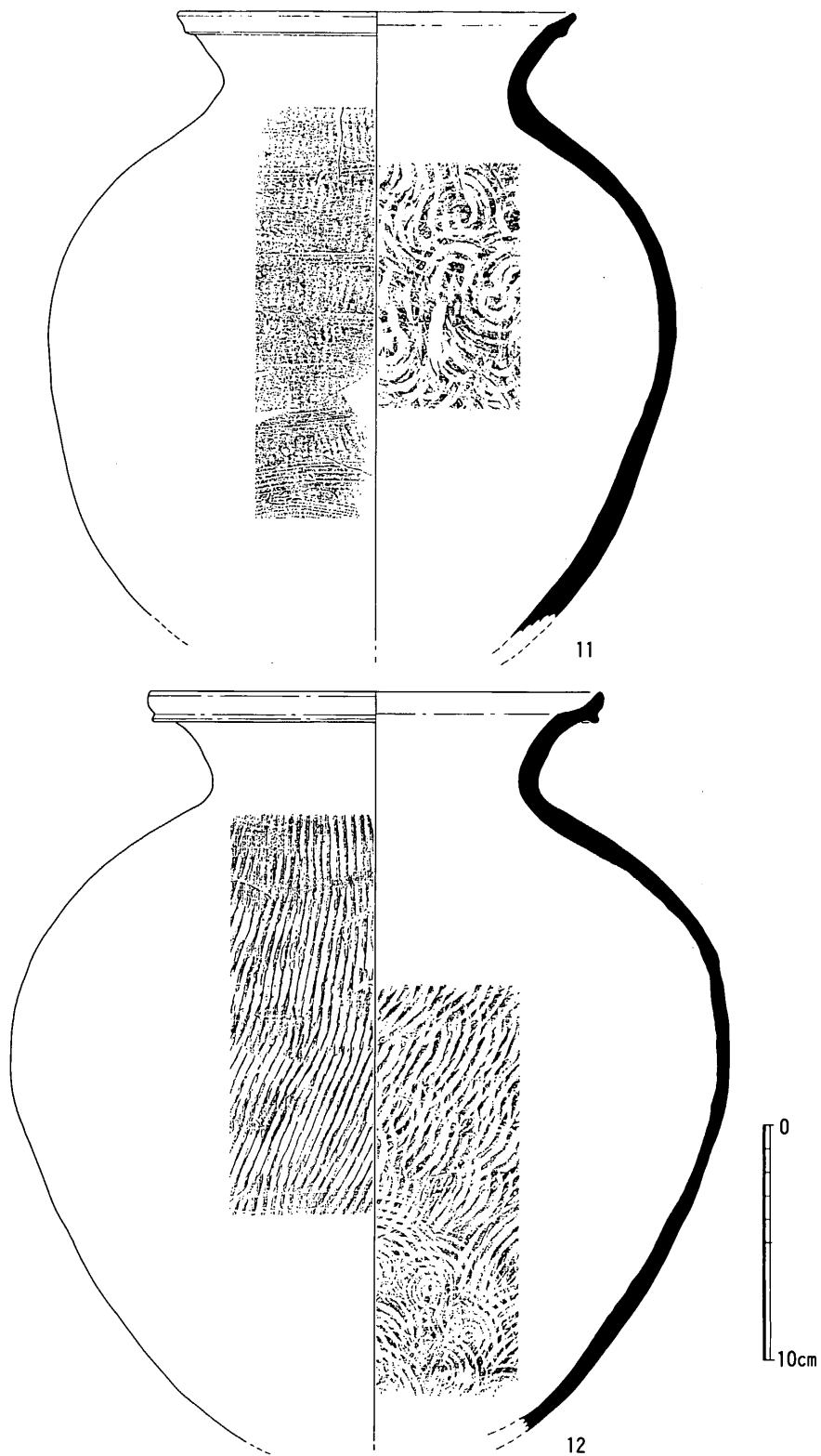


第198図 7号墳出土鉄器実測図 (1/2)

	長頸壺	1
土師器	杯	1
	碗	3 以上
	蓋	1
	高杯	1 以上
	甕	破片112
	把手	1
	壺	1
	甑	1



第199図 7号墳出土土器実測図① (1/3)



第200图 7号墳出土土器実測図② (1/3)

装身具

管玉（第197図、図版112）

図示したのは3個であるが、実測不可能のものがもう1個ある。図示したものはすべてうす緑を呈し、長さは違うが、径5mmの大きさである。3は折れた部分を再研磨したものかもしれない。3個とも片側からの穿孔である。

小玉（第197図、図版112）

青色を呈するガラス製で、径4mm、高さ2.5mm、孔径2mmの大きさである。両端面は研磨している。

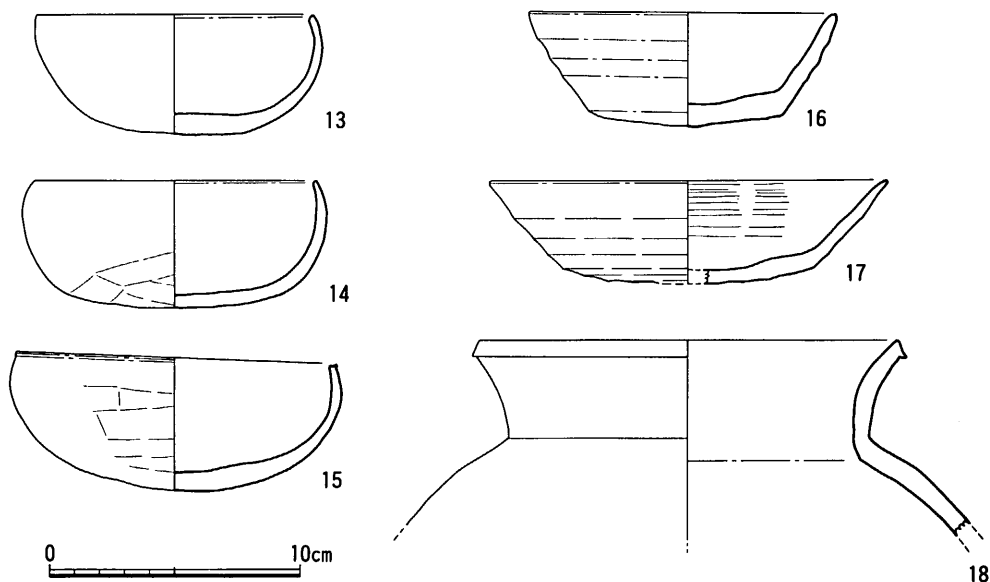
鉄器（第198図、図版121）

すべて石室内から出土したものである。

鏃（1～6） 1・2は圭頭式に属する。1は完形で、全長11.7cm、鏃身部幅2.1cmを測る。茎部は断面円形を呈し、木質が残る。2は残存長4.9cm、鏃身部幅2.0cmを測る。3も圭頭式かと思われるが、小片のため不詳である。4は篋被部から茎部にかけての破片。5・6は茎部の破片で、5は樹皮巻と木質、6は木質が残る。

刀子（7・8） いずれも刃部から茎部にかけての破片である。残存長は7が6.6cm、8が3.2cmである。7の茎部には木質が残る。

弓付属金具（9） 断面六角形の筒部の両端に球形のものが付くと思われるが、一方の端部を欠く。残存長3.1cm、筒部には樹皮巻が残る。



第201図 7号墳出土土器実測図③（1/3）

須恵器（第199図、図版99）

杯蓋（1～5） かえりのあるもの（1～3）とないもの（4～5）がある。1・2は完形、3は約半分、4・5は破片である。1はつまみがなく、天井部外面はヘラケズリしない。2・3はつまみの付くもので、2は天井部を回転ヘラケズリ、3はカキ目を施す。4は口縁端部が丸く終わるもので、小破片のため、つまみの有無や天井部の調整は不明である。5はつまみの付くもので、天井部外面をヘラケズリする。

杯身（6・7） 6は立ち上がりのないもので、底部はヘラ切り未調整である。底部外面にはヘラ記号がある。7は高台の付かないもので、やはりヘラ切り未調整である。焼成は良好でなく淡黄灰色を呈する。

皿（8） 破片である。底部はヘラ切り後ナデる。

甕（9～12） 9・10は小破片である。口縁部二重口縁風に肥厚させる。回転ナデを行う。11・12は中型の甕で、胴部外面は平行叩き、内面には同心円状当て具痕が残る。11の底部付近にはカキ目がある。

土師器（第201図）

碗（13～15） 3分の1ほどの破片である。底部外面は13がケズリを思わせるが、14・15は強いナデを行っている。その他はナデである。

杯身（16・17） 16は器壁の厚いもので、ヘラ切り後かるくナデている。17は体部が外に開くもので、体部下半と底部をヘラケズリし、内部はヘラミガキするものである。

甕（18） シャープな作りである。口縁部内外面をヨコナデ、胴部外面はハケ目、内面はヘラケズリしている。

8号墳

1) 立地と現況

7号墳の北東に接するようにして位置する。墳丘は削平されて、主体部もなかった。周溝が3分の2ほど残るだけである。

2) 墳丘

前述のとおり、墳丘は削平されており、盛土はなかった。従って、本来の高さはわからない。周溝は東側が削平されているが、その他の部分は途切れずに回る。7号墳周溝と接するが、切り合い関係は不明であった。周溝は幅0.7m～3.1m、深さは西側が最も深く0.6mで、その他は徐々に浅くなる。推定される外径は約14mである。

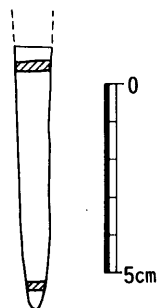
3) 石室

削平されて石材は完全になくなっていった。石室掘り方の一部から思われる浅いくぼみがあるだけであった。

4) 出土遺物

原位置を保つものはないと思われる。図示したものは3点とも周溝埋土からの出土である。

鉄器	鏃	1
須恵器	杯蓋	1
	杯身	1
	甕	破片 4
土師器	高杯	1
	甕	破片 2



第202図 8号墳
出土鉄器実測図
(1/2)

鉄器 (第202図、図版119)

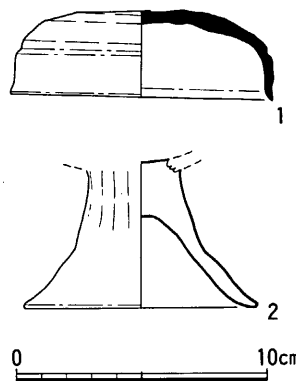
鏃 茎部である。残存長7.0cmを測る。断面は長方形を呈する。

須恵器 (第203図)

杯蓋 (1) 天井部と体部の境に浅い沈線が入るものである。口縁端部内面にはわずかに段を残す。天井部外面の回転ヘラケズリは範囲が広く、ていねいである。その他は回転ナデである。

土師器 (第203図)

高杯 (2) 脚部のみである。柱状部は縦方向に削った後ナデている。その他は全体にナデを行っている。



第203図 8号墳出土土器実測
図 (1/3)

9号墳

1) 立地と現況

今回報告する古墳群の中では最も北寄りに位置するもののひとつである。最も近い6号墳との距離は、石室の中心間で13m弱を測る。すでに削平を受けており、石室の一部を残すのみであった。石室の掘方を切って溝が走っているが、その一部は周溝を再び掘り直していると思われる。

2) 墳丘

墳丘は、前述のようにすでに削平されており、盛土は全く残っていなかった。従って墳丘の本来の高さはわからない。周溝は、南西側で途切れるが、北側では前述のように後に掘られた溝と一緒にいるため、端部を確定することができなかった。周溝の規模は、幅0.5m～1.1m、深さは10cm～20cmほどである。推定される本古墳の本来の墳丘の大きさは、外径で約9.5mである。

3) 石室 (第204図、図版41)

石室の残りは悪く奥壁と側壁の一部が残るのみであるが、これらも原位置を保つものとは思われない。床面には隙間なく敷石が敷き詰められており、これから主軸をN-27°-Eにとり略南西方向に開口する単室の横穴式石室と推測できる。また玄室は主軸長2.06m、奥壁幅1.56m、玄門側幅1.18m前後と推定され、逆台形を呈するプランをとる。

奥壁左側には幅80cm程の石材が残っており、反対側にも同じような石を用いて2石で構成されていたものと思われる。玄門部は框石のみ残っており、石室外側には、幅0.6m、長さ0.79m程の短い舌状の墓道がつき、石室側へ向かってゆるやかに下っている。

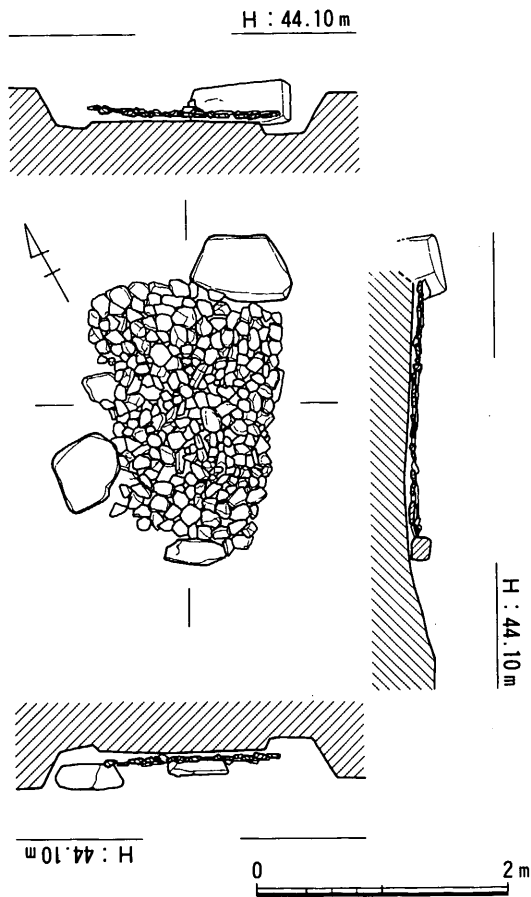
4) 出土遺物

敷石の間から鉄器が2点出土したが、他の遺物はすべて周溝埋土中からの出土である。下記のもの以外にも、縄文土器、黒曜石の剥片、石鏃が出土している。遺物の殆どが小破片のため1点しか図示することができなかった。

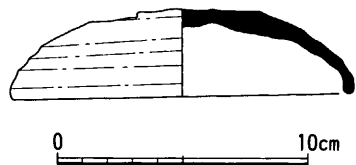
須恵器	杯蓋	3
	杯身	2
	甕	破片で10
土師器	甕	破片で6

須恵器 (第205図、図版99)

杯蓋 天井部外面はヘラ切り後粗いナデ、他の部分には回転ナデとナデを施す。天井部から体部にかけての外面にヘラ記号がある。図では復元して表しているが、著しく焼きひずんでおり、内外面ともに灰をかぶる。



第204図 9号墳石室実測図 (1/60)



第205図 9号墳出土土器実測図 (1/3)

10号墳

1) 立地と現況

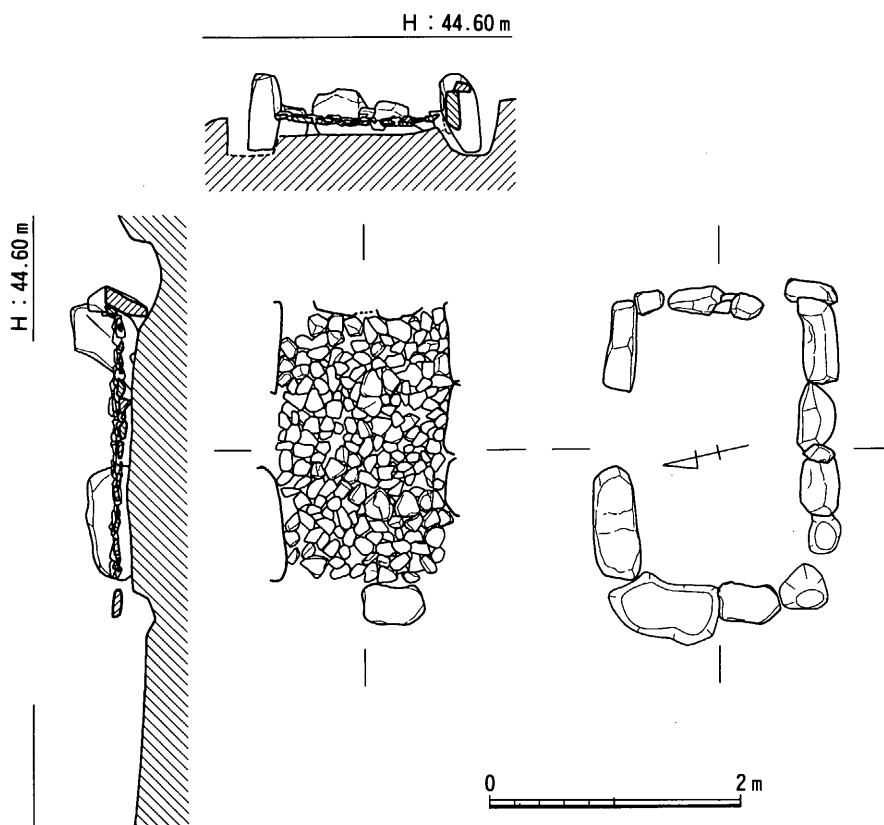
3号墳の南側に位置する。両者の距離は、石室の中心間で約19mを測る。西側の部分は半分ほど発掘区外になり、その部分の周溝は調査することができなかった。墳丘は削平を受けており、石室は腰石と敷石が残っているだけであった。調査区内を南北に走る溝と切り合い関係にある。新旧関係は、本古墳の方が新しいが、溝からは遺物の出土がないため年代はわからない。

2) 墳丘

すでに削平されており、墳丘盛土は残っていなかった。周溝は殆どが区域外にあると考えられるが、検出した限りでは東部が陸橋状に途切れ、両端部で幅が広がる。その部分を含めて、周溝の幅は1.1m～3.5mを測り、深さは30cm～40cmほどである。推定される古墳の墳丘の大きさは、外径で約16mである。

3) 石室 (第206・207図、図版42)

石室の破壊が著しく、奥壁と袖石は残っていないが、石室西側に袖石の抜き跡と思われる凹



第206図 10号墳石室実測図 (1/60)

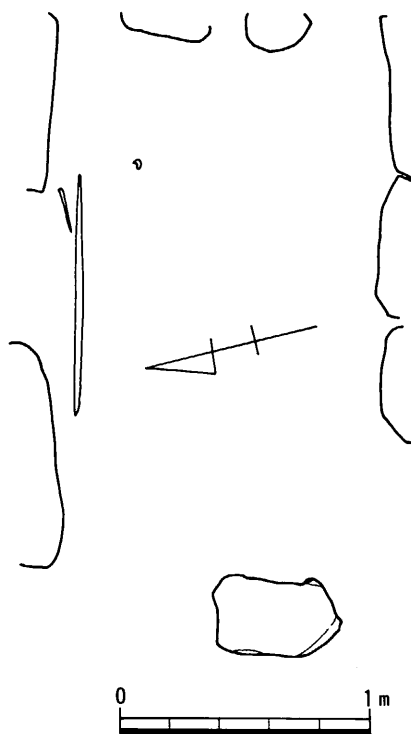
みが認められることから、略西方向に開口し主軸をN-103°-Eにとる横穴式石室である。敷石の範囲と抜き跡から復元して、玄室は主軸長2.14m、奥壁幅1.28m、玄室中位幅1.34m、玄門側幅1.24mのほぼ長方形プランをとる。

奥壁は中央に幅60cm、厚さ20cm程の石が割れた状態で検出されており、この両側に一枚ずつ石を配して3枚で奥壁を構成するものと考えられる。玄門部は石室中軸線より左側にずれた位置に框石と思われる長さ約50cm、厚さ8cm程の平石があり、その両側に袖石の抜き跡がある。この框石が現位置を保つものであれば、玄門は玄室のやや左寄りにつくことになる。側壁は横長の石材を立てて用い、現存する奥壁の石材より大きい。床面には全面に敷石がみられ、一辺15cm前後の大きめの石を用いている。

4) 出土遺物

装身具と鉄器は石室内から、須恵器、土師器は周溝埋土中から出土したものである。下記のもの以外には、縄文土器、黒曜石の剝片、石鏃、石斧の半製品、土玉が周溝埋土中から出土した。

装身具	ガラス玉	114
	勾玉	1
鉄器	刀	1
須恵器	杯蓋	2
	杯身	1
	高杯	1
	甕	1
	壺	1
	甕	破片で2
土師器	椀	6
	壺	1
	甕	破片で126



第207図 10号墳石室内遺物出土状況
(1/30)

小玉・丸玉（第208図、図版111）

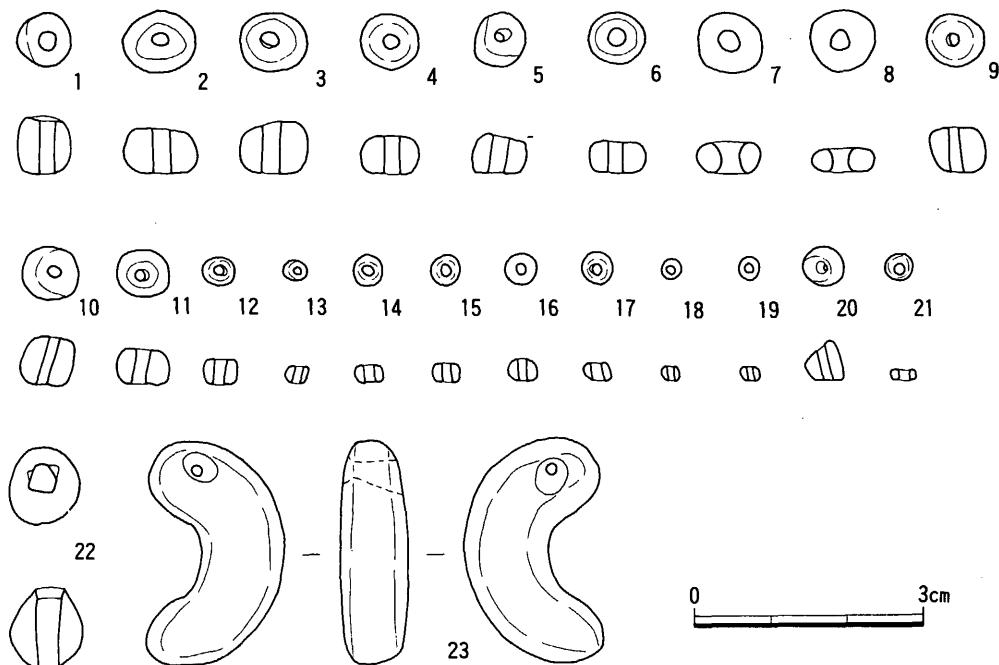
すべてガラス製で、114個出土した。色、大きさ、形によって13類に分け、それらからピックアップした21個を図示した。1～4は青色で比較的大きいもの（径7～8.5mm）で、38個あるうちの4個を示した。両端面は平坦部を作り出す。5～6は前者よりやや小さめ（径5～7.5mm）で青色を呈するもので19個出土した。やはり両端面に平坦部を作り出す。7～8は端面に平坦部を作り出さないもので、言わばドーナツ型をしたものである。青色を呈し、2個だけである。9は中ぐらいの大きさで（径7mm）縦に長めのものである。青色で2個出土した。10は前者と似るが色のうすいもので、1個だけである。11は緑がかった青色をしたもので4個出土した。12～13は青色をした小さなもので、13個出土している。14～15はうす緑をした小さなもので8個ある。16は濃い青色のもので5個出土している。17～18は青色の小さなもので16個ある。19は緑がかった青色で3個ある。20は黄緑色を呈するもので2個ある。21は暗赤褐色を呈するものでこれ1個だけである。

土玉（第208図、図版111）

22で淡茶灰色を呈し、下ぶくらみ形である。焼成前に断面の四角い細い棒状の工具で片側から穿孔している。形は整っていない。長さ1.1cm、最大幅0.9cmである。

勾玉（第208図、図版111）

23はめのう製で長さ2.9cm、厚さ0.9cmを測る。孔は片側からの穿孔である。



第208図 10号墳出土装身具実測図（1/1）

鉄器（第209図、図版119）

石室中より出土したものである。

刀 無反りの直刀で、完形品である。関は刃に対して内湾気味に斜行し、茎先は直線的である。目釘孔等は確認できなかった。刃には部分的に鞘材が残る。全長97.4cm、刃幅3.2cm～4.2cm、背厚0.6cm～0.8cm、茎幅0.9cm～2.9cm、茎厚0.5cmを測る。

須恵器（第210図、図版99・100）

口蓋（1） 天井部と体部の境は段をなし、明瞭である。口縁端部内面も段をなしている。天井部外面には幅広く丁寧な回転ヘラケズリを施し、他は回転ナデとナデで仕上げる。

杯身（2） 立ち上がりが比較的高く、口縁端部が段をなす。底部外面に丁寧な回転ヘラケズリを施し、他の部分を回転ナデとナデで仕上げる。

高杯（3・4） 3の脚部はほぼ直線上に外方向に伸び、端部近くで段をなし、やや内傾しながら端部に至る。内外面とも回転ナデを施す。透しは長方形で四方に施される。外面に灰をかぶっており、一部で自然釉化している。4のわずかに残る杯部は、内外面とも回転ナデを施す。脚部は外湾気味に伸び、端部近くで段をなし、短く鋭く内反して端部に至る。調整は、内外面ともに回転ナデで、円形の透しを三方に施す。

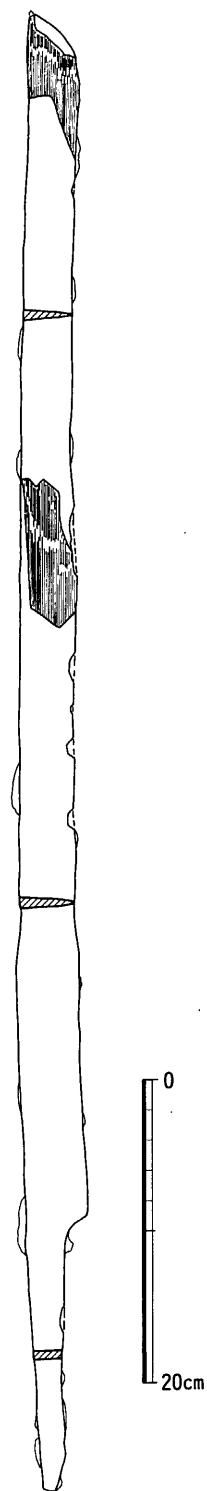
甗（5） 脚部は肩が張り、やや尖り気味の丸底である。口頸部はほぼ直線状に外上方に伸び明瞭な段を有する。口径は胴部最大径よりも大きい。穿孔部の上下に沈線をめぐらせ、その間に波状文を施す。頸部中位には櫛描波状文を施す。外面には灰をかぶっており、一部は自然釉化している。底部外面には火轆がある。

壺（6） 短頸壺の小片である。口径部はほぼ直立する。内外面とも回転ナデを施す。

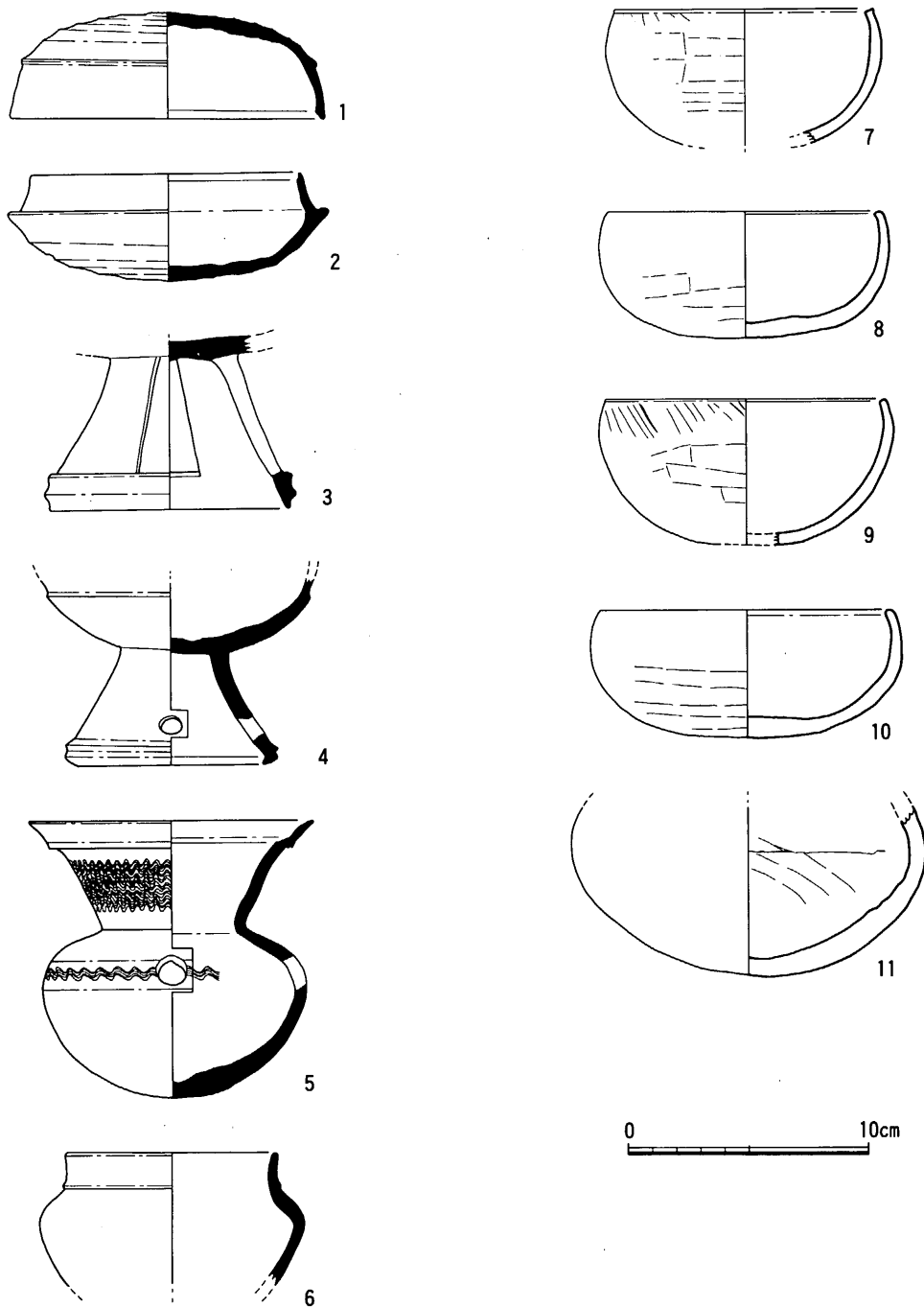
土師器（第210図、図版100）

碗（7～10） いずれも底部外面から体部にかけて手持ちヘラケズリを施し、他を回転ナデとナデで仕上げる。7と9は、口縁部近くに竹串のような工具で斜線を入れている。口縁端部は9のみ丸く、それ以外は平坦に作る。7・9・10の底部外面には黒斑がある。

壺（11） 胴部中位以上を欠く。内面は斜方向のヘラケズリを施す。



第209図 10号墳出土
鉄器実測図（1/5）



第210图 10号填出土土器实测图 (1/3)

外面には回転ヘラケズリの痕跡が認められるが、磨滅のため範囲や幅がわからない。底部外面に大きな黒斑がある。

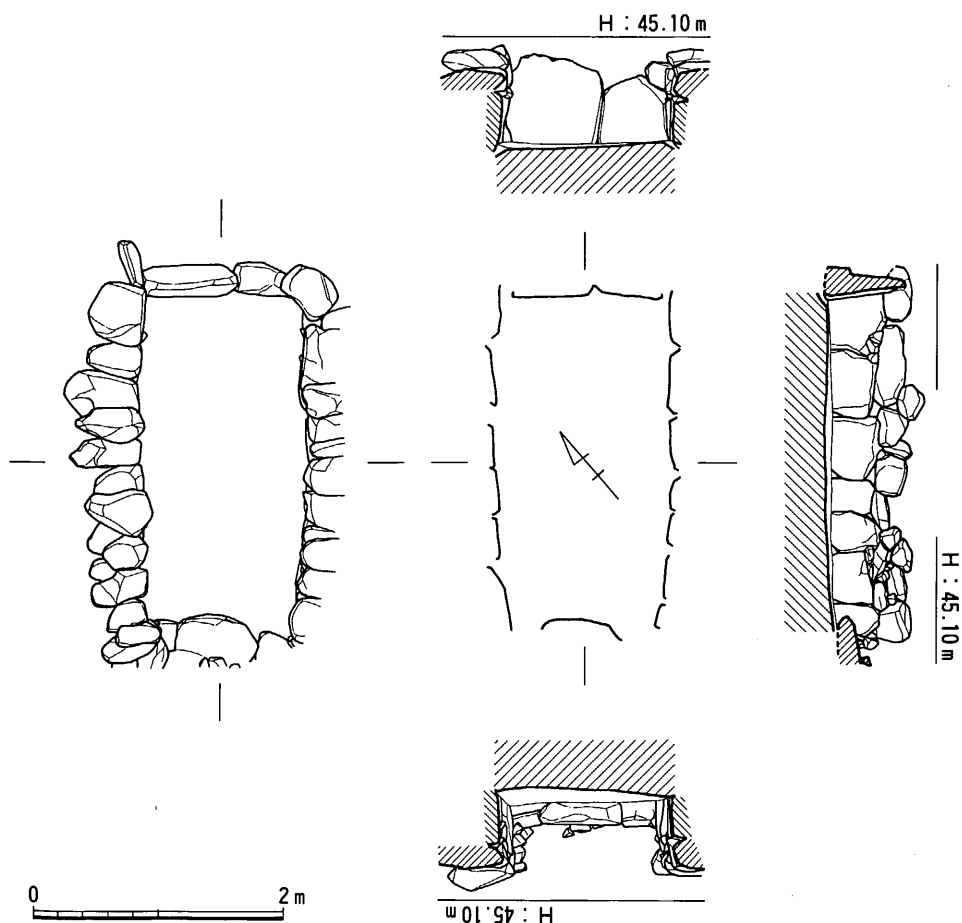
11号墳

1) 立地と現況

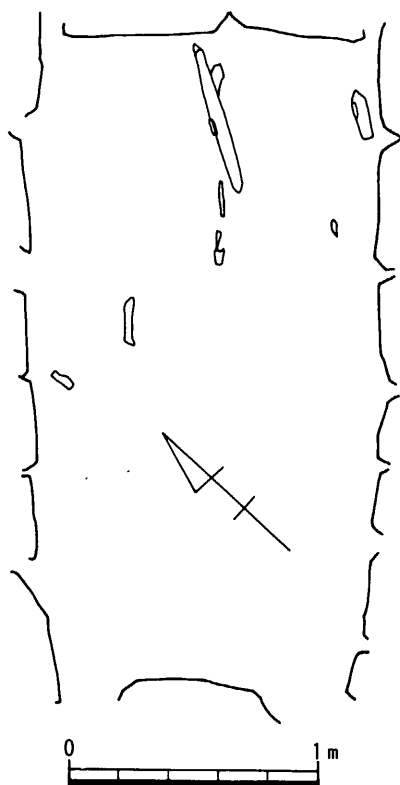
12号墳の北側に位置し、両者の距離は石室の中心間で約27mを測る。また、本古墳から道路を越えて南東方向には2号墳があり、その距離は約22mである。調査区の端部で北側コーナーを検出し、急遽石室部分のみを人力で掘り広げたため、結果的に玄門部の調査を十分に行うことができなかった。

2) 墳丘

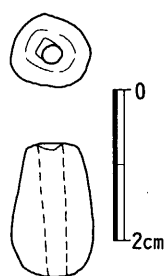
墳丘はすでに削平されており、盛土は確認できなかった。周溝も、結果的には確認できなかった。



第211図 11号墳石室実測図 (1/60)



第212図 11号墳石室内遺物出土状況
(1/30)



第213図 11号
墳出土土製品実
測図 (1/1)

装身具	土玉	1
鉄器	鍬	4以上
	刀子	2
	斧	1

ったため、本古墳の本来の形状、規模等は不明である。ただし、石室の規模は他の古墳と大差はない。

3) 石室 (第211・212図、図版43)

主軸をN-49°-Eにとり、南西方向に開口する横穴式石室である。玄門部からその外側は諸般の事情により調査を行えなかったが、本古墳群の石室はいずれも単室であることから当石室も単室構造であると思われる。玄室の規模は、主軸長2.58m、奥壁幅1.31m、玄室中位幅1.42m、玄門側幅1.14mであり、左右の側壁は奥壁からゆるやかな弧を描いて玄門にいたっている。

奥壁は長さ50cm～80cm、高さ55cm～70cm、厚さ30cmの板石を2枚立てている。奥壁の上面のレベルは右側が約10cm程高い。側壁は最も残りの良いところで3段目まで残っており、幅の広い板石を立てその上部は横長の石材の小口面を石室内側に向け互積み

に積み上げている。左側壁の最も奥壁寄りの腰石上には長さ40cm、幅32cm、厚さ23cmの石を奥壁にまたがるように積んで力石としているが、右側壁ではこ

4) 出土遺物

すでに述べたような理由から、遺物はすべて石室内から出土したものである。それらのうちでも、土玉は埋土中から、鉄器は殆どが床面から出土した。また、土器の出土はなかった。

土玉（第213図、図版113）

淡茶灰色で下ぶくらの円筒状を呈する。長さ1.8cm、最大幅1.0cmを測る。孔の径が両端部で違っており、芯棒に巻き付けて作ったものではなく、焼成前に穿孔したと考えられる。

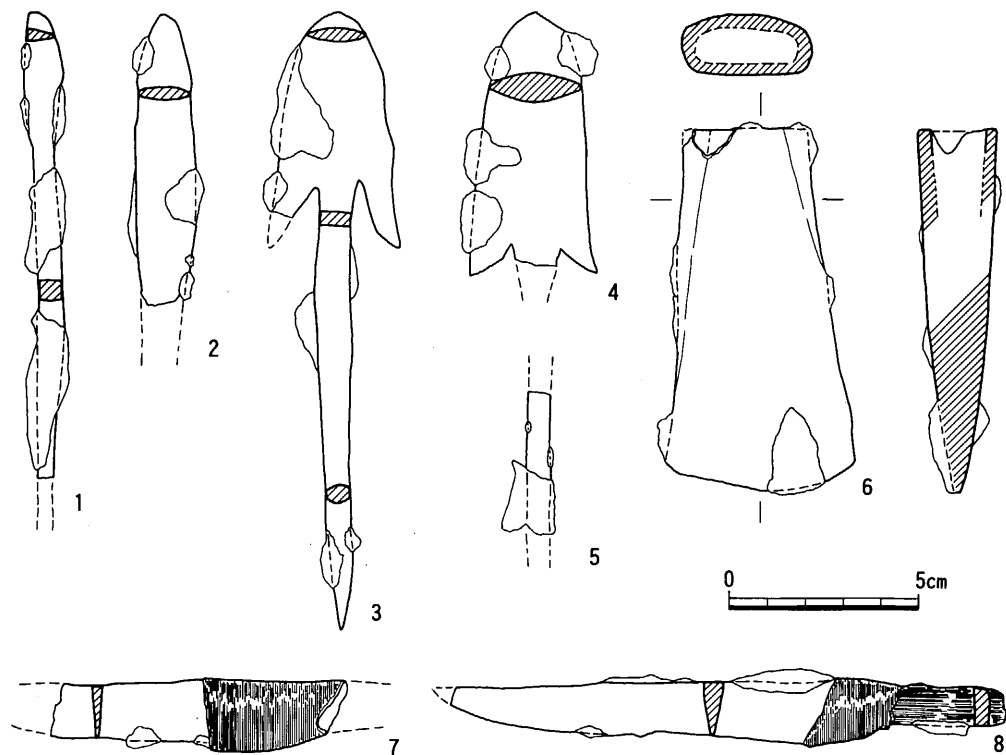
鉄器（第214・215図、図版121）

鎌（1～5） 1は片刃箭式に属するもので、残存長は12.3cmである。2は全容がわからないが、柳葉式に属すると思われる。残存長7.7cm。3、4は逆刺を持つ。3は完形品で、全長16.3cm、鎌身部長6.3cm、同幅3.5cmを測る。4は鎌身部のみの破片で、残存長7.0cm、幅3.3cmを測る。3の逆刺は深いが、4は浅い。

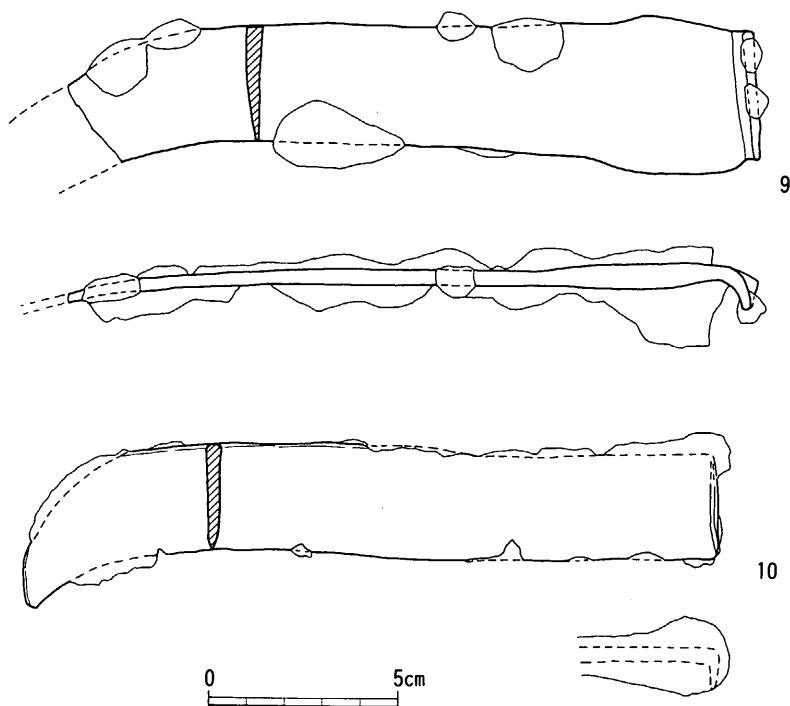
刀子（6・7） 6は刃部から基部にかけての破片で、残存長は7.7cm。基部には樹皮巻が残る。7は鋒を欠くがほぼ完形である。残存長14.6cm。基部に樹皮巻と木質が残る。

斧（8） 袋状であるが、袋内部は錆が著しく観察することができない。袋部から刃先部へわずかに弧を描きながら広がる。刃先はいわゆる蛤刃の形状を呈する。全長9.5cm、刃部幅4.9cmを測る。

鎌（9・10） ともに大型の曲刃鎌で、木柄装着部は身に対して直角に折り返す。9の残存長



第214図 11号墳出土鉄器実測図① (1/2)



第215図 11号墳出土鉄器実測図② (1/2)

は18.2cm、10の全長は18.3cmである。

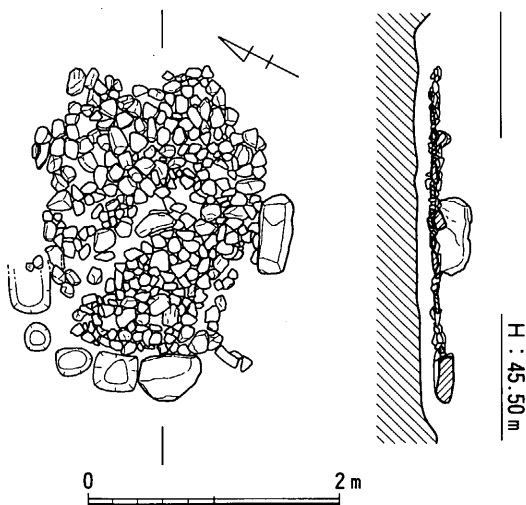
12号墳

1) 立地と現況

11号墳の南側に位置し、その距離は11号墳のところでも述べた通り、中心間で約27mである。また、道路を越えて北東には2号墳があり、距離は25mほどである。調査区の南端付近にあるため、周溝の一部は調査区域外に含まれ、調査することができなかった。

2) 墳丘

墳丘はすでに削平されており、盛土は残っていなかった。周溝は、前述のように



第216図 12号墳石室実測図 (1/60)

一部が区域外にあり、南西部で途切れている。調査区域内で検出した部分に限れば、周溝の規模は幅0.7m～2.5m、深さは20cm～40cmほどである。周溝の状況から、本古墳の規模は外径で14m弱と考えられる。

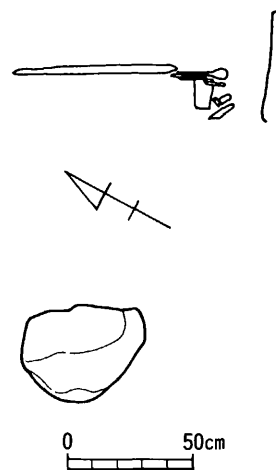
3) 石室 (第217図、図版44)

非常に残りが悪く、腰石すらも全んど失った状態である。長さ1.13m、幅0.84mの範囲で敷石が敷かれているが、石室の規模・構造・主軸の方向は明らかにできない。

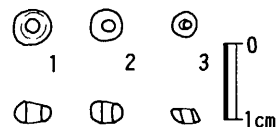
4) 出土遺物

装身具と鉄器は敷石上または敷石の間から、須恵器と土師器は周溝埋土中から出土したものである。下記のもの以外には、縄文土器、弥生土器、瓦器、黒曜石の剝片、青磁、白磁、瓦、磨石、磨製石斧、石器の半製品が周溝内埋土中から出土した。

装身具	ガラス玉	3
鉄器	刀	1
	鏃	12以上
	刀子	1
	斧	1
	鎌	1
	用途不明	1
須恵器	杯蓋	7以上
	杯身	2
	高杯	2
	甕	1
	提瓶	1
	甕	破片で24
土師器	杯	1
	碗	10
	壺	1
	甕	破片で120



第217図 12号墳石室内遺物出土状況実測図 (1/30)



第218図 12号墳出土装身具実測図 (1/1)

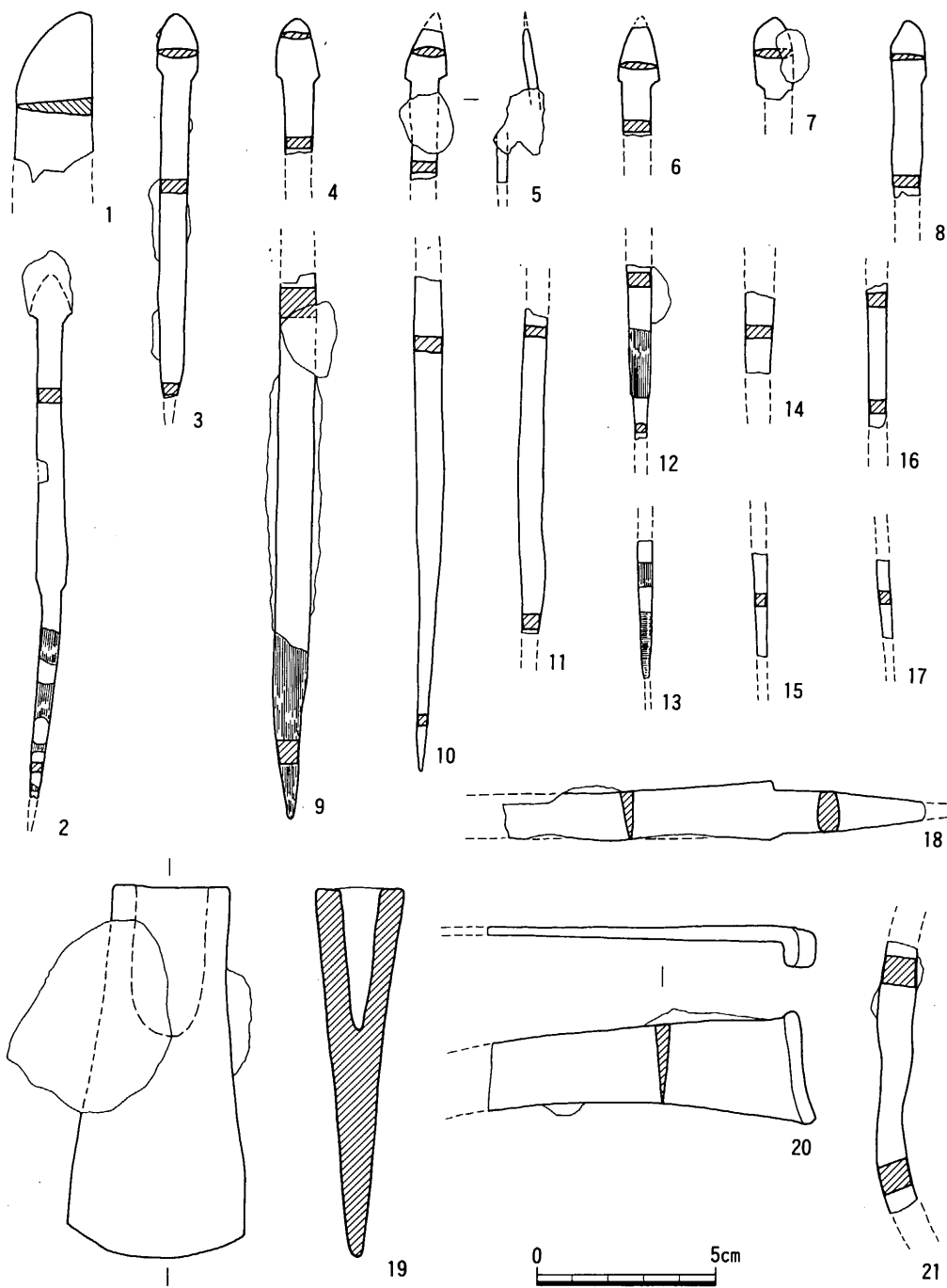
小玉 (第218図、図版112)

すべてガラス製である。1はうすい青、2は緑味がかったうすい青、3は青色である。両端面は研磨していると思われ、特に1は平坦面を作り出している。

鉄器 (第219図、図版122)

刀 (1) 鋒部の破片と思われる。残存長4.2cm、刀幅2.1cm、背厚0.5cmを測る。

鏃 (2~17) 2~7は鑿箭式、8は片刃箭式に属するものと考えられる。2は基部が土圧のためか屈曲する。5は別の鏃の破片と銹着している。9~17は基部の破片である。9と12は木



第219図 12号墳出土鉄器実測図 (1/2)

質が残り、13は樹皮巻と木質が残る。

刀子 (18) 背側と刃側の両側に関を持つ。残存長11.8cmを測る。

斧 (19) 完形の袋状斧である。全体の形としては、袋部から刃部にかけてわずかに弧を描きながら広がる。刃先はいわゆる蛤刃状を呈する。全長10.3cm、刃部幅5.0cmを測る。

鎌 (20) 曲刃鎌である。身は緩やかに内反りし、木柄着装部は身に対して直角に折り返す。残存長9.2cmを測る。

不明鉄器 (21) 断面は方形に近く、大きく屈曲する。残存長7.6cm。

須恵器 (第220図、図版100・101)

杯蓋 (1～3) 1と3は天井部と体部の境に稜を持ち、口縁部端部内面は段をなす。ともに天井部外面に回転ヘラケズリを施し、他の部分を回転ナデとナデで仕上げる。2は天井部と体部の境の稜が退化して沈線になっている。口縁端部内面には段が付く。天井部外面を回転ヘラケズリし、他の部分を回転ナデで仕上げる。

杯身 (4・5) いずれも底部外面に丁寧で広範囲なヘラケズリを施す。立ち上がりは内傾し、口縁内部は段をなす。その他の部分の調整は、4がすべて回転ナデ、5は回転ナデとナデである。4には焼きぶくれがある。

甕 (6) 扁球形の胴部と、段を持つ口頸部からなる。口径は胴部最大径よりも大きい、穿孔は、胴部中位よりやや上になされており、頸部中位には櫛描波状文をめぐらせる。調整は、底部外面が回転ヘラケズリ、他の部分は回転ナデである。穿孔部から上の部分に灰をかぶっており、殆どが自然釉化している。

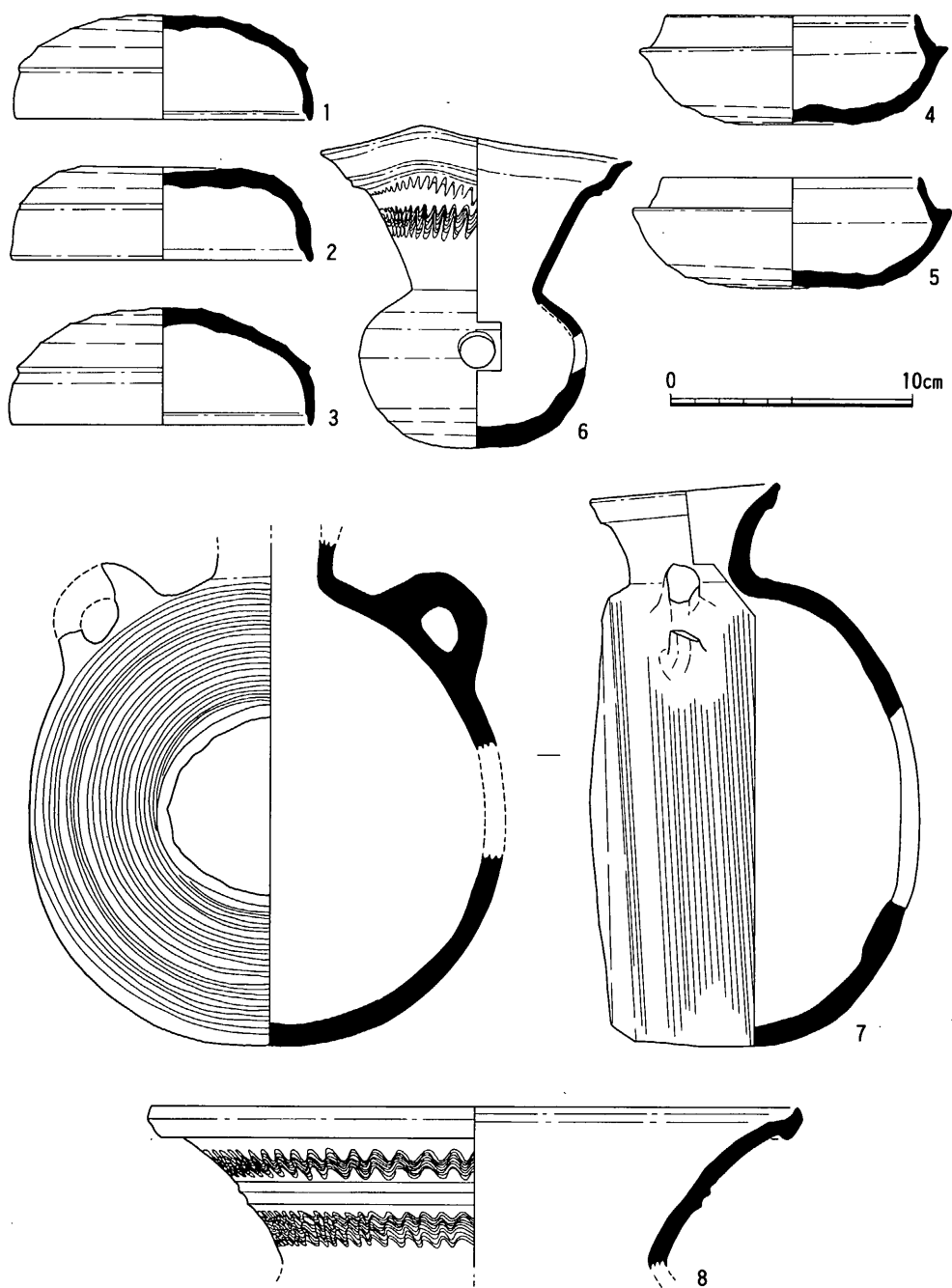
提瓶 (7) 口頸部は短く緩く外反し、段をなしてさらに外に開く。把手は大きく輪状をなしており、機能的に有効である。正面観はほぼ正円を呈し、側面観は片面がほぼ平らで、もう片面は丸い。平坦な面には回転ヘラケズリを施したと考えられるが、全面に自然釉がかかるため不詳である。丸い面にはカキ目を施す。丸い面の中心部に径8cmほどの焼成後穿孔がある。平坦な面が全面に自然釉をかぶっていること。その一部が丸い面の方へ流れ落ちていることから、丸い面を下側に焼成されたものと考えられる。

甕 (8) 口頸部のみの小破片である。口縁部は段をなし、端部はやや内反気味に短く上方に伸びる。頸部のほぼ中位に2条の沈線をめぐらせ、その上下に櫛描波状文を施す。調整は回転ナデで、内面に灰をかぶっている。

土師器 (第221図、図版101)

杯 (9) 平坦な底部から、体部は内湾しながら伸び、口縁部は短く外反する。焼成不良のため内外面ともに磨滅しており。調整は不明である。内面に黒斑がある。

碗 (10～14) 14は小破片であるが、平底になるものと思われる。他は丸底である。調整はいずれも、底部から体部にかけての外面に手持ちヘラケズリを施し、他の部分を回転ナデとナデ



第220图 12号墳出土土器実測図① (1/3)

で仕上げる。11・12は底部外面に黒斑があり、13は煤が付着している。

壺(15) 扁球状の胴部に、外反気味に長く伸びる口頸部がつく。底部から体部にかけての外面には手持ちヘラケズリを施す。それ以上の胴部と、口頸部内外面は回転ナデで調整する。底部内面には、油滴状に煤が付着している。

13号墳(図版45)

1) 立地と現況

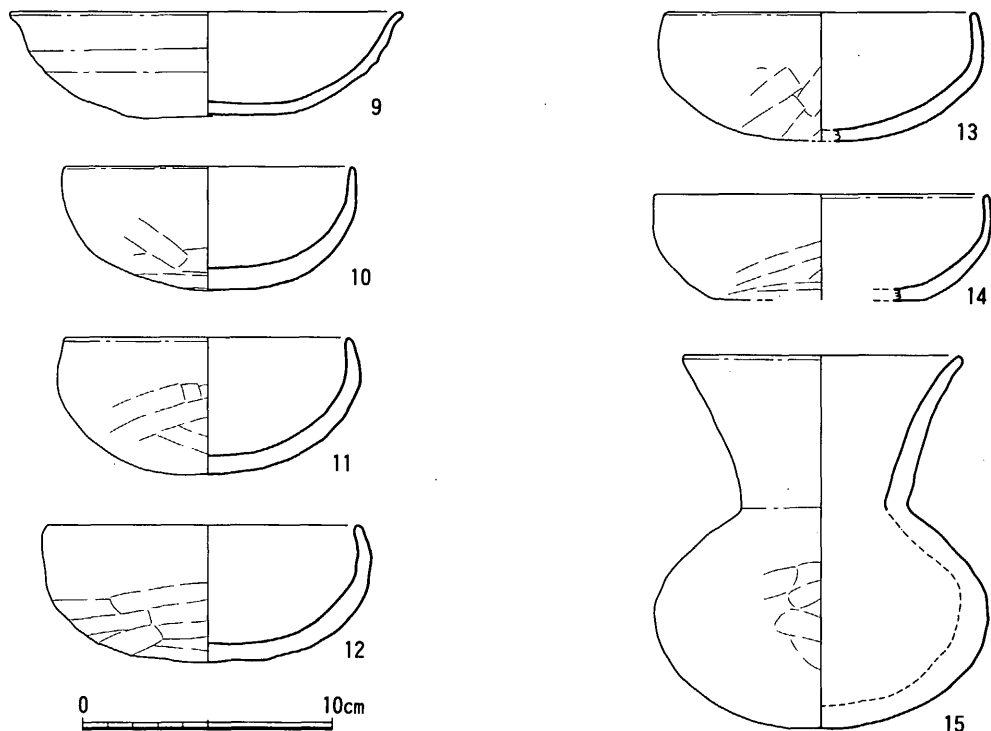
14号、19号墳と接するようにして位置する。著しい削平を受けており、周溝しか残っていないかった。

2) 墳丘

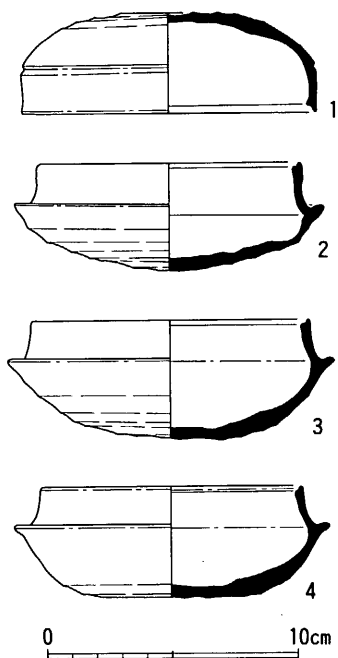
墳丘の盛土は全く残っていなかった。周溝は南側で途切れ、端部は両側ともやや幅が広くなっている。周溝の規模は、幅0.4m～2.5m、深さ20cm～30cmである。推定される本来の墳丘の大きさは、外径で14m～15mである。

3) 石室

本来石室があったと思われる場所に、多量の石材が廃棄されている攪乱孔が検出された。お

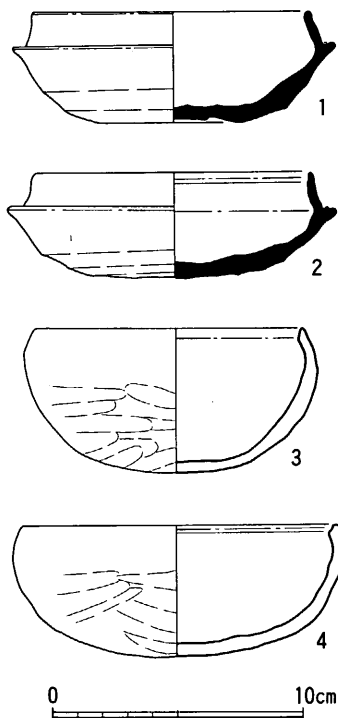


第221図 12号墳出土土器実測図②(1/3)



第222図 13号墳出土土器実測図

(1/3)



第223図 14号墳出土土器実測図

(1/3)

そらく水田耕作に支障をきたすため、石室を破壊して投棄したものであろう。従って石室の構造は全くわからない。但し、この攪乱孔内から一辺8cm～20cmほどの小さな石が多量に出土したことから、床面に敷石が施されていたであろうことは推測できる。

4) 出土遺物

遺物はすべて周溝埋土中から出土した。特に図示した4点は、周溝の底面に置かれていたもので、そのうち3点は完形品である。下に記するもの意外にも、縄文土器、黒曜石の剝片、石器の半製品が出土している。特に縄文土器は、すべて小破片ではあるが、148点を数えた。さらに、1点だけがサヌカイトの剝片も出土した。

須恵器	杯蓋	5
	杯身	7以上
	甕	破片で1
土師器	壺	破片で1
	甕	破片で26

須恵器 (第222図、図版101)

杯蓋 (1) 天井部と体部の境の稜は短い。口縁端部内面の内傾する段はやや凹線を描く。天井部外面を回転ヘラケズリし、他の部分を回転ナデで仕上げる。

杯身 (2～4) 2の立ち上がり端部は丸味を持ち、内面ににぶい段を有する。3・4の端部の段は、2よりも明瞭である。いずれも底部外面を回転ヘラケズリし、他を回転ナデで仕上げる。

14号墳 (図版46)

1) 立地と現況

13号、17号、19号墳と接するように位置する。13号墳と同様に、著しい削平を受けている。

2) 墳丘

墳丘の盛土は全く残っていない。周溝は西側で途切れている。周溝端部は直線的な形状を呈し、特に南側ではそれが顕著である。周溝の規模は、幅0.6m～2m、深さ10cm～

40cmである。推定される本来の墳丘の大きさは外径で12m強である。

3) 石室

石室の構造、規模、方向等は全く不明である。削平は、石室掘り方すら検出できない深さに及んでおり、また、攪乱孔からの石材等の出土も一切なかった。

4) 出土遺物

遺物はすべて周溝埋土中からの出土である。下に記すものの他には、縄文土器、分銅型石器、石鏃、黒曜石・サヌカイトの剥片が出土している。特に縄文土器はすべて小破片であるものの、294点にのぼった。

須恵器	杯蓋	1
	杯身	7 以上
	甕	破片で35
土師器	碗	5 以上
	蓋	1
	甕	破片で104

須恵器 (第223図、図版102)

杯身 (1・2) 1の受部は短く、立ち上がりの端部は丸くおさまる。底部外面に回転ヘラケズリを施すが、中心部はヘラ切り後粗くナデただけである。また、底部内面には叩きの痕跡が残る。2は、立ち上がりの端部内面に浅い沈線がめぐる。底部外面は回転ヘラケズリ、他の部分は回転ナデで仕上げる。

土師器 (第223図、図版102)

碗 (3・4) 3は口縁端部内面ににぶい段を有する。4では同じ部分に沈線がめぐる。いずれも底部から体部にかけて外面に手持ちヘラケズリを施し、他を回転ナデとナデで仕上げる。また、底部外面にヘラ記号がある。

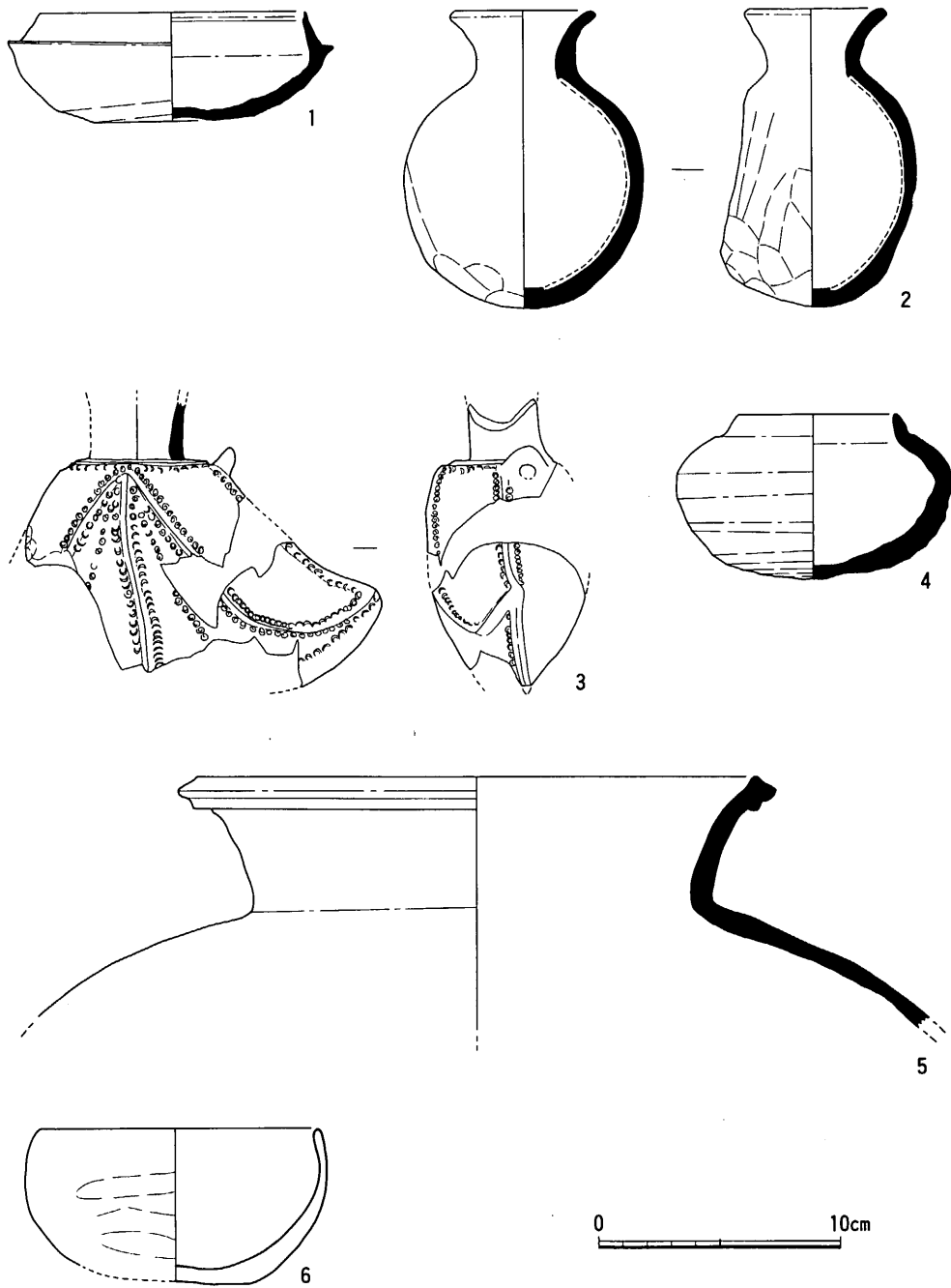
15号墳 (図版47)

1) 立地と現況

16号、17号墳と接するようにして位置する。今回報告する古墳群の中では、10号墳に次いで南にある古墳で、本古墳のさらに南側は、牛頸川の氾濫原である。

2) 墳丘

墳丘は著しく削平されており、盛土は全く残っていない。周溝は南西部で途切れ、南側の端部が直線的な形状を呈する。また、東北側の部分は特に幅が広がっている。周溝の規模は、幅1.2m～4.3m、深さ5cm～20cmほどである。一部で17号墳の周溝と切り合っており、新旧関係は本古墳の方が古い、推定される本来の墳丘の大きさは、外径で約16mである。



第224図 15号墳出土土器実測図 (1/3)

3) 石室

13号墳と同様に、石室は完全に破壊されており、本来石室があったと思われる場所に後代に掘られた穴の中に、大量の石材が破壊されていた。従って、石室の構造、規模、方向などは全くわからない。ただし、破棄された石の中に、一辺8cm～20cmほどの小さなものが多く含まれていることから、本来床面には敷石が施されていたことが推測できる。

4) 出土遺物

遺物はすべて周溝埋土中から出土したものである。下に記するものの他にも、縄文土器、弥生土器、黒曜石・サヌカイトの剥片が出土している。特に縄文土器は、すべて小片ではあるが123点が出土した。

須恵器	杯蓋	5
	杯身	11以上
	皿	2
	高杯の蓋	1
	高杯	4
	提瓶	2
	皮袋形提瓶	1
	壺	破片で4
	甕	破片で131
土師器	碗	9
	高杯	2
	鉢	1
	壺	2
	甕	破片で27

須恵器（第224図、図版102）

杯蓋（1） 受部は短く、立ち上がり端部内面に付く段は凹線を描く。底部外面に回転ヘラケズリを施し、他は回転ナデで仕上げる。底部外面にはヘラ記号がある。

提瓶（2） 把手の付かない提瓶である。緩く外反する頸部が、さらに短く強く外反して口縁に至る。正面観は扁球形を呈する。側西観は、片面が凹面でもう片面は丸味を持つ。両面ともにヘラ記号がある。調整は、口頸部内外面とも回転ナデ、胴部は手持ちヘラケズリの後ナデでいるようであるが、灰かぶりのため底部付近以外は不詳である。

皮袋形提瓶（3） 口頸部の中位以上と胴部の約半分を欠く。胴部は両面とも丸味を持ち、底部は両面の端部をおさえて接合する。胴部の片面と、側面に粘土紐を貼付し、それらの接合部、底部、肩部、さらに胴部片面の3本の粘土紐の間に、列をなす竹管文を施す。胴部のもう一方

の面にはヘラ記号があるが、粘土紐は貼付されていないようである。肩部には円環状の把手が貼り付けられている。胎土は密で、焼成は良好であり、粘土紐の付く面に灰をかぶっている。

壺（４） 内傾する口頸部を有する短頸壺である。底部外面に回転ヘラケズリを施し、他は回転ナデで仕上げる。胎土中に径1mm～3mmほどの白色の石英粒を含む。

甕（５） 口頸部から肩部にかけて残る。口縁部には突帯がある。口頸部内外面には回転ナデを施す。胴部外面は平行叩きの後、カキ目調整を加える。内面には同心円状の当て具痕が残る。

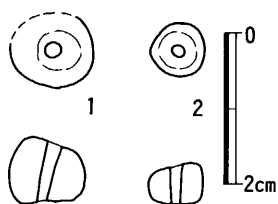
土師器（第224図、図版103）

椀（６） 口唇部は丸く収め、底部は平底に低い。底部から体部にかけての外面には手持ちヘラケズリを施し、他の部分を回転ナデとナデで仕上げる。

16号墳（図版48・49）

1）立地と現況

17号墳の東、20号墳の南に位置する。墳丘はすべて削平され、周溝が残るのみである。石室もすべて石材が抜かれ、その抜き穴が確認できるだけである。

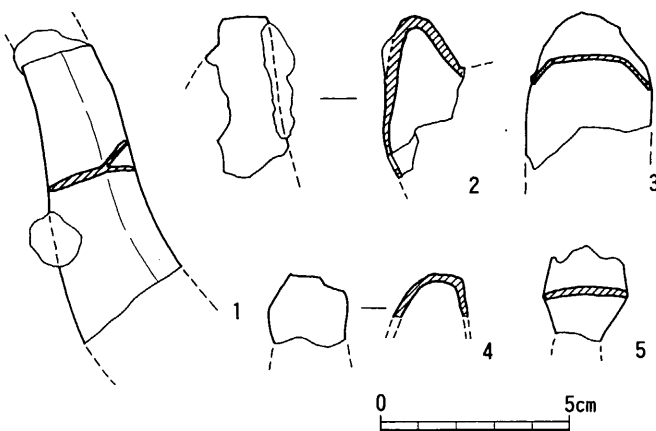


第225図 16号墳出土装身

2）墳丘

削平されて高さはわからない。周溝は全周し、その形から円墳であることがわかる。周溝はかなり凹凸があるが、幅約1.8m～3.0mで、2m前後の部分が多い。深さは30cm～40cmである。墳形は東西にやや長い円形で、外径で約18m～20m、内径で約14m～16mの大きさとなる。

具実測図（1/1） 3）石室



第226図 16号墳出土鉄器実測図（1/2）

すべて削平されて石室腰石の抜き取り穴が残るだけである。推定される石室はおおよそ主軸方向に長い長方形を呈し、内法の大きさに3.2m×2.0mである。

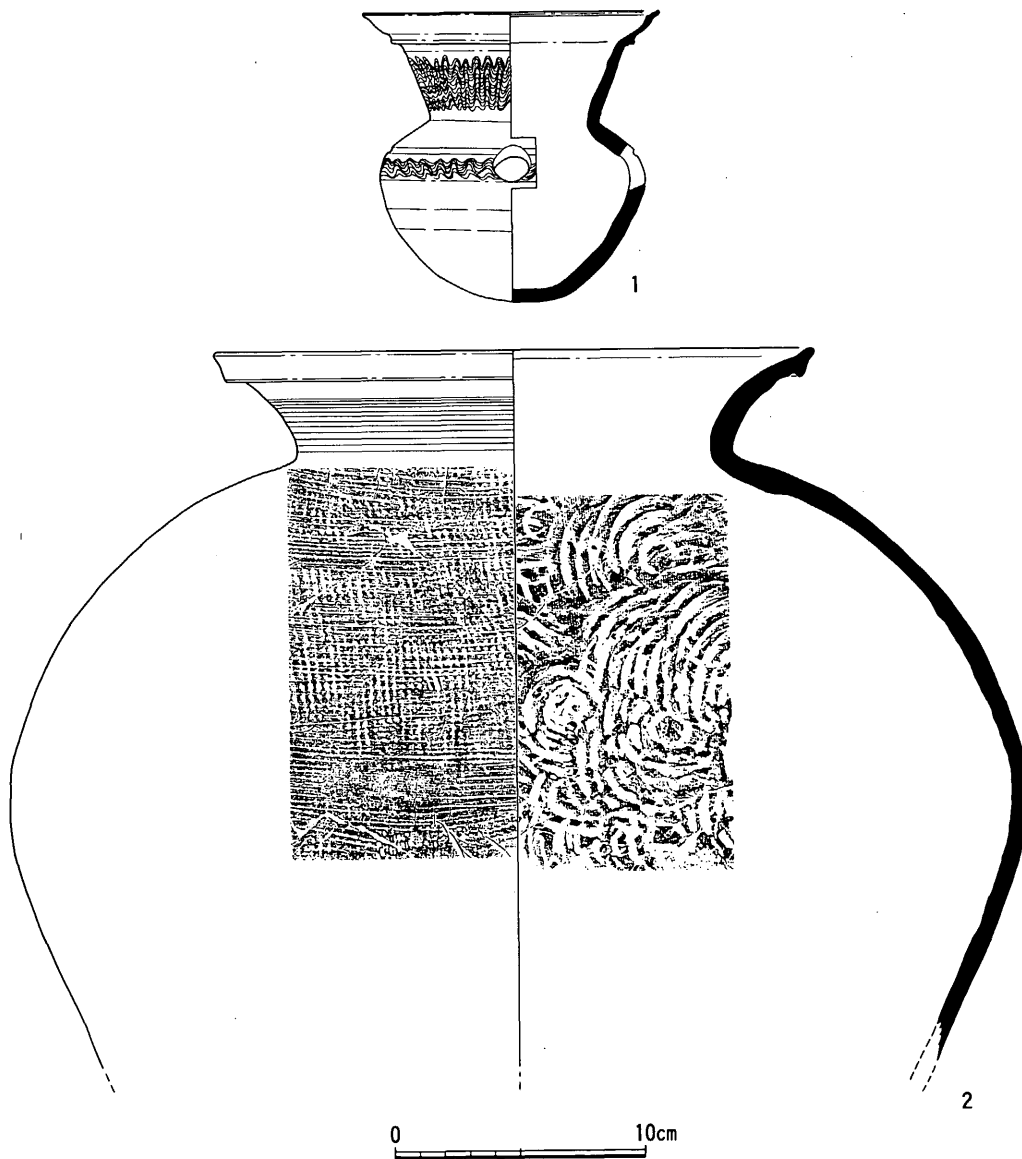
4）出土遺物

遺物は原位置を保っているものはないと思われる。なお、下記以外に縄文土器片、石鏃4、剝片等が出土している。

なお図示した土器は周溝出土である。

(石室抜き穴内出土遺物)

鉄器	鋤先	1
	用途不明品	4
須恵器	杯蓋	破片のみ 2
	杯身	同上 1

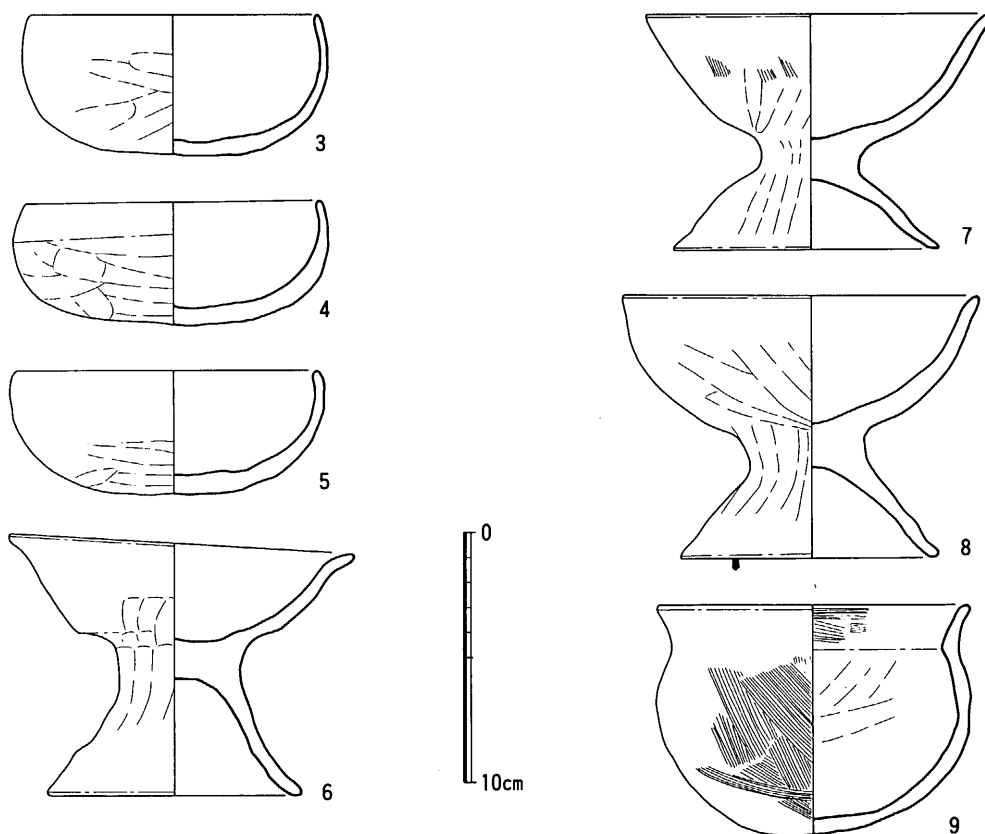


第227図 16号墳出土土器実測図① (1/3)

	高杯	同上 2
	甕	同上 9
土師器	甕	破片のみ 1

(周溝内出土遺物)

装身具	ガラス玉	2
	管玉	1 ~ 2
須恵器	杯蓋	2 個以上
	杯身	3 個以上
	高杯	1 個以上
	甗	1 個以上
	甕	胴部破片 65
土師器	碗	5 個以上
	蓋	1



第228図 16号墳出土土器実測図② (1/3)

高杯	5 個以上
甕	2 個以上
把手	1

装身具

濃緑色の管玉が1～2個体分出土しているが破碎されていて実測不可能である。

丸玉（第225図、図版112）

どちらも濃い青色のもので、1は径1.1cm、2は径7mmの大きさである。また、どちらも両端面を研磨して平坦面を作り出している。2には気泡の線が縦方向に入っているのが見える。

鉄器（第226図、図版122）

鋤先（1） 平面形がU字を呈する鋤先の小破片である。残存長8.3cmを測る。木柄の着装部は前と背の2面に分かれる。

不明鉄器（2～5） 残存長は、番号順に4.2cm、4.1cm、1.9cm、2.5cmである。

須恵器（第227図、図版103）

甕（1） 口縁部3分の2ほどを欠くが、完形に近い。口径が胴部最大径より大きい。頸部と肩部に櫛描波状文を施す。底部外面は平滑にしている。底部内面は棒状のもので上から突ついた痕がある。

甕（2） 中型の甕で、口縁部を二重口縁風に肥厚させる。頸部外面にはカキ目を施す。胴部外面は平行叩きの上を粗いカキ目状の調整を行う。内面は同心円状当て具痕が残る。

土師器（第228図、図版103）

碗（3～5） 底部外面をヘラケズリする。体部外面下半は強いナデと思われる。体部上半内外面はヨコナデ、底部内面は不定方向のナデを行う。底部外面にヘラ記号がある。

高杯（5～8） 6と7・8には若干の違いが見られる。6は脚部に比べ杯部が浅めで、口縁端部は外反する。脚部は比較的すんなりと広がって終わる。外面は平滑で調整の痕跡がわかりにくい。内面は脚端部付近をヨコナデしている。7・8は丸い杯部と、一旦外側へふくらんで広がる脚部からなる。杯部口縁部内外面と内面全体をヨゴナデ、その他の外面をミガキで平滑にしているようだ。脚部内面はナデ、ヨコナデである。8も7と同様な調整と思われるが、荒れていてややわかりにくい。杯部外面の一部に平行叩きのような痕跡があるが、叩きしめたものだろうか。脚部内面に井桁状のヘラ記号がある。

壺（9） 短く外反する口縁部と丸い胴部からなるもので、口縁部外面をナデ、内面と胴部外面をハケ目調整、胴部内面をナデるものである。

17号墳（図版50）

1) 立地と現況

14号、15号、16号、18号墳にとり囲まれるようにして、その中心に位置する。周溝が、15号

墳、18号墳の周溝と切り合い関係にある。本古墳も、著しい削平を受けている。

2) 墳丘

削平のため、墳丘の盛土は全く残っていない。周溝は南西の部分で途切れるが、端部と端部の間には浅い土坑がある。南側の周溝は、本来はこの部分までつながっていた可能性がある。周溝の端部は、いずれも直線的な形状を呈する。また、北西の部分は特に幅が広がっている。規模は、幅0.8m～3.5m、深さ10cm～40cmほどである。前述の通り、15号墳、18号墳の周溝と切り合い関係にあり、15号墳よりは新しいが、18号墳との新旧関係はわからなかった。推定される本来の墳丘の大きさは、外径で11m～12mである。

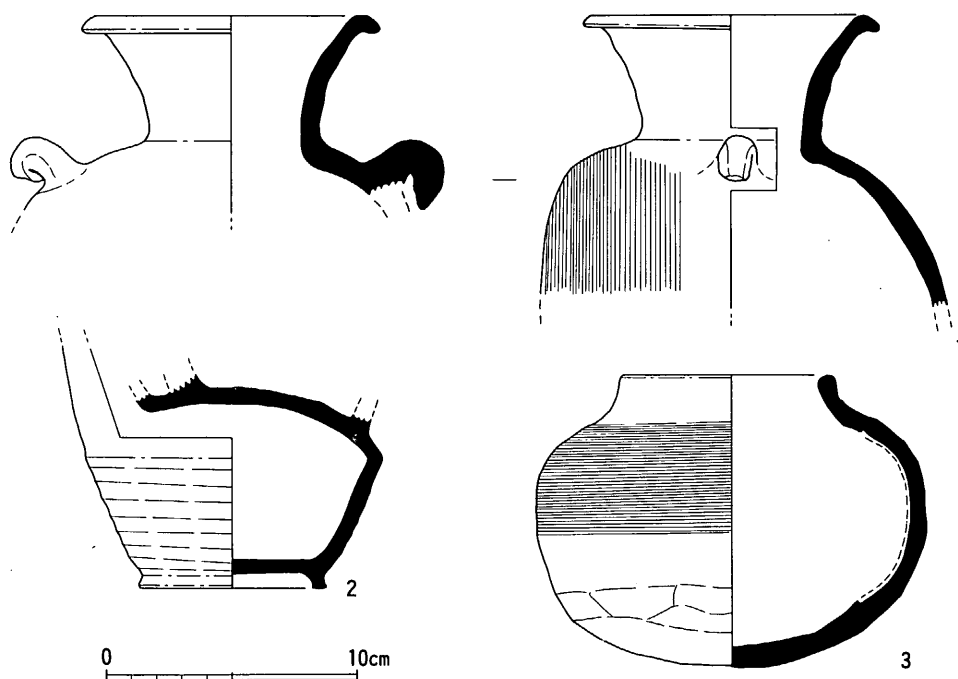
3) 石室

削平は、石室掘り方すら検出できない深さにまで及んでおり、また攪乱孔からの石材等の出土も一切なかった。従って、石室の構造、方向等は全く不明である。

4) 出土遺物

遺物はすべて周溝埋土中から出土した。下に記すものの他には、黒色土器、縄文土器、黒曜石、サヌカイトの剝片がある。なお、須恵器杯蓋・杯身は点数こそ多いが、流れ込みが明らかであるか小破片であったため、いずれも図示できなかった。

須恵器 杯蓋 16以上



第229図 17号墳出土土器実測図 (1/3)

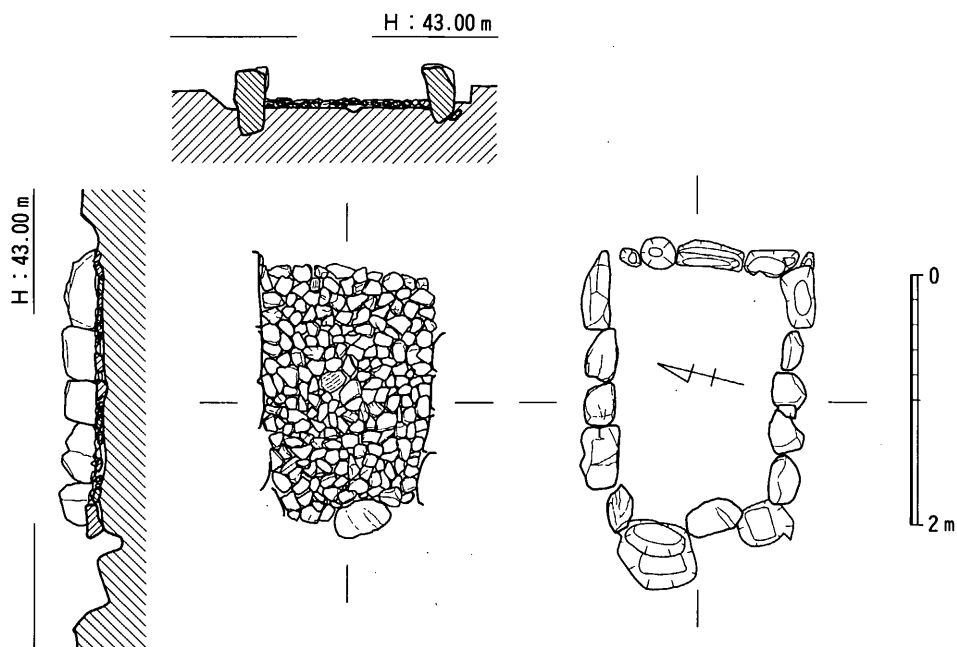
	杯身	11以上
	すり鉢	1
	提瓶	1
	平瓶	1
	壺	1
	甕	破片で97
土師器	椀	11
	甕	破片で14

須恵器（第229図、図版103）

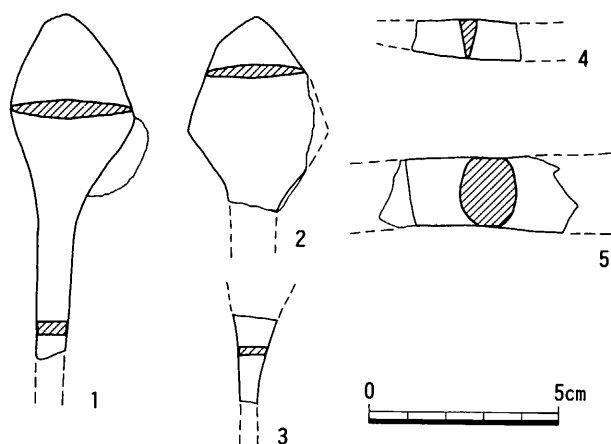
提瓶（1） 口頸部は緩やかに外反しながら伸び、口縁部はさらに強く外に開き、断面は三角形を呈する。胴部は殆どを欠くが、正面観は正円に近いと考えられる。側面は片面が平坦であり、もう片面は丸味を持つ。両面ともにカキ目調整を施す。口頸部の調整は内外面とも回転ナデである。肩部に鉤形の把手が貼り付けられるが、機能的な有効性には欠けている。

平瓶（2） 小型の平瓶であるが、口頸部の大半を欠く。体部の天井部は丸味を持ち、上面には断面方形の把手が付けられていたと考えられる。高台は貼り付けである。調整は、底部外面をヘラ切り後ナデ、体部外面は回転ヘラケズリ、天井部外面は回転ナデである。殆ど残っていない頸部には、ナデ調整が施されている。

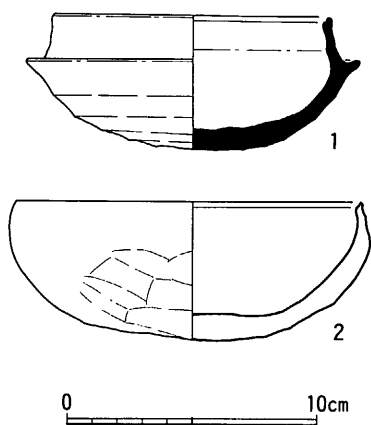
壺（3） 内傾する口頸部を有する短頸壺である。調整は、底部外面が回転ヘラケズリ、胴部



第230図 18号墳石室実測図（1/60）



第231図 18号墳出土鉄器実測図 (1/2)



第232図 18号墳出土土器実測図
(1/3)

外面下位に手持ちヘラケズリ、中位から上位にかけてはカキ目、他は回転ナデとナデである。頸部基部付近に重ね焼きの痕跡が見られるが、蓋をして焼成した可能性を思わせる。実測図では復元しているが、かなり焼きひずんでいる。

18号墳 (図版50・51)

1) 立地と現況

16号、17号、19号、20号墳ととり囲まれるようにして、その中心

に位置する。周溝が、17号墳、19号墳の周溝と切り合い関係にある。削平を受けているが、石室の腰石以下の部分は残っている。

2) 墳丘

削平のため、墳丘の盛土は全く残っていない。周溝は、西の部分で途切れ、両端部ともに丸い。また、南側の端部はやや幅が広がっている。規模は、幅0.8m～2.2m、深さ7cm～30cmほどである。前述のように17号、19号墳の周溝と切り合い関係にあるが、発掘調査の段階では切り合い関係はわからなかった。推定される本来の墳丘の大きさは、外径で10m～11mほどである。

3) 石室 (第230図、図版51)

主軸をN-75°-Eにとる。単室の横穴式石室である。奥壁と袖石、側壁の一部は既に失われており、腰石のみ残存する。これらの抜き跡から、玄室は主軸長1.95m、奥壁幅1.35m、玄室中位幅1.25m、玄門幅1.10mと復元でき、プランは奥壁側が広い逆台形を呈する。

右側壁は、幅約30cm～60cm、厚さ25cmの石材を5枚立てており、腰石上面のレベルはいずれも床面より25cm前後で揃えられている。左側壁も右側壁と同様の大きさの石材を用いる。玄門部は袖石は失われていたものの、框石が残存していた。これを挟むように袖石の抜き跡が見られるが、これらは玄室の中軸線よりやや北寄りに付けられている。床面には全面に敷石が敷き詰められており、敷石のレベルはほぼ水平となる。

4) 出土遺物

遺物は主に周溝埋土中から出土したが、石室埋土中からのものも若干ある。下に記するものの他には、縄文土器、弥生土器、黒曜石の剝片、白磁、近世土器が出土した。出土量はいずれも少ない。

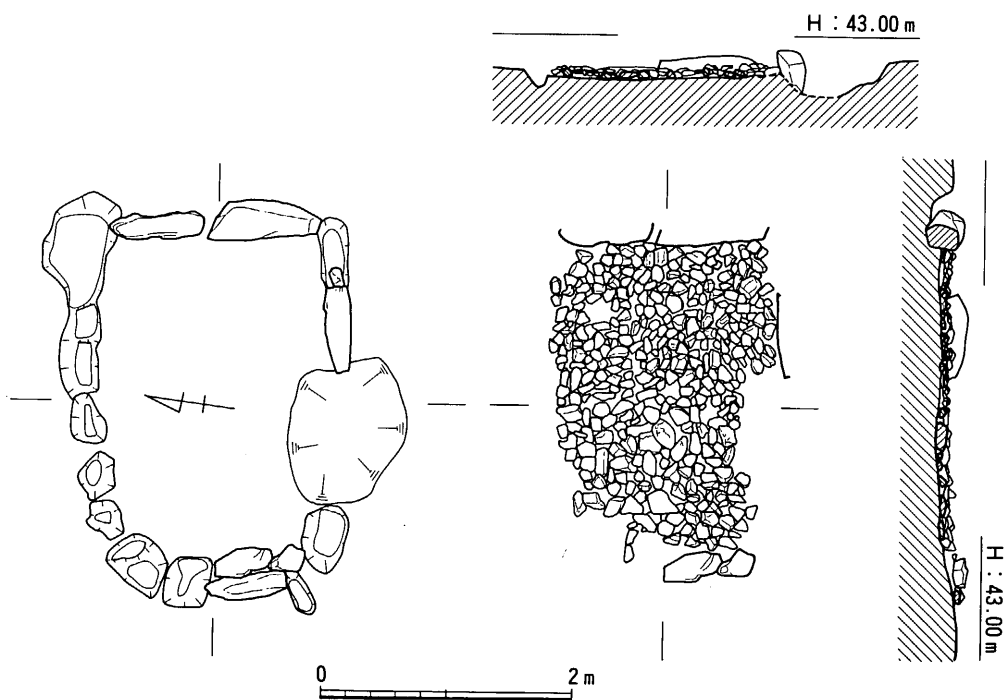
鉄器	鏃	3
	刀子	2
須恵器	杯蓋	1
	杯身	2以上
土師器	椀	1
	甕	破片で21

鉄器（第231図、図版123）

いずれも石室の敷石上から出土したものである。

鏃（1～3） 1・2は圭頭式に属するものである。1は残存長9.0cm、鏃身部幅3.2cmを測る。2は五角形の形をよくとどめている。残存長5.1cmを測る。3も圭頭式に属するものかと思われるが、小破片のため不詳である。

刀子（4・5） 4は刃部のみの小破片で、残存長2.9cm、5は殆どが茎部で、わずかに残る



第233図 19号墳石室実測図（1/60）

刃部は断面形を図示することができない。残存長は5.3cmである。

須恵器（第232図、図版103）

杯身（1） 石室埋土中から出土したものである。底部外面に広範囲の回転ヘラケズリを施し、他の部分は回転ナデで仕上げる。立ち上がりの端部内面には段が付く。

土師器（第232図、図版104）

碗（2） 周溝埋土中から出土したものである。底部外面に手持ちヘラケズリを施し、他の部分を回転ナデとナデで仕上げる。

19号墳（第233図、図版52・53）

1）立地と現況

13号・14号・17号・18号・20号墳にとり囲まれるようにして位置するが、本古墳の北西側にはほとんど遺構のない部分が広がる。石室の中心間の距離は、18号墳とで約12m、20号墳とでは約21mである。墳丘はすでに削平を受けており、石室の残りは極めて悪い。

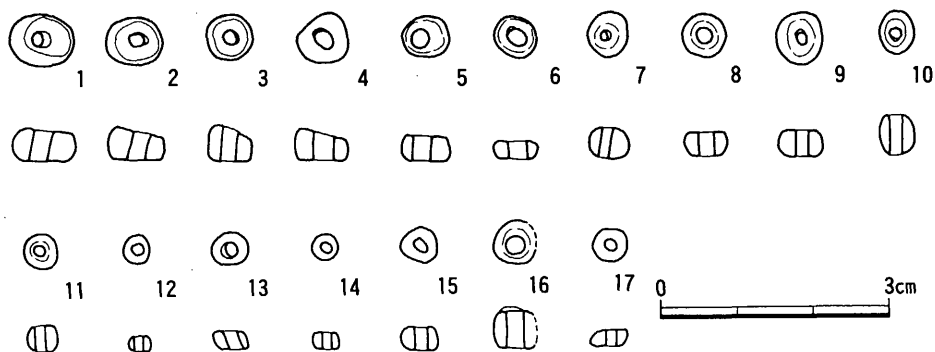
2）墳丘

前述のように削平を受けており、墳丘の盛土は全く残っていない。周溝は北西部で途切れ、端部の少し手前の部分で幅が広がっている。幅は0.9m～3.5m、深さは15cm～30cmを測る。18号墳の周溝と切り合い関係にあるが、発掘調査時には新旧関係がわからなかった。推定される本来の墳丘の大きさは、外径で約15mである。

3）石室（第233図、図版52）

石室の石材は殆ど抜き取られており、奥壁と左側壁の一部のみ残存している。床面に残った敷石の範囲や抜き跡から、玄室は幅1.68m～1.46m、長さ2.57mの規模をもち、主軸はN-82°-Eにとる単室の横穴式石室と推測される。

奥壁は腰石のみ現存する。長さ約80cm～90cmの石を2つ据えて腰石とし、その上面は床面の敷石より約10cmの高さで揃えられている。袖石は左側のみ現存しており、高さ20cm、幅約30cmである。袖石の内側には幅約50cmの石材を据えており框石としている。これから見ると、玄門



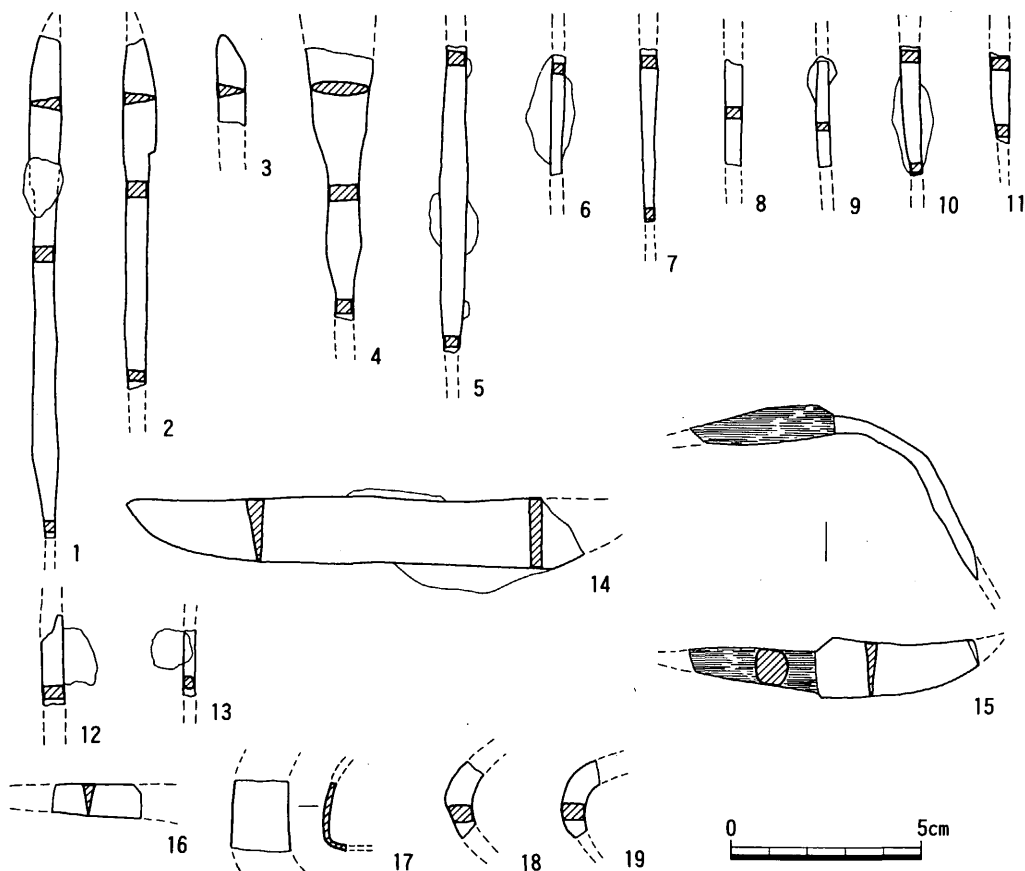
第234図 19号墳出土装身具実測図（1/1）

は18号墳と同様やや左寄りに付けられている。さらに出口側には長さ60cmの石材を据えており、境としている。床面は敷石がしきつめられており、玄門側に向かってゆるく上がっている。

4) 出土遺物

ガラス玉と鉄器は主に石室の敷石上、または敷石の間から、土器は主に周溝埋土中から出土した。下に記すものの他には、縄文土器、黒曜石・サヌカイトの剥片、鉄滓が出土した。中でも縄文土器は、すべて破片であるが、71点出土した。

装身具	ガラス玉	35以上
鉄器	鏃	5以上
	刀子	3以上
	用途不明	2
須恵器	杯蓋	3以上
	杯身	3
	高杯	2



第235図 19号墳出土鉄器実測図 (1/2)

	甕	1 と破片で13
土師器	杯	1
	椀	7 以上
	壺	1
	甕	1 と破片で40

装身具

小玉・丸玉（第234図、図版112）

ガラス製である。完形品35個と破砕した状態で数個分出土した。図示したのはそのうちの17個で、1～15が石室出土、16～17は石室の石材抜き取り穴からの出土である。1・2は比較的大きなもので、平面形が正円を呈さず楕円気味で両端が平坦になるものである。色は青色である。3・4は前者よりやや小さめである。色は青色を呈する。この類は他にもう1個ある。5・6はやや扁平気味になるものである。やはり青色である。7・8は5・6に比べ孔径が小さめで、また両端面の平坦部が少なく、全体に丸味のあるものである。やはり青色を呈し、他に似た形のものが7個ある。9・10は緑がかった青色を呈するのが特徴で、図示していないものの中にも7個ある。11・12は小さくて青色を呈するもので他に4個ある。13・14は小さくて緑がかった青またはうすい青色を呈するもので他に1個ある。15は緑がかった青でやや平たい。16は青色でやや背が高い。17は青色で側面形が平行四辺形状にゆがむものである。

鉄器（第235図、図版123）

いずれも石室内より出土したものである。

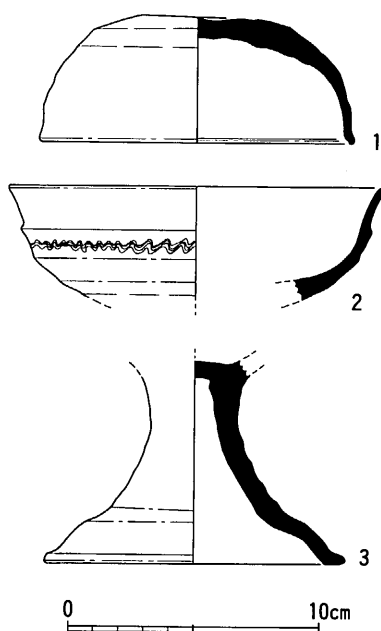
鏃（1～13） 1～3は片刀箭式に属する。1は篋被部と基部の境が冷明瞭である。残存長は13.3cm、鏃身部幅0.8cmを測る。2は、残存長9.2cm、鏃身部幅0.9cmを測る。4は斧箭式かと思われるが、鋒を欠くために詳細はわからない。篋被部と基部の境は明瞭である。残存長7.2cm。5は篋被部から基部にかけての破片、6～13は基部の小片である。

刀子（14～17） 14の関は刃に対して斜行する。残存長は12.0cm。15は刃側と背側の両側に関を持つ。基部には木質が残る。土圧のためか著しく屈曲する。16は刃部の小破片。17は把をおさえる縁金具の破片である。

不明鉄器（18・19） 素環頭の破片であろうか。

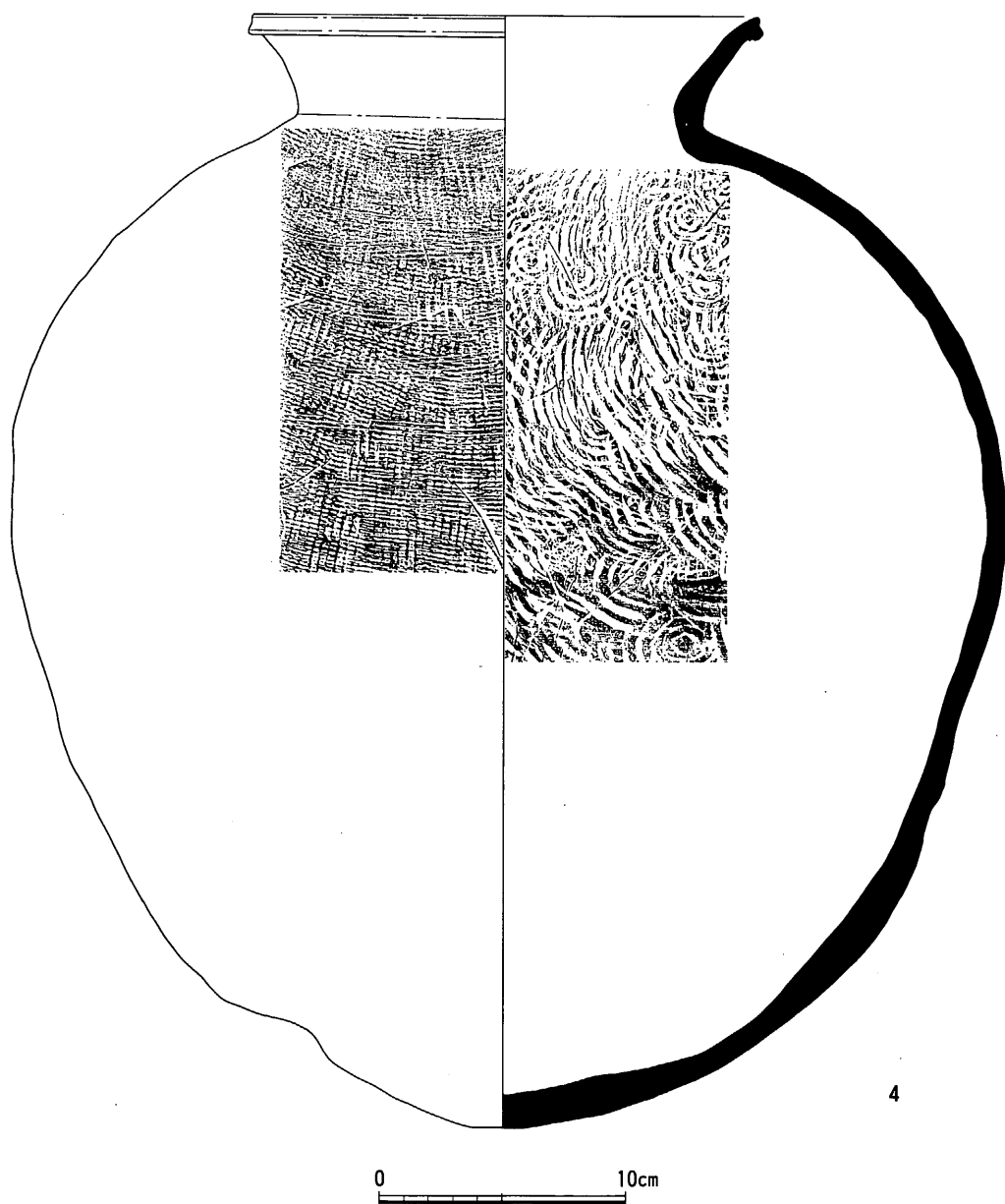
須恵器（第236図、図版104）

杯蓋（1） 焼成不良のため器表面が磨滅しているが、



第236図 19号墳出土土器実測図①

(1/3)



第237図 19号墳出土土器実測図② (1/3)

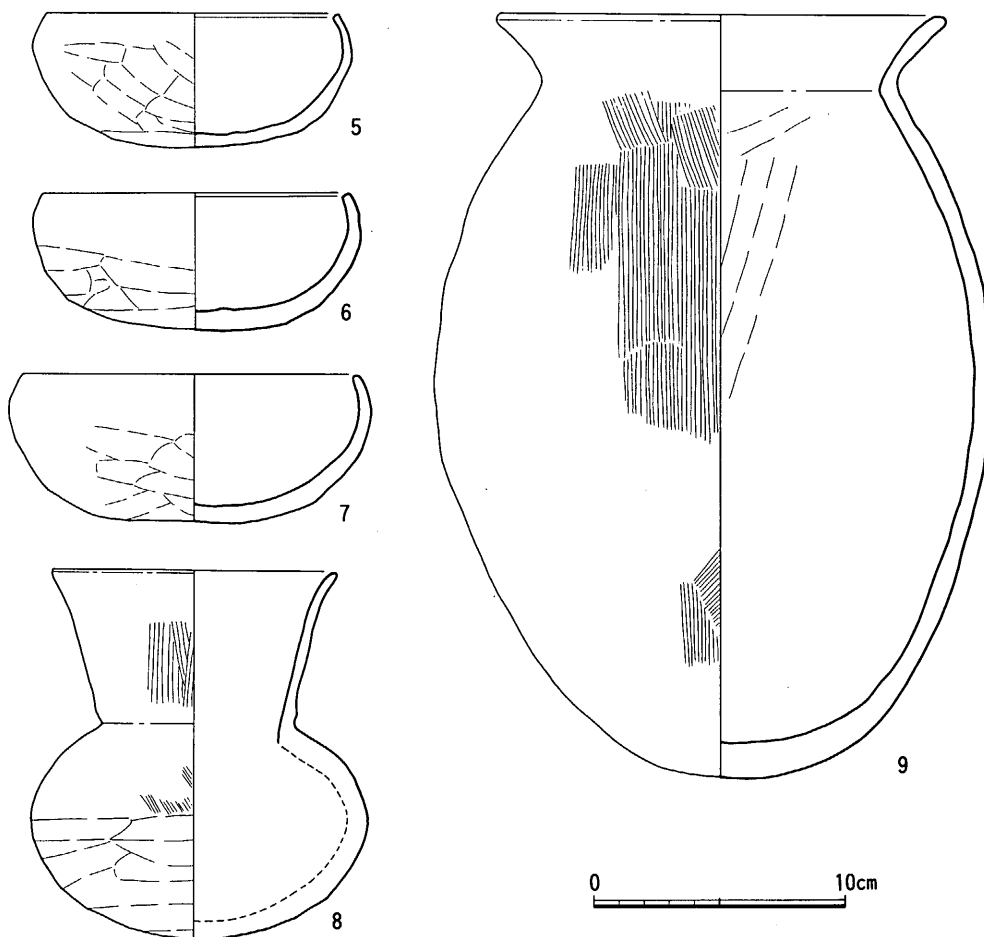
調整技法の観察は可能である。天井部外面に回転ヘラケズリを施し、他の部分を回転ナデとナデで仕上げる。

高杯（2・3） 2は無蓋高杯の杯部のみを図上復元した。体部中位に明瞭な稜があり、その直下に波状文をめぐらせる。調整は内外面ともに回転ナデである。口縁部内面には重ね焼きの痕跡が明らかに認められる。3は脚部のみ残る。端部の接地面を平坦に作る。調整は内外面とも回転ナデである。内外面ともに灰をかぶっており、いずれも一部自然釉化している。

甕（4） 完形品である。口頸部の内外面ともに回転ナデ調整を施し、胴部と底部は平行叩きで整える。胴部中位以上の部分は、平行叩きの上からカキ目調整を加える。内面には同心円状の当て具痕が残る。窯内で炎を直接受けたためか器表の色調が一定せず、焼きひずみもある。

土師器（第238図、図版104）

椀（5～7） いずれも底部外面に手持ちヘラケズリを施し、他の部分を回転ナデとナデで仕

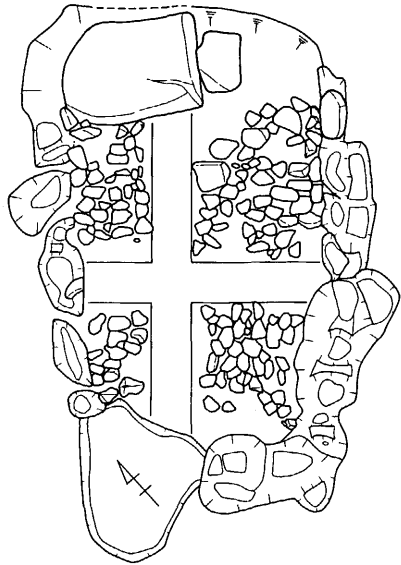


第238図 19号墳出土土器実測図③（1/3）

上げる。5・6の外表面は燻したように黒くなっており、7の外表面には黒斑がある。

壺（8） 扁球形の胴部に、長く伸びる口頸部がつく壺である。底部外面は叩きのようにも見える板状圧痕の後手持ちヘラミガキを施し、胴部中位までは手持ちヘラケズリのみで調整する。胴部上位には斜方向のハケ目の後回転ナデ、頸部外面は縦方向のハケ目の後回転ナデを施す。頸部内面は回転ナデのみである。全体的に非常に丁寧な作りであるが、器表面が部分的に燻されたように黒くなっている。

甕（9） 丸底で胴部の長い甕である。底部が特に厚い。各部の調整は、口頸部内外面が回転ナデ、胴部外面がハケ目、胴部内面がヘラケズリである。胴部外面には黒斑がある。



第239図 20号墳石室復元図

20号墳

1) 立地と現況

13号～29号までの17基の古墳群のほぼ中央に位置する。すでに削平を受けており、石室の石材は殆んど失われていた。本古墳の西側は、遺構が少い。

2) 墳丘

削平のため、墳丘の盛土は全く残っていない。周溝はほぼ全周するが、南西の部分で幅0.7m～1.5mほどにわたって陸橋状に途切れる。周溝の規模は、幅0.6m～4.5m、深さ15cm～50cmを測るが、北東方向、すなわち石室の奥壁の後側で、幅が非常に狭くなる。また、両端部は比較的深くなっている。北側の端部の近くには攪乱の溝があり、中からは古墳の石材と思われる石が出土した。推定される本来の墳丘の大きさは、外径で19m～20mである。

3) 石室（第239図、図版54）

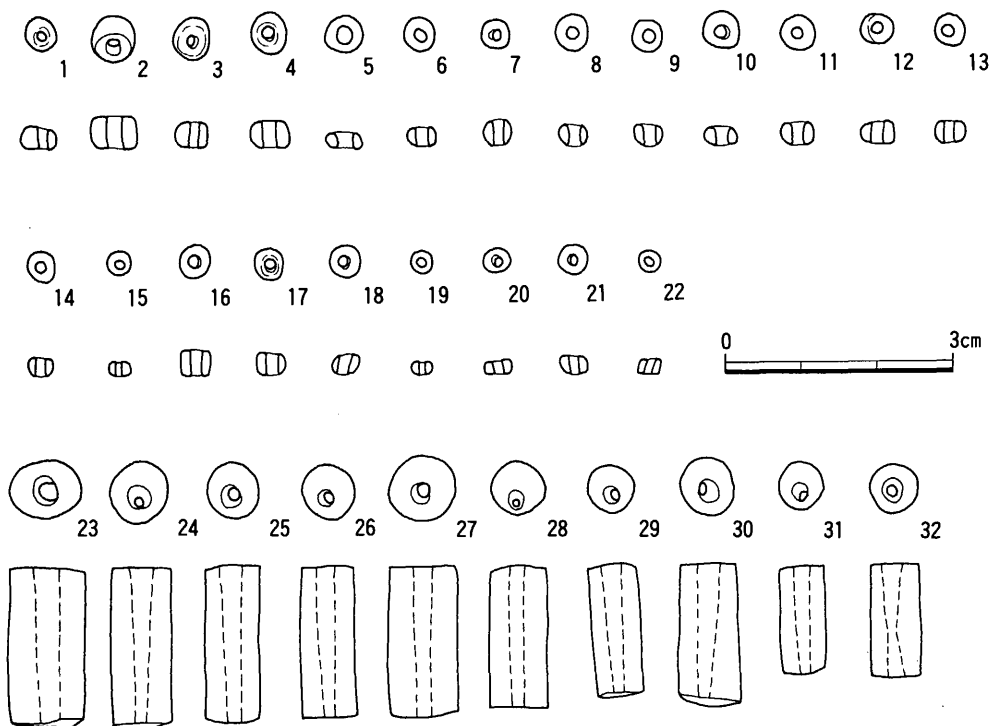
石室の石材は殆ど抜き取られており、腰石も残っていない状態である。わずかに奥壁に使用された石材が残っていたが、それも倒された状態であった。床面に残った腰石の範囲や腰石の抜き跡から、玄室は幅1.57m～1.97m、長さ2.62mの規模を持ち、ほぼ南西方向に開口する単室の横穴式石室であると推測される。主軸の方向はN-41°-Eである。（なお本古墳については、遺憾ながら実測図を紛失してしまったため、写真から復元した平面図のみを掲載した）

4) 出土遺物

装身具と鉄器は殆どが石室の敷石上または敷石の間から出土した。これに対して土器の殆ど

は周溝埋土中から出土した。下に記するものの他には、縄文土器、弥生土器、黒曜石・サヌカイトの剥片、石器の半製品が出土した。特に縄文土器はすべて小片であるが、295点に達した。

装身具	ガラス玉	181以上
	管玉	11
鉄器	刀	1以上
	鏃	11以上
	刀子	2以上
須恵器	杯蓋	18以上
	杯身	12
	鉢	1
	甕	破片で30
土師器	碗	2以上
	皿	1
	甑	1
	甕	2と破片で66



第240図 20号墳出土装身具実測図 (1/1)

装身具

小玉（第240図、図版112）

ガラス製である。完形品181個と破碎したもの2個体分くらいが出土したが、色と大きさと形の特徴によっておおまかに6つに分類し、それらのうちから22個をピックアップして図示した。1～4はうす緑を呈し、径5mm～6mmのものである。両端面は平坦である。全部で27個ある。5～11はうす緑を呈し、径4mm～5mmのもので、両端面は丸味を持つものである。全部で21個。12～15は緑色を呈し、径3mm～4.5mmのものである。両端面は平坦面を作り出さない。全部で74個。16は緑がかった青で径4mmほどのもので全部で3個ある。17～21は青色を呈し、径3mm～4mmの小さいものである。全部で55個。22は暗赤褐色をしたもので、これ1個である。

管玉（第240図、図版112）

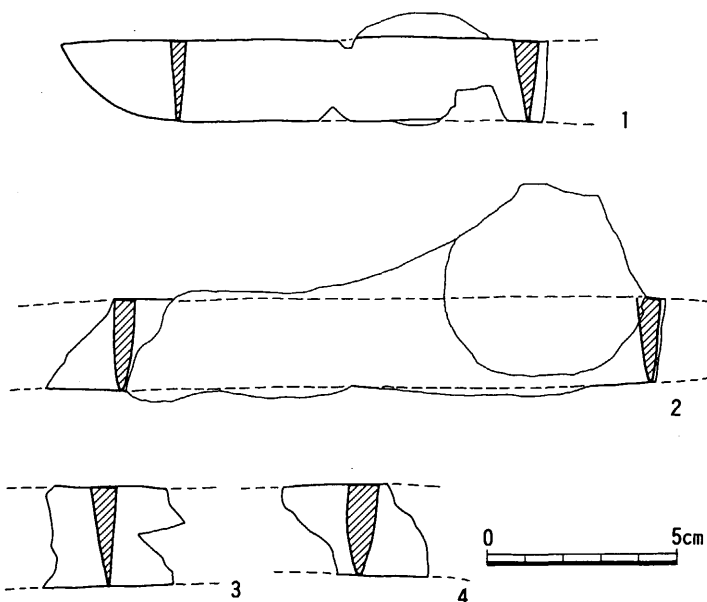
碧玉製で、23と29は濃い緑色を呈するが、その他はうすい緑色である。破碎されたうす緑のものがもう1個分あり、全部で11個出土したことになる。32は両側からの穿孔であるが、他は片側からの穿孔である。

鉄器（第241・242図、図版124）

刀（1～4） 1は先端部の破片である。残存長12.3cm、刃幅2.1cm～2.2cm、背厚0.4cm～0.6cmを測る。2は錆が著しい。残存長16.1cm、刃幅2.2cm～2.4cm、背厚0.6cmを測る。3は残存長3.8cm、4は3.7cmを測る。ともに小破片である。

鏃（5～23） 5～9は圭頭式に属すると考えられる。5は箆被部に樹皮巻と木質が残る。6は箆被部から基部にかけて木質が残る。9は5～8に比して鏃身部幅がやや狭い。10～23については、樹皮巻と木質が残るのが10・14・21・22、樹皮巻のみ残るのが19、木質のみ残るのが17・18・20・23である。特に23は矢柄の大部分が残っている。

刀子（24～26） 24・25は刃部の破片で、残存長はそれぞれ5.7cm、2.1cmを測る。26は基部の破片



第241図 20号墳出土鉄器実測図①（1/2）

で、目釘が残る。残存長は2.8cmである。

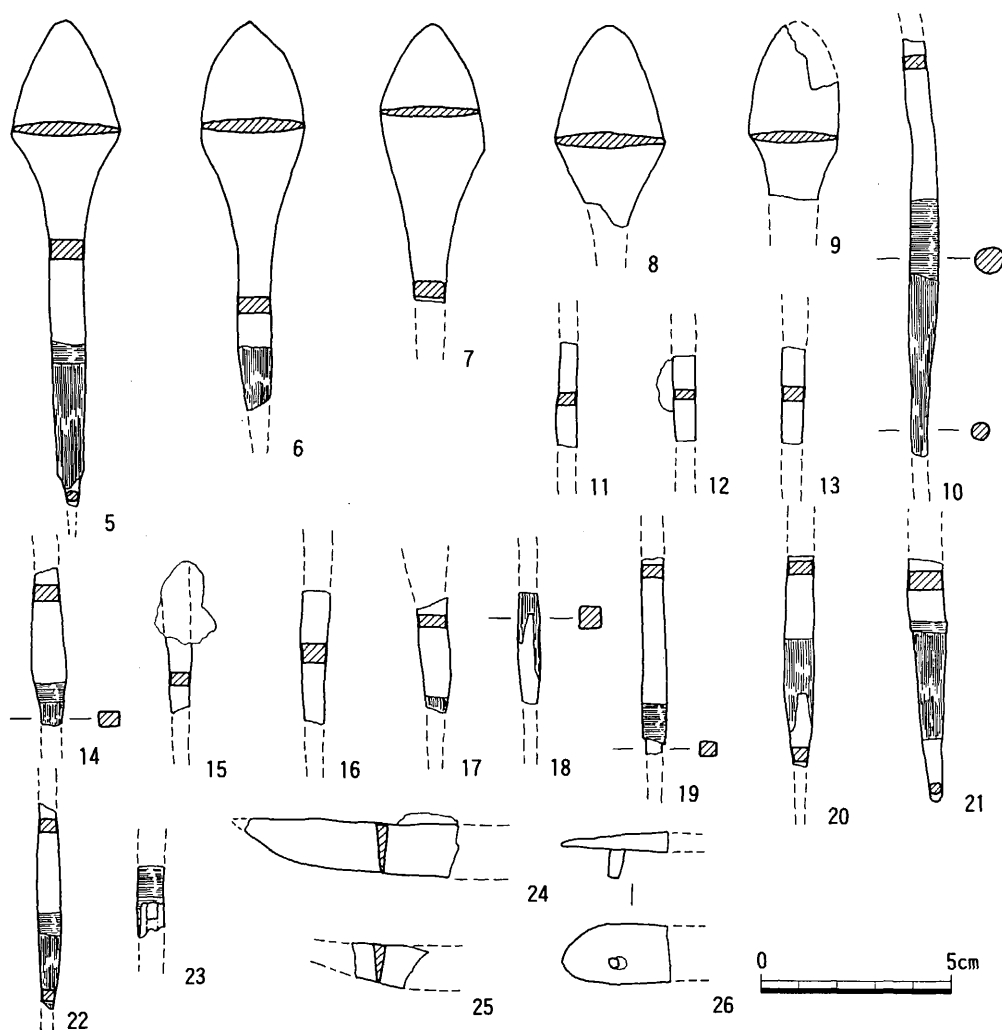
須恵器（第243図、図版104）

杯蓋（1） 天井部外面には回転ヘラケズリを施し、他の部分は回転ナデで仕上げる。天井部と体部の境は稜をなさず、沈線によって分けられる。口縁端部内面の段はにぶい。

杯身（2） 底部外面に回転ヘラケズリを施し、他を回転ナデで仕上げる。立ち上がり端部内面の段はにぶい。受部内面には重ね焼きの痕跡が認められる。

土師器（第243図、図版105）

椀（3） 底部外面に手持ちヘラケズリを施し、他を回転ナデとナデで仕上げる。底部外面にはヘラ記号がある。器表面がやや磨滅している。

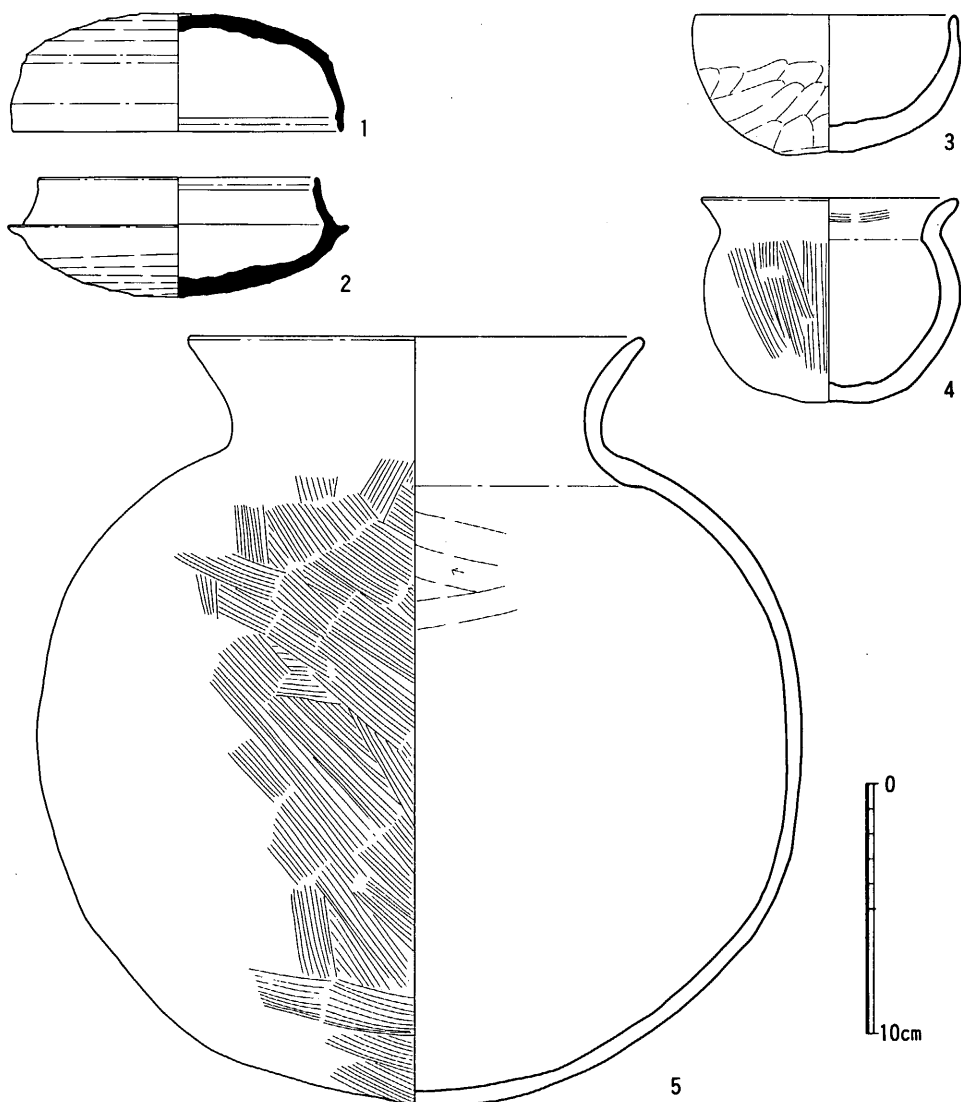


第242図 20号墳出土鉄器実測図②（1/2）

甕（4・5） 4は口径10.1cm、器高8.2cmの小型の甕である。調整は、口頸部外面と内面の中位までを回転ナデ、口頸部内面下位は横方向のハケ目、胴部外面はハケ目、内面はヘラケズリの後、下位のみナデを施す。5は丸味の強い胴部に短い口頸部が付くものである。各部の調整は、口頸部内外面は回転ナデ、胴部外面がハケ目、胴部内面はヘラケズリである。胴部外面に黒斑がある。

21号墳

1) 立地と現況



第243図 20号墳出土土器実測図（1/3）

20号墳の北西に位置する。両者の距離は、石室の中心間で約17mを測る。本古墳の北側と西側には遺構の少ない部分が広がる。すでに削平を受けていたが、石室のある部分が、周囲よりもやや高いことから、築造前に地山整形を行ったことがうかがえる。しかし石室の残りは悪く、床面も半分ほどは破壊されていた。

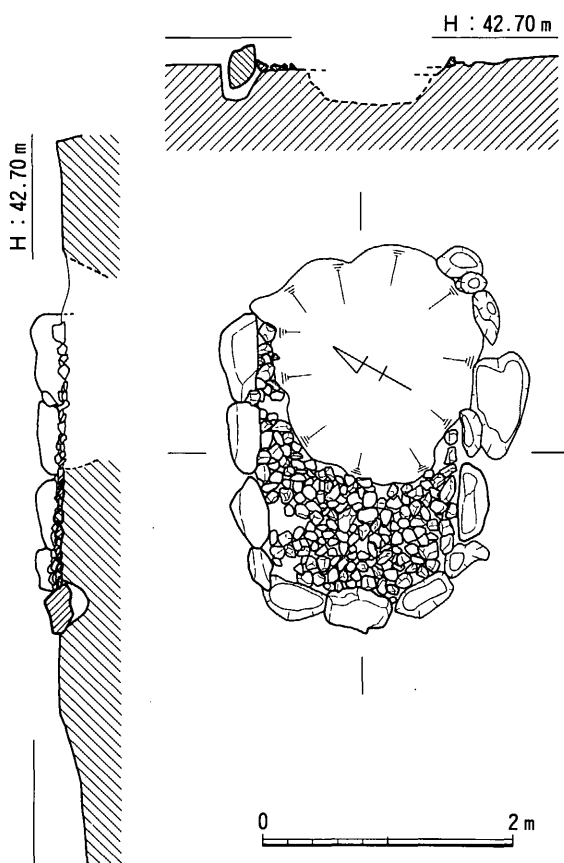
2) 墳丘

削平のため、墳丘の盛土は全く残っていない。周溝は、北と西の2ヶ所で途切れる。規模は幅1.3m～3.5m、深さ15cm～40cmほどであるが、南側の端部の手前で幅が広がる。推定される本古墳の本来の大きさは、外径で11m～12mである。

3) 石室 (第244図、図版55)

主軸をN-61.5°-Eにとる単室の横穴式石室である。玄室中ほどから奥壁にかけて攪乱を受けているため右側壁の腰石までと框石しか残っていない。

右側壁には高さ約30cm、長さ60cm程の石材を横位に、4石用いている。框石の両側には、幅20cm、深さ10cm程の掘り込みが認められ、袖石の抜き跡と思われる。敷石は全面に敷きつめら



第244図 21号墳石室実測図 (1/60)

れていたと思われるが、攪乱のため大半を失っている。

4) 出土遺物

土器の殆どは周溝埋土中から出土したが、鉄器は石室の敷石上と周溝埋土中の両方から出土した。下に記すものの他の遺物には、縄文土器、弥生土器、黒曜石・サヌカイトの剥片がある。中でも縄文土器は、すべて小片ではあるが、総数310点にのぼった。

鉄器	鏃	4以上
	刀子	1
	鋤先	1
須恵器	杯蓋	6以上
	杯身	6
	高杯	2
	把手付鉢	1
	甕	1と破片で49
	硯(?)	1
土師器	碗	3以上

- | | |
|---|-------|
| 蓋 | 1 |
| 壺 | 2 |
| 甕 | 破片で18 |

鉄器 (第245図、図版125)

1～7は石室内から出土、8～11が周溝埋土中より出土したものである。

鏃 (1～5・8～11) 1は全容が不詳だが、柳葉式に属するものであろうか。残存長3.5cm。他のものについては、樹皮巻と木質の両方が残るものが4、樹皮巻のみ残るものが3・9・10、木質のみ残るものが5である。

刀子 (6) 残存長10.7cmで、把をおさえる縁金具が残る。茎部には木質が残る。

鋤先 (7) 平面U字形のものの小破片である。残存長10.5cmを測る。木柄の着装部は前と背の2面に分かれる。

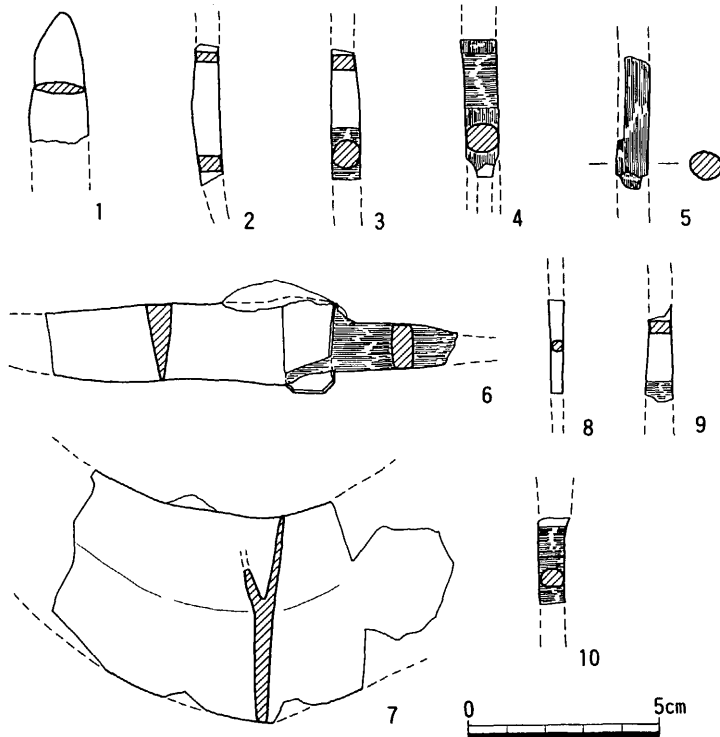
須恵器 (第246図、図版105)

把手付鉢 (1) 平底の鉢の胴部側面に2本の把手を貼り付けたものである。底部の5分の1ほどを欠くが完形に近い。各部の調整は、口縁部内外面が回転ナデ、胴部外面上半部はハケ目、下半部はハケ目の後ごく浅い沈線を入れる。胴部内面にはヘラケズリを施し、把手は貼り付け後ナデとハケ目調整を加える。以上のように調整は土師器において広く見られるものであるが、焼成は良好で内外面とも灰色を呈する。

土師器 (第246図、図版104・105)

椀 (2・3) 2は器表が磨滅しており、調整は不明である。3は底部外面に手持ちヘラケズリを施し、他を回転ナデとナデで仕上げる。底部外面にはヘラ記号がある。

壺 (4・5) とともに丸底である。4の口頸部内面の下部にはハケ目調整を施す。それ以外の口頸部の調整は内外面とも回転ナデ、胴部外面はハケ



第245図 21号墳出土鉄器実測図 (1/2)

目、内面がヘラケズリである。5は口頸部外面に回転ナデ、内面にハケ目を施す。胴部は磨滅のため調整不明であるが、外面には部分的に手持ちヘラケズリの痕跡が認められる。

22号墳（第247図、図版56）

1) 立地と現況

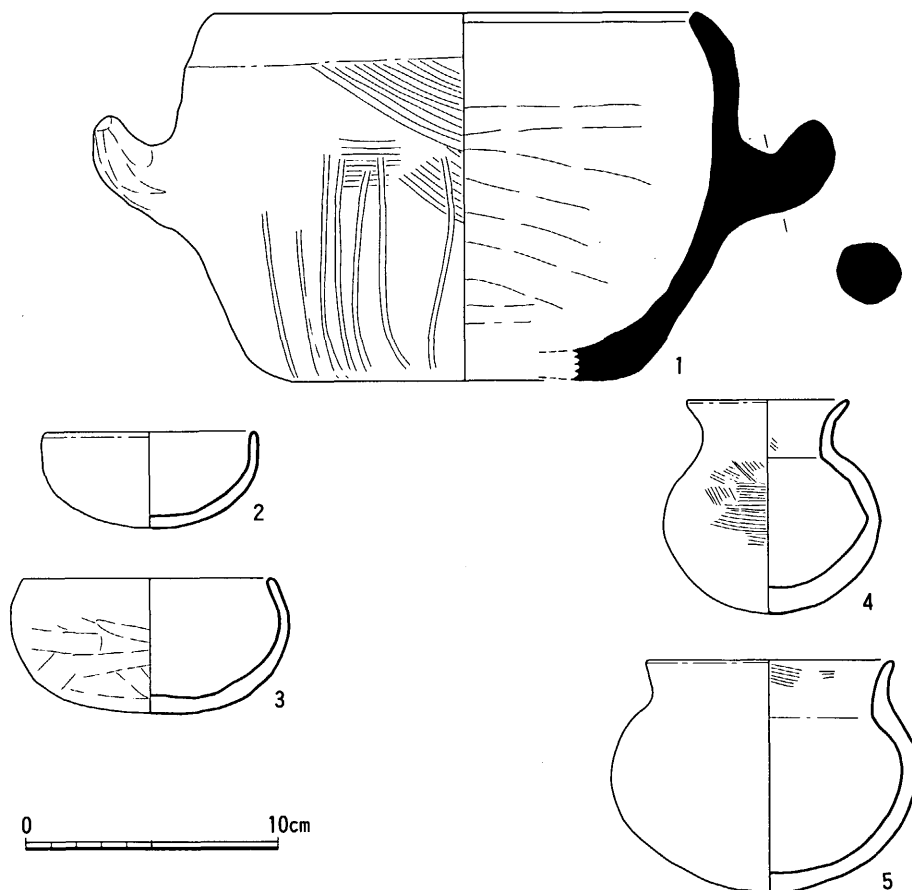
20号墳のすぐ北に位置する。墳丘はすべて削平されて、周溝が残るだけである。西側3分の1は明確ではない。

2) 墳丘

削平のため高さはわからない。周溝は全体が判明しないが、円形に巡り、円墳であることがわかる。周溝の幅は1.2～2.8mと一定しないが、2mほどの部分が多い。深さは30～50cmである。直径は外径で約14m、内径で約10mである。

3) 石室

前述したとおり削平されており、詳細は不明である。



第246図 21号墳出土土器実測図 (1/3)

4) 出土遺物

原位置は保っていないが、須恵器、土師器、それに縄文土器片、石鏃、剥片が出土した。古墳に伴うと考えられるものを列挙すれば以下のとおりである。なお、図示した土師器は周溝出土である。

須恵器	杯蓋	2
	杯身	1
	鉢	1
土師器	碗	2個以上

土師器 (第248図、図版105)

碗 (1・2) 大きさは違うが、良く似た形態の碗である。体部は内外面ヨコナデ、底部内面はナデ、外面はヘラケズリする。また、1の底部外面は大きく黒変しているが、2は変化がない。両者とも底部外面に「×」印のヘラ記号を付す。

23号墳

1) 立地と現況

22号墳の東隣りに立地する。墳丘は削平されているが、石室の敷石が残る。

2) 墳丘

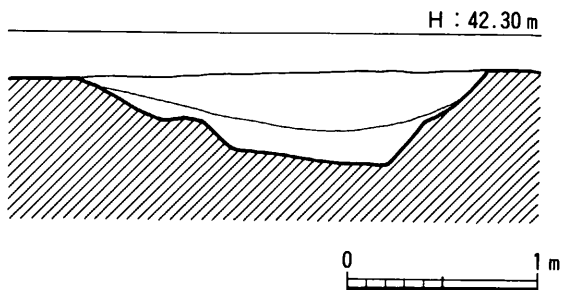
削平されて高さはわからない。周溝は東南側と北東の一部が陸橋状になって切れる部分があるが、円形にめぐり、円墳であることがわかる。また、西側の周溝は明確でない。幅は最も狭い部分で1mであるが、おおよそ2～3mである。深さは20～60cmと一定しない。周溝外径で直径約16.5m、内径で11m～11.5mの大きさである。

3) 石室 (第249図、図版57)

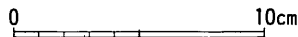
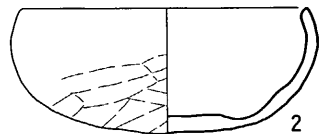
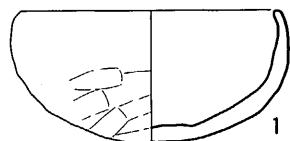
框石と敷石の3分の2ほどが残っている。羨道や墓道の状況がわからないが、西側に開口する横穴式石室と考えられる。腰石の抜き取り穴から見て、奥壁側が開く羽子板状の平面形を成すものと思われ、長軸長2.8m、幅は奥壁側で約2m、玄門側で1.5mほどの規模が推定できる。敷石は墓坑底に約10cmの厚さで褐色土まじりの暗灰褐色土を入れて、その上にこぶしよりやや大きめの石を敷き並べている。中央よりやや奥壁よりで管玉2個が出土した。

4) 出土遺物

石室内からは前述の管玉以外に鉄器が出土した。また、周溝内から須恵器、土師器、それに



第247図 22号墳周溝断面図 (1/40)



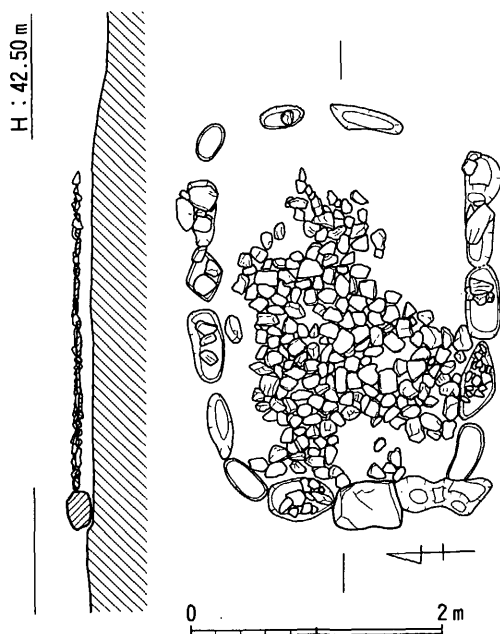
第248図 22号墳出土土器実測図 (1/3)

縄文土器片多数と剝片が出土した。古墳に伴うと考えられる遺物は以下のとおりである。なお、図示した土器は、11の高杯が石室前部出土で、残りはすべて周溝出土である。

装身具	管玉	2
鉄器	鏃	1以上
	刀子	1
須恵器	杯蓋	6個以上
	杯身	1個以上
	甕	1
	蓋	1
	甕	個数不明
土師器	碗	2個以上
	鉢	1
	甕	個数不明
	甕	個数不明
	手捏ね土器	1

装身具

管玉（第251図、図版113）



第249図 23号墳石室実測図 (1/60)

1はうすい緑色をした碧玉製で、長さ2cm、直径7mm、孔径3mmの大きさである。両面穿孔である。2は濃い緑色をした碧玉製で、長さ1.4cm、直径5mm、孔径3mmの大きさである。やはり両面穿孔と思われる。外面には光沢がある。

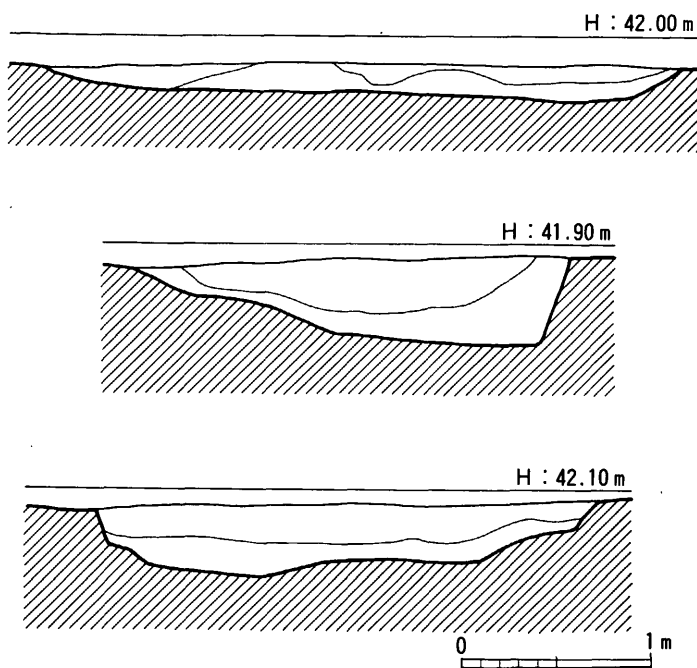
鉄器（第252図、図版124）

鏃（1・2） 1は片刃箭式に属するもので、残存長3.6cmを測る。2は残存長3.6cmで、全体に木質が残る。

刀子（3） 刃部の小破片で、残存長4.5cmを測る。

須恵器（第253図、図版106）

杯蓋（1～6） 1・2は天井部外面を粗い手持ちのヘラケズリを行い、3は軽くナデるだけである。4は天井部外面の2分の1ほど



第250図 23号墳周溝断面図 (1/40)

を回転ヘラケズリし、その他を回転ナデ、ナデで仕上げる。5は天井部と体部の境に沈線を持ち、また、口縁端部内面に段を有する。調整は器面の荒れのため不明である。6は4分の1ほどの破片であるが、天井部外面を回転ヘラケズリする。

杯身 (7~10) 8は2分の1ほどあるが、その他は小破片である。7と10は立ち上がりが比較的高く、底部外面を回転ヘラケズリする。8・9は立ち上がりが低く内傾し、底部外面を手持ちヘラケズリする。

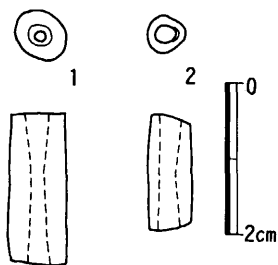
高杯 (11) 2条の沈線を持ち、やや角張る杯部と透しのない脚部からなる。杯部底部外面にカキ目を施す。脚部外面にヘラ記号がある。

甕 (12) 胴部最大径より口径の方が大きく、頸部の太い形態である。孔のある位置に浅いカキ目を施す。底部外面はヘラケズリ様のナデを行う。

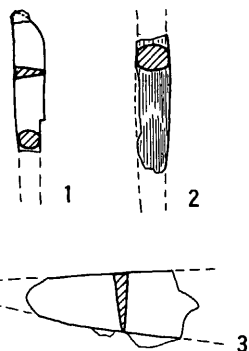
土師器 (第254図、図版106)

椀 (13~15) 13・14は底部外面をヘラケズリ様のナデ、内面をナデ、その他をヨコナデする。15は平底を呈し、色調も淡黄灰色を呈して1・2の赤褐色と違っている。内面はナデとヨコナデを行うが、コテ当て痕らしきものが見られる。外面は上半部がヨコナデし、底部には木葉痕がある。全体的に作りは良くない。

甕 (16) 胴上半部4分の1ほどの破片である。口縁部は短く外反し、端部を角張らせる。口



第251図 23号墳出土装具
具実測図 (1/1)



第252図 23号墳出土鉄器
実測図 (1/2)

縁部内外面と胴部外面をナデ、胴部内面をヘラケズリする。

手捏ね土器 (17) 口径3.1cmの大変小さなものである。器面が荒れていて調整は不明である。

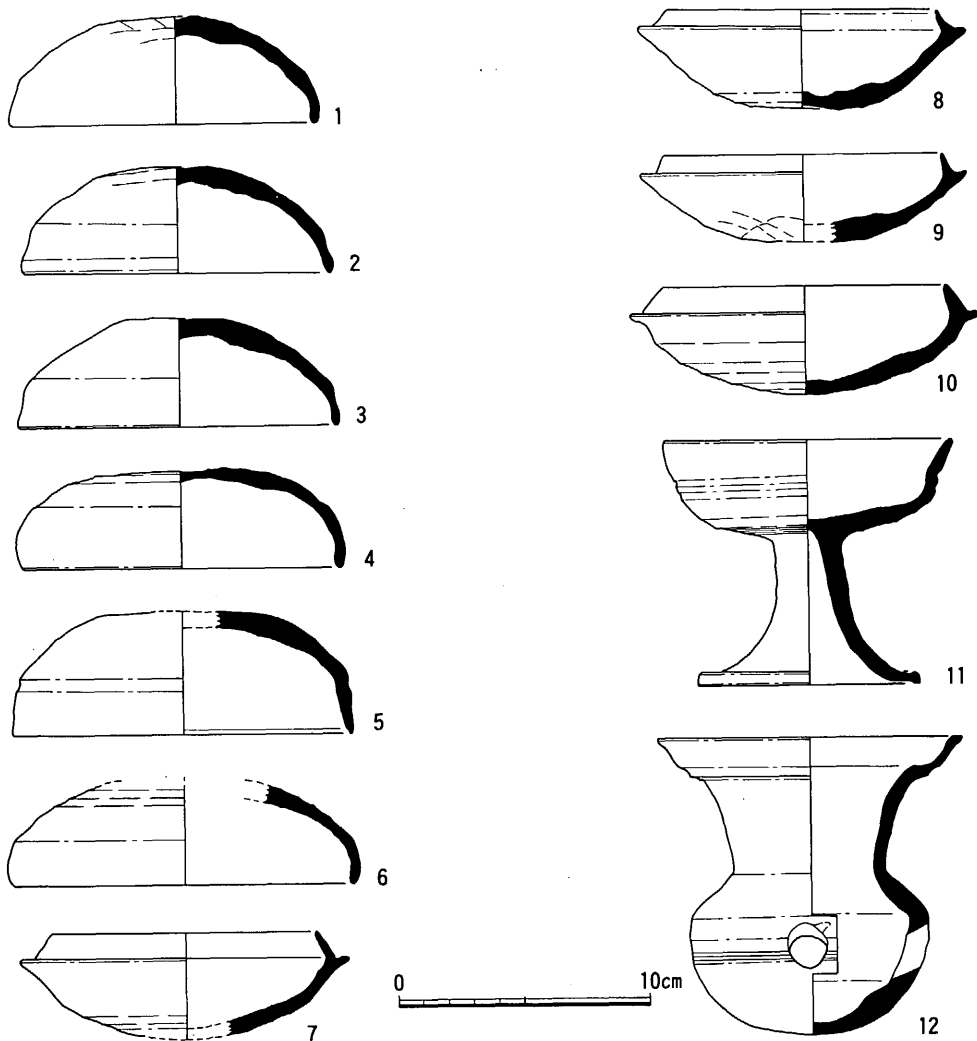
24号墳

1) 立地と現況

23号墳の南東2mに位置する。墳丘は削平されて周溝が残るだけである。石室もなかったが、天井石として使用した可能性のある石が1枚中心部で検出された。周溝はSK10に切られる。

2) 墳丘 (第255図)

削平されて高さはわからない。周溝は円形にめぐるが、3ヶ所陸橋状に切れる。周溝は幅2

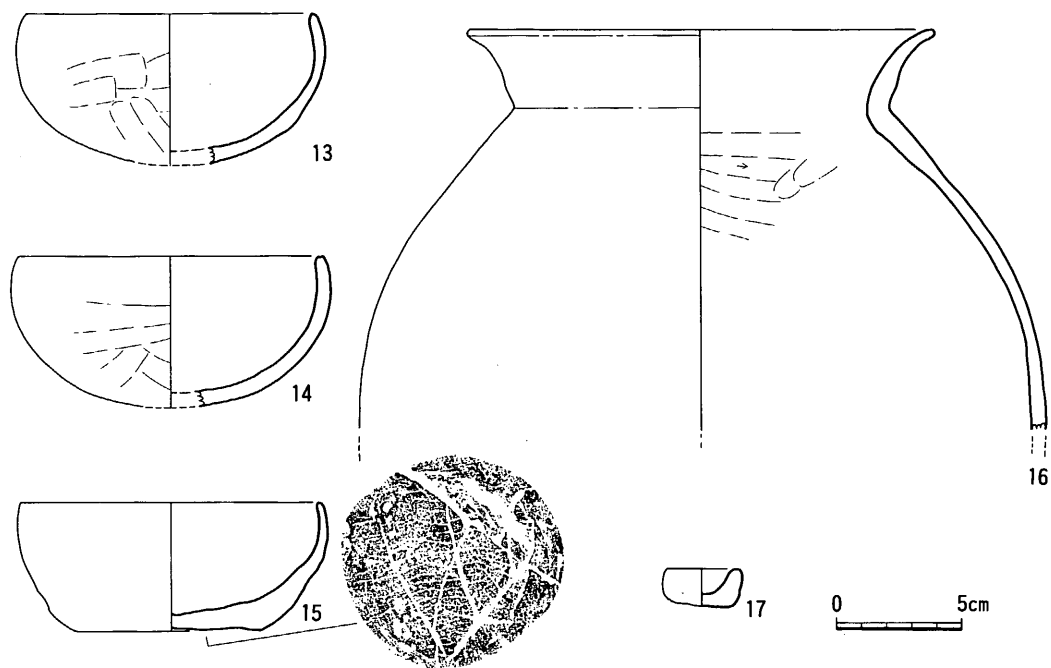


第253図 23号墳出土土器実測図① (1/3)

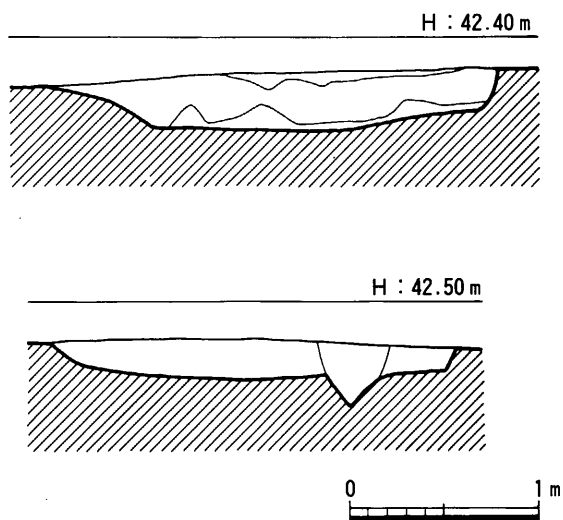
m～3 m、深さ10cm～30cmと浅い。墳形はほぼ円形で、南北方向で外径で約20m、内径で約14.5mを測る。

3) 石室 (図版58)

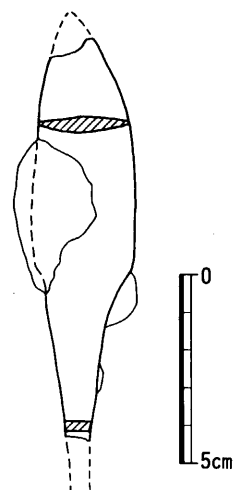
石材の抜き穴まで削平された状態で、規模等を推定する手がかりさえなかった。ただ、天井



第254図 24号墳出土土器実測図② (1/3)



第255図 24号墳周溝断面図 (1/40)



第256図 24号墳出土鉄器
実測図 (1/2)

石に使用したと考えられる石が1枚、墳丘中心部で検出された。0.9m×0.4m、厚さ15cmほどの石で、時代はわからないが、墳丘を削平する際に手に余り、穴を掘って落とし込んだのではないかと思われた。念のため石をはずしてみたが、下に施設はなかった。

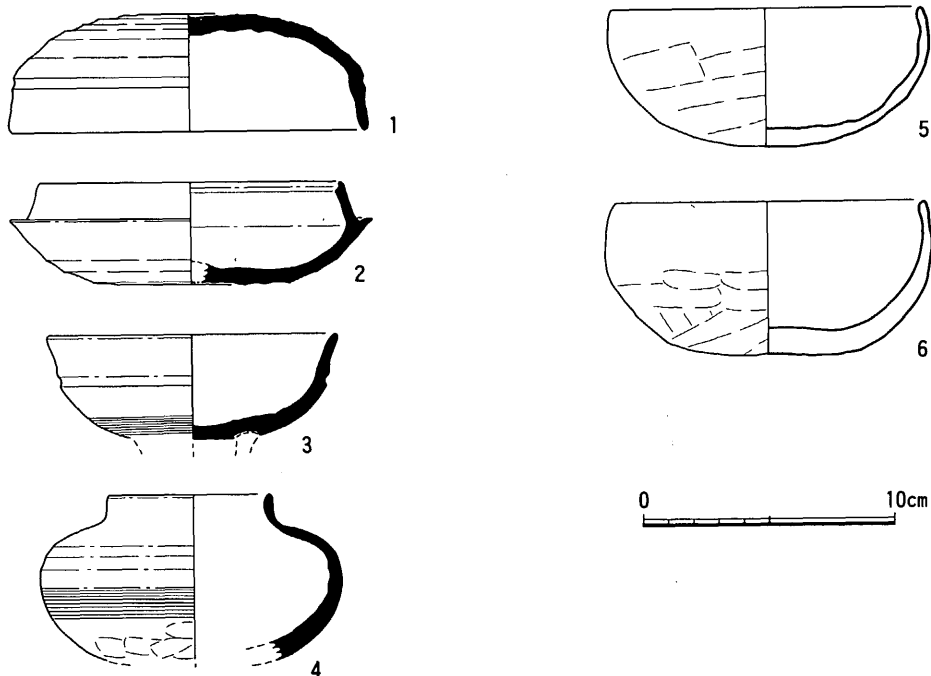
4) 出土遺物

原位置を保つものはなかったが、周溝から以下の遺物が出土した。なお、縄文土器片、黒曜石の剥片、磨製石斧も出土している。

鉄器	鏃	1
須恵器	杯蓋	2 個体以上
	杯身	1 個体以上
	礎	1 個体以上
	短頸壺	1
土師器	甕	胴部破片 9
	椀	2 個体以上
	壺	1
	甕	破片で11

鉄器 (第256図、図版124)

鏃 柳葉式に属する大型品で、残存長10.6cmを測る。



第257図 24号墳出土土器実測図 (1/3)

須恵器（第257図）

杯蓋（1） 天井部と体部の境に沈線を持つもので、天井部外面を広く回転ヘラケズリする。その他は回転ナデ、ナデである。

杯身（2） 内傾するが、比較的高めの立ち上がりを持つものである。口縁端部内面は段を持つ。底部外面は広く回転ヘラケズリする。

高杯（3） 無蓋高杯の杯部だけの出土である。底部外面にカキ目を施す。

短頸壺（4） 短く直立する口頸部を持つもので、胴部最大径を持つ部位よりやや下位にカキ目様の回転ナデを行い、その下部を手持ちヘラケズリする。灰のかぶり方から見て、口径9.5cmほどの蓋をかぶせて焼いたことが想定できる。

土師器（第257図、図版106）

碗（5・6） 体部内外面はヨコナデ、底部内面はナデを行い、底部外面は5がナデ、6がヘラケズリする。

25号墳（図版58）

1) 立地と現況

16号墳の東、24号墳の南に位置する。約10mの弧状の溝が残るだけであるが、削平と、SD 10の影響によって、周溝の一部が残った古墳と考えた。従って、石室も既にある。

2) 墳丘

削平の結果、高さはわからない。周溝も残りは悪いが、比較的良く残っている部分は幅約2m、深さ10cm～20cmほどである。外径でおよそ16mの円墳と推定できる。

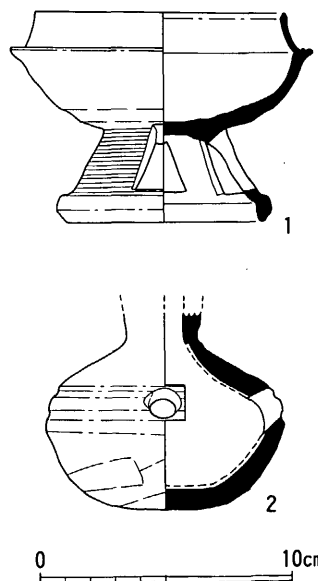
3) 石室

前述のとおり、削平されて痕跡も見出せなかった。

4) 出土遺物

周溝と考えた溝から出土したもので、原位置は保っていない。なお、これ以外に縄文土器片が出土している。また、図示した須恵器は周溝からの出土である。

須恵器	杯蓋	1
	杯身	1
	高杯	1
	甗	1
	甗	破片21
土師器	碗	1



第258図 25号墳出土土器実測
図 (1/3)

須恵器（第258図、図版106・107）

高杯（1） 有蓋短脚の高杯である。立ち上がりは高いがだいぶ内傾する。口縁端部内面に段を持ち、基部よりやや厚くなる。杯底部外面は回転ヘラケズリ、その他は回転ナデ、ナデである。脚部は三方向に長方形透しを入れる。外面にはカキ目がある。脚端部は外方へ屈曲した後下方へ曲げ、内面には稜が入る。

聴（2） 体部のみである。孔の位置に沈線を2条めぐらすだけで文様はない。底部外面を手持ちヘラケズリするが、その他は回転ナデである。

26号墳（図版59）

1）立地と現況

24号墳とSD10を介して東南側に位置する。弧状の溝が2本残るのみであるが、この溝が周溝の一部と考え、古墳としたものである。削平されて石室は見られない。

2）墳丘

削平のため高さはわからない。周溝は西側が一部切れる半円形に検出された。幅は1.4m～2.1mであるが1.7mほどの部分が多い。深さは15cm～40cmとばらつきがある。推定できる規模は外径で約16m、内径で14mほどになる。

3）石室

削平されて詳細は不明である。

4）出土遺物

周溝から下記の遺物が出土している。列挙しないが、縄文土器片、剥片等も出土している。

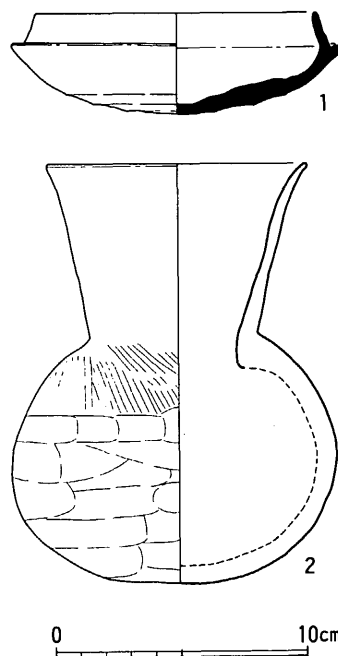
須恵器	杯身	1個以上
土師器	椀	1
	壺	1

須恵器（第259図、図版107）

杯身（1） 立ち上がりは内傾するが、1.5cmの長さがある。底部外面を回転ヘラケズリし、その他を回転ナデ、ナデを行う。

土師器（第259図、図版107）

壺（2） 丸底の長頸壺である。頸部外面はヨコナデ、胴部外面上半部はハケ目、下半部はヘラケズリされている。内面はわかりにくい。



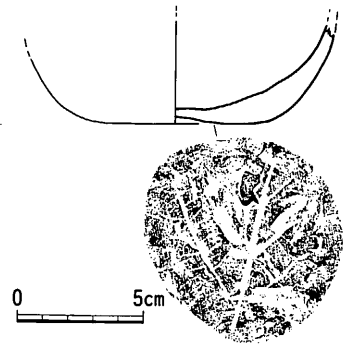
第259図 26号墳出土土器実測図

(1/3)

27号墳

1) 立地と現況

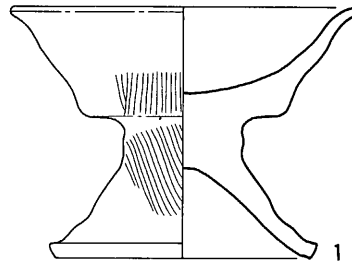
24号墳の北東、28号墳の南東に位置する。弧状の溝が一部残るだけで、古墳として良いか迷いがあったが、隣接する古墳の位置関係から考えても不都合は生じないと思われ、古墳と判断した。半部分が発掘区外になり、調査区内についても、検出された周溝の半分はSD10に切られて消滅したものである。石室も消滅したものである。



第260図 27号墳出土土器実測図 (1/3)

2) 墳丘

削平されて高さはわからない。周溝は前述のとおりで、約8m分検出されたにすぎないが、さらにその一部が陸橋状に切れる。幅は2.5m～4.0mと一定しない。深さは深い所でも20cm～40cmである。周溝検出部分が少ないため規模の推定は難しいが、外径で約15mほどと思われる。



3) 石室

削平されているため詳細はわからない。

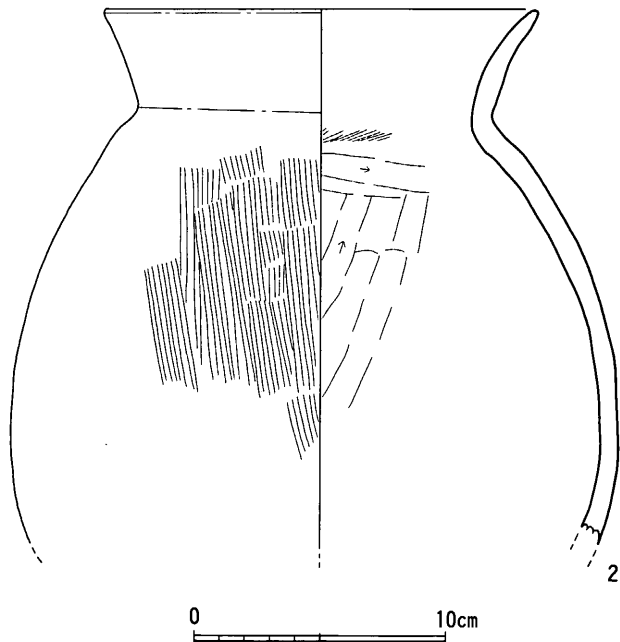
4) 出土遺物

周溝内出土であるが、原位置は保っていない。また、下記の遺物以外に縄文土器、剥片、サヌカイト製石鏃1が出土している。

須恵器	杯身	3
	甕	破片で6
土師器	碗	1

土師器 (第260図)

碗 口縁部を欠き、器壁のぶ厚いものである。23号墳に類例があるので、碗とした。内面はヨ



第261図 28号墳出土土器実測図 (1/3)

コナデとナデであるが、コテ当て痕が見られる。外面は凹凸が多く、底部には木葉痕がある。
淡黄灰色を呈する。

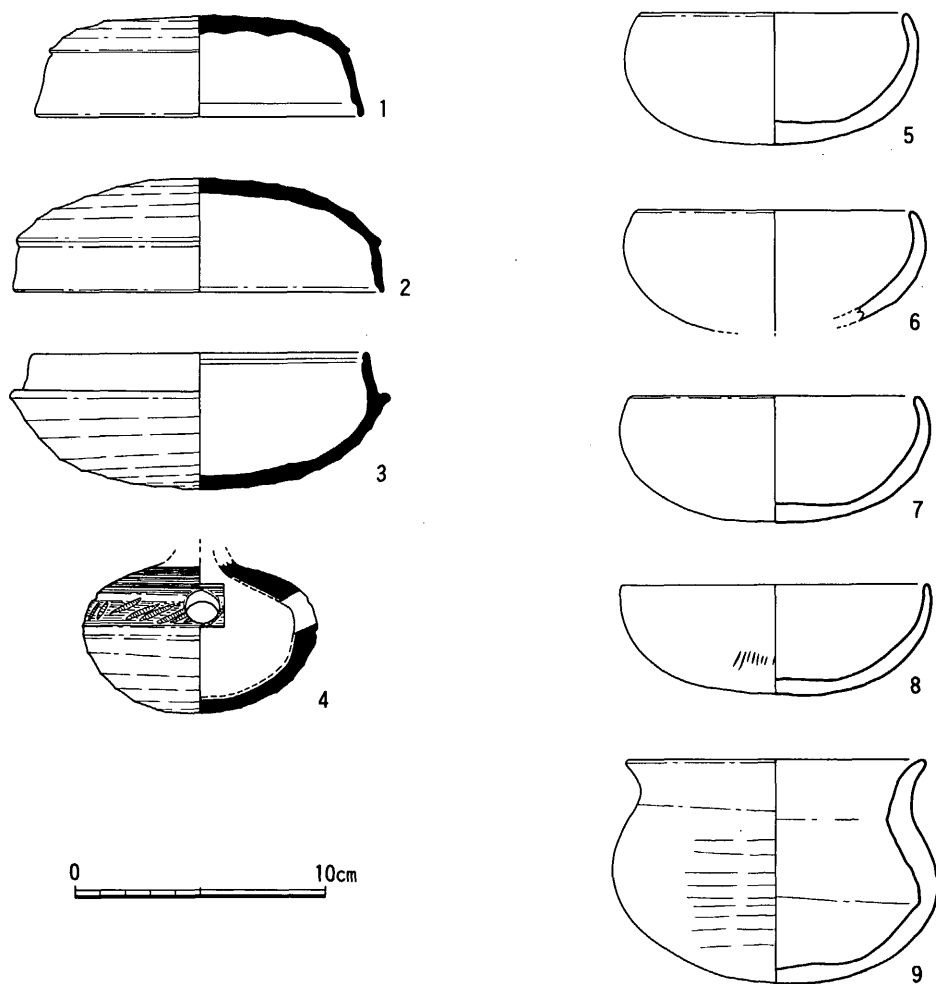
28号墳（図版60）

1) 立地と現況

23号墳の東、24号墳の北に位置する。半円形状に周溝が残るだけである。主体部は削平されて残っていない。

2) 墳丘

削平されて高さはわからない。周溝は一部ふくらむが、幅約0.7m～1.5m、深さ10～20cmである。これから推定される古墳の規模は外径が約16mほどである。



第262図 29号墳出土土器実測図（1/3）

3) 石室

削平されて痕跡すらなく不明である。

4) 出土遺物

極めて少ない。

土師器	高杯	1 個以上
	甕	1 個以上

土師器 (第261図、図版107)

高杯 (1) 杯部は底部と体部の境が角張り、口縁端部が外に開き、脚部は太く短い。杯体部下半と脚部にハケ目があり、その他はナデ、ヨコナデを行う。淡黄灰色を呈する。

甕 (2) 外反する口縁部と長胴からなるものである。口縁部内外面はヨコナデ、胴部外面はハケ目調整、内面はヘラケズリを行う。頸部と胴部の接合部内面はハケ目が観察できる。

29号墳 (図版60)

1) 立地と現況

23号墳の北に接するように位置する。正円にはならないが、2本の弧状にめぐる溝の存在から古墳と考えたものである。主体部は削平されていて検出できなかった。

2) 墳丘

削平されて高さはわからない。周溝は南側が一部陸橋状に切れるが、おおそ半円形状にめぐる。幅は約2mぐらいの部分が多い。また深さは20cm～40cmである。周溝から推定される古墳の大きさは外径で約12mほどになる。

3) 石室

削平されているため詳細はわからない。

4) 出土遺物

2本に別れた周溝からの出土であるが、原位置を保つものはない。また、下記の遺物以外に縄文土器、石鏃、剥片、磨製石斧が出土している。

須恵器	杯蓋	2 個以上
	杯身	1 個以上
	甕	1 個以上
	壺	1
	甕	破片23
土師器	碗	4 個以上
	壺	1 個以上
	甕	1

須恵器 (第262図、図版107)

杯蓋（１・２） １は比較的天井部が平坦で、体部が開き気味に長い。天井部は広く回転ヘラケズリをする。口唇部内面には明瞭な段が付く。２は口径14.8cmを測る大きなもので、天井部と体部の境は明瞭である。口唇部内面にはわずかに段が残る。天井部外面は広く回転ヘラケズリする。その他は回転ナデ、ナデである。

杯身（３） 口径13.2cm、受部径15.1cmを測る。口唇部内面に沈線がめぐる。底部外面を広く回転ヘラケズリする。焼成はあまり良くなく、外面は淡黄灰色、内面は淡茶灰色を呈する。

甕（３） 胴部のみの破片である。孔のある位置に２本の沈線をめぐらせ、その間に刺突文をめぐらす。それより上にはカキ目、下方はヘラケズリする。

土師器（第262図、図版107）

碗（５～８） 丸底で内湾する体部を持つ形態のもので、体部外面上位と内面を横ナデ、体部外面下位から底部にかけてヘラケズリするものである。８を除いては底部外面にヘラ記号を持つ。

壺（９） 広く短い口頸部を持ったものである。胴部外面中ほどから上位にかけてヘラミガキが見られる。下位にはヘラケズリが見られる。口頸部内面はヨコナデである。

30号墳

1) 立地と現況

11号墳の南西約10m、12号墳の北西約7.5mに位置する。調査の端部で検出されたため、石室の部分可能な限り拡張したものの、十分な調査を行うことはできなかった。

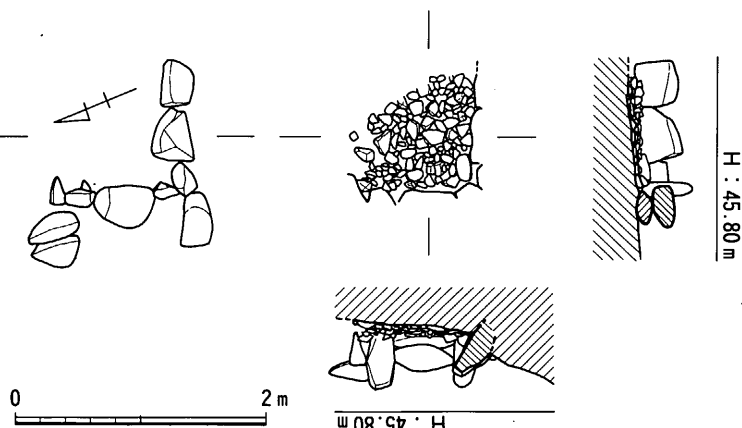
2) 墳丘

墳丘はすでに削平されており、高さはわからない。主体部の西側に、幅1.3m～1.5m、深さ9cm～23cmほどの溝が検出されたが、主体部を中心とした円形をなすような緩いカーブを描いているため、周溝の可能性もある。

3) 石室（第263図、図

版61）

石室の奥壁側の半分以上が調査不能であり、玄室の一部と玄門部のみ検出した。このため石室の正確な規模や構造など不明であるが、北西方向に開口する単室の横穴式石室であると思われる。



第263図 30号墳石室実測図 (1/60)

玄室は玄門部寄りの一部のみを検出した。腰石は左側壁の玄門寄りの2石しか検出していない。幅20cm程の石を腰石として立てており、内面には朱が塗布されていた。いずれも内傾しており原位置を保つものと思われない。

玄門は細長い石を柱状に立てて袖石としている。左袖石は幅20cm、高さ40cmで側壁より内側にたて袖部をつくっている。右袖石も左袖石とほぼ同大の石材を立てており、両袖石の間には幅50cm程の石を据えて框石としている。前庭部側壁は左右ともに40cmと短く、側壁から真直ぐ続いている。左右とも1段のみであり、左側は幅25cm、長さ40cmの石を長辺を主軸方向に沿って据えており、右側は左側よりやや小さめの石を長辺を主軸と直交する方へむけて2石並べている。墓道は検出されていない。閉塞は框石上に長さ50cm、幅30cm、厚さ20cmの平石を積み上げて閉塞石としている。玄室内部には敷石が全面に敷かれており、床面は玄門に向かってゆるやかに上っている。

4) 出土遺物

主体部からも、前述した周溝の可能性のある溝からも、遺物は全く出土しなかった。

(5) 小石室

1号小石室

1) 立地と現況

2号墳の周溝北側約5.2mの所に位置する。大きく削平を受け北側壁と東小口壁は失われており、他の周壁は腰石のみ残存する。本小石室では盛土・周溝は認められず、本古墳群の他の小石室も、いずれも盛土および周溝は伴っていない。

2) 内部主体 (第264図、図版62)

主軸をN-87°-Eにとる小石室である。蓋石・北側壁は残存しないが、掘り方より規模を復元すると主軸長約1.9m、西小口壁幅0.67mとなる。

南側壁は幅約70cm～80cm程の平石を5枚立てて用いるが、腰石上面のレベルは揃えられていない。西小口壁は2石で構成されるが、長さ55cmの石材を立て南側壁との間にできた隙間を長さ20cm、幅10cm、高さ24cmの細長い石材を用いて塞いでいる。さらにこの石と南側壁との間にできる高さ20cmの三角形の隙間を、裏側から石を詰めることにより塞いでいる。また南側壁の西小口壁寄りの腰石は小さいものを用い、この隅の部分の石積みには苦心したと思われる。

3) 出土遺物

遺物は、石室埋土中から、縄文土器片2点、弥生土器片1点、黒曜石剝片2点が出土したが、いずれも図示できなかった。

2号小石室

1) 立地と現況

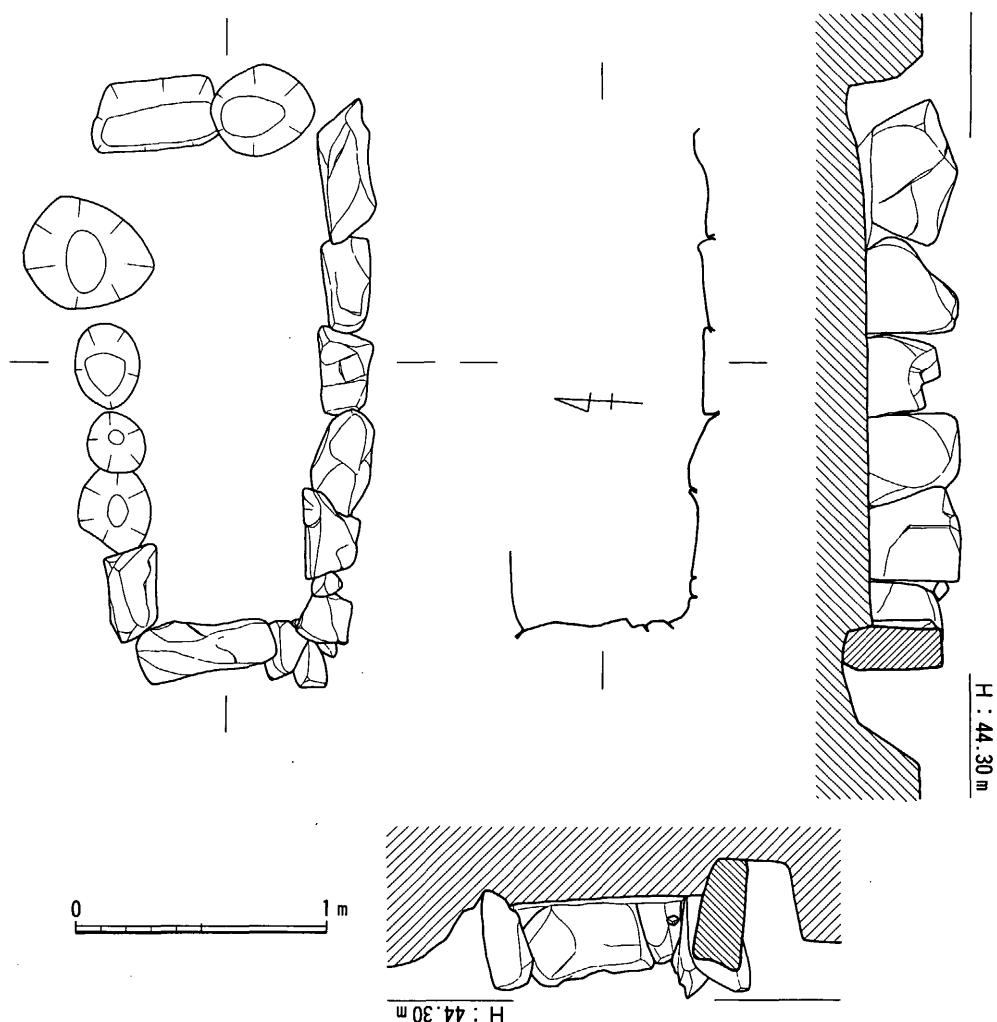
1号小石室の北側約8m、1号墳の周溝外側約5mの所に位置する。既に削平を受けており

一部2段目の石積みが残る程度である。

2) 内部主体 (第265図、図版62)

主軸をN-103°-Eにとる小石室である。石室は、腰石より1段上の石積みまで確認できるが、上部の構造は明らかにできない。主軸長1.56m、東小口壁幅0.47m、西小口壁幅0.32mの狭長なプランを持ち、東側が広くなることから頭位方向は東側にあったと考えられる。

側壁の腰石は横長の平石を3～4石立てて用いるが、隙間が広く空き粗雑な感をうける。腰石より上は扁平な石材を平積みになっている。東小口壁には1枚で構成され、平らな面を内側に向け据え方も丁寧であり、横穴式石室の奥壁であるかの様な印象をうける。これに対して西小口壁は1石で構成されるものの、東小口壁やや小型の石材を用いる。両側壁の西側半分には赤



第264図 1号小石室実測図 (1/30)

色顔料が塗布されていた。

3) 出土遺物

遺物は、石室埋土中から鉄鏝の小破片が1点出土したが、図示できなかった。

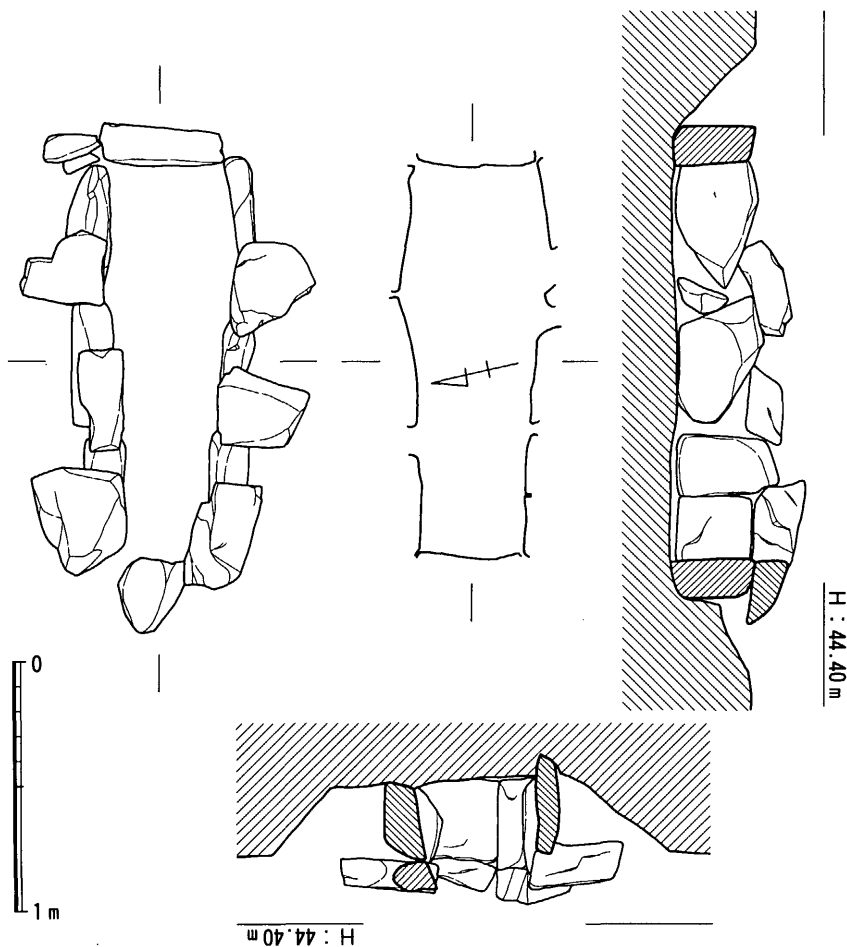
3号小石室

1) 立地と現況

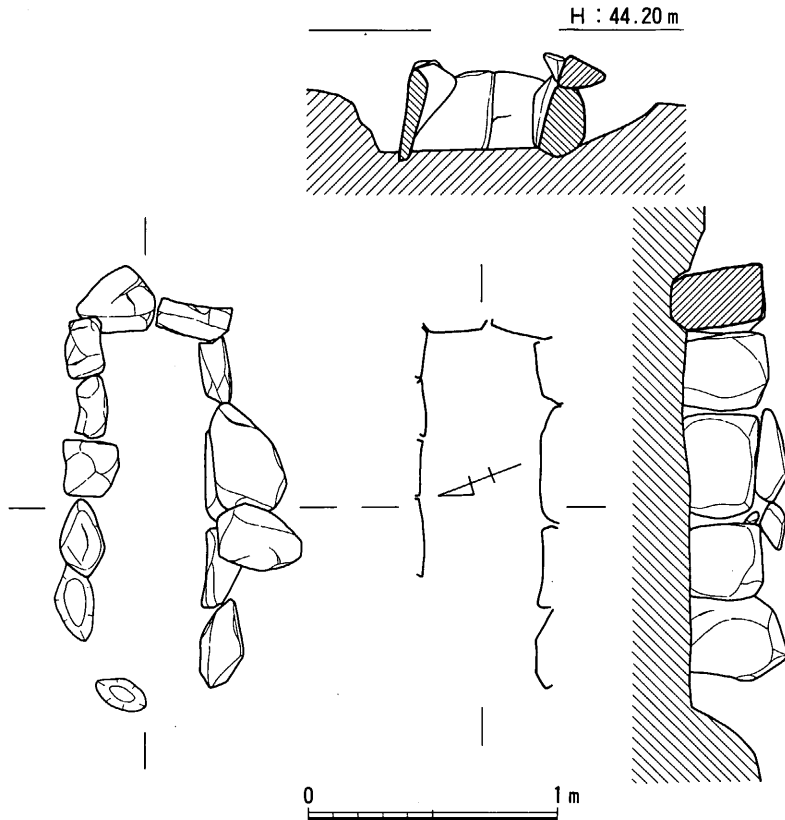
2号小石室の東側約8mの所に位置する。本石室の東側約7mの所には4号小石室が営まれており、3号小石室は2号小石室と4号小石室のほぼ中間に位置する。1号墳の周溝からは約2mと近接した位置にある。西小口壁と北側壁の一部を失い、残る側壁も腰石から2段目程度しか残らない。

2) 内部主体 (第266図、図版63)

主軸をN-69°-Wにとる小石室である。石室の西小口壁は失われているが、抜き跡などか



第265図 2号小石室実測図 (1/30)



第266図 3号小石室実測図 (1/30)

ら主軸長1.41m以上、東小口壁幅が0.43m、石室中位幅0.48mとなろう。

南側壁の腰石は4石で構成され、両端の石が真ん中の2石に比べて約10cm程高くなっており、これを2段目の石材によりレベルを合わせている。北側壁の腰石は西側は失われているが、4石残っており、南側壁のものよりやや小型である。東小口壁は2石で構成される。

東小口壁を主軸と直交する方向にのびたところの掘り方内には正体不明のピットがある。掘り方掘り下げ中に検出されたもので、

何らかの付属施設の存在を想定させる。

3) 出土遺物

石室埋土中から、下記の遺物が出土している。

鉄器 鏃 4以上

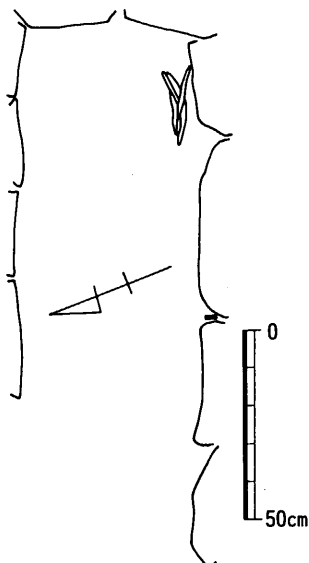
鉄器 (第268図、図版124)

鏃 (1~8) 1・3は片刃箭式、2は鑿箭式に属すると思われる。4は鑿箭式か柳葉式に属するものかとも思われるが、小片のため詳細がわからない。1の茎には木質が残る、2には他の鉄器が銹着する。5~8については、7に樹皮巻と木質、8に木質が残る。

4号小石室

1) 立地と現況

3号小石室の東側約7m、1号墳の周溝より北側約1mの所に位置する。1~4号小石室はいずれも主軸を略東西にとり、



第267図 3号小石室遺物出土状況 (1/20)

1号墳を半円形状にとりかこむ様に位置していることから何らかの関係を想定させる。石室は腰石の上3段目まで残っており、本古墳群の小石室としては残りが良いほうである。

2) 内部主体 (第269図、図版63)

主軸をN-93°-Eにとる小石室である。主軸長1.91m、東小口壁幅0.48m、西小口壁幅0.43mと石室の中程がわずかにふくらむ狭長方形のプランをとる。東位方向は東側にあったと考えられる。

南北側壁の石積みの状況を見ると、北側壁は幅広の腰石の上に2段目の石材の小口面を石室内側に向けて積むが、レベルは一定しておらず東側へ向かって高くなっている。その上に3段目の石材を乗せ、この時点である程度石積みのレベルを揃えている様である。一方南側壁は東側から数えて2番目と4番目の腰石は平石を立てて用いており、東西の小口壁側と2・4番目の腰石の間は横長の腰石を据えている。この使い方の異なる両者の腰石間には最高50cmのレベル差があり、腰石からの石積みは非常に特異な印象を受ける。小口壁はいずれも2石で構成され、東小口壁が面をそろえているのに対し、西小口壁は北側のものがやや外側にずれている。西小口壁上には幅広の平石の長辺を石室内側にむけ積んでいるが、2段目と腰石の間は三角形の隙間が生じ、そこに土が詰まり浮いた状態であった。東小口壁も腰石と2段目の石の間には土が詰まっていた。これはいずれも原位置を保つものであり、何故このように土が詰まっていたのか不明である。また側壁の石積みは大きく隙間が開いており、非常に粗い造作をしている。

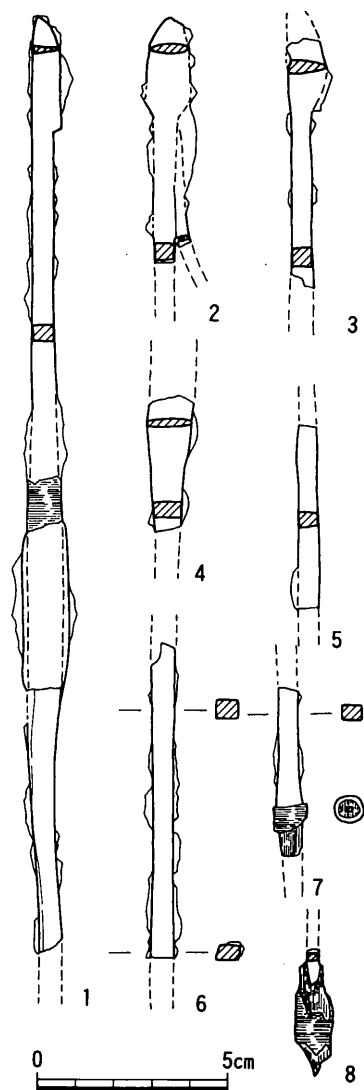
3) 出土遺物

遺物は、石室埋土中から須恵器片1点、縄文土器片7点、黒曜石剝片5点が出土したが、いずれも図示できなかった。

5号小石室

1) 立地と現況

4号小石室の北側約8mの所に位置し、6号墳の周溝西側約4mの所にある。1～4号小石室が1号墳を囲むように配されているのとは異なり、6号墳に近接している。内部は腰石上二段目の石材まで残存している。

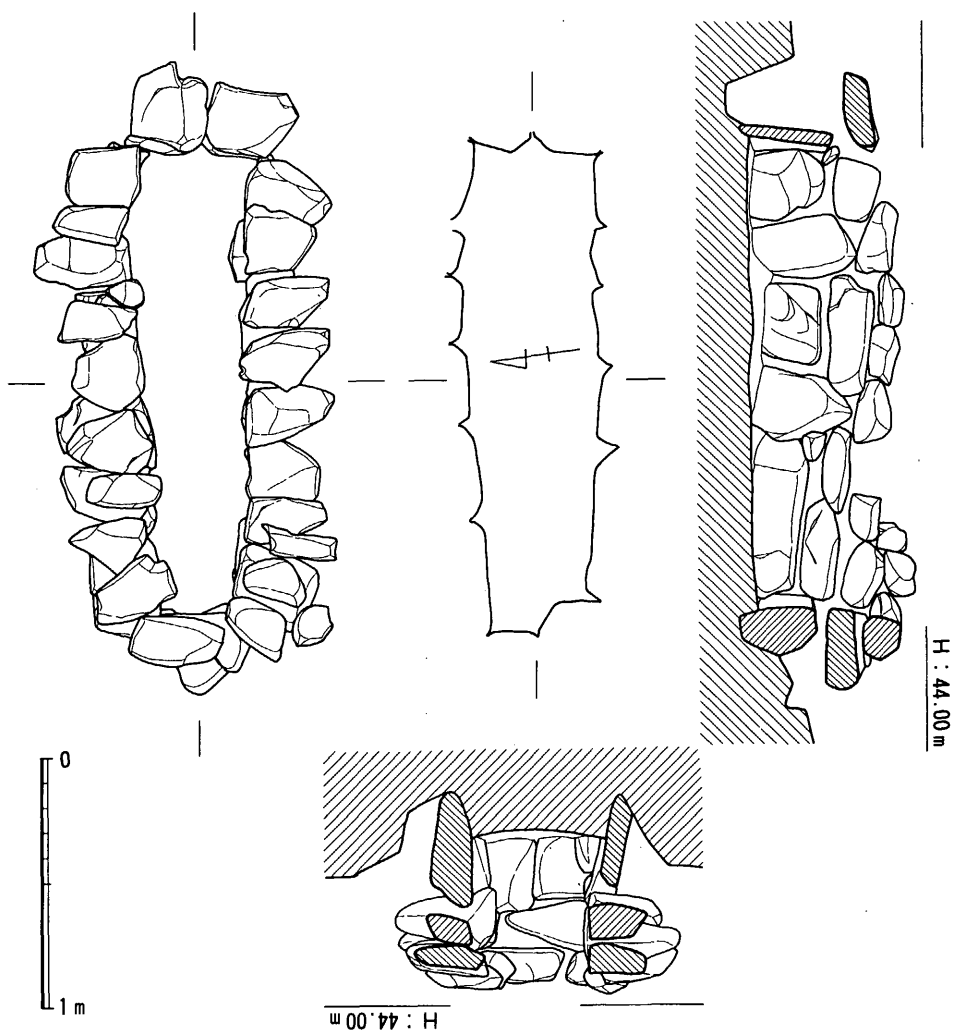


第268図 3号小石室出土鉄器実測図 (1/2)

2) 内部主体 (第270図、図版64)

主軸をN-105°-Eにとる小石室である。主軸長1.66m、東小口壁幅0.54m、西小口壁幅0.40mである。北側壁はゆるく弧を描き、少し歪んだ狭長方形プランをとる。頭位は東方向にあったと考えられる。

側壁は、北側壁は4枚の石を立てて腰石とし、その上に腰石よりやや小さめの石材を横位に用いている。腰石上面のレベルはほぼ揃っている。南側壁は5枚の石材を用いて腰石としており、そのうち真ん中のみが横長に据えられ、他は長いほうを縦にして用いている。このため腰石のレベルは不揃いとなり、腰石上は乱石積みに適当な石を間に詰めて積み上げている。小口壁はいずれも腰石は1枚で構成するが、腰石上部の石積みは東小口壁が1枚で構成するのに対

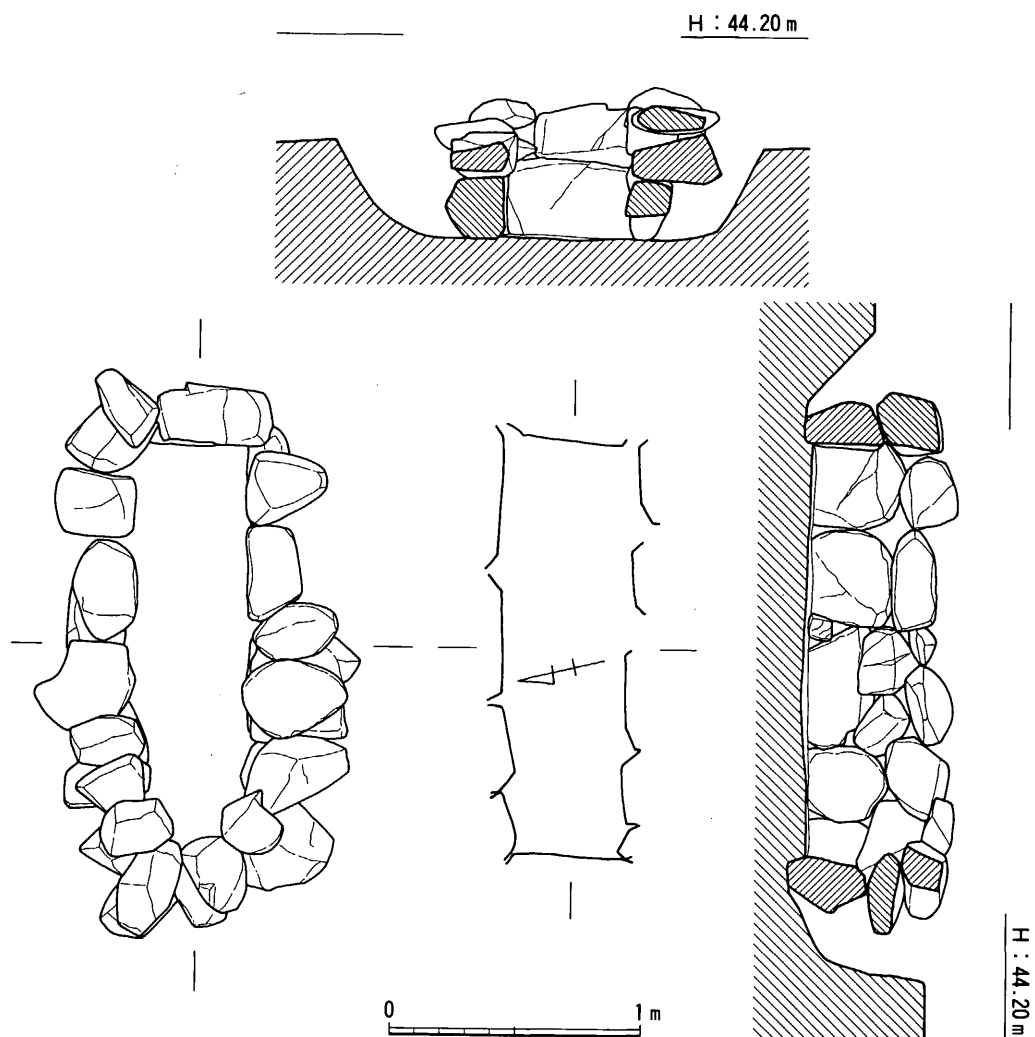


第269図 4号小石室実測図 (1/30)

し、西小口壁は小さめの石材を詰めている。両小口壁の隅角の状況をみると、腰石を除いて隅角を持たない西側小口壁より東小口壁の方が丁寧な造作をしているようである。頭位は東の方向にあることや両小口壁石材の相違から、本小石室においては頭のある方向を丁寧に造り上げていることが看取される。

3) 出土遺物

遺物は、石室埋土中から縄文土器片35点が出土したが、いずれも小片のため図示できなかった。



第270図 5号小石室実測図 (1/30)

6号小石室

1) 立地と現況

1・2・3・4号墳のほぼ真ん中にあり、ここから東に真っ直ぐ線を引くと4号墳の石室入口に当たる。1～5号石室と異なり、単独で存在している。本小石室の北東側約2mの所に4号墳の周溝があるが、本石室の周辺では周溝は検出されておらず陸橋部にあたるとされる。石室の残りは悪く、西小口壁は失われており、他の周壁も腰石までしか残存しない。

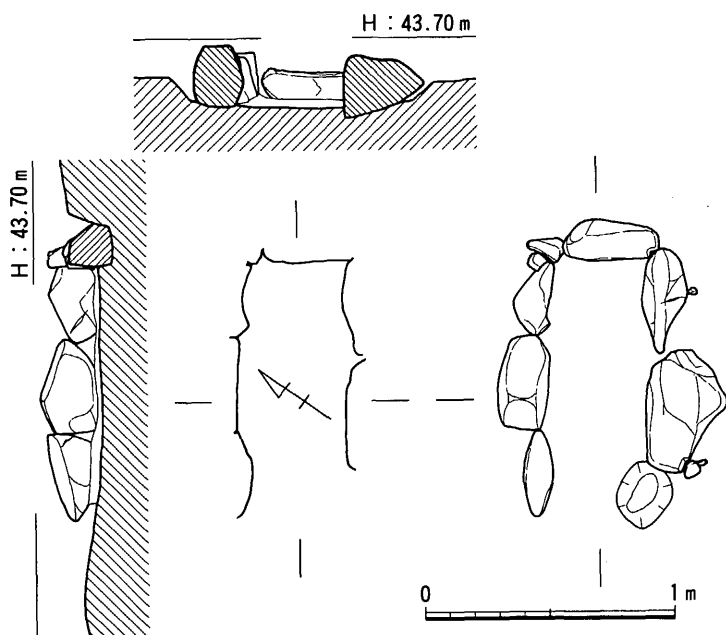
2) 内部主体 (第271図、図版64)

主軸をN-55°-Eにとる。残存状態が悪いが、掘り方や残された石で復元すると主軸長0.92m以上、東小口壁幅0.38m、石室中位幅0.43mとなる。長方形プランをとり、北側壁は緩く弧を描く。

側壁はいずれも3枚で構成され则认为られ、大型の石材を腰石として用いる。東小口壁は1枚で構成されているが側壁より低く、最も高い所から約18cmの高低差がある。小口壁と北側壁の間に僅かに隙間かできており、小石を詰め込んでいる。南北側壁いずれも真ん中の石材が最も大きく、このような小石室の構築に際して最も荷重がかかる部分に大石を配したのである。

3) 出土遺物

遺物は出土しなかった。



第271図 6号小石室実測図 (1/30)

7号小石室

1) 立地と現況

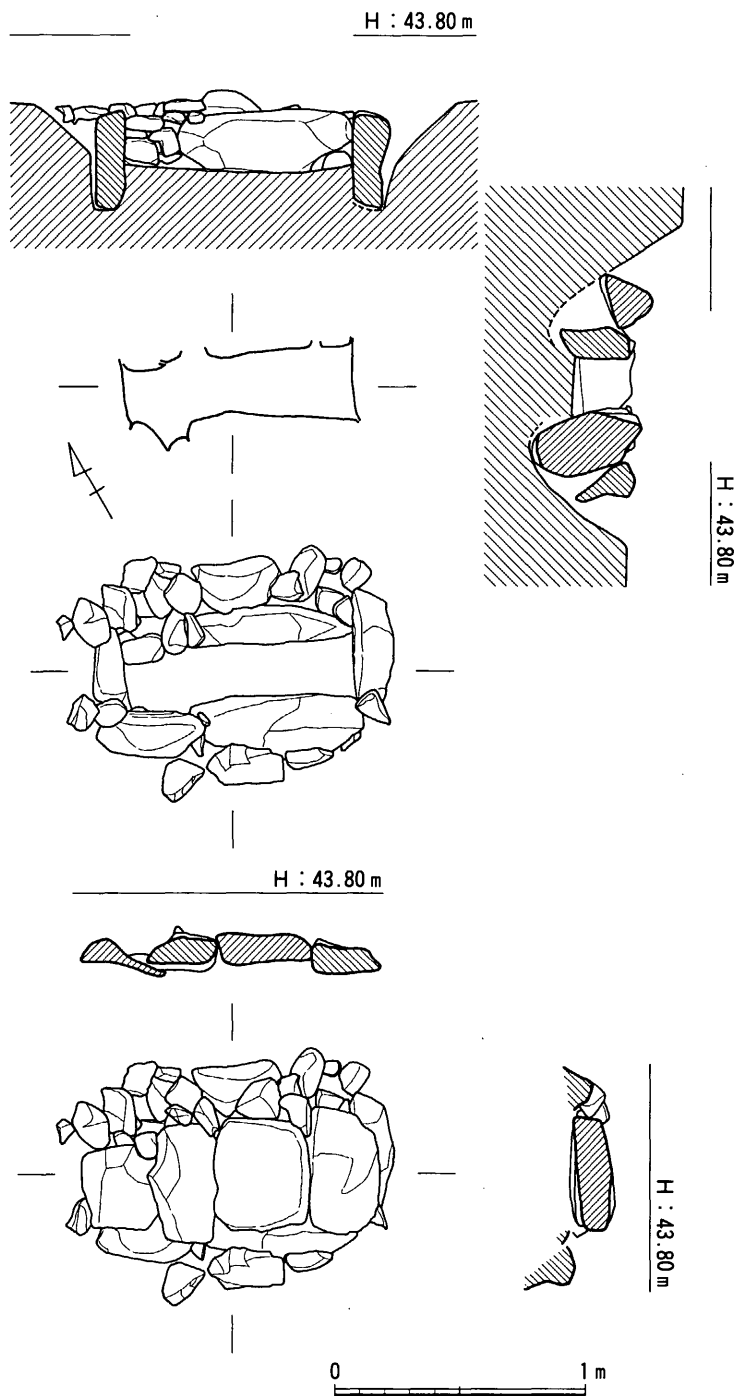
8号墳周溝南側約4mの所にあり、調査区境ぎりぎりの所で検出された。本古墳群における小石室のなかでは、唯一蓋石まで完存している。このため石室掘り方は深く、掘り方のレベルをみると北東側が高くなっており、本小石室は北東側に上る緩斜面に築

造されたものと考えられる。

2) 内部主体 (第272図、図版65)

主軸をN-118°-Eにとる小石室である。蓋石は4枚架けられ、一番西側にあるものが幅30cm、厚さ10cmと小型であるほかは、幅約50cm、厚さ約10cm以上の平石を用いている。蓋石は腰石上に西側から順次架けており、最も東側のものを最後に架けたものと思われる。蓋石架構後には隙間を埋めるかのように蓋石間に小石を積めており、これは北側のほうにのみ認められる。

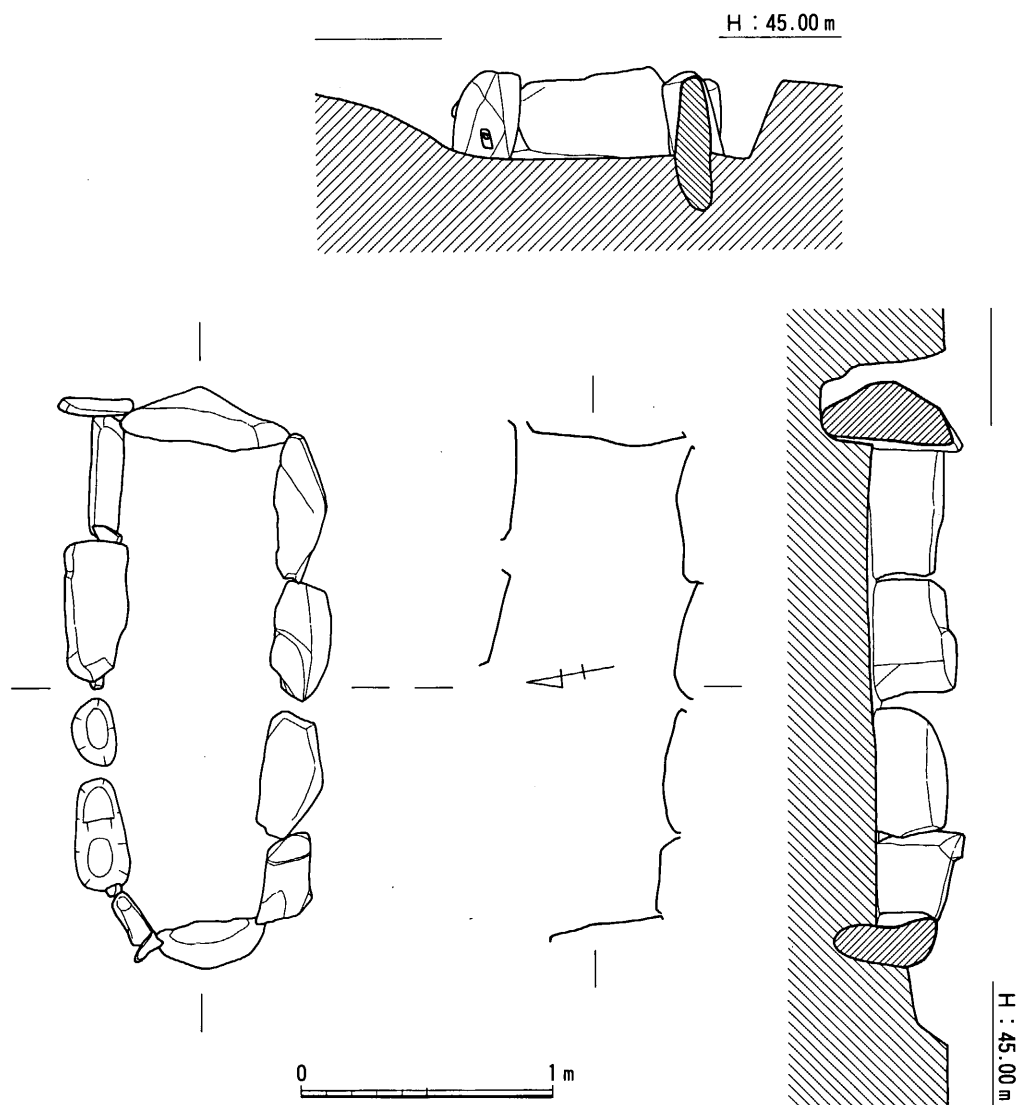
石室は主軸長0.91m、東小口壁幅0.30m、西小口壁幅0.23mと非常に小さく、また側壁の面は揃えられていない。側壁はどちらも長さ80cm程の石材を東小口壁に接して立て、西小口壁との間を、南側壁は長さ40cm程の石を一個置いているのに対し、北側壁は長さ15cm程の小石を積み込んでいる。また北側壁は両小口壁に



第272図 7号小石室実測図 (1/30)

挟まれており、南側壁は西小口壁より飛び出しており、側壁の立て方が異なっている。小口壁はいずれも一枚で構成される。北側壁の後側には控え積みが認められ、これは特に小石を用いて側壁を構成した部分の后方に厚く積まれており、石室構築に際する苦勞が忍ばれる。また後方の控え積みにはいずれも中央に最も大きな石材を据えて側壁を支えている。

蓋石下面と床面間は高さ約25cmと低く、規模から見て子供用であろうと考えられる。



第273図 8号小石室実測図 (1/30)

3) 出土遺物

遺物は、石室埋土中から縄文土器片 2 点、黒曜石とサヌカイトの剝片が各 1 点ずつ出土しているが、いずれも図示できなかった。

8 号小石室

1) 立地と現況

11号墳と12号墳の間にあり、距離的には11号墳に近い。大きく削平をうけており腰石より上の石積みは既に失われており、北側壁の一部も失われている。

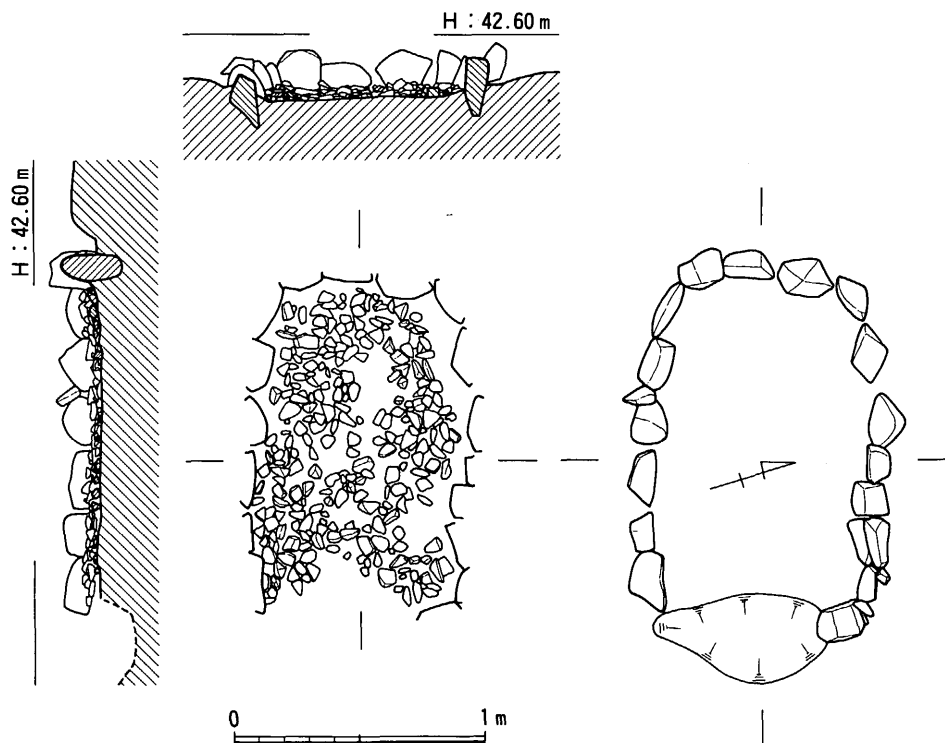
2) 内部主体 (第273図、図版66)

主軸をN-91°-Eにとる小石室である。主軸長1.94m、東小口壁幅0.69m、西小口壁幅0.41mと小石室の中では大型に入る。頭位は東方向にある。

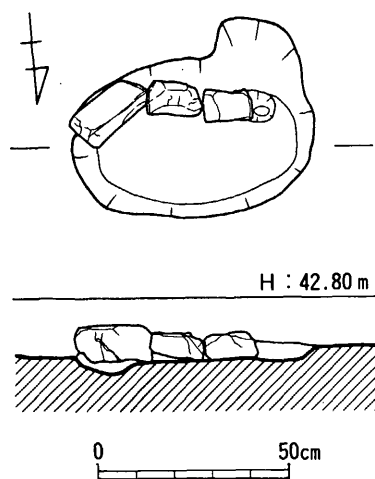
南側壁は4石で構成され、長さ50cm、高さ60cm程の石材を深く埋め込んでいる。北側壁は西小口壁との間に小石を立て、隙間を塞いでいる。小口壁はいずれも1石で構成され、側壁の石材よりやや薄手の石材を用いる。床面には赤色顔料が残っており、中央付近に多く見られる。

3) 出土遺物

遺物は出土しなかった。



第274図 9号小石室実測図 (1/30)



第275図 10号小石室実測図
(1/20)

9号小石室

1) 立地と現況

本石室は20号・21号墳の周溝外側に位置する。小石室の中では最も東側に位置し、また幅広の石室プランから横穴式石室のようにも思えるが、周溝や盛土は認められずここでは小石室として取り扱うことにする。主体部は残存状況は非常に悪く、腰石より上の石積みはほとんど失われて

2) 内部主体 (第274図、図版66)

主軸をN-72.5°-Wにとる小石室である。プランは幅の広い隅丸長方形を呈し、主軸長1.25m以上、東小口壁幅0.76m、西小口壁幅0.61mであり、側壁は緩く弧を描いている。両側壁はいずれも長さ0.2m~0.3mの小型の石材を

腰石としているが、石が小さいためか所々隙間があいており、不揃いである印象をうける。床面には全面に敷石が敷かれていたと思われ、このように敷石を持つ小石室は本古墳群中では他に認められない。

3) 出土遺物

遺物は、石室埋土中から須恵器片38点、縄文土器片10点、鉄器1点、黒曜石剥片1点が出土したが、いずれも図示できなかった。

10号小石室

1) 立地と現況

16、20、24号墳の間で検出されたものである。大変残りが悪く、側石3個と掘り方が残るだけである。

2) 内部主体 (第275図、図版67)

3個の側石は比較的角張った石を用いているが、長さが10cm~20cmの小ぶりの石である。東端の石は斜めになっており、元の位置からずれた可能性がある。掘り方は長径63cm、短径43cmの楕円形を呈する。掘り方の大きさから、東端の石は小口の石だった可能性がある。そうすると推定される大きさは、内法で長辺35cm程度、短辺で15cmほどになり、極めて小型の石室となる。埋葬施設としてよいか、疑問も生じるところである。

3) 出土遺物

遺物は出土しなかった。

(6) 焼土坑

1号焼土坑（第276図、図版67）

22号墳墳丘を切って造られている。おおむね長方形形状を呈し、長軸1.3m以上、短軸約1m、深さ約0.2mを測る。床面には約1cm～5cmの厚さで灰が堆積しており、その上面に土師器片が散乱した状態で検出された。また、床面はほぼ平坦で、中央付近がやや焼けた状況を示していた。壁面はゆるやかに外反し、西側長辺の一部が熱のため赤変していた。出土した土師器はいずれも小破片で、器形も判然としないが、よく熱を受けてもろくなっているのは北側短辺近くで出土したもので、遺構実測図に示した通り、円形の破片で検出された。取り上げると、もろくて小破片となってしまう、図示できなかった。平底気味の器種の底部と思われるが、厚さ約1cm、検出時で径約18cmの大きさで、内面に同心円状にヨコナデの痕跡が残る。器種、時期等は明らかにできない。他に「蓋杯」の蓋または碗の口縁部と考えられるような土師器の小破片が出土している。

2号焼土坑（第276図、図版68）

1号焼土坑の東約2mに位置し、不整長方形形状を呈する。長軸長で約0.7m。北側短軸長で約0.3m、南側短軸長で0.7m、深さ0.1m～0.2mを測る。床面から約10cmの厚さで灰層が堆積する。南側の壁面上部が熱のため赤変している。出土遺物は縄文土器、土師器、須恵器のごく小さい破片があるだけである。

3号焼土坑（第276図、図版68）

1号焼土坑の南東約3mに位置し、不整長方形形状を呈する。長軸長で約1.3m、短軸長で0.63m、深さ約0.2mを測る。断面は舟底状を呈する。北東側の壁面上位が熱のため赤変している。出土遺物は縄文土器と思われる小破片がややあるだけである。

4号焼土坑（第276図、図版69）

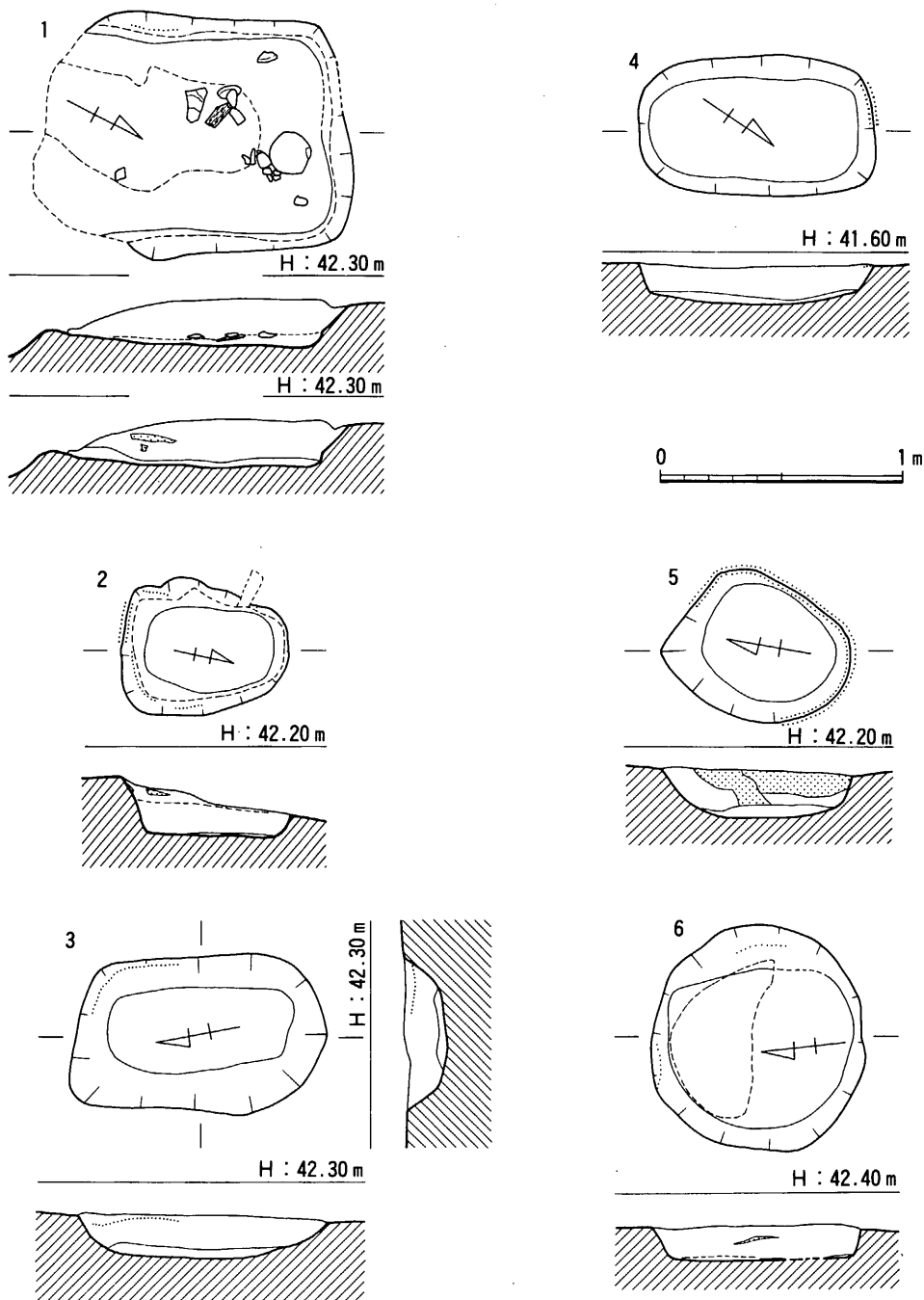
3号焼土坑の南東1.5mに位置し、隅丸長方形形状を呈する。長軸長0.97m、短軸長0.57m、深さ約0.15mを測る。床面はやや舟底状を呈する。北側短壁面上位の一部が熱のため赤変している。出土遺物は縄文土器と思われる小破片が数点ある。

5号焼土坑（第276図、図版69）

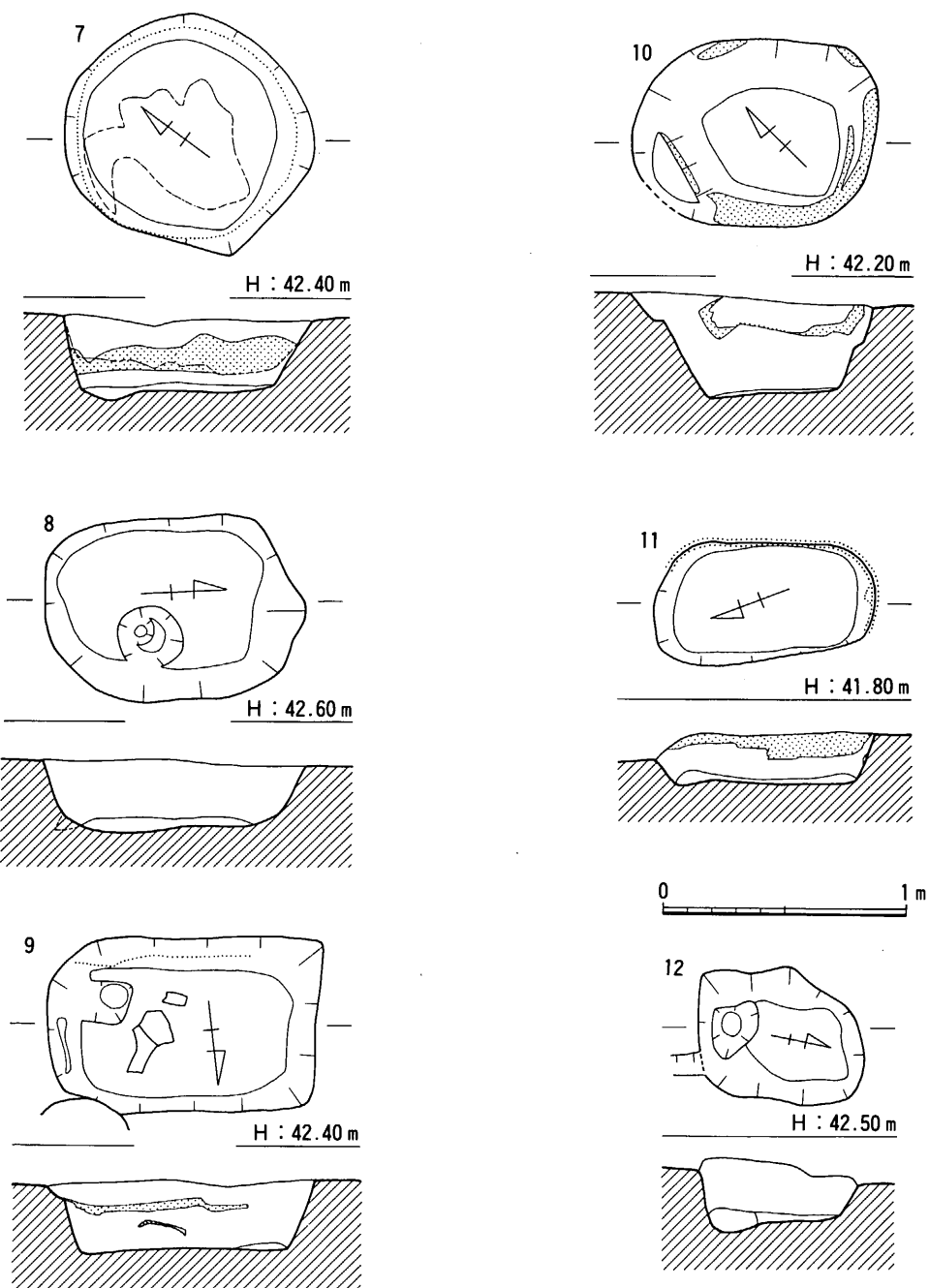
4号焼土坑の東北東約3mに位置し、不整だ円形を呈する。0.7m×0.6m、深さ0.2mを測る。断面形は舟底状を呈する。壁面は北西部を除いてよく焼けて赤変している。出土遺物は土師器小破片が1点である。

6号焼土坑（第276図、図版70）

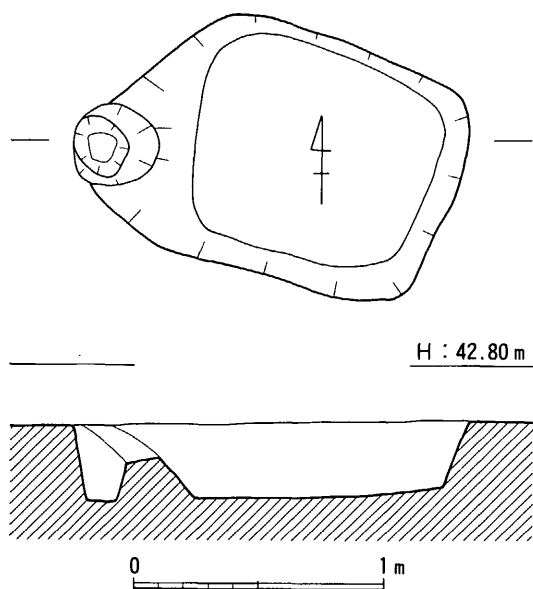
5号焼土坑の南約12mに位置し、ほぼ円形を呈する。9.2m×8.5m、深さ約0.15mを測る。床面はほぼ平坦で、壁面も外傾はするが直線的に立ち上がる。床面の北側半分に約2cmの厚さで灰が堆積している。壁面は北側と東側の一部が熱のため赤変している。出土遺物はなかった。



第276図 1号～6号焼土坑実測図 (1/30)



第277図 7号～12号焼土坑実測図 (1/30)



第278図 13号焼土坑実測図 (1/30)

m、深さ約0.2mの楕円形ピットがある。他の焼土坑と違い、壁面には熱のための赤変が見られない。埋土に炭粒が多く含まれていたことと、他の焼土坑と規模・プラン等が似ていることより焼土坑に含めたものである。出土遺物は、縄文土器と土師器数点がある。

9号焼土坑 (第277図、図版71)

8号焼土坑の南南西約5m、16号墳の周溝中央付近に位置する。周溝検出時にはわからなかったものである。やや隅丸気味の長方形を呈し、長軸長1.1m、短軸長0.7m、深さ0.3mを測り、底部は平坦である。東側短壁面近くに小ピットがあるが、古墳周溝内に多く見られるピットと同じようなもので、焼土坑に伴うものとは思えない。床面から約10cm浮いて木炭片がやや集積していた。西側の短壁面を除いて壁面上位の一部が熱のため赤変していた。出土遺物はなかった。

10号焼土坑 (第277図、図版71)

2号焼土坑の東約1.2mに位置し、不整円形を呈する。長軸長1.0m、短軸長0.78m、深さ0.35m～0.4mを測る。床面は平坦で、また北西壁の一部にテラス状の平坦部がある。壁面上位の各所が熱のため赤変している。出土遺物はなかった。

11号焼土坑 (第277図、図版72)

10号焼土坑の北東約17.5mに位置し、他の焼土坑とはかなり離れている。楕円形を呈し、長軸長0.9m、短軸長0.5m、深さ0.2mを測る。床面はほぼ平坦で、壁面も直線的に立ち上がる。また、主に東側長壁面と南側短壁面上位が熱のため赤変している。出土遺物は須恵器小破片1点である。

7号焼土坑 (第277図、図版70)

6号焼土坑の東南約6mに位置し、ほぼ円形を呈する。10.2m×9.5m、深さ0.3mを測る。床面は一部ややくぼむが、ほぼ平坦である。壁面もほぼ直線的に立ち上がる。中央付近には約10cmの厚さで灰が堆積する。また、壁面は灰の堆積した面付近より上位が熱のため赤変している。ただ、最上位までは及んでいない。出土遺物は縄文土器と思われる小破片数点と黒曜石剥片がある。

8号焼土坑 (第277図)

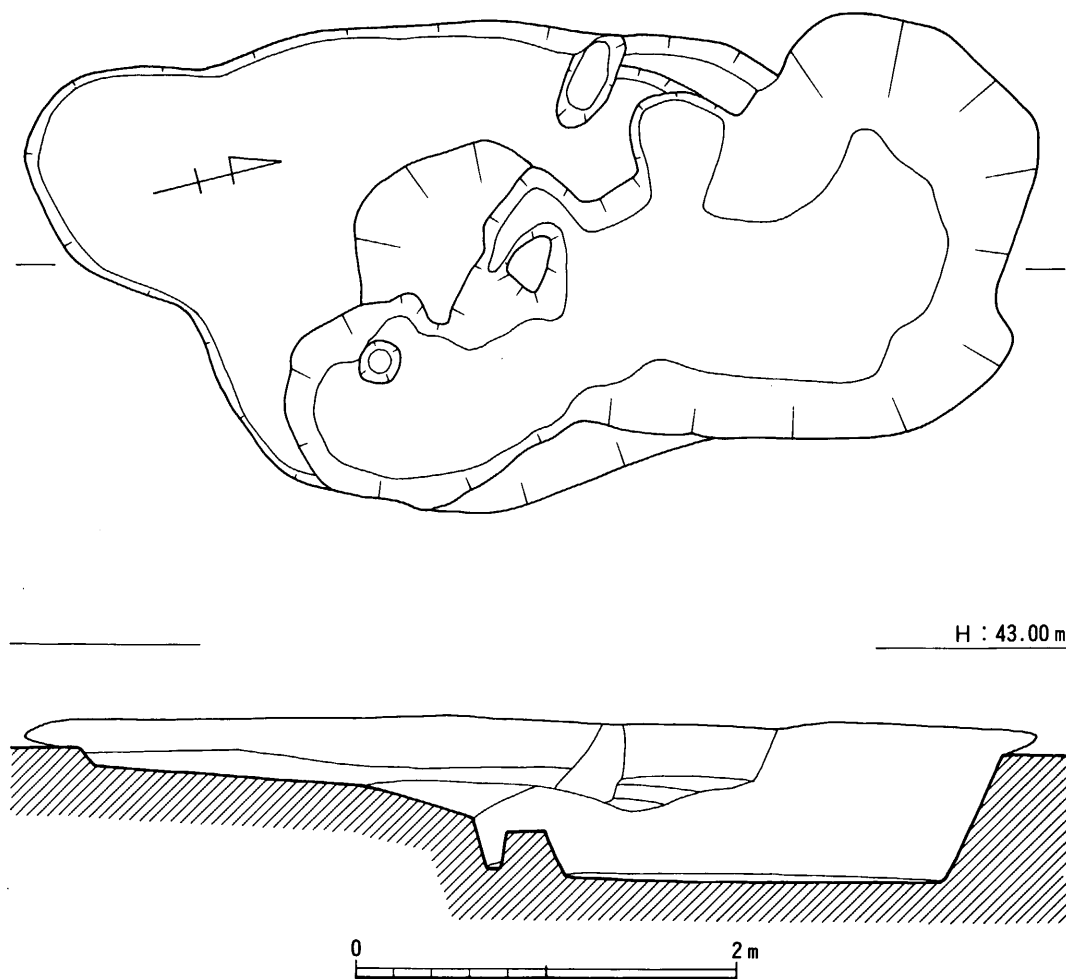
7号焼土坑の南西約4mに位置し、隅丸長方形形状を呈する。長軸長10.5m、短軸長7.5m、深さ0.3mを測る。床面はやや舟底気味である。床面東壁寄りに0.3m×0.25

12号焼土坑（第277図、図版72）

7号焼土坑の南4mに位置し、不整形なものである。0.68m×0.55m、深さ0.2m～0.25mの規模である。床面はほぼ平坦であるが、南側がくぼむ。熱のための変色、硬化は見られないが、埋土に黒色炭化物が比較的多く認められたので焼土坑とした。出土遺物はなかった。

13号焼土坑（第278図）

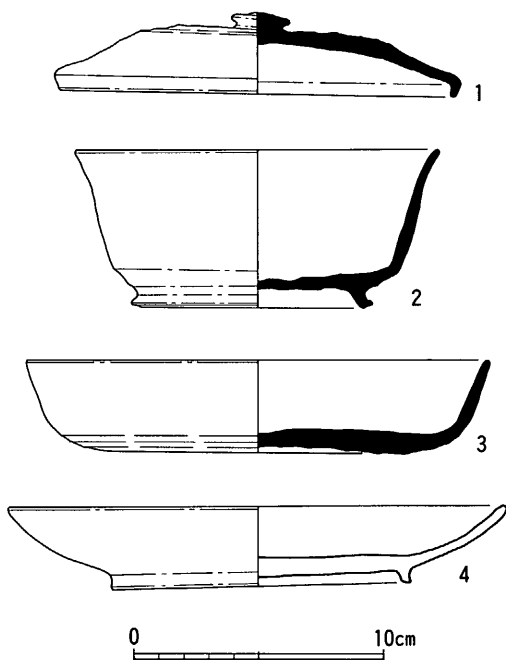
18号墳の前面、周溝が切れる部分に位置する。石室中心からの距離は5mほどである。西側が突出した五角形状を呈する。規模は、長軸1.5m×短軸1.0m、深さ0.3mである。床面はほぼ平坦であるが、西側で段が付き、突出部にはピットがある。壁面の立ち上がりは直線的である。12号焼土坑と同様に、壁と床には火を受けた痕跡を認めることができなかったが、埋土中に炭化物が多量に混入していたため焼土坑とした。出土遺物はなかった。



第279図 1号土坑実測図 (1/40)

(7) 土坑

形態的・規模的には廃棄土坑と同等、あるいはやや小振りであるが、遺物出土量がはるかに少ないものを単なる土坑として取り扱った。



第280図 1号土坑出土土器実測図 (1/3)

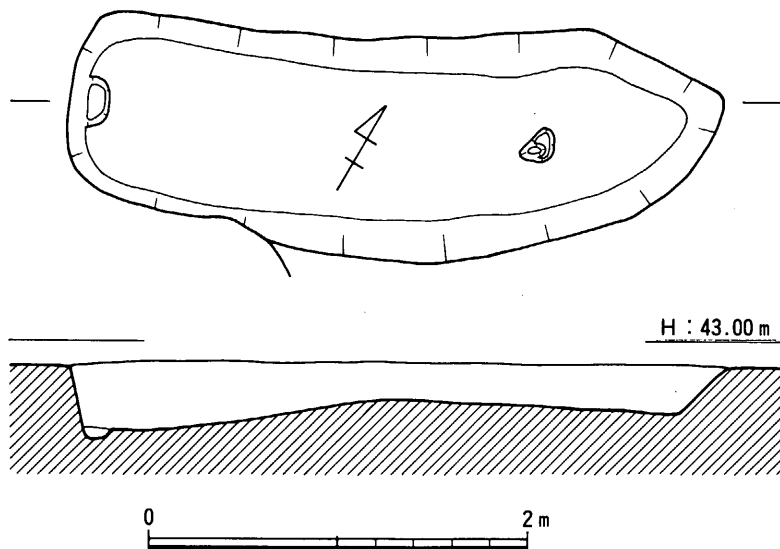
1号土坑 (第279図)

21号墳周溝の北西約6mに位置する。主軸はN-15°-Eである。南北方向に長い不整形を呈し、長軸長4.9m、短軸長2.5mを測る。床面には段とピットがあり、やや複雑な様相を呈している。最も深い部分で、深さ約0.8mを測る。壁は、部分によって深さの差はあるが、ほぼ直線的に立ち上がる。埋土中から、床面より浮いた状態で須恵器・土師器が出土したが、それらのうち4点を図示した。

出土遺物 (第280図、図版107)

須恵器

杯蓋 (1) 扁平なつまみが付き、口縁端部は折り曲げる。天井部外面に回転ヘラケズリを施し、他の部分を回転ナデとナデで仕上げる。つまみは貼り付けた後、回転ナデ調整を



第281図 2号土坑実測図 (1/40)

加える。

杯身（2） 高台が内側で接地し、口縁部が外湾気味に開くものである。底部外面はヘラ切り後粗くナデ、他は回転ナデとナデで仕上げる。高台は貼り付け後、回転ナデ調整を加える。

皿（3） 底部外面に回転ヘラケズリを施すが、不十分なため部分的に粘土が残存している。他の部分の調整は回転ナデとナデである

土師器

高台付皿（4） 全体的に磨滅しているため調整が不明であるが、底部外面には回転ヘラケズリを施している。高台は貼り付けである底部外面に黒斑がある。

2号土坑（第280図）

14号周溝の西約1.5mに位置し、13号墳の周溝の可能性のある遺構を切っている。主軸方向はN-61°-Eである。ほぼ東西方向に長い長方形を呈し、長軸長3.45m、短軸長0.95mを測る。床面は中央部がやや高く、2個の小ピットがある。深さは0.2m~0.4mほどである。壁は直線的に立ち上がるが、西側の方が垂直に近い。床面からはほぼ完形の須恵器が出土した他、埋土中から須恵器、土師器の小片が出土した。

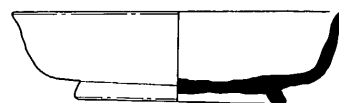
出土遺物（第282図、図版107）

須恵器

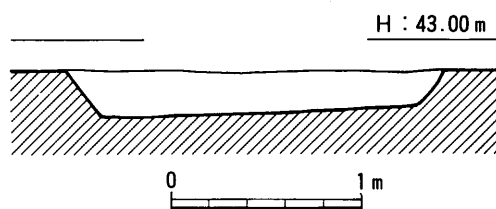
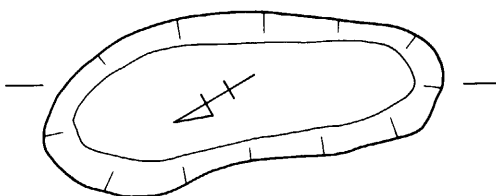
杯身 底部と体部の境は丸味を持ち、口縁端部はわずかに外湾気味である。底部外面はヘラ切り後粗くナデ、他は回転ナデとナデで仕上げる。高台は貼り付け後、回転ナデ調整を加える。

3号土坑（第283図）

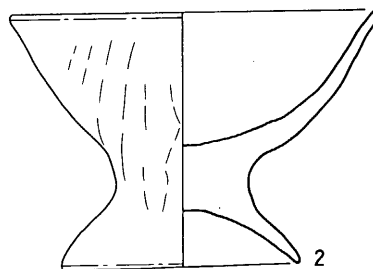
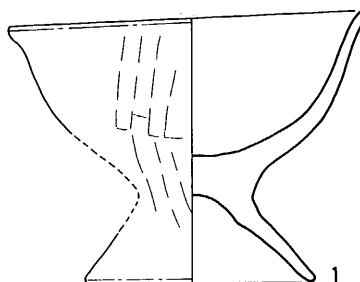
19号墳周溝の北東約1.5mに位置する。主軸方向はN-17°-Eである。ほぼ南北方向に長い楕円形を呈し、長軸長2.13m、短軸長0.8mを測る。床面はほぼ



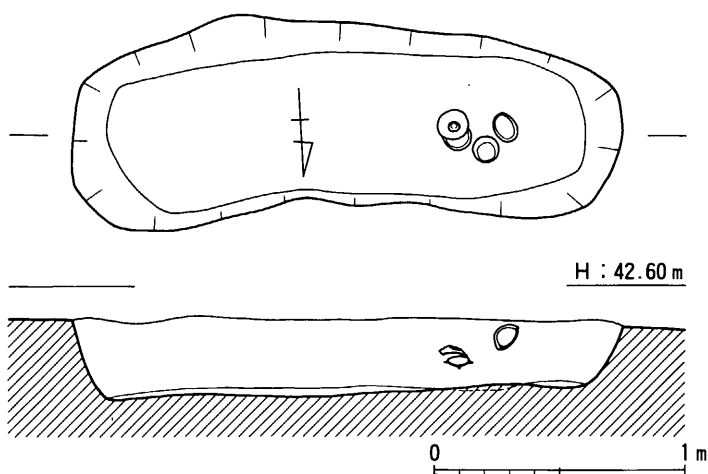
第282図 2号土坑出土土器
実測図（1/3）



第283図 3号土坑実測図（1/40）

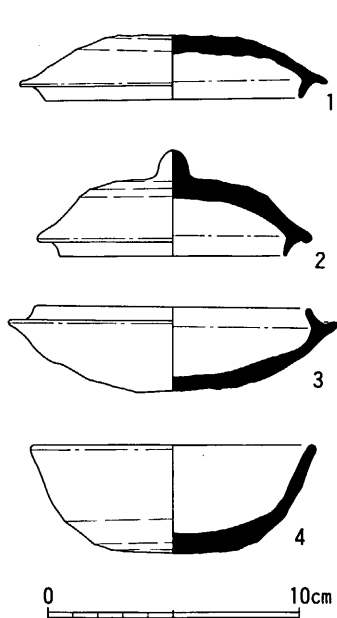


第284図 3号土坑出土土器実測図
（1/3）



第285図 14号土坑実測図 (1/30)

平坦であるが、北側ほど深くなっており、最深部では深さ0.25mほどを測る。壁は直線的ではあるが、緩やかに立ち上がる。埋土中から土師器の小片が出土したが、これらを接合したところ、ほぼ完形の高杯2個体となった。
出土遺物 (第284図、図版108)



第286図 14号土坑出土土器実測図 (1/3)

土師器

高杯 (1・2) 1・2ともに杯部から脚部にかけての外面に、ヘラ状の工具でナデたような痕跡が認められる。他の部分はヨコナデとナデで仕上げるが、1の杯底部内面には板状圧痕がある。1の脚部は直線的に伸び、2の脚部は内湾気味である。

14号土坑 (第285図)

20号墳周溝の東南4mに位置する。ほぼ東西方向に主軸N-88°-Wを持ち、ややゆがんだ長楕円形を呈する。長軸長2.2m、短軸長0.7m、深さ0.25m~0.3mを測る。床面は平坦で、壁側断面はやや丸味を持つ。床面から10cmほど浮いた状態で完形の須恵器杯身1、杯蓋3個が出土した。本来より上位にあったものが転落した可能性がある。

出土遺物 (第286図、図版109)

須恵器

杯蓋 (1・2) 1はつまみがなく、一見杯身のようにも見えるが、4と色調やヘラ記号が同一でセットになる可能性が高く、蓋としたものである。天井部外面は回転ヘラケズリする。うすいアズキ色を呈する。2は乳頭状のつまみを付けるもので、かえりは外に出る。天井部外面は回転ヘラケズリする。

杯身 (3・4) 3は立ち上がりを持つもので底部外面はヘラケズリしない。焼きは良い。4は立ち上がりのないもので、前記のように1とセットになる可能性の高いものと思われる。

底部外面は回転ヘラケズリ、内面は不定方向のナデを行う。

(8) 溝

調査区の全域において溝は検出されているが、耕作に伴って近年掘削されたと思われるものも多く、出土遺物を図示することができたのは、ここに載せた溝01から溝06だけである。遺物の出土量は、溝06以外は非常に少なかった。

溝01（別添付図）

北西から南東方向に走る溝である。北側では削平のためか途中で消失しているが、南側では端部と思われる部分を検出することができた。検出した長さは約23.3m、幅0.55m～1.83m、最も深い部分で0.4mほどを測る。遺物は、図示したもの他には、須恵器、土師器、黒色土器の小片が若干出土した程度である。

出土遺物

土師器（第287図、図版109）

杯（1） 丸底で、体部に屈曲を持つ杯である。全体的に磨滅しており、調整がわかりにくい。が、体部内外面にはヨコナデが認められる。底部外面には板状圧痕がある。

碗（2） やや磨滅気味であるが、内外面ともにヘラミガキが認められる。

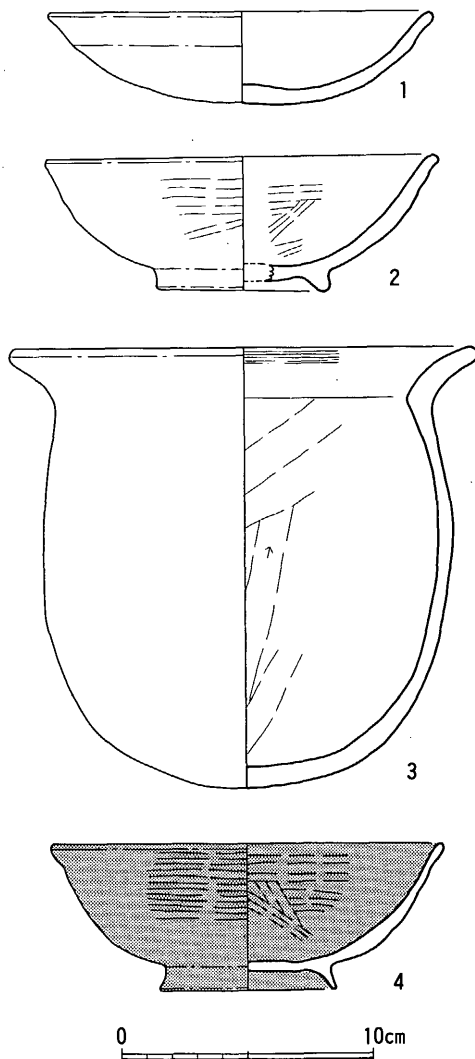
甕（3） 肥厚した口縁部が強く外反するものである。調整は、口頸部内外面がヨコナデと横方向のハケ目、胴部内面はヘラケズリ、胴部外面は磨滅のため不明である。

黒色土器（第287図）

碗（4） 両面とも燻すものである。底部外面に回転ヘラケズリ、体部内外面にはヘラミガキを施す。胎土中には径0.5mm程度の白色石英粒が含まれる。

石製品（第288図、図版114）

滑石製模造品（?）（1） 刀子の未製品かとも考えられるものである。長さ8.7cm、幅2.5cm、厚さは最大で1.9cm、最小で1.0cm、重さ49.5gである。全体をケズリや研磨で整える。



第287図 溝01出土土器実測図（1/3）

穿孔が1孔ある。

紡錘車（2） 滑石製と思われるもので、径5.2cm、厚さ1.1cm、孔径7mm、重さ50.2gである。

1面は比較的なめらかであるが、もう1面は風化が進んで凹凸が多い。

溝02（別添付図）

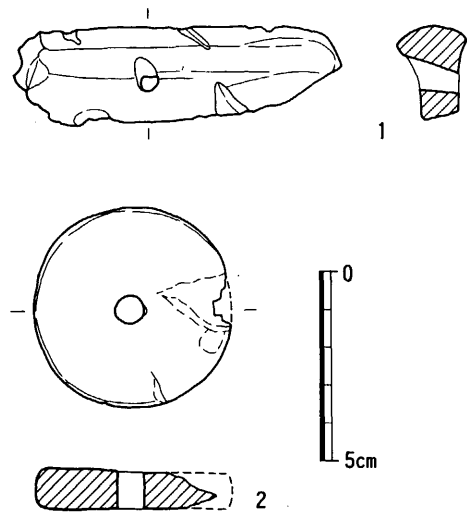
調査区を北東から南西方向に走る溝である。北側は調査区域外に伸びるが、南側はS K 07、S K 09のある付近で消失する。検出した長さは約41.5m、幅は0.5m～1.2mを測る。非常に浅い溝で、最も深い部分でも0.15mほどである。溝03、S K 09、S K 14と切り合い関係にあり、溝03とS K 14よりは本遺構の方が新しいが、S K 09との新旧関係は、調査段階では明らかにすることができなかった。遺物は、図示したものの他には、須恵器、土師器の小片が若干出土した程度である。

出土遺物

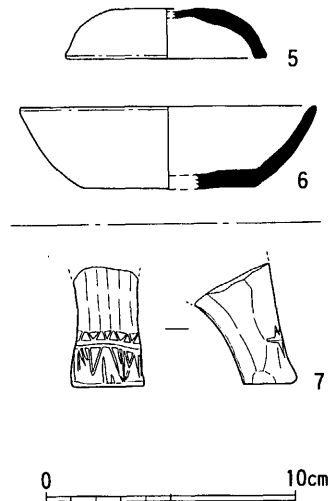
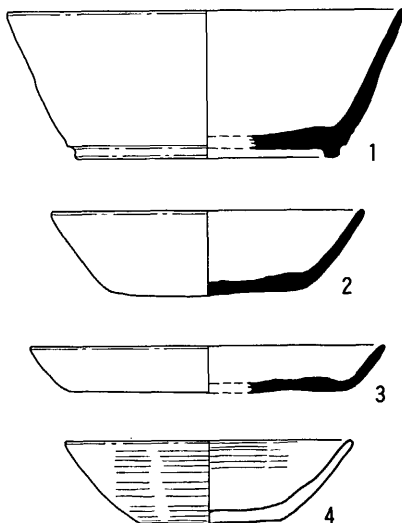
須恵器（第289図）

杯身（1・2） 1は高台が付き、2は無高台である。ともに底部外面をヘラ切り後粗くナデ、他の部分を回転ナデとナデで仕上げる。2の底部外面には板状圧痕がある。

皿（3） 底部外面をヘラ切り後粗くナデ、他の部分を回転ナデとナデで仕上げる。体部外面



第288図 溝01出土石製品実測図（1/2）



第289図 溝02・溝03・溝04出土土器実測図（1/3）

に灰をかぶっている。

土師器 (第289図)

杯 (4) 底部外面に回転ヘラケズリ、他の部分にはヘラミガキを施す。焼成は良好で、内外面とも橙色を呈する。

石製品 (第290図)

砥石 不整形をして、全体で7面あるうち、5面が使用されている。広い面を成す4面のうち2面の隣り合う面が成す辺が角張らず丸味を持つ (第290図右側の断面図の右下辺に当たる)。

溝03 (別添付図)

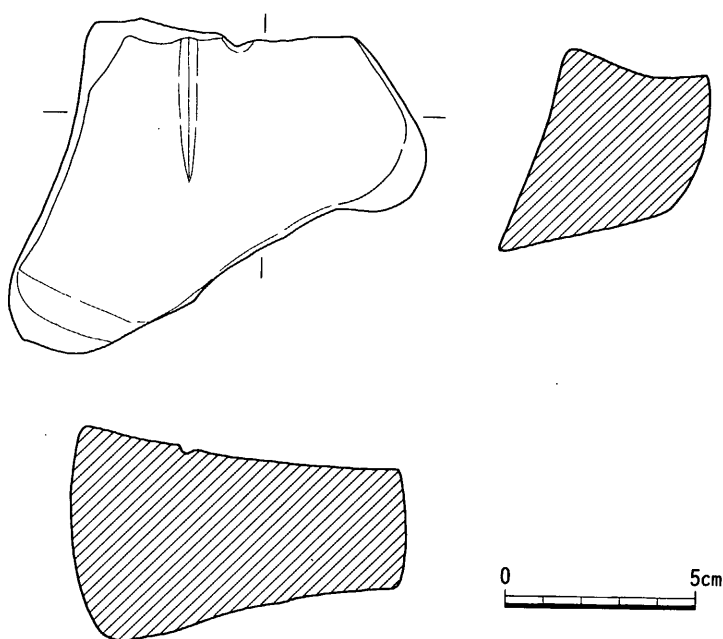
調査区中央部を、北東から南西方向に蛇行しながら走り、9号墳に至って急激に北西方向へと進路を変える溝である。北端部はSK07と切り合っており、そこからさらに北の方向へは伸びない。西端部は調査区外に伸びる。検出した長さは約81m、幅は0.5m～1.2mである。深さは、最も深い部分でも0.2m弱しかない。今回報告する遺構の中では、16号住居跡、17号住居跡、9号墳、そして前述のSK07と切り合っている。新旧関係は、前3者よりは本遺構の方が新しく、特に9号墳においては周溝の一部を掘り直していると考えられる。SK07との新旧関係のみ、調査の段階で明らかにできなかった。出土遺物はきわめて少かったが、それらのうちの1点がヘラ書きのある須恵器であった。

出土遺物

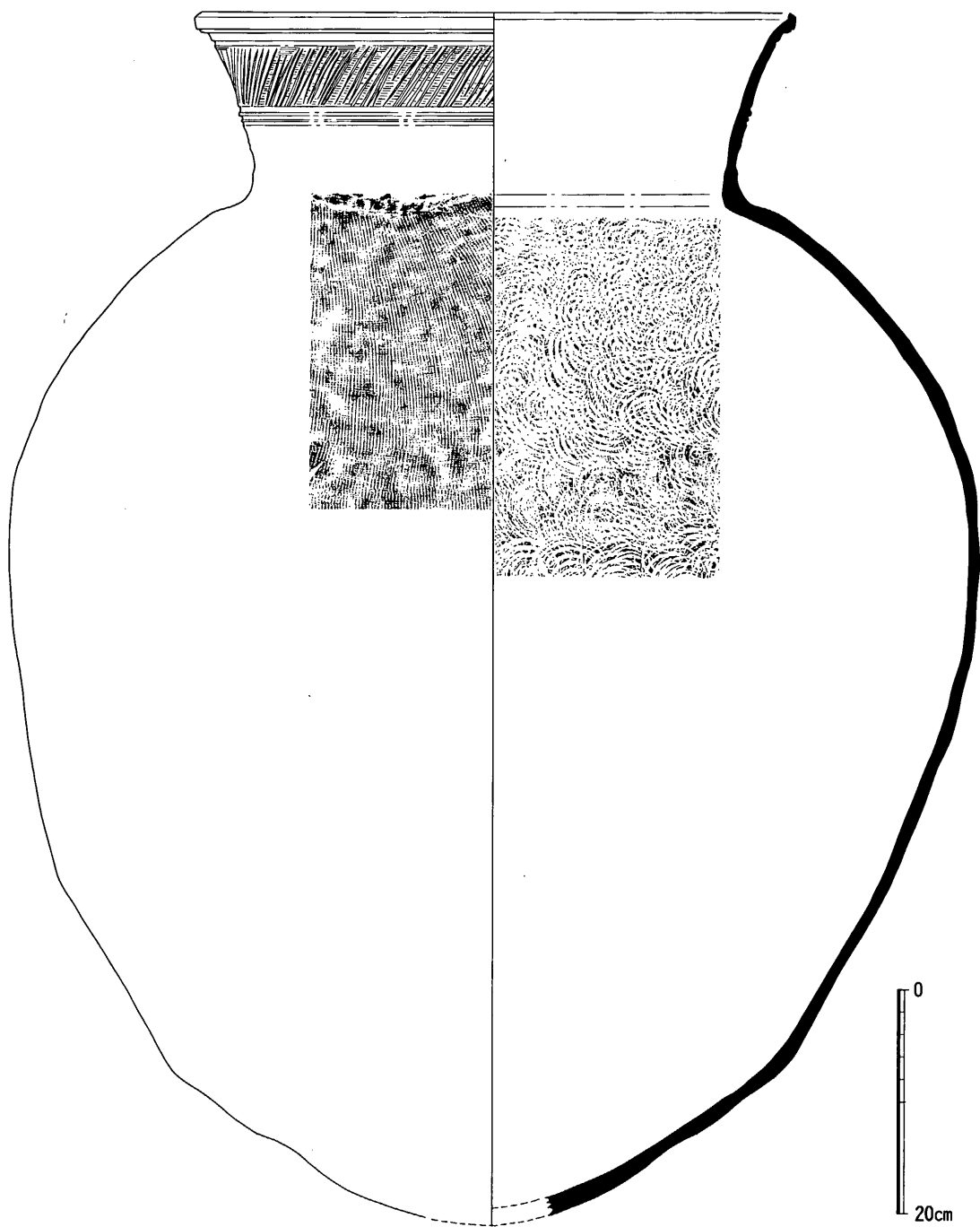
須恵器 (第289図)

蓋 (5) 復元口径8.0cm、器高2.0cmほどの小型のものである。天井部外面をヘラ切り後粗くナデ、他は回転ナデで仕上げる。外面に灰をかぶっており、天井部外面にはヘラ記号がある。

杯身 (6) 底部外面をヘラ切り後ナデ、他を回転ナデとナデで仕上げる。



第290図 溝02出土石製品実測図 (1/2)



第291図 溝05出土土器実測図 (1/6)

溝04（別添付図）

16号住居跡の東側で、溝03と平行するように走る。短い溝である。北端部は他の溝に切られ、南端部は途中で消失している。特に西側の立ち上がりは、東側よりも先に消失する。検出した長さは約13m、幅約0.8mである。深さは、最も深い部分で10cm弱と、きわめて浅い。遺物は、図示したもの他、須恵器の小片が2点出土したが、うち1点にヘラ書きがあった。

出土遺物

須恵器（第289図、図版109）

獣脚（7） 須恵質で、残存高4.8cmを測る。先端部には、浮彫りで文様を施す。他の部分はヘラケズリで仕上げている。

溝05（別添付図）

11号墳の南側を東西方向に走る溝である。11号墳との距離は、最も接近した部分で約1mである。東西両端とも調査区外に伸びており、特に西側の調査地では続く部分の検出につとめたが、検出できなかった。検出した長さ約7m、幅1.35m～2.5m、最も深い部分で0.4m弱を測る。遺物は、図示した須恵器の甕が、横向きに置かれたままつぶれたような状態で出土した他には、須恵器、土師器の小片が若干見られる程度である。

出土遺物

須恵器（第291図）

甕（1） 口径53.2cm、器高108.1cm、胴部最大径86.2cmを測る大型の甕である。口縁部は突帯により複雑な様相を呈する。頸部外面上位と中位の間は、カキ目を施した後、ヘラ描きで連続斜線文を加える。頸部外面下位は、カキ目を回転ナデでナデ消している。口縁部と頸部内面は回転ナデ調整である。胴部外面は平行叩き、内面は同心円状当て具痕が残るが、底部外面では平行叩きを回転ナデでナデ消している。焼成は良好であるが、焼きひずみが激しい。

溝06（別添付図・第292図、図版73）

調査区の東端で検出されたもので、古墳の周溝を切り、蛇行している。幅は1～2mであるが、1.5m程度の部分が多い。深さは約0.6mで、北端が南端より約20cm低くなっている。水の流れは南から北の方向だったことが推測できる。断面はV字に近い部分もあるが、全体にゆるやかな半月形とでもいうべき部分が多い。埋土は図に示すとおりであるが、黒味がかかった土が多い。南から25、26、24、27号墳の間をぬうように続くが、古墳の墳丘を避け、周溝を利用して掘られたことが推測できる。

出土遺物は須恵器、土師器、黒色土器がある。

出土遺物

須恵器（第293図、図版109）

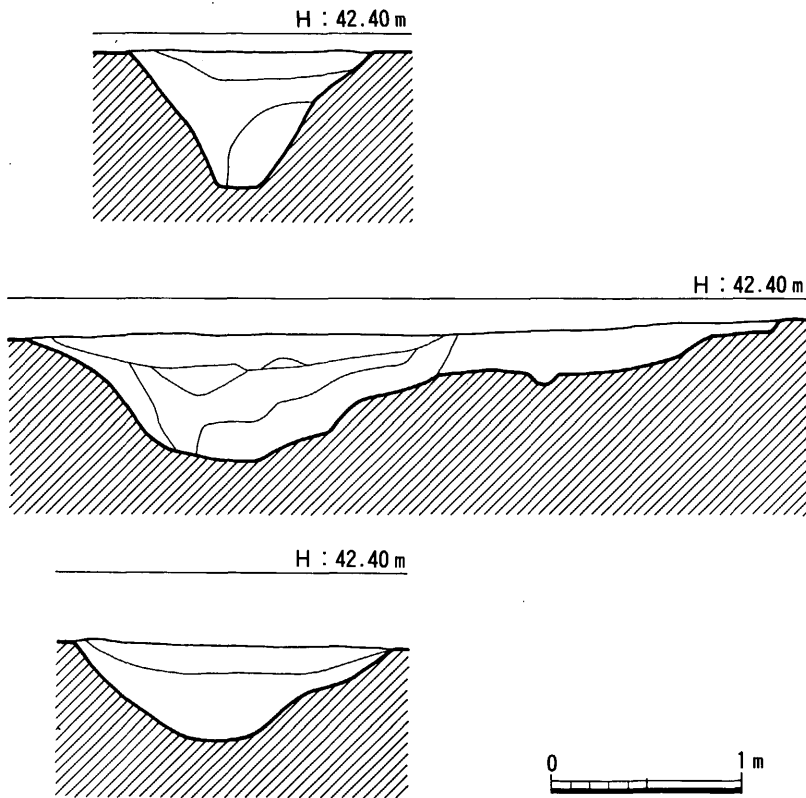
杯身（1～6） 高台の付くものと付かないものがある。1・2の高台は底部端からやや内側

に付けられ、断面が角張るものである。器高も低い。それに対し3～5は器高が高く、高台は体部端に体部と一体となった形で付けられる。5の底部外面には板状圧痕が付く。その他の底部はヘラ切り未調整かヘラ切り後軽くナデるだけである。体部内外面は回転ナデ、底部内面は不定方向のナデである。5・6はやや焼成不良で淡黄灰色を呈する。6は淡褐色を呈し、土師器か須恵器かよくわからないものである。ヘラ切り未調整。体部内外面と底部内面には回転ナデが見られる。

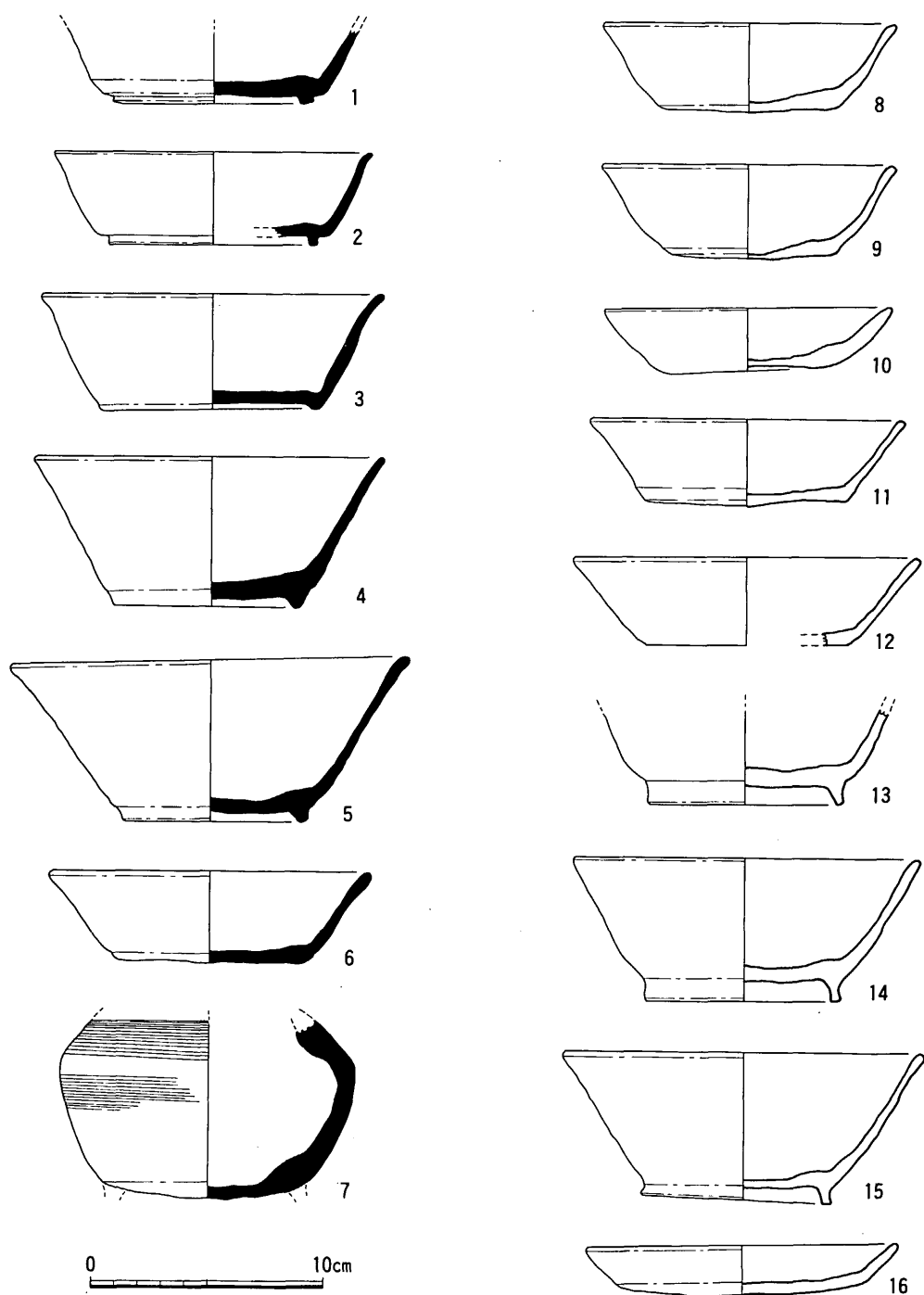
壺（7） 胴部のみで、かつ高台もはずれたものである。肩部付近から上位にはカキ目、下位には回転ナデが認められる。底部外面はナデつけたあとがある。

土師器（第293・294図、図版110）

杯身（8～15） 調整は須恵器と同様のため、須恵器か土師器か迷うものが多い。高台の付かないものでもやや浅いもの（10）とそうでないものがある。8・9は体部下位がやや外ぶくらみ気味になるものである。底部外面には板状圧痕が見られるが、簡単にナデている。底部内面は不定方向のナデ、体部内外面は回転ナデである。10は底部と体部の境がナデによって丸く作



第292図 溝06断面図 (1/40)



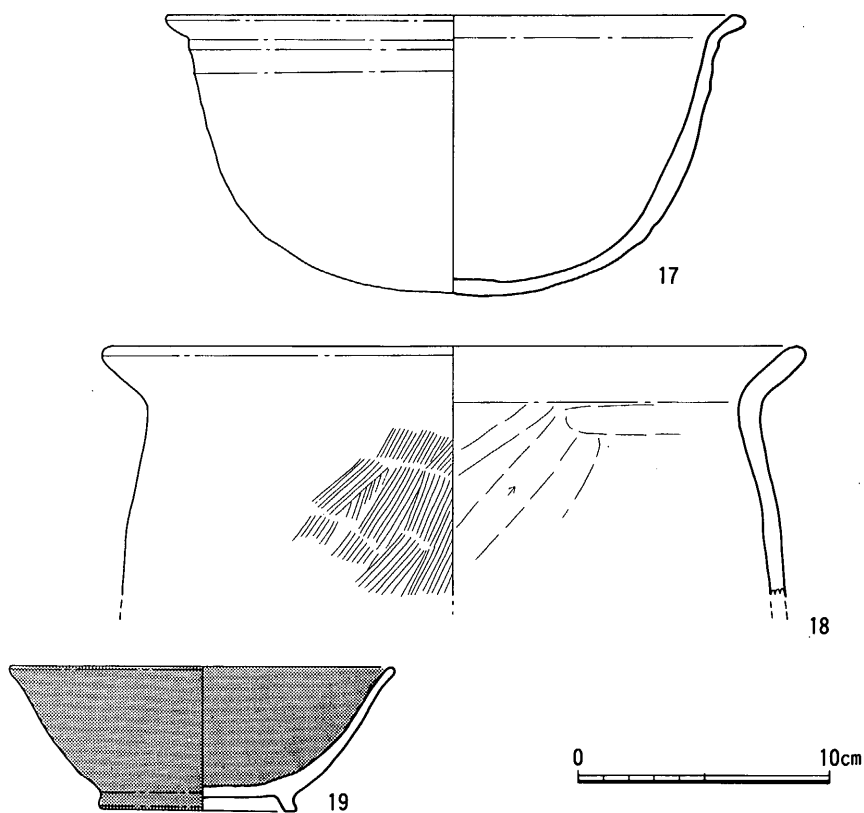
第293図 溝06出土土器実測図① (1/3)

るもので、底部内面と外面広い範囲にわたって有機質によるものか暗黒色化している。11はヘラ切り未調整のもので、8・9に比べて体部が直線的に外に開く。12はにぶい赤褐色を呈するもので、8～11が淡黄灰色を呈するのとは様相を異にする。ただし、口縁端部付近の内外面が黒色化している。13～15は高台の付くもので、13の体部下位がやや丸味を持つが、基本的には直線的な体部を持つ。須恵器に比べて、高台が高くしっかりしている点が違う。14の内面も10と同様に暗黒色化している。あるいは黒色土器の燻しがほとんどとれたものかもしれない。

皿 (16) 底部が完全に平坦ではないが、底部と体部の境は明瞭である。ヘラ切り後簡単にナデる。底部内面と外面広範囲が黒色になっている。

鉢 (17) 半球形の胴部と短く外反する口頸部からなるもので、胴部上位と口頸部内外面をヨコナデ、胴部内面をナデ、底部外面はハケ目のあとナデている。外面上位と内面口頸部付近に有機質らしきものの付着が見られる。

甕 (18) 外反する口頸部を持つ甕で、口頸部内外面はヨコナデ、胴部外面はハケ目、内面はヘラケズリが見られる。焼成の良いものである。



第294図 溝06出土土器実測図② (1/3)

黒色土器（第294図）

碗（19） だいぶ燻しがとれているが、底部外面と体部下位に黒色部分が残る。ゆるやかに外反する体部を持つ。底部内面はミガキと思われる。

（9） その他の遺構

集石遺構（第295図）

31号住居跡の南西隅に接した状態で検出されたものである。人為的な集石なのか疑問があるが、検出状態について報告したい。集石は不整形の落ち込みを掘って検出された。人頭大の石2個とその3分の1から4分の1程度の石5個からなる。後者の石のうち3個はやや細長いものである。下の底部はおおよそレベルがそろっている。集石の下を精査すると、図のように真下から周囲にかけて不整形の浅い落ち込みが3基検出された。これらから出土遺物はない。発掘区内では縄文土器や縄文時代の遺構も検出されているので、当該期の遺構の可能性もあると考えたものである。

（10） その他の遺物

鉄器（第296図）

1はピットから出土したものであるが、2は出土地点不明である。

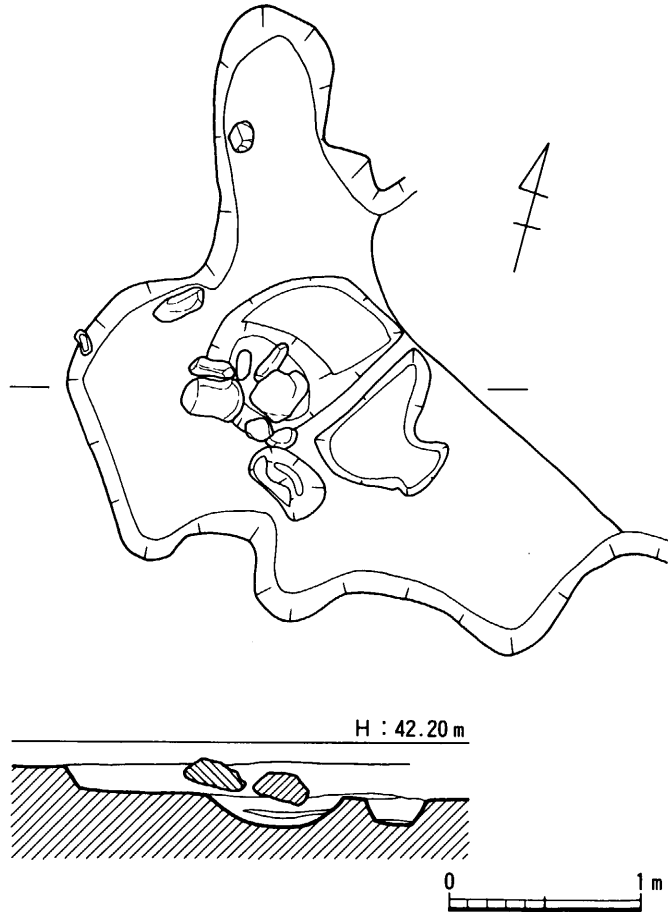
鏃（1） 異形斧箭式に属するものと思われる。残存長4.9cmを測る。

不明鉄器（2） 鏃の残欠であろうか。残存長は6.0cmである。

須恵器（第297・298図、図版110）

次項に述べる土師器と並んで、いずれもピットの埋土中から出土したものである。記述にあたって番号が前後するため煩瑣ではあるが、ピットごとに分けて図示した。

杯蓋（4・10） ともにかえりを持ち、11にはつまみが付



第295図 集石遺構実測図（1/40）

く。天井部外面の調整は、4 がヘラ切り後粗いナデ、11は回転ヘラケズリである。4 の天井部外面にはヘラ記号がある。

杯身（1・2・5・7・11） 1・2・7は高台が付き、5・12は付かない。高台が付くものについては、2の高台が底部と体部の境に貼り付けられ、外に踏んばる。体部外面は回転ヘラケズリをナデ消している。高台の付かないものは、ともに底部外面をヘラ切り後粗くナデる。12の底部外面にヘラ記号がある。

高杯（3） 脚部のみ残る。内外面ともに回転ナデ調整を行い、シボリ痕がある。

瓶子（6・8・9） 6は小型のもので口頸部を欠く。底部外面はヘラ切り後ナデる。胴部外面に灰をかぶっており、一部自然釉化している。8も口頸部を欠くが、底部と胴部の境に、外へ踏んばる高台が貼り付けられる。底部外面は回転ナデ、胴部外面の肩部近くまで回転ヘラケズリを施し、肩部には浅い沈線が1条めぐる。外面はほぼ全面に灰をかぶっている。9は口縁部のみを図上復元した。底部は上げ底気味である。底部外面に回転ヘラケズリを施す。胴部は中位まで回転ヘラケズリを施し、その上から手持ちヘラケズリを加える。胴部上位から口頸部にかけては回転ナデ調整である。

壺（12） 小型の短頸壺で、全体の2分の1ほどの破片である。口頸部は短く緩かに外反する。底部外面は、棒状の原体で不定方向にこすったような状況を呈する。

土師器（第298図）

杯（13） 底部の殆どを欠くが、体部は内外面ともに丁寧なヘラミガキを施す。外面の底部との境付近に火樗状のものが見られる。

土製品（第299図、図版114）

土錘（?）（1） 片方が折れていて長さはわからない。端部より折損部の径が大きい。1号墳腰石掘り方からの出土である。

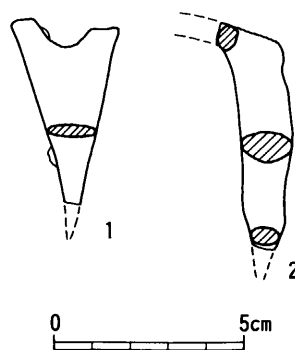
石製品（第299図、図版114）

砥石（2） 28号墳周溝からの出土である。短辺の面2面と長辺の面1面が使われている。広い面1面が暗褐色になっている。

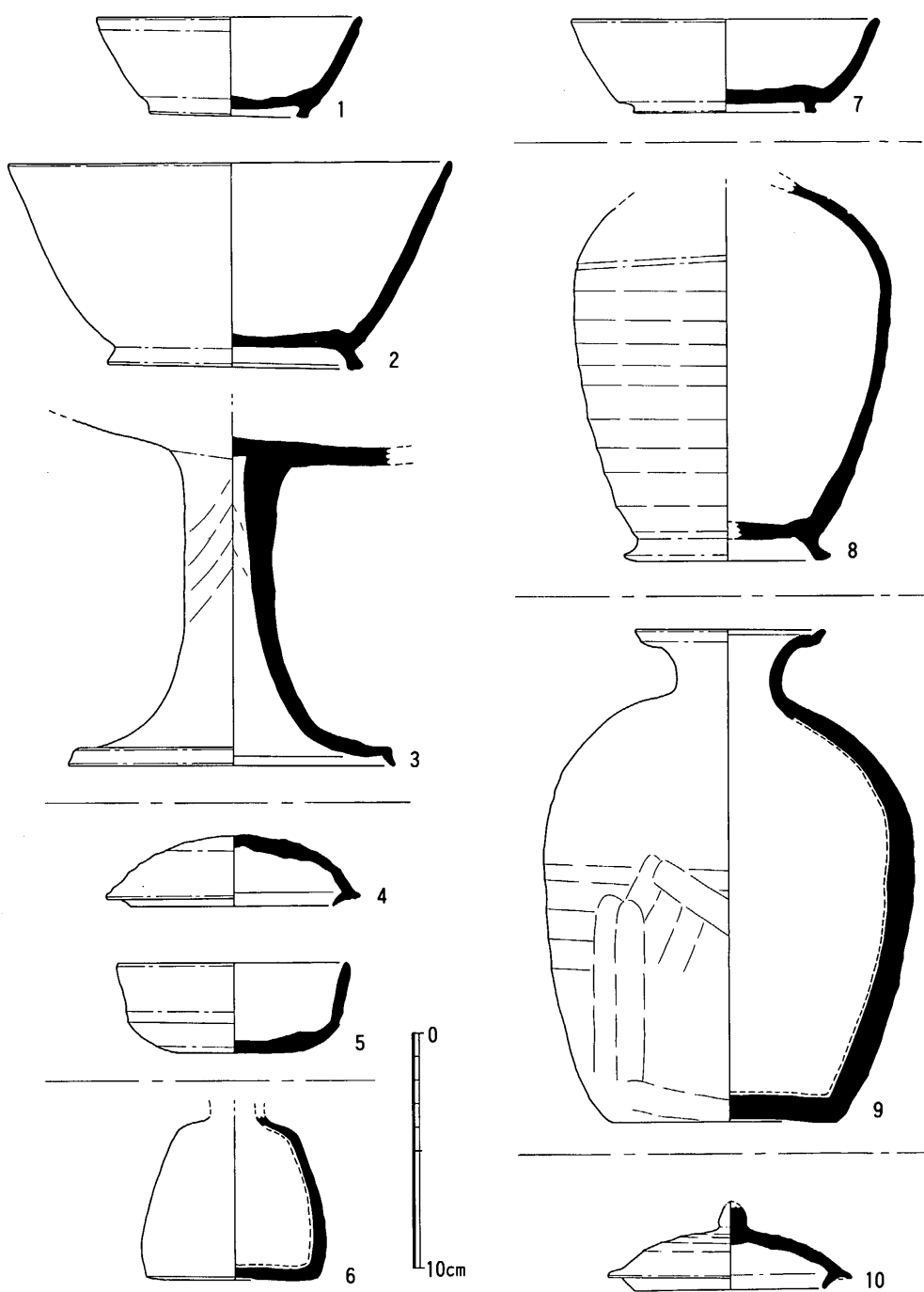
紡錘車（3） 縦断面が台形を呈するもので、最大径2.9cm、高さ1.4cm、重さ30.35gである。滑石製と思われる。両端面は研磨のため平滑になっているが、側面はケズリのため荒れた状況である。16号墳と溝06の間の、溝状遺構から出土したものである。

石鏃（第300図、図版125・126）

石鏃は、これまで述べてきたように、住居跡、古墳、SK、ピットなどから出土した。すべて黒曜石、あるいはサヌカイト



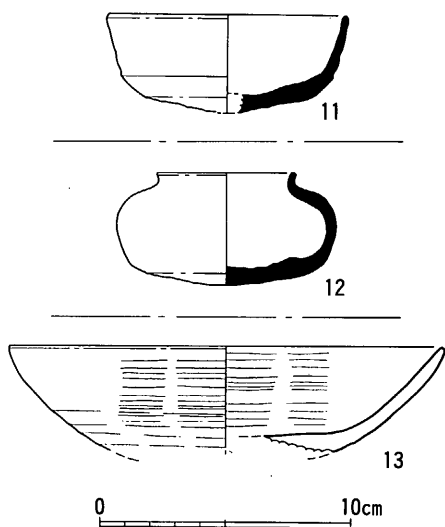
第296図 その他の鉄器実測図（1/2）



第297図 その他の土器実測図① (1/3)

製の打製石鏃である。半製品や破碎されたものを含めると、総数は67点に達する。ここでは、それらのうち20点を、形態と石材によって6種に分けて図示することとした。

1・2は黒曜石製で抉りが浅く、平面形が二等辺三角形形状を呈するものである。図版125に相当する。1は完形品である。3・4は黒曜石製で抉りがなく、平面形は二等辺三角形を呈するものである。図版125に相当する。5・6は黒曜石製で抉りが特に深く、脚の踏ん張りが強いものである。図版126に相当する。6は完形品である。7～10はサヌカイト製で抉りが深く平面形が二等辺三角形形状を呈するものである。図版126に相当する。7・9は完形品で、特に7は厚い。11～13はサヌカイト製で抉りの浅いものである。図版126に相当するものである。このタイプは平面形が、11のような正三角形に近いもの、12のような小型の二等辺三角形形状のもの、13



第298図 その他の土器実測図② (1/3)

のような大型の二等辺三角形形状を呈するもの、の3種類に分けられる。12・13は完形品である。14～20は黒曜石製で抉りが深く、平面形は二等辺三角形形状を呈するものである。図版126に相当する。14～16は小型、17～20は大型、と2種類に分けられる。17・20は完形品で、特に17は厚い。

その他の石器 (図版127)

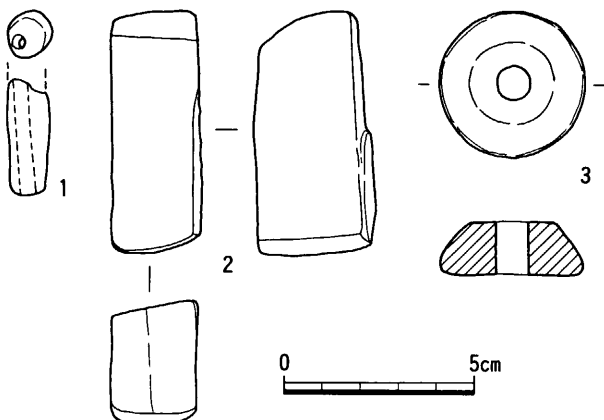
磨製石斧、打製石斧が3点ずつ、分胴型石器、磨り石、石匙が1点ずつ出土しているが、図化しなかった。2が3号墳石室の検出面から出土した他は、いずれも古墳の周溝埋土中から出土した。

ヘラ書き須恵器 (図版129・130)

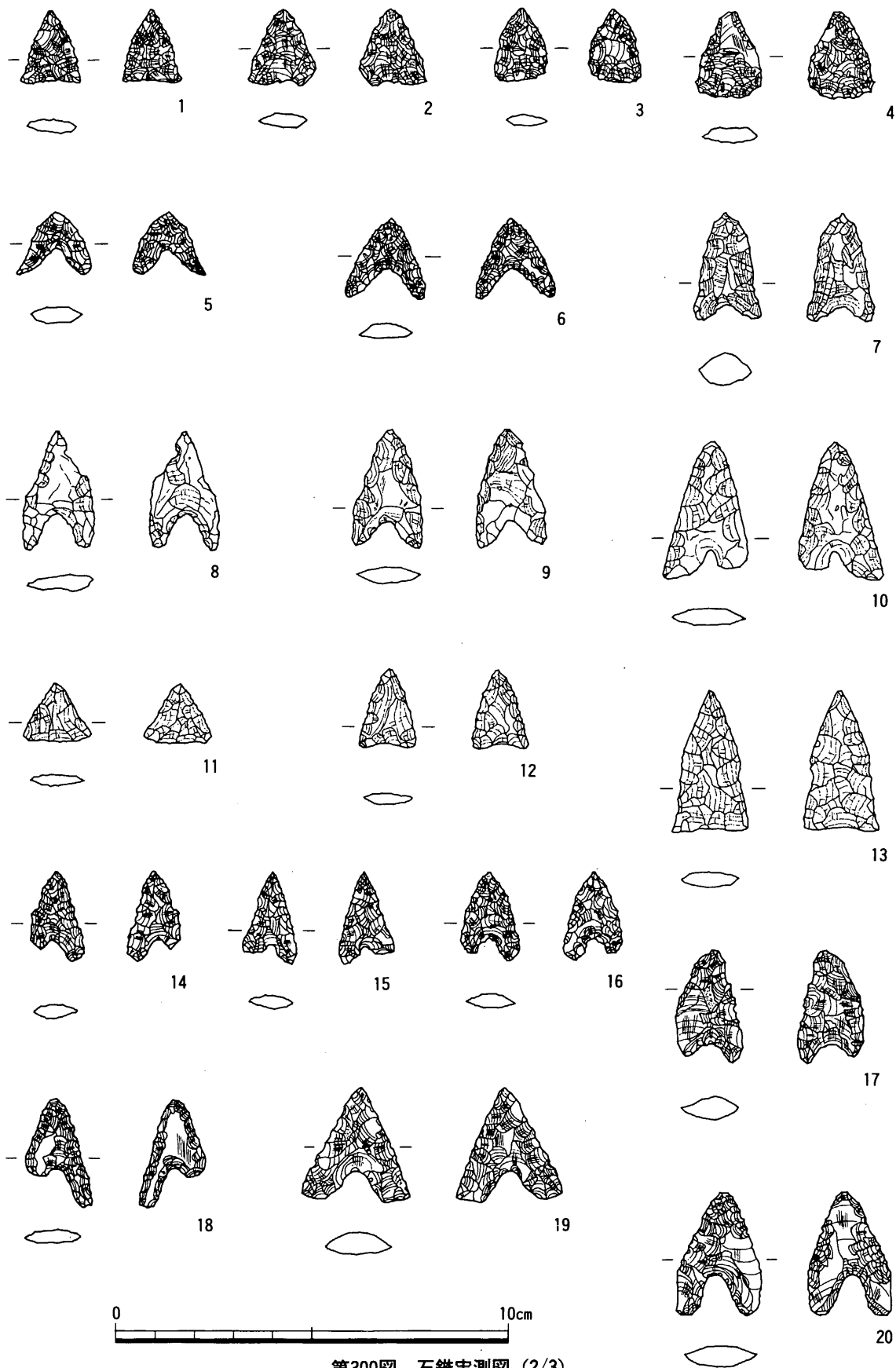
全部で9点出土した。出土地点は、1、2がSK12、3がSK07、4がピット、5がSK13、6がSK09、7が遺物包含層、8が攪乱溝、9が溝03である。1は第141図の101、2は同図の104である。

重ね焼、焼きひずみの例 (図版131)

出土した須恵器の中で、重ね焼き、焼きひずみの特に顕著な例を掲載した。



第299図 その他の土製品・石製品実測図 (1/2)



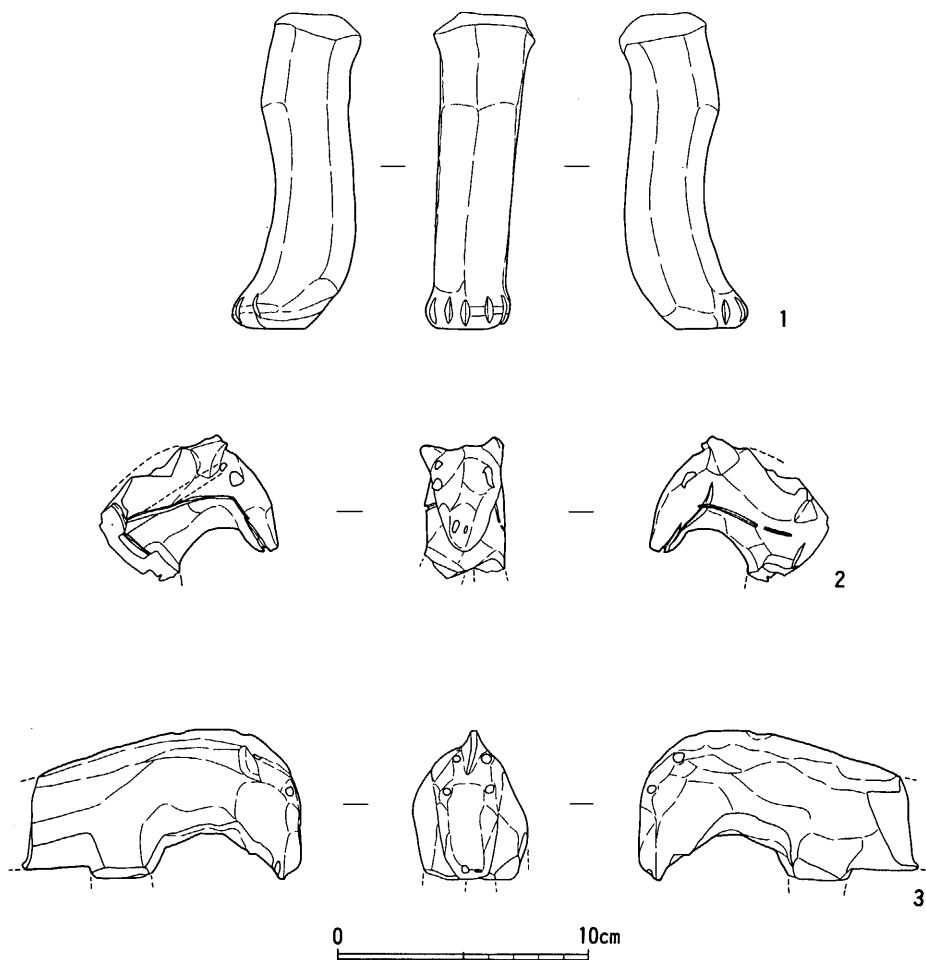
第300図 石鏃実測図 (2/3)

日ノ浦遺跡群出土遺物（第301図、図版132）

日ノ浦遺跡群については、平成6年度に調査報告書を刊行したが、その際報告から洩れた遺物をここに掲載した。3点とも、重機による表土剥ぎの時に出土したものである。

獣脚（1） 焼成良好な土師質で、明赤褐色を呈する。脚部のみの残存で、本来この上についていた器形は不明である。全体にヘラで面取りを施し、端部では5ヶ所に切り込みを入れ、足指を表現している。

土馬（2・3） 2は須恵質で焼成は良好である。首から頭部にかけての残存で、残存高5.7cm、残存長6.1cmを測る。両側面ともに引手、手綱、障泥を線刻で、前輪を貼り付けで表現している。右側の耳の下から首の中央部にかけて、径4mm～5mm程度の穿孔がある。3も須恵質であるが、焼成はやや不良である。後肢と尾、および脚部を欠く。粘土をつまみ出してたてがみを表現している他に、右側面のみに耳の表現がある。目、鼻、および耳の下に穿孔が見られる。



第301図 日ノ浦遺跡群出土遺物実測図（1/3）

IV. ま と め

塚原遺跡群の調査結果は前述のとおりである。以下に簡単にまとめを行いたい。

1. 各遺構の時期について

一部の遺構を除けば、塚原遺跡群の年代はおおよそ5世紀後半から9世紀初頭にかけてである。この項では出土遺物を中心に、遺構の形態、切り合い関係等を加味し、各遺構の時期について考えていきたい。なお、古墳群については若干詳しい記述を行った。

(1) 竪穴住居跡

1号住居跡

2号住居跡に切られており、これより古いことは間違いないが、出土遺物からは時期を特定することができなかった。

2号住居跡

第21図1の杯蓋から、本遺構の時期は6世紀末～7世紀初頭と考えられる。

3号住居跡

床面出土の第5図1から、本遺構の時期は縄文時代晩期と考えられる。

4号住居跡

欠番

5号住居跡

須恵器蓋杯の組み合わせ、他の須恵器の様相から、6世紀末～7世紀初頭の時期が考えられる。

6号住居跡

欠番

7号住居跡

第27図1の須恵器杯身、2の土師器碗から、8世紀半中頃～後半の時期が考えられる。

8号住居跡

図示することのできた出土遺物が2点しかないが、第29図1の須恵器杯蓋はⅤ期、2の須恵器杯身はⅣ期に属するものである。したがって、6世紀末～7世紀前半の時期が考えられる。

9号住居跡

8号住居跡に切られ、10号住居跡を切っている。また、10号住居跡は11号住居跡に切られている。8号住居跡は前述のように6世紀末～7世紀前半、11号住居跡は後に詳しく述べるが6世紀末～7世紀初頭に属する。したがって、10号住居跡よりは新しく、かつ6世紀末までには

埋没したものと考えられるが、遺物が殆ど出土しなかったため細かい時期決定はできなかった。

10号住居跡

8・9・11号住居跡と切り合い関係にあり、それらのいずれよりも古い。したがって、遅くとも6世紀末までには埋没しており、かつ埋没した時期は9号住居跡以前であると考えられる。しかし、本遺構については、遺物が殆ど出土しなかったため細かい時期決定はできなかった。

11号住居跡

第33図1の須恵器杯蓋、2・3の杯身は、Ⅳ期に属するものである。したがって、本遺構の時期は6世紀末～7世紀初頭と考えられる。

12号住居跡

第35図1～4の須恵器杯蓋・杯身は、Ⅳ期に属するものである。したがって、本遺構の時期は6世紀末～7世紀初頭と考えられる。

13号住居跡

第37図2の須恵器杯身はⅥ期、すなわち7世紀後半に属する遺物である。しかし、1の杯蓋および3の高杯はⅦ期、8世紀前半に属する。したがって、本遺構は7世紀後半から存在したが、最終的には8世紀前半に埋没したものと考えられる。

14号住居跡

第39図1・2の須恵器杯蓋ともにⅤ期に属するものである。すなわち、本遺構の時期は7世紀前半と考えられる。

15号住居跡

第41図1～3の須恵器杯蓋・杯身はいずれもⅣ期に属するものである。すなわち、本遺構の時期は6世紀末～7世紀初頭と考えられる。

16号住居跡

第44図1～16、第45図17～20までに図示した須恵器杯蓋・杯身はいずれもⅣ期に属するものである。したがって、本遺構の時期は6世紀末～7世紀初頭と考えられる。

17号住居跡

溝03に切られているため、これよりも古い、すなわち8世紀後半以前であることは間違いない。しかし出土遺物が殆どないこと、検出できた範囲が限られていることなどから、本遺構の時期については、残念ながら不明とせざるをえない。

18号住居跡

第50図に図示した遺物から、本遺構は8世紀後半～末に属するものと考えられる。

19号住居跡

第52図に図示した遺物から、本遺構は8世紀後半～末に属するものと考えられる。

20号住居跡

本遺構はその殆どの部分が調査区外にあり、また出土遺物も小片かつ少量であった。しかし出土した須恵器杯蓋・杯身はいずれも 8 世紀中頃～後半に属するものと考えられるため、ここでは一応、この時期の遺構であると考えておきたい。

21号住居跡

本遺構の出土遺物については、図示することができたのは土師器の甕 1 点のみである。この甕はⅢ期またはⅣ期に属するものと考えられるが、他の時期を決定できるような遺物もないため、ここでは本遺構の時期は古墳時代後期とのみ考えておきたい。

22号住居跡

第59図 1～3 に図示した須恵器杯身、高杯の形態から、本遺構は 7 世紀後半に属するものと考えられる。

23号住居跡

第61図に図示した遺物から、本遺構は 7 世紀後半に属するものと考えられる。

24号住居跡

本遺構の出土遺物については、あまりに小片のため図示することができなかった。また、時期を決定できるような出土遺物もなく、残念ながら時期は不明とせざるをえない。

25号住居跡

第65図に図示した遺物から、本遺構の時期は 6 世紀末～7 世紀初頭と考えられる。

26号住居跡

本遺構の出土遺物については、あまりに小片のため図示することができなかった。また、時期を決定できるような出土遺物もなく、残念ながら 24 号住居跡同様に時期は不明とせざるをえない。

27号住居跡

出土遺物があまりに小片のため図示することができなかったが、その出土状況から本遺構の時期は縄文時代晩期と考えられる。

28号住居跡

第68図 11、13 などに若干古い要素が見られるが、須恵器杯蓋・杯身はいずれもⅤ期に属するものであり、本遺構の時期もそのように考えてよいと思われる。

29号住居跡

本遺構は非常に残りが悪く、遺物はまったく出土しなかった。したがって時期については不明とせざるをえない。

30号住居跡

第68図 1、2 の須恵器杯蓋、高杯ともにⅤ期に属するものであり、本遺構の時期もそのように考えられる。

31号住居跡

第76図1～7に図示した須恵器杯身、杯蓋はいずれもⅣ期に属するものであり、本遺構の時期は6世紀末～7世紀初頭と考えられる。

32・33号住居跡

第68図1、2の須恵器杯蓋、杯身はⅣ期に属するものである。どちらの住居跡に伴うものかが不明だが、検出状況からは両者にはあまり大きな時期差があるとも思われないため、ここでは32・33号住居跡とも6世紀末～7世紀初頭に属すると考えておくこととしたい。

34号住居跡

図示することのできた出土遺物は、第80図1の須恵器杯蓋のみである。この杯蓋はつまみが扁平であるためⅦ期のものと思われる。したがって本遺構の時期は8世紀前半と考えられる。

35・36号住居跡

34号住居跡に切られているため、これより古いことは間違いないが、出土した第80図2の須恵器杯蓋は形態的に第80図1と同じであり、したがって本遺構の時期については、34号住居跡とほぼ同時期と考えておきたい。

37号住居跡

出土土器が少量かつ小片であり、また南側の部分を調査することができなかったため、時期を特定することができなかった。

(2) 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡の柱穴からは須恵器、土師器の小片が少量出土しただけである。いずれの遺物も図示できなかったが、それらの形態的な特色をみると、最も新しいものでも8世紀後半頃に属するものである。

ところで、掘立柱建物跡柱穴出土の遺物は、その建物の建築時、あるいは廃絶後に柱穴が埋没する過程において混入するものであり、掘立柱建物の存続期間を直接示す性格のものではない。しかし、建物の廃絶時期に最も近い時期を示すものとして参考にはできる。このように考えると、本遺跡群における掘立柱建物の存続時期の下限については、8世紀後半に近い時期であると考えられる。ただし、個々の建物の時期については残念ながら不明とせざるをえず、重複関係にある5号掘立柱建物と6号掘立柱建物との新旧関係もわからない。

(3) 廃棄土坑（SK）

本遺跡群ではあわせて15基（SK02は欠番）の廃棄土坑を調査した。これらのうち、SK15とSK16は、立地、時期、出土遺物の構成などの点から考えるとSK01～14とは性格が異なるものである可能性が高い。本来は区別するべきであったかもしれないが、他の土坑との差異を明らかにするために同じSKとしておいた。

SK01

第94図に図示した須恵器、土師器の形態と組み合わせから、本遺構の時期は8世紀後半と考えられる。

S K 02

欠番である。

S K 03

第97図1の杯蓋、2～5の杯身の形態から、本遺構の時期は8世紀第4四半期、すなわち8世紀後半と考えられる。

S K 04

第101図2～8に図示した須恵器は、いずれも8世紀前半～中頃に属するものである。1の杯蓋のみやや新しいものである可能性を含んでいるが、本遺構の時期については8世紀前半～中頃と考えておきたい。

S K 05

第104図1～3の須恵器杯身・杯蓋の形態から、本遺構の時期は7世紀後半と考えられる。

S K 06

第107図1～7の須恵器杯身・杯蓋の形態から、本遺構の時期は8世紀後半と考えられる。

S K 07

第110図、111図に図示した須恵器杯身・杯蓋の形態から、本遺構の時期は8世紀第4四半期、すなわち8世紀後半と考えられる。

S K 08

第117、118、119図に図示した須恵器杯身・杯蓋の形態は、8世紀第3四半期～第4四半期のものである。したがって、本遺構の時期は8世紀後半と考えてよいだろう。

S K 09

第125図5の須恵器杯身の形態から、本遺構の時期は8世紀末～9世紀初頭と考えられる。

S K 10

第128図、129図の須恵器杯身・杯蓋は8世紀後半のものであるが、本遺構に切られている19号住居跡の時期が8世紀後半～末であるため、これとほぼ同時期が考えられる。

S K 11

第136図に図示した須恵器、土師器の形態から、本遺構の時期は8世紀後半と考えられる。ただし、ほぼ同時期であるS K 07、S K 08、S K 10の出土遺物に比して、本遺構の出土遺物には新しい要素が認められるため、これらよりは新しいと考えておきたい。

S K 12

本遺構からは大量の土器が出土したが、それらは第137図に示したように遺構内の何箇所かに特に集中して出土したものである。さらに、それぞれの集中部の須恵器について観察すると、

7世紀後半～8世紀前半代までに属するものと、8世紀半ば～後半に属するものとに大別することができ、小破片の混入を除けば両者が同一の集中部において混在している例はない。また、両者の間にはレベル的に大きな差はなく、前者の上位に後者が堆積した例は認められなかった。これらのことから、本遺構は元来一つの遺構ではなく、この部分にあったいくつかの遺構を一緒に掘り上げてしまった可能性が高い。ただし、8世紀前半代と考えられる土器の出土量が少いことから、この時期には何らかの理由で土器の廃棄量が減少したか、あるいは他の土坑を使用したものと思われる。

S K 13

第159図1の杯蓋、2の杯身から、本遺構の時期は7世紀後半と考えられる。

S K 14

第161図に示した出土遺物は8世紀代に属するものであるが、細かい年代決定をするには至らなかった。したがって本遺構の時期も、8世紀代であると記すにとどめておきたい。

S K 15

第163図1、2の杯身・杯蓋はともにⅣ期のものであり、本遺構の時期は6世紀末～7世紀初頭と考えられる。

S K 16

図示できなかった須恵期甕は古墳時代のものと思われるが、それ以上の詳細は分らない。したがって本遺構の時期は不明とせざるをえない。

(4) 古墳

本古墳群は、いずれも石室、墳丘ともに残存状態が非常に悪く、当初の様相は殆ど残っていない。このため出土遺物も偶然性に左右されているものと思われ、直接時期決定につなげることはできない。そこで、まず石室構造がわかるものの前後関係を整理し、さらにこれに出土遺物を加味しながら本古墳群の性格について考えていきたい。

① 占地・分布

本古墳群は、牛頸川西岸の河岸段丘上に造られている。標高はおおよそ42m～45mを測り、西から東へきわめて緩やかに傾斜している。大きく分けて1号～12号墳および30号墳が西側、13号～29号墳が東側に分布しているが、調査できなかった道路の下にもいくつかの古墳があるものと考えられる。9号墳より北側では古墳は検出されず、29号墳と6号、7号掘立柱建物の間は道路になっており調査できなかったが、西側の状況からはこの部分に古墳があるとは考えにくい。すなわち、9号墳と29号墳を古墳群の北限と捉えて良いのではないだろうか。26号、27号、28号墳の東側は牛頸川によって浸食された段落ちになっている。また、14号、15号、17号墳の南側は牛頸川の氾濫原であり、10号墳の南側についても同様と思われる。したがって、26号、27号、28号墳を古墳群の東限、10号墳を南限と考えておきたい。さらに、30号墳の西側

では古墳の周溝である可能性のある溝が検出されたが、古墳が密集して分布していた状況は認められない。以上のことから、今回の調査で検出した古墳はこの30基ではほぼ完結していると思われる。

②古墳の規模

11号墳と30号墳以外については周溝から規模を復元することができた。その結果、殆どの古墳が外径で15m以下であることがわかった。それより大きいものでは、1号墳、10号墳、15号墳、23号墳、25号墳、26号墳、28号墳の7基が外径で16m～17mほどであり、16号墳、20号墳、24号墳の3基が外径で約20mを測る。いずれにせよ最大級のものでも外径20m程度であり、規模的にはさほど大きな古墳はない。

墳丘は殆どの場合完全に削平されており、本来の形状、高さなどはまったくわからない。しかし、石室掘り方があまり深くないこと、標高の低い河岸段丘上に立地することから、墳丘の大半は盛土であったと思われる。そうすると、古墳が原状で残っていた時期には小山が連続するような状況であったと考えられる。

③石室

削平のため石室形態がわからないものが半数にのぼる。形態が判明した15基については、5号墳以外が竪穴系横口式石室、その他は単室の横穴式石室であった。石室の平面プランから、これらを次の3種類に大別することができる。ただし、A類～C類としたものも、その中でさらに細分ができるようである。

A類 狭い長方形を呈するもの（5号・6号・7号・11号・30号墳）

B類：長方形ではあるがA類よりも幅広いプランを呈するもの（3号・10号墳）

C類：奥壁の幅が広い、いわゆる羽子板形のプランを呈するもの（2号・4号・12号・18号・19号・20号・21号・23号墳）

これら15基の石室の開口方向は、3号墳と30号墳が北西方向である他はすべて西から南西方向であり、東側に開口しているものはなかった。

④出土遺物

出土遺物で注目されるのは、牛頸黛跡群の操業以前と思われる須恵器が少なからず出土していることである。以下にそれらを表にしてまとめてみた（陶邑編年については、例えばⅠ型式4段階をⅠ-4と省略した）。

No	器種	陶 邑 編 年	No	器種	陶 邑 編 年
1号墳-1	杯蓋	Ⅰ-4～Ⅰ-5	1号墳-4	杯蓋	Ⅰ-4
-2	〃	Ⅰ-5	-6	杯身	Ⅰ-5
-3	〃	Ⅱ-1	-7	甕	Ⅱ-1

No.	器種	陶 邑 編 年	No.	器種	陶 邑 編 年
1号墳-8	甗	I-4	13号墳-1	杯蓋	I-4～I-5
3号墳-1	杯身	I-4～I-5	-2	杯身	I-5
-2	甗	I-4～I-5	-3	〃	I-5
4号墳-1	〃	I-4か？	-4	〃	I-5
10号墳-1	杯蓋	I-5	14号墳-1	杯身	I-5～II-1
-2	杯身	I-4	-2	〃	I-5～II-1
-3	高杯	I-4	16号墳-1	甗	I-5
-4	〃	I-4	18号墳-1	杯身	I-4
-5	甗	I-4	19号墳-2	高杯	I-4
12号墳-1	杯蓋	I-5～II-1	20号墳-2	杯身	I-4
-2	〃	I-5～II-1	23号墳-12	甗	II-1
-3	〃	I-5～II-1	25号墳-1	高杯	I-4～I-5
-4	杯身	I-5～II-1	29号墳-1	杯蓋	I-4か？
-5	〃	I-5～II-1	-2	〃	II-1か？
-6	甗	I-5～II-1			

これらの産地については、例えば3号墳出土の甗などはまず間違いなく陶邑から供給されたものであろうが、全体的には北部九州の在地産のものが多いと思われる。これらのような牛類窯跡群操業以前の須恵器については、今後胎土分析などによって産地を同定していきたい。

これらの他には15号墳出土の皮袋形提瓶と21号墳出土の把手付鉢が注目される。皮袋形提瓶は、胴部に粘土紐と竹管文とを施し比較的忠実に皮袋を模倣していると思われる。円環状の把手が付く。把手付鉢は、調整技法は土師器的であるが、硬質で灰色を呈し還元炎焼成されていることは間違いない。

⑤時期

先述したように、本古墳群においては出土遺物を直接時期決定に結び付けることが困難であるため、③で分類した石室の形態から各古墳の時期について簡単に考えてみたい。

まず基本的な前後関係としては、A類→B類→C類となるものと思われる。A類に含めた5号墳が5世紀後半まで上りうることと、C類とした石室構造は6世紀第2四半期より下らないことから、本古墳群の存続期間は5世紀後半～6世紀中頃と考えてよいのではないだろうか。占地については、A類とB類とした7基はすべて①で述べた西側にある。C類とした8基は西側に3基、東側に5基がある。数が少ないので断定できないが、本古墳群は、全体的に西から東へと造営が進んでいったのではないだろうか。

⑥意義と問題点

以上見てきたように、本古墳群は牛頸窯跡群の操業以前に造営されたものと考えられる。これまで、牛頸地区の本格的な開発は須恵器の生産開始に伴うと考えてきたが、そのような認識は改めるべきであろう。また、本古墳群を造営した人たちの集落がどこかという問題が生じるが、本古墳群から約1 km北にある春日市門入遺跡をその候補として挙げるができる。ただし、この問題についてはいずれ改めて再検討したい。

(5) 小石室

小石室はあわせて10基を調査した。古墳群との位置関係等から、おそらく両者の間にはさほど大きな時期差はないものと思われるが、いずれも遺物からはその時期を特定することができなかった。

(6) 焼土坑

本遺跡群で調査した13基の焼土坑は、切り合い関係の観察の結果、時期的には古墳より新しいことがわかった。焼土坑については、これまでもいろいろな論考の中で火葬施設である可能性、あるいは炭焼き窯である可能性などが言及されてきている。本遺跡群の焼土坑についてもそのような可能性が考えられるが、化学的な分析も行っておらず、結局は性格を特定するまでにはいたらなかった。

(7) 土坑

1号土坑

第280図の1、2の須恵器杯身・杯蓋の形態から、本遺構の時期は8世紀初頭と考えられる。

2号土坑

第282図の須恵器杯身は8世紀半ばのものであり、本遺構の時期もそのように考えられる。

3号土坑

第284図1、2の土師器高杯は、16号墳出土のものと同時期と思われる。16号墳の高杯は陶邑編年Ⅰ型式5段階の須恵器甕とほぼ同レベルで出土していることから、この高杯については5世紀末～6世紀初頭前後のものと考えておきたい。

4号土坑

土器は出土しなかったものの、検出状況、立地等から縄文時代に属するものと考えられる。

5号土坑

出土した縄文土器には後期のものと晩期のものがあり、量的には後期のものの方が多い。したがって、本遺構については縄文時代後期からあったが、最終的には縄文時代晩期に埋没したと考えられる。

6号土坑

本遺構についても、4号土坑と同じく、検出状況、立地等から縄文時代に属するものと考え

られる。

7号土坑

出土した縄文土器は後期に属するものであることから、本遺構は縄文時代後期と思われる。

8号・9号土坑

ともに縄文時代に属するものと思われるが、出土土器が小片のため細かい時期決定はできなかった。

10号土坑

第18図1の高杯は弥生時代前期の特徴を示すものであるため、本遺構は弥生時代前期のものと思われる。

11号・12号・12'号土坑

いずれも縄文時代に属するものと思われるが、出土土器が小片のため細かい時期決定はできなかった。

13号土坑

出土した縄文土器が後期に属するものであることから、本遺構の時期は縄文時代後期と思われる。

14号土坑

第286図に示した須恵器は、Ⅳ期～Ⅴ期のものである。したがって本遺構の時期は6世紀末～7世紀前半と考えられる。なお、2と4は出土状況等からセットである可能性がある。

15号・16号・17号土坑

いずれも縄文時代に属するものと思われるが、出土土器が小片のため細かい時期決定はできなかった。

(8) 溝

溝01

第287図に示した土器のうち、1・2・4は11世紀後半に属するものと思われるが、3の甕は奈良時代のものである。したがって本遺構の時期は11世紀後半であり、3の甕については流れ込んだものと考えられる。

溝02

第289図1～4の土器が8世紀後半のものであることから、本遺構の時期も8世紀後半であると考えられる。なお本遺構はSK14を切っているが、出土遺物を比較するかぎり、あまり大きな時期差はないものと思われる。

溝03

出土遺物がきわめて少なかったが、第289図5・6の須恵器と他の遺構との切り合い関係から、本遺構の時期は8世紀後半と考えられる。

溝04

出土遺物が第289図7の獣脚のみであり、他の遺構との切り合い関係もなかったため、本遺構の時期については不明とせざるをえない。

溝05

出土遺物は第291図の須恵器甕のみである。この甕自体は古墳時代に属する遺物と思われるが、細かい時期の決定はできなかった。

溝06

本遺構は溝の中ではとりわけて出土遺物が多かった。第293・294図の遺物を見ると、遺構の性格上多少の時期差は認められるものの、最も時期が下るものは9世紀初頭に属している。したがって、本遺構については最終的にはその時期に埋没したものと考えておきたい。

(9) 集石遺構

本遺構については先述したとおり、縄文時代のものである可能性もあるとのみ述べておきたい。

2. 集落の変遷について

最後に、時期が確実にわかった竪穴住居跡・SK・溝の分布状況から、塚原遺跡群の集落の部分の変遷についてのみ簡単にまとめておきたい。古墳群については先述のとおりである。また、縄文時代の遺構については前後に連続性が認められなかったため、ここでは触れなかった。

さて、調査の結果得られた本集落の存続期間は、6世紀中頃から9世紀初頭までである。これは牛頸窯跡群の操業期間とはほぼ一致している。ここでは便宜上6世紀中頃～後半をⅠ期、7世紀代をⅡ期、8世紀前半～中頃をⅢ期、8世紀後半～9世紀初頭をⅣ期としておくこととする。

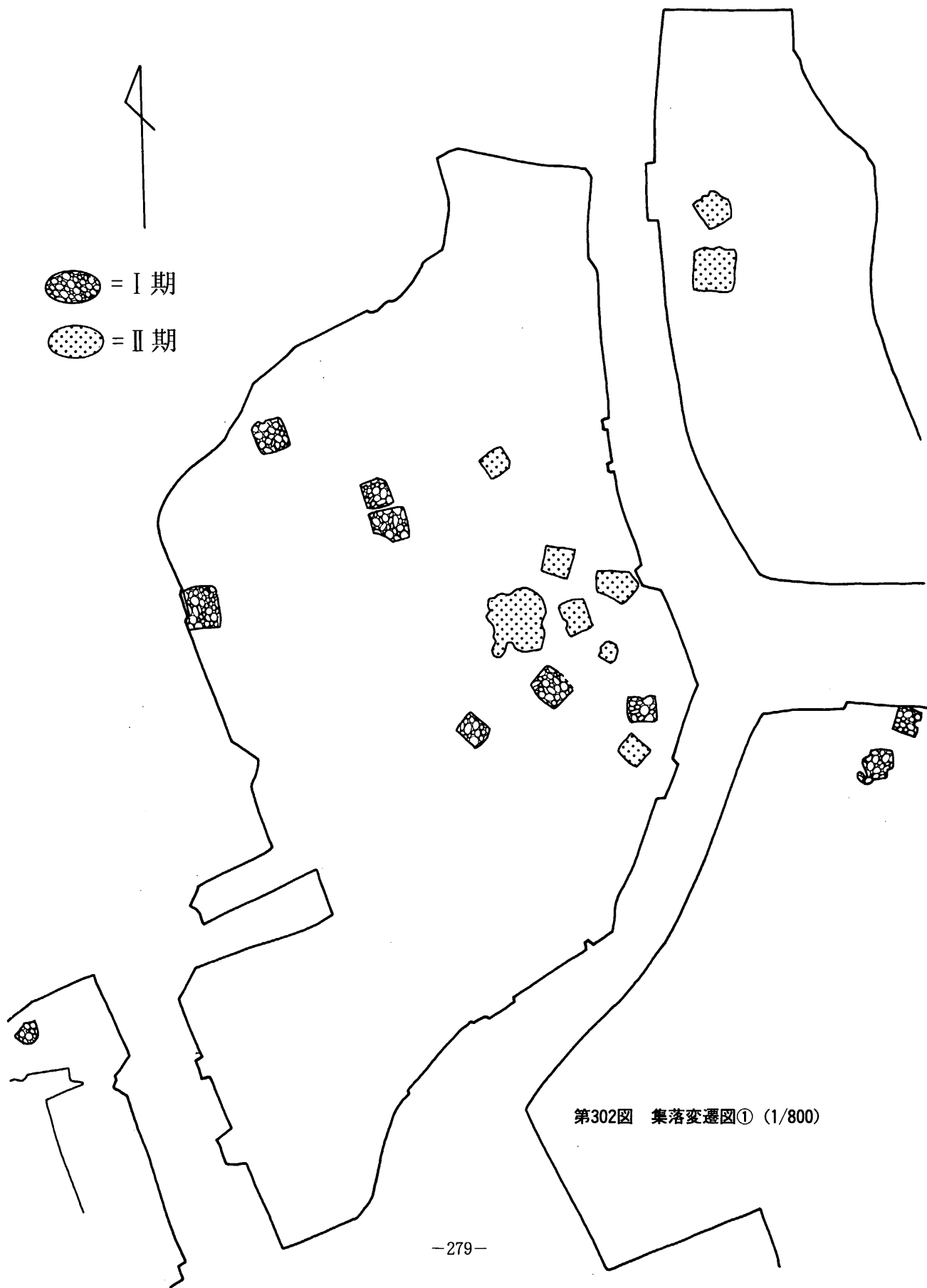
Ⅰ期は本集落が開始された時期である。集落は主に竪穴住居によって構成されており、その数は10軒にのぼる。Ⅱ期になると竪穴住居の他にSKが増加し、竪穴住居が6軒、SKが3基を数える。SK12が土器の廃棄場所として使われ始めたのもこの時期である。Ⅲ期の集落の内容は竪穴住居が4軒、SKが2基である。これらのうちSK12はⅡ期から継続的に使用されていたと思われるが、先述したように、Ⅲ期の遺物の出土量は少ない。竪穴住居の数が減少していることから、本集落はこの時期にやや衰えたと考えられるのではないだろうか。Ⅳ期になるとSKの数が9基と急増する。また、溝もこの時期に属すると思われる。竪穴住居については7号、18号、19号、20号がこの時期に該当するが、7号は祭祀行為など居住以外の目的に使用された可能性が高い。また、19号、20号はそれぞれ遺構の性格と時期について疑問が残る。したがって竪穴住居として確実なものは18号だけとなり、Ⅳ期は竪穴住居が作られなくなる時期としても捉えられるのではないだろうか。なお、SK12の使用もⅣ期までである。

以上、ごく簡単に集落の変遷について概観してみた。牛頸窯跡群の中での本集落の位置付け、あるいは他の集落との関係などについては今後さらに検討を加えていきたい。

本稿をまとめるにあたって、大谷女子大学中村浩氏、九州大学西健一郎氏、九州歴史資料館横田義章氏、助京都市埋蔵文化財研究所網伸也氏から有益な御助言を賜った。また、神宮徴古館農業館矢野憲一氏には貴重な資料を実見する機会を与えていただいた。さらに福岡市埋蔵文化財センター本田光子氏には赤色顔料の分析結果についての玉稿を賜った。厚く御礼を申し上げる。また、末尾ではあるが、現地作業および整理作業に御協力いただいた皆様に、心より御礼を申し上げたい。

参考文献

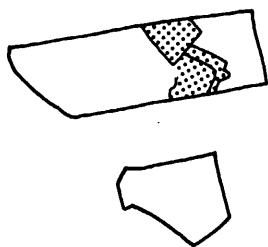
- 中村浩 『和泉陶邑窯の研究』 柏書房 1981
古墳文化研究会編『古墳文化の新視角』 雄山閣出版 1983
中村浩編 『須恵器集成図録 第1巻』 雄山閣出版 1995
小池史哲 「福岡県二丈町広田遺跡の縄文土器」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』 1982
『野添・大浦窯跡群』 福岡県教育委員会 1970
『立山山窯跡群』 八女古窯跡調査団 1972
『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告 第4集』 福岡県教育委員会 1977
『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告XⅡ』 福岡県教育委員会 1978
『二丈・浜玉道路関係埋蔵文化財調査報告書』 福岡県教育委員会 1980
『天観寺山窯跡群』 北九州市埋蔵文化財調査会
『赤井手遺跡』 春日市教育委員会 1980
『今光遺跡・地余遺跡』 東急不動産株式会社 1980
『松木遺跡Ⅰ』 那珂川町教育委員会 1984
『柿原古墳群Ⅱ』 福岡県教育委員会 1986
『春日地区遺跡群Ⅳ』 春日市教育委員会 1986
『太宰府天満宮Ⅱ』 太宰府市教育委員会 1990
『太宰府・佐野地区遺跡群Ⅱ』 太宰府市教育委員会 1991
『八尋遺跡群』 鞍手町教育委員会 1994
『古代の造形美 装飾須恵器展—秋期特別企画展図録』 愛知県陶磁資料館 1995
『牛頸石坂窯跡—C地点』 大野城市教育委員会 1985
『牛頸井手窯跡群』 大野城市教育委員会 1989
『牛頸後田窯跡群』 大野城市教育委員会 1991
『牛頸小田浦窯跡群』 大野城市教育委員会 1992
『牛頸月ノ浦窯跡群』 大野城市教育委員会 1993
『牛頸日ノ浦遺跡群』 大野城市教育委員会 1994





● = Ⅲ期

○ = Ⅳ期



第303図 集落変遷図② (1/800)

V. 大野城市塚原古墳群出土の赤色顔料について

岡崎市埋蔵文化財センター 本 田 光 子

大野城市塚原古墳群 5 号墳と 10 号墳出土の赤色物が何であるかを知るために、顕微鏡観察、蛍光 X 線分析を行った。5 号墳は周溝内より赤色物が入った甕が出土し、石室内面が赤色に塗布されていた。10 号墳は石室内床面から赤色物が出土している。

出土例に関する今までの知見に寄れば、墳墓出土の赤色物は鉱物質の顔料であり、酸化第 2 鉄：赤鉄鉱（Hematite）を主成分とするベンガラと、硫化水銀（赤）：辰砂（Cinnabar）を主成分とする朱の 2 種が用いられている。これ以外に古代の赤色顔料としては、四三酸化鉛を主成分とする鉛丹がある。これら 3 種類の赤色顔料を考えて分析を行った。試料の一覧・分析結果とそれにより推定される赤色顔料を表に示した。

試料

No. 1 は石材内面に塗布されていた赤色塗層の厚い部分からステンレス製メスで赤色部分を削り取ったものである。No. 2 は容器内に残っていた赤色物で土の中に濃い赤色物が粉末あるいは小塊で含まれている。No. 3 は調査時に床面より採取されたものであり、淡赤色の土である。

これらの赤色物を実体顕微鏡下で調整（混入土砂等夾雑物の除去）し、顕微鏡観察を行い、残りを X 線分析等に供した。No. 1 ～ 3 は赤色の微粉末とそれが凝集した小塊（径 2、3 ～ 5mm）が大半であるが、No. 2 の赤色物は非常に少なく、赤色物だけの試料を調整することが難しく土砂が混じった状態である。

顕微鏡観察

光学顕微鏡により透過光・落射光 40 ～ 400 倍で検鏡した。検鏡の目的は、赤色顔料の有無・状態・種類・粒度等を観察するものである。三者は特に微粒のものが混在していなければ、粒子の形状、色調等に認められる特徴の違いから、検鏡により経験的に見極めがつく。No. 4 ～ 6 に、No. 1 ～ 3 に色合、質感等から赤色顔料としてベンガラの特徴を持つ粒子を認めた。ベンガラにはパイプ状粒子は含まれていなかった。顕著な朱粒子は認められなかったが、きわめて微粒のものについてはどの赤色顔料であるか判断できなかった。

蛍光 X 線分析

赤色物の主成分元素の検出を目的として実施した。理学電機工業㈱製蛍光 X 線分析装置システム 3511 を用い、X 線管球；クロム対陰極、印加電圧；50kV、印加電流；50mA、分光結晶；フッ化リチウム、検出器；シンチレーション計数管で測定を行った。赤色顔料の主成分元素としては朱であれば水銀、ベンガラであれば鉄であるので、2 種の元素の有無のみ表中に記した。

No. 1 ～ 3 は赤色顔料の主成分元素として鉄が検出された。この他主として混入の土砂部分に

由来する元素は省略した。ただし、鉄は土砂部にも必ず含まれるので、赤色顔料由来のものと
の区別は蛍光X線強度から判断した。全試料とも鉛丹の主成分元素である鉛は検出されなかつ
た。

赤色物の分析結果

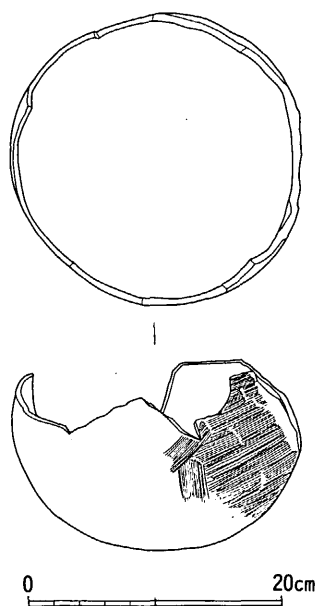
	資料採取位置	顕微鏡観察	蛍光X線分析	赤色顔料の種類
1	5号墳周溝出土甕内	ベンガラ	鉄	ベンガラ
2	5号墳石室石材	ベンガラ	鉄	ベンガラ
3	10号墳石室床面	ベンガラ	鉄	ベンガラ

結果と考察

検鏡結果と蛍光X線分析の結果から、塚原古墳群5、10号墳出土の赤色顔料はすべて、パイ
プ状粒子を含まないベンガラであることがわかった。5号墳と10号墳で使われているもの、あ
るいは5号墳の石室内面と周溝内甕内のものとがそれぞれ同じベンガラであるかどうかは、今
回の分析では不明である。しかし、パイプ状粒子を含まないという点では同種のベンガラと言
えよう。

近年、本例のように、古墳の周溝や盛土から赤色顔料が入った容器の出土例が増加している。
筑紫野市大牟田西遺跡、福岡市クエゾノ古墳、甘木市上ノ宿古墳等、分析を行ったものはすべ
てベンガラであった。これらにはパイプ状粒子を持つもの（大
牟田西）や磁鉄鉱や磁赤鉄を含むもの（クエゾノ）等、本例と
質的に異なるベンガラが使われていた例もある。出土ベンガラ
については本例を含めてさらに資料を蓄積し入手経路などの情
報を得ることにより、葬送儀礼そのものについての知見も深ま
るものと思われる。類例に期待したい。

X線分析は九州産業大学総合分析センターで行ったもので、
ご協力いただいた同センター助手古賀啓子博士に感謝致します。



第304図 5号墳周溝内出土
甕 (1/6)

遺 物 法 量 表

略号凡例

竪穴住居跡	住
廃棄土坑	S K
土坑	坑
古墳	墳
溝	溝
その他の遺物	その他

※（ ）は復元値

～ は現存高

NO	器 種	法量 (cm) ①口径 ③つまみ径 ⑤高台径 ⑦受部径 ⑨底径	②器高 ④つまみ高 ⑥高台高 ⑧最大径 ⑩脚端径	NO	器 種	法量 (cm) ①口径 ③つまみ径 ⑤高台径 ⑦受部径 ⑨底径	②器高 ④つまみ高 ⑥高台高 ⑧最大径 ⑩脚端径
2 住 - 1	杯 蓋	①(14.2)	②2.8~	5 住 - 23	平 瓶	①(7.2)	②15.9 ⑧19.7
2	口頸部	①3.6		24	甕	①(18.0)	②9.6~
3	"	①(10.3)		7 住 - 1	杯 身	①13.4 ⑥0.5	②3.7 ⑤9.0
3 住 - 1	浅 鉢	①(26.0)		2	碗	①(19.0) ⑥1.3	②8.2 ⑤(9.4)
5 住 - 1	杯 蓋	①(11.8)	②3.8~	3	甕	①16.6	②24.9~ ⑧26.6
2	"	①(12.3)	②3.4	8 住 - 1	杯 蓋	①3.8	②2.2
3	"	①(12.2)	②3.8	2	杯 身	①10.7	②3.8 ⑦12.5
4	"	①(13.1)	②3.4	11 住 - 1	杯 蓋	①(11.8)	②2.4~
5	"	①(13.5)	②4.1	2	杯 身	①(11.0)	②3.3~ ⑦(13.3)
6	杯 身	①(10.2)	②3.9 ⑦(12.3)	3	"	①(11.1)	②3.9 ⑦13.3
7	"	①(10.6)	②4.0 ⑦(12.4)	4	鉢	①(14.0)	②5.7
8	"	①10.8	②3.9 ⑦12.7	5	甕	①(10.6)	②4.7~
9	"	①(11.3)	②3.2~ ⑦(13.0)	12 住 - 1	杯 蓋	①(10.4)	②3.5~
10	"	①(12.2)	②4.3 ⑦(14.3)	2	杯 身	①(10.6)	②4.2 ⑦(12.5)
11	"	①12.3	②3.8 ⑦14.6	3	"	①(11.8)	②3.2 ⑦(13.8)
12	蓋	①8.9	②3.6	4	"	①(11.9)	②4.6 ⑦(14.0)
13	"	①(12.6)	②3.3	5	高 杯	①(14.2)	②3.4~
14	"	①(14.4) ④0.5	②4.3 ③3.2	6	鉢	①(11.6)	②5.4~
15	高 杯	①(12.4)	②4.0~ ⑦(14.9)	7	甕	②7.6~	
16	"	①(12.6)	②3.6~ ⑦(15.0)	13 住 - 1	杯 蓋	①(9.8) ④0.9	②2.1 ③2.1
17	"	①(12.8)	②3.8~ ⑦(15.2)	2	杯 身	①(13.8) ⑥1.1	②4.7 ⑤9.6
18	"	②8.5	⑩(9.6)	3	高 杯	①15.4	②7.3 ⑩9.7
19	鉢	②9.8~		14 住 - 1	杯 蓋	①(8.9)	②1.6 ⑧(10.8)
20	甕	②14.1~		2	"	①(9.0)	②3.2 ⑧(10.6)
21	壺	⑧10.8	②7.0~	3	甕	①(26.0)	②6.8~
22	口頸部	①(11.0)		15 住 - 1	杯 蓋	①(12.3)	②3.3~

NO	器 種	法量 (cm)	①口径 ③つまみ径 ⑤高台径 ⑦受部径 ⑨底径	②器高 ④つまみ高 ⑥高台高 ⑧最大径 ⑩脚端径	NO	器 種	法量 (cm)	①口径 ③つまみ径 ⑤高台径 ⑦受部径 ⑨底径	②器高 ④つまみ高 ⑥高台高 ⑧最大径 ⑩脚端径
15住 - 2	杯 身	①(12.4)	②2.3~	⑧(14.6)	16住 - 24	鉢	①(14.1)	②9.0~	
3	高 杯	①(14.2)	②3.5~	⑧(16.3)	25	壺	②8.0~	⑧(14.4)	
4	手捏土器	①2.6	②1.7		26	短頸壺	①10.2	②18.4	⑧23.1
16住 - 1	杯 蓋	①(12.0)	②3.5		27	甌	①(18.0)		
2	"	①(12.2)	②3.2		28	"	①(18.0)		
3	"	①(12.1)	②3.5		29	"	②7.7~		
4	"	①(12.7)	②4.4		30	"	②3.8~		
5	"	①13.1	②4.1		31	甕	①(18.8)	②6.5~	
6	"	①(13.4)	②4.1		32	手捏土器	①2.2	②1.5	
7	杯 身	①10.2	②3.4	⑦12.6	33	"	①2.8	②1.7	
8	"	①10.4	②3.9	⑦12.6	18住 - 1	杯 身	①10.6 ⑥0.3	②3.3	⑤6.1
9	"	①10.5	②4.1	⑦12.7	2	"	①(11.0) ⑥0.5	②3.1	⑤(8.2)
10	"	①10.2	②4.1	⑦12.8	3	"	①13.9 ⑥0.4	②3.8	⑤10.0
11	"	①(10.5)	②3.9	⑦(13.2)	4	"	①(15.4) ⑥0.6	②5.2	⑤(9.7)
12	"	①(10.8)	②3.5	⑦(13.0)	5	"	①(17.3) ⑥0.6	②5.8	⑤10.0
13	"	①(10.8)	②3.7	⑦(13.2)	6	"	①13.3	②3.5	
14	"	①(11.4)	②3.3	⑦(13.7)	7	"	①(13.6)	②3.9	
15	"	①(11.6)	②3.6~	⑦(13.8)	8	鉢	①(15.6)	②7.0	⑨10.9
16	"	①(11.4)	②4.1	⑦(13.9)	9	杯	①15.5	②3.8	⑨8.0
17	"	①(11.6)	②3.5	⑦(13.8)	19住 - 1	杯 蓋	①14.4 ④0.8	②2.3	③2.1
18	"	①12.0	②4.1	⑦14.2	2	"	①(15.0)	②2.5~	
19	"	①11.9	②3.6	⑦14.2	3	"	①(15.6) ④0.8	②2.3	③1.9
20	"	①(12.2)	②3.5	⑦(14.3)	4	"	①17.3 ④0.7	②3.2	③2.2
21	蓋	①(8.5)	②2.8		5	杯 身	①13.4 ⑥0.4	②3.7	⑤8.5
22	高 杯	①(14.3)	②7.3~		6	"	①(13.3) ⑥0.4	②3.5	⑤8.7
23	"	①13.1	②4.3~	⑦15.3	7	"	①(14.0) ⑥0.4	②3.7	⑤(9.6)

NO	器 種	法量 (cm)	①口径 ③つまみ径 ⑤高台径 ⑦受部径 ⑨底径	②器高 ④つまみ高 ⑥高台高 ⑧最大径 ⑩脚端径	NO	器 種	法量 (cm)	①口径 ③つまみ径 ⑤高台径 ⑦受部径 ⑨底径	②器高 ④つまみ高 ⑥高台高 ⑧最大径 ⑩脚端径
19住 - 8	杯 身	①(14.5) ⑥0.4	②2.8	⑤(8.9)	28住 - 11	高 杯	①(12.8) ②8.9~		
9	"	①(14.4)	②3.4~		12	短頸壺	①(5.9) ②5.2 ⑧9.1		
10	皿	①(19.6)	②1.7	⑨(16.0)	13	提 瓶	①(8.2) ②18.2 ⑧15.7		
11	蓋	①(9.6)	②1.7~		14	円筒状土製品	①(30.0) ②38.2		
21住 - 1	甕	①(11.2)	②12.7		15	把手付甕	①(31.4) ②35.0 ⑧(43.7)		
22住 - 1	杯 身	①13.1 ⑥1.1	②4.6	⑤8.5	30住 - 1	杯 蓋	①8.3 ②2.7 ⑧10.6		
2	杯 身	①14.6 ⑥1.1	②4.7	⑤9.8	2	高 杯	①9.3 ②8.5 ⑩6.8		
3	高 杯	①(14.4)	②7.8	⑩10.0	3	手握土器	②3.7~		
4	脚	②5.9~			4	"	①3.8 ②2.7		
23住 - 1	杯 蓋	①12.6	②2.9	⑧15.1	5	"	①(3.5) ②2.7		
2	杯 身	①14.2 ⑥1.1	②4.9	⑤8.9	31住 - 1	杯 蓋	①12.1 ②3.4		
3	"	①14.2	②4.0		2	"	①11.8 ②3.9		
4	"	①15.3	②4.4		3	"	①(12.4) ②4.0		
5	甕	①(13.4)	②12.7		4	"	①13.0 ②4.1		
25住 - 1	杯 蓋	①12.3	②4.2		5	杯 身	①10.6 ②3.8 ⑦12.6		
2	杯 身	①(10.6)	②2.1~	⑦(12.6)	6	"	①10.4 ②4.1 ⑦12.4		
28住 - 1	杯 蓋	①7.8	②3.1	⑧10.0	7	"	①10.8 ②4.3 ⑦12.8		
2	"	①8.5	②2.6	⑧10.4	8	甕	①28.3 ②15.5~ ⑧25.3		
3	"	①8.9	②2.4	⑧10.5	32・33住 - 1	杯 蓋	①12.8 ②4.1		
4	"	①9.9	②2.6	⑧11.6	2	杯 身	①(11.6) ②3.2 ⑦(13.6)		
5	"	①9.5	②2.7	⑧11.7	3	碗	①11.8 ②6.1		
6	杯 身	①9.5	②3.5		34,35,36住 - 1	杯 蓋	①16.3 ④0.7	②1.9	③3.1
7	"	①9.7	②3.2		2	"	①15.0 ④0.6	②2.5	③3.2
8	"	①(10.4)	②3.1		SK01 - 1	"	①(11.7) ④0.7	②2.6	③1.8
9	皿	①(22.4)	②4.2		2	杯 身	①15.3 ⑥0.6	②5.4	⑤8.8
10	蓋	①13.1 ④1.6	②4.4 ⑧15.5	③2.1	3	"	①(15.9) ⑥0.5	②5.3	⑤8.4

NO	器 種	法量 (cm)	①口径 ③つまみ径 ⑤高台径 ⑦受部径 ⑨底径	②器高 ④つまみ高 ⑥高台高 ⑧最大径 ⑩脚端径	NO	器 種	法量 (cm)	①口径 ③つまみ径 ⑤高台径 ⑦受部径 ⑨底径	②器高 ④つまみ高 ⑥高台高 ⑧最大径 ⑩脚端径
SK01-4	杯 身	①13.2 ②3.7			SK05-1	杯 身	①12.6 ②3.9 ③2.9 ④1.1 ⑧14.8		
5	"	①13.7 ②3.3			2	"	①16.4 ②2.8 ③2.7 ④0.6 ⑧16.4		
6	皿	①(14.0) ②2.2			3	杯 身	①(15.0) ②4.2 ⑤9.3 ⑥0.8		
7	"	①(16.0) ②1.6			4	托	①(6.8) ②1.3		
8	杯	①13.2 ②3.6			5	甕	①(20.0) ②6.5~		
9	碗	①(20.1) ②6.8 ⑤(9.4) ⑥0.8			SK06-1	杯 蓋	①(13.4) ②1.1 ③1.7 ④0.6		
10	短頸壺	①(6.8) ②3.7~			2	"	①14.9 ②2.2 ③1.5 ④0.6		
SK03-1	杯 蓋	①13.9 ②2.9 ③1.8 ④0.9			3	杯 身	①12.9 ②3.5 ⑤6.5 ⑥0.4		
2	杯 身	①(11.4) ②3.5 ⑤(6.5) ⑥0.3			4	"	①13.4 ②3.3 ⑤8.6 ⑥0.3		
3	"	①12.6 ②4.0 ⑤8.1 ⑥0.4			5	"	①(14.6) ②4.0 ⑤(8.9) ⑥3.5		
4	"	①15.0 ②5.3 ⑤8.4 ⑥0.4			6	"	①(18.3) ②5.8 ⑤(11.4) ⑥0.6		
5	"	①(13.5) ②3.6			7	"	①13.4 ②3.3		
6	鉢	①16.9 ②7.5			8	皿	①14.4 ②2.0		
7	"	①26.0 ②12.7 ⑤12.4 ⑥1.1			9	"	①(17.2) ②2.5		
8	甕	①19.4 ②31.5~			10	鉢	①22.9 ②18.0~		
9	蓋	①21.6 ②4.0 ③2.4 ④1.1			11	杯	①(11.2) ②3.5		
10	鉢	①(26.7) ②11.7 ⑤11.3 ⑥0.9			12	手握土器	①2.8 ②1.7		
11	甕	①(28.6) ②13.3~			13	甕	①(30.0) ②10.7 ⑧27.8		
SK04-1	杯 蓋	①(13.8) ②2.3			SK07-1	杯 蓋	①13.0 ②1.3 ③1.6 ④0.7		
2	"	①18.4 ②2.4			2	"	①13.4 ②3.0 ③1.9 ④0.6		
3	杯 身	①(10.4) ②4.8 ⑤(7.9) ⑥0.8			3	"	①14.2 ②3.2 ③1.7 ④0.8		
4	"	①(10.4) ②4.5 ⑤(7.4) ⑥0.7			4	"	①14.7 ②2.7 ③2.0 ④0.8		
5	"	①(12.7) ②5.5 ⑤(10.5) ⑥1.1			5	"	①15.3 ②1.4 ③1.7 ④0.7		
6	"	①(14.0) ②4.8			6	"	①(15.8) ②2.0 ③2.4 ④0.5		
7	"	①(14.0) ②3.7			7	"	①18.3 ②2.5 ③1.7 ④0.7		
8	"	①(16.0) ②3.8~			8	杯 身	①(10.0) ②3.2 ⑤6.2 ⑥0.4		

NO	器 種	法量 (cm)	①口径 ③つまみ径 ⑤高台径 ⑦受部径 ⑨底径	②器高 ④つまみ高 ⑥高台高 ⑧最大径 ⑩脚端径	NO	器 種	法量 (cm)	①口径 ③つまみ径 ⑤高台径 ⑦受部径 ⑨底径	②器高 ④つまみ高 ⑥高台高 ⑧最大径 ⑩脚端径
SK07-9	杯 身	①12.6 ⑥0.4	②4.2	⑤8.1	SK07-35	蓋	①(15.9) ②3.3		
10	"	①(12.4) ⑥0.4	②3.9	⑤8.3	36	鉢	①(6.6) ②6.5 ⑨4.8		
11	"	①12.7 ⑥0.4	②3.8	⑤7.3	37	"	①(24.1) ②17.8 ⑨(13.0)		
12	"	①(13.0) ⑥0.5	②3.9	⑤8.0	38	双耳壺	②17.0~ ⑧(27.2)		
13	"	①13.0 ⑥0.4	②4.2	⑤7.3	39	杯	①(15.4) ②3.5		
14	"	①13.3 ⑥0.5	②4.0	⑤7.7	40	皿	①18.4 ②2.6		
15	"	①14.2 ⑥0.4	②4.2	⑤8.8	41	高台付皿	①(22.0) ②3.4 ⑤16.4 ⑥0.6		
16	"	①13.8 ⑥0.5	②4.0	⑤8.8	42	甕	①(29.9) ②24.0~		
17	"	①16.4 ⑥0.6	②5.1	⑤9.0	SK08-1	杯 蓋	①12.1 ②2.9 ③1.7 ④1.1		
18	"	①17.0 ⑥0.4	②5.5	⑤9.8	2	"	①12.3 ②1.6 ③1.7 ④0.8		
19	"	①(19.4) ⑥0.7	②7.4	⑤(11.8)	3	"	①14.2 ②2.7 ③1.5 ④1.0		
20	"	①12.9	②3.5		4	"	①14.3 ②3.4 ③2.3 ④0.8		
21	"	①(13.6) ②(3.2)			5	"	①15.1 ②2.1 ③1.7 ④1.0		
22	"	①(14.4) ②4.3			6	"	①15.2 ②3.1 ③1.8 ④1.2		
23	皿	①(4.6) ②0.9			7	"	①21.3 ②2.7 ③2.4 ④1.3		
24	"	①8.8 ②2.5			8	杯 身	①(10.8) ②3.8 ⑤5.8 ⑥0.4		
25	"	①9.5 ②2.4			9	"	①11.2 ②3.9 ⑤6.4 ⑥0.5		
26	"	①(12.9) ②1.9			10	"	①11.2 ②3.6 ⑤7.1 ⑥0.4		
27	"	①(13.5) ②2.5			11	"	①(11.6) ②4.2 ⑤(6.4) ⑥0.5		
28	"	①14.2 ②2.0			12	"	①11.9 ②3.8 ⑤6.5 ⑥0.3		
29	"	①17.5 ②1.6			13	"	①11.7 ②3.8 ⑤6.0 ⑥0.34		
30	"	①17.7 ②2.3			14	"	①11.9 ②3.8 ⑤7.4 ⑥0.5		
31	"	①(17.7) ②2.0			15	"	①11.8 ②4.2 ⑤6.8 ⑥0.5		
32	"	①18.4 ②2.8			16	"	①12.3 ②4.5 ⑤8.1 ⑥0.6		
33	"	①20.7 ②2.8			17	"	①12.6 ②3.8 ⑤7.9 ⑥0.4		
34	蓋	①7.6 ④1.0	②2.6	③1.0	18	"	①(13.3) ②3.6 ⑤8.2 ⑥0.3		

NO	器 種	法量 (cm)	①口径 ③つまみ径 ⑤高台径 ⑦受部径 ⑨底径	②器高 ④つまみ高 ⑥高台高 ⑧最大径 ⑩脚端径	NO	器 種	法量 (cm)	①口径 ③つまみ径 ⑤高台径 ⑦受部径 ⑨底径	②器高 ④つまみ高 ⑥高台高 ⑧最大径 ⑩脚端径
SK08-19	杯 身	①13.3 ⑥0.4	②4.0	⑤8.6	SK08-45	皿	①14.1 ②2.4		
20	"	①12.8 ⑥0.3	②3.9	⑤8.3	46	"	①(14.5) ②2.2		
21	"	①13.5 ⑥0.5	②3.9	⑤8.9	47	"	①14.9 ②1.8 ⑨10.3		
22	"	①13.3 ⑥0.4	②4.1	⑤8.2	48	"	①15.3 ②2.1 ⑨12.0		
23	"	①13.2 ⑥0.3	②3.8	⑤8.7	49	"	①15.5 ②1.6 ⑨11.9		
24	"	①13.9 ⑥0.5	②4.3	⑤8.4	50	"	①17.8 ②2.4 ⑨14.1		
25	"	①15.4 ⑥0.4	②5.4	⑤9.7	51	"	①17.6 ②3.1		
26	"	①(15.4) ⑥0.5	②5.2	⑤(9.2)	52	"	①18.0 ②2.5		
27	"	①16.0 ⑥0.3	②5.0	⑤9.4	53	高台付皿	①22.7 ⑥0.6	②2.9	⑤15.5
28	"	①(16.3) ⑥0.4	②5.2	⑤(9.0)	54	蓋	①7.6 ④1.3	②1.8	③1.8
29	"	①16.6 ⑥0.6	②5.4	⑤10.0	55	"	①7.7 ④0.9	②2.1	③1.0
30	"	①(16.5) ⑥0.3	②5.2	⑤(9.5)	56	"	①(8.0) ④0.7	②1.7	③1.2
31	"	①(19.3) ⑥0.5	②8.3	⑤(11.6)	57	"	①(9.0) ④0.7	②1.5	③1.3
32	"	①(20.2) ⑥0.7	②7.7	⑤(12.9)	58	"	②3.1 ~ ③3.3	④2.0	
33	"	①12.3	②2.9		59	鉢	①(8.0) ②6.4 ⑨5.4		
34	"	①12.8	②3.0		60	瓶 子	②6.1~ ⑧7.6		
35	"	①13.1	②3.3		61	高台付 短頸壺	①10.6 ②15.1~ ⑧19.3		
36	"	①(13.0)	②3.4		62	杯	①13.9 ②3.01		
37	"	①13.0	②4.4		63	"	①16.5 ②3.1~		
38	"	①(13.6)	②3.6		64	高台付皿	①25.6 ⑥0.7	②3.7	⑤18.0
39	"	①13.2	②3.4		65	蓋	①(20.7) ④1.5	②2.9	③2.3
40	"	①(14.3)	②4.3		66	甕	①(29.2) ②15.0~ ⑧(26.0)		
41	"	①14.7	②4.0		67	三足器	①18.3 ②13.6		
42	皿	①9.1	②1.3	⑨6.2	68	杯	①15.2 ②4.2		
43	"	①(13.6)	②1.9	⑨10.1	69	"	①(15.2) ②3.2		
44	"	①14.2	②2.0	⑨11.1	SK09-1	杯 蓋	①(16.7) ④1.0	②2.8	③1.9

NO	器 種	法量 (cm)	①口径 ③つまみ径 ⑤高台径 ⑦受部径 ⑨底径	②器高 ④つまみ高 ⑥高台高 ⑧最大径 ⑩脚端径	NO	器 種	法量 (cm)	①口径 ③つまみ径 ⑤高台径 ⑦受部径 ⑨底径	②器高 ④つまみ高 ⑥高台高 ⑧最大径 ⑩脚端径
SK09-2	杯 蓋	①(10.1)	②2.4		SK10-19	杯 身	①15.0 ⑥0.6	②4.3	⑤10.5
3	杯 身	①(11.5) ⑥0.3	②4.2	⑤6.5	20	"	①(15.0) ⑥0.8	②6.2	⑤8.0
4	"	①12.8 ⑥0.4	②4.6	⑤6.4	21	"	①17.5 ⑥0.5	②5.4	⑤10.6
5	"	①(18.6) ⑥0.7	②6.2	⑤(10.0)	22	"	①18.4 ⑥0.4	②5.7	⑤11.2
6	"	①12.0	②3.1		23	"	①13.1	②3.4	
7	"	①(12.0)	②3.5		24	"	①13.6	②2.9	
8	皿	①16.4	②2.2		25	皿	①9.9	②2.3	
9	甕	①(29.0)	②6.4		26	"	①(14.1)	②2.7	
SK10-1	杯 蓋	①10.6 ④0.6	②2.8	③1.7	27	"	①(18.4)	②2.7	
2	"	①14.2 ④0.8	②3.0	③1.9	28	"	①(18.8)	②2.7	
3	"	①15.1 ④0.8	②2.4	③2.0	29	"	①19.0	②2.6	
4	"	①15.3 ④0.8	②2.4	③2.0	30	"	①18.9	②2.7	
5	"	①15.6 ④0.9	②1.7	③2.3	31	蓋	①(12.6)	②2.7~	
6	"	①16.5 ④0.9	②4.1	③2.1	32	"	①24.3	②1.2~	
7	"	①18.7 ④0.7	②1.9	③2.3	33	高 杯	①(19.5)	②10.2	⑩11.3
8	"	①19.7 ④0.8	②2.3	③2.0	34	鉄 鉢	①(19.2)	②8.3	⑧19.9
9	杯 身	①10.0 ④0.4	②3.9	⑤5.6	35	鉢	①(23.6)	②17.5	⑨(15.4)
10	"	①11.6 ④0.4	②3.2	⑤6.8	36	"	①(24.0)	②18.0	⑨(16.0)
11	"	①11.8 ⑥0.4	②3.2	⑤6.9	37	瓶 子	②5.8~	⑧7.3	⑨4.3
12	"	①11.9 ⑥0.4	②3.9	⑤7.0	38	双耳壺	②15.8~	⑩17.7	
13	"	①12.2 ⑥0.6	②3.5	⑤7.4	39	短頸壺	①15.4	②5.9~	
14	"	①12.4 ⑥0.4	②3.5	⑤8.1	40	把手付壺	①(21.6)	②22.6~	⑧(36.6)
15	"	①12.9 ⑥0.6	②3.8	⑤7.4	41	"	②10.5~	⑧(43.0)	
16	"	①13.9 ⑥0.4	②3.2	⑤8.8	42	鉢	①(32.2)	②8.9~	
17	"	①14.6 ⑥0.5	②3.8	⑤9.1	SK11-1	杯 蓋	①(15.0)	②3.0	
18	"	①15.0 ⑥0.6	②4.3	⑤10.5	2	杯 身	①13.0	②4.0	

NO	器 種	法量 (cm)	①口径 ③つまみ径 ⑤高台径 ⑦受部径 ⑨底径	②器高 ④つまみ高 ⑥高台高 ⑧最大径 ⑩脚端径	NO	器 種	法量 (cm)	①口径 ③つまみ径 ⑤高台径 ⑦受部径 ⑨底径	②器高 ④つまみ高 ⑥高台高 ⑧最大径 ⑩脚端径
SK11-3	皿	①14.2	②2.0		SK12-24	杯 蓋	①13.8 ④0.9	②1.9	③2.2
4	杯	①12.6	②4.4		25	"	①(14.6)	②2.0~	
5	"	①(13.6)	②3.8		26	"	①14.8 ④0.8	②2.8	③2.4
SK12-1	杯 蓋	①(12.4)	②1.2~	⑧(14.4)	27	"	①14.9 ④0.8	②3.3	③2.5
2	"	①12.6	②2.5	⑧14.8	28	"	①15.6 ④1.0	②2.6	③2.2
3	"	①(13.0)	②2.3~	⑧(15.6)	29	"	①(16.2) ④0.7	②1.4	③2.2
4	"	①12.6	②2.4	⑧15.2	30	"	①16.1 ④0.8	②3.9	③2.3
5	"	①(13.1)	②1.7~	⑧(15.4)	31	"	①16.0 ④0.9	②1.7	③2.4
6	"	①(11.9) ④0.8	②2.3 ⑧(14.4)	③2.7	32	"	①16.4 ④0.8	②3.7	③2.0
7	"	①12.4 ④1.2	②3.0 ⑧14.8	③2.4	33	"	①17.9 ④0.9	②3.5	③2.5
8	"	①13.0 ④1.0	②3.6 ⑧15.2	③2.4	34	"	①18.1 ④1.0	②4.4	③2.6
9	"	①12.7 ④0.9	②3.0 ⑧15.0	③2.5	35	"	①19.5 ④1.0	②1.8	③2.4
10	"	①13.2 ④0.9	②3.7 ⑧(15.3)	③3.1	36	"	①20.0 ④0.7	②1.4	③2.4
11	"	①13.5 ④0.9	②2.9 ⑧15.5	③2.7	37	杯 身	①8.8 ⑥0.4	②4.3	⑤5.4
12	"	①(13.6) ④0.5	②3.2 ⑧(16.0)	③2.7	38	"	①(9.0) ⑥0.6	②4.0	⑤6.0
13	"	①13.5 ④0.7	②2.7 ⑧16.0	③2.5	39	"	①9.6 ⑥0.5	②4.1	⑤5.7
14	"	①(15.0) ④1.4	②3.2 ⑧17.4	③2.8	40	"	①11.0 ⑥0.6	②3.4	⑤7.2
15	"	①11.0	②1.7		41	"	①11.2 ⑥0.5	②3.3	⑤7.1
16	"	①11.0 ④0.7	②1.6	③1.7	42	"	①11.9 ⑥0.4	②3.6	⑤7.4
17	"	①11.3 ④0.8	②2.9	③1.8	43	"	①(11.5) ⑥0.5	②3.7	⑤6.9
18	"	①12.2	②1.7~		44	"	①11.9 ⑥0.4	②3.2	⑤7.4
19	"	①12.5 ④0.9	②3.0	③2.3	45	"	①12.5 ⑥0.8	②4.1	⑤8.5
20	"	①12.9 ④0.9	②2.1	③1.6	46	"	①12.1 ⑥0.5	②3.5	⑤7.3
21	"	①13.3 ④1.0	②1.7	③2.0	47	"	①12.3 ⑥0.6	②4.0	⑤7.5
22	"	①13.2 ④0.8	②2.8	③1.7	48	"	①12.4 ⑥0.7	②3.7	⑤7.3
23	"	①13.6 ④0.8	②2.5	③2.6	49	"	①12.8 ⑥0.4	②4.0	⑤8.1

NO	器 種	法量 (cm)	①口径 ③つまみ径 ⑤高台径 ⑦受部径 ⑨底径	②器高 ④つまみ高 ⑥高台高 ⑧最大径 ⑩脚端径	NO	器 種	法量 (cm)	①口径 ③つまみ径 ⑤高台径 ⑦受部径 ⑨底径	②器高 ④つまみ高 ⑥高台高 ⑧最大径 ⑩脚端径
SK12-50	杯 身	①13.0 ⑥0.4	②4.5	⑤7.7	SK12-76	杯 身	①15.1 ⑥0.5	②5.0	⑤9.6
51	"	①12.8 ⑥0.4	②3.5	⑤8.4	77	"	①15.4 ⑥1.0	②4.4	⑤10.5
52	"	①(13.3) ⑥1.0	②4.7	⑤8.0	78	"	①15.2 ⑥0.4	②5.4	⑤8.3
53	"	①13.6 ⑥0.5	②4.1	⑤8.6	79	"	①16.0 ⑥0.6	②4.8	⑤10.0
54	"	①13.8 ⑥0.7	②3.9	⑤9.0	80	"	①17.6 ⑥0.7	②5.4	⑤11.1
55	"	①14.1 ⑥1.3	②4.6	⑤9.4	81	"	①17.7 ⑥0.5	②5.5	⑤10.8
56	"	①14.2 ⑥0.6	②4.5	⑤8.8	82	"	①17.0 ⑥0.8	②5.6	⑤10.9
57	"	①14.2 ⑥0.4	②3.9	⑤8.8	83	"	①21.6 ⑥0.5	②6.9	⑤13.0
58	"	①14.6 ⑥0.7	②4.6	⑤9.8	84	"	①7.9	②2.5	
59	"	①(14.4) ⑥1.1	②5.0	⑤9.4	85	"	①8.9	②2.4	⑨5.7
60	"	①(14.5) ⑥1.0	②4.8	⑤(10.0)	86	"	①9.7	②3.6	⑨5.8
61	"	①(14.4) ⑥1.3	②4.8	⑤9.9	87	"	①(11.0)	②3.8	⑨(6.0)
62	"	①13.9 ⑥0.4	②3.8	⑤9.2	88	"	①(12.5)	②4.0	
63	"	①(14.0) ⑥0.4	②3.7	⑤(8.4)	89	"	①12.5	②3.5	⑨9.2
64	"	①(14.2) ⑥1.2	②4.9	⑤9.7	90	"	①12.9	②4.2	⑨8.0
65	"	①14.3 ⑥9.0	②4.9	⑤9.9	91	"	①(13.0)	②4.2	
66	"	①(14.4) ⑥1.0	②4.6	⑤9.8	92	"	①13.0	②3.3	⑨8.3
67	"	①14.6 ⑥0.7	②4.6	⑤9.3	93	"	①(13.4)	②3.9	
68	"	①14.1 ⑥0.8	②4.6	⑤9.9	94	"	①13.3	②4.4	
69	"	①14.6 ⑥1.1	②4.7	⑤10.0	95	"	①13.7	②3.9	⑨10.5
70	"	①(14.2) ⑥0.5	②4.1	⑤9.0	96	"	①13.6	②3.6	⑨9.0
71	"	①14.5 ⑥0.6	②3.6	⑤9.1	97	"	①13.5	②4.1	
72	"	①(14.4) ⑥1.2	②4.8	⑤10.3	98	"	①14.2	②4.6	⑨9.0
73	"	①(14.6) ⑥1.2	②5.3	⑤(10.1)	99	"	①13.9	②3.1	⑨7.5
74	"	①14.7 ⑥0.7	②4.8	⑤9.6	100	"	①14.1	②3.8	⑨9.5
75	"	①14.8 ⑥0.7	②4.5	⑤10.4	101	"	①14.2	②3.8	⑨8.6

NO	器 種	法量 (cm)	①口径 ③つまみ径 ⑤高台径 ⑦受部径 ⑨底径	②器高 ④つまみ高 ⑥高台高 ⑧最大径 ⑩脚端径	NO	器 種	法量 (cm)	①口径 ③つまみ径 ⑤高台径 ⑦受部径 ⑨底径	②器高 ④つまみ高 ⑥高台高 ⑧最大径 ⑩脚端径
SK12-102	杯 身	①14.3	②3.5	⑨9.6	SK12-128	高 杯	①(19.0)	②8.0	⑩10.1
103	皿	①(9.4)	②1.8	⑨(7.0)	129	"	①19.1	②8.1	⑩10.1
104	"	①12.2	②2.7		130	"	①19.6	②7.1	⑩10.1
105	"	①13.6	②2.4		131	"	①20.6	②7.7	⑩10.8
106	"	①14.2	②1.8	⑨11.6	132	"	①26.8	②14.8	⑩13.4
107	"	①(14.6)	②2.1	⑨(11.6)	133	鉄 鉢	②6.7~		
108	"	①15.3	②2.0	⑨12.6	134	"	①18.3	②11.3	⑧20.5
109	"	①14.8	②2.4		135	すり鉢	①17.2	②10.1	⑨12.7
110	"	①15.5	②2.3	⑨10.5	136	鉢	①(9.0)	②6.1	⑨6.5
111	"	①(18.2)	②2.6		137	"	①(12.2) ⑨(8.6)	②6.5	⑧(12.8)
112	"	①(18.5)	②2.5	⑨14.5	138	"	①14.5	②7.1	⑨9.2
113	"	①19.1	②2.7		139	"	①16.0	②10.0	⑨11.8
114	"	①19.5	②2.8		140	"	①19.5	②8.0	⑨11.7
115	"	①19.2	②2.5	⑨14.8	141	"	①(19.6)	②14.0	⑧(22.6)
116	"	①19.5	②3.1	⑨15.7	142	"	①22.9	②17.4	⑨16.2
117	"	①20.1	②3.0	⑨16.1	143	"	①23.2	②19.0	⑨15.2
118	"	①21.0	②1.6	⑨17.0	144	"	②12.0~	⑧(37.8)	
119	"	①23.6	②5.2	⑨18.0	145	瓶 子	②4.3~	⑧6.9	⑨5.2
120	"	①(27.0)	②5.5	⑨(19.3)	146	"	①3.5 ⑨5.8	②6.3	⑧10.0
121	高台付皿	①(23.6) ⑥0.5	②4.1	⑤(15.5)	147	"	②6.7~	⑧9.4	⑨6.0
122	"	①(23.8) ⑥0.5	②4.7	⑤(17.9)	148	"	①4.0 ⑧10.5	②11.6	⑤7.4
123	"	①(24.0) ⑥0.8	②5.0	⑤(18.8)	149	"	②16.2~	⑧17.7	⑨11.4
124	蓋	①(26.3) ④1.6	②3.3	③2.6	150	"	①6.0 ⑨10.3	②19.6	⑧17.1
125	高 杯	①15.6	②8.1	⑩10.8	151	"	①6.1 ⑨10.1	②19.7	⑧17.7
126	"	①15.8	②8.7	⑩10.7	152	短頸壺	①9.7 ⑧10.1	②4.4	⑤8.7
127	"	①17.0	②7.6	⑩10.1	153	"	①(10.4)	②7.6~	⑧12.4

NO	器 種	法量 (cm)	①口径 ③つまみ径 ⑤高台径 ⑦受部径 ⑨底径	②器高 ④つまみ高 ⑥高台高 ⑧最大径 ⑩脚端径	NO	器 種	法量 (cm)	①口径 ③つまみ径 ⑤高台径 ⑦受部径 ⑨底径	②器高 ④つまみ高 ⑥高台高 ⑧最大径 ⑩脚端径
S K 12-154	短頸壺	①10.1 ⑨8.3	②9.9	⑧14.5	S K 12-180	短頸壺	①(3.85)	②4.0~	⑧(7.6)
155	"	①(14.1) ⑨(8.0)	②8.8	⑧16.6	181	甕	①18.4	②15.7	
156	"	①(10.1) ⑧21.5	②12.0	⑤(10.4)	182	"	①(19.4)	②8.7~	
157	"	①(10.8) ⑧22.2	②17.3	⑤11.7	183	"	①(13.0)	②4.6~	
158	長頸壺	①(11.8) ⑨8.7	②19.8	⑧18.1	184	"	①(29.8)	②4.9~	
159	"	①12.0 ⑧12.1	②22.8	⑤9.5	185	"	①27.2	②17.4~	
160	"	①(13.2) ⑧19.8	②24.5	⑤10.4	186	把手付甕	①(16.8)	②11.5	⑧(23.4)
161	"	①17.5 ⑧21.9	②23.1	⑤(12.0)	187	羽 釜	①19.8	②6.9~	⑧(25.6)
162	"	①(15.4) ⑧26.0	②26.0	⑤(13.6)	188	手握土器	①2.9	②2.0	
163	双耳壺	①(7.7) ⑨12.3	②23.5	⑧19.0	189	ミニチュア 土 器	①3.8	②2.6	⑧5.1
164	"	①12.3	②21.8~	⑧24.8	190	獣 脚	②13.5		
165	甕	①(15.2)	②13.1~	⑧(21.8)	191	"	②13.7		
166	杯	①(15.0) ⑥0.7	②4.6	⑤(11.6)	192	皿	①17.7	②2.5	⑨14.0
167	"	①13.5	②3.2	⑨7.4	S K 13- 1	杯 蓋	①12.0	②3.1	⑧14.5
168	"	①(15.7)	②3.2	⑨7.8	2	杯 身	①13.7 ⑥0.8	②4.4	⑤9.1
169	"	①(14.0)	②3.4		3	鉢	①12.9	②8.2	⑨8.3
170	皿	①17.6	②2.7	⑨13.3	4	"	①(13.4)	②8.9	⑨8.0
171	"	①18.6	②2.3	⑨15.0	5	甕	①(21.0)	②17.7~	⑧(23.7)
172	高台付皿	①(28.6)	②3.6	⑤(20.6)	S K 14- 1	杯 身	①12.6 ⑥0.5	②4.2	⑤8.7
173	"	①(29.3)	②4.7	⑤(23.9)	2	"	①10.7	②2.7	⑨6.6
174	蓋	①26.6 ④1.5	②3.1	③3.1	3	"	①12.9	②3.8	⑨8.1
175	高 杯	①23.0	②14.4	⑩13.7	4	蓋	①8.9 ④1.0	②2.6	③1.5
176	鉢	①15.8	②10.3	⑨11.0	5	皿	①(17.0)	②1.9	⑨(13.8)
177	"	①(23.2)	②14.0	⑨11.3	6	杯	①(9.4)	②3.5	⑨4.4
178	"	①(29.0)	②9.5	⑤(10.8)	S K 15- 1	杯 蓋	①11.5	②3.8	
179	"	①33.0	②9.2~		2	杯 身	①9.4	②3.3	⑦11.5

NO	器 種	法量 (cm) ①口径 ③つまみ径 ⑤高台径 ⑦受部径 ⑨底径 ②器高 ④つまみ高 ⑥高台高 ⑧最大径 ⑩脚端径	NO	器 種	法量 (cm) ①口径 ③つまみ径 ⑤高台径 ⑦受部径 ⑨底径 ②器高 ④つまみ高 ⑥高台高 ⑧最大径 ⑩脚端径
SK15-3	甕	①(24.4) ②43.6 ⑧40.8	5 墳 - 1	杯 蓋	②2.9~
4	"	①(39.0) ②60.0~ ⑧(57.7)	2	杯 身	①(11.4) ②3.9~ ⑦(13.8)
1 墳 - 1	杯 蓋	①13.0 ②4.8	3	"	①(11.4) ②4.1 ⑦(14.0)
2	"	①13.2 ②4.8	4	椀	①(11.4) ②4.6~
3	"	①13.7 ②4.6	5	"	①12.5 ②5.6
4	"	①(13.5) ②4.7	6	"	①(12.6) ②6.5
5	"	①(14.2) ②4.9~	7	"	①13.2 ②6.2
6	杯 身	①(10.0) ②4.1~ ⑦(12.2)	8	壺	①(10.7) ②10.0 ⑧12.3
7	"	①(11.7) ②5.5 ⑦(14.0)	9	甕	①(15.5) ②4.2~
8	甕	①13.5 ②14.5~ ⑧(19.0)	10	"	①(17.4) ②4.2~
9	椀	①(10.1) ②5.5~	11	"	②21.3~ ⑧24.2
10	"	①11.6 ②4.7	7 墳 - 1	杯 蓋	①10.8 ②2.4
11	"	①(11.8) ②4.9~	2	"	①10.9 ②3.2 ③1.6 ④1.2
12	"	①(11.7) ②6.1~	3	"	①(11.6) ②3.4 ③1.0 ④0.8
13	壺	①9.1 ②14.3 ⑧13.4	4	"	①(11.9) ②1.7~
3 墳 - 1	杯 身	①11.5 ②4.9 ⑦14.0	5	"	①(12.4) ②2.3 ③2.3 ④0.8
2	甕	①10.9 ②11.4 ⑧11.0	6	杯 身	①(9.0) ②3.6 ⑨8.0
3	椀	①12.2 ②5.3	7	"	①(13.3) ②3.5 ⑨8.1
4	"	①12.3 ②5.9	8	皿	①(18.1) ②2.7 ⑨11.5
5	"	①13.8 ②6.3	9	甕	①(21.6) ②8.7~
6	"	①13.4 ②6.0	10	"	①(24.6) ②5.4~
7	壺	①10.7 ②9.6 ⑧11.0	11	"	①17.0 ②26.8~ ⑧(26.7)
8	甕	①(15.7) ②4.4~	12	"	①(19.4) ②32.0 ⑧30.1
4 墳 - 1	底 部	②4.2~	13	椀	①(11.0) ②4.8
2	壺	①10.3 ②11.9 ⑧13.7	14	"	①(11.2) ②5.1
3	甕?	①(20.5) ②4.6~	15	"	①(12.1) ②5.1

NO	器 種	法量 (cm)	①口径 ③つまみ径 ⑤高台径 ⑦受部径 ⑨底径	②器高 ④つまみ高 ⑥高台高 ⑧最大径 ⑩脚端径	NO	器 種	法量 (cm)	①口径 ③つまみ径 ⑤高台径 ⑦受部径 ⑨底径	②器高 ④つまみ高 ⑥高台高 ⑧最大径 ⑩脚端径
7 墳 -16	杯	①(12.1)	②4.4		12 墳 -10	碗	①(11.4)	②5.0	
17	"	①(15.8)	②4.1		11	"	①11.5	②5.4	
18	甕	①(16.6)	②7.9~		12	"	①12.4	②5.5	
8 墳 -1	杯 蓋	①10.5	②4.5		13	"	①(12.2)	②5.2	
2	高 杯	②5.9~	⑩9.2		14	"	①(13.2)	②4.2~	
9 墳 -1	杯 蓋	①13.6	②3.7		15	壺	①11.1	②14.9	⑧13.2
10 墳 -1	"	①13.1	②5.0		13 墳 -1	杯 蓋	①11.7	②4.0	
2	杯 身	①11.1	②4.5	⑦13.3	2	杯 身	①10.4	②4.3	⑦12.3
3	高 杯	②7.2~	⑩9.9		3	"	①(13.0)	②4.8	⑦(13.0)
4	"	②7.8~	⑩7.5		4	"	①(10.5)	②4.5	⑦(12.6)
5	觥	①11.8	②11.5	⑧10.9	14 墳 -1	"	①11.0	②4.3	⑦12.9
6	壺	①(8.6)	②5.6		2	"	①10.9	②4.2	⑦13.0
7	碗	①(10.7)	②5.7~		3	碗	①10.6	②5.7	
8	"	①11.4	②5.3		4	"	①12.5	②5.3	
9	"	①(11.6)	②6.1~		15 墳 -1	杯 身	①11.1	②4.5	⑦13.5
10	"	①12.0	②5.3		2	提 瓶	①6.0	②12.4	⑧9.9
11	壺	②7.1~	⑧14.7		3	革袋形 土 器	②11.9~		
12 墳 -1	杯 蓋	①12.0	②4.4		4	短頸壺	①6.6	②6.8	⑧11.4
2	"	①12.4	②3.9		5	甕	①23.1	②10.4~	
3	"	①12.4	②4.8		6	碗	①11.5	②6.3	
4	杯 身	①10.4	②4.5	⑦12.7	16 墳 -1	觥	①(11.9)	②11.5	⑧10.6
5	"	①(10.7)	②4.6	⑦(13.1)	2	甕	①(24.0)	②28.5	⑧(40.4)
6	觥	①12.8	②13.3	⑧9.4	3	碗	①(11.5)	②5.6	
7	提 瓶	①(7.9)	②23.2	⑧19.5	4	"	①11.8	②5.0	
8	甕	①(26.6)	②6.7~		5	"	①12.6	②5.0	
9	杯	①15.6	②4.3		6	高 杯	①(13.8)	②10.5	⑩(10.1)

NO	器 種	①口径 ③つまみ径 ⑤高台径 ⑦受部径 ⑨底径			NO	器 種	②器高 ④つまみ高 ⑥高台高 ⑧最大径 ⑩脚端径		
		法量 (cm)					法量 (cm)		
16墳 - 7	高 杯	①13.7	②9.4	⑩(10.6)	21墳 - 5	壺	①9.8	②9.3	⑧12.0
8	"	①14.2	②10.5	⑩10.3	22墳 - 1	碗	①10.3	②5.2	
9	壺	①12.2	②9.2	⑧12.5	2	"	①11.3	②5.0	
17墳 - 1	提 瓶	①(11.9)	②11.6~		23墳 - 1	杯 蓋	①12.2	②4.3	
2	平 瓶	②9.7~ ⑧11.8	⑤7.5	⑥0.6	2	"	①12.4	②4.3	
3	短頸壺	①(8.3)	②11.7	⑧15.5	3	"	①12.8	②4.4	
18墳 - 1	杯 身	①(11.1)	②5.3	⑦(13.4)	4	"	①12.8	②4.0	
2	碗	①13.7	②15.5		5	"	①13.5	②4.9	
19墳 - 1	杯 蓋	①(12.6)	②5.1		6	"	①(13.5)	②4.0~	
2	高 杯	①(15.0)	②4.6~		7	杯 身	①(10.5)	②4.1~	⑦(13.1)
3	"	②8.2~	⑩12.0		8	"	①10.7	②4.0	⑦13.1
4	甕	①20.6	②45.2	⑧40.4	9	"	①(11.1)	②3.5~	⑦(13.0)
5	碗	①11.7	②5.4		10	"	①(11.3)	②4.4	⑦13.9
6	"	①(12.3)	②5.5		11	高 杯	①11.6	②9.8	⑩8.8
7	"	①(13.3)	②6.0		12	觥	①(12.1)	②11.9	⑧9.6
8	壺	①11.4	②14.7	⑧13.5	13	碗	①11.4	②6.0	
9	甕	①(18.0)	②30.5	⑧22.1	14	"	①(12.3)	②6.0	
20墳 - 1	杯 蓋	①(13.0)	②4.7		15	"	①12.0	②5.2	
2	杯 身	①11.0	②4.8	⑦13.6	16	甕	①(18.7)	②16.1~	⑧(27.4)
3	碗	①10.3	②5.4		17	手握土器	①3.0	②1.6	
4	甕	①10.1	②8.2	⑧10.2	24墳 - 1	杯 蓋	①(14.2)	②4.7	
5	"	①18.2	②30.7	⑧30.5	2	杯 身	①(11.1)	②4.8	⑦(13.0)
21墳 - 1	把手付鉢	①(19.0)	②14.6	⑧29.4	3	高 杯	①(11.6)	②4.0	
2	碗	①(8.2)	②3.8		4	短頸壺	①6.6	②6.6~	⑧12.0
3	"	①9.9	②5.4		5	碗	①12.3	②5.5	
4	壺	①(6.4)	②8.5	⑧8.6	6	"	①12.1	②6.1	

NO	器 種	法量 (cm)	①口径 ③つまみ径 ⑤高台径 ⑦受部径 ⑨底径	②器高 ④つまみ高 ⑥高台高 ⑧最大径 ⑩脚端径	NO	器 種	法量 (cm)	①口径 ③つまみ径 ⑤高台径 ⑦受部径 ⑨底径	②器高 ④つまみ高 ⑥高台高 ⑧最大径 ⑩脚端径
25墳 - 1	高 杯	①9.9 ⑩8.6	②8.4	⑦12.0	5 坑 - 4	浅 鉢	①(21.6) ②8.3 ⑩6.8		
2	颯	②7.0~	⑧9.5		5	鉢	①(27.6) ②9.1		
26墳 - 1	杯 身	①(11.2) ②4.0	⑦13.2		6	底 部	②2.0~ ⑨7.2		
2	壺	①(10.4) ②16.8	⑧(12.9)		7	"	②1.8~ ⑨8.9		
27墳 - 1	鉢	②4.1~			8	深 鉢	①(39.0) ②16.7~		
28墳 - 1	高 杯	①(13.8) ②10.0	⑩10.6		9	"	①(28.8) ②6.6~		
2	甕	①17.2 ②21.5~			10	"	①(37.4) ②9.8~		
29墳 - 1	杯 蓋	①(13.2) ②4.1			11	"	①(30.2) ②23.0~		
2	"	①14.8 ②4.6			12	"	①(27.3) ②21.4~		
3	杯 身	①13.4 ②5.5	⑦15.1		7 坑 - 1	"	②4.6~		
4	颯	②6.1~ ⑧9.4			2	"	②5.8~		
5	碗	①(10.9) ②5.0			10 坑 - 1	高 杯	②15.8~		
6	"	①(11.2) ②5.0			2	甕	②7.7~ ⑨(7.0)		
7	"	①11.7 ②5.0			13 坑 - 1	深 鉢	①(23.9) ②23.0~		
8	"	①(12.2) ②4.4			14 坑 - 1	杯 蓋	①10.1 ②2.6 ⑧12.3		
9	壺	①12.0 ②8.9 ⑧13.0			2	"	①8.9 ②4.3 ③1.3 ⑤1.3 ⑧11.0		
1 坑 - 1	杯 蓋	①(15.9) ②3.3 ③2.4 ④0.6			3	杯 身	①10.8 ②3.4 ⑦13.0		
2	杯 身	①14.6 ②6.3 ⑤9.6 ⑥0.6			4	"	①11.3 ②4.3		
3	皿	①18.5 ②3.8			溝01 - 1	杯	①15.4 ②3.7		
4	高台付皿	①19.9 ②3.4 ⑤11.9 ⑥0.6			2	碗	①15.7 ②5.5 ⑤7.0 ⑥0.8		
2 坑 - 1	杯 身	①13.2 ②3.6 ⑤8.5 ⑥0.6			3	甕	①(18.6) ②17.6 ⑧16.3		
3 坑 - 1	高 杯	①14.2 ②10.9 ⑩9.1			4	碗	①(15.6) ②5.9 ⑤(7.0) ⑥1.0		
	"	①14.7 ②10.2 ⑩9.4			溝02-03-04 - 1	杯 身	①(15.8) ②5.9 ⑤(10.1) ⑥0.4		
5 坑 - 1	鉢	②5.1~			2	"	①(12.6) ②3.5 ⑨7.8		
2	"	②8.7~			3	皿	①(14.2) ②1.9 ⑨(11.0)		
3	浅 鉢	②5.7~			4	杯	①(11.5) ②5.6 ⑨6.0		

NO	器 種	法量 (cm)	①口径 ③つまみ径 ⑤高台径 ⑦受部径 ⑨底径	②器高 ④つまみ高 ⑥高台高 ⑧最大径 ⑩脚端径	NO	器 種	法量 (cm)	①口径 ③つまみ径 ⑤高台径 ⑦受部径 ⑨底径	②器高 ④つまみ高 ⑥高台高 ⑧最大径 ⑩脚端径
溝02-03-04-5	蓋	①(8.0)	②2.0		その他①-4	杯 蓋	①8.5	②3.0	⑧10.7
6	杯 身	①(11.8)	②3.3	⑨(6.6)	5	杯 身	①9.8	②3.8	
7	獸 脚	②4.8~			6	瓶 子	②7.0~	⑨7.2	
溝05 -1	甕	①(53.2)	②108.1	⑧(86.2)	7	杯 身	①13.0 ⑥0.5	②4.0	⑤7.8
溝06 -1	杯 身	②3.2~	⑤8.7	⑥0.3	8	瓶 子	②16.1~ ⑧(13.4)	⑤(8.7)	⑥1.0
2	"	①(13.7) ⑥0.4	②4.0	⑤(9.0)	9	"	①(8.1) ⑨9.6	②21.0	⑧15.6
3	"	①14.8 ⑥0.3	②5.1	⑤9.5	10	杯 蓋	①8.0 ⑧10.3	②3.6	③1.3
4	"	①(15.1) ⑥0.9	②6.5	⑤8.1	11	杯 身	①(9.5)	②3.9	
5	"	①(17.2) ⑥0.7	②7.1	⑤8.0	12	短頸壺	①(5.5)	②4.5	⑧(8.7)
6	"	①(14.0)	②4.0	⑨8.0	13	杯	①17.4	②4.2~	⑧(8.7)
7	壺	②7.8~	⑧12.6						
8	杯	①(12.6)	②3.9	⑨7.6					
9	"	①(12.6)	②4.1	⑨6.8					
10	"	①(12.4)	②2.8	⑨7.0					
11	"	①(13.6)	②3.8	⑨8.7					
12	"	①(14.9)	②3.8	⑨8.6					
13	"	②4.2~	⑤(8.4)	⑥1.1					
14	"	①(14.9) ⑥1.0	②6.3	⑤(8.5)					
15	"	①(15.6) ⑥0.8	②6.5	⑤8.3					
16	皿	①(13.4)	②2.2						
17	鉢	①23.1	②11.2						
18	甕	①28.0	②10.0~						
19	碗	①(15.3)	②5.2						
その他①-1	杯 身	①11.2 ⑥0.6	②4.3	⑤6.8					
2	"	①18.8 ⑥0.9	②8.8	⑤10.4					
3	高 杯	②15.0~	⑩13.8						

大野城市文化財調査報告書

第 44 集
本文編

平成 7 年 12 月 25 日

発 行 大野城市教育委員会
福岡県大野城市曙町二丁目 2-1

印 刷 陽 明 印 刷 企 業 組 合
福岡県春日市春日公園一丁目 3